モグラだってドラゴン名乗っていいじゃない！

すこっぷ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺、瀬尾一輝（せお　かずき）は改造人間である。
特に倒すべき敵もいないし、これといってやる気もない平和を望む一市民。
彼は今日も周囲の理不尽に抗い、頭にモグラさんを乗せながら自由を手に入れるために戦い続けるのだ！

目次

一巻　旧校舎のディアボロス
1話 1
2話 7
3話 14
4話 23
5話 35
6話 46
7話 55
二巻　戦闘校舎のフェニックス
8話 67
9話 79
三巻　月光校庭のエクスカリバー
10話 93
11話 103
12話 116
13話 134
14話 148
15話 162
16話 176
17話 191
18話 206
間話1 222
四巻　停止教室のヴァンパイア
19話 232

20話 245
21話 259
22話 273
間話2 288
五巻　冥界合宿のヘルキャット
23話 299
24話 315
25話 330
26話 343
27話 359
28話 376
29話 393
30話 410
間話3 427
間話4 443
六巻　体育館裏のホーリー
31話 463
32話 479
33話 492
34話 505
35話 522
36話 539
七巻　放課後のラグナロク
37話 556
38話 571
39話 585

40話 606
41話 620
42話 637
43話 653
44話 673
間話5 694
間話6 710
間話7 722

九巻　修学旅行はパンデモニウム

45話 748
46話 766
47話 781
48話 795

49話 810
50話 822
51話 836
52話 847
53話 858
間話8 871
間話9 887

十巻　学園祭のライオンハート

54話 905
55話 915
56話 926
57話 938
58話 953

59話 966
60話 983
間話10 996
間話11 1008
間話12 1028
間話13 1043
十一巻　進級試験とウロボロス
61話 1056
62話 1076
63話 1091
64話 1081
65話 1125
66話 1143

67話 1156
十二巻　補習授業のヒーローズ
68話 1174
69話 1197
70話 1216
71話 1232
72話 1248
73話 1267

1話

僕、瀬尾　一輝（せお　かずき）。１０歳です。
突然ですが、事件です。
何時ものように孤児院で寝たはずなのに、気が付いたら診察台みたいなものに手脚を固定されていた。
首だけ動かして周りを見ると隣にも何人か同い年ぐらいの子が同じ状態でスタンバイしている。
なにこれ、集団誘拐？
ウチ貧乏だから身代金とか払えないよ？
他の子たちも状況が分からないみたいで、泣き出したりしているし。俺だって泣きたいんですが。
そんな事を考えていると、如何にも博士っぽいおじさんが白衣を着た大人を数人引き連れてやって来た。
他の子がどういう事なのか尋ねても無視され、全員になにかシールみたいな物を黙々と身体中にペタペタ貼っていく。

なにこれ、俺達改造されちゃうの!?
や、やめろショッ○ー!
なんて叫ぼうとしてたら、隣の子が先に泣き叫び始めた。
大人達はそんな事を気にもとめず、手元の機械を弄った後にスイッチみたいな物を押す。
その子の身体が魚みたいにビクンビクンと跳ね出して、光ったかと思ったらすぐに光が消えてそのまま動かなくなってしまった。
ちょ、なんだあれ。
うぉ、おっさん達こっち来んな。
「さぁ、次は君の番だ。これに成功すれば、君は素晴らしい力を手に入れられるだろう」
いやんなもんいらないし。
なに言ってんだこの人。
「なに心配するな、痛みなどはない」
え、マジで?
「成功しようが失敗して死のうが、一瞬だからわからんよ」
ふぁっきん。
「多分だがね。さぁゆくぞ、死にたくなければ自分の中の力を目覚めさせろ、貴様の持つ

《神器》（セイクリッド・ギア）をっ!!」

せいく……なんだって？

てか多分なのかよ、ならせめて麻酔を……アンギャ～!!

で、此処どこ？なんで周りがガレキだらけ？

ショッ○ーの研究所はどこにいったの？

辺りを見渡しても先程までのいかにもな実験室は見当たらず、ガレキの山に自分一人がポツン。

だれかいい加減説明してよ。

しまいにゃ泣くぞ。

取り敢えず歩き出そうかと思って立ち上る。

その瞬間、視界が歪み頭に不快感が走る。

うぁ、なんか気持ち悪い。

あの機械のせいかな、痛かったし。

おのれおっさん、今度会ったら残りの髪を引き抜いてやる。

フラフラとした足取りで移動をする。
ヤバい、意識がはっきりしない。
脚は重いし、靴も履いてないから歩きにくい。
それなりに歩き続けていると、目の前に人が降ってきた。
なんだこの銀髪イケメン。
びっくりしたから脚がもつれてこけてしまった。おでこ超痛い。
痛みで悶えてたらイケメンが助け起こしてくれた。
多分いい人だよね、この人。助かった。
男に抱えられても嬉しくないけども。
でもいいや、ちょっともう限界だから後よろしく～。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
……くそ、面倒な事してくれるぜコカビエルの奴め。
ようやっとサーゼクスと話し合い、和平についての段取りが出来始めてたってのに、こんなタイミングで問題起こすなよ。
【《神器》を持つ人間の子供に何処まで肉体的強化が行えるか。それに対しての《神器》への影響を調査。また、悪魔に対しても同様の肉体強化が可能かの実験】
最近あいつが連れてる変な連中とコソコソしてたのは聞いてたが、こんな事しやがる

とは。
最近はヴァーリも怪しい行動が増えてきてやがるし……俺の周りはアホばっかりか。
取り敢えずバラキエルやヴァーリ達に命じて施設の制圧、んでもってコカビエルのバカと被験者の確保だ。
……ガキ共が生きてる可能性は低いだろうな。
くそ、胸糞悪い。

アザゼルに命じられて現場までやってきたが、凄惨なものだな。
あちらこちらで瓦礫が崩れたり火の手が上がっている。
奴ら、足取り隠す為にこちらが施設内の奥深くまで侵入してから施設を爆破してきた。
そこらじゅう人間と悪魔の死体だらけだ。
ギリギリで回収できた被験者リストはあるが、照合に時間が掛かるだろうな。
取り敢えずひと通り目を通してみたが、実験は失敗だったようだ。
成功例ゼロと表記されていた。

コカビエルと戦闘（遊べる）かと思って来たのだが、空振りだったか。
まぁいい、とにかく行動だ。
この場は他の奴に任せ、望み薄ではあるが周辺の探索を開始する。
暫く探索すると、人影を見つける。
フラフラと今にも倒れそうな足取りで進んでいる、黒髪の子供。
あれはおそらく人間だろう。
保護するために目の前に降りると、俺を確認した後にそのまま前のめりに倒れる。
抱え起こしたが、既に気を失っている様だった。
額をぶつけたのか、皮膚が切れて血が流れているが目立った外傷はその程度だった。
……あの規模の爆発で吹き飛ばされたのに、この程度の怪我で済むのか？
そう考えている間にも、先程出来たばかりの筈の額の傷まで見て分かる程のスピードで塞がっていく。
なるほど、間違いない。
この少年は被験者で、居ないはずの成功例だ。

2話

「また知らない部屋だよ、いい加減誰か説明してくれよ」
目を覚ますとベッドの上。
なんかこの状況に慣れてきた自分が嫌だ。
「あ、目が覚めましたか？」
声に反応して振り返ると、そこには美人のお姉さん。ｗｉｔｈ羽根。しかも真っ黒。
機会を弄って何処かに連絡しているらしい。
白衣の天使ならぬ白衣の堕天使。
なぜかそこはかとなくエロスを感じる。
「む、起きたのか」
アホな事を考えていると、逞しい身体と立派な髭を蓄えた男性が現れた。
なんか大人の男って感じの人だな。
お姉さんはこの人と少し会話した後、頭を下げてそのまま退室してしまった。残念。
「思ったより元気そうだな、少年。私の名前はバラキエル。君の名前を教えて貰えるかな？」

外人さんか、どうりで体格がいいと思った。
「はぁ、どうも。俺は瀬尾　一輝です」
「よし、ではカズキ君。君は今の状況を何処まで把握している？」
「状況？さっぱり全く」
「そうか……付いてきてくれるかい？歩きながら話そう」
そう促され、バラキエルさんに連れられて付いて行く。
俺の歩幅に合わせてくれているから歩きにくそうなのに、そんな事顔に出さずにいてくれる。
いい人なんだな、この人。
歩きながら話した内容には、色々と驚かされた。
ここが俺のいた世界じゃなかったり、何やらバラキエルさんのお仲間が起こした事件に俺が巻き込まれたらしく、その事について謝られたり。
後、俺は改造人間になったらしい。
マジか、漫画みたいだな。
これから俺ＴＵＥＥＥな物語が始まるのか。
……ないな、うん。
あ、あとバラキエルさん達ってホントに堕天使らしい。

びっくりだね。
なんて色々考えてたらもう部屋の前。
バラキエルさんに続いて入室する。
そこには高価そうなソファーに座る黒髪だが前髪だけ金髪なダンディな男性と、その隣に腕を組みながら立つなんか見覚えのある銀髪のイケメンが待ち構えていた。
イケメン達は何してても様になってるな。妬ましい。
「来たか。俺はアザゼル、一応ここのトップだ。んでこっちの目付きが悪いのがヴァーリ。お前さんをここに連れてきた奴だ」
「初めまして、瀬尾　一輝です。ヴァーリさん、助けてくれてありがとうございました」
「命令だったからな、気にするな」
なんかトップの人にしては砕けた雰囲気の人だな。
ドラマとかで見る社長とは大分違う。
てかこの銀髪イケメン、俺を助けてくれた人か。
返事もクールだしやっぱかっけぇ。
命の恩人だし、妬むのは止めておこう。
「まず謝っておく、俺の身内が迷惑をかけてしまった。すまない」
アザゼルさんは謝罪した後、バラキエルさんが言葉を続けた。

「カズキ君、実は君をこのまま向こうに帰すわけにはいかなくなってしまったんだ。君には《神器》が宿っている」

神器、どっかで聞いた気がするけど忘れた。

「神器はそれなりに希少なもんでな、強い弱いに関わらず様々な組織に狙われる。だから元の世界、元の生活に戻るのは難しい。だが、ここにはお前の他にも神器を使う連中を保護して神器について研究する機関がある。お前さえ良ければ来ないか？」

だから神器ってなんなんだよ。

シリアスっぽいので質問出来ない。

解る前提で喋らないでいただきたい。

なんとなく察するに、要はスカウトなんだろう。

選択肢がほぼないのはどうかと思うが。

「孤児院も食い扶持減る分には困んないだろうからまぁいいんだろうけど。

友達やお世話になった先生には挨拶したかったなぁ」

「なら私が君を連れて孤児院までいこう。そうすればみんなにお別れも言えるだろう」

マジでか、バラキエルさんいい人すぎる。

堕天使って天使が悪い事してなるイメージなのに。

なんでこの人堕天したんだろ？

アザゼルさんがバラキエルさんの事を生暖かい目で見ているのが気になる。
「それじゃあお世話になります。よろしくお願いします」
「取り敢えずはこんなもんか。お前さんの身体についても、詳しく調べれば何かしらわかってくるだろ」
「話が終わったなら行くぞカズキ。お前の部屋に案内してやる。構わないか、アザゼル？」
俺がお礼を言い、アザゼルさんが話をまとめると今まで壁にもたれて話を聞いているだけだったヴァーリさんが、突然話しかけてきた。
アザゼルさんも驚いたような顔をしてる。
よっぽど珍しいんだろうか。
「お、おう、じゃあ頼む。ついでに施設内も軽く案内してやれ」
「わかった」
そう言うとヴァーリさんは先に部屋を出て行こうとする。
慌てて後ろを追いかけ、隣まで来てから顔を見上げる。
「これからよろしくお願いしますね、ヴァーリさん」
「あぁ」
うん、やっぱり挨拶は大切だよね。

堕天使の人達ってみんな優しそうだし頑張ろう。
あ、ヴァーリさんは堕天使じゃなくて悪魔と人間のハーフなんだそうだ。
悪魔もいるのか。
堕天使がいるんだから天使も多分いるよね。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
バラキエル……根が真面目なのもあるんだろうが、あいつカズキを朱乃と重ねて見てやがるな。
年も一つしか変わらないし、無理もないか。
放って置けないんだろうよ。
それよりも先ず実の娘をどうにかしろとも思わないでもないが……まぁ、あいつの後悔が少しでも薄まるならそれもいいさ。
面倒見る分には構わないし、しっかり守ってやればいい。今度こそ、な。
セオ　カズキ……簡単にではあるが、調べた。
幼少期に父親の手により施設に預けられる。
父親はそのまま迎えに来ず、その施設で育ち、その後は特筆する事もなく今に至る。
あいつには本当に悪い事をしている。
こっちのバカのせいで今までいた世界にいられなくしてしまった。

平穏な生活を崩してしまった。
普通の人間では、なくなってしまった。
こいつにだけ構うわけにはいかないが、少しは気に掛けてやらないとな。
それにしてもヴァーリの奴には驚いた。
あいつがあんな事言うとは。
カズキに何かを感じたか、それとも資料を見て自分と重ねたか。
あいつも父親に捨てられたようなもんだしな。
まぁ悪い事をしてる訳じゃねぇ、いい傾向だと受け入れよう。
それに今はそれぞれの勢力への弁解と、サーゼクスとの会談の用意が最優先か。
はぁ……休みが取れない、誰か総督代わってくれねぇかな。

3話

先日、バラキエルさんに連れられて孤児院に到着。
引き取る事についての書類関係の処理と、みんなにお別れをしてきた。
改造人間になったから鍛えてくると伝えたら、とうとう頭が壊れたという素敵な別れの言葉を貰った。
お返しに、パワフルになった身体を生かして砂場に頭だけ出して埋めてあげたら、行かないでくれと泣いて別れを惜しんでくれた。
素直ではないが、いいトモダチだと思う。
そんなこんなでここは《神の子を見張る者》（グリゴリ）の神器研究施設兼俺の自宅。
ヴァーリさんが教えてくれたのだが、どうやら神器と言うのは火がだせたり、氷がだせたり。
はたまた剣やら槍やらが出せる素敵アイテムらしい。
何とも厨二心をくすぐられる一品だ。
ヴァーリさんも持っていて、アザゼルさんは神器を研究するのが趣味なんだとか。
今日はそれの出し方を教えてくれるらしい。

「手を前に突き出せ。いいか、自分の知る中で最も強いと思うものを連想しろ。そしてそれが一番力を発揮している所を強く、強く思い描け。この訓練室は魔力が濃いから比較的神器も出しやすいはずだ」

強いもの……アザゼルさんは強いらしいけど、見たことないから愉快なオジさんのイメージしかないし。バラキエルさんは優しい人のイメージが強すぎる。

そういえば前にヴァーリさんの神器を見せてもらったっけ。

なんたらドラゴンが宿ってて、「白龍皇」とかいう厨二な肩書き持ってるんだっけ？

ドラゴン……龍……竜……そういえばモグラって土竜って書くんだよね。

孤児院の畑で見たことあるけど、鉤爪とかあるし、地面の下だけじゃなくて上でも普通に素早いんだよね。

あとかわいいし、それとかわいい。

む、気付いたら俺の手の上に文字通り掌サイズのモグラさん。

なんか若干デフォルメされて可愛らしさが強調されている気がする。

「それがお前の神器か。以前アザゼルが独立具現型の神器があると言っていたな、恐らくそれだろう」

どくりつ……まぁ要するに生きてる神器って事だな。

難しい事はどうでもいいや、うん。

「これからよろしくね、モグラさん」
「キュ？キュイ」
後脚で立ち上がり、俺に向かってチョコンと頭を下げた後、腕を伝って登っていき頭の上で寝そべった。
かわゆい。
武器っぽくないけどそういう神器もあるのかね？
なんでも《神滅具》（ロンギヌス）とかいう神器の中でもすんごいスペシャルな物があって、その中の一つがそのなんたら型って奴らしい。
ちなみにヴァーリさんのもその神滅具だそうだ。
やっぱイケメンは天に二物も三物も与えられているのか、なんかずっこい。
ヴァーリさんも神器にはそこまで詳しくないらしいので、後日アザゼルさんのところに行って聞いてみるように言われた。
そのまま歩くだけで人混みを二つに分け、ヴァーリさんは去っていった。
何で皆はヴァーリさんを避けるんだろう。
他の人達はヴァーリさんが怖い人だと言うけれど、そんな事ないのになぁ。
色々構ってくれるし。
いつか誤解が解けるといいな。

で、言われた通りにアザゼルさんのところに訪問。
アポ？
そんなものこの人には必要ないんじゃないかな、偉いらしいけどいつも部屋で書類ほっぽって機械弄りしてるし。
その度シェムハザさんに怒られてるけど。
「独立具現型ってまた面白いもんが出て来たな、強く念じれば武器に変わるはずだぜ」
なるほど。
じゃあモグラさん、よろしく。
手に乗せてお願いすると、土竜さんが光り俺の両手にグローブ？手袋？みたいな物が装着されていた。
先端に小さくではあるが鉤爪みたいな物があって、手の甲には宝石みたいなのが付いてる。
うむ、実に厨二くさい。
嫌いじゃないが。
「グローブ……にしてはいかついな。籠手にしては範囲が狭いし。調べてぇが仕事が

……くそ、時間が無さ過ぎるっ！」

手をワキワキしつつハァハァ言いながら近づいてくるアザゼルさん。

怖いので逃げだした。

振り向いたら追いかけてきててビビったけど、偶然遭遇したバラキエルさんとシェムハザさんに捕まって怒られてた。

ざまぁ。

あ、シェムハザさんはアザゼルさんの次に偉い人ね。

モグラさんも怯えていたし、アザゼルさんがマツドなサイエンティストと言われているのを再確認した。あれは怖い。

数日後、ヴァーリさんが友達に会いに行くというので連れて行ってもらった。

ヴァーリさんってやっぱ凄い。

なんとあの有名な孫悟空と友達なのだ。

名前は美猴（びこう）さん。

この人もイケメンで、なんかワイルドだけどいつも笑ってて、とっつきやすい兄貴分な人だった。

イケメンはイケメンを呼び寄せるらしい。

修行とか言ってしこたま如意棒で殴られたけど。
ヴァーリさんといいイケメンはみんなドSなんだろうか。
それからは、俺の訓練に美猴さんの課外実習という名のイジメが加わった。
世界はなぜ俺に厳しいんだろう。

そんなこんなで、色んな事が起きながら俺はここで五年間過ごした。
グリゴリの皆さんが俺の身体を調べてテンション上げてたり。主にアザゼルさんが。
神器であるモグラさんを調べようとして、モグラさんと施設中で追いかけっこしたり。主にアザゼルさんが。
技術者の人達と色々作って暴走させて怒られたり。主にアザゼルさんが。
特訓と称して俺を虐めたり。これはヴァーリさん達もだけど。

そんな様々な体験を経て、俺は現在この人間界の駒王町にいる。
俺が拉致される前に住んでいた場所。
今日からまた、俺が住む事になる街だ。
アザゼルさんの『少しは常識を学んでこい』と言う有難くないお言葉と、バラキエル

さんのとあるお願いの為にここまで帰ってきた。
堕天使とかいう非常識な存在に常識を語られたのは納得いかないが、お世話になってるバラキエルさんのお願いは断れない。
そして、ヴァーリさんや美猴さんの特訓地獄から逃げられるっ!!
これはとても大きい。
2人のことは嫌いではないが、とにかく訓練が尋常ではないのだ。
二人は強いからいいが、俺はそこら辺にいる雑魚なんだ。
同じレベルを求めないでいただきたい。
こういう事を言うと向上心が足りないとシゴきが増えるので本人には言えないが。
今感じているうちに自由というものを噛み締めながら、胸ポケットにいるモグラさんと一緒にシェムハザさんとバラキエルさんが用意してくれたマンションへと歩を進める。
「さぁ行くよモグラさん。俺たちは、自由だぁ～！」
「キュ～！」
周りの人に変な物を見る目で見られたが気になどしない。
せっかく味わえる久々の学生生活だ、たっぷりと楽しんでいこう。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

あいつは、能力はあるのにやる気がない。
いつも逃げ腰な上に、戦い方まで狡い方面にばっかり成長していく。
初見の時はヴァーリや俺まで嵌められる程だ。
身体を弄られているとはいえ、ただの人間が堕天使の総督や白龍皇を出し抜くのだからもはや笑えてくる。
そう、あいつは人間。
俺たちの側に5年もいたのに、人間なのだ。
俺たちみたいな存在になりたいと思わないのか尋ねてみたが、あっさり断りやがった。
あいつは人間である事にこだわる。
身体がどんなに変わっても、人間でありたいのだろう。
だから今回、あいつを元の居場所に送り返した。
朱乃もいるし、理由付けは完璧だ。
バラキエルも娘を気にしていたし、カズキにもいい経験になる。
帰ってきたいならそれなりの仕事を割り振ってやるし、そのまま人間界で過ごしたいなら好きにさせるつもりだ。
俺やヴァーリに扱かれた今のあいつなら、余程のことがない限り大抵のことは対処で

きるだろ。
問題ないと言えないのが少し情けないが。
さて、そろそろカズキは街に着いた頃だろうか。
少しばかり遅いが、手放してしまった人間らしい生活を送るのも悪くないだろう。
友を作って女を作って、存分に青春って奴を楽しんでくるといい。
あいつがどうなるか、どういう人生を送るのか。
最近は、神器を研究するのと同じ位には楽しんでいる自覚がある。

一巻　旧校舎のディアボロス
4話

俺、兵藤一誠。
最近俺の周りで変な事ばかり起きやがる。
せっかく人生で初めて出来た彼女、天野夕麻（あまの　ゆうま）ちゃん。
確かに付き合っていて、デートだってした筈なんだ。
なのに突然いなくなってしまい、携帯に登録してあった夕麻ちゃんのアドレスや番号も消されていて、周りの人間も彼女の事を忘れてしまっていた。
友達である松田、元浜にも女の子に持てなさすぎて幻覚を見たとか、ついに壊れたとか好き放題言われた。
思いつく限り調べてみたけど証拠なんて一つも見つからなくて、段々と自分でも自信がなくなってきて……。
とにかく最近はテンションが下がりっぱなしだ。
なんでか夜には逆に体力が溢れてきて、落ち着かなくなってくるけど。
俺、なんかの病気なのかな……？

そんな気分を吹き飛ばすため、今日の放課後は元浜と一緒に松田の家に行ってエロＤＶＤ鑑賞会だ。
エロで動く高校生なんだ、今日は無礼講だっ！
行くぜ、おっぱい!!

鑑賞会は楽しかった。
でも、あの手の物は見てる時はテンション上がっていいんだけど、ふと現実を直視するといつもの倍凹む気がする。
それでも観るのを止めたりはしないけどな、
絶対！
うん、絶対に!!
なんて馬鹿なことを考えていたら、最近夜に感じるあの力が溢れてくる感覚。
目の前から感じるヤバい空気。
それと同時に現れる不気味なコートの男。
何か話しかけられたけど、意味が分からなくて怖くなった俺は来た道を全力で逃げ出した。
捕まりたくない一心で、力が溢れる感覚に任せて普段ならありえないほど必死に走っ

た。

走って走って走り続けて。

気がつくと、俺は公園にいた。

夕麻ちゃんとデートして、最後に訪れたあの公園。

脚を止めて息を整え、噴水の前で安全確認の為に辺りを見渡した。

すると目の前から歩いて近づいてくる人影が見えた。

身構えたが、あれはたしか同じクラスの瀬尾　一輝だ。

あんまり話した事はないけど、一年の時に運動系の部活の人たちがこぞって勧誘してたのを憶えてる。

「兵藤じゃないか、お前もランニングか？」

ここ、学校からそれなりに離れてる筈なのにこんな所まで走ってきてるのか。

でも、冬でもないのに手袋みたいの付けてるのは何でなんだ？

ってそうじゃねぇ！

「瀬尾！　駄目だ、こっち来んなっ!!」

お前まで変な事に巻き込んじまう！

でももう手遅れで、あのコートの男はすぐ近く迄来てやがった。

夕麻ちゃんと同じ、黒い羽根を生やして……。

くそ、余計な事は考えるな！
今はとにかく瀬尾を逃がさないと！
「なんだ兵藤、あのおっさんストーカー。やっぱ変態には変態が寄ってくるのか？」
「幾らなんであんまりだろそんな類友!?　泣くぞ！」
俺が無い頭を使って必死に考えていたら余りにも無慈悲な言葉が飛んできた。
意外と余裕あるぞこいつ!?
「ほう、仲間……いや、こいつは人間か。見られては仕方ない、堕天使たるこの私が始末してやろう」
くそ、どうすれば……ってやめて瀬尾くん!?
そんなあからさまに溜め息吐いて挑発しないで!?
ほらなんか光るもの投げてきた！
っ瀬尾を狙ってるのか!?
危ねぇ、瀬尾っ！
「よいしょ、っと」
……は？
なんかすごい速さで飛んできた物を、瀬尾が両手を前に出したら後ろに逸れてったぞ？

なんだこいつ。

運動が得意ってだけじゃ説明して付かないぞ……。

「危ないだろう。当たると痛いんだぞ、それ」

男を注意する様に、背後に刺さったままの光る物を指差しながら相手を咎める瀬尾。

指先を追って見ると、光る槍のような物が地面に突き立っている。

どう見ても痛いじゃ済そうにないんですけど。

それにしてもあの槍、何処かで似たような物を見た事がある気がする。

「それは!?……なるほど、神器使いだったのか」

神器……？なんだそれ？

不思議に思っていたら、後ろから凛と響く綺麗な声が聞こえてきた。

「その子達に手を出さないで」

振り向くと、そこには紅い綺麗な髪を腰まで伸ばし、悠然と佇む美女がいた。

あれは、あのおっぱいは！

俺の学校の二大お姉様の一人、リアス・グレモリー先輩だっ！

先輩が俺の隣を通り、庇うように俺の前に立つ。

先輩と男の会話の内容はいまいちわからなかったけど、あの男が自分をドーナシークと名乗り、そのまま闇夜に消えていった。

先輩がその立派なおっぱいもプルンと震えさせながら、こっちに振り返る。
「あら？　瀬尾くんは？」
「あ、あれ？　あいつどこいった!?」
状況に驚いてたのと、先輩のおっぱいに夢中で気がつかなかったが、いつの間にか瀬尾がいなくなってた。
怪我はしてなさそうだったけど、俺まだ巻き込んだ謝罪も助けてくれたお礼もしてないのに……。
「あの子、一体何者……？　取り敢えず貴方が無事でよかったわ、イッセー」
先輩が優しい笑顔を俺に向けてくれる。
え、瀬尾だけじゃなくて俺の事も知ってるのか？
俺にはこんな美人で素晴らしいおっぱいの持ち主と接点なんてないぞ？
「まだ混乱しているようね。明日の放課後に使いを出すわ、その子についてきて。全部説明してあげるわ、怪我もないようだし今日はお家に帰りなさい」
先輩はそう言うと、俺の頭を撫でてくれた後に真紅の髪を揺らしながら去っていった。
近くで見ると、更に凄さのわかるおっぱいだ。
いい匂いもするし。

何がどうなってるのかまるでわからないけど、先輩の言う通りに今日はもう帰ろう。
色んな事がありすぎて頭がパンクしそうだ。
取り敢えず、明日は朝一で瀬尾にお礼いわなくちゃな。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
この街に帰ってきて一年が経ち、俺も高校二年になった。
俺の神器兼ペットのモグラさんは、いつも外に出ていたい性格らしく普段から俺の頭の上か、学校では胸のポケットの中に隠れている。
そういえばモグラさんて、やたらと長い本名がある。
アザゼルさんが教えてくれたが、モグラさんの受けも悪いので俺はモグラさんと呼び続ける事にした。
その方がかわいいし。
それにしてもモグラさんは昔から全く大きくならないなぁ。
これからもずっとかわいいままでいて下さい。
最初は自分がいた頃と少し変わってしまった風景に微妙な気持ちになったりしたが、今はもうそんな事を気にせず楽しいハイスクールライフという奴を満喫しています。
何せこの街には堕天使がいない。
俺にイタズラ目的でさらなる改造を施そうとしてくる人も、無茶苦茶な拷問を課して

くる人もいないのだ。
まさに天国。
こんなに嬉しいことはない……！
勉強はグリゴリにいた時にバラキエルさんとシェムハザさんが暇を見つけて教えてくれてたなんとかなる。
部活はしていない。
最初の頃はやり過ぎてしまい、部活の勧誘が凄まじい事になった。
その時は家庭の事情で部活には参加できないで済ませたが、今はもう力加減もバッチリで目立たないようになった。
これからもモグラさんと一緒にゆる～く楽しい生活を送って行きたいと思う。
まぁ長年調教されたせいで、基礎の走り込みや筋トレは休めないのだが。
サボろうとすると幻聴が聞こえてくるのだ。
「サボる余裕があるなら俺っちと今から組手でもしようぜぃ」
「どうした、まだ限界ではないだろう？」
「ほら捕まった。なんで捕まってしまったか考えながら腕立て五百回だ。途中で潰れたら更に三百回追加で。え？　優しい方だろう？」
「わっはっは。俺のストレス発散にちょうどいいな。ほれほれ、避けねぇと死ぬ程痛い

ぞ」
刷り込みって恐ろしい。
最後の人は絶対に許さないが。

今夜も調教された我が身を呪いながらのランニングである。
さすがにモグラさんを乗せたままだと走れないので、グローブになって貰ってます。
長い時間装着出来るようにする事も兼ねてる一石二鳥な訓練です。
何時ものように公園に入ると、前方から誰かがとんでもないスピードで此方に走ってくる。
あいつは……同じクラスの、変態で有名な兵藤一誠だ。
自分で言っといてなんだが酷い説明だな。
そいつが凄い必死に走ってる、てか速いな。
あいつあんなに運動できたのか。
あ、噴水の辺りで止まった。
「兵藤じゃないか、お前もランニングか？」
あんまり無理すると身体痛めるだけで効果薄いよ？

「瀬尾！　駄目だ、こっち来んなっ！」
露骨に拒否られた。
そんなに話した事なかったのに名前知ってるから、少し嬉しかったのに。
ヘコんでいると、空から見覚えのある黒い羽根。
まさかアザゼルさんがここまでいびりに来たのかっ!?
驚愕しながら上を向くと、そこには見覚えのないロングコートのおっさん。
ビビったじゃないか、心臓に悪い。
「なんだ兵藤、あのおっさんストーカー。やっぱ変態には変態が寄ってくるのか？」
アブノーマルなものに巻き込まないでほしい。
「幾らなんであんまりだろそれ!?　泣くぞ！」
ホントに泣いてるし。
まぁ放置するんだけども。
「ほう、仲間……いや、こいつは人間か。見られては仕方ない、堕天使たるこの私が始末してやろう」
このおっさんもやっぱり堕天使なのか。
堕天使はいい人だらけだと思ったけど、やっぱ例外もいるよね。
俺を改造人間にした奴とか。

溜息吐いてたら光の槍を投げつけられた。
えらく雑に投げてるな、光も弱いし。
「よいしょ、と」
グローブの鉤爪部分を擦り当てて、向かってきた槍を後方に逸らす。
美猴さんに調教されたしアザゼルさんにも散々これで突かれたから、このくらいの速度ならまだまだ余裕です。
このおっさんはびっくりしてたけど、驚くなら攻撃すんなや。
「危ないだろう。当たると痛いんだぞ、それ」
俺が注意しても聞く気がないようだ。
少しは反省しろよおっさん、アザゼルさんがやってたみたいにいじめちゃうぞ。
「その子達に手を出さないで」
今度は誰よ。
振り返るとそこには紅い髪を腰まで伸ばし、女性的な部分がやたらと魅力的な美人さん。
リアス・グレモリー先輩だ。
おっさんも手を引くつもりみたいだし、先輩とおっさんが言い合っている間に俺は帰ろうかな。

この人と関わるのは少しばかりマズい。
面倒事は嫌いなんです。
サラバター。

此処まで来ればもう平気だろう。
しかし兵藤、せめて目をそらす努力ぐらいはしよう。
襲われた直後なのに元気すぎるだろ。
美人が怒ると怖いんだぞ。
そういや結局、なんであいつが襲われてたんだろ。
……まぁいっか。
わからない事は考えるだけ無駄だってヴァーリさんと美猴さんも言ってた。
しかしドロンするときに名乗ってたのが聞こえてきたけど。
あのおっさん、ドーナツなんたらって名前なのか。
仲間にエンゼルフレンチとかポンデライオンとかいそうだな。
……帰りにミセスドーナツによってから帰ろう。

5話

登校して教室に入ると兵藤に絡まれてた。
何やら聞きたそうにしていたが、俺は知識がまるでないから期待しないでほしい。
先輩が説明してくれるって言ってたんだから大人しく待ってろよ。
「なぁ、何であんな事出来たんだ？　なんか格闘技でも習ってるのか？」
「いや、小さい頃に悪の組織に改造人間にされてね」
「真面目に答えてくれよぉ……」
正直に答えてるのに。
テラ理不尽。
放課後になると、隣のクラスのイケメン王子、木場祐斗が使いとしてやって来た。
兵藤が同類である松田と元浜が絡らまれてる間に俺は帰ったけど。
今日はスーパーのタイムセールがあるのだ、悪いが関わってる暇はない。
グレゴリに仕送りを貰っている立場なので節制しなくては。
まずはモグラさん用のジャガイモからだ！
次の日、兵藤に文句を言われたが知らん。

俺はお前よりも、冷蔵庫の中身の方が数倍大事だ。
兵藤はこれから、グレモリー先輩が部長をやっている『オカルト研究部』に入って悪魔としてやっていくらしい。
お前も悪魔だったのか、しかも神器持ち。
いまだに悪魔とか天使の区別がつかない。
俺？　俺は人間ですよ、改造されてるけど。

この間からオカルト研究部の連中がやたらと絡んでくる。
塔城さんが迎えに来たり、木場が校門で待ち伏せしてたり。
皆無駄に人気者だから嫉妬の視線が凄まじい。
やめて下さい、死んでしまいます。
逃げ帰る途中、兵藤が金髪シスターと仲良さそうに歩いてたのを目撃。
その情報を流して嫉妬を男の分だけでも兵藤に流しておいた。
すまん兵藤、俺の為に死んでくれ。

そんな日々を生き抜き、ようやく休日である。
休みには、よくモグラさんを頭に乗せて散歩している。
最初は驚かれたものだが、ご近所さんも見慣れたものなので普通に接してくれる。
むしろ小さい子供やお年寄りには大人気で、ちょっとしたアイドルだったりする。
その日は、たまたま例の金髪シスターさんと遭遇した。
怪我をした子供を慰めていたらしい。
流石シスター、優しいね。
その光景を見つめていると、シスターさんも見つめ返してきた。
俺の頭の上のモグラさんを。
どうやら俺ではなくモグラさんに興味津々らしい。
悔しくなんかない、全然。
「えっと、抱いてみる？」
「い、いいんですかっ!?　是非ッ！」
モグラさんに許可を得てからシスター、アーシアちゃんに預ける。
ベンチに座った後に、両手で優しくモグラさんを受け取ると、膝に移して満面の笑みを浮かべて喜んでくれた。
撫で方がいいのか、モグラさんも仰向けになって満足気だ。

「そういえば、さっきの子供にしてたの凄いね？」
話題がないので先程の事を話題にすると、アーシアちゃんの肩がビクッと震えた。
「み、見られちゃいました……？」
うん？　あぁ、泣き止ませてる所だろ？
黙って頷くと、アーシアちゃんは自分の話をしてくれた。
違ったよ。
さっきのは泣き止ませてたんじゃなくて、神器で怪我を治してたんだそうです。
そう、じつはこの子神器持ちでした。
なんだよ神器使いっていっぱいいるじゃん。
アザゼルさんにまた騙された。
アーシアちゃんのはどんな傷でも治せるなんたらヒーリングって名前の物。
昔、それを使って瀕死の悪魔を助けたら教会から追い出されたそうだ。
アーシアちゃんが良い子すぎてつらい。
「ん～……難しい話は解らないけど、後悔してないんだろ？　アーシアちゃんが間違ってないと思ったんなら、それが正しいんだよ」
「ですが、私は……」
しかも夢が友達と買い物する事とか……マジもんの聖女様じゃないか。

「それにホラ、モグラさんともう友達になったじゃないか。俺とも友達になってよ」
「カズキさんは……私と、友達になってくれるんですか？」
やめて、本当にやめて。
これ以上はマジで泣くから。
俺が耐え切れずにベンチから立ち上がると、それに反応してアーシアさんの膝で仰向けだったモグラさんが、俺の服をよじ登って頭の定位置に戻ってくる。
「もう友達だろ？　また今度、モグラさんと遊んであげてね」
アーシアちゃんが手を口に当てながら涙を零す。
それを見てもう涙腺が決壊しそうなので、持ってたハンカチを渡して手を降りあった後、その場から離脱した。
家に帰ってからおんおん泣いた。
隣の人に怒られた。
別の意味で悲しくなった。
ぐすん。

いつものように夜にモグラさんをグローブにしながらランニングしてると、ふとアーシアちゃんの住んでいる高台の教会が目に入った。

そういえば教会なんてちゃんと見たことないな。
一度行ってみるか、もう夜だから会うことはできないだろうけど。
坂の傾斜がなかなかキツくて少し後悔したが、無事に到着。
でも教会が無事じゃなかった。
扉が開きっぱなしで、中の椅子やら像やらがメチャクチャに壊されている。
なにこれ、押し込み強盗？
アーシアちゃん無事だよね？
恐る恐る教会のなかに入っていくと、目の前の台座みたいな所から兵藤が出てきた。
もしかしてこれお前がやったの？
悪魔だからってこんな事しちゃダメだろう。
注意しようと近づくと、彼の腕の中にはアーシアちゃんの姿が。
やたら薄い服なうえ、胸が片方はだけてる。
よし兵藤、歯を食いしばれ。
今なら前歯だけで許してやろう。
よく見ると、兵藤は普段からは考えられないほど真剣な眼をしながらアーシアちゃんを抱きかかえ、悲痛な声で話しかけている。
アーシアちゃんは震えながら兵藤の手を握っていたが、俺に気付くと小さくだが微笑

んでくれた。
え、シリアス？　シリアスなのか??
「あぁ……イッセーさんだけじゃない、カズキさんまで来てくれた。本当にもう、思い残すことは……ありがとう……」
「アーシアっ……アーシアァァァっ!!」
そう呟くと、アーシアちゃんは目を閉じて喋らなくなり、兵藤が泣きながら吠えている。
は……？　なにこのお別れみたいな台詞。
本当に死んじゃったのか？
あんなに優しくて、いい子だったのに……？
「ようやく死んだのね、その子。あら？　知らない顔ね……なんだ、ただの人間か」
呆然としていると、堕天使が笑いながら現れる。
兵藤との会話から察するに、どうにもこいつが元凶か。
なるほどね、いいよわかった。
モグラさん、頼むよ。
「兵藤、俺があいつの面倒見てやるよ」
神器を装着して、兵藤の隣に立つ。

「だから止めはお前が刺せ。あの子の友達である、俺たち二人で倒すんだ」
俺の言葉を聞いて兵藤はゆっくりと頷き、自分の神器であろう籠手を構え直す。
やる気充分じゃないか、カッコいいね。
それじゃ

『やってやるぞ、くそったれ！』
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
くそっ！　守れなかった……っ!!
せっかく木場と小猫ちゃんが手助けしてくれたおかげで辿り着いけたのに。
俺の目の前でアーシアは神器を抜き取られてしまった。
目に見えて弱っていくアーシアを抱え、木場と小猫ちゃんが敵を引きつけてくれてる間に教会の入り口近くまで戻ると、そこにはジャージ姿の瀬尾がいた。
不思議には思ったが、今はアーシアをどうにかしなくちゃ！
アーシアを長椅子に寝かせて休ませる。
くそ、どうすればいい？俺には何も……
そうだ！　瀬尾なら……っ！

状況を瞬時に理解したのか、瀬尾は目に見えて驚愕し、怒りから体を震わせている。
以前聞いたが、瀬尾はアーシアの友達だ。
落ち込んでいるときに励ましてくれて、友達になってくれたと。
そうか……こいつにも、どうしようもないんだな……。
もう出来ることがない。
そう思うと情けなくて、悔しくて。
アーシアと話ながら涙が溢れてくる。
アーシアが瀬尾に気付くと、弱々しくだが微笑んでいた。
「あぁ……イッセーさんだけじゃない、カズキさんまで来てくれた。本当にもう、思い残すことは……ありがとう……」
そう呟くと、いままで握ってくれていた手がスルリと落ちてしまった。
「アーシアっ……アーシアァァァっ!!」
なんでこんな良い子が死ななきゃならないんだ!
色んな人に尽くして、頑張って来たんじゃないかっ!!
俺か!? 俺が悪魔だから悪いのかっ!
「ようやく死んだのね、その子。あら? 知らない顔ね……なんだ、ただの人間か」
声に反応して振り向くと、そこには俺たちを嘲笑う天野夕麻……堕天使レイナーレが

いた。
奴はアーシアの神器である指輪を見せつけるような仕草を続ける。
それはお前のもんじゃない。
アーシアの、優しい力なんだ！
俺が憤慨して飛びかかろうかと思ったその時、今迄黙っていた瀬尾が口を開いた。
「兵藤、あいつの面倒見てやるよ」
瀬尾はそう言うと、いつの間にか宝石見たいなのが付いたグローブをはめて俺の隣に立っていた。
部長が、瀬尾も神器を宿してるって言ってたけど、あれがそうなのか……？
「だから止めはお前が刺せ。あの子の友達である、俺たち二人で倒すんだ」
二人で倒す、瀬尾はそう言ってくれた。
こいつがどのくらい強いのかわからない。
多分一人でも余裕で倒せるんだろう。
でも、こいつはアーシアの友達である【俺たち二人】で倒すと言ってくれたのだ。
熱くなるじゃないか。
最高じゃないかっ！
ここでやらなきゃ男じゃねぇ!!

行くぞ俺の神器っ！
お前は想いを力に変えてくれるんだろう？
一発、一発だけでいい！
俺に、あのクソ天使をぶっ飛ばす力を貸してくれ!!

『やってやるぞ、くそったれ！』

6話

「ふん。いくら神器を持ってるからって、ただの人間が至高の堕天使たる私に勝てるつもり？」

こっちを舐めきって、余裕たっぷりに講釈を垂れ流している堕天使。

たしか、レイナーレとか言ったっけ。

「全くこれだから「黙れよ小汚いカラスの癖に」っ！　貴様っ！　今何と言ったっ!!」

ちょっと挑発したらすぐに乗ってきた。

やっぱ三下か。

手を出してもアザゼルさん達には迷惑かかんないよね、多分。

かかってもこいつは潰すけど。

久々に改造人間の本領、見せてやる。

「ギャーギャーやかましい。いいからかかって来いよ、全部正面から潰してやる」

「人間風情が馬鹿にしてんじゃないわよ！」

激昂したレイナーレが光の槍を投げつけてくる。

何時もなら受け流すんだけど、今日は俺もモグラさんも機嫌が悪いんだ！

「なっ！　私の槍がそんなに簡単に!?　」
「遅いな、おまけに脆い。やる気あんの？　」
右手で掴んでそのまま握り潰す。
この間のおっさんよりはマシだけど、大差はない。
無駄にハイスペックなこの身体の前では、余りにも遅すぎる。
錯乱した様に槍を連続で投げつけてくるが、馬鹿め。
グミ撃ちは負けフラグなんだよ。
全部殴り落としながらゆっくり近づいて、一気に踏み込む。
「まず一発!!　」
その場で悶絶して、膝つきやがった。
休んでんじゃないよ。
さて、次はモグラさんの分だ。
さっき一緒に倒す数に入れなかったからちょっと怒ってるけど、その怒りもあいつにぶつけてね？
神器に気合いを込めると、右手の甲にある宝玉に《凸》の字が浮かび上がる。
「おら、まだ寝るな。次は俺の中の友達の分だ」
「な、何言って……ぎゃあっ!?　」

レイナーレの言葉を待たずに、俺は右手を地面に打ち付ける。
次の瞬間、レイナーレの真下の地面が隆起して顔面を強打し、その勢いで空中に跳ねあげた。
ん？なかなか落ちてこないな。
あいつ、そのまま飛んで逃げる気か？
逃がしはしない。
まだ、兵藤の分が残っているのだ。
足下に右手を叩きつけ、今度は自分の足場の地面を隆起させてレイナーレの上を取る。
「簡単に逃げられると思ったか？　笑かすな、三下」
次は左手に気合いを込める。
浮かび上がるのは《凹》の文字。
そのまま拳をレイナーレの背中に打ち込む。
レイナーレが落下していき、地面にぶつかる筈が地面にどんどんとめり込んで行く。
地面に着地した後に、再び右手の力で強引に自分の手前まで無理矢理引き戻す。
打撃のダメージだけでなく、強引な上下の動きにより翼が折れているようだ。
「あぐ、がっ……！　か、回復が追いつかないっ!?　なんで……なんで人間なんか、にい

……！」

いい具合にズタボロだな。

まだやり足りないが、このくらいにしとかないと。

俺よりも激しく力を、怒りを溜めてるやつが待っている。

「兵藤、あとは頼んだ」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

凄ぇ、瀬尾……。

あのレイナーレの槍を簡単に掴み取ったうえに握りつぶしちまった。

俺は簡単に刺されて殺されかけたのに。

連続で投げられても、歩みを止めずに全部正面から叩き潰して、そのまま腹に強烈なのをお見舞いした！

『Ｂｏｏｓｔ!!』

俺の神器から音声が流れ、俺の中に力が溢れる。

まだだ、まだ我慢するんだ。

今は殴る時じゃない。

瀬尾の右手が輝き、その拳を地面に向かって叩きつける。

次の瞬間、地面が盛り上がってレイナーレの顔面を打ち付けてあいつを空に舞い上げた。

『Ｂｏｏｓｔ!!』

再び俺の神器から響く音声。

俺の中で更に力が湧き上がる感覚が襲ってきた。

今迄と少しだけ姿を変えた俺の神器。

お前も怒ってくれているのか……？

もうすぐだ、もうすぐお前をあの堕天使にぶち込んでやるからな！

瀬尾はレイナーレが落ちてくるのを待てないのか、今度は自分の足元を隆起させて空中に躍り出る。

今度は左の拳を輝かせながら、レイナーレの背中に打ち込んで地面に叩き落とした。

レイナーレは地面に叩きつけられず、そのまま地面に吸い込まれる様に減り込んで行った。

なんだあれ!?　どういう能力だよ!!

あんなに色々出来るのかよ、瀬尾の神器って……？

瀬尾が地面に着地して、再び右の拳で床を叩くとレイナーレが人形の様に飛び出て、地面に堕ちる。

脳でも揺れたのか、足下がおぼつかない様でフラフラとしている。
カズキは短く息を吐き出すと、此方を振り向いた。
「兵藤、あとは頼んだ」
「待ってたぜっ!!」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ!!』
瀬尾に返事をするかの様に、神器からも音声が流れ、今迄感じたことのない力が身体中から一気に噴き出してきた!
これなら……やれる!
「サンキュー瀬尾。いや、カズキ! これであいつを……殴り飛ばせるっ!!」
「っ! あんたまで!? なんで……なんで下級悪魔がそんな魔力をっ!!」
あいつの言葉を無視して俺は走り出す。
あいつを……俺の友達を殺した堕天使をぶっ飛ばす為に!!
「や、やめろぉ……私は、私は至高のっ!」
レイナーレが飛んで逃げようともがき始める。
逃すわけねぇだろうがぁ!!
「知るかそんなもんっ! 吹っ飛べクソ天使ぃっ!!」

兵藤の渾身の一撃を受けたレイナーレは、吸い込まれる様に窓から外へと放り出された。
「すげぇぶっ飛んでったな、あいつ」
ほんの少しだけ気持ちが軽くなった。
ざまぁみろだ。
兵藤が力を出し尽くし、身体が崩れ落ちそうになるが、何処からともなく木場が現れて、兵藤に肩を貸している。
「なんだ、木場もいたのか」
「ちなみに私達もいるわよ？」
俺が呟きに後ろから返事が返ってきた。
驚き振り向くと、オカ研の部長であるリアス・グレモリー先輩が悠然と此方に歩いてきてくる。
少し遅れて姫島朱乃先輩も、何故か巫女服で登場。趣味か？
外からは塔城さんが、気絶したレイナーレを引き摺りながらやって来た。
オカルト研究部勢揃いじゃないか。

「お久し振りね、瀬尾一輝くん？」

グレモリー先輩がイイ笑顔で言ってくる。

「な、なんか怒ってます？」

「あら、別に私達の誘いを散々断っておいて、なんでこんな所に……なんて全然思ってないわよ？」

「じゃあその笑顔を止めてください……」

美人の笑顔は凶器なんだぞ、いろんな意味で。

「ほらほら部長？　早くイッセー君のところに行ってあげませんと」

姫島先輩に促され、納得いかない様な視線を向けながらグレモリー先輩は、兵藤の方へと足を向け移動していく。

俺はふいにアーシアさんを見つめてしまう。

あんなに優しくて、あんなに明るい笑顔を見せてくれたあの子は、もう動く気配がない。

「うふふ、大丈夫」

俺の視線に気付いたのか、姫島先輩が話し掛けてくる。

「あのシスターは、きっと部長が何とかしてくれますわ。イッセー君と、貴方のお友達ですもの」

私達の《王》を信じて、と笑顔で言われてしまった。
ほら、グレモリー先輩これですよ。
美人の笑顔はこうやって使って下さい。

7話

そこから話は早かった。
レイナーレを叩き起こして、グレモリー先輩が自己紹介。
兵藤の神器が実は《神滅具》だった事が判明。
グレモリー先輩がトドメを刺そうとして、兵藤に命乞い。
兵藤は取り合わず、グレモリー先輩の怒りに触れて消滅、神器を取り返す。
アーシアちゃんを《悪魔の駒》（イービル・ピース）で、悪魔に転生させて復活させた。
兵藤はあの女に騙されて付き合っていた事があり、初デートの最後に殺されかけて、悪魔として転生したそうだ。
命乞いの時の姿は、その元カノの時の姿なんだとか。
……本気で胸糞悪いな、あの女。
前に俺等を襲ってきたドーナツおじさんやその仲間も、先輩たちが消してきたそうだ。
エンゼルフレンチとポンデライオンの姿は少し見たかった気がする。
しかし《悪魔の駒》って凄いな、本当に生き返った。

某ゲームの葉っぱみたいだ、悪魔になる副作用付きだけど。
兵藤は生き返ったアーシアちゃんを抱き締め、泣いて喜んでいた。
アーシアちゃんが生き返って本当に良かった。
あれを見れただけで、頑張った甲斐があると言うものだ。
さぁ戦いは終わった。
家に帰ろう。
そう思っていた時期が、私にもありました。
現在、何故かオカルト研究部の部室に、簀巻きの状態で拘束されています。
謎の悪魔プァワ～により縄が切れないし、何より姫島先輩が怪しげな目でこちらを見ながらハァハァ言ってて怖い。
頑張ったよ?
俺、珍しくシリアスに頑張ったんだよっ!?
この仕打ちはあんまりだと思うの!!
抗議しても
「だって帰したらまた逃げちゃうもの。なら、このままお持ち帰りしましょ♪」
である。
こんなに心に響かないお持ち帰り宣言、俺は聞いたことがない。

おまけに自分たちは家に帰るのに、俺はソファーにポイして放置である。
怒ってないって言ったくせに、やっぱり怒ってるじゃないか。
モグラさんに切れないか試してもらったけど、無理だったから諦めてそのまま寝る。
悪魔とは、やはりそのままの意味で悪魔だったようだ。

ようやく放課後になり、俺の皆勤賞と共に授業も終わった。
モグラさんを頭に乗せ、簀巻きのままソファーに座って部員が来るのを待つ。
ぞろぞろと部室に集まってきて、最後に入って来た兵藤とアーシアちゃんが、俺の姿に驚いた所で全員揃った。
アーシアちゃんがこの間あげたハンカチを返してくれた。
捨てても良かったのに、やっぱり良い子だ。
簀巻き状態じゃなかったらもっと嬉しかったな。
ちなみに、モグラさんはアーシアちゃんの膝に乗り、塔城さんと一緒に遊んでいる。
モグラさん大人気である。
あれがモテ期か。
羨ましい。

グレモリー先輩が指を振ると、縄に掛けられていた悪魔プァワ～が解除され、縄から解放される。
姫島先輩の残念そうな顔なんて視線に入らない。
入っていない。
「さて、カズキくん。まず、昨日は私の下僕であるイッセーを助けてくれてどうもありがとう」
グレモリー先輩が頭を下げ、笑顔でお礼を言ってくれた。
だったら簀巻きにするなよ。
昨日の事がなかったら、素直な気持ちでその笑顔も受け取れたのに。
「で、貴方何者？　悪魔や堕天使じゃないのは分かるんだけど、一般人にしては身体能力や神器の扱いが普通じゃないわ」
グレモリー先輩の視線が鋭くなり、アーシアちゃん以外のその場にいる全員が頭を縦に振る。
そういや見てないよね、アーシアちゃん。
「そんなこと言われても……俺は神器持ってるだけの人間ですよ？身体は改造されてますけど」
『改造!?』

みんながハモる中、
「あれって冗談じゃなかったんだ」
と呟く兵藤。
冗談じゃないって言ったじゃないか。
自分が理解している部分だけ話したが、なにやら空気が重くなってしまった。
特に木場の雰囲気が重すぎる。
何故？
あ、アザゼルさんとかバラキエルさんの事は伏せたよ？
バラキエルさんからのお願いの件があるし。
実はバラキエルさんから
【朱乃の事をそれとなく気に掛けてくれ。ただし、バレたくないから無理はしない程度で】
とお願いされているのだ。
なんと姫島先輩は、バラキエルさんの実の娘さんなんだとか。
仲があまりよろしくないので、表立ってなにかを出来ないらしい。
反抗期を迎えた娘さんを持つお父さんは大変だなと思って引き受けーーー。
「……君、カズキ君ってば！」

ふぇ？

「もう、急に黙るから心配したじゃない。話聞いてた？」

「あ、すみません。姫島先輩の事考えて聞いてませんでした」

……ん？　今なんか凄いこと言わなかった俺？

「あらあら、まぁまぁ♪」

笑ってるからいい事にしよう。

このまま勢いで誤魔化す。

「で、お話ってなんですか？」

「え？　あ、あぁそうね。カズキ君、もし良かったら貴方も悪魔になってみない？」

今なら色々とお得よ？

なんて続けて言ってくる。

悪魔……悪魔ねぇ。

「今は……遠慮しておきます、ちょっと怖いですし。また機会があったら誘って下さい」

アザゼルさんやヴァーリさん達に内緒で悪魔になったらイジメられそうで、とは言えなかった。

「そう……しょうがないわよね。ごめんなさい、私の思慮不足だったわ」

え？　なんでそこで謝るの？

いや、なんで皆暗くなるの!?
アーシアちゃんなんて泣き出しちゃうし。
ほら、さっき返してくれたけどこれ使って。
いや返さなくていいよ、貰ってお願いだから!
「そ、そうだカズキ! 俺、お前の神器ちゃんと見てみたいんだけどっ! 」
兵藤が空気を変えるために提案してくれた。
でもさぁ……。
「もうそこにいるじゃん」
「は? だってお前の神器って……え? 」
指を差しながら言うと、全員の視線が一点に注がれる。
そこにいるのは、塔城さんの膝の上で腹を見せながらタレているモグラさん。
撫でられるのに満足したのか、空気を読んだのか。
てけてけと動きながら、俺の頭の上に戻ってくる。
そして指を差しながら一言。
「この子が俺の神器、モグラさんです」
俺の頭の上で、ペコリと頭を下げながら何かをサクサク食べてるモグラさん。
2人に貰ったのか知らないが、頭の上で菓子を食うんじゃない。

食べカスで凄いことになってる。
「かわいい……じゃなくて、言葉もちゃんと理解するのね。しかも武器に変化するなんて……こんな神器初めて見たわ」
グレモリー先輩にモグラさんを手渡し、食べカスを頭から払う。
先輩はその間、モグラさんを興味深げに見つめていた。
「え～と……申し訳ないですけど、今日はこれで失礼しますね」
俺が空気に耐えきれずに立ち上がると、モグラさんがグレモリー先輩の手から飛び降り、胸ポケットに潜り込う。
「あら、これからパーティーするのよ？　本当は朝やるつもりだったのだけれど、予定がずれ混んじゃってね」
「グレモリー先輩のご厚意は嬉しいんですけど、ちょっと用事があるので」
「リアスで良いわよ。これからはみんなの事も名前で呼んであげてちょうだい」
「そうですか？　ではリアス先輩。皆さんも、失礼します」
頭を下げて部室を出る。
パーティは惜しいが、これからタイムセールだ。
今日は牛乳とバターが安い。
久々に菓子でも作るかな。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

瀬尾カズキさん。

私と初めてお友達になってくれた人で、モグちゃんの飼い主さん。

イッセーさんとは、また違う。

同い年ですけど、お兄ちゃんみたいな人。

イッセーさんと一緒に私を助けてくれた、とても大切な人です。

私がこの町に来て、イッセーさんと出会って教会に案内して貰った後。

教会に居づらくて、近くの公園まで出かけた時に出会いました。

男の子を治療した私に驚くでもなく、気味悪がって避けることなく。

私がモグちゃんを見ている事に気付くと、笑顔で触らせてくれました。

その時話した内容を、私は絶対に忘れません。

落ち込んでいる私に

『後悔していないなら、間違っていないと自分が思ったのなら、それは正しい事』

そう言ってくれました。

そして、お友達になってくれました。

その時は私が泣いてしまい、持っていたハンカチを下さるとそのままお礼もいえずにお別れになってしまいました。

それ以降は会う事は出来ませんでしたが、これからは皆さんのお陰で毎日会う事が出来ます。
借りていたハンカチも、今日お返しする事が出来ました。

今日の部室でのお話で、カズキさんの優しさがどこから来るのか、少し分かった気がします。
幼い頃に知らない土地に連れ去られ、いきなり身体中を改造された上に、その施設から保護された時にはカズキさんしか残っていなかったそうです。
他の子はみんな死んでしまった。
生き残ったのは自分だけ。
その時のカズキさんの顔は、笑ってはいましたが、何か悲痛なものを感じさせて。
皆さんもつい俯いてしまいました。
カズキさんに気を使わせてしまったかもしれません。

カズキさんは部長さんに悪魔にならないかと誘われた時に、悪魔になるのが『怖い』と言って断っていました。
カズキさんはもしかしたら、これ以上自分が【人間】から外れるのを怖れているのか

もしれません。
そう考えたらまた涙が溢れてしまって、カズキさんが先ほどお返ししたハンカチをまた私に渡して、頼むから貰ってくれとお願いされてしまいました。
うぅ、恥ずかしい。
泣き虫だと思われたかも知れません。
あと、モグちゃんが実は神器だって知って驚かされちゃいました。
可愛だけじゃなかったんですね、凄いですモグちゃん！
カズキさんは用事があると帰ってしまいましたが、これから皆さんがパーティを開いてくれるそうです。
カズキさんがいなくて少し残念です。
これからは、部長さんのおかげでイッセーさんのお家に住めますし、学校にまで通えるようになりました。
こんなによくしてくれる部長さん達の為にも、これから頑張っていきたいと思います。
悪魔になって、神様にお祈りをすると頭痛がする様になってしまいましたが、感謝せずにはいられません。
私はお祈りの為に手を組もうと、ハンカチを握りしめました。

これは、あの人と出会った日の思い出。
初めて友達が出来た記念の品。
私の大切な、とても大切な宝物です。

……あれ？　よく考えたらモグちゃんがいたからイッセーさんは三人目のお友達？

二巻　戦闘校舎のフェニックス
8話

「は？　鍛えてくれって……イッセーを？」
アーシアちゃんの事件から約一ヶ月。
いつもの呪いのランニング中。
公園に入ると、へとへとになりながら腕立て伏せをするイッセーと、物理的にイッセーを尻に敷いているジャージ姿のリアス先輩に出会った。
イッセーの神器は、自身の力を時間経過で倍加していく。
基礎能力が大切になってくるから、イッセーを鍛えているそうだ。
自分の下僕が弱いのは許せないのだとか。
やっぱこの人、美人なのにおっかない。
いや、もちろんイッセーの為でもあるんだろうが。
「ええ、貴方なら効率的な鍛え方とか知ってるかと思って」
「頼む、カズキ！　俺はどうしても強くならないといけないんだ！」
何やらイッセーは真剣だ。

だが、腕をプルプルさせながらカッコいいセリフを言うな。
なんか笑えてくる。
「え、なんか目標があるの？」
まぁ最近はランニングやら筋トレしかやってないけど、理由によっては……。
「ハーレム王に、俺はなるっ!!」
ふぁっきん。
「くたばれリア充、首をへし折るぞ」
足で腕を払って、そのままランニングを再開する。
後ろから、イッセーが顔面を地面にぶつけて呻く声が聞こえてくる。
ざまぁ。
アーシアちゃんと同棲までしといてまだ足らんと抜かすのか。

小猫ちゃんに預かってもらったモグラさんを引き取りに、オカ研に向かっている。
……俺は正直、朱乃先輩は少し苦手だ。
というか怖い。
簀巻きになってる俺への視線が怖かったので、それとなくイッセーに聞いてみた。

なんと彼女、Ｓなんだそうです。
頭にドの付く筋金入りの。
あぁ、わかってたよ。
聞こえない振りしてたけど、簀巻きにされてる時も
「カズキ君って昨日の戦いを見る限り、絶対にＳ……そういう人があんな風になってるのってなんか……いいですわぁ」
とか聞こえてきてたもん。
聞き間違いじゃなかったよ、クソが。
普段はお淑やかな完璧美人なのに……。
バラキエルさん、どんな教育したんだ。
オカ研の先輩は、なんで残念美人しかいないのか。
言ったら殺されそうだから言えないけど。
小猫ちゃんはウチのモグラさんがお気に入りらしく、よくお菓子をあげてくれる。
前に膝に乗せて、アーシアちゃんと一緒にモグラさんと遊んでくれてたし。
あの光景を見る度に心が癒される。
年上組で荒れる心を、年下組で癒す。（アーシアちゃんは同い年だけど）
なるほど、世の中は良く出来ている。

そんな事を考えながら部室のドアを開けると、そこには見知らぬ男性が。
「ん？　何このホスト崩れのヤンキー？」
咄嗟に思ってる事を口にしてしまった。
よく見ると、その男の側には沢山の女性が控えていて、奥では何故かイッセーが倒れている。
てか人口密度高いな。
「貴様！　ライザー様に無礼だろうっ!!」
「いや、無礼って……誰なのこの人？」
頭に布を巻いた、鎧を着てる女の子に怒られた。
偉い人なの？　ただのちょいワル兄ちゃんにしか見えない。
「この方はフェニックス家のーーー」
「あぁ、あの焼き鳥屋か」
フェニックスってあれだろ？
有名な焼き鳥屋のチェーン店。
安くて味もそれなりだから、俺もよくお世話になってる。
そこの経営者の家族か何か？
あれ、何でオカ研の皆が噴き出してるの？

「もう許さんっ！」

怒りが収まらなかったらしく、先程とは別の女の子が木の棒を振り回しながら飛びかかってきた。

取り敢えず、棒を掴んで改造パワーにより強引に奪って、怪我をしない様に拘束。

周りを見ると、他の女の子たちまで身構えている。

え、そんなに怒らせちゃったの？

そんなに凄い重役には見えないんだけど。

顔にスッゲェキレてますって出てるし。

キレやすい若者、やっぱヤンキーじゃん。

「そこまでです、これ以上は許しません」

もう土下座でもしようかと思ったら、銀髪メイドさんがみんなを止めてくれた。

どうやらここで一番偉いのは、あのメイドさんの様だ。

「人間の癖に赤龍帝よりはマシな動きをするじゃないか。リアス、なんならこいつも数に入れて構わないぞ？　駒の数も質も、いささか差があるしな」

なんの話？

赤龍帝って何だっけ？

「あら、この子はただの人間じゃないわよ？　後悔しても知らないから。」

ねぇ、なんの話なの？
「ではその様に致しましょう。１０日の猶予期間の後、【レーティングゲーム】にて決着を付けることにします」
レーティングゲームってなにさ？
「おい人間、お前もせいぜい楽しませてくれよ？」
何をどうして楽しませればいいんだよ。
モグラさんと一緒に芸でもすればいいの？
言いたい事だけ言ったら、ヤンキーは床が光ると同時にどっか行っちゃうし。
オカ研の人達はイッセーの治療して説明してくれないし。
銀髪メイドさんも、リアス先輩と何かを話した後、こっちに向かって微笑むと軽く頭を下げて消えてしまった。
今気付いたけど、ヤンキーもメイドさんも悪魔だったのか。
いや、今はそんな事どうでもいい。
モグラさん、こっちきてちょっと説明して。

……つまり、あのヤンキーはリアス先輩の婚約者で、銀髪メイドさんは義理のお姉さ

ん。

リアス先輩はあいつと結婚したくないから、今度ゲームで決着つけて婚約を白紙に戻そうとしてる。

で、レーティングゲームってのが、大概殴り合い。

相手との戦力差が凄いから、俺にも特別に先輩側での参加権が与えられた、と……。

「俺、関係なくない？」

戦闘とか興味ないんですけど。

布団でぬくぬくするのが至上の喜びな、一般人なんですけど。

「私、絶対にあんな男と結婚したくないのよ。何でもするから、お願い！」

リアス先輩が顔の前で手を合わせながら頭を下げてくる。

何でも、の部分に男としてつい反応してしまうのはしょうがないと思うの。

「先輩、私モグさんにお菓子あげたり、預かったりしてあげましたよね……？」

いやそれは小猫ちゃんが好きでやってたんじゃ……。

お世話になったのは事実だけども。

「お願いします、カズキさん！　このままじゃ部長さんが可哀想です……！」

涙目で見つめないでアーシアちゃん、それは卑怯だ。

「御礼はちゃんとしますから……ね？」

腕を胸に挟みながら組みつかないでください。
普通なら大興奮なのに、この後何されるかわからないから、冷や汗が止まりません。
「分かった、分かりましたから離して下さいぃ！」
ニコニコしながら俺を解放してくれる朱乃先輩。
笑顔が怖いのよ年上女性陣。
不本意ではあるが、これで巻き込まれる事は決定らしい。
なんでも、明日から山籠りして特訓するんだとか。
取り敢えず……新しい服やら下着やら買いに行かないと。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
瀬尾カズキ先輩。
人間なのに、堕天使より強い変な人。
でも、私達と一緒にアーシアさんを助けてくれた優しい人。
小さい頃に誘拐されて。
無理矢理身体を弄られて。
助かったのは自分一人。
そんな過去を感じさせない、凄い心の強い先輩です。
腕相撲でも私と張り合える位力も強いです。

流石に私が勝ちましたが。
そんな先輩の神器である『モグラさん』。
本当の名前が思い出せないそうなので、私はモグさんと呼んでいます。
この子にお菓子をあげるのが、私の最近の趣味。
顔の前にお菓子を出すと、小さな手を使ってしっかり掴んで食べ始めます。
ヤバイです。
かわいいです。
普段は先輩の頭に乗ったり、ポケットに潜り込んだりしてますが、アーシアさんが呼ぶとスグに肩や膝に来てくれます。
私にはまだ来てくれません。
ズルいです。
羨ましいです。
なので、仲良くなる為に今日も先輩からモグさんを預かって、一緒に部室で遊びます。
そう思っていたのに、空気を読まずに部室に来客。
部長の婚約者と名乗る、ライザー・フェニックス。
グレイフィア様が紹介してくれたけど、何だかチャラチャラしてて印象が悪い。
部長も冷たくあしらっていた。

婚約を破談にするために、レーティングゲームで決着を付けることになった。
私も、部長がこんな人と一緒になるのは嫌だ。
ライザーが自分の下僕を部室に呼び寄せる。
全員女性だった。
予想はしてたけど、やっぱり最低だ。
イッセー先輩がそれを見て、羨ましそうに泣いていた。
こっちも最低だった。恥ずかしい。
イッセー先輩がライザーを馬鹿にしながら突っかかっていったが、棒を持った下僕悪魔に瞬殺されてしまった。
先輩の神器は強化に時間が掛かるから、今はまだ弱くても仕方ない。
アーシア先輩が駆け寄り、治療してあげている。
空気がピリピリし始めた所に、更に来客。
「ん？　何このホスト崩れのヤンキー？」
カズキ先輩だった。
入ってきていきなり暴言を吐いた先輩に、下僕悪魔の一人が怒りをぶつける。
「貴様！　ライザー様に無礼だろうっ!!」
「いや、無礼って……誰なのこの人？」

「この方はフェニックス家のーーー」
「あぁ、あの焼き鳥屋か」
あの名家であるフェニックス家を、焼き鳥屋呼ばわり。
みんなが同時に噴き出してしまったのはしょうがないと思う。
「もう許さんっ！」
先程イッセー先輩を倒した悪魔が、棒を振り回しながらカズキ先輩に飛びかかったが、簡単に棒を奪われた上に、押さえつけられて拘束されてしまう。
怪我をさせないように抑え込んだのかな？
やっぱり先輩は強いんだと再確認した。
そのまま乱闘かと思ったけど、グレイフィア様が制止してくれたので、その場は何とか収まった。
その後の話の流れで、カズキ先輩も一緒に戦うことになった。
最初は渋っていたが、私やアーシア先輩の説得。
そして朱乃先輩のお願いで了解を得た。
何だか私達と朱乃先輩で反応に差があった気がするが、此方はお願いしている立場なので何も言わない。
何も思わない訳ではないが。

とにかく、明日から十日間。
山籠りして特訓する事になりました。
部長の為にも、全力で取り組みます！

……モグさんとも、もう少し仲良くなりたいな。

9話

なんだかんだで参加する事になってしまった
『リアス先輩と愉快な下僕たちのドキ☆ドキ♪山籠り』
モグラさんも、俺の荷物に自分用のお菓子を入れるくらいには楽しんでいる。
内容が特訓じゃなければもっと嬉しかった。
登山を手早く済ませ、リアス先輩の家の別荘に到着。
動きやすい服に着替えて、いざ特訓である。
イッセーや木場が出てくるのが遅い。
女性陣はともかく男なら早く仕度しろ。
おい、女性陣の方が先にやって来たぞ。
木場も一緒に出てきた。
何故か皆に笑われた。
「最初に渋ってたから心配だったけど、何だか遠足ではしゃぐ子供みたいよ？　可愛い所あるじゃない」
リアス先輩にそんな事を言われてしまった。

待ってくれ、違う。
別に、町から出るのが久々だからってワクワクなんてしていない。
初めて友人と泊まりがけで外出だからって、テンションが高い訳じゃないんだ。
いくら説明しても聞いてもらえず、生暖かい目を向けられるだけ。
モグラさんまで溜息を吐いた後に、アーシアちゃんの方に行ってしまった。
う、裏切られた!?

リアス先輩のお願いで、初日はイッセーの特訓の補助をやる事になった。
モグラさんは危ないので、今は俺の中で休んで貰っている。
素のイッセーがまだ弱いことは知っているし、取り敢えずは観察だな。
最初は、木場と木刀を使っての剣術指南。
流石《騎士》の駒を持つだけあって、剣撃が鋭く正確だ。
イッセーの振り回すだけの剣では掠りもしない上、木場の一撃でイッセーは木刀を落としてしまった。
まぁ素人なんだから当たり前だよね。
その後も何試合かした後に、木場に声をかけられた。

イッセーへの見本として、木場と模擬戦をする事に。
木場は木刀だけど、俺は素手。
いや、剣とか使った事ないし。
で、試合が始まるともう必死である。
さっきまでより速い、べらぼうに速いのだ。
避けるのに精一杯で、こっちから攻撃なんて出来なかった。
セットしていたタイマーが鳴って試合終了。
もうこいつと特訓すんの嫌だ。
怖いよ、途中でなんか笑ってたし。
ポカンとするイッセーを連れて、次の場所に避難した。

次は朱乃先輩の所で魔術の訓練。
ここでは俺は、イッセーが頑張るのをただ見てるだけ。
魔力なんて人間の俺がどうこう出来る訳がない。
魔力を集中する練習らしいが、成果は芳しくない様だ。
アーシアちゃんはこちらの才能がある様で、緑色の球を掌に浮かばせている。

あれが魔力なんだ。
おぉ、イッセーの手にも光の玉が！
……凄い小さいけど。
朱乃先輩のアドバイスを聞いて何か思いついたらしく、相談の結果夕飯に使うジャガイモやニンジンなんかの皮を、魔力を使って剥くことになったらしい。
なんの練習か先輩に聞いても
「うふふ、内緒ですわ。イッセー君らしい技といえばらしいのですけど」
とはぐらかされた。
イッセーが全部剥くまで暇なので、他の材料を使って夕飯のカレーの下拵えを済ませておく。
皆は特訓で疲れるだろうし、作っておいても構わないだろう。
……だからはしゃいでなんかいない。

次は小猫ちゃんとの格闘訓練。
イッセーは喧嘩もした事がないそうだ。
先ずは美猴さんに教わった動作や型を、一つ一つ丁寧に教えていく。
人に教えるのってなんか新鮮で、少し楽しかった。

基本的な事を教えたら、後はひたすらに小猫ちゃんとの組み手である。
イッセーが小猫ちゃんに突撃する度に、何度も吹き飛ばされていた。
怪我しても治療してくれるアーシアちゃんがいるのだから、とにかく今は数をこなして訓練あるのみである。
小猫ちゃんに頼まれて組み手もしたが、この子もやっぱり強いね。
前に腕相撲をした事があるから力が強いのは知ってたけど、動きも凄い。
なんか速いというより、すばしっこい感じだった。
ひたすらに攻撃を受け流したりして、お互いに怪我もしないで済んだ。
俺がまともに食らったら、腕とかもげちゃいそうだ。
おっかない。

本日最後は、リアス先輩と一緒にやる筋トレ。
俺はいつも通り、モグラさんを手に装着してから始める。
イッセーも真似して神器を出そうとしていたが、多分死ぬ程キツイから止めておいた。
背中に岩を背負って、山道をひたすら登り下り。
イッセーの岩にはリアス先輩が座り、その分俺の岩は一回りでかい。

シンプルだが、結構効くなこれ。
イッセーの脚がガクガクと震えだした所で休憩……はせずに腕立て伏せ開始。
背中は依然、先程と同じ状況。
イッセーは気合いで乗り切った。
悪魔の平均がどんなもんなのかは知らないが、こんだけ根性があれば大丈夫だろ。

イッセーの食欲が凄い。
性欲も凄いけど、今は食欲が凄い。
あれだけ身体を虐めたのだから、当然といえば当然だ。
俺が作っておいた大量のカレーを食べきってしまった。
明日の朝はカレーの残りにしようと思っていたから何か用意しないと。
ちなみにモグラさんは、小猫ちゃんにジャガイモやニンジンのスティックを食べさせて貰っている。
何でも、呼んだら来てくれるアーシアちゃんが羨ましいらしく、もっと仲良くなりたいそうだ。
小猫ちゃんの笑顔が微笑ましくて、凄い癒される。
「デザートにシャーベット作っといたんですけど、食べれます？」

「あら、頂こうかしら」
「ちなみに、これはアーシアちゃんが凍らせてくれたんですのよ？」
そう、どうせ練習するならと朱乃先輩にお願いして、果物を凍らせて貰っていたのだ。
手間も省けて一石二鳥。
アーシアちゃんが喜んで一石三鳥である。
「えへへ、どうですかイッセーさん！　美味しいですか？」
「あぁ、美味いぞアーシア！　最高だ!!」
アーシアちゃんの笑顔が眩しい。
本当にイッセーの事が好きなんだな。
もしアーシアちゃんの事を泣かしたら、こいつは海に沈めよう。
食休みした後、今日の反省会。
イッセーは自分の非力を嘆いていたが、そんなの当たり前だ。
単純に他のみんなとは年季が違う。
そんなにすぐに追いつかれたらムカつくわ。
女性陣はお風呂らしく、イッセーが露骨に反応して、リアス先輩にからかわれて遊ばれていた。
俺と木場がそれを笑っていると、小猫ちゃんが服の袖をチョイと摘んできた。

モグラさんと一緒に入りたいらしい。
「桶に入れて、溺れないようにだけ気を付けてあげてね？」
「はい、ありがとうございます」
小猫ちゃんは嬉しそうに先輩たちの後についてく。
「イッセーくん、僕たちと裸の付き合いをしよう。背中、流すよ」
「すまんイッセー。小猫ちゃんのあの眼は裏切れない、大人しく風呂に入るだけにしろ」
俺と木場が、それぞれ肩に手を置いてイッセーを諭す。
「ちっくしょおおおおっ!!」
イッセーの哀しい遠吠えが辺りに響き渡った。

夜になると、みんなはまた行ってしまった。
悪魔は夜の方が活発らしく、まだ訓練を続けるそうだ。
俺は人間なので大人しく寝てもいいのだが、折角なので明日の朝飯用に魚でも調達してこよう。
モグラさんにお願いして土からミミズを捕まえて貰い、それを餌に川で釣りを始める。

1人一匹として、7匹か。
夜はまだまだ長いのだ。
のんびりと楽しむとしよう。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
夜の訓練の最後は、部長たちみんなでランニング。
俺たち悪魔は夜に活動的になるから夜にも訓練を行うが、カズキは人間だから先に休んでいる。
そう、あいつって人間なんだよなぁ。
めちゃくちゃ強いからつい忘れそうになる。
「みんな、今日はカズキくんと一緒に訓練してみてどうだった？」
部長がみんなに話を振ってきた。
「凄すぎて、どう凄いのか分かんないくらい凄かったです」
俺の言葉を聞いて、部長は苦笑している。
し、しょうがないじゃないか。
ホントに分からなかったんだよぅ……。
「祐斗の感想は？」
「剣は使えないそうですが、正直想像以上でしたね。死角に回ったり手数を増やしたり

しても、全部躱されるかいなされて、無効化されました。当たらなすぎて最後は笑えてきちゃいましたよ」

そうだったのか。

言われてみれば、二人とも速すぎて完璧には目で追えなかったけど、動き回る木場に対してカズキはほとんど動かないで対処してたもんな。

俺からすれば、二人とも凄すぎて開いた口が塞がらなかったよ。

「小猫はどう？」

「イッセー先輩に、身体の動かし方とか教えるのが凄い上手かったです。イッセー先輩と一緒に、私も型みたいなのを教えて貰っちゃいました」

カズキは、身体を動かす時の行動にはちゃんと意味があるって言ってた。

速く動きたいなら、踏み込むと同時に爪先を次に移動したい向きに向けておくと、次の動作にスムーズに移せるとか。

パンチを強くしたいなら、脚から腰、肩から腕へと全身を絞り出すように捻って拳に力を伝えるとか。

とにかく分かりやすいのだ。

バカな俺でも理解できた。

「組み手もお願いしたらやってくれましたけど、攻撃してもコロコロ転がされるだけで

相手になりませんでした」
小猫ちゃんとの組み手の時は、攻撃されたら受け流してコロン。
服を掴んでも、いつの間にか解かれて仰向けにコロン。
こんな感じで一切攻撃しようとしてなかった。
カズキってアーシアと小猫ちゃんには甘いからな。
怪我させたくなかったんだろう。
その分おれには厳しいけども。
型とか何度も間違えると、蹴りが飛んできたし。
あれは痛かった。
「朱乃は？」
「魔力に関しては全く。まぁ彼は人間なんですから当たり前ですけど。魔術師としての才能はないようですわね」
朱乃先輩の訓練だけは参加しなかったもんな。
そりゃわかりようが無い。
俺の秘密の必殺技が完成したらカズキにも見せてやろう。
あいつも男だ、嬉しくない筈はない。
カズキって朱乃さんにだけなんか態度が違うよな。

苦手なのか、それとも意識してるから照れてるのかわからないけど。
朱乃さんは朱乃さんで、それを愉しんで遊んでるし。
この件についてはあまり踏み込むと、俺が酷い目に遭いそうだからスルーって決めた。
「そう……もう無理に悪魔にしようとは思わないけど、やっぱり惜しいわね、彼」
確かになぁ。
ただでさえとんでもないカズキが、悪魔になったらもっと歯止めが効かなくなるのだろうか。
なんかおっかないな、それ。
カズキ自身、もしかしたらそれが怖いのかも知れないな。

ランニングを終えて、別荘に到着。
中に入ると、カズキがなぜかキッチンで魚を捌いていた。
「お、おかえり。さっそくで悪いんだけど、小猫ちゃんにお願いがあるんだ」
カズキは捌き終わった魚を冷蔵庫に入れ、手を洗うと自分の神器であるモグさんを小猫ちゃんに渡してくる。

「今からまたお風呂いくでしょ？モグラさんも連れてってあげて。土に潜って貰ったから汚れちゃって」

ついでに今日は一緒に寝てあげて？

カズキはそう言うと、あくびをしながら部屋に戻っていった。

「彼、もしかして魚を捕りに行ってたの？……なんだか、普通に楽しんでるみたいね」

部長が笑うと、みんなに笑顔が溢れ出した。

「彼、ホントに楽しみにしてたみたいですね？」

「お兄……年上みたいだと思っていましたけど、やっぱり普通の男の子なんですよね」

「はしゃいでて、ちょっとかわいいです」

「嫌よ嫌よも好きの内、やっぱり彼は……うふふふ♪」

……最後のは聞かなかったことにしようかなっ！

そうだ、あいつは化け物でも何でもない。

俺たちの仲間で、友達だ。

「さぁ、明日もキツイわよ。お風呂に入ったらすぐに部屋に戻る事、いいわね？」

部長が仕切ってその場は解散になった。

さて、俺たちも風呂に……はっ！

今ならカズキはいない。

つまり覗きが出来る!!

「あ、そうだイッセーくん。小猫ちゃんが、『覗いたら恨みます』って言ってたよ？」

ぐあっ！既に予防線が貼られていた!?

仕方ないので、素直に風呂に入って今日は寝よう。

流石に疲れてしまった。

明日も頑張って、ゲーム当日にはあの焼き鳥野郎に目にもの見せてやる!!

10話

山籠り合宿が始まって一週間。
リアス先輩と話し合った結果、俺はイッセーとの筋トレ担当になった。
最初は途中で潰れていたが、今では何とかこなしきっている。
俺はイッセーと一緒に筋トレしかしてないのでよくわからないが、みんなも順調に強くなっているそうだ。
しかし、日が経つにつれイッセーの元気が無くなってきている気がする。
他の訓練も必死にこなして頑張っているらしいし、明るく振る舞ってはいるのだが、何かを悩んでいるみたいだ。
夜中に、イッセーが部屋を出て行った。
少し話でも聞いてあげようかと探してみると、リビングでリアス先輩と一緒に、ゲームについて話し合っている。
どうやらあのヤンキー、かなりの強敵らしい。
火を使うって聞いたから、朱乃先輩に頼んで水ぶっかければ問題ないくらいに考えてた。

不死身ってマジか。
精神を潰すって……どうすんの？
あいつ女好きみたいだし、ゴリマッチョがみっちりいる空間に放り込めばいいかな？
……そんなん俺でも無理だわ。
しかし、イッセーは格好いいな。
自分を『グレモリー』ではなく、『リアス』として見てくれる人と一緒になりたい。
リアス先輩がそう言うと、しっかりと目を見ながら笑顔で答える。
「俺は部長の事、部長として好きですよ」
「難しい事はわからないですけど、俺はいつもの部長が一番ですっ！」
なかなか言えるもんじゃないよな、こんな台詞。
おぉ、リアス先輩の顔が真っ赤だ。
誤魔化してるけど、今更無理だろ。
というか、これは見ちゃいけないもんだよね。
帰って寝よう。
「あら、もう行ってしまいますの？」
うぉう!?
さっきまで誰も居なかったはずなのに、いつの間にか朱乃先輩が後ろでニコニコして

いる。
「朱乃先輩も覗いてたんですか？」
「ついさっきですけどね。カズキくんが廊下にいたので、何をしてるのかと思ったのですが……」
いい趣味してますね？
とでも言いたげな視線を感じる。
貴女も同類でしょうに。
「もう退散しますよ、邪魔しちゃ悪いですし」
まだ寝たりないから、少しボーッとしてるし。
「それにしても部長が羨ましいですわ。殿方に守ると宣言されるのって素敵だと思いません？」
「大丈夫ですよ、朱乃先輩は俺が守りますから」
バラキエルさんとの約束だしねぇ。
お休みなさいと言ってから部屋に戻った。
さっさと寝直そう。

なんか朱乃先輩の機嫌がいい。

ご飯を俺だけ大盛りにしてくれたり、肩を揉んでくれたり。
あれ？俺ってばまたなんか変なことした？

朝の訓練の前に、イッセーと木場が模擬戦闘を行なった。
イッセーは戦闘前に、２分の強化時間を貰って、神器《赤龍帝の籠手》（ブーステッド・ギア）の倍加能力を発動させてからのスタートだ。
結果は、イッセーが魔力弾？で、山を吹っ飛ばして終了。
イッセーの攻撃が当たりこそしなかったが、木場の攻撃も全て籠手で受け切っていた。
２分の強化でこれだけの事が出来るのだから、イッセーの神器はチートすぎる。
リアス先輩がイッセーを鼓舞している。
どうやら悩みの原因は、自分の力が信じられない事だったみたいだ。
正直、贅沢な悩みだと思う。
お前が悩むなら俺はどうなるのかと。
とにかく、これでイッセーも更にやる気を出してくれるだろう。
そんなこんなで合宿も終わり、今日はレーティングゲーム当日。

ゲームは異空間に作られた空間で行うそうだ。
よくわからないが、いくら壊しても問題ないって事だよね？
俺は人間だから、グレイフィアさんがみんなとは別でその空間に連れて行ってくれるそうだ。
その時に、リアス先輩のお兄さんに会ったので挨拶してきた。
サーゼクスさんと言うらしい。
リアス先輩と同じ紅い髪の青年。
腹立つくらいのイケメン。
しかも美人の奥さん持ち。
なるほど、敵だな。
喧嘩なんて売れないけど。
「イケメンな上に美人な奥さんがいるとか勝ち組ですね、羨ましいです」
握手の後に言うと、お兄さんはポカンとした後、何故か豪快に笑われてしまった。
また変な事言ったかな？
最近多いみたいだし、気を付けよう。
その後は無事にみんなと合流して、試合開始を待っている。
イヤホンみたいな通信機は貰ったし、それぞれの『本陣』の説明も受けて確認した。

これで準備は万全だ。
キンコンカンコーン。
チャイムが鳴り響く。
ゲーム開始の合図だ。
さて、始めさせて貰おう。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
俺、ライザー・フェニックスは自他共に認める程に女が好きだ。
今まで沢山の女を愛してきたし、今だってそうだ。
これからもそれは、ずっと変わらないだろう。
これから始めるレーティングゲームに勝利すれば、魔王を輩出した名門グレモリー家の娘である、リアス・グレモリーを嫁に迎える事が出来る。
名門の血統だけでなく、あの身体を好きにする事が出来るのだ。
男なら、今から堪らなくなると言うものだ。
対戦相手は、まだゲームもした事のない新米悪魔たち。
しかも助っ人は体術を少しばかり齧っているだけのただの人間。
負ける要素がない。
このゲームで警戒するのはリアスの《女王》ただ一人。

赤龍帝の小僧がどの位使い物になっているかは分からんが、大した脅威にはならんだろう。

既に試合開始の合図は終わった。

些か面倒ではあるが、少し遊んでやるとーーー。

「っ!?　ライザー様っ！　敵が一名、本陣内に侵入！」

《僧侶》である美南風（みはえ）が状況をしらせてくる。

ほう、早いな。

《騎士》の小僧が単騎駆けでもしてきたか？

無謀な事だ。

「場所は、ここの真下です！」

何？　何故わざわざ……おい、まさか。

嫌な予感が走った後、それは現実のものになる。

俺たちの本陣の真下から、石柱が何本も突き出てきた。

それぞれが飛んで逃げたが、その攻撃で《兵士》であるニィとリィ、シュリヤーに《僧侶》の美南風が石柱に打ち付けられ、天井に衝突すると、そのまま光に包まれて消えていく。

『ライザー・フェニックスさまの《兵士》三名、《僧侶》一名、リタイア』

くそ、一瞬で四人も削られた!?
石柱が砕けて消えると、最下層には飛び入り参加したあの人間の姿が。
試合開始後すぐに襲撃!?
たかが人間の分際で、この俺様をコケにする気かっ!!
「あいつを殺せぇぇ!!」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「さて、まずはライザーの《兵士》をどうにかしないと。全員が『プロモーション』したら厄介だわ」
ゲーム開始の合図はあったが、すぐには動き出したりはしない。
まずは作戦を考えないと。
イッセーの質問に答えながら祐斗に地図を用意してもらい、それぞれの本陣に印を付ける。
うん……やっぱり重要なのはこの体育館よね。
それぞれの陣地に隣接してるから、獲れれば牽制になる。
小猫と祐斗には森にトラップを仕掛けてきて貰って、森の周辺に霧と幻術をかけてもらいましょうか。
イッセーやアーシアには待機して貰って、カズキくんには……ってあら?

「ねぇ、カズキくんはどこに行ったの？」
朱乃が出て行く前に聞いてみたけど、三人とも知らないみたい。
トイレかしら？
もう、単独行動は危険なのに……
『ライザー・フェニックスさまの《兵士》三名、《僧侶》一名、リタイア』
え!?
もうリタイア!?
誰か、敵と鉢合わせてしまったの？
しかも倒した数が凄い、一気に四人も減ってくれた！
驚いていると、祐斗と小猫が走って帰ってきた。
「部長、新校舎の方から凄い破壊音がっ！」
「旧校舎の裏手には、人が通れそうな穴が空いてました。もしかしたら……」
……カズキくんなの？
一人で奇襲をかけに行って、一気に四人もの敵を倒してしまったというの？
……本当にトンデモないわね、彼。
「みんな！　カズキくんが先陣を切ってくれた。きっと逃げる算段もあっての事でしょうから、この期に一気に攻めるわよ！」

きっと相手も動揺してるはず。
このチャンス、絶対にモノにしてみせる！

……まぁ、勝手に動いたオシオキは、ちゃんとするけどね？

11話

フハハハハ、奇襲成功!!
なるべく痛い思いをせず、相手の戦力をガッツリ削るにはこれが一番だ。
前回はムカついてたから真正面から戦ったけど、今回はそんな事はしない。
嫌らしく行かせてもらおう。
さっきのアナウンスによると、四人倒せた様だ。
ライザーが炎を纏いながらなにか叫ぶと、剣を担いだ奴が突っ込んできた。
この間の頭に布を巻いた人とは違うけど、装備的に《騎士》って奴かな。
結構なスピードが出ている。
相手にせずに、侵入した時の掘った穴に飛び込んでそのまま逃げる。
追ってきたらラッキーだけど……。
「バカめ、いくら逃げても無駄だ!!」
どう考えても、追ってきてる時点でお前が馬鹿なんだよなぁ。
走りながら、拳を何ヶ所か壁に叩きつける。
辺りが振動を始め、敵の前後の通路が崩して閉じ込める。

もう一度力を使って、トドメに相手の上部を崩壊させてあげよう。
「な、くそ！　貴様、ちゃんと向き合って戦わないか!!」
「やだよ、怪我したら痛いじゃん」
「貴様っ……きさまぁぁぁ!!」
俺の返事が気に入らなかったらしく、凄い形相で睨んだ後にそのまま土砂に埋もれてしまった。
君らと違って脆いんだから仕方ないじゃん。
傷はすぐに塞がっても、痛いものは痛いのだ。
『ライザー・フェニックスさまの《騎士》一名、リタイア』
よし、これで5人目だ。
えっと、全部で16人だから……うへ、まだ11人もいるのか。
さて、この穴を完璧に塞いだら、そろそろリアス先輩の所に戻るかね。

正座させられてます。
怖いです、美人の笑顔がとても怖いです。
「ありがとう、カズキくん。君が一気に5人も倒してくれたおかげで、だいぶ楽になった

わ」

お礼を言いながら正座を強要って何？

言葉と行動が合ってないと思うの。

モグラさんは、先輩の後ろで困ってるアーシアちゃんの所に逃げた。

裏切り者ぉ……。

「でもね？　私、敵陣特攻してなんて言ったかしら？」

「言ってないです……」

「今回は良かったけど、貴方はあくまで人間なのだから無理は絶対にしないで？　無線まで忘れていくし……もうやっちゃダメ、解った？」

「はい、反省してます……」

どうやら許してもらえたらしい。

受け取った無線を耳に嵌めて立ち上がる。

リアス先輩も俺の事を心配して言ってくれているのだし、素直に反省――わぷ。

「私のせいで巻き込まれてるのに、うるさく言ってごめんなさいね？　貴方の頑張り、絶対に無駄にしないわ」

うん……あれ？

何この柔らかいの。

頭も撫でられて……気持ちいい、じゃなくてっ!!
「うぉぁっ!?」
「あら、もういいの？　気持ち良さそうだったのに」
クスクス笑われている。
くそ、なんだこれ。
抱きしめられて、頭撫でられて。
こういうのはイッセーのキャラでしょう。
「違っ……うぅ、もう大丈夫ですからイジメないでください……」
「そう？　なら体育館に行って、朱乃の助けになってあげて。どうにも相手の《女王》に苦戦してるみたい」
「全力で頑張らせて頂きます、はい」
素早く返事をして、アーシアちゃんに預けてたモグラさんを回収してから急いで部屋を出る。
モグラさんを手に装着して、体育館に走って向かった。
「ちくしょう！　ホントに気持ちよかったのがまた悔しいぞ、ちくしょう！」
『無線、電源入ってるわよ？』
もういっそ殺して下さい。

俺が体育館に向けて走っている間に、相手の《兵士》を五名、《戦車》を一名。
誰かが仕留めたようだ。
これで相手は後5人だが、こちらも小猫ちゃんがやられてしまった。
あんまり深い傷じゃなければいいんだけど。
とにかくこれで6対5だ。
このまま朱乃先輩が戦っている《女王》を倒せば、此方がかなり有利になる筈だ。

走り続けていると、テニスコートの方から雷みたいな放電音が聞こえてくる。
そっちに移動したのか。
駆けつけて見ると、朱乃先輩が敵さんを地面に叩きつけていた。
どちらもボロボロ（服的な意味で）だが、朱乃先輩の方が押してるように見える。
これなら……あれ、なんか変だ。
あっちの紫の人がなんか飲んだら、急に元気になった？
うわっ、朱乃先輩が急に押され始めてる！

マズイ、助けなきゃっ!!
地面を叩いて、足場が盛り上がるのを反動にして2人の間に躍り出る。
朱乃先輩に迫っていた爆発は、身体をねじ込んで掌で防御!
モグラさんにはキツイが、頑張って貰うしかない!
「カズキくん!?」
「うぐぁ、超痛い……」
朱乃先輩が地面に降りて駆け寄ってくれる。
なんとか耐えたけど、モグラさんがマズイ。
かなり消耗してあまり持ちそうにないな。
「ちっ、邪魔が……あら?　あなた、いきなり特攻してきた人間のボウヤじゃないの。今度は女王を助ける為にやって来たの?　たいした忠犬ねぇ」
どちらかというと、犬じゃなくてモグラです。
「約束しましたから、この人を守るって」
バラキエルさんと。
さて、どうしよう。
ぶっちゃけ手の打ちようがない。
基本俺は近づいてきてくれない敵とは相性が悪い。

おまけにモグラさんはグロッキーで、あと何回か能力を発動したら消えそうだ。
「朱乃先輩、何か打開策とかあったりします？」
「……え？　あぁはい、ちょっと難しいですわね。殆ど魔力を使ってしまいましたし、体力もそれほど残っていません」
少し顔が赤くなっているところを見ると、どうにも調子が悪そうだ。
……仕方ない。
「朱乃先輩は行って下さい。この人は、俺が相手しますから」
「でも一人では……」
「モグラさんがそろそろ限界なんです。俺単体だと役立たずですからね、あの人だけでも無力化しないと」
俺が立ち上がると、紫の人が、手に魔力を溜めて待ち構えている。
モグラさん、少し我慢してね？
「行くぞ、紫おばさん！」
「おばっ!?　……うふふ、ライザー様に処理して貰おうかと思ったけど、やっぱり私がやってあげるわっ!!」
地面を何度か叩いて、石柱を紫の人に伸ばしていく。
それは魔力の爆発で破壊されるけど、別に問題ない。

わざわざ挑発した甲斐があった。
随分派手にやってくれたので、土煙のお陰で簡単に接近できる。
「あら、ついやり過ぎちゃったわ。土煙であのガキが……!?」
「セクハラしてゴメンなさい」
一応謝りながら、紫の人の正面から抱きつく。
「貴様、何を!?」
あんまやりたくないけど、行くぞオラァ!
両拳の宝玉に《凹》と浮かび、それを自分と相手に同時に打ち込む。
すると、地面がヒビ割れ、付近の土や石が俺達に向かって吸い付いてくる。
「く、ライザー様以外の男が私に触れるな!」
「俺も香水臭いの我慢してるんで、許して下さい」
すごい顔で睨まれた。
説得失敗。
なんて言ってる内に、既に紫の人ごとボール状になって身動きが取れなくなる。
準備は整った。
「こんな事をしても意味なんて!」
「ありますよ、こんだけ近けりゃさすがに魔法で無力化なんて出来ないでしょう?」

朱乃先輩は既に退避済み。
行くぞ！
小さい頃、イジメてくるアザゼルさんを泣かせたくて開発した、禁じられし技!!

『自爆』

はい、医務室行きでした。
同じ部屋には小猫ちゃんと木場。
そして朱乃先輩。
……守りきれなかったか。
目を覚ました俺を見て、三人は安堵してくれた。
モグラさんもスピスピ寝息を立てている。
よかった、モグラさんも平気そうだ。
あれ、アザゼルさんにもダメージ与えた事がある数少ない技なんだけど、危険だからってバラキエルさんとシェムハザさんに二度と使うなって禁止されたものなんです。

アザゼルさんも一緒に怒られてたけど。
俺のちんまい魔力を、引き寄せた石とかに纏わせて、モグラさんが爆発の力に変えて連鎖爆撃する代物だ。
身体が文字通りグシャグシャになるけど、今回は安全装置があるっていうから、何とかなると思って使ってしまった。
いや、そんな事はどうでもいい。
試合は？
……そっか。
こっちの、負けかぁ。

向こうの駒をイッセーと木場、朱乃先輩で削り取って、残りは《王》と《僧侶》だけ。
でも、油断した瞬間に朱乃先輩と木場がライザーの炎に焼かれて退場。
その後はイッセーが頑張ったけどジリ貧に。
リアス先輩が降参して終了、と。
イッセーは、治療したけど目を覚まさないので、アーシアちゃんが付き添って自宅で療養させる予定だそうだ。

「これから、どうなるんですかね？　」
「そうですわね……多分、数日後には婚約パーティーが催されるかと。私達は下僕として参加しないといけません」
人間であるカズキくんは、多分……。
朱乃先輩が途中で言葉を切るが、まぁわかってた。
悪魔のお偉いさんの祝いの場に、人間は呼べんよね。
しかし……リアス先輩に合わせる顔がないなぁ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
瀬尾カズキくん。
私が彼をどう思っているのか、正直よくわかりません。
堕天使を打ちのめしているのを見て、ちょっと心が惹かれるものはありました。
S的な意味で。
彼はイッセーくんや他の男性に比べて、私をそういう視線で余り見てこないので新鮮だ。
ついからかって愉しんでしまう。
S的な意味で。
この間の合宿では『俺が守ります』なんて言われてしまって、不覚にも少しばかりと

きめいてしまったり。
今日のゲームでも、追い詰められた私を身体を張って助けてくれた。
『約束したから』
そう、彼は合宿の時の言葉を律儀に守ってくれたのです。
改造された影響なのか、傷はあり得ない速度で修復されていましたが、痛みは残るはずなのに……。
彼は不利を悟ると、私に引くように言って相手の《女王》を道連れに退場。
彼に対して申し訳ない気持ちもありましたが、心が暖かくなりました。
そしてイッセーくん達と協力して、回復した魔力で敵を一掃。
しかし、魔力を解放した隙を突かれてライザーにやられてしまった。
医務室で目を覚ますと、先にやられてしまった小猫ちゃんとカズキくん、そして祐斗くんがいました。
祐斗くんも一緒にやられてしまった様ですね。
カズキくんは傷が深い様で、まだ眠ったまま。
イッセーくんが頑張ってくれていますが、多分このゲームは私達の負けで終わってしまう。
私達下僕悪魔が不甲斐ないせいで、私たちの主人は……リアスは、望まない結婚を強

いられてしまう。
自分の力の無さが嫌になる。
私は不意に、寝ているカズキくんに目を向けた。
私を庇って、傷付き倒れてしまった彼に、これ以上何かを背負わせるのは間違っているとは思う。
しかし、期待してしまう。
彼なら何とかしてくれるのでは、と。
早く起きて。
貴方と、話がしたい。

１２話

来れました、魔界。
え？　あぁ、冥界って言うの？
その冥界にやってきました。
あの後、グレイフィアさんが自宅に送ってくれて、そのまま眠って起きたらまたグレイフィアさんのお姿が。
なぜか、俺にもパーティーに参加する様に魔王様からご指名が来たらしい。
そんな恐ろしげな人と面識ないからオロオロしてたら、あの時あった先輩のお兄さんなんだとか。
あの優しそうな人、魔王なんですか。
てか、リアス先輩って魔王の妹なの？
それなんてラノベ？
疑問を浮かべてたら、ゲームの時と同じ光が身体を包んでいく。
目を開くとそこは文字通り別世界。
城、いや館かな？

何でもここで魔王様が待ってるそうだ。
つまりここは、魔王の館。
いつの間にラストダンジョンに挑むことになったのか。
俺のレベル幾つよ?
レベル上げを所望したい。
さっきから続く怒涛の展開に、混乱して思考が飛びまくってる。
気付くと俺の目の前には、この間会った紅い髪のイケメン、サーゼクスさんが。
「やぁ、来たね。待っていたよ」
アザゼルさんの所で見た事ある様な、立派な執務机から顔を上げて爽やかに挨拶をしてくる。
「えっと、ご無沙汰していますサーゼクスさん……じゃなくてサーゼクス様」
いかん、魔王様をさん付けとか。
「さん付けで構わないよ。急に申し訳ないね、『アザゼルの秘蔵っ子』と少しばかり話がしてみたくて」
「あれ? アザゼルさんの事知ってるんですか?」
言ってから気付いたけど、そりゃ知ってるよね。
アザゼルさんって、あんなんだけど堕天使のトップだし。

悪魔のトップであるサーゼクスさ……あぁもういいや、サーゼクスさんが知らない訳がない。
てか秘蔵っ子って何？
「彼から色々と聞いているよ、『人間の癖に面白い奴がいる』ってね」
「アザゼルさんの言うことは、半分は戯言なんで気にしないで下さい。シェムハザさんもそう言ってましたし」
何を話した？
碌でもない話に決まっている。
俺もあの人のある事ある事喋ってやろうか。
サーゼクスさんに勧められて、一緒に食事をする事に。
魔王様と食事か。
俺はどこに向かって生きているんだろう。
「先日のゲームは楽しかったよ、結果は残念だったがね」
最初の突撃には笑いが抑えられなかった。
サーゼクスさんは、心底楽しそうにそう言ってワインを傾ける。
そういや見てたんだっけ。
と言うか残念って……サーゼクスさんはリアス先輩を結婚させたかったんでは？

本音は違うのかな。

「所詮俺は人間ですから。先輩は勝たせてあげたかったですけど」

「ふむ……君は本当に悪魔に興味はないのかい？リーアに誘われたんだろう？」

リーアって誰？

もしかしてリアス先輩か？

「悪魔になって何したいってのもないですし……勝手になったらアザゼルさん達にイジメられそうで怖いです」

なんかめっちゃ笑われた。

ちゃんと答えたのに酷い。

「しかしそうか……残念だが、縁がなかったと諦めよう」

なんか一人で納得しておられる。

しかし料理が美味い。

トカゲとか出てきたらどうしようかと思ったけど、冥界の料理って意外とイケる。

「さて、話は変わるが、実は君にお願いしたい事があってね」

あ、悪巧みしてる時のアザゼルさんと同じ眼をしてる。

この眼をする人に関わると、大抵俺に良くない事が起こるのだ。

しかし、ここは冥界の魔王の館。

完璧なアウェー。
俺に断る権利は、無い。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
パーティー当日。
着慣れないタキシードに身を包み、ＴＨＥ日本人な黒髪を、オールバックにセットする。
うむ、我ながら似合わない。
服に着られてる感がハンパないな。
隣できっちり着こなしている木場が、たいへん羨ましい。
リアス先輩とはパーティー前に会って、やたらと謝られた。
こちらも、力になれなくて申し訳ないと伝えておいた。
時間がないらしいのでそのまま別れたが、あまり気にしてないといいな。
木場に励まされながらパーティー会場へ。
モグラさんはさすがに出してるとマズイので、俺の中でお休みして貰う。
映画やドラマの中で観た様な光景が、目の前に広がっている。
まさに豪華絢爛。
圧倒されていると、後ろから小猫ちゃんと朱乃先輩もやって来た。

小猫ちゃんは薄いピンクのパーティードレス、朱乃先輩は大人びた黒い着物。
二人とも似合っている。
とても綺麗だとは思うのだが。
どうしよう、朱乃先輩がどう見ても人妻や未亡人にしか見えない。
顔に出さない様に二人とも褒めておく。
わかりきっている地雷を自分から踏んだりはしない。
今日は特に。
「貴方ですわね？　あのゲームに参加した人間って」
手渡されたドリンクを片手に時間を潰していると、金髪ツインテロールの少女に絡まれた。
後ろにはライザーの《女王》が控えているし、この子も下僕悪魔かな？
「お兄様に勝てないまでも、《女王》であるユーベルーナも含めて6人も倒したと言うからどんなに凄いのかと思いましたのに。」
こんな冴えない方だったとは。
明らかに見下し、呆れながらそう言ってくる。
なるほど、あいつの妹だったのか。
そう言えば最初の襲撃で、ライザーと一緒に燃えてるのがいたな。

「あぁ、最後まで何もしなかったおかげで生き残った《僧侶》ってキミか」
瞬間、空気が凍る。
目の前のツインテロールが揺れ、所々から火が漏れている。
「フ、フフ……負け犬の遠吠えも、ここまで来ると気持ちいいですわね……」
「というか、君たちマトモに倒したの《女王》の人がやった小猫ちゃん一人だけだよね？後は一人も倒せてないよね？」
あ、やばい。
めっちゃ震えてる。
めっちゃプルプルしてる。
取り敢えず、謝っとこう。
「ごめん、言い過ぎた。えっと……と、とにかくそんな泣きそうな顔しないで下さい」
「貴方なんて嫌いですわぁぁぁ！」
そのままライザーの妹は走って行ってしまった。
後ろにいた連中もそれを追い掛けていなくなる。
やってしまった。
「随分と女の子の扱いがお上手ですね？」
年下を泣かせてしまってショックを受けていると、笑いながら声を掛けられた。

嫌味ですか。
おや？　その顔は何処かで……？
「ソーナ会長じゃないですか」
木場の言葉で俺も思い出した。
そうだ、うちの学校の生徒会長さんだ。
え、なに？
会長さんも悪魔だったの？
うちの学校ヤバくね？
「絡まれてるから助けようかと思ったんですが……必要なかったようですね？」
「あんまりイジメないでくださいよ……」
口に手を当てながら笑う会長さん。
ていうか、こっちはもっと不味い。
小猫ちゃんが拗ねてしまった。
「どうせ私は一人だけやられましたよ……」
「い、いやでもホラ。俺も《女王》にやられた様なもんだし、似たような……」
あぁ、そっぽ向かないで！
ごめんなさい！　ホントにごめんなさいっ！

「冥界の名だたる貴族の皆様方！」
急に響き渡る声。
そこには、ライザーとサーゼクスさんが並んで立っていた。
ライザーはそのまま演説を続ける。
「……よって、此方におられる我らが魔王、サーゼクス・ルシファー様からご提案が御座います！」
そしてサーゼクスさんが演説を引き継ぐ。
実にいい笑顔だ。
殴りたい、怖くて出来ないけど。
【私の妹の婚約パーティーの催しとして、ライザー君と、彼の眷属を《女王》含めて約半数を一人で撃破した人間、カズキ君との再戦を見てみたい】
長々と話していたが、要約すると言いたいことはこれである。
サーゼクスさんに何してもいいと言われたし、やる事を伝えたら大笑いされたが許可してくれた。
やるしかない。
「全く、魔王様もお戯れが過ぎるな。今更こんな人間と戦っても何も意味などないのに」
闘技場？　に移動したライザーは、大袈裟な身振りをしながらそんな事を言ってい

る。

俺が一番言いたいです、それ。

「だがちょうどいい、貴様には虚仮にされたままだったからな。存分に恥をかかせてやるさ」

周り中悪魔だらけなのに、俺にかく恥なんてあるのかね。

しかし、恥ねぇ……。

「ライザーさんはご飯食べました？」

「何？」

ライザーはこちらに怪訝そうな視線を向けてくる。

「冥界のご飯って美味しいですよね。でもなんか物足りなくって」

「貴様、何を言って……」

俺は両手を合わせて頭を下げる。

「今から頂きますね、好物の【焼き鳥】」

おー、身体に纏ってた炎が一気に燃え上がった。

悪魔って沸点低い奴ばっかだな。

こんなんで怒ってたら将来禿げるよ？

『では、始めたまえ』

サーゼクスさんの号令があり、試合が始まる。
「貴様から攻撃させてやる、来い」
腕を組みながら、空も飛ばずに仁王立ち。
プライドの塊だな、悪いことじゃないけど。
「じゃ、遠慮なく」
すでにモグラさんは装着済み。
何時ものように拳を地面に何回も叩きつけて、石の柱を相手に向けて大量に伸ばす。
「ふん、所詮はこん……がぁっ!?」
眼前に迫る柱を燃やそうとした瞬間、ライザーの足下から脛にめがけて普段より小さい石柱をぶち当てる。
小さい分凄い勢いで命中し、さすがのライザーも痛みで一瞬動きが止まる。
「もいっちょ」
その脛に伸びた石柱が枝分かれし、今度は足の小指を強打する。
「……っ!?!?」
ふはは、声も出ないか！
だろうな、このコンボは普段無表情なヴァーリさんですらほんのり涙目にした、飛ばないやつ限定の嫌がらせ技だ。

試合前に挑発したおかげで、真正面から向かい合ってきた。
最高のカモだ。
「まだまだ」
相手が悶えているうちに、素早く地面を叩いてから、その反動も使ってダッシュ！
《凹》の能力で、痛みに悶えるライザーの足下に、突然落とし穴が出現する。
「ぐ……ぁっ！こんな物に落ちるはず「ないよな、分かってるよ」ぐがっ！」
ライザーが足の痛みに耐えながら飛ぼうとした時には、俺は既に上を取っている。
拳を背中に叩き込み、無理矢理落とし穴の奥へと押し込める。
「くそっ！　こんな事をした所でダメージな……ど……」
かなり深い所まで落ちたライザーが、怒りながらこちらを見てくるが、俺が持っているものを見て、表情が固まる。
「精神的に潰す……色々考えたけど、お前にはやっぱこれだよな？」
「や、やめっ！　貴様、それでも人間か!?」
「人間だから、何でもするんじゃないか」
狼狽えるライザーに向かって、俺は無慈悲に持っているものを投げつける。
俺とモグラさんの合作
『マッスル☆アニキ～僕の滾る腹直筋～』

『ハッスル☆アニキ～俺の燃える大胸筋～』
『パッション☆アニキ～僕らの希望の上腕二頭筋～』
作るたびに自分の中の何かを削っている気がするが、気になどしていられない。
ライザーに向けてどんどん投げつける。
レーティングゲームの時には使えなかったが、結果オーライだ。
「ぎゃあぁぁあ！　やめろ！　そんなおぞましい物を投げつけるなっ！」
ライザーは狭い穴の中で器用に避けている。
よほど触りたくないのだろう。
けど、甘い。
「おっと、下にも気をつけろよ。一番最初に仕込んでおいた物がお前を狙ってるぞ？」
「っ!?」
穴の底には、岩で出来た表現してはいけない形状のものが敷き詰められ、時折突き出て下から攻撃してくる。
やけに尻を狙ってくるのは気のせいだ。
「くそ、上からも下からも!?　何がしたいんだ貴様は！」
「あん？　嫌がらせ」
「はぁ!?」

下からの攻撃を避けながら器用にこっちを見てくる。
「虚仮にされるのが嫌なんだろう？　これで存分に恥がかけたぞ！　ヤッタネ☆」
あ、切れたなあいつ。
撤退。
「貴様ぁぁぁぁあっ!!」
ライザーの怒号と共に、穴から火柱が起こって俺の嫌がらせアイテムを全て灰にする。
おー、やっぱり凄いなフェニックス。
空に舞い上がったライザーが凄い形相で睨みつけてくる。
でも、そろそろ時間切れだ。
『ライザーくん、そこまでだ』
「っ！何故ですか!!」
『事前に話したろう？本命が来たのだよ、赤い龍の帝王が』
そう、俺の役目は時間稼ぎ。
サーゼクスさんのお願いとは、イッセーがやって来るまでの単なる場繋ぎだ。
ついでなので、精神を削れるだけ削った。
あれであってるのかは知らないが、何かイライラしてるし多分問題ないんじゃないか

な。
俺があいつとガチンコなんてしたら死ぬから。
文字通り灰になるから。
サーゼクスさんに説得された様で、ライザーが地上に戻ってくる。
「貴様は赤龍帝のガキの後で燃やしてやる、覚悟しろ……！」
おっかない。
でも。
「そりゃ無理だ、お前はイッセーに勝てないもの」
ちょうどやって来た様だ。
転送されてきたのは、俺の友達。
「遅いよイッセー、殺されかけたじゃん」
「悪い、待たせたカズキ。後は任せてくれ」
イッセーと入れ替わりで、俺の身体が光り出す。
「貴様、初めから時間稼ぎが狙いか…!?」
「男だったら、惚れた女は自分で助けたいもんだろう?」
ライザーにそう言って、闘技場からパーティー会場に戻ってくる。
ふぅ、カッコよくバトンが渡せた。

俺の仕事は終わった。
そんな俺を待っていたのは……。

朱乃先輩、小猫ちゃん、生徒会長による正座&説教だった。
生徒会長にまで怒られるとは……。
あ、ごめんなさい。
調子乗りすぎました、はい、ごめんなさい。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
初めてのレーティングゲームで、僕達は負けてしまった。
そのせいで、僕たちの主であるリアス部長はライザー・フェニックスとの婚約を飲まざるを得ない事に。
これからその婚約パーティーが行われる。
こちらの願いを聞き入れて、戦力の足りない僕たちに力を貸してくれたカズキくんは、人間だからという理由でパーティーには参加できないそうだ。
イッセーくんはまだ目覚めていないようだけど、彼はきっとまだ諦めていない。
パーティーが始まる頃には、きっと駆けつけてくれるだろう。

何故か、カズキくんが冥界にいた。
魔王サーゼクス・ルシファー様に招待されたそうだ。
魔王に招かれるって、彼は一体何者なんだ……？
しかも、その魔王様からのご指名で、今からライザーと戦うという。
無茶だ。
いくら強いとはいっても、カズキくんは人間だ。
フェニックスの炎にかかれば、即座に灰にされてしまう。
僕たちの不安とは関係なく、試合は始まってしまう。
その内容は、なんと言うか、その……色んな意味で凄惨な物だった。
悲鳴をあげるライザーと、邪悪な笑みを浮かべるカズキくん。
どちらが悪魔なのかわからない。
それも、サーゼクス様の一声で終わる。
僕らの主を助ける為に、イッセーくんが現れたから。
カズキくんは、イッセーくんと入れ替わりで会場に戻ってくる。
何やら格好いい事を言っていたが、行動が伴っていない。
リアス部長はイッセーくんが心配で見ていないが、部屋の隅で朱乃さんや小猫ちゃ

ん、ソーナ会長にまで怒られている。
なんでも、サーゼクス様から頼まれてイッセーくんが来るまでの時間稼ぎをしていたらしい。
ついでに精神を削れるだけ……言い分はわかるが、あれはダメだろう。
イッセーくんの事を怒れないと思うよ？
これからイッセーくんが戦いを引き継いで、ライザーとの戦いが始まる。
君の顔からは決意を感じた。
絶対にライザーを倒してくれると信じている。
この残念な流れを、変えてくれ……っ！

三巻　月光校庭のエクスカリバー
１３話

イッセーすげぇ。
『禁手』（バランス・ブレイク）だっけ？
イッセーが龍を模した全身鎧に身を包んで、ライザーをフルボッコ。
途中でピンチもあったけど、キッチリあのライザーを倒して問題解決。
リアス先輩の婚約も白紙に戻り、また日常が戻ってきた。
「だから、そろそろ許してもらえませんか？」
ここはリアス先輩の実家。
本来ならすぐに人間界に戻るはずだったが、とある事情により、１日こちらに厄介になる事になった。
そこでソファーに脚を組みながら座るリアス先輩と、その前で正座している俺。
そしてサーゼクスさん。
「リーア、私はまだ仕事が……」
「グレイフィアから、お兄様のお説教も頼まれているの」

その一言で黙って姿勢を正すサーゼクスさん。
どうやら魔王様の家は恐妻家の様だ。
「カズキくんには凄い感謝してるわ。わたしの無茶なお願いを聞いてゲームにも参加してくれて、倒れるまで戦ってくれた。貴方のアシストのお陰もあって、イッセーはライザーに見事勝利した」
じゃあ……！
「でもね？　あの後私が何て言われたと思う？『リアス・グレモリーは変態を飼っている』、『リアス・グレモリーにはああいう趣味が？』……酷すぎるでしょう!?」
なんで私の趣味がＢＬになるのよ!?
リアス先輩は荒れている。
確かにそれは酷い。
原因の俺が言えたことじゃないが。
「リーア、少し落ち着くんだ。それについてはちゃんと皆様に説明して、解ってもらえたじゃないか」
「その原因を作った貴方がいうんですか!?
折角イッセーが私の為に来てくれて、颯爽と救い出してくれたのに！すっごい夢見心地だったのにっ!!」

それっきりサーゼクスさんは口を開かなかった。
喋らない方がいいと悟ったのだろう。
遅いな、俺は最初からそれに徹している。
怒られ慣れているからな。
その後もひたすらに怒られ、二人してひたすらに謝り倒して何とかお許しを貰う。
「じゃ、次は朱乃の番ね」
「え？」
「うふふ、大丈夫。痛いのは最初だけですから♪」
明らかに武器に分類されるような、立派な鞭を持ちながら現れた朱乃先輩。
その言葉がもう大丈夫じゃありません。
助けて魔王様……っていねぇ!?
一人で逃げやがった！
魔王は逃げられないんじゃなかったの!?
「お兄様はいいのよ。どうせグレイフィアから更にしこたま絞られるでしょうし」
ざまぁ。
「ほら、こっちに行きましょうねぇ～。まだ小猫ちゃんの分もあるんですから、テキパキとイキましょう♪」

やべぇ。
小猫ちゃんからは一言『最低です』と言うお言葉を頂いた。
何故か一番辛かった。

リアス先輩がイッセーと一緒に住む様になり、機嫌が戻ってくれた。
ありがとうイッセー、今度なんか奢る。
イッセーと言えば、この間相談を受けた。
なんでも木場の様子がおかしいらしい。
心ここに在らずな感じで、ボーッとする事が増えているんだとか。
遅れて来た反抗期じゃね？
木場って真面目だし、ストレス溜まってるんだよ。
少しほっといてやればいいって。
モグラさんも最近様子がおかしい。
元気がないみたいで、あまり外に出てこなくなった。
以前は外に出たがって引っ込まない位だったのに、今はずっと俺の中で休んでいる。

アーシアちゃんと小猫ちゃんも心配してくれているし、どうしたものか。

「おい、瀬尾ってのはお前か？」

教室にいると、見慣れない男子生徒から声を掛けられる。

「ん？　そうだけど……なんかよう？」

「生徒会からの呼び出しだ、放課後になったら生徒会室までこい」

言うだけ言って、返事も聞かずに立ち去る。

「カズキ、お前何かしたのか？」

「いや、まぁやったと言えばやったかも」

イッセーに言われて、思い当たりを探る。

あの時の説教位しか心当たりがない。

あれの続きか？

よし、逃げよう。

返事はしてないし。

「そっか、あんま無茶すんなよ。俺は球技大会の練習に行ってくるぜ！」

「昼休みにまで熱心だね」

今度学校で行われる球技大会。
オカルト研究部は、その中の部活対抗戦に意欲を燃やしている。
リアス先輩曰く、『やるからには勝つ』だそうだ。
俺もリザーバーとして誘われたが、友達と約束したと言って断った。
嘘だけどな！
本番だけならまだしも、練習なんぞしたくない。

この間のお礼に、イッセーにジュースでもやろうかと思い、オカ研を訪ねた。
ドアを開くと、なんか朱乃先輩といかがわしいプレイの真っ最中でした。
ジュースを部屋の床に置き、勢い良く開いたドアをゆっくりと締めて帰ってくる。
そういうのする時は、もう少し分からないようにしてほしい。

放課後になった。
俺は現在、生徒会室に拉致監禁されている。
すっぽかして逃げようと思ったら、副会長の真羅さん（自己紹介してくれた）に発見、連行されてしまった。
どうにも逃げるのがバレていたようだ。

「なんで呼び出しを無視して帰ろうとしたんですか？」
「行くとは言ってない」
「なんで呼び出しを無視して帰ろうとしたんですか？」
「返事を聞かないで帰った奴が悪い」
「なんで呼び出しを無視して帰ろうとしたんですか？」
「……この間の、お説教の続きをされるのが嫌だったからです」
怒り方が新しい。
何かこう、崖にジリジリ追い詰められる感じ。
つまり、チョー怖い。
あれ、よく考えたらいつも通りだ。
「そんな事しませんよ……今回はこの子の態度が悪かったみたいですし、此方の落ち度ですね。すみません。だから、そんなに怯えないでください」
奥でバツが悪そうに顔を背ける男子生徒。
お前も後で怒られるのか。
ざまぁ。
「先輩みたいな綺麗な人って、目力強くて迫力あるんですもん」
ホントに美人の怒りってタチが悪い。

ていうか、奥の男子が凄い眼でこっちを見てくる。
お前も反省しろよ。
「そういうの、誰にでも言ってるんですか？」
「え？　何がですか？」
お説教の話？
「はぁ……とにかく、今回はお願いがあって呼んだんですよ」
お願い？
悪魔である先輩のお願いって何さ。
むしろ貴方叶える側でしょう。

「つまり、忙しくて出れない生徒会メンバーの代わりにリザーバーとして参加しろ、と」
イッセーやそこの男子の様な、新米悪魔同士の交流を持たせたいそうだ。
「ええ。貴方の身体能力の高さはリアスに聞いているし、お願いできないかしら？」
「嫌です」
ただでさえオカ研のみんなに嘘ついてサボってたのに、そんなことしたら年上組にコロコロされるっ！

「てめぇ！　会長がお願いしてるのに、その態度はなんだっ！」
そういうお前こそ頼む側のくせにその態度はなんだ。
何故そんなに突っかかってくるのか。
暇？　暇なの？
「出来る限り要望は叶えますから……ダメですか？」
「……笑わないでくださいよ？　じゃあ」
（もしリアス先輩達に絡まれた時に、助けて下さい。割と命に関わってくるんです）
周りに聞かれるのもあれなので、会長さんの耳元で小声で囁く。
怖がってるのバレたら恥ずかしいし。
「くふっ……ふふふ、いいですよ、わかりました。では、お願いしますね？」
ひどい、笑われた。
「当日までは好きにしていて下さい。特に練習なんかもありませんから」
それから生徒会メンバーを紹介してくれた。
あの男子は匙元士郎というらしい。
名前は男らしいな、名前は。
やっぱり生徒会メンバーも全員悪魔だった。
やばいな、駒王学園。

完璧に悪魔に支配されてるじゃん。

「さて、では行きましょうか？」

「へ？　何処にですか？」

「決まってます、オカルト研究部にです」

帰ります。

「椿姫、彼を連れてきて。女性には手荒な真似しないみたいですし」

バレテーラ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ふぅ、今日の練習も疲れた。

最近は球技大会に向けての練習漬けだ。

部長はやる気満々で、絶対勝つといっている。

期待に応えるために、俺たちも昼休みだってがんばっている。

俺の左腕は、ライザーとの戦いでドラゴンの腕になってしまった。

俺の中のドラゴン、『赤い龍の帝王（ウェルシュ・ドラゴン）・ドライグ』の力を貸してもらうために払った代償。

そのおかげで部長が帰って来たんだから全く後悔はしていないが、流石にこのままでは日常生活に支障を来たす。

なので部長と朱乃さんに、俺の左腕のドラゴンの気を定期的に祓ってもらっている。
なんとその方法が、直接指からドラゴンの気を口で吸い出して貰うというモノなのだ！
俺の役得すぎる!!
昼休みの終わりに朱乃さんが気を吸いだしてくれていると、そこに突然カズキがやってきた。
カズキはこの光景を見ると、ゆっくりとドアを締めて帰っていった。
床にジュースが置いてあるので、差し入れのつもりだったようだ。
なんか勘違いされてないかな、あれ。
教室で説明しようとしても、カズキが話を聞いてくれない。
『お前らのプレイとか聞きたくないぞ』って、だからそんなんじゃないってば！
……楽しんでたのは事実だけど。
放課後になると、足早に帰ろうとして門の前で女の人に捕まってた。
たしか、生徒会の副会長の真羅椿姫先輩だ。
顔を知らなかったからか、カズキの奴あっさり連行されていったな。
でも、生徒会は悪い話なんて聞かないし、ほっといても大丈夫だよな。
今日も部室で集まっていると、突然来訪者が。

先頭のあの人は、支取　蒼那生徒会長！
生徒会のメンバーに……あれ？
なんで、カズキが一緒にいるんだ？
「あら、ソーナじゃない。どうしたの？　カズキくんまで連れて」
彼、また何かやったの？
部長が怪訝な眼を向ける。
部長は最近、カズキの扱いが少しぞんざいだ。
まぁ理由を知ってるだけに、やんわりとしか庇ってやれない。
カズキがライザーを弱らせてくれたのは知ってるんだけどな。
部長も感謝はしてるから、そこまでひどい事をする訳でもないし。
精々お小言を言うくらいだ。
なんでも会長、と言うか生徒会メンバーはみんな悪魔だと言う。
会長の家系が、シトリー家という部長の実家と同じ位の名家なんだとか。
生徒会メンバーは、みんな会長の下僕悪魔だそうだ。
今回はお互い下僕悪魔が増えたから挨拶に来てくれたらしい。
匙っていういけ好かない奴だが、部長の命令だから少しは仲良くしてやるか。
しばらく世間話をした後に、会長から切り出してきた。

「今度の球技大会。私たち生徒会も、部活対抗戦に生徒会枠として出場することになったから。カズキくんも手伝ってくれるそうだし」
会長がカズキを見ながら言ってきた。
カズキは黙って立っているだけだ。
「あら？　私たちが誘ったら、友達に頼まれてるとか言ってなかったかしら？」
「えぇ、うちの匙がその友達なのよ」
本当か？
俺、あいつらが話してるの見たことないし、昼休みの時も誰とか言ってなかったっけ？
「覚悟しておくことね、リアス。優勝は私たちが頂くわ」
「私たちは負けないわ、それだけの練習はしてきたもの」
お互いに宣誓しあい、会長達は去っていった。
結局カズキは何も話さなかったな。
ってうぉ!?
「ふふふ……どうやって説明しようか必死に考えていたのに、そういう事するのね？いいわ、それなら徹底的にやって差し上げますから……」
こ、怖い！

朱乃さんからよくわからない波動が出ている!?

「ぶ、部長。朱乃さんが……」

「しっ！触れちゃダメ、今の朱乃はスイッチ入ってるから。とばっちりがこっちに来るわよ」

お互いを抱きしめながら震える俺と部長。

い、いったいどうなるんだ球技大会!?

14話

面倒な事になった。
球技大会に出るのはいい。
頼まれた以上はしっかりやる。
久々に、アザゼルさんから連絡が来た。
バラキエルさんや他の堕天使の皆さんも喋り始めちゃって、よく聞き取れなかったが
『コカビエルが動き出して、なんかやらかしそう』
だそうだ。
コカビエル。
俺を改造した連中の親玉。
でも正直、だから何？　としか思えないのだが。
なんかコカビエルの中では俺って死んだ扱いになってるらしいし、関係ないでしょ。
わざわざ襲ってくるとも思えないし、こっちはこっちで復讐とかする気もない。
そう、つまりこれも面倒な事ではないのだ。
本当に面倒な事とは……。

朱乃先輩が、めっちゃ機嫌が悪い。
またか、また俺のせいなのか!?
イッセーになんとかしろと言われたが、無理を言わないでほしい。
あれか、覗いてしまったのが不味いのか。
あれは不可抗力だったんだから、仕方ないじゃないですか。
お詫びのジュース飲んだってイッセーから聞いたから、許してくれたと思ってたのに。

「良くここまで来たわね、ソーナ。出来れば決勝で貴女と戦いたかったわ」
「リアスこそ、やられる覚悟は済ませてきた?」
球技大会当日、部活対抗戦準決勝。
ついにオカルト研究部との対決である。
リーダー同士の語り合いも、なかなか耳に入ってこない。
殺気に似た何かが、ずっと俺を攻撃してくるから。
「……ところでリアス、あなたの《女王》どうしたの?」

「貴女のせいでもあるのよ。カズキくんを盗っちゃうから……」
「え？　そういう仲なの、この二人？」
「いえ、違うんだけどね……」
何やら俺と朱乃先輩を除くメンバーが固まって密談中。
お前ら敵同士だろうが、早く配置につけ。
なるべく早く終わらせるんだ。
俺の精神が持たない。
なるほど、精神を潰すってのはこうやるのか。

結果、負けてしまった。
改造人間ブァワ～で頑張ったんだが、怒り状態の朱乃先輩には勝てなかったよ……。
試合後に朱乃先輩に覗きの事を謝りにいったら、今度から『朱乃さん』と呼ぶなら許してくれるそうだ。
何でもアーシアちゃんや小猫ちゃんとの扱いの差に思う所があったようだ。
向こうも謝ってきてくれて、それで許してくれるのだから、大変助かる。
朱乃さんと少し仲良くなれた気がした。
今度、バラキエルさんに教えてあげよう。

あと、試合が終わってから匙がやたら機嫌よく話しかけてきて、
『誤解してた。今まで態度よくなくて悪かった』
と謝ってきた。
彼に一体何があった？
まぁ、仲良くやるのはいい事だけど。
ちなみに大会は、オカルト研究部が優勝しました。
よかったね。
でも、どうやら木場は本当に調子悪いみたいだな。
試合中にまでボケっとしていた。
今度話しでも聞いてあげようと思う。

球技大会も無事に終わり、帰宅中に木場に出会った。
雨が降っているにも関わらず傘も差さないで歩いていたので、追いかけてみたら見知らぬ銀髪の男に絡まれていた。
「カズキくん!?」
「おんやぁ～？　そこにおわすのは、ぼくチンの元上司をフルボッコにしてた奴じゃないの。似た者同士で庇い合いですかい？　男同士でイヤ～ンな展開ですなぁ！」

誰だか知らんが決定、フルボッコ。
一気に踏み込んで殴ろうとしたが、寸前で踏み留まる。
その瞬間、目の前を銀閃が走り、腕が斬りつけられた。
「オッスィ～！　もうちょい踏み込んでくれたら、お手手とサヨナラバイバイだったのに！　ちょっとは空気読んでよねっ!!」
なんだこいつ、イカれてるのか？
関わっちゃいけない人の典型例みたいな奴だな。
「っておやおや？　もう傷が塞がってやがります？　ジョーブなお身体大変羨ましゅうございますなぁ！　俺様もそんな風になりたいなはぁん！」
「それ以上口を開くな、フリード。それは彼に対する最大の侮辱だ」
木場が俺の前に立ち、フリードと呼ばれた男を剣を構えながら睨み付ける。
「そんなん俺様知らんもん！　あ、今のなんか語呂が良くね？　てか、流石に不利だから俺様帰ります、バイチャ!!」
フリードは訳のわからない言葉を吐くと、もの凄い速さで走り去ってしまった。
追いかけられないと判断したのか、木場は持っていた剣を手元から消す。
え？　手品？
あ、いや神器か。

木場も持ってたのね。
「って、何にも言わずに帰ろうとすんなよ」
「まだ、何か？」
「怪我してるじゃないか、家が直ぐそこだから消毒ぐらいしてけ」
浅くではあるが、腕には斬られたと思われる傷が。
悪魔が化膿とかするのか知らないが、治療しないよりしたほうがいいだろう。
渋る木場を無理矢理引っ張り、家に連れて行った。

「……何も聞かないんだね？」
「聞いて欲しかったら聞いてやらんことも無い」
消毒を済ませ、包帯を巻き終わる。
急に木場がそんな事を言い出したが、そもそも何を聞けばいいのかが分からんわ。
聞くだけなら出来る。
木場は苦笑した後、自分の過去を語り始めた。
木場は幼い頃は教会の施設で暮らしていた。
聖剣を扱う物を養成する為の施設。
木場以外にも同じ年位の子供たちがたくさんいて、来る日も来る日も実験の毎日。

辛くても、彼らには恐怖などなかった。
いつかは特別な存在になれると信じていたから。
しかし、木場たちは処分される事になる。
聖剣に適正を示せなかったから。
ガスを撒かれ、次々に死んでいく仲間たち。
木場は仲間のお陰で何とか逃げ出したが、他の子は全員死んでしまった。
木場も死にかけたけど、リアス先輩に助けられたそうだ。
その時に悪魔になった、と。
「君なら、僕の気持ちがわかるんじゃないかな？　勝手に身体を弄られて、一人だけ生き残ってしまった、君になら」
「……俺は、お前と違って他の連中と顔見知りだった訳じゃないし。比較にならないよ」
というか、泣きそうだ。
こういうのダメなんだってば。
「僕は、聖剣を憎む。嫌悪する。悲劇の元になった聖剣を僕の剣で叩き折ることが、僕の生きている理由だ。その為なら、何を犠牲にしても構わない」
う～ん。
「それはちょっと違うんじゃないか？」

「っ、なにを！」

木場が睨みつけてくる。

「聖剣を憎むのはわかるし、お前のやりたい事もわかった。でも、なんで今の生活を犠牲にしなきゃならないんだ？」

「……」

「過去は大切なもんだ、忘れちゃいけない。でもさ、お前にとって今の時間って要らないものなのか？　簡単に捨てられる様なもんだったのか？」

「でも、僕だけが幸せになるなんて……」

「友達の幸せを願わない奴なんて、いるわけないだろ」

イッセーに嫉妬してやっかむ松田とか、元浜とか一部を除いて。

「……治療、ありがとう」

木場は礼を言うと、家から出て行った。

まぁ、すぐには無理だよね。

ゆっくり考えるといいさ。

とにかく明日、オカ研に行ってもう少し話してみよう。

次の日、俺の家に木場が入るのを見た生徒がいたらしく、『瀬尾×木場』なる言葉が一部の女子の間で飛び交っていた。

勘弁して下さい。

「また知らない人がいる」

放課後にオカ研部室を訪ねた。

部室の扉を開けると、髪に緑のメッシュが入った子目付きの鋭い子と、栗色の長いツインテールの子がリアス先輩と向かい合って座っている。

「……彼は？ただの人間の様に見えるが」

「もしかして悪魔と契約してる人？」

え？　契約って何？

はぁ、依頼をこなしたりとかそんなんしてたんですか。

「よしイッセー、焼きそばパン買ってこいよ。3分な」

「悪魔はパシリじゃないからっ！」

「いいからイッセー、行って来なさい」

「部長!?」

リアス先輩に言われてイッセーが走って出て行く。

便利だな、今度から時々頼もう。

「……凄い人間だな、悪魔を飼いならしているぞ」
「ええ、意味があるとは思えないけど」
「それほどでもない。」
受け答えしてたら後ろから小猫ちゃんに軽く小突かれた。
え？　何この人たち敵なの？
教会の人間。
あぁ通りで。
何やらリアス先輩と難しい話をしている最中も、木場が凄い殺気をあの二人に向けている訳だ。
「ただいま、ホラ焼きそばパン」
「遅い、もう一回。今度は牛乳な」
「悪魔かお前は!?」
「悪魔はお前だ」
まぁ冗談だが。
お金を払おうとしたらリアス先輩に要らないと言われた。
奢りか、やったぜ。
「さて、そろそろおいとまするかな」

お、帰るのか。
オタッシャデー。
「――もしやと思ったが、君は【魔女】アーシア・アルジェントか？」
……は？
「あなたが噂の【魔女】になった元【聖女】さん？」
……あぁ、やっぱりアーシアちゃんの事を言ってんのか。
その後も好き放題言ってくれる。
『堕ちるところまで堕ちた』
だのなんだのと……。
イッセーが怒ってくれている。
『アーシアの優しさを理解できない奴なんて、ただのバカ』
いいね、その通りだ。
『家族で、友達で、仲間だから助けるし、守る』
イッセーは決める時は本当に決めてくれる。
木場も連中に喧嘩を売って、非公式の手合わせが決定した。
さて、俺もやらせてもらおうかな。
アーシアちゃんの、友達として。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「あーくそ！　通信切れちまったじゃねぇかっ！」

あいつ滅多に連絡つながらねぇのに。

取り敢えず用件は伝えられたし、大丈夫か。

とはいえ……。

「何なんだお前らは、人が話してたら横からウジャウジャ湧いてきやがって！」

「人を虫みたいに言わないで下さい」

「わ、私はただ朱乃の事が聞きたくて……」

「カズ坊にモグラさんの経過を聞きたいのだ」

「久し振りの連絡なんだ、挨拶くらいいいじゃないか」

「カズキに特撮ヒーローのＤＶＤを催促したくて」

「私達だってカズキちゃんとお話ししたいわよ～」

『ブーブー!!』

上からシェムハザ、バラキエル、サハリエル、タミエル、アルマロス、ベネムエ、そして施設の職員ども。

お前らどんだけカズキの事好きなんだよ。

「てかなんで幹部が勢揃いしてやがる。働けよお前ら」

俺はこんなに仕事が溜まってるのに。
最近は神器弄りも出来ていない。
「そりゃあんたが、コカビエルのバカをカズキちゃんの為に探し回るからじゃないさ」
うっせぇよベネムエ、そんなんじゃないっての。
「仕方ないですよ、素直じゃないですから」
何が言いたいシェムハザ。
「素直にカズキの事が心配だと言えばいいのに」
バラキエル、てめぇにだけは言われたくねぇ。
「そうなのだ、とんだ親バカなのだ。しっしっし！」
よし、サハリエル。
てめぇ喧嘩売ってんな？
「いいから仕事しろお前ら！　さっさと持ち場に戻りやがれ！」
『わぁ～【閃光と暗黒の龍絶剣】（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）提督が怒ったぁ～』
「上等だてめぇら！　纏めてぶっ飛ばしてやるっ!!」
何時までもそのネタ引っ張りやがって！
誰でもやらかす、若かりし頃のちょっとした過ちだろ！

まぁ、なんだ。
こっちは変わらずやってんだから、お前もたまにはこいつらに連絡くらい寄越してやれ。
俺が被害を被らない為に、な。

１５話

外までやって来た。
ここに結界を張っているから、派手に暴れても問題ないそうだ。
イッセーは初めは興奮していたが、言いたい事を言ったからか段々と落ち着き、今は戦いに乗り気ではないようだ。
位置取り的に、ゼノヴィアと木場、イッセーとイリナさんになるのかな？
ゼノヴィアも木場に興味がある様だし。
木場は開始前から既に神器を発動させ、手元だけでなく、周辺にも剣を出現させている。
『魔剣創造』（ソード・バース）。
朱乃さんに聞いたら、思い描いた魔剣を幾らでも作り出せる神器だとか。
いつもの笑顔とは別物の笑みを浮かべながら、ゼノヴィアと対峙している。
やっぱ、聖剣への憎しみが滲んで来ちゃうのかね。
先に戦闘を始めたのはイリナさん。
聖剣を日本刀に変えて、イッセーに躍りかかる。

そのまま戦闘は続いていき、結果はイッセーの必殺技『洋服崩壊』（ドレス・ブレイク）の誤射によりお流れ。

木場は対抗心を燃やしすぎて、魔剣の選択を誤り柄頭での打撃で敗退。

二人はこの場を去ろうとするが、それはさせられない。

「次は俺と戦ってくれない？出来ればゼノヴィアさんと」

「何？　なぜ君と戦わねばならない」

君は人間だろう？

ゼノヴィアの疑問が伝わってきたが、そんなものは関係ない。

「友達が虐められたから、助ける。当然の事だろう？」

「……わかった、それで満足するならそうしよう。怪我で済むといいな」

ゼノヴィアが嘆息混じりで剣を構える。

さぁ、始めよう。

モグラさんは調子が悪いから使えない。

なら、純粋な体術で戦うだけだ。

美猴さんに教わった型通りに構える。

「あら？　モグちゃん使わないのかしら？」

「いえ、部長さん実は……」

「最近、モグさん調子悪いらしいです……」
「じゃあ素手で戦う気ですの？」
「普通のグローブ使うみたいですよ？鉄板入ってるそうですが」
周りから色々言われてるが、気にしない。
ヴァーリさんや美猴さんに教わった事を思い出す。
とにかく速く、正確に。
「……素人じゃないね、キミ。」
型を見て判断したのか、ゼノヴィアが呟く。
「気にしないで、さっさと終わらせよう」
「どういう意味かな？」
「さっさと来て手早くやられろって言ってんだよ、狂った宗教家」
表情が鋭くなる。
そうだ、それでいい。
「余り調子に乗らない事だ！　悪魔でなくとも刃は刃、当たれば容易く命を奪うぞ！」
ゼノヴィアが剣を担ぎ上げ、大上段から振り下ろす。
「ふっ」
「な!?　あぐっ！」

半身になって避け、手首を取って引き倒し、顔から落ちる様に地面に投げつける。
そしてすぐに間合いを取って構え直す。
「くそっ油断した」
「それは大変だ、次は油断するなよ」
「……」
ゼノヴィアは喋るのを止め、隙のないよう構え、距離を詰めてくる。
俺はゼノヴィアが正面になるように体を動かし、待ち続ける。
焦れたのか、ゼノヴィアが突撃してきた。
剣を自身の右下に配置し、一気に振り上げる。
それを躱すと、一気呵成に攻め立ててきた。
逆袈裟、左薙、切り上げ、唐竹。
全てを躱し、その度に足を刈ったり引き倒したりして、地面に転がす。
「くそ、何故当たらない！　何故見切られるんだっ！」
「そんなデカい剣を自在に振り回せるのすごいと思うけど、剣筋って大体14，5種類だし、基本は9種。木場と戦ってる時に見てたし、その程度の速さなら余裕で見える」
「私の、力不足か……」
「ほら、早く立て。その度に転がしてやる。アーシアちゃんに土下座する様に」

「え？」
ゼノヴィアが顔をあげると、視線の先には心配そうに見つめるアーシアの姿。
「謝れないんだろう？　手伝ってやるよ。何度でも、何度でも」
顔が擦り切れるまで。
何度でも。
「ほら立てよ。それとも立たせてやろうか？」
俺がゼノヴィアに手を伸ばすと、後ろから衝撃が。
振り向くと、アーシアちゃんが抱きついている。
「もう、もういいです！　カズキさんの気持ちは嬉しいですけど、これ以上は……もう……もうっ……!!」
抱きついているアーシアちゃんの手は、ひどく震えていた。
……何してんだろ、俺。
「アーシアちゃん……わかった」
俺の声を聞くと、アーシアちゃんは手を離してくれる。
「あ～……やり過ぎました、ごめんなさい」
ゼノヴィアに頭を下げて、返事も聞かずにその場を立ち去る。
あ、木場の事そのままにして来ちゃった。

……ま、大丈夫だろ。うん。
最近モグラさんと話せてないからかな。
思考が暗くて、物騒な方向に傾いてしまう。
今日のは八つ当たりみたいな物だった。
もし今度会ったのなら、二人にもっとちゃんと謝ろう。

会った。
会ってしまった、簡単に。
部室で見た白いローブを身に纏い、お布施を頼む美少女が二人。
えらく目立っている。
「迷える子羊にお恵みを～……」
「御慈悲を～……」
……今の二人に声、掛けたくないなぁ。
「あの～……」
『はいっ!!』
二人が同時に振り向き、同時に固まる。

やはり印象が最悪の様だ。
身構えながら、此方を睨みつけてくる。
お腹の音を盛大に鳴らしながら。
よし、正攻法でいこう。
「お腹減ってるなら、ご飯奢ろうか？」

着いてきたよ、家に。
いや、持ち合わせがそこまでなかったから家で作る事にしたんだけど。
ホイホイ男の家に着いてくるのは、年頃の女の子としてどうなんだろうか。
誘った俺が言うのも何だけど。
「うまい、男の手料理がこんなに美味いとは！」
「あぁ、久し振りのお米！　お味噌汁！　なんて美味しいのかしら!!」
「はいはい。で、おかわりは？」
『くださいっ!!』
……米が尽きそうだ。
「あ～、美味しかった。ああ主よ、この慈悲深き人間に祝福を」

二人とも満足したのか、一息ついて水を飲んでいる。
イリナは食後のお祈りか。
「食事については感謝しよう。で、私達に何か用かな？　君は私の事が嫌いなのだろう？」
「いや、この間は返事も聞かずに逃げちゃったから、もう一度ちゃんと謝りたくて。この間は済みませんでした」
頭を下げてから顔を見ると、眼をパチクリしている。
そんなに驚かなくても。
「……何故、君が謝る。非があるのは私なのだろう？」
「あ、勘違いしないで。アーシアちゃんに暴言吐いた事については許してない」
ゼノヴィアはその一言で黙ってしまう。
「俺が謝ってるのは、女の子相手にやり過ぎた事と、君に酷い事を言ったこと。最近色々と良くない事が続いてて。八つ当たりみたいになった。ごめんなさい」
「あ、いや……此方こそ、すまなかった。折角善意で食事を用意してくれたのに、酷い態度で接してしまった。許して欲しい」
「私もごめんなさい。友達を悪く言われたら、怒って当然よね？」
「私もだ。完全に理解は出来ないかもしれないが、あの言葉は撤回させて貰う」

おぉ、やっぱり話し合いって大切だね。
ちゃんと分かり合えた。
「うん、出来ればアーシアちゃんにも直接言ってあげて。無理なら手紙でもなんでもいいから」
その後も少し談笑して、二人は立ち上がる。
「助かったよ。アーシア・アルジェントの件はもう少し自分の中で考えてみる」
「私もそうするね、ごちそうさま」
二人を見送ろうとすると、携帯に着信。
イッセーからだ。
『あ、カズキ。今大丈夫か？』
「大丈夫だけど、なんかあったのか？」
『教会の二人組を探してるんだけど、手伝ってくれないか？』
「あ～……ウチに来い、確保しとく。」
『は？』
通話を終了する。
事情を説明してもう少しいて貰おう。
イッセーが小猫ちゃんと木場、何故か匙まで連れてやって来た。

狭い、非常に狭い。
イッセーはゼノヴィア達と協力して聖剣の破壊を行いたいそうだ。
木場とゼノヴィアはまだギスギスしているが、互いに了承。
敵の名前も判明した。
【皆殺しの大司教】『バルパー・ガリレイ』。
それが木場の仇の名前。
そして堕天使の幹部『コカビエル』。
……ここで来ちゃうのか。
情報と連絡先を交換をして、この場は解散になった。
その際小猫ちゃんの心からのお願いで、木場も普段の自分を取り戻してくれたようだ。
女の子の涙ってスゲー。
木場はみんなにも自身の過去を語って聞かせた。
俺に語っていた時は、聖剣への憎悪が言葉の節々から漲っていたが、今は少し違う。
聖剣への憎しみは消えてはいないが、かつての仲間の為に。
彼らの無念を晴らしたい。
彼らの死を無駄にしたくない。

彼らがエクスカリバーよりも強いと証明したい。
そう言っていた。
その話を聞いて号泣してる人物が一人。
匙である。
『絶対に、救ってくれたリアス先輩を裏切るな』
『お前の為なら会長に怒られても構わない』
木場の話を聞いて、涙しながら言葉を口にする。
何だ、こいつもいい奴じゃないか。
俺が感動したのも束の間、イッセーとバカ話を始めたので二人して家から追い出したけど。
小猫ちゃんと木場はそれを見て笑っている。
やっと『らしく』なってきた。

モグラさんも早く元気になるといいなぁ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
今日、教会からやって来たエクソシストが部室に訪ねてきました。

なんでも今、エクスカリバーという聖剣を巡って大変な事が起きているようです。
こちらに手出しをしないようにとお願いに来たそうですが、立ち去る際に私に話しかけてきました。
『――――もしやと思ったが、君は【魔女】アーシア・アルジェントか？』
『あなたが噂の【魔女】になった元【聖女】さん？』
言葉が胸に刺さりました。
やった事について、後悔はしていません。
でも、あの時の周りの人達からの視線は忘れる事が出来ません。
その事を思い出すと、今でも身体が震えてしまうのです。
イッセーさんが庇ってくれたのはとても嬉しかったです。
家族で、友達で、仲間だと。
だから守るのだと、そう言ってくれました。
その後祐斗さんも加わって決闘する事に。
結果は、イッセーさんが私と小猫ちゃんの服を間違って消し飛ばしてしまい、力尽きて終了。
祐斗さんも、ゼノヴィアさんの攻撃を受けて倒れこんでしまいました。
聖剣を相手にして、誰も重傷を負わずに済んでホッとしていると、カズキさんがゼノ

ヴィアさんに話し掛けました。
口調は何時も通りでしたが、何故か微妙な違和感を感じて……。
今思うと、本当に怒りを感じていたのでしょう。
そのあと、合意の下でカズキさんはゼノヴィアさんと戦いを始めました。
カズキさんは自分からは一切攻撃しません。
モグちゃんの調子が悪いのは聞いていたので、力を借りていないのも原因だったのかもしれません。
ゼノヴィアさんが剣を振り下ろすと、カズキさんは避けながらゼノヴィアさんを地面に倒します。
それを何度も何度も繰り返した後に、ゼノヴィアさんにカズキさんは言いました。
「ほら、早く立て。その度に転がしてやる。アーシアちゃんに土下座する様に」
「え?」
そう。
カズキさんは攻撃を躱しながら、ゼノヴィアさんを私のいる方向に倒していたのです。
「謝れないんだろう?手伝ってやるよ。何度でも、何度でも」
「ほら立てよ。それとも立たせてやろうか?」

そう言って、ゼノヴィアさんを無理矢理立たせようとして手を伸ばしました。
私の大事な友達であるカズキさん。
お兄ちゃんみたいなカズキさんが、違う何かになってしまう。
そう思ったら、私は気付くと駆け出していて、カズキさんに抱き付いていました。
カズキさんは私の制止を聞き入れ、ゼノヴィアさんに謝った後に軽く頭を下げると、そのまま何処かに歩いて行ってしまいました。
木場さんまで部長さんと話した後に居なくってしまった。
あの時のカズキさんはいつもと何かが違いました。
私の為に怒ってくれたのもあるのでしょうが、もしかしたらカズキさんにはまだなにか秘密があるのかもしれません。
これから一体、どうなってしまうのでしょうか……。
しかしその数日後に、カズキさんからゼノヴィアさん達と仲直りしたと聞きました。
私に言ったことは訂正するといってくれていたとか。
私への言葉なんてもうどうでもいいんです。
いつものカズキさんに戻っていた事が、何よりも嬉しかった。
私に出来ることは少ないですが、何かあったら言って欲しい。
どんな事でも、私は全力で協力させて貰います。

16話

モグラさんの調子がいまだに戻らない。
流石に不安になってきた。
木場たちには悪いが、ちょっとバルパー達の捕縛を手伝えそうにない。
ゼノヴィアたちは組み手みたいなものだったからよかったが、モグラさんなしで聖剣なんてトンデモアイテム持った連中の相手は厳しい。
木場とゼノヴィアの事はイッセーと小猫ちゃんに任せて、モグラさんを診てもらえる所に行ってくる。
小猫ちゃんも心配してくれているし、早く元気になって貰わないと。
堕天使の集まる場所、俺が5年間過ごしたグリゴリの研究施設。
バラキエルさんに渡されていた簡易式の転送装置を使い、ここにやって来た。
アザゼルさんがいるかはわからないが、あの人は確実にここにいる。
「おや、カズ坊なのだ。どうかしたのだ？」
専門は違うけど、アザゼルさん並みに神器に詳しいサハリエルさんが。

「ほうほう、成る程なのだ……」
事情を説明して、モグラさんをグリゴリが用意した専用のケースの中に移す。
やはり何処か苦しそうだ。
サハリエルさんはそれを興味深そうに観察している。
「どうです？　やっぱり何か風邪みたいなものですか？」
「しっしっし！　モグラさんは少々特殊だけど、神器は風邪など引かないのだ。私に任せておくのだ」
普段は色々とやらかす少々アレな人だが、頼りになるのは間違いない。
「折角久しぶりにきたのだ。診察が終わるまで、施設を見て回るといいのだ。ついでにアザゼルにも連絡しておくのだ」
モグラさんを見守っていたいが、ここにいても邪魔にしかならない。
仕方ないので、施設を見回ることにした。
しかしまぁ、相変わらず胡散臭い施設だ。
謎の鉄球、謎の診察台。
考えたのはアルマロスさんで、何でも神器を覚醒させる為の物だそうだ。
恐ろしくて死ぬ気で逃げてたなぁ。
懐かしい。

懐かしい施設をみてはトラウマを思い出し。
新しい装置を見つけては試されたくなくて震えだし。
顔見知りの研究員の人たちと会ったら立ち話。
そんな風に時間を潰していると、背後から声を掛けられた。
「おや？　カズキ君？」
振り返るとそこにはバラキエルさんが。
「あ、バラキエルさん。お邪魔してます。」
「いや、私もサハリエルに資料を渡しにやって来た所なのだが……何かあったのかね？」
それなりに時間も経ったので、バラキエルさんと一緒にサハリエルさんの所に向かった。
バラキエルさんに朱乃さんの事をたくさん聞かれて、俺が答える。
道中ずっとそんな感じだったが、バラキエルさんが時折微妙な顔をしていた。
なんかマズかったかな？
サハリエルさんな所に到着して、自動ドアが空気の抜ける音と共に開くと、サハリエルさんの必死な声が部屋に響いている。
「頑張るのだモグラさん！　気張れ！　気張るのだ！」
なんだ!?　モグラさんに一体何が!?

「よし！　そのまま、そのまま……出たのだ！　モグラさん、よく頑張ったのだ!!」
慌ててモグラさんに駆け寄ると、疲れたのか身体全体で息をしている。
サハリエルさんは何かを大事そうに小さな布に包んで、俺にそれを手渡してきた。
俺はまさかと思いながらその布をゆっくりと捲っていく。
その中には……よくわからないオレンジ色の綺麗な球が。
何これ。
「これは……物凄い密度の、魔力？　いや、何か違うな。よくわからないが、高密度のエネルギーの塊だ」
「モグラさんの体内で生成された物なのだ。本当は大人に成長しないと出来ないものだから、異物を感じて調子を崩してしまっていたのだ」
びっくりした。
てっきり子供でも産まれたのかと。
つまり、こいつのせいでモグラさんは苦しんでたのか。
というかお尻から出したのか、なんかばっちい。
「モグラさん、いや【神秘の豊穣土竜】（フェティリティ・グラン・ドラゴン）は、幼体の時から蓄えた魔力を体内で結晶化させるのだ。その力を使って自分の住処の土壌を豊かにして、餌を確保するのだ。」

へぇ、普通モグラって害獣扱いなのに。
こっちでは益獣扱いなのか。
まぁ獣ってかドラゴンだけど。
「本来なら幼体のまま神器になったモグにはこの結晶体は出来ないはずだ、しかも純度が桁違いに高ぇ。う〜ん、じっくり研究してぇなぁ……」
ここにいないはずの声。
振り向くと、そこには興味深そうにモグラさんを見つめるアザゼルさん。
「ようカズキ。サハリエルから連絡貰ったからな、来てやったぜ。モグの奴もきっちり成長してんじゃねぇか」
頭をガシガシと乱暴に撫でてくる。
痛ぇよ。
なんか楽しそうですね、アザゼルさん。
「さて、訓練室に行くぞ。バラキエル、お前も来い」
え？
「モグはちゃんと成長した。次はお前さんが成長しろ」
え〜と……つまり？
「楽しい愉しい特訓のお時間だ。後から俺が呼んだ幹部連中も来るからな、数日でしっ

かりきっちり強くなれるぜ」
おい。
おい。
「コカビエルの奴が絡んできたからな。どうせお前もやるんだろ？死なない程度には鍛え直してやる」
そんな気ないよ？
だってコカビエルって人アザゼルさんたちクラスなんでしょ？
死ぬじゃん。
カッチリキッカリ殺されるじゃん。
俺の訴えがアザゼルさんに届く事はなく、アザゼルさんとバラキエルさんに両脇を持ち上げられながら連行される。
ウソダドンドコドーン……。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
俺たちは今、駒王学園にきている。
堕天使の幹部、コカビエル。
奴が俺たちに宣戦布告してきやがった。
被害を最小限に抑える為に、ソーナ会長たちは学園に結界を張ってくれているので動

けない。
　木場は合流出来てないし、カズキもモグさんの治療の為に今はいない。
　それまでは俺たち部長の眷属だけでやるしかない。
　俺たちはコカビエルの差し向けたケルベロス二体を撃破し、遅れてやって来た木場とゼノヴィアは4本のエクスカリバーを統合した剣を持つフリードと対峙した。
　バルパーが語る幼い木場達への実験の真実。
　残された木場と、木場を想い続けた仲間たち。
　その想いを糧に、木場は《禁手》へと至った。
　禁手、《双覇の聖魔剣》（ソード・オブ・ビトレイヤー）。
　木場の持っている魔の属性と、仲間たちが託してくれた聖の因子を掛け合わせた、木場だけの剣。
　木場はその力を使い、フリードの持つエクスカリバーを叩き折った。
　木場の念願が、叶った瞬間だった。
　聖魔剣を見て何かに気付いたバルパーも殺され、残るはコカビエルのみ。
　でも、コカビエルの強さは想像以上だった。
　俺たちがどれだけ攻撃しても効果はなく、通ったのは木場の攻撃で頬の薄皮が一枚切れただけ。

戦闘の合間の言葉の応酬の中で、朱乃さんが堕天使の子供だと判明したり、神の死について知ってしまった。

以前の戦争で四大魔王と共に、神もまた死んでしまっていた。

その事実に、アーシアとゼノヴィアは身体を支えられずに崩れ落ちてしまう。

でも、負けるわけにはいかない。

俺には、ハーレム王になる夢があるのだから！

俺が気合を入れて立ち上がると、何かが空から落ちてきた。

そいつはコカビエル目掛けて一直線に降下してくる。

「おっと」

軽々と躱されてしまうが、コカビエルの元いた場所には凄まじい衝撃と共に大きなクレーターが出来上がった。

そんなめちゃくちゃをする奴、俺たちは一人しか知らない。

全く、来るのが遅いぜ！

「カズキ!!」

カズキはクレーターの中心から這い出てコカビエルを見つけると、凄まじい視線を叩きつける。

「おぉ、お前がカズキか！　お前の事はよく知っているぞ、こんな所にいたとはな」

一方コカビエルは楽しそうにカズキに話しかけている。
え？　コカビエルの奴、カズキを知ってるのか？
一体どんな関係が……？
「お前がコカビエル……恨み、晴らさせて貰うぞ」
恨み？　恨みって……まさか!?
「恨みねぇ？　お前の身体を弄り回した事か？　強くしてやって感謝されこそすれ、恨まれる謂れはないな」
やっぱりか！
あいつがカズキの身体を、人生をめちゃくちゃにした親玉か！
「なかなかやるそうじゃないか。たかが人間に期待などしていなかったが、お前のような奴が出来るのなら本格的に実験してみるのもいいかもな」
戦争の兵隊として役立つかもしれん。
コカビエルはあざ笑いながら言い放った。
兵隊って……カズキみたいな存在をまだ増やそうってのか!?
一体どれだけの人が犠牲になると……！
しかし、カズキは何も言わない。
答えない。

ただひたすらにコカビエルを睨み付ける。
あれ……カズキ、だよな？
なんだか、俺たちの知ってるカズキと違う。
何時もは敵を挑発するのに、それもしない。
「彼は一体なんなんだ……？人間が、あんな眼をしていい筈がない」
ゼノヴィアが、カズキの戦いを見ながら呟いている。
何時もとは明らかに違う言動。
みんなも動揺から動けずにいる。
カズキ……お前、どうしちゃったんだよ……。
「お前の所為で俺は……地獄を見てきたっ！」
急に発せられるカズキの怒号で、大地が揺れる。
あんなに怒っているカズキは、アーシアの件以来だ。
いや、あの時とはまた別種の怒りを感じさせた。
「ふん、人間が大層な言葉を吐く。だからなんだ、勝てるとでも思っているのか？」
「勝つさ。俺は今から、お前をぶん殴る。それが、それだけが俺の今の願いだっ!!」
『おい、相棒』
俺たちがカズキの見守っていると、ドライグが語りかけてくる。

なんだよ、この大変な時に！
『あの男、【至る】ぞ』
え？　もしかしてカズキも!?
『さっきも言ったが、神器は所有者の強い想いや感情で進化する。あの男の感情が今、世界の【流れ】に逆らうほどの昂りを見せている』
カズキの身体から魔力とは違う、別のなにか凄いエネルギーの様なものを感じる。
カズキ静かに右手を前に突き出し、掌を天に向ける。
その掌には、いつの間にかモグさんがいた。
額には何か、オレンジ色の石みたいなものがついている様に見える。
そして、カズキは大きな声で叫んだ。
あの言葉を。
「いくぞ……《禁手》（バランス・ブレイク）ッッ!!」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
なんかセーフティ機能を解除してくれたそうです。
いつの間にそんなもん付けたんだ。
文句言ってもスルーしやがる。

もうやだこの人たち。
本当に幹部の人たちみんなくるし。
久々に会えたのは嬉しいけど、あんたら一ヶ所に固まってちゃいけない人たちじゃないの？
働けよ。
ええ、皆さん俺の事をひたすらにイジメてくれました。
かわいがりってやつだね。
おかげで疲労とストレスがマッハ。
しかも転送してくれたら空の上って何？
『ヒーローは空から現れる』って聞いたことないです。
アルマロスさん、今度は一体何の特撮見たんですか。
てか、お～ち～る～!!

着地っ!!
いや墜落だよね、これ。
クレーター出来てるじゃん。
にしても怪我一つない。

凄いな、セーフティを解除した身体。
さて、アザゼルさん達が言うにはもういるはずだ。
俺の不幸の大本、コカビエル。
あいつを倒さないと、俺に未来はない。
お、あいつかな。
翼が10枚。
間違いない、こいつがコカビエルだ。
「おぉ、お前がカズキか！　お前の事はよく知っているぞ、こんな所にいたとはな」
笑いながら話しかけてきてんじゃねぇ。
「お前がコカビエル……恨み、晴らさせて貰うぞ」
お前の所為で、お前の所為で……！
俺は別にお前と戦いたくなんてないのに、無理矢理お前の対策とか言いながら、みんなにフルボッコにされ続けたんだぞ！
逆恨みも甚だしいけど、お前でストレス発散してやる！
お、なんかテンション上がって来たぜぇ!!
「恨みねぇ？　お前の身体を弄り回した事か？　強くしてやって感謝されこそすれ、恨まれる謂れはないな」

んなもんどうでもいいんだよ！
早く、早くお前を殴らせろっ……！
「なかなかやるそうじゃないか。たかが人間に期待などしていなかったが、お前のような奴が出来るのなら本格的に実験してみるのもいいかもな」
勝手にしろ。
どうせ勝とうが負けようが、お前は最後にはアザゼルさんにしばかれるのだから。
負けたら俺もしばかれるけどなっ！
俺はお前を倒さないと、グリゴリの施設でわけのわからんペナルティを負うことになるんだよ！
「お前の所為で俺は……地獄を見てきたっ！」
なんなんだあの光の槍の雨あられ。
時折ピンポイントで打ち抜いてくる雷光。
よくわからない戦闘員の群れ。
襲い来る無数の鉄球。
あれもこれも全部まとめて。
全て、全てお前のせいだぁぁ!!
「ふん、人間が大層な言葉を吐く。だからなんだ、勝てるとでも思っているのか？」

「勝つさ。俺は今から、お前をぶん殴る。それが、それだけが俺の今の願いだっ!!」
理由なんざどうでもいいんだよ!
お前がそこにいて、俺がお前を殴りたいと感じている!
お前を倒す理由なんざ、それで充分だろうがッ!
モグラさんも無事に復活した!
なんかおデコに張り付いてるけど気にしない!
モグラさんも殺る気マンマン、今なら出来る!
「いくぞ……《禁手》（バランス・ブレイク）ッッ!!」
最っ高に最低な八つ当たりをしてやんよ!

17話

「よかったの？アザゼル」
「あん？何がだよ」
カズキを転送した後、たばこを吹かしてたらベネムエが話しかけてきた。
「コカビエルの事よ。いくら鍛えても、今のカズキちゃんじゃ厳しいでしょう？」
「あいつ弱っちぃからなぁ」
カラカラと笑いながら答える。
だから面白いんだけどな。
「だったらなんであんな無茶振りするのよ。下手したらカズキちゃん、死んじゃうわよ？」
「ダイジョーブだよ、面倒見のいい兄貴が見守ってるからな」
ヴァーリの奴、珍しく素直にたのみを聞きやがった。
赤龍帝が気になるのもあるんだろうが、カズキが気になるんだろ。
あいつも大概過保護だねぇ。
ヴァーリは多分、近いうちに俺たちから離れていく。

しかし、カズキのことはどうするのかね？
一緒に連れて行く気か、それとも無慈悲に突き放すか。
まぁいい、若者は好きに生きるといい。
ケツモチは、俺ら年寄りの仕事だ。
いや、まだ若いけどな！
あいつらに比べればって話だ。
「にしても、少しやり過ぎたかしら？　結構ボロボロになってたけど」
「あいつは基本ものぐさだからな。手っ取り早くエンジン付けるには、あれがちょうどいいのさ」
負けたらペナルティって言っといたしな。
多分今頃、コカビエルでストレス発散しようとしてんじゃねぇかな？
「さて、ヴァーリに持たせた通信機の映像を見ながら、酒でも呑むかね」
「あら？　いいじゃない、付き合うわよ？」
「どうせてめぇら全員観てくんだろうが。おら、つまみ取りに行って来い。俺は酒を持ってくる」
俺様のとっておきを開けちまおうかね。
さて、どうなるか楽しみだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「いくぞ……《禁手》（バランス・ブレイク）ッッ!!」

カズキの掛け声と共に、掌のモグさんが光り輝く。

その光はどんどんと輝きを増し、カズキの身体を包んでいく。

カズキの周りに力が渦巻いて集まっていくような感覚だ。

その光を弾け飛ばす様に、いきなり蒸気が噴き出す。

空気の抜ける様な音が収まると共に、カズキに纏わり付いた蒸気も次第に晴れていく。

関節の可動を邪魔しない程度の銀色の装甲。

背部にはブースターみたいな機械。

腕部と脚部には、火花を散らしながらモーター音を響かせるタービン。

頭部は、どことなくモグラをイメージした様なフルフェイスのヘルメット。

俺の『赤龍帝の鎧』とは違う。

重要な箇所以外の守りを捨てて、機動に特化した感じだ。

それに、何処か生物よりも機械を連想させる。

「ほぉ……それが貴様の禁手か」

コカビエルが不敵な笑みを浮かべながら手元に光を集め、光が剣の形に変わる

槍以外にも出来るのか。
「いいぞ、かかって来い。遊んでやろう」
背中のブースターを吹かしながら、カズキはコカビエルへ突っ込んでいく。
カズキが拳を振りかぶると、突如としてコカビエルの足元から土の柱が襲いかかった。
今迄は地面を殴って発動してたのに、その動作もいらないのか。
地味だけど、ノーモーションの攻撃は怖い。
「ふん、くだらん曲芸を」
コカビエルは、つまらなそうに光の剣で薙ぎ払う。
しょせんは土の塊だ、簡単に壊され――
「なにっ!?」
え!?壊せてないぞ!?
コカビエルが仕方なく避けると、そこにはカズキの拳が待ち構えていた。
「ぐがっ!……っ何故だ!?土くれごとき何故破壊できん!!」
カズキは返事もせずに殴り飛ばしたコカビエルに再び飛び掛かった。
コカビエルも迎撃するが、その度に動きを阻害するように地面から土が伸びてくる。
それを避けれても、今度はカズキの拳が顔や身体に深々と突き刺さるのだ。

すげぇ、俺たちが束になっても攻撃が擦りしかしなかったコカビエルを完全に翻弄している。

あいつ、どんだけ強かったんだよ。

これならライザーだって楽勝だったんじゃないか？

苦し紛れにコカビエルが剣をカズキに投げつけてきた。

不意をつかれたのか、カズキが躱し損ねてメットの一部が割れ、右側の顔部分が露出する。

それでも怯むことなく、ひたすらに黙々とこぶしを叩き込んで……あれ？

カズキ……笑ってる？

コカビエルを殴りながら、笑ってる。

涙を流しながら、笑っている。

我慢出来ないというか、思わず溢れてしまったかのような、そんな笑みだ。

「ぶ、部長。カズキの奴……」

「ええ、泣きながら笑ってる。カズキくん……彼は今、怨みを、憎しみを吐き出しながら戦っているの？」

「カズキくん……貴方は一体どれだけの苦しみを……」

朱乃さんが呟いた後に、殴られ続けたコカビエルが大きく後ろに飛び退いた。

カズキは追わずにその場に棒立ちになっている。
「ぐふぉぁ、何故だ……何故人間の拳程度でこの俺がダメージを……ッ！」
コカビエルの言葉が途中で止まり、カズキの腕を凝視している。
釣られて見ると、カズキの拳を淡く光が包んでいる。
「なるほど……闘気、いや純粋な生命のエネルギーを消費して拳に纏わせているのか。狂っているな、人間の身でそんな真似をすればすぐに死ぬぞ」
は？　死ぬって……カズキが？
何を言って……
「お前を殴れるなら、それでいい」
カズキが右手の手首を握りながら答える。
手首の甲の部分にある穴から、ドリルが飛び出してタービン音を響かせながら回転しだす。
……っ馬鹿野郎！
「カズキ！　そんな力使うな！　今から俺たちも一緒に戦えば……！」
「何とかなるとでも？　この場で俺とやり合えるのは、こいつだけだ。足手纏いなんだよ、お前らはな」
うぐっ！　でも、このままじゃカズキが!!

「バカ、敵の言葉を鵜呑みにするな。俺が死ぬ訳無いだろう」
カズキがこちらを振り向きもせずに言う。
口調が柔らかくなって、俺たちのよく知るカズキの物に戻っている。
もしかして本当にあいつの嘘……？
「嘘ですわ」
「朱乃さん？」
朱乃さんの方を振り向くと、凄い哀しそうに顔を歪ませながら喋り出した。
「闘気なら問題ないんです、あくまで生命エネルギーから溢れるものですから。でも、生命エネルギーそのものを使ったりしたら身体に影響がない訳ありません……」
つまり、殴る度に寿命を削ってんのか!?
おい、カズキ……ッ！
もう一度止めようと思い振り向くと、そこにはこちらをみながら困った様に笑うカズキの顔。
おい……なんだよその顔っ……！
お前、本当に死ぬ気なのかよ……!!
『おい、相棒。あいつを死なせたく無いんだろう？』
ドライグ!?　なにか方法があるのか？

『力を溜めて、あいつに譲渡しろ。なんとかなるかもしれん』
そうか！その手があった!!
俺は即座に力を溜め始めた。
それにしても、やけに親切だな？
『ああいうバカは、嫌いじゃないからな』
そうか、お前もカズキを気に入ってくれたのか。
絶対助けてみせるぞ、カズキ!!

俺たちの想いとは裏腹に、戦闘は続いていく。
先ほど手首から出したドリルの回転音を響かせながら、コカビエルに突っ込んでいく。
「フハハハハ！　そうだ、これだよ！　俺はこういう感覚が欲しかったんだ!!」
コカビエルも手元に二本の光の剣を作り出し、笑いながら迎撃に出る。
コカビエルの光の剣とカズキのドリルが凄まじい音を立てながら、何度もぶつかり合う。
パワーではコカビエルに分があるのか、押し負けてカズキが後ろに下がる。

その隙を逃さずに、剣を大量の小さな槍に変えて放った。
「そうら、これが躱せるかな!!」
カズキに槍が殺到し、巨大な土煙を巻き上げる。
しかし、煙が晴れるのを待たずにコカビエルの背後からカズキが現れて殴り飛ばした。
「なに!?　ぐあぁぁぁ!」
煙が晴れるとそこには大きな穴が。
地面に潜って回避して、そのまま攻撃したってことか。
コカビエルもすぐに体制を立て直し、剣に持ち替えて再び踊り掛かった。
カズキも動きを止め、その場で相対を始める。
「楽しいっ!　楽しいぞ人間!!　あの戦争が終わってから、こんなに楽しかったことはない!」
「ぐっ……!」
「もっとだ!　もっと俺を楽しませてくれぇ!!」
コカビエルの攻撃を受け流しながら殴るカズキ。
カズキに殴られながらも攻撃を止めないコカビエル。
カズキが押している!?

しかし、段々とカズキの動きが悪くなってきた。
腕や脚を包んでいた光も、少しづつではあるが輝きが薄れている様に見える。
「っいけない！　みんな、カズキくんの援護にいくわよ!!」
部長の掛け声で、みんなが一斉に駆け出した。
木場や朱乃さん、先程まで戦意を保てなくなっていたゼノヴィアまで一緒に突っ込んでいく。
「邪魔をするなザコどもがぁ!!」
しかし、コカビエルの声と共に放たれた翼による攻撃で、虫を散らすように簡単に薙ぎ払われてしまった。
その隙にカズキが蹴りを放ち、コカビエルは宙に舞い上げられるがそのまま空中に止まる。
お互いに肩で息をしているが、カズキの顔色が悪い。
くそ、ドライグ！
まだ溜まらないのか？
『そろそろだ、用意をしておけ』
早くしてくれ！
カズキがもうっ……！

「クハハ、そろそろ限界か？　お前のお陰で久し振りに楽しい時間が過ごせた。お礼に最大威力で葬ってやろう!!」

今まで使っていた光の剣を消し去り、空中で巨大な槍を作り始める。

デ、デカイ!!

「畜生め……ここで負けたら、意味がないんだよっ！」

カズキの声に反応して胸の装甲が開き、内部のオレンジ色の結晶体が露出する。

呼応する様に腕と脚に取り付けられたタービンも回転を始め、火花を散らしながら速度を上げていく。

胸の結晶体に、エネルギーが収束していく！

「何をしようが無駄だ、全員纏めて吹き飛ぶがいい!!」

コカビエルはもはや槍とも呼べない巨大な柱を振りかぶり、全力で投擲する。

カズキに向かって一直線に飛んでいくが、カズキは避けようともしなかった。

「お前がぶっ飛べ、くそったれぇぇ!!」

カズキの言葉と共に、胸からレーザーみたいなのが発射された！

互いの攻撃が拮抗し合う。

しかし、段々とカズキが押され始める。

くそ、このままじゃあ……！

『相棒、待たせたな』
ホントに待ってたぜ！
攻撃の余波による衝撃が凄いが、そんな事言ってられない。
なんとか踏ん張りながらカズキににじり寄り、背中まで辿り着く。
「カズキ、今の俺にはこれが精一杯だ。情けないけど、頼んだ!!」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!!』
肩に触れて譲渡完了。
一気に膨れ上がるカズキのレーザー。
それはコカビエルの巨大な槍を軽々と消し去り、コカビエル自身を襲う。
「俺の槍がこんな容易く!?くっ、舐めるなあぁぁ!!」
結界ごとぶち抜いて、空高くに消えていくレーザー。
コカビエルも踏ん張ってはいたが、均衡を保てなくなり光に呑まれ、最後にはブスブスと音を立てて地面に墜落した。
カズキの勝ちだ!!
「やった……これで……みんなに……」
カズキは何かを呟くと、前のめりに倒れてしまった。
アーシアが駆け寄り、神器で癒し始める。

やっぱとんでもないな、カズキは。
ほとんど一人で堕天使の幹部を倒しちまった。
何時になったら追いつけ――「い、今のは危なかった……」っ!?
「赤龍帝の力を譲渡すると此処まで化けるとは……こいつは危険だ。今、確実に殺す!」
まだ動けたのかよ……!?
くそ、カズキは殺させない!
カズキを庇う為にコカビエルとの間に入り、俺たちが身構えた。
その時、空から声が降ってきた。
「――ふむ、戦いを掠め取るみたいで気がひけるんだがな……仕方ないか」
翼の付いた鎧を纏って、そいつは降りてきた。
声が大きい訳でもないのに、呟いたそのたった一言が、この場の全てを支配する。
「っ、【白い龍】(バニシング・ドラゴン)か!」
白い龍って確かドライグが言ってた白龍皇って奴か……?
でも、俺たちに敵意を向けてこない。
どういうことだ?
「哀れだなコカビエル、人間にそこまで無残にやられるとは。アザゼルに頼まれてるんでね、お前を連れて行く」

「アザゼルだと!?　そうか、さては貴様最初からこの男を!」
コカビエルが最後まで話す前に、白龍皇の拳打で強制的に黙らされた。
弱ってるからってコカビエルがワンパンか……こいつも半端ない強さだな。
その後、それぞれの神器の中にいるドライグとアルビオンが言葉を交わし、白龍皇はコカビエルとフリードを担いで連れて行こうとする。
「そうだ、赤龍帝。そいつにこれを飲ませろ、失った生命エネルギーもそれなりに戻るはずだ」
白龍皇はそう言いながら、小瓶を投げ渡してきた。
これは確か、【フェニックスの涙】。
ライザーとの戦いの時にレイヴェルが持ってたな。
「赤龍帝、もっと強くなれ。最低でも、そいつ以上にはな」
白龍皇はそう言うと、凄い速さで飛び去って行った。
なんでカズキを助けてくれたんだ……?
それにしても、最後の最後で凄い注文をしてくれた。
カズキより強くなるって、どうすりゃいいんだよ……。
朱乃さんに受け取った小瓶を手渡すと、カズキに飲ませてあげている。
カズキはまだ目覚めないが、部長が言うには何とかなるそうだ

取り敢えず、これで今夜は終了か。
なんかやたらと長い夜だった。
……もっと、強くなりてぇなぁ。

１８話

おぉ、成功したっぽい。
シゴき中にアザゼルさんから聞いたのだが、意志を持つ神器の禁手には、鎧の様な全身に装着する様な物が多いそうだ。
ライザーをぶちのめした時のイッセーの様に。
俺もモグラさんと一緒にイッセーみたいな変身を!!
そう思ってやってみたが、イッセーとはちょっと違うな。
なんていうか、メカっぽい。
メタリックでカッコいいのだが、装甲薄くね？
出来れば鎧でガチガチにして、攻撃食らっても痛くない様にして欲しかった。
というか腕と脚のこれは何？
バッファ○ーマンの腕のカバーみたいなの。
うお、回転すんのか。
タービンってやつ？
火花散って危ないな。

この掌と手首にある穴って何だろう？
ビームとか出たりするのかな？
ロマンを感じるね。
ヘルメット被ってるのに外の様子とかもちゃんとわかるのも地味に凄い。
ちなみに口にドリルは付いてない。
一応言っておく。何故かはわからないけど。
身体のチェックをしてたらなんか落ち着いてきちゃったな。
お、蒸気が晴れてきた。
さて、気合を入れてブチのめす！
「ほぉ……それが貴様の禁手か」
ニヤニヤしてんなハラ立つ。
あ、アザゼルさんもやってた光の剣だ。
他の人に厨二病だと馬鹿にされてたけど。
「いいぞ、かかって来い。遊んでやろう」
言われなくてもやったんよ。
てうぉ、なんか加速した!?
後ろに加速装置ついてんのか、ビックリした。

いや、背中は見えないしね？
殴ろうと思ったら勝手にコカビエルに土の柱が襲いかかった。
あ、モグラさんがやってくれてんのか。
ありがとー。
「ふん、くだらん曲芸を」
モグラさんの好意になんて言い草だ。
カッコつけて剣振り回しといて土も切れないでやんの、ププッ！
え？　あれもモグラさんなの？
いつの間にかハイスペックになってるね、モグラさん。
ともかく、まずはそのムカつく面に一発！
フハハ、モグラさんの援護のおかげで面白いように拳が当たる！
はいボディ、リバー、んでもって横っ面ぁ！
まだまだ行くぞオラァ！
剣が飛んできてメット割れちゃったけど、そんなの気にせず殴りまくってやる！
お前のせいで、お前の所為で俺はぁ！
あぁくそ、特訓の事思い出したら涙出てくる……。
む、余計な事考えてたら逃げられた。

「ぐふぉぁ、何故だ……何故人間の拳程度でこの俺がダメージを……ッ！」
あん？　何ガンつけて……いや、俺の手を見てる？
あれ、何か光ってる。
成る程、これが噂の『気』ってやつか。
今のテンションなら手からビームも出せそうな気がする。
「なるほど……闘気、いや純粋な生命のエネルギーを消費して拳に纏わせているのか。狂っているな、人間の身でそんな真似をすればすぐに死ぬぞ」
そんなハッタリ効きません。
空孫悟（そらまごさとる）はドラゴン波バカバカ撃っても死ななかったし。
「お前を殴れるなら、それでいい」
何、モグラさん。
え？　ドリル出るの!?　やるやるっ！
ウッヒョー、テンションあがるわぁー!!
「カズキ！　そんな力使うな！　今から俺たちも一緒に戦えば……！」
おいおい、そんなに簡単に騙されるなよ。
「バカ、敵の言葉を鵜呑みにするな。俺が死ぬ訳無いだろう」
人間、そんな簡単に死ぬ訳ないない。

じゃなかったら、アザゼルさんやヴァーリさん達に長年虐められ続けた俺は、ここにいない。

「嘘です」

意外な事に朱乃さんまで信じてしまった。

なんだかんだで抜けてる所があるんだなぁ、朱乃さんって。

つい笑いを堪えながらイッセーたちの方を見てしまった。

何でみんな辛そうな顔してんの？

あんな言葉を信じるなんてみんな純粋すぎるな、悪魔のくせに。

さぁ、八つ当たりの続きだ。

ドリルをキュインキュインさせながら、コカビエルに突っ込む。

「フハハハハ！　そうだ、これだよ！　俺はこういう感覚が欲しかったんだ!!」

どんな感覚だよ、殴られて得られる感覚って。

こいつ、朱乃さんの対極の位置にいるドM？

だからアザゼルさん達にハブられてるのか？

なんかあんまり殴りたくなくなってきたな、喜ばすだけとか。

「そうら、これが躱せるかな!!」

うぉ！　あれはアザゼルさんが大好きな光の槍の滅多打ち!?

あれは喰らいたくないっ！
モグラさん、回避、回避!!
モグラさんの能力で足下に穴を開けてそのまま接敵。
背後から思い切り殴り飛ばす。
ちっ、あんま効いてないか。
すぐに態勢を立て直して、光で剣を形成しながら飛びかかってきた。
「楽しいっ！　楽しいぞ人間!!　あの戦争が終わってから、こんなに楽しかったことはない！」
「ぐっ……！」
「もっとだ！　もっと俺を楽しませてくれぇ!!」
くそ、選択間違えた！
この人羽まで硬いの!?
手数が違いすぎる。
いまは受け流せるけど、そろそろマズイ。
殴っても堪えてくれないし、笑い声にドン引きしてヤル気は下がるし散々だ。
「ついけない！　みんな、カズキくんの援護にいくわよ!!」
おぉ、そうだ！

助けてみんな！　変態に襲われる!!
「邪魔をするなザコどもがぁ!!」
早いよ!?　やられるの早過ぎるよ、もっと頑張って！
くそっ、離れろ変態め!!
コカビエルを蹴り上げて、距離を開いて何とか仕切り直す。
しかし、さっきから調子が悪い。
息切れするし、心臓がバクバクとうるさい。
スタミナにはそれなりに自信あったんだけど。
どんだけ変態が嫌いなんだ、俺。
いや、好きでも困るけど。
「クハハ、そろそろ限界か？　お前のお陰で久し振りに楽しい時間が過ごせた。お礼に最大威力で葬ってやろう!!」
うわぁ、お空にでっかい槍が。
あれは無理だろ。
これは負ける。
まぁ負けてもどうせアザゼルさん、が……俺を、シバき倒すよね。
幹部の皆さんも、一緒になって無理難題吹っ掛けてくるに決まってる。

……負けたくねぇ!!
「畜生め……ここで負けたら、意味がないんだよっ！」
ペナルティは嫌だペナルティは嫌だペナルティは嫌だ……!!
モグラさん、なんか無いの!?
え？　ある？
じゃあそれで行こう!!
使った後倒れるかも？
どうせ使わないで負けても倒れるまで虐められるんだから変わんない!!
モグラさん、ＧＯ!!
俺の意思に反応して、胸の装甲が開く。
同時に手脚のタービンが回転を始め、徐々に速度が上がっていく。
なんだ、スゴイかっけぇ！
これは男の子なら、ついテンションが上がってしまう!!
「何をしようが無駄だ、全員纏めて吹き飛ぶがいい!!」
コカビエルが叫びながらあの巨大な槍を振りかぶっている。
けど、今のテンションで負ける気がしない。
一緒に行くぞ、モグラさん!!

「お前がぶっ飛べ、くそったれぇぇ!!」
ビーム！　俺の胸からビーム出た!!
しかもめちゃくちゃ太い。
あぁ、女は胸からミサイルを出して、男はゴン太ビームを捻り出す。
意味深だね、ビーム。
アホな事を考えてる間にも、互いの攻撃が拮抗し合う。
てかこのビーム、撃ってると凄い疲れる。
足もガクガクしてきた。
「カズキ、今の俺にはこれが精一杯だ。情けないけど、頼んだ!!」
うぉ、イッセーいつの間に後ろに。
なんで肩に手を置いてるの？
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!!』
あれ？　イッセーの籠手から声が……うおぁ!?
ビ、ビームがゴン太から極太に！
そう言えば力が渡せるようになったとか言ってたっけ。
つまりこれは！
『親子ドラゴン波』！

いや、親子じゃないけど。
似た様なもんだろ、多分。
「俺の槍がこんな容易く!?くっ、舐めるなあぁぁ!!」
うわ、なんかガラスが割れる様な音した。
あのビーム、飛んでったけどどこまで行くんだ?
しかし、あのビームはダメだ。
モグラさんの言った通り、倒れそう。
もう使いたくないな。
うわ、コカビエルが焼け焦げて落ちてきた。
これでもう大丈夫だよね?
あ、やばい。
ホントに意識が……
「やった……これで……みんなに……」
虐められなくて、済む……。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
起きました。
ここ、俺の家か?

うーん、どうにも身体の調子が悪い。
関節とかゴリゴリいってるし。
あれ？　なんで朱乃さんがここで寝てんの？
モグラさんも一緒に寝てるし。
「む、起きたのかカズキ」
「え!?　カズキさん気が付いたんですか!?」
ゼノヴィアにアーシアちゃんまで？
なんで俺の家にいるんだ？
「何、隣へ越してきたからな。隣人とは親しく付き合うものだろう？」
マジでか、いつの間にそんな話に。
……あぁ、あれからもう何日か経ってるのか、道理で関節が固まってる訳だ。
みんなで看病してくれてたのか。
ありがとね。
あ、アーシアちゃんがこけた。
そんなに慌てなくても……お？
今の音で朱乃さんも起きちゃったみたいだ。
「カズキ……くん？」

「おはようございます、朱乃さん」
うぉ、いきなり抱き着かれた!?
な、何だこれ、ドッキリ？
カメラは??
朱乃さんなんか泣いちゃってるよ!?
だ、抱き締め返せばいいのか？
いや待て。
抱き締めたりした途端、プラカードを持ってイッセー辺りが登場するに違いない。
それで朱乃さんが
『本気にしました？　ウフフ』
とかSな笑顔で言うに決まってる。
お、俺は騙されないぞ!?
騙されないからな、頭を撫でたりなんかしないんだからな！
「髪の毛サラサラで、撫でるの気持ちいーとか思ってないからなっ！」
「声に出てるぞカズキ。ふむ、アーシア。私たちは俗に言う『お邪魔』という奴なのではないか？」
「そ、そうですね！だから静かに観察しましょう、後学のために!!」

この状況から何を学ぶ気なんだアーシアちゃん。
人の陥れ方かなにか？
というか、助けて。
考え過ぎてなんか変な汗出てきた。
「お邪魔しまーす、カズキの様子は……」
きた！イッセーきた！
これで勝つる!!
「助けてくれイッセー!!」
イッセーは俺を見るなり一言。
「な、なんだその羨ましからん状態は！」
駄目だ、こいつは役に立たん。
「あ、朱乃さん。俺、もう大丈夫ですから……ね？」
ほらこんなに元気！
そう言いながら、イッセーにコブラツイストをかける。
必死だからイッセーの悲鳴なんて聞こえない。
「ふふ……本当に、へんな人ですわね」
お、笑ってくれた。

すまんイッセー、お前はやっぱり役に立つ男だったみたいだ。

その後に他のみんなもやって来て、オカルト研究部が勢揃いした。

だから狭いってば。

「はぁ、俺が倒れた後にそんな事が……」

コカビエルの言ってた事本当だったのかよ。

生命エネルギーって……そんなおっかないもん垂れ流しにしてたのか、俺。

朱乃さんに本気で心配されたし、モグラさんも気を付けてくれるらしいからもう大丈夫だろう。

てかヴァーリさん、いたならもっと早く助けてよ。

相変わらず厳しい人だなぁ。

今度会ったらお礼言っとかないと。

モグラさんも少し成長した？

体重も肌触りも毛並みもいつも通りパーフェクトだ。

おでこにオレンジ色の宝石みたいなのが張り付いてるくらいしかわからん。

「そういえば、ゼノヴィアはこれからどうすんの？」

悪魔に転生してるのは意外だった。

何でも神の不在を知ってヤケクソで悪魔になってみたらしい。
人の事言えないが、行き当たりばったりな人生だな、こいつ。
「部長が部屋を用意してくれたし、学校にも通える様に取り計らってくれた。悪魔稼業をしながらやりたい事でも探してみるよ」
そういや隣に越してきたんだっけ？
隣ってあのマンションだろ？
高いのに勿体無い。
「まぁ何かわからなかったらウチに来い。飯位なら食わせてやるから」
「む、良いのか？　カズキの料理は美味かったからな、楽しみだ」
なんかこいつに餌付けしてばっかだな。
「あら？　だったらカズキくんの家に引っ越す？　一緒の方が何かと便利でしょ？」
もちろんカズキくんがよかったら、だけど。
リアス先輩が悪戯っぽく笑いながらそう言う。
困るの解ってて言ってるな、この人。
悪魔かこの人。あ、悪魔だった。
ゼノヴィアは乗り気だったが、結局朱乃さんの一声によりその案は否決。
その後小猫ちゃんのリクエストで、俺が料理を作って復帰祝い兼祝勝会が行われた。

女性陣もそれぞれ料理を作ってくれたりして、なかなか楽しかった。
アーシアちゃんや朱乃さんはイメージ通りだったが、リアス先輩や小猫ちゃんまで料理をしたのは意外だった。
それを口に出したらリアス先輩は黒い笑みを浮かべ、小猫ちゃんが不貞腐れてしまった。
モグラさんと新作芸を披露して、機嫌取りに必死でした。
え？　いつの間に練習を？
どんなに凄い特訓からでも、サボるのが私です。
結局バレて三倍虐められるけどね！
これで暫くは静かに過ごせるといいなぁ。

間話1

「使い魔を探しに行く?」
　コカビエルの一件から数日経った放課後。
　お呼ばれして朱乃さんの淹れてくれた紅茶を啜ってた俺に、リアス先輩が突然話を振ってきた。
　ゼノヴィアが新しく仲間に加わったので、使い魔を探しに行くそうだ。
「そう、行ってらっしゃい」
　俺には関係の無い話だ。
「貴方も行くのよ」
　何でだよ。
「俺、人間ですよ?　必要ないじゃん」
「以前にもイッセーとアーシアの使い魔を探しに行った事があるのだけれど、イッセーの使い魔がまだ見つかってないのよ」
　それで手伝えと?
　アーシアちゃんの為ならまだしも、イッセーのだろ?

知らんよンなもん。
ちなみにアーシアちゃんの使い魔は『蒼雷龍』（スプライト・ドラゴン）というカッコよいものらしい。
「どうせ冥界の危ない所とかに行くんでしょ？　嫌ですよ俺」
痛いのキライです。
「あなた、以前イッセーに願いを叶えて貰った対価、まだ払ってないでしょ？」
は？　なんかして貰ったっけ？
……あ！
ゼノヴィア達が来た時の焼きそばパンか!?
さ、詐欺くせぇ！
そんなん誰も覚えてないぞ!!
「悪魔は対価で動くものなのよ。じゃあよろしくね？」
こうして、ゼノヴィアとイッセーの使い魔探しに着いて行く事になった。

「で、ここがその使い魔の森か」
何やら不気味な鳴き声が響いてくる。
いかにもって感じの森だな。

ここで案内役を待つらしい。
「よし、探したけど見つかりませんでしたって事にしてもう帰ろう」
「どんだけやる気ないんだよ、カズキは」
「私の使い魔も探すんだ、もう少し真面目にやってくれ」
イッセーとゼノヴィアが文句を言ってくる。
リアス先輩と朱乃さんは用事で来れないので、ここに居るのは残りの眷属。
モグラさんは小猫ちゃんに抱かれて腕の中。
最近ようやく呼んだら来てくれるようになったと喜んでた。
次は俺みたいに一緒に芸をしたいそうだ。
「だって俺にメリットないじゃん」
やる気なんぞ出るわけがない。
「メリット……私の胸でも揉むか？」
「俺が殺される未来しか見えないから却下」
ゼノヴィアのアホな意見を速攻で却下する。
デメリットなんてレベルじゃないだろ。
イッセー、お前はいちいち反応するな。
「ゲットだぜぃ！」

ふぁ!?

突然の声に驚き振り向くと、そこには帽子を前後逆に被り、田舎の虫取り少年みたいな格好をしたおっさんの姿が。

なんだ、変質者か。

なんか最近変質者によく会うな。

俺もイッセーと同じで変人を呼び寄せる様になったのか。

凹む。

「君は以前も来た冴えない少年だね、話は聞いているぜぃ！　そこの青髪美少女と二人分の使い魔を探すんだろう？　さぁさっそく行くぞ、ゲットだぜぃ！」

小猫ちゃんと木場が言うには、これでも使い魔ゲットのスペシャリストなんだとか。

色んな意味で危ない人にしか見えん。

取り敢えず着いて行くと、コウモリやらトカゲやら。

それっぽいのに沢山遭遇したが、ゼノヴィアの眼鏡には叶わなかった様だ。

何故か、俺には沢山寄ってきたけど。

尻尾に火がついたトカゲは目が可愛かった。

首が沢山あるヘビが出てきた時はビビったが、モグラさんの一声ですぐに帰ってしまった。

なんでも毒が凄い奴だったそうだ、おっかない。
そんなの追い払えるとか、モグラさんって実はかなり凄いのか？
服だけを食べるスライムにも遭遇して、イッセーが使い魔にしようとしたが、小猫ちゃんに事前にお願いされていたモグラさんの土プレスで潰され、穴に埋められた。
イッセーが
「また……守れなかった……！」
とか、かっこいいセリフをカッコ悪く言っていたがどうでもいいよね。
他にも色々と探したが、結局使い魔を手に入れる事は出来なかった。

「――――で、そのままみんなで帰ってきたの？」
森から帰ってきた次の日。
報告がてら再びオカ研を訪ねると、リアス先輩が紅茶を飲みながら嘆息した。
朱乃さんは横でニコニコしてる。
「しかしカズキくんは凄いね。高位の魔物にあんなに好かれる人間、聞いた事ないよ」
「火蜥蜴、ウンディーネ、ヒュドラまで。普通ならありえません」
木場と小猫ちゃんが呆れる様に言ってくる。
しかしあれをウンディーネと呼んではいけない。

世の男達の夢が音を立てて崩れてしまう。
まぁ、全部モグラさんが追っ払っちゃったけどね。
嫉妬か、可愛いなぁ。
「しかし、あの機械のお馬さんやライオンさんは何だったんでしょう?」
「さてね。私はあの獅子を使い魔にしたかったのに、奴はカズキにしか興味を示さなかったからな」
振られてしまった。
ってそんな悲しそうに言われてもなぁ。
みんなで森を歩いてたら、妙に機械っぽい魔物と何回か遭遇したのだ。
ゼノヴィアはその中のライオンっぽいのが気に入ったんだが、完全無視。
俺の方を見て一鳴きした後、森の奥に消えてしまった。
それと似たのに何回か遭遇した。
「えーと、馬にライオン、ヘビ、牛、イノシシ、あと赤いドラゴンか。ドライグがあんなドラゴン知らないって言ってたけど」
龍の帝王さまが知らない龍ってなんだよ。
しかもやたらと魔物に好かれるからって、あの変質者にここで働かないかとか言われるし。

結局二人の使い魔も見つからないわ、変態に絡まれるわ散々だった。
「しかし凄いですわねカズキくん。未知の魔物まで手懐けてしまうだなんて」
「何ていうか、本当にカズキくんは規格外ね。実はまだ何か隠してたりしない？」
リアス先輩が苦笑しながら尋ねてきた。
実はアザゼルさんとかヴァーリさんと知り合いで、バラキエルさんのお願いで朱乃さんを守りに来たんだよ～。
……うん、殺されるな。
悪魔と堕天使って仲悪いらしいし。
何とかしてよ、アザゼルさん。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「アザゼル、赤龍帝を見てきたそうだな」
「おう、年相応のスケベなガキだったな」
あれも見てて飽きないタイプだ。
アザゼルは笑いながらそう言った。
俺は強くなるか聞きたかったんだがな。
「今の奴は、俺の敵に成り得ない。あれならカズキの方が余程強いよ」
「カズキねぇ、あいつは強くなりたいとか思わねぇからな。必要なかったら、戦わずに逃

げ回る奴だ」
アザゼルはまた楽しそうに笑う。
この男は本当にカズキを気に入っているな。
まぁ、俺もだが。
「さて、ようやく対談の目処がついた。コカビエルの馬鹿が暴走したお陰でもあるのかね」
コカビエルは地獄の奥底、コキュートスで永久冷凍の刑に処された。
戦争を起こそうとした男が原因で和平が結べそうとは、なかなか皮肉な話だ。
「俺は人間界にいくがヴァーリ、お前はどうする？」
おそらく赤龍帝にちょっかいをだしに行くのだろう。
今までも度々接触していたそうだ。
この男の神器好きにも困ったものだ。
「俺も行くよ、この間は赤龍帝に挨拶も碌に出来なかったからな。しっかりと見合ってくるさ」
「そうかい。お前さんには会談にも出てもらうんだから、あんま無茶すんなよ」
アザゼルはそう言うと、人間界へと転移していった。
赤龍帝はまだ弱い。

しかし、宿主が貧弱だろうとその能力が強大なのは変わらない。
よく鍛え上げるように発破でもかけるさ。
ついでにカズキにも、赤龍帝を鍛える様に頼んでおくかな。
カズキ……。
俺と同じ様に父親という存在に否定された者。
俺は一時期腐っていたが、あいつは違う。
環境に適応しようと努力して、居場所を掴み取った男だ。
心は俺などより余程強い。
そういう強さもあると、俺に教えてくれた。
俺はもうすぐ、アザゼル達の元から離れる。
アザゼルは既に察しているだろうが。
下手に俺と関わりがあると周りに知られれば、余計に面倒事が増えると思ってあの場は他人のふりをしておいたが……意味はなかったかもな。
俺の勝手にお前を巻き込みたくはないが、これも二天龍に関わった者の定めなのかもしれない。
まぁ自分の身を守れる程度には鍛え抜いたし、禁手にも目覚めたのだ。
もう心配してやる必要もないか。

お前は俺をどうしようとするかな。
敵対するか、それともついてこようとするか。
連れて行くのも楽しそうだが、カズキはあくまで人間なのだ。
人間としての幸せを掴み、人間としての人生を歩んで行って欲しいとも思う。
決断の時は、着々と迫ってきている。

四巻　停止教室のヴァンパイア
１９話

今日も今日とてオカ研部室に入り浸る俺。
もう入部してるのと変わらなくないかな？
まぁお茶は美味いしお菓子は出るし、モグラさんもアーシアちゃんや小猫ちゃんと遊びたいみたいだからいいんだけど。
そういえば最近、その輪に朱乃さんとゼノヴィアが加わっているのをよく見る。
朱乃さんは前からモグラさんと遊んでくれていたけど、最近は特に熱心に構ってる気がする。
後から聞いたが、ゼノヴィアもアーシアちゃんにちゃんと謝って許して貰えたと嬉しそうに話していた。
今度一緒に買い物に行くらしい。
モグラさんもゼノヴィアにやけに懐いているし、最近は特に事件もない。
良い事尽くめだ。
リアス先輩は大変お怒りの様だけど。

なんか、イッセーのお得意様が実はアザゼルさんだったそうだ。
何やってんだあのオッサン。
イッセーの神器を奪うつもりだと疑って、凄いヒートアップしている。
すぐにイッセーとイチャつき始めたけど。
見てて暑苦しいんだよ、他所でやれ。
終いにはイッセーが木場とまでイチャつき始めた。
見てて寒気がするんだよ、他所でやれ。
最近はクラスの女子が俺まで木場とのＢＬネタにし始めてるし。
そんな風にのんべんだらりと過ごしていると、なんとサーゼクスさんがグレイフィアさんを連れてやって来た。
「やあ、我が妹とその眷属たち。カズキくんも久しぶりだね」
「どうも、サーゼクスさん。グレイフィアさんもお久しぶりです」
な、なんで皆してそんな目で俺を見る!?
ちゃんと挨拶したじゃないか。
え？　魔王様をさん付けとかあり得ない？
いや、本人がそう呼べって言ったし。
なんでそこでみんなして溜め息吐くのさ。

おい、何だその『カズキくんだし』って。
なんでも授業参観の為に、魔王のお仕事を休んでまで来たらしい。
休めるのか、魔王。
今度この学園で悪魔、天使、堕天使のトップ会談を行うので、その下見も兼ねているのだそうだ。
仕事も兼ねるという言い訳付きか。
どんだけ授業参観来たかったんだ？
まぁ、俺には関係ないからお好きなように――
「あぁそうだ。カズキくんには人間代表として出席して貰うからそのつもりで」
……は？
「いや、ちょっと意味が解んないんですけど。俺にそんな阿鼻叫喚で人外魔境な場所に出ろと？」
俺に死ねと申すか。
やはりこの人もドSか。
「なに、座ってるだけで構わないよ。友達の君をみんなに紹介したいだけさ」
え？　俺っていつの間に魔王と友達になったの？
それ勇者になるより難易度高くないですかね？

その後もゴネまくったけど全てスルーされ、その日はイッセーの家に泊まるといって逃げられてしまった。

マジでその場にいなきゃダメなの？

……あれ？　よく考えたら来るのってトップだよね？

悪魔はサーゼクスさんともう一人の魔王さん。

堕天使はアザゼルさん。

で、天使はミカエルって人。

なんだ、もう一人の魔王さんに気を付ければ問題ないじゃないか。

仮にも天使って言う人が悪人な訳ないよね！

悩んで損した。

「悩みは解決したのか？　じゃあそろそろ夕飯にしようじゃないか」

気付いたら家に着いていて、ゼノヴィアが部屋で漫画を読みながら寛いでいる。

自然過ぎて気付くのが遅れたじゃないか。

「なぜお前は俺の家にいるのか」

「カズキが食事を用意してくれると言ったんじゃないか」

ゼノヴィアがキッチンに向かう俺に声を掛ける。
「毎日毎日たかりに来んな。ホラ、お前も料理を手伝え。そんで覚えろ」
料理は実際にやらなきゃ上手くならないんだ。
あんだけ刃物振り回せるんだ、包丁もなんとかなるだろ。
「お前最近はマンションに寝に帰るだけで、ほぼここで過ごしてるじゃないか。部屋代勿体無いだろ」
「だからここに住むと言ったじゃないか。却下されてしまったけれど」
「なんで却下されたのか理由を考えろよ」
「朱乃先輩が羨ましいからだろう？彼女も一緒に住めば問題ないと思うんだが」
「問題だらけだバカ。そもそも羨む要素がないだろう。ほら、料理出来たからテーブルの上のもん退かせ」
「おお、パスタか。久しぶりだな、美味そうだ」
ん、今日のはちゃんとアルデンテになった。
この間は茹で過ぎて……は!?
普通に作ってしまった!!
ちゃんと二人分！
「……次からはちゃんと料理手伝えよ？」

「皮剥き位なら手伝おう。そうだ、今日の宿題で日本語の解らないところが――」
最近ずっとこんな感じです。
リアス先輩に訴え様にも、そんな事すれば自然と朱乃さんの耳にも入る訳で……無理です。

さて、夏ですね。
コカビエルが壊した校舎の修繕とかを、生徒会が一手に引き受けてくれたそうだ。
俺も後でお礼言っとかなきゃ。
なのでオカ研は生徒会への借りを返す為に、プール掃除をするらしい。
その後一足先に自分達だけでプール開きをするそうです。
モグラさんがプールで泳ぎたがったので、俺も参加だ。
実はモグラって泳げるんだよ、知ってた？
最近忘れつつある改造人間パワーで手早く掃除を終わらせ、水着に着替える。
モグラさんも白と水色の縞々全身水着を装着済み。
水泳帽と俺が頑張って工作した水中ゴーグルまでして完璧だ！
更衣室で着替えてたら、木場がイッセーに何かを語り始めた。
巻き込まれる前に逃げさせてもらおう。

俺はホモじゃないです。
「お前一人だけ逃げるなよ！　木場がちょっとショック受けてたぞ」
イッセーが慌てて更衣室から出てきた。
どうやら一戦は越えなかった様だ。
「俺にその手の趣味はないから。お前に任せるよ」
「俺だってねぇよ!!」
イッセーが叫んでいる間に女性陣も準備が出来たようだ。
続々と水着姿でプールにやって来た。
イッセーが大興奮している。
気持ちはわかるが、少し落ち着け。
綺麗になったプールに、朱乃さんが魔術で水を溜めて準備完了。
リアス先輩やアーシアちゃんがイッセーに水着の感想を求めていた。
事故に見せかけて沈めてやろうか。
しかしアーシアちゃんと小猫ちゃんのスクール水着が正しい格好の筈なのに、二大お姉様を見た後だと犯罪臭がするのは何故だろう。
「あれ？　ゼノヴィアはどこ行った？」
「ゼノヴィアさんは水着を着るのに手間取ってしまって……先に行っていてくれと言わ

れてちゃいました」
イッセーの問いにアーシアちゃんが答える。
そういやゼノヴィアがいないな。
まぁそのうち出てくるだろう、昨日から楽しみにしてたし。
「うふふ、カズキくんどうかしらこの水着？」
朱乃さんが感想を求めてきた。
だから遊ぶならイッセーで遊んで下さい。
「似合ってますし綺麗ですけど、犯罪臭がします」
手を出したら、後から顔にキズのある人が出て来て金品強奪されそう。
実際出てくるのは堕天使の幹部だからもっと恐ろしいけど。
「喜んで……いいのかしら？　まぁカズキくんですし」
何かを一人で納得し、満足そうにリアス先輩の所に戻っていった。
だからなんなんだよ『カズキくんですし』って。
その後は自由に泳いで過ごした。
泳げない小猫ちゃんに、イッセーが教えてあげたりしてたな。
モグラさんも、小猫ちゃんの使ってるビート板の上に乗って応援してた。
リアス先輩にオイルを塗ったりもしてたな、死ねばいいのに。

俺も朱乃さんに頼まれたけど、バラキエルさんが怖いのでプールに飛び込んで逃げた。
その際木場と水泳で競ってみたが、僅差で負けてしまった。
改造人間パワーに正面から勝つとか、やっぱ凄いなこいつ。
なんでか勝ててやたらと喜んでたのが不思議だったけど。
泳ぎ疲れてイッセーと休んでいると、ようやくゼノヴィアがやって来た。
「随分時間が掛かったな」
イッセーが驚きながら尋ねる。
ホントにな。
「初めての水着だからな、着るのに手間取った。似合うか？」
「似合うけどなんだその水着。布少なすぎるだろ」
「そうなのか？やはりよくわからないな、こういったものは」
見ろ、イッセーがやらしい目で見てるだろう。
その位際どいってことだよ。
「そうだ二人とも。実は折り入って頼みがあるんだ」
「頼み？なんだよ水臭いな、なんでも言ってくれ」
イッセーが陽気に答える。

あ、メンドくさい気配。
「どちらか、私と子作りをしてくれないキャンっ!?」
言葉の途中で、ゼノヴィアの頭を近くにあったビート板で引っ叩く。
「はい正座しろー。プールに入る前に説教だ」
このアホの子め。
少しは考えてから発言しろ。
女としての喜び?
んなもん他に幾らでもあるわ!
子供を産みたい?
ガキがガキこさえてどうする気だボケ!
「そういうのはな、子供に自分を自慢出来ると思えてからやれ。浅い考えで産んだら、産まれてくる子供が不幸になるだけなんだ」
む、しまった。
ついガチ説教をしてしまった。
ゼノヴィアだけじゃなくて他の人までテンションが……。
「とにかく、そういうのはまだ禁止だ」
「まだ? と言う事はいつかはしてくれるのか。わかった、暫く待つとしよう」

正座しながらうんうん頷くゼノヴィア。
ん？
「あらあら、そんな予定がありますの？　カズキくんったらホントーに困った子ですわねぇ」
真っ黒な笑顔で手をバチバチさせてる朱乃さん。
んん？

背中にオイルを塗るので手を打ちました。
ゼノヴィアにも頼まれたので、片方を足で塗ったら怒られた。
効率いいと思ったんだけどな。
朱乃さんにも足でやってみたら、見たことない様な顔になったのでもうやりません。
「足蹴にされるのも……」
なんて聞こえませんでした。

モグラさんをドライヤーで乾かしてから校門に向かう。
気持ち良さそうだな。
みんなには先に行ってもらったから、丁寧にやってやろう。

終わってから校門に向かうと、何故かヴァーリさんの姿が。
すぐにいなくなってしまったが。
オカ研メンバーが絡んでたけど、無駄な事を。
あの人に勝てる訳が無い。
「やめとけって、絶対勝てないから」
俺が声を掛けると、みんなが一斉に振り向く。
「カズキくん、白龍皇を知ってるの？」
「昔、ボコボコにされましたから」
リアス先輩の質問に、頬をポリポリと掻きながら答える。
何でそんなにビックリするかなぁ。
「カズキくんがボコボコ……トンデモないね、白龍皇の力って」
「あ、違うぞ？　ボコボコにされたのは素の力でだから。能力を使いすらしないでやられた」
木場の言葉に答えてから改めて思うけど、チートだよねあの人。
おまけに飛ばれて能力使われたらどうしようもない。
「カズキが勝てないって……俺、あいつに狙われてんだろ？」
「平気だろ？　俺の事も助けてくれたじゃん」

ん～弱い者いじめはしない……かはさておき、無闇に暴れる人じゃないと思うんだけどなぁ。

「とにかく俺はもう帰る。ゼノヴィア、自分の家でメシ食えよ。今日は料理したくない」

「仕方ない、今日は牛丼にチャレンジしてみよう。帰りにヨシギューとやらに寄らねば」

「だから作れよ」

何故か朱乃さんから再び不穏な空気を感じたので、足が痺れてるとか言ってられない。

ダッシュで帰宅した。

「ただいま～っと「む、帰ったか」……なんでヴァーリさんがここに居るの？」

家に帰ったら、なんでかヴァーリさんが居間に座って読書していた。

白龍皇が待つ自宅……怖すぎるでしょう。

20話

「で、何しに来たんですか?」
お茶を入れ、差し出す。
ヴァーリさんはそれを受け取って、啜りながら喋り出した。
「アザゼルが学園で会談を行う話は聞いているか?それに付き合わされるのさ。それまで暇でな」
街を歩いて見学してた。
散歩ついでにあんな騒ぎ起こしたのか。
「だからってイッセー達に絡まないでやって下さいよ」
「いや、彼は俺のライバルなんだぞ?向こうにも気合いを入れて貰わないと困る」
「今のイッセーにヴァーリさんの相手とか、無茶に決まってるじゃないですか」
「だから、カズキも兵藤一誠を鍛えてやってくれ。俺といい勝負が出来るくらいに」
何言ってんだこの人は。
どうもおれの強さを間違えてる。
「俺自身がヴァーリさんに手も足も出ないのにどうしろと」

「カズキが格闘術と駆け引きを教えればいい。美猴とだって組み手なら勝率三割に届きそうだったじゃないか」
「めっちゃ遊ばれてたでしょ、あれ。ずっと笑ってたし」
「あれはお前を鍛えるのが楽しかったからさ」
「あの虐めを楽しいとか、やっぱドSか」

――つい、懐かしくて話し込んでしまった。
夕飯を食べていって貰いたかったが、何やら他にもやる事があるそうだ。
帰り際に
「お前は、今の世界をどう思う？」
と尋ねられたので、
「世界は知らないけど、今の生活は楽しい」
と返したら、少し黙ってから『そうか』とだけ返事をして、薄い笑みを浮かべてから帰っていった。
なんか悩み事でもあるのかね？
まぁヴァーリさんの悩みを俺ごときが解決出来るとも思わないけど……相談してく

れないのは、さみしいなぁ。

授業参観当日。

俺は誰も来ないので気楽なものだが、イッセーは両親が『アーシアちゃんを』撮影しに来るそうだ。

イッセーはため息を吐いていたが、アーシアちゃんが嬉しそうなのでなんの問題もない。

で、その授業内容が『粘土で好きな物を作れ』。

……あれ、英語だったよね？

『そういう英会話もある』ってねぇよ。

しょうがないのでモグラさんを作成。

わりとよくできた。

モグラさんも納得の完成度だ。

粘土が余ったので、イッセーの禁手化した鎧姿を作成。

こちらもよくできた。

アーシアちゃんが欲しがったのであげたけど。

イッセーはリアス先輩の裸婦像を作り上げて、周りがオークションを開催していた。

妄想を具現化するとか、そこまでいくとスケベも凄いものに感じてくる。

授業が終わり、ジュースを買いに歩いていると人混みを発見。

何事かと覗いてみると、コスプレした美少女にカメラを持った男たちが群がっている。

興味もないので教室に――

「あー！　あなたでしょ、サーゼクスちゃんのお友達って！」

……関わりたくないのに。

てかサーゼクスさんの知り合いかよ。

「人違いです」

「え？　あなたカズキくんじゃないの？」

「人違いです」

このまま相手にせずに離脱しよう。

「おら！　なんの騒ぎを……あれ？　カズキじゃん、何してんだ？」

あ、バカ。

撮影会の騒ぎを聞きつけたのか、生徒会役員である匙が人を散らしながらやってきた。

後ろにはイッセーとリアス先輩、朱乃さん、サーゼクスさんに……誰だ、あの紅い髪のダンディな人。

もしかしてリアス先輩のお父さんか？

「やっぱりカズキくんじゃない！　もう、なんで嘘つくの？」

面倒くさそうだったから、て言ったらダメだよね。

「何事ですかサジ、問題は簡潔に解決しなさいと……」

あ、会長さん。

「ソーナちゃん！　見つけた☆」

はい？　この人会長のお知り合い？

なんでもこのコスプレ美少女セラフォルーさんは、会長さんのお姉さんで現４大魔王の一人だとか。

今度の会談にくる魔王さんはこの人だそうです。

うっかり自分の名前を間違えたといって謝ったら許してくれた。

チョロいぞこの魔王。

会長さんが可哀想だったので『辛かったら愚痴くらい聞きますよ』といったら、涙目

で両手を握られた。
セラフォルーさんに耐えきれなくて走って逃げてしまったが。
それからまた匙が冷たくなった。
あいつに嫌われるような事してないのに。
今度会長さんに相談してみよう。

次の日の放課後。
遅れてしまったが、コカビエルの時のお礼を言いに生徒会室へ。
ノックをしてから入ると、会長さんと副会長さん。
あと、匙が何やら書類仕事をしていた。
要件を言うとソファーに座る様に促され、副会長さんがお茶を淹れてくれた。
「この間は俺が壊した物の後片付け、押し付けてすみません。あと、ありがとうございました」
俺が頭を下げると、向かいに座った会長さんが微笑む。
「いえ、私たちは戦いに参加出来ませんでしたから、あの位は当然です。カズキくんの戦いぶりが見れなかったのは残念でしたが」
「俺は大した事ないですから。モグラさんが頑張ってくれたんですよ」

俺がそう言うとモグラさんがポケットから這い出てきてテーブルの上に移動し、会長さん達に頭をペコリと下げる。
「この子がカズキくんの神器ですね。リアスに聞いてはいましたが、こんなに小さいのに凄いですね」
会長さんが指を伸ばすと、モグラさんは両手で指を掴んで握手する。
おぉ、会長さんの顔が緩んでいる
副会長さんが悶えているのがちょっと面白かった。
その後、匙がイッセーの所に行くというのでついて来た。
なんでもグレモリー眷属の《僧侶》が顔を見せたそうだ。
今まで封印されてたとかなんとか。
封印されてたって、どんなゴツい奴なんだ。
そう思いながら行ってみると、確かに見知らぬ顔はいた。
背の低い、金髪の女の子。
それをデュランダルを片手に追いかけ回すゼノヴィア。
ゼノヴィアの足を引っ掛けて転ばせても、仕方ないと思う。
「で、なんであんな陰湿な事を」
「いや、鍛える様に部長からお願いをされて」

「それで笑いながら聖剣持って追っかけ回すのか？　後輩いじめちゃダメだろう」
「健全な精神を養おうと……」
「目的は分かるが刃物を振り回すな。今日の晩飯、お前だけもやし炒めな」
「そ、そんな⁉　今日は前から頼んでいた『スキヤキ』にしてくれると言っていたじゃないか！」
「知らん」
崩れ落ちるゼノヴィア。
鍛えてやるのはいいが、刃物はダメだ。
ましてや女の子に……え？　男？
「すまんゼノヴィア、今日は少しいいお肉にしてあげるから許して」
「ホントか⁉ありがとうカズキ、大好きだっ！」
抱き付いてくるのをヒラリと躱す。
「なぁ兵藤、カズキっていつもああなのか？」
「完全に餌付けされてんなぁ……」
「餌付けとか言うな、人聞きの悪い」
匙とイッセーの言葉に反論すると、さっきの女装後輩くんギャスパーが服の袖を掴んでくる。

「あ、あの……助けてくれて、ありがとうございました」

……これが、男の娘かぁ。

なんか世の中間違ってるよね。

匙と二人してなんか凹む。

うんうんと頷いてるイッセー。

お前もか。

これ以上用もないので、夕飯の仕度をしに先に帰った。

肉が本当に高かったので、高いのと安いのを混ぜて出してみたらゼノヴィアは器用に高い肉ばかり食べていた。

バカのくせにこんな所だけ鋭い。

次の日に、イッセーからあの後アザゼルさんと遭遇したと聞いた。

ギャスパーの訓練方法と、匙に神器の能力を教えてそのまま帰ってしまったらしい。

暇なのか、アザゼルさん。

休日に、イッセーと一緒に朱乃さんに神社に呼び出された。

何かやらかしてないか必死に考え、いざとなったらイッセーになすりつけようと頭を

フル回転させながら向かった。
そこで待っていたのは久しぶりに見る巫女服姿の朱乃さんと、金色の羽を広げた天使ミカエルさんだった。
「初めまして赤龍帝、兵藤一誠くん。そして君が瀬尾一輝くんですね」
ミカエルさんは挨拶を済ませると、イッセーに『アスカロン』とかいうステキカッコいい剣をプレゼントした。
俺には何もなかったよ。ちくせう。
ミカエルさんは少し会話した後、イッセーの籠手に剣が合体したのを確認したらそそくさと帰っていった。
忙しいんだろうな、お偉いさんだし。
アザゼルさんと大違いだ。
ミカエルさんが帰った後、イッセーもギャスパーを鍛えると言って帰ってしまった。
俺は残って朱乃さんが出してくれたお茶を啜っている。
緑茶でも相変わらず美味い。
「カズキくん……私の話、聞いてくれるかしら？」
朱乃さんはポツリポツリと自分の事を話し始めた。
自分が堕天使の血を引いている事。

その堕天使は幹部のバラキエルさんである事。
そんな堕天使の血が嫌いである事。
バラキエルさんに聞いてるから堕天使のハーフなのは知ってたけど、そんなに嫌っていたとは……。
ただの反抗期じゃなかったのか。
「貴方は、堕天使が嫌いでしょう？　貴方の身体を、人生をメチャクチャにして。貴方に酷い事ばかりする堕天使は……」
今も背中から生やした堕天使の羽を、憎々しげに見つめている。
「別に俺、堕天使嫌いじゃないですよ？」
朱乃さんは今まで伏せていた顔を不思議そうに此方へ向ける。
「まぁ攫われた時は怖かったですけど、それだけです。この身体も慣れたら便利だし、気にしてませんよ」
俺の言葉に、朱乃さんは何故か悲痛な顔を向ける。
「なんで、そんな……」
「それに俺、朱乃さんの事いい人だって知ってますから」
そう言ったら朱乃さんが顔に手を当てて泣き出してしまった。
お、俺が悪いの!?

一人でどうすればいいのかアワアワしたあと、取り敢えず頭を撫でてみた。
「な、泣かれると困っちゃいますから……笑って下さい」
「カズキくん……」
落ち着いてきたのか、泣き止んでくれた。
よかった。
これでセクハラとか言われたらシャレにならん。
朱乃さんが落ち着くまで待って、その日は帰った。
朱乃さんが見送ってくれた時の顔は、少しすっきりした様な顔をしてた気がする。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキくんに、ついに話してしまった。
聞いてしまった。
私が堕天使の子供だと。
そんなわたしが憎くは、嫌いではないかと。
聞いてから、後悔した。
もしこれで避けられたら、嫌われたら……。
でも、すぐに答えは出た。
「別に俺、堕天使嫌いじゃないですよ？」

そんな筈はない。
彼の人生をメチャクチャにしたのは堕天使だ。
彼が生命エネルギーを消費して、文字通り命を削ってまで打ち倒した、あのコカビエルと同じ堕天使なのだ。
その後も色々と理由を付けていたが、私に気を使ってくれているのでしょう。
この身体も以外と便利だなんて言い出した。
なんで、貴方はそんなに……人に優しくするばかりで、自分に優しく出来ないのか。
思い悩む私に、彼から言葉を投げかけられた。
「それに俺、朱乃さんの事いい人だって知ってますから」
もう、無理だった。
目から涙が溢れてきて、手で顔を覆ってしまう。
そんな私に、彼は正面に座って私の頭を優しく撫でた。
「な、泣かれると困っちゃいますから……笑って下さい」
本当に困ってしまった様な顔をして。
ゆっくりと、優しく撫で続けてくれた。
何故、そんなに人に優しく出来るの？
何故、そんなに気を使ってくれるの？

私が落ち着くまでずっと頭を撫でてくれて、その日は帰っていきました。
彼を見送りながら思いました。
多分、もう我慢できません。
男性と接していてこんなに心が暖かくなったのは、幼い頃に遊んで貰った父以来だった。
私は彼が好きなんだと思う。

21話

「なんで俺、こんな席に着いてんだろ」
モグラさんを頭に乗せながらついボソッと呟いてしまう。
深夜の駒王学園の職員会議室。
学校にあるはずもない豪華なテーブル。
辺りを見渡せば見知った顔ばかり。
壁際には会長さんと副会長さんまでいる。
知らないのはミカエルさんの側にいる天使の女の人くらい。
「そりゃお前が調子乗って首突っ込むからだろ」
一番長い付き合いのおっさんが突っかかってきた。
「うっさいよ元凶め。あんた自分の部下の締め付けぐらいしとこうよ」
「へいへい、すまんね」
全く反省してないように見えるが、一応関係改善に奔走したらしい。
裏で出来るなら表でもやれよ。
だからみんなに厨二って言われるんだ。

「というかサーゼクスさん。みんな俺の事知ってるんだから紹介する必要ないですよね？　帰っていいですか？」

隣に座るサーゼクスさんに尋ねる。

その隣には会長さんのお姉さん、セラフォルーさんもいる。

「寂しい事を言わないでくれ、セラフォルーも楽しみにしていたんだよ。もう少し居てくれないか？」

「そうよ、サーゼクスちゃんがいつも自慢するから楽しみにしてたんだから！　この間は慌ただしくてお話出来なかったし」

「あなた達が大はしゃぎしてましたもんね」

あ、会長さんが顔を赤くして俯いてる。

可哀想に。

いや、俺のせいか？

あ、サーゼクスさんが給仕をしてくれているグレイフィアさんにこっそり怒られてる。

ざまぁ。

「いやー凄いですね。これだけのメンツが集まっているのにその中心が人間、将来有望です。どうです？　教徒になってみませんか？」

「間に合ってます」
そしていまいち何を考えてるのか分かりにくいミカエルさん。
ある意味一番やりにくい。
早く帰りたい、そう思っていたらリアス先輩達が到着。
サーゼクスさんが紹介し、先輩と会長が事の顛末を説明した。
「悪かったな、ウチのコカビエルが迷惑をかけた」
「ホントだよ」
アザゼルさんの悪びれない謝罪に俺が突っ込む。
リアス先輩達がこちらを見ているが、気にしない。
その後もアザゼルさんが余計な一言を言う度に俺が突っ込み続けた。
話の内容はよくわからないが、このおっさんが余計な事をいってるのだけはわかったから。
最初は空気が凍ったりもしていたが、周りも苦笑しかしなくなった。
「さて、アザゼル。今回の騒動、総督としてのキミの意見が聞きたい」
サーゼクスさんからの振りに、不遜な態度を崩さずにアザゼルさんは答えた。
「先日の事件は完全にコカビエル単独の暴走だ。なので奴の処理は『白龍皇』が行い、コキュートスで永久冷凍の刑に処した。もう出てこれねぇよ」

「あんなの氷のオブジェにしたら迷惑すぎるな、夢に出てくる」
「お前はいい加減余計なチャチャいれんなよ、ったく……回りくどいのは無しだ、さっさと和平を結んじまおうぜ？」
アザゼルさんが頭をガリガリと掻いてから、面倒そうに話を切り出した。
どうにも、今回の主題はこれのようだ。
神も四大魔王も滅び、堕天使の幹部も沈黙した。
これ以上やってもお互いが滅びるだけ。
無駄な争いはやめましょうって話のようだ。
その中でアザゼルさんが
『神がいなくても世界は回る』
とかまた厨二発言をかました後、イッセーがミカエルさんに噛み付いた。
何故アーシアちゃんを追放したのか、か。
やっぱりこいつは凄いな、こういう時はいつもそう思う。
自分より格上の相手でも、迷わず踏み込んでいく。
ミカエルさんの答えは納得しないまでも、理解は出来た。
その上で異端として排除したアーシアちゃんとゼノヴィアに、頭を深く下げて謝罪した。

その謝罪を受け、アーシアちゃんとゼノヴィアは答える。
『私達は今の生活に幸せを感じ、満足している。だから謝らないでくれ』
自分を追い出した相手に、害をなした相手にこう言えるのは凄いと思う。
ゼノヴィアには夕飯のグレードを上げてあげようと思う。
イッセーはアザゼルさんにも噛み付いたが、のらりくらりと躱されてしまう。
まぁ自分なりのやり方で償うみたいだし、そこは置いておこう。
「ではカズキくん。きみは和平についてどう思う?」
「戦闘より銭湯が好きな俺になにを聞くのか」
サーゼクスさんの質問に俺が答えると、何故かリアス先輩たちが一斉に吹き出した。
俺は関係ないけど、君らお偉方の前でそんな事していいの?
イッセーがアザゼルさんに遊ばれてアホな宣言をかました後、事件が起きた。
周りが、停止してる。

あのギャスパーくんの神器が暴走しているらしい。
敵さんに捕まって強制的に能力を発動させられている様だ。
アザゼルさんたちは単純に強いから、木場とゼノヴィアは聖剣の力で、イッセーはドラゴンの力で守られたから無事の様だ。

リアス先輩もイッセーに触れていたから無事らしい。
え？　俺は？
あぁ、そういやモグラさんもドラゴンだったね。
可愛いからついドラゴンだって忘れてしまう。
ん？　つまりモグラさんて、そこの二匹並みに強いの？
あ、おデコの石の力なんだ。
便利だね、それ。
イッセーとリアス先輩はギャスパーくんの救出に、ヴァーリさんはアザゼルさんの指示で外の敵を掃討してくるそうだ。
「そうだカズキ、お前もヴァーリと行ってこい」
「あんな逆さまになってるのがデフォな変態の相手したくないです」
なんかあいつらフードからビーム出してるじゃん。
ビームに当たって同じ格好になったらどうしてくれる。
「ほら、行くぞ」
ヴァーリさんが俺の襟首を掴んで窓から外に飛び出す。
「俺の撃墜数の半分以下ならペナルティだな」
上昇しつつ、急にそんな事を言ってくる。

「そんなご無体な!?俺飛べないんだよ!?」
「飛べなくても跳べるだろ?」
そう言うと俺の襟首を離し、俺だけ落下する。
「さぁ、開始だ!」
「そんな無茶苦茶っ……ああもう!」
『禁手化ッ!!』
ヴァーリさんは空中で、俺は落下しながら禁手化する。
着地する頃には変身は完了。
手脚のタービンが唸りを上げながら、全身を銀色の装甲が覆う。
ヴァーリさんも白い龍を模した全身鎧に身を包んでいる。
ヴァーリさんは敵に突っ込みながら、カミナリみたいな攻撃で敵をドカドカ倒していく。
マズイ、このままじゃペナルティが……!
モグラさんのお陰で、腕を使わなくても柱が出せるようになった。
だったら今腕を使えばっ!
「オラッさぁ!!」
両手で地面を殴り付けると、モグラ? ドラゴン? を模した土の塊が敵に襲いか

かって次々と伸していく。
おぉ、これなら何とかいける!?
ヴァーリさんに必死に喰らいついていると、後ろにあった校舎が爆発。
また露出度の高い服を着た女性が、みんなに杖を向けていた。
アザゼルさんやサーゼクスさんがバリアみたいなのを張ってみんなを守ってくれている。
どうやら、アザゼルさんが相手をするらしい。
なら安心だと敵に向き合うと、もう殆ど残っていない。
しまった、気を取られてる内に！
もうどうあがいても無理だろこれ……。
「どうやら俺の勝ちみたいだな、カズキ」
ヴァーリさんが地上に降りて話しかけてきた。
あ～ペナルティって何やらされ――うわ!?
「よく避けた。以前までなら避けられなかった」
俺の眼前を白い光が横切る。
辛うじて避けたそれは、ヴァーリさんの拳だった。
「ちょ、ヴァーリさん！　ペナルティなら後で受けるから今は」

「いや、今だからこそだ」
ヴァーリさんはそう言うと、向こうで戦っているアザゼルさんに突撃して殴り掛かった。
そのスキに女性が更に攻撃を加える。
ヴァーリさんが続けてアザゼルさんを殴ろうとするのを、間に入って拳を止める。
ヴァーリさんは俺の手を振り払い、大きく距離を開ける。
「ヴァーリさん。この人がなんかやったなら後で一緒に懲らしめますから、今はそれ位で……」
「いい加減認めろカズキ、ヴァーリは『向こう側』だ」
俺の言葉を遮り、アザゼルさんの言葉が俺の中に響く。
『向こう側』。
つまり、敵に寝返った？　何故？　いつから？
女が何か言って嘲笑ってるけど、頭に入ってこない。
でもヴァーリさんの声だけが、やたらとハッキリ聞こえた。
「カズキ、お前は今の生活が大切なんだろう？なら、自分の力で守ってみせろ」
あー……よし、切り替える。
「アザゼルさん」

「あん？　なんだよ」
「そのおばさん、任せていいんですよね？」
「当然だ、チョロいぜ」
俺の言葉に女性の顔つきが変わる。
アザゼルさんはそんなの気にせず答えてくれる。
「じゃあ俺は、アホな事言ってるあの人に鉄拳制裁してきます」
「お前ヴァーリに勝てた事無いだろう、やれんのか？」
「舐めんな」
拳を胸の前でカチ合わせ、アザゼルさんの言葉に乱暴に答える。
「バカな兄貴が間違えたなら、正してやるのが弟の役目だろうがっ!!」
多分勝てない。
でも、それでもいい。
勝てなくてもいいから、とにかく一発ぶん殴る！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキが白龍皇に連れられて行ってしまった。
先程も堕天使の総督であるアザゼルにやけに突っかかっていたけれど、もしかして堕天使側と面識があるのか？

部長とイッセーはギャスパー奪還の為に行動を開始したが、その直後に襲撃を受けた。

旧レヴィアタンの末裔を名乗るカテレア。

こいつが主犯の様だ。

カテレアの相手はアザゼルがしてくれるらしい。

私と木場は動けないアーシア達を守る為にこの場に残ることにした。

魔法使い達は白龍皇が殆ど倒して、カズキが撃ち漏らしを潰していたので掃討はほぼ完了している。

白龍皇がカズキに近づいていき、カズキもそちらに振り向いたその時。

カズキが白龍皇に殴りかかられた。

カズキはそれを躱すと何かを話しかけたが、白龍皇はそのままアザゼルの元に突撃し、先程襲撃してきたカテレアと共に攻撃を加え始める。

カズキはその攻撃に割って入り、白龍皇の拳を止めてから彼を諭す様に問い掛ける。

声色が、もはや願う様ですらあった。

しかし、アザゼルはそんなカズキに対してハッキリと断言する。

「いい加減認めろカズキ、ヴァーリは『向こう側』だ」

『向こう側』。

つまり、白龍皇は敵側に付いたのか。
カズキは何も答えず、困惑した様に立ち尽くしている。
もしかして、白龍皇はカズキの友なのかもしれない。
コカビエルの時も、奴はカズキの命を救っていた。
友の裏切り。
私はイリナを裏切った側だが、少し共感してしまう。
一人思案していると、遠目にイッセーと部長が見えた。
イッセーの背中にはギャスパーもいる。
どうやら救出に成功したようだ。
アーシア達も動ける様になった。
カテレアは宙に浮いたまま、カズキを文字通り見下しながら嘲笑い始めた。
「それにしても滑稽ね。白龍皇を勝手に信じて無惨に裏切られた気分はどう？　たかが人間の癖に、本当に仲間になった気にでも――」
『黙れ』
しかし、それは二つの声に遮られた。
アザゼルと白龍皇の声が重なる。
決して大きな声ではなかった。

だがこの場にいる全員の耳に届く、そんな声だった。
カテレアはその重圧に何も喋れなくなり、萎縮した。
白龍皇、いやヴァーリは視線をカズキに移し、その眼をしっかりと見詰めながら呟いた。
「カズキ、お前は今の生活が大切なんだろう？　なら、自分の力で守ってみせろ」
その一言が届いたのか、カズキの眼に戸惑いが消え、力が戻った。
カズキはアザゼルと顔も見ずに幾つか話した後、胸の前で自身の拳を打ち合わせて言い放った。
「バカな兄貴が間違えたなら、正してやるのが弟の役目だろうがっ!!」
兄貴？　白龍皇が？
聞いた話では、カズキは幼い頃から孤児院で育って肉親はいないはず。
一体どういう……？
「おや？　君たちは彼から聞いていないのか？」
困惑している私達に、サーゼクス様が声を掛けてきた。
一体なんの話だ？
朱乃さんは何かを悟ったのか、青い顔をしている。
「サーゼクス様、もしかして彼は……カズキくんは……」

「朱乃くん、それは彼の口から直接聞きなさい。それを君達に話す権利は、私にはない」
朱乃さんの言葉を遮り、サーゼクス様は首を横に振った。
朱乃さんはそれ以上何も言わず、視線をカズキに戻した。
カズキ、お前は一体何を抱えている？
それは、私達に話せない様な事なのか？
何故だろう、お前が凄く遠くに感じる。
それを嫌だと、哀しいと感じる自分がいる。
カズキ、カズキ……。

22話

「飛ばないんですか、空」
「このぐらいはハンデをやらないと、勝負にならないだろう？」
ヴァーリさんは地に足を着いたまま、此方にゆっくりと歩いてきた。
俺も合わせてゆっくりと歩き出す。
「全く、此処まで壊れちゃって……何処で頭のネジ落としてきたんですか」
「そんな事はないさ、俺はいつも通りだ。いつも通り強い奴と戦いたい、それだけだ」
一歩ずつ歩みを進めながら、いつものような会話を続ける。
「強い奴なんてここにはサーゼクスさん達位でしょ？」
「俺の目の前にいるじゃないか、俺の手を離れて禁手にまで至った強者が」
少しずつ歩くスピードが上がり、次第に駆け足になる。
「目の前にいるのは、いつもあんたに泣かされてた弱っちい人間だ！」
「自分をしっかり評価できる奴は、それだけで十分強いのさ！」
互いに拳を握り、眼前まで接敵する。
「今日は俺があんたを泣かしてやる！」

「カズキ！　お前は何処まで強くなれた!?」
振り上げた拳を、俺たちは同時に振り下ろ――
「なんちゃってぇ！」
「何!?ぐっ！」
踏み込んだ瞬間、ヴァーリさんの体重を支えている後ろの方の足に細工する。
足裏の土をモグラさんに持ち上げて貰ったのだ。
ここのバランスを崩せば姿勢も崩れる。
前のめりになったヴァーリさんの顔面を思いっきり殴り飛ばした。
すぐに態勢を整えられてしまったが、取り敢えず一発入れた。
「やっぱ大してダメージないか、貧弱すぎんだろ俺」
「いや、今のは驚いた。そうだな、お前はそうやって意表をつくのが得意だった」
全力で殴って兜が割れただけ。
それもすぐに作り直された。
自分の非力が嫌になる。
しかも、ヴァーリさんはまだ能力を使っていない。
「さて、此方からも行かせてもらうぞ」
「全力で拒否しますっ！」

地面を殴り、先程テロリストを襲撃した土の獣を繰り出して襲わせる。
んでもって両方の掌からドリルを出現させ、それを連続で射出。
大きな土の塊と、無数の掘削金属に襲われようともものともしない。
そんな事は知っている。
土煙と金属音に紛れて、脚のタービンをタイヤ代わりに一気に近づく！
向こうからは見えなくても、こっちはモグラさんのナビゲートでバッチリだ。
そのまま突撃して通り抜けざまに一発。
足でブレーキを掛けて、すぐに飛び掛かる。
互いの拳が交差する。
ヴァーリさんの右を、左のタービンを回転させて流してそのまま肘を腹に叩き込む。
踏み込もうと持ち上げた足を踏みつけ、タイミングのズレた拳をギリギリで避けてから、顎を拳で強打。
ヴァーリさんが迎撃しようと身体を此方に向けるが、モグラさんに腰周りまで土を伸ばして貰って固定。
一瞬動きが止まり、拳を後頭部に勢いよく打ち下ろす。
「がっ!?　く、アルビオン！」
『Ｄｉｖｉｄｅ！』

やば！
……あれ？　何ともない。
あ、モグラさんの不思議フィールドが護ってくれてるのか。
ホントに凄いな、モグラさん。
ヴァーリさんも驚いている様だ。
「まさか、防がれるとは思わなかったな」
『流石は【神秘の豊穣土竜】か。こと守護に関しては我等二天龍とすら張り合う』
「なら、直接殴ればいいだけだ」
いや殴らないでよ、死んじゃうから
モグラさんのお陰で半減能力は効かないみたいだけど、それだけだ。
どうしても攻め手に欠ける。
生命エネルギーとかいうのは使えない。
次に使ったら確実に命を落とすと朱乃さんに釘を刺された。
ま、使い方なんてわからないんだけど。
悩んでいると、ヴァーリさんから声を掛けられる。
「カズキ。俺は、手加減して勝てる男か？　俺は、その程度の男なのか？」
「……ずるいなぁ」

そんな事言われたら、やるしか無いじゃないか。
モグラさん、また倒れちゃうかもだけど許してね。
意識を集中して、気合を込める。
手脚のタービンが回転を始め、エネルギーを生み出していく。
「コカビエルを倒した『アレ』か……赤龍帝のブーストなしで通用すると思っているのか？」
んなもん知らん。
胸の装甲が開き、そこに内蔵された結晶体からビームが……放たれなかった。
そこから出てきたのは、少し小さい光輝くモグラさん。
それが結晶体からポコポコと生み出される。
暫くすると、俺の足下には光るモグラさんで溢れかえった。
何このビッ○リドッキ○メカ。
メカの素なんて食べてないぞ。
心が癒されちゃうじゃないか。
「……何だそれは」
ヴァーリさんが怪訝な視線を向けるが、俺に聞かれてもわかりません。
おかしい、シリアスな空気が吹っ飛んだ。

このモグラさん達、エネルギーの塊の様だ。
そういやヴァーリさんの翼って……。
あぁ、なるほど。
「いくぞモグさんズ！　突撃っ!!」
俺の号令に従って、光るモグラさん達は一斉にヴァーリさんに飛び掛った。
何気に空飛んでるのまでいる。
流石モグラさんの分身、ハイスペックだ。
「当たると思うか？　アルビオン！」
『Ｄｉｖｉｄｅ！』
大量のモグラさんの半数が消える。
しかしまだ数は十分に多い。
何より、もう届く。
「っ!?　こいつ、噴出口に！」
モグラさんが余剰エネルギーの噴出口に身体をねじ込む。
エネルギーの塊であるモグラさんがそこに入れば、エネルギーを排出出来ず……。
ドカン!!
背中の翼が爆発を起こし、大きく体制を崩す。

その隙に残りのモグラさんがヴァーリさんの身体中に貼りつき、そのまま起爆。
爆煙が晴れると、鎧が剥がされ地に膝をつくヴァーリさんがいた。
あんだけやってようやくダメージかよ。
こっちはもう無理。
「ここまでやれるならもう大丈夫だな……」
「はい？　今なんて……っと」
あぁ、禁手化も解けてしまった。
何とかグローブ状態を保ててはいるけど、これも長くは持たない。
「カズキ！　大丈夫か!?」
イッセーが加勢に来てくれた。
てか、もっと早く来いよ。
え？　手を出しちゃいけないかと思った？
なんでさ。
「今のは危なかった。アルビオンがモグのサイズを半分にしなかったら、腕や足が吹き飛んでいたかもしれない」
ヴァーリさんが手をフルフルと振りながら呟く。
え？　あれそんなに凄いの？

よ、よかった防いでくれて。
流石にそこまでする気はないし。
「サイズを半分？　どういう事だ？」
「白龍皇には物を半分にする力が……え～と、わかりやすく言うとあれだ。ヴァーリさんは、リアス先輩の胸も半分に出来るって事だ」

多分、俺のこの一言は言ってはいけなかったんだと思う。
リアス先輩の胸を半分にする。
これは、イッセーには何よりも許せなかったんだろう。
ヴァーリさん、そんな事するなんて一言も言ってないんだけどね。
イッセーは怒りに任せてなれなかったはずの禁手になり、ヴァーリさんはヴァーリさんで急激に力の跳ね上がったイッセーに興奮して殴り合い始めるし。
俺はモグラさんをグローブから元に戻して、頭にのせながら体育座りで勝負を見守っている。
俺ってばスゲー蚊帳の外。
イッセーがぶっ壊したヴァーリさんのコアを自分の腕に移植したのは驚いた。

あんなことできるんなら、俺らもイッセーから貰ってやってみる？
あ、凄い痛いの？　ならいいや。
ヴァーリさんが奥の手使おうとした所で、新たな乱入者。
中国チックな防具に身を包んだイケメン。
美猴さんだった。
手を振ってきたから振り返しておいた。
やっほー。
ヴァーリさんと何やら話すと、地面に如意棒を突き立てて二人して地面に沈んでいった。
忙しないなぁ、美猴さん。
ヴァーリさんがこっちを見ながら何か言ってたけどよく聞こえなかった。
イッセーは追いかけようとしたが、限界だったようで鎧も解除されて地面に倒れこんでしまった。
リアス先輩が駆け寄って抱き上げている。
爆発しろ。
「さて、これからどうするかねぇ」
アザゼルさんが頭を掻きながら近寄ってきた。

ってお い。
「ちょ！　腕どうしたの!?」
「ちょっとトチってな、自分でぶった切った」
「アホかっ！　チョロいとか言っといて何してんの!?　油断してんなオッサン！」
「あ？　誰がアホだ、俺はきっちり倒したぞ。お前は結局やられてんじゃねぇか」
「やられてねぇから、イッセーに乱入されたから無効になっただけだから」
「ハッ！　負け犬の遠吠えが聞こえるなぁ～？　成果が出せなきゃ負けなんだよ、負け犬ぅ～！」
「泣かすぞ、オッサン！」
「逆に泣かせてやる、クソガキ！」
向こうではイッセーがいい感じに話を締めようとしているのに、こっちでは片腕のオッサンと疲労困憊の高校生が殴り合い。
後でグレイフィアさんに怒られました。
ごめんなさい。

「で、何でまた俺は拘束されてるの？」

俺を取り囲むように立つオカ研メンバー。
今日はもう疲れたから休みたいんだけど。
「ごめんなさい。疲れてるのはわかるけど、どうしても聞きたい事があって」
リアス先輩が申し訳なさそうに聞いてくる。
「貴方、本当に何者なの？　お兄様と仲が良さそうなのも驚いたけど、堕天使の総督であるアザゼルとも親しいみたいだし」
「仲がいいかは置いとくとして。まぁ俺を助けてくれたのって堕天使の人たち、というかヴァーリさんですし、5年くらい一緒にいましたから」
「なんで黙ってたの？」
いや、聞かれてませんし。
こう言ったら怒るよね、多分。
「いや、ほら。悪魔と堕天使って仲が悪いって聞いたし、アーシアちゃんの事もあったから……」
まぁ流石にそれで攻撃してくるとかは思わなかったけど。
「……ヴァーリを兄と呼んだのは？」
「えっと、その……何というか……すみません、言いたくないです」
腹立って勢いで言っちゃったとか、恥ずかしくて言えない。

「そうよね、ごめんなさい……貴方も気を使ってくれてたのに、聞き方がキツかったわ」
ん？　なんの話？
と、とにかく勢いで乗り切ろう！
「それにほら、俺自身はただの人間ですから！」
別に堕天使の言うことは絶対だ～！
なんて教育もされてない。
「だから、その……今まで通りに接してくれると嬉しいな～って……」
あれ？　なんでみなさんまた哀しそうな顔を。
ちょ、アーシアちゃんがまた泣いちゃった!?
「当然よ。貴方は眷属じゃなくても、大切な友人だもの」
「あぁ！　俺だっていつまでもお前と友達だ！」
リアス先輩とイッセーの言葉に、周りのみんなもうんうん頷いている。
小猫ちゃんは涙目になりながら俺の手を握ってくれた。
よくわからないが、満足そうだしまぁいいよね。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキくんが堕天使側の人間。
最初にそう思った時、頭の中が真っ白になって最悪な想像が幾つも浮かんできた。

戦闘が終わり、落ち着いた頃に私たちグレモリー眷属はカズキくんに尋ねた。
貴方は何者なのか、と。
何故あんなにアザゼルと親しいのか、と。
彼を施設から救出したのは、堕天使陣営だった。
そこで暮らす五年の内に、アザゼルやヴァーリと親しくなっていったのだろう。
しかしヴァーリを兄と呼んだ事に関しては、喋りたくないと何も答えなかった。
もしかして、彼は本当にヴァーリの弟さんなのかもしれない。
人間であるから、ルシファーの血族では無く
父違いの異父兄弟になるのか。
その兄が誘拐された自分を助けてくれた。
小さいながらにさぞ嬉しかったことだろう。
今まで家族がいなかったのだから、尚更だ。
そんな兄が、この様な凶行に出たのだ。
心境として複雑なのだろう。
だからアザゼルに八つ当たりの様に殴りかかったのかもしれない。
その後に彼は言った。
『自分はあくまでただの人間』

『だから、今まで通りに接してくれないか』
目が、不安を抱えているのがわかった。
彼は、私たちが、仲間がいなくなるのを恐れているのか。
なんだ、深く考える必要などなかったのだ。
彼はどこまで行っても彼のままなのだ。
優しくて、優しすぎる彼のままなのだ。
リアスやイッセーくんの言葉に、みんなも一様に頷いた。
小猫ちゃんは、自分の姉も同じ様な形で別れてしまっているので、強く共感したのでしょう。
目に涙を含ませながら、カズキくんの手を強く握ってあげていた。
貴方は一人ではないと言い聞かせるように。
でも、一つだけ気がかりがある。
私の父、バラキエル。
５年も堕天使の施設にいたのだ、顔を合わせた事もあるかもしれない。
私について、何か言っていたかもしれない。
何か聞いていたかもしれない。
私に優しくしてくれてるのは、それが理由？

怖くて聞けなかった。
もしそうだったら、私は……。

間話2

「と言う訳で、今日からオカルト研究部の顧問になった。アザゼル先生と呼べ、もしくは総督でもいいぜ？」
「【閃光と暗黒の龍絶剣】総督ぅ～」
「死ね」
「うぉあ!?」
俺のお茶目なジョークにマジギレして、光の槍を投げてきたこの人。
アザゼルさんが駒王学園の教員としてやって来た。
コカビエルやヴァーリの暴走を未然に防げなかった詫びとして、木場やイッセー、ギャスパーの神器の指導をする事になったそうだ。
失くした腕も便利アームを取り付けて問題ないようだ。
ちょっとかっこいいと思ってしまった。
それと、朱乃さんとの会話。
『許すつもりはない』
『母はあの人のせいで死んだ』

『あれを父とは思わない』

……正直複雑だ。

俺も詳しく聞いてた訳じゃないから、内容が掴めない。

俺と接している時のバラキエルさんは、娘を常に気に掛けているいい父親にしか感じなかったんだけどな……。

まぁ詳しくもないのに首を突っ込むのもよろしくない。

こういうのは時間が解決する事もあるとベネムネさんも言っていた。

必要になった時に全力で協力するとしよう。

夏休みが始まってまだ数日。

イッセーに助けてくれと呼び出され、朝早くから悪魔の巣窟になった兵藤家へ訪れた。

兵藤家は魔王の策略により、隣近所を平和的に退去させて地上6階地下3階の豪邸に改築されたのだ。

今ではゼノヴィア以外の女性眷属はみんなここで暮らしている。

ちなみにゼノヴィアは結局俺の家に上がり込んできた。

リアス先輩には許可を貰ったらしい。
その前に俺の許可を取れよ、もういいけどさ。
ゼノヴィアが朱乃さんも誘ったそうだが、断られたと言っていた。
そりゃ断るよ。

「で、この状況は何？」
「あ、かじゆきだぁー！」
「おにーちゃんが来た～♪」
色々と考えながら移動してきたが、ついに兵藤家に到着。
インターホンを鳴らし、朱乃さんに導かれて部屋に入る。
そこにはオカ研メンバーとアザゼルさん、そして色んな所が縮んだリアス先輩とアーシアちゃんが。
リアス先輩はイッセーに両手でしっかりしがみ付き、アーシアちゃんは何故か俺をお兄ちゃんと呼びながら足に体当たりしてきた。
何があったのよ。

「はぁ、リバウンド」

太るどころかむしろ縮んでますけど。
ダイエットじゃない？　知ってるよ。
アザゼルさんの話を聞いてる間に、イッセーとギャスパーくんが二人と遊んであげているようで、ギャスパーくんが頭に紙袋を被ってリアス先輩とアーシアちゃんを怖がらせてた。
未だにギャスパーくんのキャラがわからない。
いや、女装美少年の時点でキャラは濃すぎるんだけどね。
「で、これから術を解く薬の材料を取りに行く。イッセー、朱乃、カズキも一緒に来い」
朱乃さんもアザゼルさんが苦手みたいだが、リアス先輩の為に渋々頷く。
ちなみにゼノヴィアは残ってギャスパーくんを鍛えるそうだ。
「なんで俺まで。アザゼルさんとイッセーがいれば十分だろう」
というかあんた一人で全部解決出来るじゃ……ん？
「おにーちゃん、いっしょにこないの……？」
ギャスパーくんから逃げてきたアーシアちゃんが、俺の服を掴み涙目で訴えてくる。
しかも上目遣い、卑怯だ。

材料①ミノタウロスの肝

「ほら、鍋の用意が出来たぞ～」
「野菜も切ってきましたわ」
「わーい」
「おにくー」
「おう、お疲れ。ほれイッセー、早く肉を持ってこい。みんな待ってるぞ」
「なんで人が必死に戦ってる横でアットホームな空間作ってんの!?」
ここはとある国の山奥。
ミノタウロスの肝を手に入れる為にやって来て、現在イッセーが戦闘中。
肝を潰さない為に神器が使えないので、アザゼルさんが貸した剣と盾で頑張っている。
「カズキも手伝ってくれよ!?　こいつ何気に強いんだけど!」
「俺は鍋の用意が忙しいから無理」
必要なのは肝だけなので、残りは食べるから俺は鍋の準備中。
何でもここのミノタウロスは絶品だそうなので、材料を無駄にしない為にダシ作りに真剣だ。
イッセーの悲鳴につられてか、ミノタウロスが群れでやってきたがアザゼルさんの指ビームで丸焦げにさせてた。

「丸焦げにしてどうすんの。ちゃんと火力の調節はしなきゃ」
「すまんすまん。ま、イッセーが戦ってるのもデカイから一匹いれば十分だろ」
「注意するのそこじゃねぇー!!」
俺とアザゼルさんの会話にツッコミながら、イッセーはミノタウロスを切り倒した。
本当に美味かった、ゼノヴィアへの土産に少し持って帰ってやろう。

材料②ユニコーンの角
ユニコーンは清楚な処女にしか心を許さない。
漫画やゲームでもよく聞く話だ。
それで朱乃さんが選ばれるのも、まぁわかる。
「で、なんであんな薄い服を着させる。色々と危ないだろ、アレ」
清楚な処女はあんな格好しないと思うの。
「だから悪魔の魔力を抑えるもんだって説明したろ？　朱乃だってお前が褒めたら乗り気になったじゃないか」
「『何着ても似合いますね、危ないけど』って言っただけじゃん。これ褒めたうちに入るの？」
「エロけりゃ何でもいい！　朱乃さん、最高だ!!」

「いっちぇー、すけべ顔ー」
「すけべー」
イッセーのあんまりな言葉に幼女二人が頬を引っ張っていると、ユニコーンが茂みから現れた。
そいつはゆっくりと朱乃さんに近づいていき、油断しきった所を朱乃さんが首筋に一撃。
ユニコーンはあっさりと気絶して、その間に角を拝借した。
角の生え際にまた生えるように特製の薬を塗って任務完了。
さっさと最後の材料集めて家に帰りたい。
モグラさん飽きて寝ちゃったよ。

材料③???
牛、馬と続いたから、肉繋がりで次は豚か鹿かイノシシかと思ってた。
でも、どれとも違う。
大きな翼を目一杯広げ、巨大な口から咆哮をあげる。
どうみても、ドラゴンだよねぇ。
こいつの背中に生える特殊な鱗が最後の材料なんだそうだ。

あぁ、イッセーが子鹿の様に震えている。
あれは怖いよな、仕方ない。
ちびっ子達も怯えて俺と朱乃さんにしがみついている。
うわ、火の玉吐き出してきた！
あれがドラゴンのブレス、初めて見た。
イッセーがひたすらに逃げ回ってる。
「先生っ！　死ぬっ！　俺死んじゃうからぁぁぁ!!」
あ、泣きが入った。
「仕方ないッ！出ろォォォ!!」
アザゼルさんが指を鳴らすと巨大な魔法時が浮かび上がり、そこから巨大なロボットが現れた。
え～と、録画録画。
「こいつはサーゼクスに頼まれて、堕天使の科学力を無断で用いて俺が作製したマオウガー！　普段は駒王学園のプール下に格納しているお助けロボだ！」
あ、サーゼクスさんが頼んだのか。
後でこの映像ダビングしとかなきゃ。
「こいつに掛かればそんなドラゴン屁でもねぇぜ！　くらえ、ロケットパーンチ!!」

腕が火を噴きながらドラゴン目掛けて飛んでいく。
が、あっさり避けられて腕はそのまま飛んで行って帰って来なかった。
自分の義手は飛ばしても帰ってくるのに、手抜き作業したなアザゼルさん。
さて、録画はもういいかな。

イッセーとアザゼルさんが言い争いしている間に、モグラさんに通訳してもらってドラゴンと交渉。
朱乃さんに頼んで先生が丸焦げにしたミノタウロスの群れを転送して、それと交換で鱗を貰った。
流石ドラゴン、丸焦げでも気にせず食っている。
「ほらイッセー、アザゼルさん。そのポンコツ片してさっさと帰る準備して」
「え？　だってまだ鱗が……」
「もう貰ったから早く帰ろう。おチビちゃん達も疲れてるし」
イッセーとアザゼルさんに鱗を貰った事を話して、
『そんな事出来るなら初めからやれよ！』
というイッセーの言葉を無視しながら俺たちは帰路に着いた。

ロリ化した二人を解除用魔方陣の中央に座らせ、採ってきた材料で作った薬を飲ませる。そして、朱乃さんが魔力を送って解除を始めた。

解除は順調に進んでいたが、ゼノヴィアに追いかけられたギャスパーくんが衝突して、イッセーを魔方陣の方に突き飛ばしてしまった。

結果――

「な、なんじゃこりゃぁぁぁ!?」

リアス先輩とアーシアちゃんは元に戻ったが、今度はイッセーが巻き飲まれて幼児化した。

言動はそのままなので、今度は成功したという事なのだろう。

そのショタイッセーにリアス先輩とアーシアちゃんが抱きついている。

元々イッセーを幼児化させたくて試した術なんだそうだ。

「で、朱乃さん。なんで俺の方に手を伸ばしているのかな？　ゼノヴィアまでにじり寄るな」

背後から手を伸ばしてきた朱乃さんとゼノヴィアから距離を取りながら問い掛ける。

「いえ、違うのよ？　ちょっとカズキくんの小さい頃が見てみたいなって思っただけなの」

「本人の許可を取りましょうよ。拒否しますけど」

「いいじゃないか、減るものじゃないし」
「俺の中の何かは確実に減る。それ以上近付くなら、土産の肉は全部俺が食うぞ」
俺の言葉に一瞬ゼノヴィアが怯んだ。
チャンスだ、この隙に逃げさせて貰う！
その後無事に逃げ切れたかどうかは、また別の話である。

シェムハザさんと、先日のお礼を言いに来たリアス先輩に例の映像を渡してあげた。
後日、シェムハザさんとグレイフィアさんからお礼の品が届いた。
いい事すると気分がいいね。

五巻　冥界合宿のヘルキャット

23話

「冥界に行く？」
「あぁ、リアス部長の帰省について行くことになった」
夏休みもまだ始まったばかりの夜。
肉じゃがになる筈だったコロッケを突きながらそんな話を聞いた。
何故皮剥きをお願いしたジャガイモがマッシュになったのかはもう聞かない。
ちなみにモグラさんは爪を使って器用に剥いてくれるぞ。
「部長が、カズキも一緒に来るか聞いて見てくれと言っていた。来るだろう？」
いやいや、何を当然みたいに言ってるのか。
「どうせアザゼルさんもついてくんだろ？　向こうにはサーゼクスさんもいるし、こっちに残れば俺を面倒に巻き込む人いなくなるじゃん。行く訳がない」
聞けば夏休みはほぼ向こうで過ごすそうじゃないか。
今年も宿題を手早く済ませてしまえば、去年と同じくダラダラ出来る！
「本当に来ないのか？　こんな機会滅多にないだろう」

「いいや、モグラさんと留守番してる。お前は気にせず、みんなと楽しんでこいよ？」
「むぅ……」
あら、なんかご不満っぽい？
まぁ楽しそうではあるけどね。
今回は遠慮しとく。

「おら、出掛ける準備出来たか？　そろそろ出発するぞ」
次の日の朝。
インターホンを連打されて玄関へ向かうと、そこにはアザゼルさん。
すぐにドアを閉めようとしたが、素早く足を挟み込まれて失敗した。
「俺、行かないってリアス先輩に連絡した筈ですけど」
「バカめ、俺様が来た時点でお前に拒否権なんて上等なモンないんだよ」
アザゼルさんの義手の指先が光を放つ。
咄嗟の事に反応出来ず、まともに見てしまった。
次の瞬間、強烈な眠気が襲ってくる。
「この理不尽大王めっ……！」

……むぁ、なんだこれ。
ガタゴトうるさい。
あ、電車か。
ん？　何で電車？
「あら？　目が覚めたようですわね」
声が上から降ってきた。
あれ？　何で朱乃さんに膝枕されて……
「あぁ、アザゼルさんに拉致されたんだった」
その本人は少し離れた所で爆睡中。
にゃろう。
「随分とあっさり拉致って言うね、キミ」
木場が呆れた様に呟く。
仕方ないじゃん。
昔も突然ジャングルっぽい所に放り込まれた事あったけど、それよりは多分マシだよね。

あれ？
ねぇ、なんで頬が引きつってるの？
普通だよね？　ねぇ？　目を見て答えようよ。
「てか、俺の荷物もあるけどどうやって用意したんだ？」
「ん」
ゼノヴィアがお菓子を咥えながら俺の鞄を指差す。
そこには鞄からお菓子の袋を引きずり出しているモグラさん。
へぇ、モグラさんが荷物の場所教えたんだ。
あぁ、そうね。
モグラさんもお出掛け大好きだったもんね。
というか、用意したのアザゼルさんだよね？
もしゼノヴィアにパンツとか詰められてたんなら、今すぐ車窓から飛び降りなきゃならないんどけど。
「そうだ、朱乃さん膝枕ありがとう。痛くなかった？」
「うふふ、構いませんわ。寝顔を近くで見れて楽しかったですもの」
頬に手を当てながらニコニコしている。
そんなもん見て何が楽しいのか。

まぁ最近ちょっと避けられ気味だったから、良いってんだからいいや。
今は平気みたいだが、最近朱乃さんがおかしい。
普段は何時も通り笑顔でみんなに接しているが、ふと元気が無くなる時がある。
多分バラキエルさん関係なんだろうけど。
少し聞いた方がいいのかな。
元気がないと言えば小猫ちゃんもだ。
何かを思い詰めてるみたいで、最近よく溜め息をついていた。
モグラさんと遊んでいる時も上の空になる時があるみたいで、モグラさんが心配してた。
ふと窓から景色を覗く。
大きな山に木々が生い茂り、遠くには街も見えた。
ぱっと見は人間界のものだが、空は紫一色。
グリゴリにいた頃にヴァーリさんや美猴さんに連れられてきた、冥界だ。
今年の夏休みはここで過ごす事になりそうだ。

「カズキ、お前は俺と一緒に魔王領まで行くぞ。荷物はイッセーに預けとけ」

「え～……絶対サーゼクスさんに会うじゃん。拒否します」
「今朝も言ったがおまえに拒否権なんざねぇ」
この人本当に泣かせたい。
今やったら泣かされるの俺だけど。
片手の時でも勝てなかったし。
しょうがないので荷物はイッセーに預け、アザゼルさんと共に魔王領へ向かった。
「で、ここが魔王領か。思ったより普通だった」
「当たり前だ、組織の中枢部分だぞ？」
魔王の根城を案内の人について二人で歩いていく。
だってゲームで言ったらラスダンでしょ、ここ。
「あら？　アザゼルにカズキくん？」
中ボス、ではなくセラフォルーさんと遭遇した。
「よぉ、セラフォルー。サーゼクスとの会議はいいのか？」
「もう終わったからこれから家に帰るの、ソーナちゃんが帰ってきてるからね！」
アザゼルさんの質問にご機嫌に答えるセラフォルーさん。
そうか。
リアス先輩だって帰ってきてるんだから、そりゃ会長さんも帰るよね。

「そうだ！　カズキくんも一緒に行こうよ！　ソーナちゃんもビックリして喜んでくれると思うの！」

え？

「おい、ちょっと待ってセラフォルー。カズキは俺と一緒にサーゼクスに呼ばれて……」

「さぁ、そうと決まれば急ぐよカズキくん！　しゅっぱぁ～つ!!」

今のやりとりで何が決まったの？

セラフォルーさんは俺の腕を掴むと凄いスピードで俺を引っ張って行く。

もうアザゼルさんの姿は見えない。

あ～……最近こういうので動揺しなくなった自分が嫌だなぁ。

「と言う訳でやっほ～。貴方のカズキです」

「俺はお前なんぞいらん」

「奇遇だな、俺もだよ」

アザゼルさんの次はセラフォルーさんに拉致され、俺はシトリー家の屋敷へと訪れてます。

セラフォルーさんは会長さんを連れてくると言って、俺を客間に押し込めた後に何処

かに消えた。
もう慌てても仕方ないので、大人しくしてたら匙と遭遇。
挨拶もそこそこに、ここにいる経緯を説明したら凄い憐れみの目で見られた。
お前はいい奴だな、匙。
何でもシトリー眷属もここに来ていて、今度開かれる若手悪魔の会合に出席するそうだ。
悪魔って自由そうでいて大変なんだな。
やっぱ人間は楽でいい。
そう言うと匙も苦笑していた。
「お待たせ～！　ソーナちゃん連れてきたよ！」
「ですからお姉様！　お客様がいらっしゃるのにその様な……って、カズキくん？」
快音を響かせながらドアが開かれ、そこからセラフォルーさんと会長さんが現れた。
会長さんは手を引かれながら慌てていたが、俺を見ると目をパチクリしながらビックリしている。
「やっほ～。貴方のカズキです」
「なんでカズキくんがここに？」
華麗にスルーされた。

まぁ、同じ事されたら俺もそうするけど。
しかし匙、なんでそんなに怒ってるの？
「いや～私の前でソーナちゃんを口説くとか勇気あるね、カズキくん★」
口説いてません、挨拶です。

匙の神器で簀巻きにされた。
悪魔は人間を簀巻きにするのが趣味なのか？
すぐに会長さんが助けてくれたけど。
事情を説明したら、セラフォルーさんが正座で説教されてた。
ざまぁ。
「ごめんなさいカズキくん、お姉さまが失礼な事をしたみたいで」
会長さんが頭を深く下げてきた。
「いや、どうせあのままでもアザゼルさんとサーゼクスさんに無茶振りされてただけだろうし。あまり気にしないで下さい」
「おまっ!?　魔王様にさん付けとか!?」
だって本人にそうしてってお願いされたし。

いや、なんだその顔。
あんな人のお願い断れないだろ、おっかなくて。
取り敢えず、その日は匙の部屋に厄介になることになった。
個室もあると言われたが、匙が何やら相談があるらしいし、部屋が広すぎて一人だと何か不安になるから丁度いい。
ちなみに恋愛相談だった。
木場の件で世話になったから力になりたかったが、これは無理だ。
ちなみに会長さんが好きらしい。
確かに美人だもんな、会長さん。
お前に好きな人はいないのかと聞かれたが、よくわからない。
でもイチャついてるイッセーには腹が立つといったら、激しく同意してくれた。
昔の話も聞かれたので簡単に答えると、匙は号泣してしまい、ティッシュが空になるまで鼻をかみ続けていた。
何故かズッ友宣言されたが、こういう奴は嫌いじゃない。
そのあとに涙と鼻水まみれの顔で抱きついて来なければ、だけど。
この日はそんな馬鹿話を遅くまでしながら楽しい夜を過ごせ、冥界に来て良かったと思えた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

全くお姉さまには本当に困ったものだ。

カズキくんを本人の了承も得ずにここに連れてくるだなんて。

しかもサーゼクス様にお呼ばれされていたのに、それもすっぽかさせて！

リアスに連絡したら特に用があった訳ではないみたいだからよかったけれど、何かあったらどうする気だったのか。

彼は人間であって悪魔ではないのだから、こちらの都合で振り回すなど以ての外だ。

姉のしでかした事とはいえ、シトリー家次期当主として明日またしっかりと謝罪しなければ。

カズキくんは、今日はサジと同じ部屋で休むらしい。

最初は少し溝があった様だが、今はそれなりに仲良くやっていると聞いている。

リアスの所の兵藤くんや木場くんともいい関係を結べているし、サジのコミュニケーション能力は存外高いのかもしれない。

サジはかわいい弟の様な存在だ。

実力的には同期の兵藤くんや人間としては規格外のカズキくんには劣るが、あの子もいずれ立派な悪魔になってくれることだろう。

今は要訓練であるが。

さて、私もそろそろ休むしよう。
自室に戻る為に廊下を歩いていると、サジの部屋の前に人影が。
あれは……桃に、留流子（るるこ）？
二人してドアの前で一体何を……まさか盗み聞き？
全く、ちょっと注意しておこう。
二人に近づき肩に手を置くと、小さく悲鳴をあげてこちらに振り向く。
怯えるなら盗み聞きなんてするんじゃありません。
お説教しようとした時、部屋から話し声が聞こえてきた。
「１０歳の頃に攫われて改造人間にされた上に堕天使の巣窟で育ったって……また人生ハードモードやってんな」
「最近周りが悪魔ばっかだから、自分が改造されてるとか忘れ気味になるけどな」
これは……カズキくんの話？
「そういや、お前の親は？」
「父親に孤児院に預けられてそれっきりだな、小さすぎて覚えてない。母親は知らん」
「あ……悪い」
「謝る必要あったか？」
サジの質問に笑いながら何でも無い様に軽く答えているが、重い。

つい注意する立場を忘れて部屋を覗き込んでしまった。
サジはベッドにあぐらをかいて座り、カズキくんは膝に彼の神器であるモグラさんを乗せて、優しく撫でてあげている。
「しかしグリゴリで育った、か……自分を改造した奴の仲間なのに、よく一緒にいれたな」
そう、彼を助けたのは確かに堕天使だ。
でも、彼を改造して人生を狂わせたのもまた堕天使だった。
子供だったのに、よく恨みをぶつけなかったものだ。
「アザゼルさんとかみんなして謝ってくれたしね。別に気にする程の事じゃないだろ」
「大物すぎるだろお前……」
サジが頬を引き攣りながら突っ込む。
自分の身体を弄られて気にする事じゃないって、どれだけ心が広いんでしょう?
「まぁ改造されたばっかは日常生活が厳しかったけどな。スプーンとかドアノブがさ、潰れるんだよ」
壊れるんじゃなくて、握力で潰れるんだ。
彼はそう言いながら手を握ったり開いたりしている。
「最初の頃はとにかく物壊しまくってさ、もうスッゲー謝ってばっかだったわ」

それはそうだろう。
自分は身体能力が上がったとはいえ、人間の子供と尋常ではない力を持つ堕天使。
恐ろしくてひたすら謝るしかないだろう。
相当神経を使ったに違いない。
私なら耐えられるだろうか？
「でもさ、次の日起きてみたら、施設のドアが全部自動ドアになってたんだよ」
あれは嬉しかった。
そう言った彼の表情が、物凄く明るいものになった。
本当にグリゴリの者達が大切なんだろう。
「ほかにも俺の為に色々やってくれたし、グリゴリのみんなはいい人たちだ。変人も多いけどね」
彼はそう言いながら膝のモグラさんを頭に乗せる。
サジも一緒にいる二人も涙を溢している。
私もだが。
「そういやお前以外の被験者は……？」
「ん？　みんな死んだ」
あっさりと口から出てくる非常な現実。

これはリアスから聞いていた話で想像はしていた。
カズキくんの様なスペックの人間を量産できたらとんでも無いことになる。
「俺は木場と違って、ずっと一緒だったわけじゃないから」
そう言いながら、儚げに笑う。
でも、彼はコカビエルをほぼ単独で撃破した。
仇をきっちり討ち取り、死んだ者たちの手向けとした。
それを目標に、死に物狂いで努力をしてきたのだろう。
その結果が、人間の身でありながら堕天使の幹部の撃破である。
聖書にも載る伝説の堕天使を倒せる、人間。
ここまで出来るのに、人間。
「折角拾った命なんだ。きっちり寿命まで生き抜くよ、モグラさんと一緒にね」
「うぉぉあぁぁぁ！　カズキぃ！　カズクゥィーー！　俺は、俺はずっとお前と友達だからなぁ～!!」
「うぉ、やめろ気色悪い！　ぐぁ、鼻水がぁ～！」
我慢の限界だったのか、サジは涙やら鼻水やら顔から出るものを全部出しながらカズキくんに抱きついてました。
私も号泣している二人を連れて、静かに部屋から離れました。

私は号泣はしてません。
ちょっと、泣いちゃいましたけど。
今日はカズキくんの事が少し理解できて良かった。
しかし、明日は二人と一緒にちゃんとカズキくんに盗み聞きした事を謝罪しなければ。
でも、今日はもう休もう。
朝までに目の腫れを引かせなければ。

24話

朝起きたら会長さんと、眷属の二人と一緒に頭を下げられた。
なんだこの新手のイジメは。
会長さんに聞いてみたら、どうも匙との会話を三人で聞いていたらしい。
俺の昔の話なんて大したことないから気にしないでと言ったら、眷属の人が泣き出してしまった。
た、助けて元ちゃん!?
「誰が元ちゃんだ、誰が」
匙も一緒にフォローしてくれて、泣いた人も何とか落ち着いてくれた。
会長さんはまた頭を下げている。
「えっと、そうだ！　匙から聞きましたけど、会長さんお菓子作るの趣味なんですよね？　今度それ作って下さい！　これでチャラ、ね!?」
会長さんはポカンとした後、慌てる俺が面白かったのか笑いながら了承してくれた。
この場はこれで終わったが、会長がいなくなってから副会長さんがコッソリと耳打ちしてきた。

なんでも、会長のお菓子は『趣味』であって『特技』ではないとの事。
何、大抵の物は食える。
特にお菓子なんて分量をきっちり計れば、そうそう失敗などしない物だ。
眷属の人たちの憐れみの目を向けられても、大して気にならなかった。
今は、まだ。

今日は若手悪魔が集まる会合があるそうだ。
セラフォルーさんから昨日のお詫びとして招待された。
会長さんと匙にも誘われたし、予定もないので行ってみることにした。
リアス先輩たちも来る予定との事なので、そこで合流すればいいや。
そしてその会合の待合室に着いてみると、壁の一部が破壊され、その近くにはヤンキーらしき死体が一つ。
なるほど。
「随分と個性的だけど、悪魔らしいインテリアだね」
「いや、流石にねぇから」
やっぱ？　俺もそう思った。

匙と軽口を叩きつつ辺りを見渡すと、何やら体格のいい人とリアス先輩達が一緒にいるのを発見。
向こうもこっちに気付いた様だ。
「あら、ソーナ。カズキくんも来たのね」
「おぉ、シトリー家の……ん？　カズキ、と言ったか。お前、人間か？」
男性は不思議そうにこちらに視線を向けてきた。
「えぇ、彼は瀬尾一輝くん。人間ですが、私たちの友人で、セラフォルー様からの招待でいらっしゃいました」
「レヴィアタン様のご友人でもあるのか！　俺はサイラオーグ・バアル、大王バアル家の次期当主だ」
会長さんの紹介を受け、朗らかに笑いながら手を差し出してきた。
大王？　魔王とはまた違う何かなのか。
「ご丁寧にどうも、瀬尾一輝です。ただの人間やってます」
握手に応えて手を握り返す。
「ふむ、この手でただの人間って事はないだろう。これは鍛え抜かれた者の手だ」
握手しただけでそんなんわかるのか。
あれ？　このサイラオーグさんってヤバくね？

なんかヴァーリさんと同じ匂いがする。
「そりゃそうだよな。コカビエルをボロボロにするくらいだし」
イッセーがボソッと呟く。
あ、バカ。
この手の人に余計な事言うな。
「ほう、どれ試しに」
イッセーの呟きを聞いたサイラオーグさんの腕がブレる。
いきなり凄い速さの突きが、顔面目掛けて飛んできた。
モグラさんを出す余裕がないので、腕を擦り付けて威力を殺しながら受け流す。
それだけで腕の皮がずり剥けた。
「おお、本当に凄いな！　これで人間なのか、何故悪魔にならないんだ？」
「興味ないです。というか、人に怪我させといて何を笑ってるのかねこのマッチョは」
あ、控えてる人達が怖い顔してる。
しまった、悪魔の有名どころが来るんだっけ。
この人もいいトコの坊ちゃんなのか。
「む、すまん。ゼファードルと同じ感覚で打ってしまった、大丈夫か？」
「謝ってくれたんでいいです、後ろの人たちが怖いですし」

それにもう治った。
痛いのは変わらないけど。
「惜しいな、俺の眷属になって欲しいくらいだ。どうだ、よかったら訓練に付き合ってくれないか？」
「やだよ。か弱い人間相手に、なんて拷問を提案するんだこの人」
いかん、ついタメ口になってしまった。
「ハッハッハ！　悪魔相手に物怖じしないこの態度。リアス、お前の友人は本当に面白いな」
「もう勘弁してちょうだい……」
俺とサイラオーグさんのやり取りにリアス先輩が頭を抱えてしまった。
今回は俺悪くなくね？
その後もイッセーや朱乃さん達と話をしていたが、スタッフの人に呼ばれて一足先に会場に行くことになった。
会場につくと、何やら偉そうな悪魔の方々が三段になっている席にそれぞれ座っている。
一番上にサーゼクスさんとセラフォルーさんがいるので、上から偉い順になってるのかな。

なんかお偉い方がめっちゃ睨んでくるな。
やっぱ人間が来るのは不味かったか。
俺にはまた別の席が用意されていて、サーゼクスさんにそこに座る様に促されてから、皆さんに頭を下げて其処に座る。
サーゼクスさんとセラフォルーさんの隣にもう二人男の人が一緒に座ってるけど、あの人達も魔王なの？
そんな事を考えていると、後からリアス先輩達も会場にやってきた。
サーゼクスさんの話から始まり、何やら難しい話のオンパレードだった。
今はそれぞれの目標や夢ついて質問されている。
サイラオーグさんは『魔王になる』。
リアス先輩は『レーティングゲームで優勝する』。
そして会長さんの夢は『冥界に、誰でも通えるレーティングゲームの学校を建てる』事。
会長さんがそう言うと、お偉いさん方は突然大声で笑いだした。
え？　今の何処に笑いどころが？
悪魔の笑いのツボがわからない。
それは無理だ、傑作だと言葉が続き、会長さんが本気だと伝えてもそれは変わらない。

会長の眷属の人達が、と言うか匙がピリピリしだしているのを感じる。
席に座る悪魔達は口々に語り出した。
「下級悪魔や転生悪魔は主に仕えて才能を見出されるのが常。その様な物をつくっては伝統と誇りある旧家の顔を潰すことになる」
「幾ら変革の時代と言っても、変えて良いものと悪いものがある」
「たかが下級悪魔に教育など」
「シトリー家の次期当主は夢見る乙女か、現実が見えていないとみえる」
あ、もう無理。
ごめん匙、俺のが我慢できない。
「大切なお話しの中大変申し訳ありませんが、サーゼクス様。質問させて頂いてもよろしいでしょうか?」
手を挙げてから声を発する。
サーゼクスさんは様付けした事で色々と察してくれたのか、応えてくれる。
「あぁ、もちろん構わない。その前に紹介しておこう。彼は瀬尾一輝。私やセラフォルーの友人で、和平の切っ掛けとなった事件の折、コカビエルを単独で撃破した人間だ」
サーゼクスさんの発言に若手悪魔達にざわめきが起きる。
今はどうでもいいので、話を進める。

「御紹介に預かりました。私、瀬尾一輝と申します。魔王様からのお許しも得たので質問させて頂きますが、先程のソーナ殿のお話。何か問題でもあるのですか？」
「たかが人間が我らの会話に口を挟むなど……！」
「私は先程、魔王であらせられるサーゼクス様より発言の許可を得ております。魔王様に歯向かわれるおつもりで？」
「ぐ……」
俺の発言に押し黙る。
最初から考えて物を言え、老害め。
「伝統や誇り、確かにそれらは大切な物でしょう。私の様な者には想像も出来ない、長い永い年月から先祖より受け継ぎ培ってきたのですから」
俺の発言に当然だとばかりに頷いたり、フンと鼻を鳴らす。
「ですが、今のシトリー殿の話と関係ないでしょう？　下級悪魔が知恵をつけるのを禁止する伝統に何の価値がありますか？　こんな事が変えてはいけないものなのですか？　教えて頂きたい」
「それは――」
「ないですよね？　このような馬鹿げた事に合理的な理由など」
俺は相手の言葉を遮り、ゆっくりとお偉方の前まで歩を進める。

「子供はその種の大切な宝だ、サーゼクス様も先程そう仰られた。その宝を磨きあげ、より輝かせようと努力する後進を蔑ろにするなど、愚かとしか言いようがない」
「貴様っ！　我ら悪魔を愚弄するか!?」
そら、さっきのバカが喰いついてきた。
「悪魔を愚弄してるんじゃない、あなたを愚弄してるんだ。合理的な考えのできる他の方達やソーナ殿を、あなたと一緒にして欲しくない」
さっきからこいつしか反論してこない。
他の連中はマズい流れになっているのに気付いて黙ったというのに。
「人間にもいましたよ、そういう事をする輩が。でも、みんな勝手に潰れるんですよ。敵に滅ぼされるんじゃなく、内側から自滅して」
「悪魔を脆弱な人間と同等に扱う気かっ!!」
「人間と悪魔、何が違うのです？　悪魔は優れた魔力を持ち、人間は優れた科学力を持つ。互いの長所が違うだけで、大した違いなどないでしょう」
一つ咳払いをして、今度はサーゼクスさんに視線を移す。
「話が逸れました。私が言いたいのは、ソーナ殿のやろうとしている事は悪魔の未来を明るいものにする、とても素晴らしい物だと言う事です」
「成る程、筋の通った最もな意見だったな。して、君はどうしたい？」

「私はソーナ殿の成そうとしている事について、皆様方にもう少し熟慮して頂きたいだけです」

話終わった後に、もう一度頭を下げてから自分の席に戻る。

おぉ、老害の顔が真っ赤だ。

やっぱりこの手の奴は、口で言い負かした方がスッキリする。

人の本気の夢を馬鹿にして何が楽しいのか。

「そうよ！　うちのソーナちゃんがゲームで勝ち進んでいけば文句もないわよね？」

ちょ、セラフォルーさん!?

お願い、今余計なこと言わないで！

「みんなしてソーナちゃんの事いじめて！　あんまりひどいと、カズキくんと違って私は暴力で訴えちゃうわよ!?」

何やらプンスカしながら、セラフォルーさんは手をブンブン振り回している。

それを見て、さっきの老害が口を開いた。

「なるほど、では実際にゲームで白黒つけてはいかがかな？　若手同士での非公式の交流試合と言うことで。そこの人間はソーナ殿側の勢力に着けばいい」

ほれみろ面倒な事にぃ……！

くそ、めっちゃ楽しそうな顔しやがって。

「私はソーナ殿と、サイラオーグ殿との試合を提案いたし――」
「いや、ソーナにはリアスと戦ってもらおう」
老害の発言をサーゼクスさんが遮る。
「元々、近日中にリアスのゲームをする予定だった。アザゼルが各勢力のゲームファンを集めて若手の試合を観戦させる名目もあったし、ちょうどいい。貴殿もよろしいかな？」
「……は、それがよろしいかと」
サーゼクスさんの言葉に従い、老害が頭を垂れる。
その間に、リアス先輩と会長さんが言葉を交わす。
「何だか妙な流れになってしまったけれど……やる以上手加減しないわよ、ソーナ」
「当たり前よ。公式ではないとはいえ、私の初のレーティングゲーム。手加減なんかしたら許さないわ、リアス」
「では詳細は追って伝える。君達もそれで構わないかな？」
『魔王様の仰せの通りに』
くそが、老害と言葉が被った。
気分悪い。
話も終わったので、俺は会長さんのところに戻って頭を下げた。

「会長さんすみません。我慢出来ずに好き勝手したら、思いっきり会長さん達まで巻き込んじゃいました」
「いや、カズキが言わなかったら俺が言ってた。まぁ言い負かされてただろうけど」
「やってしまった事は仕方ありません。それに庇ってくれたのは嬉しかったですよ、ありがとうございます。匙もよく我慢しましたね、偉いですよ」
「か、会長……！」
俺の謝罪に、匙が続けてフォローしてくれる。
そんな俺たちに、会長さんが慰めの言葉をかけてくれた。
匙はそれだけで感動して泣きそうだ。
サーゼクスさんの先程の発言の後にこの場は解散となり、みんなゾロゾロと会場を後にしていく。
しかしあのジジィもふざけた事をしてくれる。
後から聞いたら、サイラオーグさんって若手最強らしいじゃねぇか。
わざわざそんなのぶつけようとしてくるとか、意外と抜け目ない。
リアス先輩達には、このまま会長さんの家で過ごさせて貰うことを伝えた。
流石に試合相手の所にお世話になるわけにもいかないし。
「でも意外だったわ。カズキくんって、教育についてあんなにしっかりとした考えを

持ってたのね？」
「ええ、とてもカッコよかったですわ♪」
リアス先輩と朱乃さんが俺を褒めちぎる。
「はい、感動しました！　もしかしてカズキさんって教職を目指してるんですか？」
「おお、いいんじゃないか？」
「結構似合ってるかも知れません」
アーシアちゃんにイッセー、小猫ちゃんまで。
どうしよう、なんか本当の事言えない。
「うーん……」
「どうしたんだい、ゼノヴィア？」
何かを考え込むゼノヴィアに、木場が問い掛ける。
あ、ヤバイ。
「いや、カズキの言葉。何処かで聞いた事がある様な……」
「まぁ、どうでもいいじゃないですか！　さぁ、会長さん。早く帰って特訓しましょう、特訓」
こういう時はゴリ押しだ、早々に退散しよう。
「え？　あ、そうですね。ではリアス、次はゲームで」

「ええ、ソーナ。お互いに恥じない戦いをしましょう」
　こうしてリアス先輩たちと別れ、会長さん達と帰路に着いた。

「なぁ、カズキ。なんであんなに慌ててたんだ？」
「……聞いても怒るなよ」
　帰り道に匙が小声で聞いてきたので、こっそり答えた。
「いや、あの言葉……実は俺の持ってる、漫画とか小説のセリフを切り貼りしたもんなんだよねぇ」
　今時の漫画読んでる高校生なら、あの程度の事誰でも言えると思う。
「……おい、お前の言葉に感動した俺の気持ちを返せ」
「だから怒らないでって言ったじゃん……」
「なぁ、今度その漫画……俺にも貸してくれ」
「別にいいけど、なんだよ急に」
　匙が照れ臭そうに頬をポリポリと掻きながら呟く。
「お前の言葉聞いて、会長が嬉しそうだったのが悔しいんだよ……将来役立つかもしれないし」

「……青春してるなぁ」

「うるせぇ！」

匙が殴り掛かってきて、騒いだから二人して会長さんに怒られた。

さて、後でサーゼクスさんかセラフォルーさんに連絡だ。

ゲームでも当然頑張るが、『お願い』もきっちりこなさなきゃ。

２５話

シトリー家の所有している訓練場にやって来た。
モグラさんも昨日外に出られなかった分、朝からやたらと元気だ。
眷属の子たちに昨日の夜から撫で回されて、さっきまでヘトヘトだったけど。
会長さんも含めて、みんな学校のジャージ姿だ。
俺も昨日リアス先輩の所にある荷物が此方に送られてきたので、動きやすい服に着替えている。
流石に訓練する気は無かったのでジャージは持ってきて無い。
「さて、まず私達がやるのは敵の分析です。もちろんトレーニングも行いますが、今日はこちらをメインで行きます」
会長さんがホワイトボードの前に立ち、横には副会長さんが控えている。
会長さんはホワイトボードにグレモリー眷属の名前を書いていき、それぞれを何かの区分に分けて囲っていく。
「レーティングゲームでは、それぞれが役割を持ちます。パワー、テクニック、ウィザード、サポート。リアスのチームを区分けすると、こうなります」

会長さんがホワイトボードから横に移動すると、それぞれが丸で囲われている。
イッセー、小猫ちゃん、ゼノヴィアはパワー。
木場がテクニック。
リアス先輩と朱乃さんはウィザード。
アーシアちゃんがサポート。
兼任出来るものには、横に小さく書き足されている。
イッセーの横にはサポートと書かれていた。
力を渡せるんだよね、そういえば。
「全体的に見ると、攻撃に重点を置いてますね」
「というか、脳筋パーティですよね」
なんと言うか、木場が可哀想になる。
俺のあんまりな言葉に、会長さんも苦笑しながら頷いている。
「やはり、一番倒したいのは兵藤くんですね」
おぉ、イッセーが高評価だ。
「姫島さんや木場くんよりもですか？」
「ええ。赤龍帝の力も驚異ですが、ムードメーカーの彼を早い段階で潰せれば、士気にも影響が出るでしょう」

副会長さんの質問を的確に返す。
うん、士気から崩すとかお嬢様なのに発想がエグいな。
実にやりやすい。
「後はルールがどの様なものになるかですが……こればかりは当日にならないと解りませんね」
「あ、それなら少し意見が」
俺が手を挙げると視線が集まる。
「俺があの老害に喧嘩売ったんで、多分俺に嫌がらせしてくると思うんですよ。あの場で発言出来る程度には偉いみたいですし、ルールに口出し位してくるんじゃないですかね？」
「え、それってマズくない？　ただでさえ戦力差があるのに……」
「いや、ホントごめんなさい。でも当日は色んなトコの偉い人達呼ぶって言ってたから、そこまで露骨には出来ないよ。だからその範囲で会長さんに考えて貰えればな～と……」
「そこまで来て人任せかよ」
《僧侶》の花戒さんが不安げにしているが、そこまで不利でもない。
妨害があると事前に判れば、逆にそこから何をしてくるか予測する事が可能なのだか

ら。

　匙のツッコミなんぞ聞こえん。

「多分資料はライザーの時とコカビエルの時ぐらいですよ。あの時は新校舎ぶっ壊したりビーム出したりしましたけど、そこら辺を規制するルールとかありますか？」

『ビーム!?』

　あ、みんなは結界張ってくれてたから見てないんだっけ。

　後から映像とか見たのかと思ってた。

「そうですね……飛び道具禁止、神器の禁止、高出力の術技の制限、フィールドの破壊制限などは前例があった筈です。あるとしたらこの辺りでしょうか？」

「破壊制限なら大当たりだね。イッセーは当然として、朱乃さんの雷撃とかゼノヴィアのデュランダルも出しにくくなる」

　流石にそこまで馬鹿じゃ無いだろうけど。

　ありそうなのは神器の禁止か。

　イッセーは弱体化するし、アーシアちゃんは置物になるが、それ以上にこちらの戦力がガタ落ちになるな。

　その後も色々と意見を出し合いながら、誰と相対するかなどを話した後、各自トレーニングを開始した。

会長さんに頼まれて、俺は匙への指導を行うことになった。
モグラさんは頭の上で待機だ。
「さて、早速始める訳だが」
「おう！　よろしく頼むぜ、カズキ」
やる気満々に返事をする匙。
「取り敢えず基礎……は、時間が足りないんで、いきなり奥義からいくぞ」
「は!?　ちょ、色々かっ飛ばしすぎだろ!?」
「じゃあ早速始めようか、打ち込んでこい」
驚愕している匙を放置し、棒立ちになる。
「え？　ここでいいのか？　みんなが周りにいるし危ないんじゃ……」
周りを見渡すと、みんながそれぞれのトレーニングを行っている。
でも、別に問題はない。
「大丈夫だから、ほら」
「お、おう！」
匙は真剣な表情でこちらをジッと観察しながら、拳を振り抜く。

それに合わせて腕を顔の前で十字に組み、打撃に合わせて匙の拳を持ち上げながら頭の上方に流す。
「はい、これが十字受け。防御に全神経を集中させるから、一発は確実に止められる。ハイ次」
両手を前に突き出し、肘を軽く曲げて構える。
「これが前羽の構え、空手とかで見た事あるかもな。よし、打ってこい」
匙は不思議そうにしながら再び突きを放つ。
今度は腕を円を描く様に動かし、匙の突きを払い退ける。
「今のが回し受け。打撃を逸らすのに有効だ」
「カズキ……もしかして、これが奥義なのか？」
「あん？　当然だろ。イッセーにだって教えてないぞ」
匙が拳を握りながらプルプルと震えだす。
しかしそのまま拳を解き、大きく息を吐く。
「お前が馬鹿にしてないのはわかる。でも、俺は攻撃を教えて欲しいんだよ」
まぁ言うと思ってた。
「あのな、『殴る』だけなら誰でも出来るんだよ。そこらのチンピラでも、それこそ動物でも」

俺の言葉に何か思う所があるのか、匙は自分の拳を見つめている。
「そもそも、大抵の格闘技は『防御』こそが真髄なんだぞ？　それにこれは、今回の作戦に必要な技術だろ？」
「っそうか！　俺が兵藤と対面している時間が伸びるだけで、勝率が上がるのか！」
理解して、目の輝きが戻る。
なんかあれだ、こいつ犬っぽい。
「わかったら腰を落として、拳を握ったまま　腕を前に突き出せ。その体勢で俺が戻ってくるまで動くな。腕下げるなよ」
「おう！」
「それが終わったら足捌き教えるから、サボんなよ～」
休憩所から薪か何かを貰ってこよう。
なけりゃ棒っぽいなにかでも、ってあった。
「サジは頑張っていますか？」
会長さんがタオルで汗を拭いながら話し掛けてくる。
「元々根性ありますからね、何とかなるんじゃないですか？」
「その薪は何に使うのですか？」
「足捌きを教える為の材料です。教えた通りに動かないと、これの角がちょうど脛にぶ

つかる様に地面に刺します」
　俺の言葉に会長さんの頬が引き攣る。
「随分とまた嫌らしい……」
「痛みが一番早いんですよ、身体に何かを覚え込ませるには」
　俺なんて美猴さんの要求がどんどん上がってきて、最後の方は熱した鉄の棒でやらされたぞ。
　文句言ったら
『じゃあ俺っちのやった剣山の方がいいかい？　あれ、刺さると俺っちでも痛いんだぜい……』
　と、脛を手で摩りながら言ってきたので黙ってしまったけども。
「……ごめんなさい、カズキくん」
「はい？　何がですか？」
　会長さんの方を振り向くと、手に持ったタオルを握り締め俯いている。
「本来なら関係ない貴方を巻き込む事自体が間違っているのに、こんな事まで……」
「いやいや。今回はどう考えても、会長さんが俺の暴走に巻き込まれてるじゃないですか」
　ビックリした。

会長さんが俺を巻き込んだと思ってたとは。
あんなんどう考えても、首突っ込んで話を大きくした俺の所為なのに。
その後もお互い譲らないので、『お互い様』と言う事で両者妥協した。
薪を持って匙の所に戻ると、人だかりが。
思ったより会長さんと話し込んでいたらしく、膝と腕をプルプルさせながら匙が地面に倒れてた。
ごめんね。

「お前さ、修行初日に監督者が監督しないって何なんだよ……」
「だから今日の夕食の準備、お前の分も全部俺がやったじゃないか。ほら、デザート付きだぞ？」
「お前、俺の事馬鹿だと思ってるだろ？」
「え、違うの？」
「ぐおぉぉ……腕が痛すぎて殴れないぃぃ……」
修行も終わり、今はみんなで夕食。
動けなくなった匙の代わりに、下拵えだけでなく夕飯の調理を全て受け持った。

「しかも喜べ、材料があったから今日は中華だ。これだけは自信を持って人に出せる」
主に美猴さんとヴァーリさんのせいで。
美猴さんは中華料理が好きで、組み手で負けるとよく作らされた。
ドンドコ負けるから、比例して料理の腕がドンドコ上がっていくのだ。
しかもヴァーリさん。
実はラーメンが大好物で、ラーメンの事を語り出すと止まらなくなる。
満足いくまでひたすらにスープを作らされた事もある。
戦う時よりも怖かった。
「すごいこのチャーハン……！　綺麗な黄金色で、お米の一粒一粒に卵がコーティングされているわっ！」
「この春巻きも美味しい！　皮はパリパリ、中の野菜もトロトロシャキシャキ。いくらでも食べられそう！」
「エビチリも美味ぇ！　エビがプリプリで、腕が痛いのについ食い続けちまうぜ！」
「そしてデザートの杏仁豆腐。上品な甘さで脂でしつこくなった口の中をスッキリとさせてくれる……」
みんな口々に褒めながら、オーバーリアクションで箸を進めていく。
うん、なんか料理漫画みたいになってるな。

まぁ、みんな楽しそうに食べてくれてるからいいや。
特訓で疲れたのか、料理にはしゃぎ過ぎたのか。
食事と入浴を終わらせると、みんなすぐに床に入った。
今日は夜の訓練は行わないようだ。
この日を最後に、期間中は料理をさせて貰えなくなった。
手伝おうとするとみんなして止めるのだ。
匙に聞いたら、どうにも体重計が怖くなったそうだ。
中華って脂凄いもんね、ごめん。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
今度のシトリー眷属とのレーティングゲーム。
カズキ先輩とも戦う事になってしまった。
そのせいで暫くモグさんとも離れ離れです。
少し寂しい。
いや、そんな事を言っていられない。
何しろあのカズキ先輩と戦うのだから。
普段は面倒くさがりで、イッセー先輩と一緒にふざけたりしてるけど、困ってると気にしてくれる、優しい人。

ライザー戦の時では一人で敵の半数を打ち倒し、あの堕天使の幹部であるコカビエルをほぼ一人で打倒した凄い人。

部長は

『ソーナは計算し尽くされた凄い作戦を考えてくるけど、彼は予想外過ぎて何をしてくるか分からない』

と言っていた。

『考えるだけ無駄だ、その場その場で対処しろ』

アザゼル先生もイッセー先輩に対処を聞かれ、そう答えていた。

アザゼル先生に言われた強くなる方法。

『自らを晒けだせ』

「自分を受け入れろ』

私の中に眠る【猫？（ねこしょう）】の力。

姉様が溺れた、恐ろしい力。

私はこの力が怖くて堪らない。

もし扱いを間違えれば、周りの人たちを傷付けるかもしれない。

姉様のように暴走するかもしれない。

だから、この力は使いたくない。

使わないでも強くなってみせる。
強くならなくちゃいけない。
ただでさえ私は、リアス部長の眷属の中で一番弱いのだから。
アザゼル先生にメニューは貰っているけど、これをこなすだけじゃきっと足りない。
メニューの量を増やそう。
力を使わない分、他で補うしかないのだから。
もっと修行しないと。
もっと、もっと……!!

26話

俺は今、グレモリーの本邸まで来ている。
本来なら敵陣であるここに来るのはマズいかも知れないが、事情が事情だ。
アザゼル先生がシトリー側の様子を見に来た時に、小猫ちゃんが倒れたと聞かされた。
指示した以上に修行に取り組み、オーバーワークが原因との事だ。
最初は会わないつもりだった。
今の状況で会うのは、お互いに失礼だと思ったから。
でも、アザゼルさんは俺に小猫ちゃんに会ってやれと言う。
『今の小猫には、お前の言葉が必要だ』と。
小猫ちゃんが休んでいる部屋に案内され、ノックをする。
「はい、どなたで……ってカズキくん？」
少しすると中から朱乃さんが現れた。
ベッドには、朱乃さんの言葉に反応したのか上半身だけ起こした小猫ちゃんが見える。

きっと付き添ってあげていたのだろう。
「こんにちは朱乃さん……入ってもいいかな？」
「今は……いえ、貴方だからこそなのかしら。あの子を、お願い」
朱乃さんは一瞬迷ったようだが、何かに納得すると部屋に入れてくれて、自身は外へと出て行った。
小猫ちゃんがいるベッドの横にちょうど椅子があったので、俺はそこまで移動して座る。
小猫ちゃんは、何も言わずに俺を見つめていた。
「数日振り、小猫ちゃん。修行、頑張りすぎちゃったみたいだね？」
俺の問い掛けに、小猫ちゃんはベッドのシーツを握り締める。
「さっき、イッセー先輩にもオーバーワークはダメだって言われました……」
「そうか、悩んでる時はひたすら進むのもアリだと俺は思うがね。泣いちゃうくらい悩むなら、尚更だ」
小猫ちゃんの目の下が腫れていた。
きっとついさっき擦ったのだろう、少し赤くなっている。
小猫ちゃんは右手で目の近くを触る動作をした後、此方に向き直った。
「……カズキ先輩。少し、話を聞いて貰えますか……？」

それから小猫ちゃんは自身の昔話をしてくれた。
自分には姉がいて、小さい時に親と死別してからは誰にも頼れず、ずっと二人で助け合いながら生きてきた。
ある時、とある悪魔が姉の才能を見抜き眷属に誘った。
姉は自分と一緒に暮らすのを条件に悪魔へと転生し、やっとまともな生活を手に入れました。
でも、姉は悪魔になった事で才能を開花し過ぎた。
元々得意だった妖術だけでなく魔力にも目覚め、挙句仙術の才能まで手に入れました。
力に呑まれて暴走した姉様は主を殺して逃亡し、私も責任を追及されて処分されそうになりました。
でも、サーゼクス様がリアス部長に私を引き合わせて助けてくれた。
それから私は部長に新しい名前を貰い、悪魔になりました。
「先輩……私は、どうしたらいいんでしょう？」
小猫ちゃんは話し終わると、ポロポロと目から涙が溢れ出した。
「今のままじゃ、私は部長の役に立てない……でも、猫？の力を使うのイヤ！　姉様みたいになるのが、怖いんです……」

自分で自分を抱き締めながら独白していく。
それでも小猫ちゃんの震えは止まらない。
「先輩なら、どうしますか？　私と似た様な経験をした、貴方なら……先輩？　泣いてるんですか……？」
うん、泣いてます。
途中鼻かんでて聞こえなかったけど、ちゃんと聞いてたよ。
こんなに小さいのに、そんな辛い経験を……。
「ごめんなさい先輩。先輩も辛いのに、嫌な事思い出させ……あぅ。」
モグラさんも心配してるのか、ポケットから飛び出して小猫ちゃんの頭に飛び乗り、頭の上で腕を動かして撫でる様な仕草をする。
「キュイ！」
「ほら、モグラさんも心配してる」
「モグさん……」
小猫ちゃんが頭のモグラさんを持ち上げ、胸の辺りで抱き締める。
「嫌ならやめればいい。辛いなら逃げればいい。誰も責めたりしないし、俺がさせない」
「……はい」
「それでも前に進みたいと思うなら、休みながらでいい。ゆっくりと、一歩ずつ進んでい

けばいいさ。俺は、そうしてきたよ?」
俺は訓練が嫌で途中でやめたし、辛くて逃げた。
すぐに捕まって責められたけど。
それでも意地になってサボり続けた。
時にはマジメに取り組んで、油断を誘った。
そうやって一つずつ積み重ねて、やり続けて。
俺はようやくパターンを掴み、安定したサボり方を編み出したんだ。
「俺なんかに出来たんだ、小猫ちゃんに出来ない筈がない。どんな力か俺にはわからないけど、きっとそれは小猫ちゃんの力になってくれる」
「そうでしょうか……」
俺は椅子から立ち上がって、小猫ちゃんの頭に手をポンと置く。
「小猫ちゃんは力に呑まれたりしないよ。こんなに優しいんだから」
「……はい!」
「じゃあそろそろ戻るね、匙をイジメなきゃいけないから」
モグラさんも抜け出して、膝の上で手を振ってから俺のポケットに戻る。
「先輩、モグさん。ありがとうございました。少し、気持ちが楽になった気がします」
「そりゃよかった。疲れが溜まってるのは本当なんだから、今は休まないとダメだよ?

試合じゃ手加減しないからね」
「はい、私もです」
にっこりと笑いながら返してくれる。
元気が出たみたいで、俺もモグラさんも一安心だ。
そのまま部屋を出ると、廊下で朱乃さんが待っていた。
「小猫ちゃん、元気になったみたいですね」
「モグラさんを抱き締めましたから。誰でもみんな元気になりますよ」
「あら、じゃあ私も抱き締めちゃおうかしら？」
朱乃さんはそう言うと、突然俺に抱き着いてきた。
「あの、朱乃さん？抱き締めるのはモグラさん……」
「ごめんなさい、もう少しこのまま……私にも、元気と『勇気』を頂戴」
いや、俺はアンパンヒーローじゃないから。
あ、あれは愛と勇気か。
余計渡せねぇよ、愛とか。
熨斗つけて返されるわ。
勇気なんざ持った覚えがない。
混乱して考えが飛び跳ねまくっていると、朱乃さんの抱擁から解放された。

朱乃さんは少し離れると、笑顔を浮かべながら話し出す。
「ありがとう……私も、小猫ちゃんと同じ様に乗り越えなければいけないの。その為の『勇気』、貴方から貰いたくて。もう少しだけ待っててくれる？」
同じもの？　……あぁ、堕天使が嫌いな事か。
そうだな、そろそろ言ってしまってもいいかも知れない。
もう少し……ゲームが終わったらでいいか。
「朱乃さん。今度のゲームが終わったら、貴女に話したい事があります」
「……え？」
「それじゃ、まだやらなきゃいけない事があるので今日はこれで」
「ちょ、ま、え？　何今の……いや、あれ、え？」
「ゲーム、本気で行きますから。みんなによろしく言っといて下さい」
「本気って……その、はぃ……」
なんか朱乃さんの様子がおかしいけど、今は急がないと。
お、アザゼルさん発見。
「アザゼルさんお待たせ、サクッとシトリー領まで送って」
「お前、さっきの本気か？　まぁお前ならあいつも認めると思うし、俺も文句はないけどよ……」

何だかアザゼルさんがおかしい。
さっき？　朱乃さんの話か？
「もしかして朱乃さんの事？　バラキエルさんとの約束があるけど、そろそろ朱乃さんにバラキエルさんの事話そうかと思って。なんか堕天使の事で思い詰めてるみたいだし、助けになるんじゃないかな？」
「あぁ、わかった。そうだ、お前バカだったもんな」
「何いきなり失礼な事ほざいてんの？」
何だその本気で残念な物を見る目は。
やめろ、なんか俺が惨めみたいじゃないか。
「とにかくやめとけ、あいつの為にもお前の為にもならん。まだ話すんじゃねぇ」
「え？　でも俺もう朱乃さんに……」
「死ぬ気で誤魔化せ。気合があればどうにかなる。出来なきゃお前が死ぬだけだ」
「俺死ぬの!?」
何故だ、親子の顔合わせの話をしていて、何故俺の命の危機に繋がる。
アザゼルさんが頭をガシガシと掻きむしりながらこちらに手を伸ばす。
「もうこれ以上面倒起こす前にさっさと帰れ。しっしっ」
あんまりな行動と共に、俺はシトリー領に転送された。

くそ、殴る時間がなかった。

「お、帰ってきたのかカズキ。どうだ、少し様になってきただろ？」

匙が俺に気付くと、足捌きやら受けの型やらを見せてくる。

ふむ。

「教えてるのが俺でよかったな。俺が同じ事を言った時、『ほーら、ここがこんなに違うんだよー』って言いながらボコボコにされた」

「お前の師匠は鬼か何かか？」

猿と悪魔です。いや、龍か？

「匙って鍛えてる上に喧嘩慣れしてるから、元々攻撃教える必要ないな。攻撃の凌ぎ方もそれなりになってきたし、そろそろ仕上げだ」

「仕上げ？」

「そうですよ、サジ」

「会長っ！」

俺たちが話していると、匙の背後から会長さんがやって来た。

「報告遅れてすみません、先ほど戻りました」

「いえ、そんなの気にしないで下さい。さて、サジ。貴方はカズキくんのおかげで、戦闘技術はかなり向上しています。次は、神器を鍛えましょう」
　会長さんは、メガネの位置を直しながら匙に告げる。
「神器を鍛えるって……どうするんです？」
「グリゴリに連絡して、神器の資料を取り寄せました。これを参考にします」
　会長さんが紙の束を見せながら答える。
　いつの間にそんな事を。
　アザゼルさんは向こうにかかりきりだし、シェムハザさん辺りかな？
「安心しろ。会長さんと俺が一緒に考えた、『ここまでやってなんで死なないの？』な訓練を乗り越えた時、お前の神器は次の段階に進める」
「おいちょっと待て、今不穏な単語が聞こえたんだけど」
　気のせいです。
「男を見せろよ匙。今度のゲーム、鍵はお前だ」
「かっこいい台詞の無駄使いすんな！　え、なに俺死ぬの？　カズキに殺されるの!?」
　会長さんと俺で、怯える匙の両脇を持ちながら訓練場まで引き摺っていく。
「大丈夫だって、俺もいっそ殺してくれと思ったけどなんとか生き延びたし。人間の俺に出来たんだ、悪魔のお前ならチョロいチョロい」

「お前はなんかあれじゃん！　人間とか悪魔とかで分類しちゃいけないカテゴリーだろ!?　俺を一緒にするなって!!」

「おいおい、そんなに褒められたら張り切っちゃうじゃないか」

匙の脇を掴む手に力が入る。

ギシギシ鳴ってるけど、まぁ平気だろう。

「腹をくくりなさい、サジ。貴方ならやり切れると、私は信じています」

「うぅ……死にたくねぇよぉ……」

会長さんの一言により匙は抵抗を止め、頭を垂れながらも自分の足でついてきた。

実際、匙なら死ぬ事はない。

日頃から会長さんに厳しく扱かれているのだろう。

正直、今の匙は素のイッセーなら完封も出来ると思う。

でも、向こうにはアザゼルさんがいる。

神器マニアのあの人なら、イッセーをこの期間で完全な禁手に仕上げてきてもおかしくない。

そんな事になったら俺も瞬殺されるんじゃないかね。

それに対抗するために匙を限界まで鍛える。

それが会長さんと考えた今回の課題。

冗談でも何でもなく、匙は本当にこちらの切り札なのだから。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「カズキの対策？」

「はい、狙い目っていうか弱点っていうか。なんかそんな感じのないですか？」

悪魔のお偉いさん達が会長の夢を馬鹿にした時、あいつは立ち上がった。

いつもの様な軽い雰囲気と違い、堂々とした態度と口調で悪魔のお偉いさんを説き伏せていた。

その姿は何処か大人びていて、俺と同い年の奴には見えなかった。

いつか部長が追い詰められた時、俺もあんな風にかっこよく助けたいものだ。

そんなあいつが、今回は俺たちの敵に回った。

いつも俺たちを助けてくれていたカズキだからこそ、敵に回す恐ろしさは理解している。

俺にはあいつを倒す方法が思いつかなかったので、ここはひとつカズキをよく知るアザゼル先生に聞いてみることにした。

「弱点ねぇ……ありすぎて笑えるが、何より脆い事だ。幾ら改造されてようが、所詮は人間の耐久力だからな」

そういえば自分でもよく言ってたな。

『俺は脆いんだ』って。

「打撲やら骨折ならすぐに回復しちまうが、お前のドラゴンショットや、リアスの滅びの力で手足の一本でも吹き飛ばせば、それで詰みだ」

「吹き飛ばっ!?」

なんて過激なお言葉だ！

それ、ゲームが終わっても治らないんじゃ……。

「ぶっちゃけ数字だけ見るなら、あいつの能力はお前より少し上程度だ。木場やゼノヴィアよりも低い。それでも、お前らはあいつに絶対に苦戦する」

「そ、それは何故……？」

楽勝だなんて思っていないが、木場やゼノヴィアの方が能力が上なら、2人がかりとかなら行けるんじゃないか？

俺がそう思っていると、先生は自分の眼を指差す。

「まず第一に、眼だ。改造で底上げされてるのに加えて、あいつはガキの頃から自分より速い奴とばかり戦ってきた。生半可なスピードじゃ翻弄できない上に、見えなくても経験則や勘で動きを捉えやがる」

勘ってなんだよ、理不尽すぎるだろ!?

そういやライザーと戦う前の合宿で、木場の攻撃を殆ど動かずに捌いてたな。

つまり木場がとんでもないスピードで動き回っても、疲れるだけで全部無駄って事かよ……。

俺が驚愕していると、次に先生はこめかみをトントンとつつく。

「次にココ。頭、ってより発想だな。あいつを常識で考えるな。セオリー通りに動いてると、必ず足下すくわれるぞ。悪魔よりも悪魔らしい事を平然とやって来るからな、あいつ」

お前らもライザー戦で見たんだろ？

先生の言葉で思い出す。

あの時も開幕早々油断しているあいつらに、一人で敵陣特攻をかましてたな。

相手を挑発して、ペースを崩そうとしたりもしてた。

「んでもって何より尋常じゃないのが、近接戦闘の技術。これがあいつの最大の武器だ。最初は俺たちグリゴリの連中が教えてたが、ヴァーリが美猴と引き合わせてな。カズキを気に入った美猴が、ヴァーリと一緒になってカズキを鍛え始めた」

「美猴ってこないだの孫悟空!?　カズキって孫悟空の弟子なのか……なんかすげぇ」

「凄いなんてもんじゃないんだがな……まぁそこで死ぬ程頑張って、あいつは１５の時には美猴やヴァーリと殴り合う事が出来ていた。孫悟空と殴り会えるって凄さを、あいつ自身が理解してないがね」

確かグリゴリに保護されたのが１０歳って言ってたよな。
美猴とは戦っていないからわからないけど、５年の修行であのヴァーリと殴り合える様になったのか。
……めちゃくちゃだな、カズキって。
「ここにモグの力が加わると、また段違いで厄介になる。まぁここら辺は後でリアス達も交えて話してやるから、また後でな」
先生はそう言うと、部長たちがいるであろう部屋に歩いていく。
「今更だけど先生、そんなにカズキの事喋っちゃっていいんですか？昔からの知り合いなのに……」
俺が後ろについて歩きながら問いかけた。
すると先生は大爆笑し出して、足を止めた。
「お前、情報があるだけでカズキとやり合えるつもりか？　あいつは人間の身で、本気じゃなかったとはいえ堕天使総督や白龍皇に勝ったこともある規格外なんだ。全部話してもまだまだ足りないんだよ」
……は？
カズキって、先生にも勝った事あるの？
ヴァーリにまで？

「そもそも、お前達が戦うのはシトリー眷属であってカズキじゃない。あいつばかり見てるとあっさり負けるぞ」

先生はそう言うと再び歩き出した。

そうだ、俺たちが戦うのはあくまでシトリー眷属なんだ。

会長や、匙だっている。

舐めてた訳じゃないが、気合を入れ直して頑張らないと!!

27話

さて、とうとう今日が約束の日だ。
会長や匙はリアス先輩たちと一緒に会場入りするそうだが、俺はアザゼル先生やサーゼクスさんと一緒に行く事になっている。
「で、みんなの所に行かなくていいの？」
「いや待て、次だ。次こそ黒が来る！」
「聞けよおっさん」
会場である高級ホテルに到着こそしたが、サーゼクスさんと別れた後にアザゼルさんはカジノに直行。
こんなんでも一応堕天使のトップなので、一人にするのはマズイ。
シェムハザさんに連絡したら会場に向かっている途中らしく、着いたら引き取りに来てくれるそうなので、それまではしょうがなく付き合っているのだ。
「もうどんだけ負けたと思ってんのさ。シェムハザさんに叱られるよ～」
「がぁぁ！　何で００に落ちてんだ！　くそ、もう一勝負だっ!!」
「もう勝手にして下さ……ん？」

何を言っても無駄と諦め、ふと視線を外に移すと小猫ちゃんの姿が。
やたらと急いで森へと走っていく。
何かあったのか？
えらく焦ってるように見える。
アザゼルさんに無駄と思いつつも程々にする様に忠告した後、ホテルを出て小猫ちゃんが走って行った方向に進む。
森を進んでいくと、少し開けた所で小猫ちゃんを見つけた。
「小猫ちゃん！」
「え!?　あ、先輩？　何でこんな所に……？」
「いや俺の台詞なんだけどね、それ」
俺がそう返すと、小猫ちゃんはある一点に視線を向ける。
その視線を追いかけると、黒い着物を着崩した美女が木の枝に腰掛けていた。
何あのエロい姉ちゃん。
「ハロー、白音。久しぶりね」
いや、白音って誰さ。
小猫ちゃんを見ながら笑顔で手を振っている所を見ると、小猫ちゃんの事か？
そういや小猫って名前はリアス先輩に貰ったとか言ってたね。

「黒歌姉さま……」
「黒猫1匹紛れ込ませただけで来てくれるなんて感動しちゃうにゃー♪」
あぁ、黒猫を追いかけてたのか。
にしても笑顔が胡散臭いなこのエロい人。
「所で白音、隣のは何？　魔力を殆ど感じないし、もしかして人間？　ダメよ、男はちゃんと選ばなきゃ」
「っ！　先輩はそんなんじゃありません!!」
「……そんな全力で否定せんでもいいじゃない」
なんか凹む。
「にゃっはっは！　面白いにゃーこの子。白音と一緒に持って帰ろっかにゃ？」
「やめとけって。そんな事したらヴァーリに殺されちまうぜぃ？」
小猫ちゃんのお言葉に沈んでいると、聞き慣れた声が。
「なんだ、美猴さんもいたの？　じゃあこのエロい人もテロリスト、略してエロリストなのか」
なんて卑猥な存在なんだ。
ごめん、痛いから脛を蹴らないで小猫ちゃん。
そうね、お姉さんだって言ってたもんねごめんなさい。

「エロリスト!?　私はそんな頭悪そうなもんじゃないわよ！」
「ならそんな乳が溢れそうな服を着るな、小猫ちゃんの教育に悪いだろうが」
黒歌が逆ギレしてるが知らん。
小猫ちゃんに睨まれながらも注意する。
「お前さんは相変わらずだねぃ。ほら、そこに隠れてる二人もそろそろ出てきな」
うくくと笑いながら、美猴さんが茂みの方に声を掛けた。
そこから何故かイッセーとリアス先輩が現れた。
いたのか二人とも。
「よぉ、クソ猿さん。ヴァーリは元気かよ」
「まぁねぃ。おや？　お前は少しマシになったみたいだねぃ」
イッセーと美猴さんが軽口の応酬をしている間に、小猫ちゃんと一緒にリアス先輩のいる方へ移動する。
「所で美猴。この子たち誰？」
「赤龍帝と、ヴァーリと俺っちの弟分」
肩に担いだ如意棒で、俺とイッセーをさしながら黒歌の質問に答える。
「あれが？　う～ん、弟くんはともかく赤龍帝の方は私のおっぱいばかり見ててパッとしないにゃ～」

「ほっとけっ!!」
ホントにブレないな、イッセー。
ここまでくると尊敬の念さえ湧いてくる。
「とにかく、今日は白音を貰ったら帰るにゃん。だから大人しくしててね」
どうやら、狙いは小猫ちゃんのようだ。
「この子は私の大切な眷属よ。指一本触れさせないわ！」
「小猫ちゃんは大切な後輩で、仲間だ！　連れて行かせてたまるかよっ！」
リアス先輩とイッセーが小猫ちゃんを庇うように前に立つ。
「美猴さん、わざわざテロリストになってまでやりたかったのが少女の誘拐ですか？　いつ変態の仲間入りしたんです」
「別に俺っちが欲しい訳じゃないんだが。まぁあれだ、気に食わないなら抵抗してみな。カズキ、久しぶりに相手してやるぜぃ」
如意棒をブンブンと振り回した後、低い体勢で構え直す。
いつも見ていた、美猴さんの構え。
やる気満々だ、面倒くさい。
禁手化して、モグラさんを身に纏う。
でも、今回纏うのは手足のみ。

匙を鍛えつつ個人的に練習した、部分展開を行う。
「ヴァーリからは銀色の鎧って聞いてたが……なるほどねぃ、能力は使いたいけど鎧の重量が邪魔だから、余計な分は引っぺがした訳か。お前さんは昔っから本当に器用だねぃ」
「そういう部分でしか勝負出来ないんです、よっ!!」
俺が拳を叩き込むと、美猴さんは如意棒で軽々と防ぐ。
まるで鍔迫り合いの様に、如意棒と拳を押し付け合う。
「イッセー、リアス先輩！　この人を抑えてる間に、小猫ちゃんと一緒に逃げて援軍呼んできて！」
「何言ってんだ！　おれも一緒に戦えば……！」
「イッセーがどんだけ強くなったか俺にはわかんないけど、多分美猴さんよりは下だろ？　なら一緒に戦うよりも、助けを呼んできてくれる方が何倍も助かる！」
イッセーの言葉に被せるように捲し立てる。
悪いがあんまり余裕がないんだ。
「なぁに、人間の癖に美猴とやりあう気なの？　キミ、死んじゃうよ？」
「てか、あんたも姉ちゃんなら妹泣かす様な真似ばっかすんなよ。あんまり虐めてると、小猫ちゃんが俺みたいにグレちまうぞ、っと！」

黒歌の言葉に返事をしながら手首を美猴さんに向け、手首の穴から顔面目掛けてドリルを伸ばす！

しかしすんでの所で躱されてしまい、僅かに頬を傷付けただけで逃げられてしまう。

「うぉ!?　っと危ないねぃ、隠し武器かよ。お前さん相変わらずそう言う狡いの好きだねぃ」

「あんた強いんだから、そん位大目に見てよ」

今まで美猴さんとは何回も手合わせはしてきたが、本気の勝負なんて初めてだ。

多分、長くは持たない。

アザゼルさん辺りが助けに来てくれるのを祈ろう。

「イッセー、今は小猫の安全が優先よ。私たちが援軍を呼ぶ事が何よりもカズキの為になるわ」

「くそっ！　カズキ、絶対死ぬなよ!?」

イッセーは悔しそうにリアス先輩の言葉に従い、小猫ちゃんを抱き抱えて走り出す。

「イッセー先輩!?　ダメです、このままじゃカズキ先輩がっ！　私が姉様についていればそれで……！」

「逃がさないにゃ～ん♪」

小猫ちゃんは納得いかずに騒ぎ、黒歌はその後を追っていった。

何とか逃げ切ってくれるのを祈るばかりだ。
「なんだい、黒歌の妹ちゃんに偉く慕われてんじゃないか。カズキも大人になったもんだ」
「さっき本人に全否定されたばっかなんですけど。てか何準備運動とかしてんですか。戦うの俺なんだから、もっと舐めて掛かって来てくださいよ」
「お前さんだからやってんのさ。強くなったんだろ？　だったら、俺っちも気合い入れにゃあいかん」
「あんたに何回か負けたと思ってんだ」
「お前さんだって俺っちに何回も勝ってるじゃないか。人間が俺っちに勝てるって、本来なら奇跡みたいなもんなんだぜぃ？」
準備が終わったのか、地面に置いた如意棒を足を使って跳ね上げる。
そのまま手に取り、先程見たのと同じ構えをする。
「そら、どんだけ俺っちに近づいたか確認してやるぜぃ。きな」
「あ～もう、どうして俺の周りには自分勝手な奴ばっかなんだ……」
俺も美猴さんに教わった様に構え――ない。
「うぉっ!?」
「ちっ外した！」

俺が拳を握った瞬間、美猴さんの足下の小石が爆発した。
事前にモグラさんに頼んで、この開けた場所の小石をいくつか爆発物に換えておいた。
会話はただの時間稼ぎだ。
美猴さんが驚いている間に接敵。
拳を放つが、如意棒を使って防がれる。
「カズキ！　お前さんはまともにやっても強いんだから、あんま小手先の技に頼んなって言ったろうが！」
「わかったなんて言ってない！」
「屁理屈いうなって、の！」
俺の拳を如意棒で弾き上げ、ガラ空きになった腹部に蹴りを放ってきた。
反対の手で咄嗟に防ぐが、蹴りの勢いで無理矢理後方に吹き飛ばされる。
「そら、オマケだ！　伸びろォ!!」
「それは喰らわんっ！」
如意棒が伸びて追撃してくるが、上から殴って地面にめり込ませる。
それをレール替わりに、脚のタービンを使って一気に距離を詰める。
「やるねぃ、面白い曲芸覚えたじゃないか！」

「猿に曲芸とか言われたくない、ねっ！」
美猴さんが俺ごと如意棒を振り回そうとしてきたので、宙に跳びつつ手に握り込んでいた小石を顔面めがけて投げつけ、目の前で爆発させる。
流石の美猴さんも目の前で起こった爆発に動きが止まったので、肩を思いっきり踏み付けてから、その反動で距離を開ける。
「ぐわっ!?　ぺっぺっ、口の中に砂が入った。卑怯な真似ばっかするねぃ」
「卑怯汚いは弱者の戯言だ。卑怯ってのはな、どう取り繕うが得てして有効な手段なんだよ」
「テロリストやってる俺っちが言うのもなんだが、お前さん言動が悪党すぎるだろ」
おかしい、俺の至言なのに呆れられた。
「てかどんな身体してんのさ、肩を思いっきり踏み付けてんのにピンピンしやがって」
「そりゃあ俺っちは石猿の子孫だからねぃ。そこに闘気が合わさりゃまさに岩の如しってやつさね」
闘気。
確か生命エネルギーから溢れてくるもんだっけ？
やっぱ美猴さんは使えるのか。
「妖術や仙術まで使える上に闘気までとか、ごちゃ混ぜすぎません？　俺にも一つくら

い寄越せよ」
「あん？　闘気ならカズキだって使えるだろ」
「何ですと？」
　初耳なんですけど。
「あぁ、そういや理論を教えたら『そんな訳分からんもん使えん』とか言ってサボりやがったっけか？　コレだよコレ」
　そう言うと、美猴さんは手の甲をこちらに向けると光が手を包んだ。
　よくわかんないが、よーするに気合を入れれば何とかなる！
「ふんっ!!」
　お、なんか身体が光りだした！
　これで勝てる……気はしないけど、時間稼ぎは出来る!?
「カッカッカ！　カズキは何でそう理解しないくせして結果だけ引き出せるんだろうねぃ！　さぁ存分に殴り合おうぜぃ!!」
　楽しそうに笑った後、先程の光、闘気を全身に纏い、如意棒を構え直す。
　なんか如意棒まで光ってるんだけど。
　くそ、まともに戦いたくないから時間稼ぎしてるのに。
　援軍まだかよ。

もう少し粘って無理なら、俺の土下座を披露するしかないな。
「俺に迷惑かけんな、放浪兄貴どもめっ！」
「文句があるなら俺っちを倒してみせな、カズキよぉ!!」
互いに相手に向かって駆け出し、俺の拳と美猴さんの如意棒が激しい音と共にぶつかり合う。
俺が拳とドリルで殴りかかると、美猴さんが如意棒で防ぐ。
美猴さんが反撃してくると、俺がタービンを回転させながら受け流す。
「腕のは何かと思ってたが、化勁（かけい）の真似事か！　昔より上手くなったじゃねぇかぃ！」
「あんたらがみんなして馬鹿力なせいで、死にたくないから仕方なく覚えたんだよっ！」
モグラさんが地面を崩しながら攻撃するせいもあって、周辺の木々も纏めて破壊されていく。
激しい衝撃音と、地面の砕ける音が辺りに響き渡る。
「そらそらそらぁ！　どうしたカズキ、手数が減ってきてんぜぃ！　へばったか?」
「へばったら攻撃やめてくれますっ!?」
「そりゃないなっ！　お前さんが余計な事に首を突っ込まない様に、暫く動けないようにするってヴァーリと決めたんでねぃ！」

「ンなもん本人の了承なしに決めんじゃねぇ!!」

手数が減っても口数は減らない。

そのせいで自分の攻撃が単調になり、お互いの攻撃が当たり始めた。

ドリルだけは確実に防いでくるので、速度重視で数を当てに行く。

向こうも負けじと如意棒を捨て、速度を求めて拳で殴りにきた。

互いに知っている技を繰り出し、互いに対処をし続ける。

当然だ、俺の技は基本この人から学んだ物だ、だからフェイントを織り交ぜながら拳を打ち続ける。

モグラさんの攻撃は続いているのに、それも器用に躱しながら美猴さんは攻撃を繰り出してくる。

殴られても笑顔のままだ。

やっぱこの人も変態じゃないか。

けど、やっぱりこちらが押され始めた。

原因はスタミナ不足。

怒りを燃料に一時は持ち直したが、どうしたって人間の俺と大妖怪の美猴さんとじゃ開きは出てくる。

段々と追い込まれ、美猴さんのキツイのが腹にめり込む。

「ぐふぉ……」
「ふぅ、ようやく当たったぜぃ。お前さんと殴り合うと、頭使うから疲れて仕方ねぇや」
地面に倒れ込む。
腹の中の物が全部口から出てきそうな気分だ。
おかしい、ただのボディブローがこんなに効くはずが……？
「お前さんはやたらと頑丈だからな。仙術の気で身体ん中をかき乱したから、暫くは動けやしねぇよ。まぁそう怖い顔すんなよ、黒歌には俺っちからもよく言っとくか……っ!?」
何故か、美猴さんが大きく飛び退く。
そして俺と美猴さんとの間に大きな何かが降りたった。
なんだこれ、ドラゴン？
「カズキくん!?」
「カズキっ！　無事か!?」
ドラゴンの背中からイッセーとリアス先輩、そして小猫ちゃんが飛び降りてきた。
イッセーが鎧を着込んでいる、完全な禁手を身に付けたのか。
「驚いたな、孫悟空を相手にしてまだ生きている。大した人間だ」
ドラゴンさんが面白そうにこちらを見ている。

食べないでね？

「カズキ先輩!?　これは……気が乱されてる？　私が治しますっ！」

小猫ちゃんが俺の腹に手を当てると、その頭に猫耳が生えた。

え、何このカワイイ生物。

「……お？　なんか調子が良くなってきた」

手脚に力が戻っていく。

これが萌えの力か。

猫耳ってスゲー。

「ありがとう、小猫ちゃん。もう大丈夫」

小猫ちゃんにお礼を言って立ち上がる。

美猴さんの隣には先程の黒歌と、手と腰に剣を携えた見知らぬ男性の姿が。

その男性が剣を振ると空間に切れ目が入り、黒歌や男性はその中に入っていく。

どうにも撤退する様だ。

「じゃあなカズキ、今日は俺っちの勝ちだ。そのうちまた会おうぜぃ！」

「改心してからでお願いします」

美猴さんはそう言うとその穴に入っていき、穴ごと消えてしまった。

それを確認した後に、モグラさんを元の状態に戻す。

モグラさんも疲れたみたいで、掌の上で少しぐったりしている。
スタミナ不足は俺たち共通の弱点だよなぁ。
しかしやっぱり美猴さんには勝てなかった。
闘気とか言うのは何となくで出せるようになったが、最後の一発は仙術がどうのとか言ってたな。
俺もやりたいな、あれ。
二重の○みとか出来そうだ。
「しかしこのデカいドラゴンさんはどなた？　助けてくれてありがとね」
何イッセー？　タンニーンって言うの？
あぁ、このドラゴンさんに鍛えて貰ってたんだ。
教師でもやってるのかね？
だからタンニーンなんだな、納得。
「なに気にするな、俺の仕事でもある。しかしそいつは【神秘の豊穣土竜】の幼体か？　珍しい神器を持っているな」
何そのかっこいい名前。
あ、モグラさんの本名だっけ？
長いから覚えらんないんだよね、それ。

「神器ってより友達だよ。仲良しなんだ」
そう言いながらモグラさんを頭に乗せ、モグラさんも頷く。
それを見てタンニーンさんは嬉しそうに笑っている。
「しっかりした信頼関係も出来ているな、良い事だ。そいつは個体数が少ないから、大切にしてやってくれ」
タンニーンさんの背中に乗せて貰い、会場のあるホテルに戻る事になった。
取り敢えずこの事を報告するが、今日行うはずだったゲームは流れる可能性が高いらしい。
まぁテロリストが襲撃してきたのに、呑気にそんな事やってられんわな。
今日はこのまま解散か。
なら俺はカジノに戻ろう。
やたらとむしゃくしゃするこの気持ちを、カジノで遊んでたどっかの総督にぶつけなくては。

２８話

黒歌と美猴の襲撃を乗り切り、明日は遂にシトリー眷属とのレーティングゲームだ。
俺たちは先生の部屋に集まり、最後のミーティングを行う……予定だったんだけど。

「昨日はみんなお疲れさん、大変だったみたいだな。だがまぁ美猴達を追い払った事でリアスはさらに評価を得て、オマケにイッセーは完全な禁手に至った。これはゲームに大きく影響するぞ」
「あの、先生……その傷、どうしたんですか？」
「資料を読んで大体把握しているが、変身するまでの2分は死ぬ気で耐え抜け。そうすりゃカズキなんざ楽勝だ、顔の原型が判らなくなるくらいボコボコにしてやれ」
「ちょっ、先生!?　やっぱそれカズキにやられたんですか!?」
「うるせぇ！　いいからお前はカズキを血祭りに上げてやればいいんだよっ！　なんなら手足の三、四本もいでやれ！　俺が許すっ！」
俺らの先生が壊れた。
どうもあの騒ぎの中この人はカジノで遊び呆けていたらしく、カズキに説教された様

だ。

顔がキズバンだらけで、試合後のボクサーみたいに顔が腫れている。

一目で分かる程荒れてるよ。

「ちくしょうカズキめ……確かに俺が全面的に悪いが、何も本部にある俺の秘蔵の品をおぉぉ……」

「そ、それはもしや大人なアレですか……？」

つい興味本位で聞いてしまう。

なんたって過去に幾つものハーレムを作ったお人の品だ。

さぞかし凄い物に違いない。

「それもだが、とっておきの酒やら色々とな……ベネムネが酒瓶持って上機嫌だったって報告が来た。そもそも何でカズキが隠し場所知ってんだよ……」

今度はひたすらに凹んでらっしゃる。

なんだ酒か、エロい物かと思ったのに期待外れだ。

これはもう放置しといたほうがいいな。

下手に触れると俺にまで被害が来かねない。

「やっぱり、向こうも俺の禁手の事は把握してますよね？」

「そうね、イッセーの事を禁手化前に潰しに掛かってくるのは確実だと思うわ」

俺の質問に、部長は顎に指を当てながら答えてくれる。
「でも、カズキくんが闘気を使いこなせるようになった。これを知れたのは助かります。スピードやパワーはコカビエルの時よりは低くても、それに近いものになってるでしょうから」
「確かに。事前に把握しておけば何とか対処できるし、少なくとも初見殺しに合わなくて済む」
木場とゼノヴィアが戦力解析を行いつつ、カズキへの対処を話し合う。
木場はカズキと戦うのをえらく楽しみにしていたし、ゼノヴィアは以前の借りを返して見せると意気込んでいた。
戦闘前ともなるとキリッとしていて、頼り甲斐があるな二人とも。
「相手はソーナ会長ですし、生半可な作戦は通じないでしょうね。オマケにカズキくんがどんなドS……ではなく、嫌らしい罠を仕掛けてくるかわかりませんもの」
「カズキ先輩の高笑いが聞こえてきそうです……」
「あの、カズキさんはそんな……事、は……してくるかもしれません……」
朱乃さんと小猫ちゃんがなかなかに厳しい事を言っている。
アーシアがフォローしようとしていたが、上手い言葉が見つからずに涙目になりながら遂に肯定してしまう。

いや、アーシアは頑張ったぞ？
しかしあいつは本当に何してくるか分かんないからな、かなり恐ろしい。
「カズキくんばかり気にしてても仕方ないわ、他の戦力も対策していくわよ」
部長が手を叩き、みんなの意識を自分に向ける。
そうだ、敵はカズキだけじゃない。
前回のレーティングゲームでは敗北したが、もう負けられない。
相手が誰だろうが、部長に白星をプレゼントしてみせる！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ククク……これで準備は万全だ。
サーゼクスの若造の友人だかなんだか知らぬが、あの様な場で儂を愚弄しおって。
身の程をわからせてやる必要がある。
幾ら腕がたとうが所詮は人間。
会場には儂が手を回して細工をしておいた。
ルールも奴の不利になる様に仕向けた。
ゲームに託けて、殺してやるわ。
たかが人間の分際で、悪魔の中でも高貴なる生まれであるこの儂に楯突いたこと、後悔するがいい。

フハハ、ハーッハッハッハッ!!
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
試合当日。
用意された魔法陣に立ち、転送された先は何処か見覚えのあるデパートの様な建物。
駒王学園の近くにあるデパートだな、これ。
よく行くから分かる。
『皆さま、この度はグレモリー家、シトリー家のレーティングゲームの審判役を担う事となりました、ルシファー眷属《女王》のグレイフィアで御座います』
辺りを見回していると、アナウンスが流れ出す。
どうやらライザー戦に続いて、グレイフィアさんが審判をしてくれるらしい。
魔王の《女王》って大変だなぁ。
挨拶とルールが説明されると、３０分の作戦タイムが設けられる。
リアス先輩の本陣は二階の東側で、こちらは一階の西側になるのか。
今回、特別ルールがいつくか設定されている。
・『フェニックスの涙』をそれぞれ一つずつ支給。誰に持たせるかは自由。
・バトルフィールドを破壊しつくさない事。
・『ギャスパー・ヴラディ』の神器使用を禁ずる。

最後の項目については、ギャスパー君はまだ神器を使いこなせていないと聞いているので、やむなくの処置なのだろう。

しかしなるほど、あの老害はやはり無能だったようだ。

まさか大当たりがくるとは思わなかった。

「あの老害、あんな頭悪いのになんで上役やれてんだ？　悪魔の未来が真っ暗すぎるだろ」

「カ、カズキくん。これ、全体に聞こえてるから」

《戦車》の由良翼紗（ゆらつばさ）さんが、肩をユサユサと揺さぶる。

「マジでか、まぁ平気だって。俺みたいな下等な人間の戯言に一々めくじら立ててたら、自分も同程度のゴミ屑だって認めてるようなもんだし。これでゲームにテコ入れまでしてたら赤面ものだよね？」

「やめて!?　お願いだからもうやめて!?」

ユサユサがガクガクに変わる。

そろそろ止めておこう。

みんなも笑顔が出て、少しリラックス出来たようだ。

「あの、カズキくん。なんだかサジの様子がおかしいのだけれど……」

副会長さんが匙を指差しながら質問してくる。

「ん？　あぁ、この間のゴタゴタでイッセーが完全な禁手に至ったからさ。一夜漬けしてみた」
「兵藤コロス、兵藤コロス、兵藤コロス……」
「なんだか虚ろな眼で凄い物騒な事言ってるんですけどっ!?」
む、やり過ぎたか。
まぁそのうち戻るだろ、いざとなったら叩けば直る。
「ではみんな、どうやらカズキくんの言う通りになりました。事前に考えておいた作戦を忘れずに、各自役割を全うしましょう。大丈夫、勝つのは私たちです」
会長さんの言葉にみんなの顔つきも変わる。
みんな会長さんを信頼して、命を賭けてこの試合に臨んでいるのだ。
俺も役に立てる様に頑張ろう。
時間が経ち、匙もきっちり再起動した。
準備は万全だ。
このチームなら、どんな敵でも倒せるさ。
『開始のお時間となりました。なお、このゲームは制限時間は3時間の短期決戦形式を採用しております。それでは、ゲームスタートです」
さぁ、事前に許可も得たし、俺も『楽しく』やらせて貰う。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ゲームがスタートした。

時間制限があるので、みんなで手早く動かなきゃ。

今回は建物の破壊禁止がルールにあるので、ライザー戦みたいに下から奇襲もしてこないだろう。

「指示はさっきの作戦通りよ。イッセーと小猫、祐斗とゼノヴィアで二手に分かれるわ。イッセーたちが店内から……」

部長の指示を確認し、自分の役割を再確認する。

俺は小猫ちゃんと一緒に店内から侵入する事になる。

最近の小猫ちゃんは絶好調だ。

黒歌と美猴の襲撃があってから、小猫ちゃんは何処か吹っ切れた様に仙術を使いこなせる様になった。

朱乃さんも最近何やら機嫌が良かったが、今日はいつも以上にニコニコしている。

なんて言うか、笑顔が輝いている。

ゼノヴィアが理由を聞いても笑うだけだし、何か良い事でもあったのかな？

「さて、かわいい私の下僕悪魔たち！　もう負けは見せられないわ！　今度こそ私たちが……なんの音？」

部長の一喝で行動を開始しようとしたその時、何かエンジン音のような物が聞こえてきた。
その音は段々と大きくなり、すぐに俺たちの前に姿を現した。
立体駐車場から来たであろう乗用車が、フロアの商品を蹴散らしながら此方に突っ込んで来る。
あんな事する奴、俺は一人しか知らないぞっ……！
「……は？　いや、ソーナがこんな事する訳……カズキくんね!?　みんな、あの車に攻撃――」
「攻撃するな、躱すんだっ！　恐らく爆発物を積んでる!!」
部長が迎撃命令を下そうとしたが、ゼノヴィアが大きな声で攻撃するなと叫び、アーシアを脇に抱えてその場から飛び退いた。
ば、爆発物!?
他のみんなもそれに続いて散り散りに避け、車での突撃をやり過ごした。
車はそのまま急ブレーキをかけ、フロアにタイヤ痕を残しながら停止する。
少しすると、ドアを開けて俺たちのよく知る男が車から出てきた。
「ちっ、一人も轢けなかったか。ゼノヴィアめ、無駄に鋭いな。攻撃してきてくれれば車に積んだガソリンと、柱に仕掛けたモグラさん製の爆弾でこのフロア丸ごと爆破出来た

のに」

なにトチ狂った事言ってんのこの人!?

悪魔である俺たちより発想が怖いっ!!

「お、お前ルール聞いてなかったのか!?　フロアの破壊なんて……!」

「お前こそ聞いてなかったのか?　ルールはあくまで『バトルフィールドを破壊しつくさない事』だ。二階建てが一階建てになっても、まだ一階は残る上に地下駐車場だってそのままだ。ほら、破壊し尽くしてなんかない」

「なんて無茶苦茶な屁理屈を!　こんなのソーナが許すわけ……」

「きちんと『言いくるめ』ました。嘘も『一応』ついてません」

シレッと答えるカズキ。

あぁ!　部長が怒りでプルプル震えてらっしゃる!?

「だけど、キミの企みは失敗して包囲されてる訳だけど……ここからどうする気だい?」

「いや、本当はこのまま全員巻き込んで自爆したかったんだけどね?　会長さんにダメ出しされて」

頭をガリガリと掻きながら困った様に喋り出す。

自爆って……。

なんでこいつはこう、自分の身を省みない行動ばかり起こすんだ?

「そんな訳で、しょうがないからお前ら纏めて俺が叩き潰すんでヨロシク☆」
っバカにしてんのか!?
いくらカズキでも、俺らを纏めて倒せる訳が……！
「幾ら何でも驕りがすぎるね、カズキくんっ！」
「私だって以前お前と戦った時よりは強くなっている！　余り舐めてくれるなっ!!」
木場とゼノヴィアが剣を振り被り襲い掛かった。
左右を挟んだ同時攻撃だ、これは躱せない！
それでも、カズキは顔色一つ変えずにポツリと呟いた。
「木場が来たか。ちょっと意外だな、もう少し冷静だと思ってた」
二人の剣に腕を滑らせる様に触れ、自分が元いた場所に打ち付けるように受け流す。
二人の攻撃に床は当然耐え切れず、木場とゼノヴィアは床ごと下に落ちていく。
カズキは木場の肩を足場にして飛び上がり、依然このフロアに残っている。
「あーあー、こんなにフィールド壊しちゃって」
「なに他人事みたいに言ってんだ！　壊したのはお前じゃないかっ！」
「何を言ってる、俺は攻撃を捌いただけだ。その結果、あの二人が床を破壊したんじゃないか」
「お前、さっきはこのフロアごと破壊しようとしてただろ!?」

「結果的に爆破は起こっていない。そんな話をされても困っちまうなぁ？」

くそっ腹立つ顔しやがってぇ!!

駄目だ、こいつに口で勝てる気がしない！

『……審議の結果、問題はありません。試合を続けて下さい』

そして無慈悲なアナウンスが流れる。

「ほら、審判様が何も言ってこない。つまり、俺の行動はルールに則った正しいものだと言う事だ」

手を広げながら大袈裟なアピールを続ける。

「ちなみに、この下の床は『何故か』脆くなっているから、あいつらが落ちたのは一階じゃあなくその更に下の地下駐車場だ。会長さんの眷属がわんさか待ち受けてるぞ？　早く助けに行かないと、あいつらでもやられちまうかもなぁ？」

カズキは右手を高く掲げ、俺たちに突きつける様に指を差してきた。

「そして、お前たちはまたミスを犯した」

は？　いきなり何を言って――――。

『はぁっ!!』

「きゃあ!?」

「っぁう!?」

俺の後ろから急に悲鳴が上がった。
急ぎ振り向くと、いつの間にか接近していたシトリー眷属が、アーシアとギャスパーを殴り、斬り倒している場面だった。
「え!?　ギャスパー!　アーシアッ!」
『リアス・グレモリー様の《僧侶》二名、リタイア』
くそ、耐久力の低い二人を狙われた!?
「俺にばかり気を取られてるからそうなるんだ、よっ!」
カズキがグローブの指先からドリルを飛ばしてきた。
禁手化しなくてもドリルが出せるようになったのか!?
でもスピードはそんなに速くない、これ位なら余裕で躱せるさ!
「ほら、また間違えた」
『違うぞ相棒、あれはお前を狙った物じゃない』
「イッセー、避けてはダメ!　弾いてっ!」
「え!?」
ドライグと部長の言葉を聞いたのは、既に避けた後だった。
俺が避けたドリルはシトリー眷属の二人の近くに刺さり、床を砕く。
「くっ、朱乃!」

「はいっ！」

リアス先輩と朱乃さんがそれぞれ攻撃を放つ。

しかしその砕けた穴に二人は飛び込み、すんでの所で避けられ、この場からの離脱を許してしまった。

「今のもイッセーへの攻撃が『たまたま』避けられて床を破壊してしまっただけだ。先程は問題ないと言われたものだ、これも違反にはならない」

「くそっ、せめてカズキだけでも！」

「俺とやりたきゃ追ってこい」

カズキはそう言うと、こちらを向きながら大きく後ろに飛び退いていく。

「逃がすかよっ！　アーシアとギャスパーの敵討ち――」

「追ってはダメよイッセー、落ち着きなさい」

カズキを追おうとする俺を、部長が肩を掴んで静止してきた。

「っ！　でも部長!!」

「いいから落ち着きなさい。このまま追っても、また罠で自滅させられるだけだわ」

「ぐ……くっそぉ!!」

憤りのない怒りを、壁を殴りつける事で紛らわせる。

くそ、完全にカズキにしてやられた！

「イッセーくん、今は焦ってはダメ。初戦は私たちの負け、仕切り直しましょう」
「……はい」
「部長、私とイッセー先輩で祐斗先輩たちを助けに行った方が……」
小猫ちゃんの意見に、部長が頷く。
「そうね、これ以上戦力を失うのは苦しいわ。イッセー、頭が冷えたなら祐斗とゼノヴィアの所に加勢に行ってちょうだい。あなた達で、二人を救うの」
そうだ。
幾ら木場とゼノヴィアが強いといっても、数の暴力は厳しい筈だ。
俺も少し落ち着いた、早く助けに行ってやらなきゃ。
「もう大丈夫です、急ごう小猫ちゃん」
「はい。では部長、行ってきます」
「ええ。小猫、イッセー、気を付けてお願いね？」
『はい！』
部長に返事をしてから、駆け足で地下駐車場を目指した。
待ってろよ、木場。
もうすぐそっちに駆けつけるからな！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「朱乃、私たちも動くわよ」
「もう動くの？　まだ中盤が始まったかどうかも怪しい段階よ？」
「遅いくらいよ、完全にカズキくんのお陰で出鼻を挫かれたわ」
多分、このまま動かなければ手遅れになる。
相手はカズキくんだけではない。
アザゼルにも言われていたし、頭ではわかっていたのだが、ド派手な登場に思考を持って行かれてしまった。
思えばあれも最後に繋げる為の作戦だったのだろう。
無秩序に暴れているだけに見えて、狡猾に罠を仕掛ける。
カズキくんだけじゃなく、ソーナも一緒に考えた策なのだろう。
策士に策士をつけたらとんでも無い事になってしまった。
だが、今ならまだ間に合う。
祐斗とゼノヴィアの安全が確保出来れば、まだ逆転は可能だ。
恐らく、読み合い騙し合いではこちらの分が悪い。
ならば、罠や策略は力で叩き壊すしかない。
頭が悪そうで少し思う所もあるが、しのごの言っていられない。
私たちはもう負けられないし、負けたくない。

ライバルであるソーナに、これ以上恥を見せる訳にはいかないのだから。
「さぁ、ここから巻き返して行くわよ！」
「えぇ、全力でサポートして見せるわ！」
このゲーム、絶対に負けないっ！

29話

う～ん、イッセーは追ってこなかったか。
リアス先輩か朱乃さんに止められたかな。
やっぱああいう人には、テンパらせてからじゃなきゃ搦め手が通じにくいな。
撤退場所で待機していた《兵士》の仁村さんと合流し、通信機で会長さんに結果報告と、次の指示を仰ぐ。
「会長さん、由良さんと巡さんが僧侶二人を撃破、既に地下駐車場に向かった。イッセーの誘い出しには失敗した」
『充分な戦果です。怪我がないのなら、そのまま地下駐車場へ向かって下さい。数では押していますが、いつ被害が出るかわかりません』
「了解、すぐに向かいます」
『気を付けて下さい、ゼノヴィアさんがかなり荒れてるそうですから』
「……行きたくなくなってきたなぁ」
会長さんの言葉を最後に、通信が切れる。
猛烈にやる気が削がれていく。

「でも先輩ってやっぱり凄いですね、まさか一人であんなに出来るなんて。完全に先輩のペースでした」
　声を絞りながら会話する。
　もちろん移動しながらだ。
「まぁ殆どハッタリなんだけどね」
「へ？」
「ガソリンなんてあの車の中に入ってる分だけだし、精々ショボい爆発にしかならないよ。柱に仕掛けた爆弾なんて思いっきし嘘だし、そんな時間あった訳ないじゃんね？」
「……もし攻撃されてたらどうしてたんですか？」
「攻撃のモーション見てから自力で車から脱出。後はあの人らの目の前でふざけまくって、俺に注目を集めてたかな。その隙に二人が後ろからこう」
　ズバーッと。
　ってなんでそんな残念そうな目で見てくるかね。
「あの人たちは俺が戦う所を見てたからね、俺がやりそうな事は想像してくる。目の前で自爆したことだってあるんだ、そりゃ疑ってくるさ」
　だからこそ、騙される。
　こいつならやりかねない。

そういう疑いを持たせたら、後は口八丁手八丁でどうとでもしてみせる。
「カズキ！」
お、匙が地下駐車場から上がってきた。
じゃあ今地下にいるのは、副会長さんと由良さん、巡さんの三人か。
よし、予定通りだ。
「じゃあ仁村さんは匙と一緒に指定の場所へ、多分そこにイッセーと小猫ちゃん、もしくは朱乃さんがやって来るはずだ。イッセーと一緒に来たのが朱乃さんだったら手を出すな、範囲攻撃で纏めてやられる可能性が出てくる」
「うん、了解」
「匙、どちらにしろイッセーを、『赤龍帝』を仕留めるのはお前だ。気合い入れろよ？」
「おう、任せとけ！」
匙と拳をかち合わせてから二人と別れ、地下駐車場へと向かった。
おーやってるやってる。
なんだ、ゼノヴィアがボロボロになってるじゃないか。
作戦通りに副会長さんが神器のカウンター喰らわせたのか。
あの人のは初見殺しだよね、かなりエグいタイプの。
木場が庇って……ん？

木場の陰に隠れながらゼノヴィアが何かやって……あ、ヤバい。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
早く部長たちと合流しないとまずいのに、この人数相手では如何ともし難い。
オマケにゼノヴィアがカズキくんに腹を立てて、イッセーくんから借りてきたアスカロンを振り回している。
「くそ、カズキめっ！　絶対にアスカロンの錆にしてやるっ!!」
今も先程から相手をしている匙くんと、途中からやって来た《戦車》の由良さん、《騎士》の巡さん相手にデュランダルのオーラを纏わせた斬撃を放っている。
先程アナウンスから聞こえてきた《僧侶》二名のリタイア。
それを聞いてからは少し冷静になり、相手をする様にはなってくれたが、三対一でかなり手間取っている。
僕も《女王》である真羅先輩の相手をするのでなかなかに忙しい。
「これ以上手間取っていては部長たちが危ない、一気に行かせてもらう！」
痺れを切らしたゼノヴィアが、聖なるオーラを高めて斬撃を放つ。
今までの物よりも密度の高いその攻撃は、由良さん目掛けて飛んでいく。
しかし由良さんは、避けようとせずに両手を前に掲げた。
「反転（リバース）ッ！」

由良さんの掛け声と共に、ゼノヴィアの剣に込められた聖なるオーラが、一転して魔の属性へと書き換えられた。
由良さんはその攻撃を受け止めると、お返しとばかりに蹴りを放つ。
自身の攻撃を防がれ驚いていたゼノヴィアは、この攻撃を剣の柄でギリギリ凌いだがそのまま車ごと吹き飛ばされてしまった。
由良さんのアレが神器によるものかは分からないが、僕の属性の混ざり合った聖魔剣なら問題ない。
僕らの弱点はカウンターだ。
彼女は確実に落とさなければ！
「ゼノヴィア！　由良さんは僕がやる、それまで凌いでくれっ！」
「ぐっ……了解だっ！」
ゼノヴィアは素早く立ち上がり、真羅先輩に肉薄する。
僕も由良さんに斬りかかるが、巡さんと連携されて攻めあぐねてしまう。
その間にもゼノヴィアの猛攻は続き、真羅先輩は壁際まで追い込まれ、好機と見たゼノヴィアはトドメの一撃を放った。
「……掛かりましたね？」
ゼノヴィアの攻撃が当たる瞬間、真羅先輩の目の前に装飾が施された大きな何かが現

れた。
あれは……盾、いや鏡か!?
ゼノヴィアの斬撃は止まらず、勢いそのままに鏡を砕く。
「ぐぁぁぁっ!?」
その瞬間、鏡から衝撃が発生してゼノヴィアを襲い、身体中から鮮血を吹き出してその場に倒れてしまった。
「神器、【追憶の鏡】（ミラー・アリス）。この鏡が破壊された時、その衝撃を倍にして返す。ゼノヴィアさんをこちらに差し向けてくれて助かりました」
事前に聞いていた能力と違う、彼女もカウンター使いだったのか!?
僕は由良さん達を押し退け、ゼノヴィアを担ぎ上げて距離を取る。
向こうもジリジリと距離を詰めてくる、あまり時間がない。
まだ退場していないが、この傷ではリタイア寸前だ。
どうやらあの神器は衝撃のみを反射する様だ。
聖なるオーラまで倍返しされていたら、下手をすれば彼女は死んでいたかもしれない。
「木場、悪いが私にはもう攻撃する体力が残ってない。最後にデュランダルのオーラをキミに全て託す、それでなんとかしてくれ」

息も絶え絶えになりながら、彼女は僕にデュランダルのオーラを流し込んでくれた。
ゼノヴィアの想い、無駄にはしない！
「デュランダル・バースッ！」
以前は様々な魔剣を地面一帯に出現させる技だったが、今地面に咲き誇っているのはデュランダルのオーラとゼノヴィアの意志を纏った聖魔剣だ。
その攻撃を躱せず、由良さんと巡さんは聖魔剣に貫かれて退場した。
『ソーナ・シトリー様の《騎士》一名、《戦車》一名、リタイア』
アナウンスで真羅先輩と匙くんの放送が流れない。
どうやら2人には逃げられた様だ。
「技を発動した時に誰かが先輩を抱えて行った。恐らくカズキだろう、匙は私が蹴り飛ばされた時にはもう居なかったぞ」
ゼノヴィアが光に包まれながら教えてくれる。
匙くんはいつの間にか離脱していたのか。
何処へ向かったんだろうか？
「後は頼むぞ木場、せめてカズキだけでも倒してくれ。じゃないと私の気がすまん」
「あぁ、きっちり仕留めてみせるよ」
僕の返事を聞くと、笑みを浮かべたまま光が弾けて消えていった。

『リアス・グレモリー様の《騎士》一名、リタイア』
ゼノヴィアの願いはもちろん叶えるが、今は部長と合流するのが先だ。
カズキくんに場をかなり掻き乱されている。
なんとか流れを変えなければ……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「匙先輩、ゴメンなさい……」
『ソーナ・シトリー様の《兵士》一名、リタイア』
くそ、仁村がやられたか……。
格上の塔城さん相手によく戦ってくれた、謝る必要なんてない。
奇襲には成功して、予定通り兵藤の神器にラインを繋げた。
後は兵藤をぶちのめすだけだ！
塔城さんは俺たちに一騎打ちをさせてくれるようだ、ありがたい。
カズキに教わったのは、あくまで防御や攻撃を受け流す技術。
だが、それが攻撃に使えない訳じゃない。
兵藤が右拳を振り上げたなら、カズキに教わった様に受け流してから顔を殴る。
左で来たのなら、その腕に繋がってるラインを引っ張るだけで軌道がズレて隙だらけになる。

そこに向こうの勢いも威力に加えて、肘を腹に叩き込む！

兵藤は腹を押さえながら数歩後ろに下がった。

「カズキは言っていた。相手を攻撃するんじゃなく、相手の行動を阻害すればいいと。それさえ出来れば、自ずと自分の攻撃は当たり続けると！」

教わったのは防御や足捌きだけなのに、以前とは違い攻撃が面白い様に当たっていく。

成る程、これがカズキの言っていた事なんだ！

「くそ、まるでカズキみたいな動きだ……そうとう鍛えられたみたいだな」

「まぁな、特製のグローブまで貰ったぜ？　でもな、何を頑張ろうがお前を、『赤龍帝』であるお前を倒さなきゃ何にもならないんだ！」

「匙……？」

「この戦いは冥界全土に放送されてる。俺たちをバカにした連中に、会長の凄さを、俺たちの夢への覚悟を伝えなきゃならない！」

俺の言葉を、兵藤は真剣に聞いていた。

俺から目を逸らさずに、じっと聞いてくれている。

「俺たちの夢は本気だ。差別のない学校を冥界につくる。俺は、そこで先生になる。誰にも邪魔はさせない」

「……凄いな、お前は。でも俺にだって夢は、目標はある。部長の為にも負けられない」
兵藤の神器の宝玉が点滅している。
準備完了ってことか……
「今日！　ここでっ！《兵士》である俺が、同じ《兵士》である『赤龍帝』の兵藤一誠に勝つ事に意味があるんだッ！　お前に勝って、堂々と宣言してやる！　俺は……先生になるんだッ!!」
「お前の本気は伝わった。でも、その上でお前を倒させて貰うぞッ！行くぜドライグッ！　俺の気持ちに応えろ！　輝けッ！ブーステッド・ギアァァァッ!!」
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』
宝玉から響いてきた音声と共に、兵藤の身体が赤い龍の全身鎧に包まれる。
会長には禁手化前に勝負を決める様に言われたけど、すみません。
俺はこの姿の兵藤に、『赤龍帝』としての兵藤一誠に勝ちたいんだっ！
「行くぞ兵藤！　会長の為、そして俺の夢を叶える為に、お前を倒すっ!!」
「やって見やがれ！　お前の覚悟……正面から受け止めて、その上で俺たちが勝つっ!!」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「これも回収……っと。あのジジィ、マジで見境ないな」
副会長さんを救出して別れた後、あの老害が用意したであろう『悪魔用』の罠を回収

し続け、既に袋がパンパンだ。
モグラさんが魔力を嗅ぎ分けて、隠されている罠も見つけてくれる。
「魔力に反応するようにしたら、本命の俺が引っかかりにくいとかわからんのかね？
これだからコネで生きてきた奴は……お、もう一個」
これは信管を抜いた後、サーゼクスさんに提出だ。
まぁこんなもん別になくてもいいのだが、証拠は多いに越した事はない。
先程の《兵士》のリタイアは恐らく仁村さんの方だろう。
と言うことは、既に匙はイッセーと戦闘を開始しているという事だ。
見に行きたいが、まだ安全確認が終わっていないエリアがある。
こちらが最優先だ、会長さんにも伝えてある。
自分でも誤解しているようだが、匙は決して弱くない。
魔力はそうでもないが、喧嘩慣れしているようで機転も利くし、度胸もある。
同期が赤龍帝のイッセーだという事で、多少の劣等感が成長を妨げているのだろう。
今日の戦いを乗り切れば、匙は一段階確実に成長する。
まぁ、俺も余り人様に偉そうな事は言えないのだが。
頑張れ匙。
今のお前なら、イッセー相手でも勝てるんだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

強い。

禁手化した俺の攻撃を、ボロボロになりながらもギリギリ受け流して反撃してくる。

体術は向こうが少しばかり上だが、今の俺は攻撃力と防御力が跳ね上がっている。

俺の攻撃を相殺しきれず、匙は既にフラフラだ。

それでもあいつは立ち上がってくる。

足をガクガクと震わせながらも、目が意志を保ち続ける。

最初に繋がれたラインも切り離せない。

「負けられ、ない……勝つんだ……俺は……っ！」

気合いと共に、カズキに教わったであろう構えを取る。

腕は震え、カズキに貰ったと言うグローブも既に中に仕込んであった鉄板が剥き出しになっている。

「俺たちの夢を、笑わせたままで……終われるかよ……」

「俺は笑わねぇ！　命を賭ける程大切な夢を、笑える訳ねぇだろう!?」

「なら、来い……遠慮なんかしたらぶっ飛ばすぞ……っ!!」

「するかそんなもん！　俺の全力で、お前を倒して見せるっ!!」

構えを解かない匙に、背中のブースターを吹かせて突っ込んでいく。

無駄に苦しませたくない。
本気の一撃で、確実に沈めるっ！
「匙いいいい!!」
「兵藤ぉぉぉぉ!!」
互いの拳が、互いの顔を目掛けて打ち出され――
「……なんてな」
「なっ!?」
匙は腕を交差させ、俺の一撃を受け流していた。
くそ、今までのは俺から攻撃させる為の演技かよ!?
本当にカズキみたいな事をしやがる！
「十字受け。カズキに一番最初に習った技だ。どんな一発でも、必ず防げるってな。でもってこっから反撃だっ！」
匙は俺の手を払いのけ、俺の頭部を目掛けて両手を放つ。
動きが速い、体力温存してやがったのか!?
反応が遅れた、これは喰らう！
「確かにお前の鎧は硬い。でもな、中身のお前自身はどうだ!?」
「何を……がっ!?」

頭を挟み込む様に放たれた打撃。
　匙の手に付けているグローブ、そこに仕込まれた鉄板が兜にぶつかり、大きな音と衝撃が生まれる。
　その音と衝撃で兜が振動し、振動は俺の頭の中まで響き渡り、鼓膜を揺さぶる。
　立っていられず膝から崩れ落ちてしまった。
　これは……？
「人間型の悪魔なら、体の構造は人間と同じ。強い振動と音で脳を揺らせば、そいつは立っていられない。そこにコイツを叩き込んでやる！」
　匙の手には、ソフトボール大の魔力の塊。
　凄い魔力を感じる、それをこのサイズまで圧縮してるのか!?
「文字通り俺の命を削って作ったとっておきだ！　俺も限界だがな、兵藤！　お前だけは確実に潰してやる!!」
「くそ！　このままやられてたまるか!!」
　俺も負けじとドラゴンショットの魔力を込める。
　壁は破壊してしまうが、そんな事言っていられない！
　間に合えっ！
『オラァァアッ!!』

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

先程、イッセー先輩と匙先輩が一騎打ちを始めた。

割って入ろうかと思ったけれど、イッセー先輩にお願いされてしまったのでしょうがない。

結果を見守る事にした。

最初は匙先輩が優勢でした。

イッセー先輩は禁手になる為に時間がかかるので、カズキ先輩に教わったであろう動きでイッセー先輩を追い詰めていました。

でも、イッセー先輩が禁手化してから戦況が一変。

逆に匙先輩を殆ど一方的に攻撃していきました。

何発かは受け流せても、パワーの差が響いて段々とボロボロになっていく。

それでも諦めなかった匙先輩は、機転を利かしてイッセー先輩の動きを封じこめ、魔力の撃ち合いまで持ち込んだ。

二人の攻撃で起きた土煙が晴れてきた。

どちらが勝ったのだろうか……？

「ハァ……ハァ……ゴフッ」

立っていたのは、匙先輩だった。

イッセー先輩は鎧が消え、ぐったりと床に倒れている。
次第に光に包まれていく。
「やった……やったぞ、俺は兵藤に勝った……勝ったぞぉぉあぁ!!」
両腕を掲げ、天に吠えた。
本来なら、私がすぐに匙先輩にトドメを刺さなければ行けない。
でも、出来なかった。
本当に、心からの叫びをあげるこの人を攻撃出来なかったし、する必要もなかった。
「これで、俺たちの夢、を……先生に……なるんだ……」
そう言うと匙先輩も倒れ、光に包まれて消えて行きました。
『リアス・グレモリー様の《兵士》一名、リタイア』
『ソーナ・シトリー様の《兵士》一名、リタイア』
アナウンスが流れ、それぞれの退場が確認された。
どちらも必死に戦い、僅かな差で匙先輩が勝利した。
私は、イッセー先輩の手助けをするべきだったんだろうか？
自分では、わからない。
とにかく今は進もう。
会長も動き出している、私も後を追わなければ。

敵にはまだ、あの人が残っているのだから。

３０話

『リアス・グレモリー様の《兵士》一名、リタイア』
『ソーナ・シトリー様の《兵士》一名、リタイア』
リアスたちを待ち受ける為に中央広場の時計下に待機していると、アナウンスが流れてきた。
リアスの《兵士》撃破の後に、少し間が空いてからの匙の撃破報告が流れた。
つまり、兵藤くんを倒してからサジも倒れたのでしょう。
先程、ここまで伸ばしていたサジのラインも消えてしまった。
ラインを伝ってきたこの血も、もはや必要なくなりましたね。
本来なら血を抜いて倒す予定だった兵藤くんを、自力で倒しきった。
サジは本当に強くなった。
頑張りましたね、サジ。
この戦いが終わったら、うんと褒めてあげようと思う。
そんな事を考えていると、足音が聞こえてきた。
音のする方を見てみると、どうやらリアス達が来たようだ。

後ろには木場くんと塔城さんもいる。
朱乃さんがいない……？
「ごきげんよう、リアス。《王》がこんな中央まで出てきていいのですか？」
「あなたとカズキくんが散々やってくれたからね、私も動かざるを得なかったのよ。こっちの作戦が総崩れだわ」
「それはご愁傷様。お陰で私たちは兵藤くんも倒せた。このまま勝たせてもらうわ」
「イッセーの事は本当に許せないわ……で、カズキくんは？　何処かで不意打ちでも狙っているのかしら？」
リアスはそう言いながら辺りをキョロキョロと見回している。
「さぁ？　彼には彼でやる事があるようですから」
「そう……まぁいいわ。先ずは《僧侶》の2人から倒させて貰う！　祐斗、小猫！」
『はいっ！』
リアスの号令を受け、『予定通り』木場くんと塔城さんがこちらに飛びかかってきた。
木場くんは椿姫が対処する。
塔城さんはそのまま襲ってくるが、問題はない。
二人が襲って来た事により、リアスの警護は薄くなる。
その隙を逃す彼じゃない。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「いいんですか？　《王》をガラ空きにして」

俺が背後から声を掛けると、リアス先輩はこちらに振り向きながら飛び退く。

「っ来たわね！　朱乃っ!!」

「雷光よっ!!」

上から朱乃さんが現れ、声と共に雷が降りかかる。

やっぱ近くにいたか。

「ほいっと」

どうやら元々持っていた堕天使の光の力も合わさり、バラキエルさんと同じ『雷光』を使えるようになったみたいだが、雷の性質は変わらない。

グローブの指先から素早くドリルを射出し、それを避雷針代わりにして雷を逸らす。

そのままリアス先輩の脇をすり抜け、小猫ちゃんの前に立ち塞がる。

その隙に、会長さんはリアス先輩を牽制しつつ距離を取った。

「カズキ先輩……っ！」

「よお、小猫ちゃん久しぶり。匙はカッコよく戦えてたか？」

俺が話しかけると、小猫ちゃんは猫耳と尻尾を震わせながら構える。

うむ、こんな時だが何かに目覚めそうだ。

「はい、イッセー先輩もどちらも格好良かったです。私もそれに負けない様に戦います！」

「そっか、でもごめんね。俺は君とは戦わない」

「え？」

小猫ちゃんが俺に意識を集中した所に、背後から花戒さんと草下さんの《僧侶》二人組が小猫ちゃんに抱き着き、二人掛かりで動きを封じる。

「くっ！　幾ら二人掛かりでも、私を拘束は……！」

「出来ないよね、知ってる。でも、これで君はしばらくは動けない」

花戒さん達が小猫ちゃんを抑えてくれている間に、俺は朱乃さんの方へと駆け出した。

「みんなが木場と小猫ちゃんを抑えてくれてる間に、朱乃さんだけは確実に倒す！」

「あら怖い。でも、そんな簡単にはやられてはあげませんわよ？」

朱乃さんは手元をバチバチと放電させながら、俺を待ち構えている。

顔は笑っているが、かなり警戒している様だ。

「でしょうね。ですから『正面から不意打ち』させて貰います」

「何を言って……ふぇ!?」

緩急をつけた動きで一気に目の前まで距離を詰め、そのまま朱乃さんを抱き締める。

なんか朱乃さんが変な声出してたけど、今は余計な事を気にしたら失敗する。
「会長さんっ！」
「はい！『反転』!!」
「っそういう事か！　朱乃さん、逃げて下さい！」
そういや木場は地下での戦闘で一度『反転』を見てたんだっけ、でも遅い。
朱乃さんに抱き着いた俺ごと『フェニックスの涙』を振り掛け、効果を『反転』させる。
これで朱乃さんも……って。
『リアス・グレモリー様の《女王》一名、リタイア』
「いっだあぁぁぁ!?　ちょ、いだだだ！　な、『涙』！『涙』早く飲まなきゃっ！」
痛みに悶えながら懐から『フェニックスの涙』を取り出し、一気に飲み干す。
今まで身体を駆け抜けていた痛みが段々と引いていき、ようやく落ち着いてきた。
「し、死ぬかと思った。傷が治るの速い俺でこれだもん、そりゃみんなも一発でダウンするわ」
「大丈夫ですか？　というか本当に大丈夫なんですね、普通は意識も失う程の激痛の筈なんですが……まぁカズキくんですし、そんな事もありますか」
「貴女までそれ言うんですか」

会長さんにまで『カズキくんですし』って言われた。
何さ、流行ってんのそれ？
扱いに疑問を感じるが、事実平気なので何も言えない。
「あれが祐斗の言っていた『反転』……？　何で液体が掛かっただけで……まさか、今のは『フェニックスの涙』!?」
そう、あの液体は『フェニックスの涙』。
どんな傷でもたちまち治してしまう貴重な薬。
その効果を反転させれば、物凄いダメージを与える劇薬へと変貌する。
「あの『反転』という技で、回復の効果をダメージに変換したのね……恐ろしい事をしてくれるわね。でも、『フェニックスの涙』を何故二つも持っているの？　試合前に一つずつしか支給されていないのに……」
「あ、さっき俺が飲んだ分はリアス先輩から拝借した分です。『相手から奪ってはいけない』なんてルールないですもんね」
「え!?　あ、ない!!」
俺がそう言うとリアス先輩らフェニックスの涙を入れていたポケットを弄るが、既にそこに探し物はない。
手癖が悪くて申し訳ない。

おいしくはなかったです。
「ルールには『フェニックスの涙はゲームに参加する悪魔二名までしか所持できない』とあります。合わせてちょうど２つ。なんの問題もありません」
『ソーナ・シトリー様の《女王》一名、リタイア』
『ソーナ・シトリー様の《僧侶》二名、リタイア』
会長さんが態々補足してくれていると、アナウンスが流れた。
む、足留めしてくれていた三人がやられてしまったか。
副会長さん以外は元々戦闘向きじゃないからな、長く持ってくれた方だ。
「流石にもうネタ切れだろう？　部長はやらせないよ」
「カズキ先輩、もう逃がしません！」
木場が大剣を構えながら、リアス先輩の前に躍り出る。
「それ、『デュランダル』か？　なんで木場が持ってんの？」
ゼノヴィアの奴、扱い雑だからとうとう聖剣に振られちゃったのか？
「ゲーム開始前に、ゼノヴィアから使用権を譲渡されていたのさ。昔と違って、禁手に至った今なら聖剣も扱える」
「相変わらず木場はハイスペックだなぁ。会長さん、もういいですよね？」
「ええ、ありがとうございました」

「ソーナ……？」

会長さんが礼を言ってくれる。

リアス先輩は何のことだか分からないようで、困惑気味だ。

「リアス、私は貴女との一騎討ちを提案します。受けてくれますか？」

「一騎討ちって……まさか、その為にここまで？」

リアス先輩の言葉に、会長さんは頭を静かに横に振った。

「本来なら私は《僧侶》の2人が張った特殊な結界内に立体映像と精神だけを置き、本体は屋上に待機する。その立体映像に攻撃して少しでも消耗してくれれば……そういう作戦でした」

会長さんは、そう語りながら魔力で自身の周りに水を集め始める。

「サジは死力を尽くして兵藤くんを倒しました。私も、私の眷属たちの様に己というものを見せつけなければなりません」

集めた水は様々な形に姿を変え始める。

鷹、大蛇、獅子、そしてさりげなく混ざるモグラ。

会長さん、モグラさんの事気に入ってたもんね。

でも、俺の中でシリアスが飛んでくからやめて。

「私の水芸、とくと披露いたしましょう。行くわよリアス、最後は貴女と私で決着をっ

！」

「望むところよ、ソーナ！」

それぞれの魔力がぶつかり合い、一騎討ちが始まった。

「……小猫ちゃん、部長が危険になったら――」

「木場、横槍なんて無粋な真似はするなよ？　何の為に俺がいると思ってる」

「君一人で、僕ら二人を止められると？」

木場がデュランダルを構え直しながら此方に振り向く。

小猫ちゃんも臨戦態勢だ。

「当然だ、試したけりゃ掛かってこい。会長さんの邪魔だけは死んでもさせねぇ」

「いきます。待ってても仕方ないですし」

「……そうだね。ゼノヴィアにも、君だけは絶対に仕留めろってお願いされているし」

「そんな約束勝手にすんなよ。後で俺が怒られるじゃないか」

軽口を叩き合いながら、此方も戦闘が始まる。

木場と小猫ちゃんは俺を排除しようと。

俺はあくまで時間稼ぎに徹して。

互いに目的が違うこともあり、戦闘は決着が着かずに終わった。

『リアス・グレモリー様、ソーナ・シトリー様それぞれ《王》リタイア。よって、今回の

レーティングゲーム、引き分けとなります』

互いの王が同時に討ち取られるという、レーティングゲームでも珍しい結末によって。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ゲームの結果は引き分け、か。

リアスは確実に評価を落としたな。

前評判では勝率八割と言われてた勝負が引き分けで終わったら、まぁ仕方がないとも言えるがな。

逆にシトリー家の嬢ちゃんは評価がかなり上がった筈だ。

何たって、赤龍帝を同じ《兵士》が討ち取ったんだ。

これで評価が上がらない方がおかしい。

まぁ一番注目されたのはカズキだろうがな。

あのバカ、シトリーに迷惑かけたって気にしていたからな。

張り切るのは解るが、やり過ぎだ。

このゲーム、あいつは一人も敵を倒していない。

にも関わらず、戦況を支配していたのは誰が見ても間違いなくカズキだ。

これがどんだけ凄いのか、あいつは……わかって、ねぇんだろうなぁ。

それにしても、さっきから周りの連中が煩くて敵わねぇ。
『流石提督の隠し球ですな』って、別にあいつは俺の部下でも何でもねぇんだよ。
挙げ句の果てには『是非悪魔に転生を』とか抜かしやがって……。
シェムハザが止めなけりゃ、一悶着あった所だ。
そのシェムハザも、目が笑ってない笑顔で撃退してたが。
しかし、今回の件でエライのに目をつけられたな。
隣にいたオーディンのジジィと帝釈天なんざ、あいつが車で突撃した所なんて腹抱えて笑ってたぞ。
特に帝釈天が気に入ってたな、よろしく言っていてくれと言われてしまった。
オーディンはシトリー眷属の匙元士郎を気に入ったようだ。
サーゼクスに、大切に育てる様に忠告していた。
そのサーゼクスは、匙にある物を手渡しに行って今はここにいない。
とんでもない者に目を付けられた二人。
そこにイッセーも加えて、同じ歳の男が三人か。
はてさて、これからどうなるかね。
最近は楽しみが増えて仕方ない。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ゲームは終わった。
引き分けという珍しい幕引きになってしまったが、終わった事は仕方ない。
取り敢えず匙の病室に行ってみよう。
イッセーを自力で倒したみたいだし、褒め称えてやろう。
お、ここが匙の病室……ん？
やたら人が多いな、匙に会長さんに……サーゼクスさんまでいる。
「これを受け取りなさい」
サーゼクスさんは匙にやたらと高価そうな小箱を手渡していた。
それを受け取った匙も困惑している様に見える。
話を聞いていると、どうやらレーティングゲームのＭＶＰ賞みたいな物の様だ。
凄いな、イッセーを倒したのが相当高評価だったみたいだ。
「これを貰うべきなのはカズキなのでは……？」
「いや、俺はただのお手伝いさんだから。そんなん貰っても困る」
「カズキ!?　いや、魔王様からの贈り物を『そんなん』とか言うな！」
しまった、ついツッコミを入れてしまった。
「お前のもんだって言ってくれてるんだ、素直に受け取れ。お偉いさん達がお前に相応しいと思ったからくれたんだろ？」

「そうだ、自分を卑下してはいけない。君は将来有望な若手なんだ、私は期待しているよ。何十年かかってもいい、立派な先生を目指しなさい」

サーゼクスさんが似合わない位いい事を言う。

こういう所を見ると、魔王様何だなと思い出せる。

普段は妹狂いの変態だもんな、この人。

「……サジ、あなたは大勢の人にその勇姿を見せつけました。格上とされた兵藤くんを見事に打ち破ったのですから。貴方は、私の自慢の眷属です……！」

会長さんは目から涙を溢れさせながら匙を褒めていた。

心からの祝福と、自身が一番欲しがっていた言葉を貰い、匙もまた目から涙を零して贈られた箱を握り締める。

「はいっ……ありがとう、ございますっ……！」

それを見届けると、俺とサーゼクスさんはその場を後にした。

これ以上ここにいるのは無粋だし、まだやり残したこともある。

俺の友達に、俺の仲間に。

無粋な事を働く輩を、取り押える為に。

もうひと働き、しに行こう。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「クソックソックソッ……!!　あのガキめ、またしても衆人環視の前で儂に恥をかかせてよってっ！」

とある通路。

一人の老人が大きな足音をたて、声を荒げている。

相当おかんむりのようだ。

「もはや手段は選ばん。こうなればあのシトリー家の娘のゲーム内容に異議申し立てをして、ゲーム参加権の剥奪を……」

「出来ると思ってんの？　どんだけ頭の中お花畑なんだよ」

「!?　その声は……クソガキめぇ!!」

俺が脇の通路から現れると、ただでさえ皺だらけの顔を更に顰めて怒鳴りつけてきた。

「ゲーム会場にまでこんなオモチャ大量に仕掛けやがって……他の連中が引っかかったらどうする気？」

俺は背負っていた袋を目の前に投げ、ジジィの目の前に中身を転がす。

その中身とは、このジジィがスタッフに命じて仕掛けた爆破装置。

俺がゲーム中に回収した物だ。

「ふん！　この程度の罠を見抜けぬ様なら、どちらにしろ見込みなどないわ！　いずれ

『禍の団』（カオス・ブリゲード）にやられるのがオチじゃ！」
「うっわ、自分が仕掛けたって認めやがった。どんだけバカなんだよ、俺の苦労必要なかったじゃん……ねぇ、サーゼクスさん」
「その様だ。いらぬ手間を掛けさせて済まなかったね、カズキくん」
「なっ!?」
ジジィが声に反応して振り向くと、そこには紅い髪を揺らしながら佇む魔王の姿が。
後ろには警備の者も連れている。
「残念だよ、貴方は私に賛同してくれた数少ない旧魔王派のものだったのに……」
「ち、違いますぞサーゼクス様！　これは全てこの人間の仕組んだ……!?」
今更そんな言い訳が通ると思えるのか、凄いなジジィ。
そんなジジィの言葉を遮り、サーゼクスさんはある紙束を突き付ける。
「『禍の団』（カオス・ブリゲード）に関する内部資料だ、ご丁寧にテロの予定まで記載されていたよ。カズキくんが君の屋敷から見つけてきてくれた。他の協力者も捕縛している、言い訳は無駄だ」
セキュリティが全部魔力関係だけとかビックリしたわ。
しかも機密文書を燃やさないで取って置くとか……いや、本当に凄いわ。
「そんな……儂の地位が、儂の財産が……そん、な……」

ジジィは観念したのか、その場で崩れ落ちた。
いつもならざまぁと思うが、こいつはなんかそれすら思えないな。
アホすぎて。
「和平が成立したばかりの大事な時期だ。お前達は地獄の最下層、コキュートスに落とされる事が決まった。さぁ、連れて行ってくれ」
「ハッ！」
サーゼクスさんが指示を出すと、後ろで控えていた人達が手に何かを嵌めてからジジィを連れて行った。
魔力を封じるなんかだっけ？
「助かったよカズキくん、思わぬ所で騒動の芽が摘めた。何か御礼をしなければ」
サーゼクスさんが笑顔で此方に話し掛けてくる。
嘘臭い事を言う、絶対全部計算尽くだっただろうに。
まぁくれると言うのだ、貰っておこう。
「それなら会長さんの言ってた学校建設に、優先的に力を貸して下さい」
「む、それでいいのかい？　君に得がないようだが……」
「今回の件で会長さんには迷惑かけましたし、もしかしたらそこが俺の就職先になるかもなんで」

実は特訓が終わる時、会長さんに誘われていたのだ。
『もしよかったら、教師になってみませんか?』
まぁ特に進路も決めてないから、考えときますと伝えておいた。
サーゼクスさんは不思議そうな顔を浮かべた後に、俺の返事を聞くと笑顔で頷いてくれた。
なんであんたが嬉しそうなんだ?
「そうか、ではその様に取り計ろう。しかしよかった、ようやく君も悪魔になる決心を……」
「はい?　何か言いました?」
「いや何でもないよ。さぁ、みんなの所に戻ろうじゃないか」
サーゼクスさんは俺の肩を抱きながら歩き出す。
ちょ、やめて。
男とくっつく趣味はないの。

間話3

アホを捕まえた後、アザゼルさんとも合流してイッセー達の病室に向かった。
もうみんな回復したようで、イッセーの病室に集まっていた。
取り敢えずゲーム中の行動について、何か言われる前に謝っておいた、
これをしておくだけで相手からの追求が弱まるのだ、確実に先手を取る。
しかし、リアス先輩からは御礼を言われてしまった。
『このゲームで、自分たちの認識の甘さがよくわかった』
『正式なゲームの前に学べて助かった』
こんな事を言って頭を下げてきた。
やめろ、普段そんな事しない奴がそういう事すると、俺に被害が来るのは学習済みなんだ。
辺りを警戒しつつ、アーシアちゃんとギャスパーくんに謝罪。
この子達は不意打ちかました所為で、殆ど序盤で退場させたからね。
特にギャスパーくんはデビュー戦だったから余計にだ。
二人とも許してくれたが、ギャスパーくんがやけに怯えている。

嫌われちゃったかなぁ。
木場と小猫ちゃんは満足しているようで、木場には組手でいいから一対一で戦って欲しいと言われてしまった。
メンドイと言ったら肩を落として落ち込んでしまったが。
だって痛いの嫌いだし。
ゼノヴィアには試合についてやたらと文句を言われた。
今度なんでも好きな物を作ってやると言ったら顔が輝きだしたけど。
今はアーシアちゃんと何が良いか話し合っていた。
チョロい。
朱乃さんから謎のオーラが立ち込めている。
怖い。
「あの……カズキくん？」
「はい？　何ですか朱乃さん」
オーラを引っ込めて、朱乃さんが何やらモジモジしながら話しかけてきた。
何で顔赤くしてんの？
「あの……試合前に言っていた、大事な話って何でしょうか？」
しまった、アザゼルさんに言われたのに言い訳考えとくの忘れた。

何でもないですとか言ったら殺されるよね。
「あ～と……ほら、その……そ、そう！　朱乃さんも一緒に家に住みませんか!?」
うん、我ながら意味がわからんな。
見ろ、朱乃さん以外みんな噴き出したぞ。
「えっと、それは……どういった意味で？」
意味？　ないよ、むしろ俺に教えて下さい。
「えっと、ほら！　男女が二人っきりで一つ屋根の下だと世間体悪いし、ゼノヴィアが寝室に侵入しようとしてきて俺の貞操の危機だし、朱乃さんも一緒に住んでくれたら安心かな～……って……」
うぉぉ……マズイ、適当な事言い過ぎて自分でも訳わかんなくなってきたぁぁ！
あぁ、朱乃さんまで溜め息吐いてる!?
「む、子作りはカズキが禁止令を出したから、最近は侵入していないぞ。ご飯抜きはもう耐えられん……」
「てめぇは余計な事言わんでいい」
これ以上混沌とさせないで、後でお菓子あげるから。
「……はぁ……わかりました。お誘い、お受けしますわ。リアス、良いかしら？」
「え、えぇ構わないわ。カズキくん、朱乃をよろしくね？」

え、これでいいの？
やった、なんかよく分からないけど乗り切った！
これでいいのかアザゼルさ……なんで頭抱えてんの？
まぁ一先ずこの話は置いておこう。
匙にやられたイッセーは、リベンジに燃えていた。
新開発した技も出せずじまいだったそうで、大変悔しいそうだ。
その新技にアザゼルさんとサーゼクスさんが興味を示し、イッセーがこの場で披露してくれた。
『乳翻訳』（パイリンガル）
女性の胸に語りかけ、心の内を曝け出させて情報を聞き出す。
リアス先輩やアーシアちゃんの考えている事をズバリ的中させていた。
小猫ちゃんの
『最低です、やさしい赤龍帝じゃなくて……やらしい赤龍帝とか……！』
というツッコミがシュールだった。
なるほど、確かに女性限定では最強だ。
作戦も糞も無くなる。
だがイッセー、そのドヤ顔やめろ。

握り潰すぞ、何処をとは言わないが。
これには下ネタに寛大なアザゼルさんも絶句してしまったが、再起動した後にサーゼクスさんと何かを話し合っていた。
また悪巧みか？
被害を受けるのがイッセーだけなら構わないけど。
ちなみに『乳翻訳』は禁止令が発令された。
当然だ、そんな技使ったら対戦相手がいなくなる。
イッセーはショックを受けていたが、リアス先輩に抱き締められたらだらしない顔をしたまま何も言わなくなった。
平和だなぁ、爆発しろ。

アザゼルさん達と別れて会長さんの所に戻る途中、美人なお姉さんを連れた変な爺さんに絡まれた。
どうも試合を観ていたようで、面白かったと褒めてくれた。
『人間の身で悪魔とつるんで何を望む』
とか聞かれたが、よくわかんないので
『誰も俺に嫌がらせしてこない日常』

と答えたら、何故か爆笑された。
そんなに難しいですか、俺の平穏って。
爺さんは満足したのか、精進しろと言って歩いて行ってしまった。
美人さんもこちらに頭を下げてから、その後に続いて行った。
うん、やっぱ美人はいいね。
心が癒される。

それから数日経ち、リアス先輩達と一緒に人間界に帰ってきた。
夏休みの宿題は既に終わらせているので心配はない。
最後に電車から降りて駅のホームに向かうと、アーシアちゃんがヒョロい兄ちゃんに絡まれてイッセーがそれを庇ってた。
何でもディオドラとか言うらしい。
そういや若手の集まりの時にいた気がする。
地味だから忘れてたわ。
その場は挨拶だけして帰って行ったようだ。
アーシアちゃんに求婚してきたとか言って、イッセーがおかんむりだ。
ならお前が求婚すればいいと言ったら、アーシアちゃんは顔を真っ赤にし、リアス先

輩には足を踏まれた。
超痛い。
どうやら、また面倒ごとが増えそうだ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
夏休みも終わり、学校が始まった。
朱乃さんもウチの生活に慣れたようで、食事は当番制になった。
ゼノヴィアも朱乃さんに触発されたのか、最近は料理に取り組み始めていい感じだ。
出来栄えはアレだが、そこは練習していけばいい。
それまでは俺が責任持って食べるさ。
小猫ちゃんもよく遊びに来るし（モグラさんとだが）、アーシアちゃんもゼノヴィアの部屋によく泊まりにきている。
あれ？　なんか俺の家グレモリー眷属に占領されてね？
近頃は悪魔関係の事も特にこれといって起こらず、穏やかな生活を満喫出来ていた。
何やらイッセー達は、セラフォルーさんと冥界で映画の撮影とかあって大変だったようだが。
俺は全力で逃げた上に会長さんにお願いして守って貰い、何とか参加せずに済みました。

後日、その時の映像を見せて貰った。
主役はセラフォルーさんの演じる魔法少女だそうだが、これどう見てもギャスパーくんの方が目立ってるよね。
ギャスパーくんに頑張ってたねと伝えたら、照れながらも喜んでいた。
小猫ちゃんとも仲が良いみたいだし、俺もこのまま仲良くしていきたいな。
それと、イッセーのバカは映画の中で『乳翻訳』を披露して何故かそれが大ウケ。
一部の子供たちから『おっぱいドラゴン』の愛称で親しまれてるとか。
マジで冥界は滅びるんじゃないかな、いっそヴァーリさんと一緒に俺が滅ぼしてしまおうか。
頭にモグラさんを乗せて、そんな物騒な事を考えてながら廊下を歩いていると、前方からイッセーが走ってきた。
「よぉイッセー、そんなに急いで――」
「おっぱい！」
イッセーはそう言うと、どこかに向けて全力疾走して行った。
「……疲れてんのかな、あいつ」
確かに普段からああいう事に大っぴらな性格だったが、挨拶代わりに『おっぱい』なんていう奴じゃ無かったのに。

ちょっと優しくしてやろうと思っていると、また前からイッセーが走ってきた。
廊下を一周してきたのか？
「なぁイッセー、何か悩みがあるなら――」
「あのエロ本は俺のもんだっ！」
「俺のだって言ってんだろっ!!」
イッセーの悩みを聞いてみようと思ったら、その後ろからもう一人イッセーが現れて取っ組み合いながら走って行った。
「……ん？　今、イッセーが二人いた？」
何、俺も疲れてんの？　勘弁してよ。
帰りに病院寄らなきゃ。
頭を抱えていると、今度は大量のイッセーが一斉に走ってきた。
「きしょいわ！」
『うわーっ!!』
モグラさんにグローブになって貰って、イッセーのいる所を纏めて《凹》ませて落とし穴に落とす。
全員落ちたのを確認してから穴を覗くと、大量のイッセーは一人残らず消えていた。
衝撃を与えると消えるのか？

《凸》で地面を盛り上げて平らに均す。
ベニヤ板で隠せば完璧だ。
全部イッセーがやった事にしてしまおう。
なんでこんな事になってるのか知らないが、どうせアザゼルさん辺りの仕業だろう。

何故か屋上にコスプレしたアザゼルさんを発見。
複数のイッセーと、他のグレモリー眷属全員に追い立てられて空に逃げようとしてた。
取り敢えず問答無用でアザゼルさんをぶん殴って地面にめり込ませた。
事実確認？
そんなもん必要ない。
経験上、何か変な事があったら大体この人の所為だ。
「で、何でこんな事になった」
「いや、ドッペルゲンガーの研究中にちょうどイッセーがいたからつい実験体に……」
「モグラさん、重石追加」
「キュイ」

「おぐっ！」

俺の指示に従い、モグラさんが作った石畳を正座しているアザゼルさんの膝に乗せる。

既にアザゼルさんの座高を越えそれなりの重量になっているそれに、更なる重石が追加されてアザゼルさんが唸っている。

取り敢えずまだ校舎に残っていた生徒の記憶を操作して、アザゼルさんに記憶を消して貰った。

全部消すと障害が残るらしいので、ドッペルゲンガーの部分だけ消してイッセーに服を脱がされた事はそのままだそうだ。

イッセーは小猫ちゃんに校舎の外に投げ飛ばされ、女生徒に追いかけ回されてるがまぁそこはいい。

俺に被害来ないし。

「で、朱乃さんとリアス先輩の格好は何ですか？」

「色仕掛けでイッセーくんを集めて一網打尽……と、アザゼル先生に言われまして」

「私を人質にすればイッセーが集まるからって先生に言われたのよ」

「モグラさん、二枚追加で」

「キュイ」

「やめ、マジで痛くなってきたんだって！」
何やってんだこの人は。
そんなんで魔王の妹とその配下にコスプレさせんな。
しかもおっさん趣味丸出しとか、恥を知れ。
「ほら、朱乃さんもさっさと着替えて。嫁入り前の娘さんがそんなに肌を晒したらいけません」
俺がそう言うと、リアス先輩が口に手を当てながらニヤニヤしてくる。
「あら、それは『俺以外に見せるな』っていう独占欲？　愛されてるわね、朱乃」
なんでそうなる。
「うふふ♪　カズキくんがお願いしてくれたら、これ位幾らでも着てあげますのに」
マジで!?　……ゲフンゲフン。
「そういうのいいですから。オラ、ゼノヴィアも対抗して脱ごうとするな」
「いや、最近は副部長に押されっぱなしだからな。私もそろそろアピールを始めなければ」
「なんのだよ、いいからさっさと帰るぞ。そこの総督はもうすぐお迎えが来るから放置しといて」
「は!?　おま、誰を呼びやがった！」

俺がそう言うと、アザゼルさんは途端に慌てだす。
「トビオさん。久々に連絡ついてね、迎えに来てくれるってさ。お仕置きも頼んどいたからよろしく」
「ふざけんな、俺は逃げ――」
アザゼルさんは背中の羽を広げて、重石を吹き飛ばして逃げようとするが……
「あ、トビオさんが来た時にその状態じゃなかったらシェムハザさんにも連絡いって、支給されてるアザゼルさんのお金とか諸々止まるからそのつもりで」
俺の言葉を聞いた途端、綺麗な正座に戻った。
そうだ、そうやって大人しくしておけばいい。
一人部室に残される寂しさをアザゼルさんも味わえ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「カズキ先輩、トビオさんって誰ですか？」
帰り道、カズキ先輩に聞いてみた。
今日はカズキ先輩の家にお泊りさせて貰う予定なので、朱乃さんやゼノヴィアさんと一緒に帰っている。
「ん？　昔グリゴリでお世話になった人。ヴァーリさんと互角以上に戦える位強くてね、クールでかっこいい人だよ。俺のモグラさんみたいにでっかい犬の神器持ってて

ね、こいつが人懐っこくて可愛いんだ」
カズキ先輩がそう言うと、モグさんが先輩の頭をペシペシ叩き始めた。
嫉妬してるのかな、やっぱりモグさんは可愛い。
しかし、先輩は犬派なのか……なんだろう、少しイラっとする。
「先輩は犬と猫、どっちが好きですか？」
つい聞いてしまった。
深い意味はない、本当に、なんとなくだ。
「ん～どっちも好きだけど……猫かな、遊んでて楽しいし」
……なんでこんな事で喜んでるんだろう。
よく分からないが、まぁいい。
ゼノヴィアさんは何時も通りだが、朱乃さんが私を見ながらニコニコしてきてなんとなく恥ずかしい。
「でも何で急にそんな……あぁ、小猫ちゃんの事は好きだよ？　俺とモグラさんの大切な友達だもんね」
「……ありがとうございます」
マズイ、猫耳としっぽが飛び出しそうになった。
今猫耳が出たら絶対にピコピコ動く。

先輩に喜んでるのがバレたら恥ずかしくて死んでしまう。
猫耳が出ない様に頭を両手で押さえながらカズキ先輩の方を見てみる。
ゼノヴィアさんに背中から抱き着かれ、朱乃さんにはほっぺを引っ張られている。
二人ともカズキ先輩の事が好きなんだなと伝わってくる。
私はどうなんだろうか？
嫌いではない、それは絶対だ。
じゃあ好きかと言われると、恋愛のソレではないと思う。
以前アーシアさんが、カズキ先輩の事をお兄さんみたいに思っていると言っていたが、私も多分そんな感じだ。
先輩と私は少し似ている。
姉様に裏切られた私と、白龍皇と孫悟空に裏切られたカズキ先輩。
私は悲しくて泣いたり姉様を恨んだりしたけれど、先輩は違う。
裏切られても諦めず、倒してでも取り戻そうと足掻いている。
私も先輩の様になれるだろうか？
今はまだ足手纏いだけど、仙術を鍛えていけばきっと役に立つ事が出来る。
私ももう少し、足掻いてみよう。
先輩は強い、力だけじゃなく心も。

私は、そういう所に憧れているのかもしれない。
そういう事に、しておこう。

間話4

今日も今日とてオカ研部室。
小猫ちゃんとアーシアちゃんのお願いで、モグラさんとの芸を披露していると見知らぬお客様がやって来た。
その金髪でちょっとキツそうな美人さんは、安倍清芽（あべきよめ）というらしい。
3年なので安倍先輩か。
お兄さんに青い作業着姿の人がいないか不安になるな。
小猫ちゃん曰く、以前イッセーのレンタルを賭けて部活対抗戦をした事があるそうだ。
ちなみに今回の用件もイッセーのレンタル。
何でも、父親が勝手にセッティングした見合いをぶち壊したいそうで、イッセーには偽の彼氏役を演じて欲しい様だ。
なんだその恋愛マンガみたいな展開は。
アーシアちゃんが怒ってるのもお約束って奴か。
……ん？　リアス先輩の反応が鈍い？

何時もなら真っ先にイッセーの所有権を主張するのに……あぁ、そうね。
この間の自分と状況が似てるもんね、怒りにくいし断りにくいか。
まぁ俺は部外者だからな、余計な事は言わないでおこう。
「……ところで、先程からモグラと戯れているこの方は？　初めて見る顔ですわね」
「その子は瀬尾カズキくん、神器を宿した人間よ。ちなみにそのモグちゃんが神器で……そうよ、イッセーの代わりにカズキくんにお願いしましょう。どうかしらカズキくん？」
あ、なんか面倒な気配。
窓から逃げさせてもら……小猫ちゃん、何で俺の服を掴んでいるの？
「まだモグさんの芸を全部見せて貰ってません」
いや今度見せるから今日は……わかった、わかったからその目は止めて。
「彼に？　大丈夫ですの？」
安倍先輩がこちらに疑惑の視線を送ってくる。
そうだ、イッセーに頼め。
俺を巻き込むな。
「問題ないわ。彼は使い魔ハンターとして有名な、あのザトゥージが認めるほど使い魔に好かれる才能があるのよ。今回の件にはピッタリだわ」

「まぁ！　それなら問題なさそうですわね。兵藤くんにも興味がありましたが、彼なら依頼を確実に遂行してくれそうですわ！」

リアス先輩の言葉に、安倍先輩は手をポンと合わせて嬉しそうに笑っている。

誰だよザトゥージって。

あぁ、あの使い魔の森にいた変態か。

「何？　あいつそんなに凄い有名な変態なのか？」

「変態なのは確定なんだね……」

何を言ってるんだ木場。

あの見た目で半ズボン履いてる時点で、変態以外の何者でもないだろう。

「というか部長、本当にカズキくんにやらせるつもりですか？　それはちょっと……」

「そうだ、私も反対だぞ。彼氏の真似事なんぞ」

おぉ、朱乃さんとゼノヴィアが反対してくれてる。

頑張って！

でもゼノヴィア。

抱き着く必要はないだろう、離れろ。

「あなたたちが反対する気持ちは解るわ。でもね、今回は彼の力が必要なのよ」

「それは貴女がイッセーくんを貸したくないだけでしょう、彼は貴女の眷属じゃないの

よ？」
「何よ、朱乃だってカズキくんを取られたくないから反対してるんでしょう？」
「貴女と一緒にしないで、私はあくまで常識の話を……」
おや、何やらお姉様方の雲行きが……。
「ふぅ、困りましたわね……瀬尾くん、と言ったかしら？　どうしてもダメ？　私に出来る事なら何でも致しますわ」
「ほぅ……何でも？」
あだだ！
朱乃さん、ほっぺが伸びて痛いです。
ゼノヴィア、冗談だから首を絞めるな。
ヘッドロックは色々とマズイ！
「まぁ受けてもいいですけど、何をやればいいんですか？」
「父が出してきた破談の条件は、陸海空の魔物を使っての三本勝負で二本先取する事。魔物に好かれやすいという貴方なら、きっとやってくれますわ」
なるほど、そりゃイッセーには難しいわな。
こいつは何故か使い魔に好かれない。
身体に宿る赤龍帝がうんたらってアザゼルさんが言ってた気がする。

「はぁ、でも俺ペットなんてモグラさんしかいないですよ？　ゼノヴィアと小猫ちゃんをカウントしてもいい？」

ダメ？　ですよね。

「おい、なんで私をサラッとペット扱いしてるんだ」

寝床用意してるだろ？

ご飯用意してるだろ？

偶に一緒に散歩も行ってるだろ？

後は風呂に入れてやったらフルコンプじゃね？

だから痛いって、だから攻撃すんな！

「……私は？」

「猫耳カワイイし」

「……何でしょう、イマイチ嬉しくありません……」

小猫ちゃんにもため息吐かれた。

解せぬ。

「期限は今度の土曜日なので、それまでに見つからないのなら私のお友達をお貸ししますけど……」

明後日か。

ならこの前行った使い魔の森に行って、適当に話を着けて協力して貰おうか。
「いいですよ、じゃあ報酬はモグラさんの美味しいご飯で。いいですか、リアス先輩」
「ええ、貴方にやって貰うのだから報酬も貴方が決めて頂戴。面倒かけて悪いけど、よろしくね？」
「解りましたわ。其方のモグちゃんのお口に合う様に、特製のお料理を用意させて頂きます。申し訳ないですが、よろしくお願いしますわね？」
安倍先輩はそう言いながら頭を下げる。
さて、それじゃあ明日の放課後にでも行ってくるかね。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
さて、約束の日がやってきた。
俺だけでもよかったのだが、リアス先輩たちも一緒に着いてきてくれた。
リアス先輩は何度も謝ってくれたし、先輩の気持ちも解るので今回は気にしないで欲しい。
指定の場所に着いてみると、其処には巨大な庭付きの洋館が。
やっぱお金はある所にはあるんだなぁ。
そんな風に俺が見上げていると、安倍先輩がわざわざ出迎えに来てくれた。
案内に従って着いて行くと、何故か屋内プールに到着。

まだお父さんが来ないので、ここで時間を潰して欲しいそうだ。
用意された水着に着替え、プールサイドへ出て行く。
ギャスパーくん、なんで君は女性用の水着を着ているんだ？
可愛いから？
そうね、もう似合ってるから君はいいや。
だが木場、お前は頼むからブーメランはやめろ。
女性陣も現れて、みんなそれぞれセクシーだったり可愛かったり。
はいはい、朱乃さんもゼノヴィアも似合ってるから。
感想が適当？
そんな露出狂みたいなマニアックな水着を着てくるのが悪い。
「それで、瀬尾くんの連れてきた魔物はどちらに？」
「あぁ、この石の中にいる。必要になった時に投げれば、出てきて戦うって言ってたよ」
安倍先輩に質問され、俺はモグラさんに持って貰っていた青と白の石を手に取って見せる。
アザゼルさんがメチャクチャ実験したがって、守り通すのが大変だった。
モグラさんは持つのを嫌がるが、今は水着だから許して欲しい。
「それはまた珍しい種類ですわね、こんなの初めて見ました……流石リアスさんの推薦、

期待して良さそうですわ」
それはいいんですが、顔が近いです先輩。
ほら、そんなに強く手を握ると後ろの朱乃さんとゼノヴィアに酷い目に遭わされる。
朱乃さんはあんな格好をする癖に、男女関係には煩いのだ。
ゼノヴィアはあれだ、なんとなくだろ。
よく考えもせずに子作りとか言い出すバカだし。
話はそこで終わり、安倍先輩は父親の帰りがすぐに分かる様にこの場を後にし、俺たちはそのままプールで遊ばせてもらった。
所でギャスパーくん、君は吸血鬼なのに水に触れて大丈夫なの？
はぁ、そのデイなんたらってのは流水も平気なんだ。
そういや普通に日光の下歩いてたもんね。
しかし君もハイスペック組なのか。
リアス先輩の眷属って、何気にトップレベルの強さなんじゃないか？
普通に遊んでるけど、この人達って実は凄いメンツなんだよなぁ。
なんでそこでみんなして俺を見る。
俺が一番規格外？
何をおっしゃる、俺なんてちょっと改造されただけの唯の人間だよ？

お前らの様な、存在自体が反則みたいな奴らと一緒にすんな。
だからなんで溜め息吐くんだよ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
そろそろ先輩のお父さんがやって来るそうなので、みんな制服姿に着替えて庭で待つ事になった。
俺は安倍先輩と並んで立っている。
急に空が曇り始めたんだが何故だろう?
暫くすると、門から蹄の音を響かせながら大きな何かがやって来た。
やたらとデカイ黒い馬に跨ったガチムチな身体。
頭には何に使うのかわからない角の付いた兜を被り、マントを風でたなびかせている。
なんと言うか、死ぬ時には一片の悔いも残さなそうな人だった。
「うぬが我が娘と付き合っているという不届き者か?」
いきなり不届き者確定か、なんだこのおっかない人。
馬に跨ったままだから余計でかく見えるな。
「そうですわ、お父さま。彼が私の彼氏、瀬尾一輝くんですわ」
俺がこの人を見上げていると、俺の腕に安倍先輩が絡み付いてきた。

おっきーなー、やーらかいなー！

背後から殺気を感じるけど、どうせ後で痛い目を見るのだ、今は役得を甘受しよう。

「ふむ、中々の闘気を感じる若者よ。よかろう、うぬが安倍家に相応しい婿か否か、このわしが直々に測ってくれようぞ」

そう言い放った途端に、何故か先輩のお父さんの背後に光る稲光。

というかこの人いま『闘気』って言ったよね？

絶対魔物使わないで自分で戦った方が強いよね？

俺の疑問には誰も答えてくれず、庭に引かれた長方形のバトルフィールドに立たされる。

審判は木場がやってくれるようだ。

何時も面倒ごとを引き受けてるな、木場は。

今度何か奢ってやろう。

「わしがまず出すのはこれだ。出てこいッ！」

号令に従い現れたのは、一匹の大きな白いゴリラだった。

身体には無数の傷が刻まれており、如何にも歴戦の猛者といった出で立ちだ。

「なんか強そうですね、あのゴリラ。何か特別な種類なんですか？」

「あれはゴリラではなく雪女……イエティのステファニーですわ。私はその妹のクリス

ティを使役しています」

……は？

今、あのゴリラの事雪女って言った？

「おい、あれを雪女というな。男の子は繊細なんだ、絶対にそんな事言っちゃあいけない」

俺の熱意が伝わった様で、先輩は首を前後に何度も振って頷いてくれる。

それを確認してから、俺は懐から白い石を取り出してフィールドに投げ込む。

するとその石が激しく輝き始め、光の中から機械の様な白い獅子が現れて雄叫びをあげる。

「頼むよ、レオ君」

『グオォォォォンッ!!』

「あれが以前言っていた新種の魔物……？　確かに見た事が無いわね、本当に機械みたい」

「あれは私が使い魔にしたかった獅子じゃないか！　ずるいぞカズキッ！」

リアス先輩が呟き、ゼノヴィアが吼える。

いや、そんな事俺に言われても。

レオ君だって、モグラさんのお許しを得て今回に限り力を貸してくれるだけだよ？

「ええい、その様な虚仮威しに怯むわしではないわッ！　ステファニー、ドラミングからの雪分身だ！」
「ホッキョオオオオオッ！」
先輩のお父さんの指示通り、ステファニーは自分の胸を叩き始める。
それを終えると、今度はフィールドを駆け回りだした。
そしていつの間にか二体、三体とその数を増やしていく。
小猫ちゃん曰く、ドラミングには自身の攻撃力を高める効果があり、雪分身は日本アルプスに住むイエティのみが習得できる高度な秘技なんだそうだ。
詳しいね小猫ちゃん、もしかして魔物バトル見るの好きなのか。
そんな解説に耳を傾けていると、フィールドには大量のステファニーが溢れていた。
相手はなかなかやるぞ、頑張れレオ君！
「レオ君、『ハイパースキャン』だ！」
『グルルッ！』
レオ君の赤い目が光り、赤いライトの様な光りを周囲のステファニーに浴びせていく。
レオ君はその中の一体に反応し、飛び掛かって噛み付く。
しかし流石はゴリラ。

その力は凄まじく、スグに振り払われてしまう。
それでもやはり効果はあるようで、先ほどの分身は次々に消えていった。
「これは……今の光線で、大量の分身から本体を見つけ出して攻撃したのかしら?」
「あのライオンさん、あんな事も出来るんですね」
朱乃さんとアーシアちゃんが話している間にも、戦闘は続く。
ステファニーの猛攻を躱しつつ、爪で引っ掻いたりして攻撃を重ねていく。
「ぬぅ、的確に本体を見抜くとはなかなかやりおるわッ! ステファニー、奥の手の『冷凍撲殺棒』で反撃だ!」
なんかやたらと物騒な名前が出てきた!?
ステファニーは頷くと、近くに置いておいたバッグからある物を取り出す。
それは甘い香りを放ち、美しい曲線を描いた黄色い果実――バナナだった。
そのバナナを放り投げ息を吹き掛けると、バナナは瞬時に凍りつき凶器へと変わる。
てか、その冷凍ブレスで攻撃してこいよ。
ステファニーは冷凍撲殺棒をキャッチし、それを片手にレオ君に襲いかかる。
アホくさいが、あれで殴られたら痛そうだ。
「仕方ない、レオ君! 冷凍撲殺棒を狙って『サークルカッター』だっ!」
流石に傷つけるのはマズい、まずは凶器を何とかするんだ。

俺の指示を受け、レオ君は鬣を高速回転させて、発生させた衝撃波？　みたいなものを発射。
それは冷凍撲殺棒を確実に捉え、真っ二つに切断した。
それを見たステファニーは、二つになったバナナを握り締めながら泣き出してしまった。
「どうやら愛用のバナナを破壊されて、戦意を喪失してしまったようですね。これはもう戦えないでしょう」
小猫ちゃん、本当に解説みたいになってるな。
木場がこちらの勝利を宣言し、先ずは一点先取だ。
レオ君はこちらの勝利を見届けると、光になって何処かへ飛んで行ってしまった。
ありがとねー。
「グヌヌ、わしから一本取るとはやるではないか。だが、次の海の魔物対決では負けん！　プールでの戦いの前に、こちらの魔物を見せてやろう！」
再び稲光が走り、その光の中から巨大な鮫の身体に屈強な健脚を身に付けたモンスターが現れた。
……いや、マジもんのモンスターじゃねぇか！
何？　海ってこんなのがいるの!?

もう二度と海水浴なんて行かない！

俺が怯えていると、そのバケモノは急にパタリと倒れて動かなくなった。

先輩のお父さんも馬から降りて確認し、木場もまた確認の為に近づいていく。

「第二戦、勝者カズキくん！」

……は？

何でも、鮫だから常に泳いでいないと死んでしまうんだそうだ。

あんた本当に由緒正しい魔物使いの当主さまですか!?

あ、でもこれで三戦目をやる必要ないじゃん。

そそくさと帰ろうとすると、三戦目は勝てば3ポイントというバラエティールールを適用された。

抗議したら身体が内側から爆発しそうなので、仕方なく従う。

「最後は互いに魔物の背に乗り、空中決戦を行う。よいな？」

先輩のお父さんが大きな怪鳥に乗りながら言ってくる。

嘴デカいな、丸呑みにされそうだ。

「よくなくても無理矢理そうするんでしょうに……頼むよ、ユニ君」

モグラさんの背中には乗れないので、今回は待機だね。

今度は青い石を近くに放ると、青い身体に白い鬣、そして何より角の代わりにドリル

が付いたこれまた機械っぽいユニコーンが現れる。
『ヒヒィィィィンッ!!』
ユニ君に跨ると、蹄の音を立てながら空を駆け昇って行く。
俺が跨っても角で刺されないし、人懐っこい。
間違いなく本家のユニコーンよりこの子のほうがカッコイイよね！
しかも彼、空を駆け上がる事も出来るんです。
万能だね。
「あらあら、翼も無いのに空を駆ける……本当にメチャクチャですわね」
「カズキさんらしいです」
朱乃さんが何時もの調子で頬に手を当てながら笑っている。
そんでもってアーシアちゃん、きみ時々俺に対して毒吐くよね？
「馬でありながら空を駆けるとは面妖な……だが、その程度では娘をやれんな！」
先輩のお父さんが何かの指示を出すと怪鳥が大きく口を開け、そこから巨大な火炎球を吐き出し始めた。
「ちょっ街中で何てもん出してんだ!?　ユニ君、『ファイヤーウォール』！」
俺の言葉に応えてユニ君のドリルが回転し、周囲にピンク色の壁を展開する。
俺たちに向かってきた火球はその壁に全て阻まれた。

民家に当たったらどうする気だったんだ？

「娘はやらん！　やらんぞぉぉ!!」

「ダメだ、もう見境なくなってる。ユニ君、叩き落としちゃえ!!」

『ブルルッ！』

その後はこちらが一方的に攻撃して、ユニ君に叩き落とされた怪鳥が目を回したので戦闘不能。

俺たちの勝ちとなった。

ユニ君もレオ君と一緒で、試合が終わると光に包まれて飛んで行ってしまった。

モグラさんがシッシッとやっていたが、せっかく協力してくれたんだからあんまり邪険にしちゃダメだよ？

先輩のお父さんは、やり過ぎた事を安倍先輩に怒られていた。

反省して下さい。

「ぬぅ、まさか三本とも取られるとは……見事！　娘との交際を認めよう、婚約の話も無かった事とする」

そのセリフを、地面に正座しながら威厳たっぷりに言えるのは凄いと思います。

取り敢えずこれで依頼完了だ。

報酬は後日という事になっているので、今日の所は解散……ん？

「瀬尾くん、今日はありがとうございました。おかげで婚約は破談となりましたわ」
「よかったですね、俺も役に立てたのならなによりです」
俺がそう言うと、先輩は俺の手を取って両手で握りしめてきた。
「初めて見る魔物を勇敢に操る姿は、その……ちょっと格好良かったですわ。父も貴方の事を気に入ったみたいですし、よかったら今度御食事でも――」
「あらあら、カズキくん？　今日はお肉が安売りしてましたわね、早く買いに行きましょう？」
「そうだぞカズキ、今日は私も手伝う日なんだ。早く家に帰らないとね」
先輩の言葉を遮り、朱乃さんとゼノヴィアが腕を絡めてきた。
あ、折られる？
「どうやら勝ち目はなさそう、ですわね……
何でもありませんわ、お疲れ様でした」
先輩の言葉を聞くと、二人ともそのまま俺を引っ張って行く。
勝ち目って何？
これから俺がやられるお仕置きについてですか？
くそ、そう簡単に殺されてたまるか！
「そ、そうだ！　今日はみんなもうちに来ない？　祝勝会って事で俺の得意料理の中華

をご馳走しよう」
「そう言えばソーナが自慢してたわね、凄い美味しかったって」
「いきましょう、是非」
リアス先輩の発言を聞いて小猫ちゃんが素早く言葉を続ける。
最近小猫ちゃんのキャラがわからなくなってきた。
「そういや匙も言ってたな、ついでに呼んでもいいか？」
イッセーも思い出したかの様に呟く。
おう、呼べ呼べ。
狭くなってもいいならな。
そうしてみんなでワイワイはしゃぎながら帰路へと着いた。
それぞれが材料を持ち寄り、俺が調理する。
みんなが料理漫画的リアクションを取っていると、遅れて匙と会長さんもやってきた。
その時、会長さんからある物が手渡された。
以前御礼にと言っていたお手製のお菓子。
これが俺に悲劇をもたらすのだが……その時の俺はまだ何も知らず、女の子のお手製だとはしゃいでいた。

その悲劇については……語りたくない……

六巻　体育館裏のホーリー

31話

夏休みも終わり、最近は九月に行われる体育祭の準備に忙しくなってきた。
そうじゃなくても、アーシアにプロポーズしてきたディオドラとかいう優男をどうするかで俺はいっぱいいっぱいだ。
そんな時に、以前ゼノヴィアと一緒に聖剣の回収にやってきたイリナがこの学校に転入して来た。
神の死を知り、ミカエルさんに仕える事になって、なんと天使としてここに派遣されたのだという。
白い羽と天使の輪が出てきてビックリした。
あの時はギスギスした別れになってしまったが、ゼノヴィアやアーシアとも無事和解できた様で一安心だ。
アザゼル先生からも説明やら解説があって、ソーナ会長にも挨拶に行く事に。
俺もイリナに付き添って生徒会室まで行ったが、会長は不在。
カズキと一緒に家庭科調理室にいるそうなので、そちらに向かおうとしたら匙を含む

生徒会メンバー全員に止められた。
「と言うか匙、カズキと会長さんを二人きりにしていいのか？」
「確かに複雑ではあるが……あいつは俺たちの為に不可能に挑戦してくれてるんだ、邪魔なんて出来ねぇ」
何でそんな辛そうな顔をしてるんだお前は。
しかしこの学校に天使として転入したのに、生徒会長に挨拶無しはマズいので反対を押し切り調理室に向かい、到着した。
いざドアを開けようとすると何やら声が聞こえてくる。
（もうダメですカズキくん……）
（何言ってるんですか、手首を使ってやらないから疲れるんです。ほら、頑張って）
……ん？
（でももう……いいでしょう？）
（しょうがないですね、じゃあ後ろから――）
え、何これそーいう事ですか？
お楽しみ中？　お楽しみ中なの？
うわ、イリナも顔が真っ赤だ。
てか学校でそんな羨まけしからん事してんじゃねぇ！

……後学の為に見学しよう。
音をたてない様にドアをゆっくりと開け、中を覗き込む。
そこにあった光景は――
ボウルと泡立て器を手にした半泣きのソーナ会長と、腕組みしながら熱血指導しているカズキの姿だった。
「紛らわしい会話してんじゃねぇッ！」
『はい？』
ドアを勢いよく開けながらつい叫んでしまった。
二人して、不思議そうに顔を傾けながらこっちを見ている。
清々しいまでに逆ギレしてしまったが、俺は悪くないと思うんだ。

イリナはソーナ会長に挨拶を済ませ、カズキにも挨拶する。
「という訳で、本日からこの駒王学園に通う事になりました紫藤イリナです！　お久しぶりね、カズキくん♪」
「あ？　知らん、今忙しいから帰れ」
バッサリ斬りすぎじゃないかなカズキくん!?
見ろよ、元気の塊みたいなイリナが一瞬でしぼんだぞ!?

「違う、粉は最後にゴムベラで切る様に混ぜ合わせるんです。事前に振るっておくのを忘れると、ダマになって口の中に残っちゃいますよ」
「それでしたら魔力で……」
「ダメです！　そうやってすぐ魔力に頼ろうとするから上達しないんです、お菓子作りは繊細なんですから自分でやって身体に覚え込ませてください」
「うぅ……カズキくんが厳しいです……」
そんなイリナに目もくれず、カズキは会長にお菓子作りの指導を続ける。
熱心に教えてるなぁ。
この間、カズキは会長さんのクッキー食べてエライ目に遭ってたもんな……。
安倍先輩のお見合い騒動が終わった後の宴会で、カズキは会長さんからクッキーの差し入れを貰った。
モグさんと一緒に一枚食べた後、カズキは残り全部をいきなり口にかっこんだ。
俺が文句を言おうとしたら、匙が俺の肩に手を置いて涙を流しながら黙って首を横に振った。
匙が言うには、ソーナ会長は料理は問題ないが趣味のお菓子作りだけは何故か壊滅的に下手なんだそうだ。
指摘したら会長がショックを受けてしまうし、それを聞きつけたセラフォルーさまが

暴れにやってくるから誰も言えないらしい。
だからいつもは匙が気合で完食しているのだとか。
愛の為せる技か……漢だな、匙。
そんなクッキーを、カズキは牛乳で何とか胃に流し込んだ。
何が起こるのかと身構えたが、カズキはその後もみんなと普通にパーティーを楽しみ、そのままお開きになった。
みんなを見送るカズキを見ながら
『なんだ、そんなに大袈裟に言う事ないじゃないか』
そう思っていた、その時は。
二日後の月曜日、カズキが登校してこなかった。
ゼノヴィアに聞いたらみんなが帰った後、急に謎の腹痛に見舞われたらしい。
カズキはその後一週間学校に来ることはなかった。
ちなみにモグさんはグリゴリの施設で精密検査を受けたそうだ。
ヴァーリの半減の力すら防いだモグさんを仕留めるソーナ会長のお菓子……もういっそ武器として携帯するのもありなんじゃないだろうか。
後で匙に聞いた話だが、カズキは復活するとすぐに生徒会室に乗り込んで、自分で作ってきたお菓子をソーナ会長に食べさせた。

『美味いですか？　そうです、正直今の俺の方が会長さんより美味しい物が作れます。だから会長さん、俺と一緒にお菓子作りの特訓をしましょう。今のままでも『倒れる』くらい美味しい会長のお菓子は、まだまだ進化できるんです。遠慮しないで下さい、というか拒否なんて許しません』

そしてこんな感じで捲し立て、抗議に来たセラフォルー様まで言いくるめて無理矢理指導する方向に持っていったそうだ。

匙はカズキに後光が差して見えたそうだ。

「でも今って体育祭の準備で生徒会も忙しいんじゃないのか？　こんな指導してたら業務に支障が出るんじゃ……」

「そっちのフォローも俺がやってる……後は焼くだけでキリもいいですし、今日はここまでにしましょうか」

「恥ずかしながら、例年よりも順調に進んでいます……私、判子を押すだけしかしてないのに……」

カズキが調理器具を片付け始め、ソーナ会長は肩を落としながら答える。

ありゃりゃ、落ち込んじゃってるな。

「何言ってるんですか、会長さんが事前に用意してくれていたからみんなも動けるし、あれだけスムーズに事が運んでるんですよ。お菓子作りだってドンドン上達してますし、

やっぱり会長さんは凄いです」
「そうでしょうか……ですが、そうですね。カズキくんもそう言ってくれているのですから、私もそれに応えなくては！」
おぉ、ソーナ会長が元気になった。
落としてから上げる……成る程、これがモテるコツなのか。
カズキはこういう事が出来るからモテるのか……実際ソーナ会長ともお似合いに見える。
別にカズキは会長に惚れてるなんて言ってないが、本当のところは分からない。
匙に頑張るように伝えなきゃな。
ほら、イリナも凹んでないで行くぞ。
大丈夫だよ。
今は忙しいからあんなだけど、カズキは優しくていい奴だから。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
しまった、つい会長さんとの特訓が白熱し過ぎて小猫ちゃんにモグラさんを預けるのを忘れていた。
元気のないアーシアちゃんを励ますんだって張り切ってたし、急がなくては。
なんでも最近、アーシアちゃんがストーカー被害にあってるんだとか。

ストーカーって悪魔にもいるんだな、やっぱ人間と大して変わらないじゃん。
ちなみに犯人はこないだ駅のホームでアーシアちゃんにプロポーズしてきたディオドラって人。
映画のチケットやら高価な宝石やら、イッセーの家に大量に送り付けてきて困ってるそうだ。
面倒なのに目を付けられてアーシアちゃんも大変だ、あんまり酷いようなら俺も相談に乗ってあげようかな。
っとオカ研部室に到着だ。
「失礼しま……なんでストーカーさんがここに」
部屋に入ると例のストーカー、ディオドラがリアス先輩と何やらお話中だった。
「いきなりストーカー呼ばわりか、流石礼儀をわきまえてない人間は違うね」
「だろ？　照れるわ」
「褒めてないからね」
うん、知ってる。
あらら、薄っぺらい笑顔に青筋が浮かんでらっしゃる。
あっ小猫ちゃん、モグラさん預かっててね。
「で、どういう状況？」

「状況も把握しないで相手を挑発しないでくれないかな……？」

木場が笑顔を引きつらせながら言ってくる。

や、だってなんか腹立つ顔してたから。

理由にならない？　そうね。

はぁ、遂にプレゼントだけじゃなく御本人まで来ちゃった訳か。

顔はいい癖に必死だな、なんか笑える。

話を聞いていると、ディオドラはどうやらアーシアちゃんのトレードについてリアス先輩と交渉しに来たようだ。

見事に突っぱねられてたけど。

ざまぁ。

「――――わかりました。今日はこれで失礼しますが、僕は諦めません」

いやどう見ても見込みないだろ、諦めろよ。

「アーシア、僕はキミを愛しているよ。この世の全てが僕たちの間を否定しても、僕はそれを乗り越えてみせるよ」

ディオドラはそう言うとアーシアちゃんの手を取り、その甲に口を付けようとする。

だが、小猫ちゃんの所から飛び跳ねたモグラさんに手を引っ掻かれた上に、イッセーに肩を掴まれ阻止される。

いいぞモグラさん、かっこいい！
あ、イッセーもね。
ディオドラは引っ掻かれた手を押さえながら、イッセーの腕を払い退ける。
「触らないでくれないか？　薄汚いドラゴンと獣に触られるのはちょっとね」
……あ？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ディオドラ・アスタロトも面倒な事をしてくれる。
アーシアさんをトレードで手に入れようなんて、何を考えているのか。
リアス部長がトレードの話を断ると、今度はアーシアさんに直接話しかけてきた。
ディオドラが歯の浮くような言葉を並べ立て、アーシアさんの手の甲にキスをしようとしたその時。
モグさんが小猫ちゃんの所から飛び跳ね、ディオドラの手に爪を立ててアーシアさんを庇うように立ち塞がった。
イッセーくんも肩を掴んで、ディオドラを静止させる。
「触らないでくれないか？　薄汚いドラゴンと獣に触られるのはちょっとね」
そんなイッセーくんの腕をディオドラが払い退けてから、笑顔でそんな事を言い放つ。

イッセーくんが憤慨して一触即発の空気を醸し出した時、彼が喋り出した。
「物で女の子にアプローチ……モテない男の典型例だよね」
「……何が言いたいのかな、人間くん？」
ディオドラが声の主、カズキくんに向き直る。
「顔はいいのにその残念な性格のせいでモテないのか、可哀想だなぁディオドラくん？」
カズキくんが皮肉たっぷりに笑うと、今まで浮かべていた笑顔が僅かに曇る。
あぁ、これはもう『エンジン』が掛かっている。
僕では止められない。
「あれれ？　折角頑張って貼り付けてた薄っぺらい笑顔が剥がれかけてるよ？　愛しのアーシアちゃんにそんな顔見せていいの？」
「よくもまぁ口が回るね、君の性格の悪さを表しているようだ」
「俺はそういうの隠そうとしないからな、それでもアーシアちゃんとは仲良しだぞ？　誰かさんと違って」
「君の様な下等な人間と、薄汚いドラゴンが一緒にいたらアーシアの害に――」
言葉を遮るように、パンッという破裂音と共にアーシアさんがディオドラの頬を平手打ちした。
「いい加減にして下さい！　お二人の事、何も知らないのにそんな事言わないでっ……

！」

眼を涙で潤ませながら、しかしはっきりとディオドラを睨みつける。

普段は優しくて手を出した事などないアーシアさんの行動に、僕たちは驚き固まってしまった。

それだけイッセーくんとカズキくんが大切なのだろう。

その後、ディオドラがイッセーくんを倒したら愛に応えてくれなんてアーシアさんにふざけた事を言い出して、イッセーくんが即答。

次のレーティングゲームで決着を付ける事になった。

アザゼル先生によると、試合は5日後になるそうだ。

今回は特例も何もないので、カズキくんはゲームに参加する事はできない。

「俺はリアス先輩の眷属じゃないからゲームには参加できないか。残念だな、そのツラ二度と見なくて良い様にボコボコにしたかったのに」

「……あまり調子に乗らない方がいい。儚い人間の命だ、大事にしたいだろう？」

「ハッ！　まるで三流の小悪党みたいな脅し文句だな、とても名家のお坊ちゃんとは思えない。裏で一体何をやっているかわかんねぇなぁ？」

しかしよくもまぁ次々と挑発の言葉を紡げる物だ。

彼はアーシアさんの事になるとやたらと熱くなる様だ。

ディオドラもつられて素が出かかっている。
それが彼の狙いなのだろうが。
「……全く、物を知らない奴の相手は疲れるね。失礼するよ」
……おや？
ディオドラが急に引き下がった？
まさか本当に裏で何かやっているのか……？
「お前が何をしようがイッセーは負けない、こいつは『やる奴』だからな。イッセーとモグラさんを馬鹿にした事、そして何よりアーシアちゃんに粉かけた事を後悔しやがれ」
「ふん、精々頑張る事だね。じゃあアーシア、またね」
ディオドラはそう言うと、魔法陣を展開して部室を後にした。
カズキくんとイッセーくんが魔法陣のあった所に塩を撒こうとして、部長と副部長に止められていた。
二人ともよっぽどお怒りだったようだ。
もちろん僕も怒りを感じている。
アーシアさんを困らせた事。
親友であるイッセーくんを侮辱した事。
今度のゲームで、カズキくんの分まで分からせてやるさ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

あーくそ、イライラするぅ！

夜になっても怒りが収まらず、ランニングでもして気分を紛らわせようと街を走り回っていた。

アーシアちゃんにアプローチするだけなら構わんがな、節度を持ってやれや！

イッセーだってな、仲間想いの熱い奴なんだよ！

モグラさんを馬鹿にしたのも許せん！

うがぁぁぁ！　また腹立ってキタァ！

もういっそ、あいつブッ飛ばす為だけにリアス先輩の眷属になってもいい！

ちょっとお願いしてみようかなッ！

ランニングがいつの間にかダッシュに変わってしばらくした頃、前方にイッセーを発見。

一緒にいるのは……ヴァーリさんと美猴さん？

あ、向こうもこっちに気付いた。

「なんだ、カズキじゃないか。トレーニングか？」

「俺っちに負けて、リベンジの為に鍛えてんのかい？　殊勝なこった」

走って乱れた呼吸を整えながら返事をする。

「ハァ……ハァ……フゥー。なんで二人してイッセーに絡んでるんですか。あんま俺のパシ……友達を虐めないで下さいよ」
「おいコラ、今なんて言おうとした」
俺のログには何もないな。
「なに、未来のライバルに忠告に来ただけさ」
「どうにもあのディオドラって奴はキナ臭くてねぃ。お前さんも絡まれた……いや絡んだんだっけか？　まぁとにかく気をつけろってこった」
はぁ、親切だね。
てか、テロリストなのにこの街に来てていいの？
あぁ美猴さんの妖術と仙術で誤魔化してんだ。
やっぱ便利だな、仙術。
「まぁ俺が伝えたかったのそれだけだ。帰るぞ、美猴」
「お、そうだ。カズキ、お前さん飯作ってくれよ。こないだ負かした分の料理作ってないだろ？　今からお前さんの家でご馳走してくれよ」
美猴さんは名案のように言ってくる。
ち、覚えてたか。
「今日は家に他の人もいるから無理。どっかの店に入るなら奢りますけど」

「なら噂のラーメン屋にでも寄ってこうぜぃ。ヴァーリも行くだろ？」
「あぁ」
ヴァーリさんは短く答えるが、俺にはわかる。
今ちょっとテンション上がったな。
「んじゃ行きますか、イッセーも来いよ」
「え？　ヴァーリ達と一緒にラーメン食べに行ったなんて、部長に言ったら怒られるんじゃ……」
言わなきゃいい、バレたら知らんが。
尻込むイッセーをむりやり連行し、四人でラーメン屋に向かった。
いつの間にかイライラも消え、久々にヴァーリさん達と食べたラーメンは美味かった。

32話

「で、みんなでラーメン食べて帰ってきたのね……イッセーから聞いてたけど、何やってるの貴方達は」

リアス先輩が呆れ気味に嘆息する。

そんなにマズイかね？

「もう既に朱乃さんからお小言頂いたんで、そろそろ許してくれると嬉しいです……」

まぁそのお小言も、ご飯食べてくるなら事前に連絡入れろって物ですが。

奥さんみたいと言ったら何故か上機嫌に。

今度から困ったらそう言おう。

「まぁ私が煩く言うような事じゃないわよね……所で、カズキくんはどうするの？」

はい？

なんの話かね？

「お、そういや言うの忘れてたわ。カズキ、お前今度リアス達と一緒に冥界に行け」

俺が首を傾げていると、横で脚を組みながら座っていたアザゼルさんが口を挟んできた。

「なんでさ」
「お前さんが前回のレーティングゲームで大暴れした所為だよ。リアス達のインタビューと一緒に、お前の取材もやるんだとさ」
「聞いてないんだけど」
「言ってねぇからな、当然だ」
俺とアザゼルさんが殴り合いを始めるのに、時間はかからなかった。
そんな訳で、再び冥界行きが決定した。
所で取材って何やんの？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
グレモリー眷属として、冥界のテレビ局でインタビューを受ける事になった。
カズキも別口の取材を受けさせられるとかで、ぼやきながらも一緒に冥界にやって来ている。
「もうテレビ局まで来ちまったんだから、いい加減諦めろよ」
「お前らはインタビューって解ってるから良いけどな、俺は何やるのかすら聞いてないんだぞ？　しかも斡旋がセラフォルーさんとか、嫌な予感しかしねぇ……」
「あらあら大変。ゼノヴィアちゃん、私たちで励ましてあげましょうか？」
「そうだな、私と副部長でご奉仕してやろう。きっと元気が出るぞ、色々と」

「そんな怪しいご奉仕要らん。元気じゃなくて内臓とか出そうじゃん」
カズキはさっきからこの調子で、朱乃さんやゼノヴィアに何を言われても適当な反応を返すばかり。
何気に凄い羨ましい事言われてないか？
そんな腑抜け状態のまま、迎えに来たテレビ局のスタッフに連行されて行った。
大丈夫かな、あのままで。
あいつ、コカビエルぶちのめしてからマジで変わったな。
それが良いのか悪いのか判らないが、のんびりというかマイペースなのがあいつの素なのだろう。
ピリピリしているよりずっといい。
スタッフの案内に従って歩いていると、サイラオーグさんに会った。
どうやら向こうもインタビューがあるようで、これから収録だそうだ。
しかし側に控えてた金髪ポニーテールの美人さん、サイラオーグさんの《女王》さんは美人だな。
見惚れてたら部長とアーシアにほっぺつねられたけど。
「そういえばカズキが見当たらんな、今日ここに来ると聞いていたのだが」
「彼は別口の取材だそうよ。前回のレーティングゲームで大活躍だったもの、当然よね

……人間としては異例だけど」

部長が肩を竦めながら言うと、サイラオーグさんは身体を揺らしながら笑った。

しかしこの人、ホントにカズキがお気に入りだな。

「そうだリアス。お前、カズキを眷属にしたいのなら急いだ方がいいぞ？　お前たちのゲームで彼を見た他の連中が、悪魔や天使に転生させようと手を回しているそうだ。サーゼクス様や堕天使の総督殿に、取り次ぎの連絡が多く来ているそうだ」

ま、俺もその一人だが。

サイラオーグさんはそんな衝撃的な事をサラッと言い放つ。

そんな事になってんのか!?

しかし部長は困った様に笑みを浮かべるだけだ。

部長は以前、カズキが自分から言わない限りはもう勧誘しないと言っていた。

仲間になって欲しいのかもしれないが、内心複雑なんだろう。

カズキは……どうするんだろうか？

以前は人間の身でコカビエルを倒す事に執着していたが、今は特にわだかまりもないだろう。

悪魔になるのか、それとも天使になるのか、それとも人間である事にこだわり続けるのか。

どうなろうとカズキはカズキだ、付き合い方を変えるわけじゃないけどな。
「カズキだけじゃなく、俺はお前にも期待しているぞ？　お前とは理屈なしのパワー勝負がしたいものだ」
サイラオーグさんは俺の肩に手を置いた後、部長にじゃあなと言ってから去っていった。
……凄いな。
理屈は判らないが、肩に軽く置かれただけの手が異様に重く、大きく感じた。
若手最強のサイラオーグさん。
俺、あの人と殴り合いをなんて出来るのか？
……いや、やってやる！
部長の為にも、そして俺の夢の為にももうゲームには負けられない。
やってやる、やってやるさ！
そうこうしているとスタジオに到着し、打ち合わせの後に収録が開始された。
基本は部長が素敵スマイルを振り撒き、高貴な雰囲気を醸し出しながら質問に答えてくれたので助かったよ。
朱乃さんに質問がいくと男性の声援があがり、木場に質問がいくと女性の黄色い歓声があがる。

ケツ、イケメンはいいのう！
ちなみに俺は『乳龍帝』、『おっぱいドラゴン』として子どもに大人気だった。
これはこれでめちゃくちゃ嬉しいんだが、俺も女性の歓声が欲しいです！
ていうか、本当に『乳龍帝』って有名になってたんだな。
ドライグがめっちゃ泣いてるけど。
いや酷い奴とか言わないでくれよ、別に自分でそう名乗った訳じゃないぞ？
ここでの取材が終わると、俺だけ別のスタジオで収録を行った。
疲れたけど楽しかったな。
やっぱ子どもはどこでも元気一杯だ。
あんなに楽しそうに俺に話し掛けてくれると、俺まで楽しくなっちまうな。
こっちの収録も終わり楽屋に戻ると、みんなして壁にもたれたり机に突っ伏していたり。
みんなそれぞれ緊張で疲れた様だ、俺もだけどな。
部長にどんな事をしたのか聞かれたが、今はまだ内緒だ。
スタッフさんにも放送まで言わない様に頼まれたし、俺もみんなを驚かせたい。
そんな話をしながら休憩していると、楽屋に来客が。
以前俺たちが戦ったライザーの妹、レイヴェルが差し入れのケーキを持って訪ねて来

てくれた。
木場に聖魔剣のナイフを出して貰ってケーキを食べていると、部屋に置かれていたテレビを誰かがつける。
するとそこから、なにやら聞き慣れた声が聞こえてきた。
『――はい、じゃあここでこの【なんだかよく分からないマダラ色のお肉】と、【人間が食べたら危なそうな野菜】をフライパンで炒めていきます』
全員が一斉にテレビの画面を見ると、モグさんを頭に乗せながら気怠げに鍋を振るっているカズキの姿が。
何やってんのあいつ!?
『……え、そういう事言うなって？　知るか、あんたらがこんな所に俺を引きずり出したのが悪い。そもそも名前がわからんし……カンペ？　日本語で書けよ、人間に冥界の文字なんぞ読めるか』
カズキが喋る度に会場が沸いている。
なんかすげぇウケてるよ……。
あいつ、周りが悪魔だらけでよくいつも通りに出来るな……いや、小さい頃は堕天使だらけだったんだから今更か。
『はい、無駄口叩いてる間に出来ました。これが冥界のよく分からない食材で作った【な

んちゃってホイコーロー】です。味は知りません、試食する勇気がないので……やだよ、あんたが食えばいいじゃん。こんだけ会話してたら画面に映るのなんか今更だろ』

カズキは傍若無人な態度でスタッフの一人を無理矢理連れてきて、自分の作った料理を口に突っ込む。

スタッフさんは料理の熱さに悶えながら、口の中の物を咀嚼し飲み込む。

次の瞬間、そのスタッフは美味い美味いと叫びながら皿に残った料理をかっ込み始めた。

カズキはそれを見てから会場のお客さん達にも小皿に盛った料理を配っていき、それを食べた人達からも歓声があがる。

『美味しかったみたいで良かったです。では失礼しますね、モグラさんもお辞儀して』

『キュイ』

モグさんが頭の上でお辞儀をすると、観客席の方から女の子の声が響いてくる。

モテモテだな、モグさん。

カズキも頭を軽く下げてから画面から消えていった。

「何というか……相変わらずムチャクチャですわね、彼」

レイヴェルのポツリと呟いた言葉が、楽屋にいるみんなの心に重く響いた気がした。

ごめん、俺の友達がフリーダム過ぎてごめん。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「待って下さい、次回も是非出演をっ！」

「嫌ですよ、ここまで来るのメンドイし」

よく分からない取材が終わった後。

生放送で料理をする筈の先生が倒れてしまい、別スタジオで収録のあったセラフォルーさんのお願い（脅迫）によりモグラさんと出演する事に。

普通に話していただけなのに何故か会場は沸き、よく分からない食材で作った即興料理も好評だったようだ。

帰ろうとする俺を、ディレクターみたいな人が引き止めようとさっきから騒いでいるが、まぁ人間が物珍しいだけなのだろう。

そもそも前に出たパーティーじゃ普通の料理が並んでたのに、なんで今日のはあんな食材ばかりなのだ。

調味料は大体俺たちが使ってる物と一緒だったから何とかなったが……あぁ、もしかしたらこれが会長さんがお菓子を上手く作れない理由か？

いや、料理は普通に出来てたからそれはないか。

俺はそんな事を考えながら、リアス先輩たちの楽屋に向かっていた。

「お、そこか……って、あれはいつぞやのお嬢さん？」

事前に聞かされていた楽屋に近づくと、ケーキを頬張るイッセーと金髪を縦ロールにしている奇抜な美少女の姿が。

名前なんだっけ？

「カズキ、お前なんでテレビで料理作ってんだよ」

「いやセラフォルーさんに脅されて……で、お前が食ってるのは何？」

イッセーが呆れる様な口調で話しかけてきて、縦ロールちゃんはイッセーの陰に隠れてしまう。

そういや前に泣かせちゃったままだっけ。

「レイヴェルが作ってきてくれたんだよ。ほら、お前も一口食ってみろよ。美味いぞ」

「ナイフで刺して渡すなよ危ない……ん、本当に美味いな。こりゃ凄い」

最近会長さんの失敗作を匙と一緒に食べてたから、余計に美味く感じる。

チョコケーキだが、男でも食べ易いように甘さを控えているようだ。

これ、イッセーの為に焼いてきたんじゃね？

俺が食べたらマズかったかな。

「おぉ、滅多に人を褒めないカズキが素直に褒めた！　凄いなレイヴェルのケーキ」

「あ、貴方に褒められても嬉しくありませんが!?　今日は素直に褒められてあげますわッ！」

腰に手を当てながらふんぞり返るレイヴェルちゃん。
顔真っ赤だし、声が裏返っちゃってるぞ。
俺とイッセーがお礼を言うと、試合を頑張ってと伝えてから帰っていった。
しかしイッセーはやけにモテるな、真っ直ぐな所がいいのだろうか？
羨ましい、妬ましい。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ストーカーとのレーティングゲーム前日。
イッセーと小猫ちゃんに頼み込まれたので、訓練に付き合い今日は兵藤家にお世話になる事になった。
話には聞いていたけど、本当にデカいなこの家。
地下にプールと大浴場、トレーニングルームまであるとは驚きを通り越して呆れてしまった。
まぁ折角あるのだから利用させてもらおう。
二人を目一杯シゴいてから風呂を借り、案内された部屋に向かおうとすると、未だに剣を振り回しながら訓練を続けるゼノヴィアの姿が。
「まだやってたのか、そろそろ休まないと明日に響くぞ？」
「む、カズキか。イッセーと小猫にあれだけやっていたお前に言われたくはないが……

そうだな、そろそろ止めておこう」
　なんか含みのある言い方だな、おい。
　アーシアちゃんに頼めば大抵は治るんだからいいんだよ、あの位で。
「……なぁカズキ、私はどうすれば強くなれる？」
「へ？　お前今でも十分強いじゃん。これ以上強くなると、俺が泣かされるからそんな事考えないで欲しいんだけど」
「茶化すな、マジメに聞いてるんだ……私は、木場よりも弱い。本来の使い手である私よりもデュランダルを使いこなし、頭も切れる。今の私では、彼に勝てない」
　ゼノヴィアはそう言って自分の掌を見つめ、キツく握り込んだ。
　なんか本気で凹んでんな……多分こないだの俺の所為なんだろうけど。
「それに今度の戦いではアーシアの人生が掛かっている。もう負ける訳には……」
「なんか勘違いしてるみたいだけど、お前は本当に強いぞ。なんでもかんでも全部やろうとするから上手くいかないんだよ、今のお前は考え過ぎてるだけなんだ」
「しかし……」
「忘れたのか？　お前はバカなんだよ。バカは難しい事を考えないで、自分に出来ることをひたすらにやればいい。なんか失敗したら、俺もフォローしてやるよ」
　お前なら出来るさ、いつも俺の事ボコボコにしてるんだし。

俺がそう言ってゼノヴィアの頭を撫でると、キョトンとしてから急に笑い出した。
「……人が落ち込んでいるのに酷い事を言うな、お前は。まぁ、カズキらしいが」
ほっとけ。
「でも、そうだな……私は、私に出来ることを全力でやる事にしよう。ありがとうカズキ、ちょっと吹っ切れた気がする」
「そっか、でも吹っ切れたなんて大概は勘違いだから気をつけ――」
俺の言葉が途中で途切れる。
口が塞がってしまったからだ。
物理的に。
「ふふ、相談に乗ってくれたお礼だよ。迷惑だったかな？」
「いや、その……ご馳走様です？」
何言ってんだ俺。
「じゃあ私もシャワーを浴びたら部屋に戻るよ、おやすみカズキ」
ゼノヴィアはそう言うと、トレーニングルームから出て行ってしまう。
俺は座ったまま動けない。
俺、女だったら惚れてたかもしれない。
あいつなんであんなにイケメンなの？

３３話

夜が明けて、今日は決戦当日。
ゼノヴィアはあれから何も言ってこない。
本当に単なるお礼のつもりだったのか？
そういや前も胸を揉んでいいとか言い出した事が……あ～もう訳分からん。
乙女か、俺は。
「そんでこっちで観戦か……俺ってば場違いじゃね？」
「気にすんな、今更だ」
今日はイッセー達は部室から直接試合会場に向かうそうなので、今日はアザゼルさんと二人で冥界入りだ。
アザゼルさんに誘われてここまで来たが、何やら偉そうな連中ばっかりいるんだけど。
ここってＶＩＰ席って奴なのでは？
「よぉ帝釈天。カズキの奴、連れてきてやったぜ？」
アザゼルさんは、髪を五分刈りにしてアロハシャツを着たやけにファンキーな人に話

し掛ける。
　この人も偉い人か、やけにはっちゃけた恰好だな。
「お、こないだ爆走してたガキじゃねぇか！　ここに来やがったのか」
「えっと……？」
「なんだよアザゼル、頼んだのにちゃんと伝えてくれなかったのか？　俺様は帝釈天、素敵で無敵な神様だＺＥ！」
　帝釈天さんは、親指と小指だけ伸ばしたポーズの手をこちらに突きつけながら自己紹介してくれた。
　なにこれラッパーさんですか？
　うっわぁ……絡みずれぇ……。
　取り敢えず挨拶はちゃんとしておいた。
　アザゼルさんの紹介みたいだし、挨拶は大事だからね。
「おぉ、何時ぞやの小僧か。元気にしとったか？」
　こないだの廊下で話したお爺さんにも話しかけられた。
　爺さん、やっぱあんたもお偉いさんだったのか。
　例の美人さんも一緒にいる。
「どうも、ご無沙汰してます。そういえばお名前聞いてなかったですね？」

「硬いのぅ、もっと軽くて良いぞ？　儂はオーディン、ただの田舎のジジィじゃよ」
ただのジジィがこんなトコにいる訳ねぇだろ。
なんかこの人、アザゼルさんと同種の面倒くささを感じるぞ。
「おら、あんたらみたいな規格外が一辺に話し掛けたらこいつも混乱するだろうが」
「おぉ、アザゼルさんが頼もしい。伊達にお偉いさんやってない」
「そこら辺に捨てて帰るぞテメェ」
しまった、口に出てた。
それを聞いてた帝釈天さんとオーディンさんが爆笑してるから、まぁいいか。
「で、どっちが勝つと思うよ？」
帝釈天さんがソファーに深く腰掛け、脚を組みながら尋ねてきた。
「俺はストーカーの戦闘見てないから何とも。リアス先輩たちに勝って欲しいですけどね」
俺が答えると、何故か二人して笑い出した。
なんか変な事言ったかね？
「周りが悪魔だらけのこの場で貴族の小僧をストーカー呼ばわりか、肝が座っとるのかただのバカか……」
オーディンさんが髭を摩りながら楽しそうに言ってくる。

そういやみんないいトコのお坊ちゃんお嬢ちゃんだっけ、忘れてたわ。
「あ、ちなみにバカの方だぜ？」
「ケンカ売ってんなら買うぞコラ」
アザゼルさんと互いに襟首を掴んで睨み合っていると、ドアがけたたましい音と共に蹴破られた。
何あの人たち、ＳＰには見えないけど。
俺がボケっとしていると、そこからなだれ込んで来た連中と此方の護衛さんが急にドンパチし始めた。
うぉ、こっちにも流れ弾飛んできた!?
「うーむ、どうやらテロリストの襲撃のようじゃのぅ……こりゃグレモリーの嬢ちゃん達も何かされとるかもしれんな。どれ、このジジィが救援に行ってやるかね……お前さんも来るか？」
こんなドンパチの現場にいて余裕ですねオーディンさん。
何？　あいつらまた襲われてんの？
どうせこっちは強い人集まってんだし、俺もそっちに行った方がいいかな。
俺が頷くと、オーディンさんの左目が怪しく輝き始める。
「まてジィさん！　カズキ、これも持ってけ！」

アザゼルさんがこっちに何かの袋を投げ渡してきた。
中身を見ると、通信機みたいな物が八個入っていた。
俺がそれを受け取ったのを確認すると、オーディンさんは魔法陣を何やら弄って俺も一緒に転移した。
あ、護衛の美人さん置いて来ちゃったけどいいのかな？

転移した先が、なんか凄い事になってる。
神殿みたいな建物の前に出たのはいいが、見渡す限り敵だらけなんですけど。
お、みんな発見。
「オーディンさん、急ぎま……っていねぇ!?」
横に居たはずのオーディンさんが何時の間にか消えている。
焦って辺りを見渡すと、朱乃さんのスカートをめくってパンツを見ていた。
それを確認した途端、俺はそこまでダッシュしてオーディンさんの頭を全力ではたいていた。
「堂々とセクハラしてんじゃねぇ！」
「ぐぉ!?　お、お主、主神の頭をはたくとはトンデモない奴じゃのぅ」

大して痛くもないくせに、頭を摩りながらこちらに文句を言ってくる。
「やかましい！　よりによって朱乃さんにしやがってッ！」
俺が後で説教されるだろうが！
「カズキくん!?　助けに来てくれたの？」
「俺とセクハラジジィだけですけどね」
スカートを直しながら聞いてくる朱乃さんに、ぞんざいに答える。
二人だけとか、どんだけ貧相な援軍だよ。
まぁオーディンさんは強いんだろうから問題ないけど。
敵さんを牽制しながら簡単に説明して貰うと、どうやらあのストーカーはテロリストとグルだった様だ。
で、現在はアーシアちゃんを人質に神殿の奥に引っ込んだと。
「どれ、ここはこのジジィに任せて行ってこい。年寄りもたまには運動せんとのぅ。小僧、ちょっと付き合え」
「いいですよ、セクハラオヤジだけじゃ心配ですから。みんな、悪いけどアーシアちゃんを頼む」
オーディンさんはそう言いながらイッセー達の前に立ち、俺もアザゼルさんから預かった通信機の入った袋をリアス先輩に渡して、オーディンさんの隣に立つ。

リアス先輩は俺たちにお礼を言ってから、みんなを連れて神殿まで走っていった。
「お主、仮にも主神にセクハラオヤジはないじゃろう。そんなにあの娘が大事か？」
「そりゃ朱乃さんは大切だけど、セクハラを放置してたら俺の命が危険に晒される」
美人の目が笑ってない笑顔って怖いんだぞ。
「まぁええわい。お前さんも早く向こうに行きたいじゃろ？　ちと張り切ってやってやるわ――『グングニル』」
オーディンさんが手元に槍を出現させて、それを敵が固まってる所目掛けて突き出す。
次の瞬間、槍から光が放たれ敵の一団が纏めて吹っ飛んだ。
……おい、なんだその反則ビーム。
俺の『胸からドーン』の何倍強いんだよ。
もうこの人に逆らうのやめよ、物理的に消される。
「ほれ、お前さんも手伝わんか。なんの為に残ったんじゃ」
おっといかん。
さっさとこいつら片付けて、俺もアーシアちゃんの救出に向かわねば！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
テロリスト共をある程度掃除してから、ファーブニルが宿る宝玉の反応にしたがって

飛んでいくと、そこには黒いワンピースを着た小さな少女が座っていた。
「アザゼル、久しい」
「前は老人の姿だったが今は美少女かよ。いったい何考えてんだ、オーフィス?」
オーフィス。
『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』、『禍の団』のトップがこいつだ。
どんなに姿を変えても、こいつの不気味で言い様のないオーラは間違えようがない。
「見学。ヴァーリと美猴の弟と、もう一つ」
カズキを?
いったい何のためにそんな事を。
それに『もう一つ』ってのは……?
「あの無限の龍神が、わざわざ一人の人間を観察する為にお出ましか。毎度驚かせてくれるな、あの男」
俺が悩んでいると、一体の巨大なドラゴンが羽ばたきながら舞い降りてきた。
元龍王、タンニーンか。
「世界に興味を示さなかった貴様が、今更何を望む?」
タンニーンがその巨大な瞳で睨みつけると、オーフィスはなんでもない様にこちらを見つめて答えた。

「故郷の次元の狭間に戻り、静寂を得たい」
っ！　ナルホド、な。
ようやくわかった。
お前が『禍の団』に協力している理由。
「グレートレッド。次元の狭間にいるあいつをどうにかするのを条件に、あいつらに協力したのか」
俺の質問に、オーフィスは黙って頷いた。
だが、あいつらにどうこう出来る存在じゃ……そうか、ヴァーリ。
お前がそっちに行った理由は、これか。
そんでもってオーフィスが見学来た『もう一つ』ってのもそれか。
マズイな、それが来る様な何かがこれから起こるってのか？
面倒な事になりそうだ……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ゼノヴィアも木場もスゲェ！
カズキから受け取った通信機でアザゼル先生の説明を受けた俺たちは、アーシアを人質に取られディオドラの提案した
『一度戦った駒はディオドラの所までは使うのは禁止』

というルールでの戦闘を行う事になった。
初めは《戦車》二名と《兵士》八名の合わせて十人と戦う事になり、ゼノヴィアが《戦車》、俺とギャスパー、小猫ちゃんが残りの《兵士》の相手をする事に。
「カズキに言われた、私はバカだから難しく考えるなと。それなら私はデュランダルを抑えようとせずに、むしろその破壊力を突き詰めていく！」
ゼノヴィアは自身の持つデュランダルと、事前に渡しておいたアスカロンを高く掲げながら言葉を続ける。
「私はアーシアを失いたくないッ！　デュランダル、アスカロン！　私の親友を助ける為、私の想いに応えてくれッ!!」
ゼノヴィアはそう言うと、二本の聖剣のパワーを解放して敵を瞬殺。
残りは俺の『乳翻訳』とギャスパーの神器で相手を翻弄して、小猫ちゃんがトドメを刺す連携で難なく突破。
次に出てきたのは《女王》と《僧侶》二名の三人組。
残りの《騎士》二名は木場に任せ、こちらは部長と朱乃さんの『二大お姉様』コンビで迎え撃つ。
序盤から圧倒していたが、小猫ちゃんの
「カズキ先輩からご褒美あるかも」

の一言により、朱乃さんの雷光が輝きを一気に増して敵を三人纏めて丸焦げにした。
キラキラした笑顔で戻ってきた朱乃さんを見て、こんな時だがカズキが爆発すればいいなと少し思った。
最後は《騎士》なんだけど……なんとそこにはイカれた神父、フリード・ゼルセンの姿が!?
フリードは『禍の団』に拾われて改造されたらしく、異形の化け物になっていた。
ディオドラの《騎士》も、コイツが食べてしまったそうだ。
「俺ちゃんが力を望んだら、こんな素敵面白い身体にされちまったのよ！　カズキとかいうお前らのお仲間と一緒よん？　そのデータが元に使われてるんだとさ！」
「君みたいな下衆と、僕たちの仲間を一緒にするな」
キメラとなり力を増したフリードだったが、以前とは比較にならない程鍛え上げた木場の前にあえなく瞬殺。
文字通り細切れになってしまった。
こいつとは何度も敵として相対してきたが、最後は呆気なく終わってしまったな……。
こいつも、ある意味では被害者だったのかもしれない。
戦闘前、フリードはペラペラと色々な事を話してきた。

ディオドラの目的や、今までしてきた事。
そして、アーシアとディオドラの出会いの真実。
ディオドラ、あいつだけは絶対に許さない！
二度とアーシアに近付けないようにぶん殴ってやるッ!!
俺たちは気合を改めて入れ直し突き進んでいきようやく今、最後の部屋に辿り着いた。
そこは何かの機械や宝玉が壁に埋め込まれ、何かの魔法陣の様に配置されている異様な部屋だった。
しかし何よりも異様だったのは――――。
「だ、大丈夫ですか……？」
「くっそ、ドリルで削ってもビクともしねぇ。なにこれ、カッチン鋼で出来てるの？」
機械に貼り付けになっているアーシアの枷を外そうと、高速回転するドリルを押し付けているカズキとそれを心配そうに見つめるアーシア。
そして……。
「くそッー　ただの土の筈なのに出られない!?　オイッ、僕に一体何をした!!」
頭だけ残して身体が地面に埋まり、カズキに向かって騒ぎ立てているディオドラの姿だった。

……何がどうしてそうなった!?

34話

う〜ん、どうしよう。
何しても外れないぞこの枷、どうなってんだ?
「ゴメンねアーシアちゃん、もうちょい我慢しててね?」
「いえ、そんなに気にしないで下さい。私なら大丈夫ですから」
アーシアちゃんは笑顔でそう言ってくれるが、この体制のままだとやっぱりキツイだろうし……さて、どうしたものか。
「おい貴様っ! いい加減ここから出せ!」
俺が悩んでいると、下の方からギャーギャー喧しい声が響いてくる。
「うっさい、大人しく埋まってろ」
「ぐぼッ!?」
顔に蹴りをくれてやると、気絶するので少しの間だけ静かになる。
さっきからこの繰り返しだ、いい加減学習して静かにしていて欲しいものだ。
「カズキ!?」
声に反応して振り返ると、そこにはイッセーやみんなの姿が。

「おぉみんな、ちょうど良かった。頼みたい事があったんだ」
　枷を外すためみんなで四苦八苦している間に、リアス先輩が質問してくる。
「ところで、何でカズキくんが私たちより先にここにいたの？」
「あぁ、オーディンさんが張り切ってくれたおかげで表の連中はソッコーで片付きまして。モグラさんがみんな戦ってるっていうから、敵さんがそっちに集中してる間に地下から穴掘ってここまで来ました」
　おかげで最短距離でここまで来れた。
「加勢しようとしなかったんですか？」
「や、だって君らめっちゃ強いんだから俺が助ける必要ないじゃん？」
　ギャスパーくんに首を傾げながらあざとく聞かれたので即答する。
　なにより、アーシアちゃんの確保が最優先だしね？
「で、ディオドラ……いや、このクズは何でこんな事になっているんだ？　切っていいのか、コレ」
　ゼノヴィアはそう言いながら、手に持ったデュランダルでストーカーの頬をペチペチと叩いている。
　お前も段々と悪魔っぽくなってきたな、アーシアちゃんが危険な目にあってキレてるのはわかるが。

「もうちょい待ってろ、聞く事あるかもしれないし」
いじめるのは構わないけど。
小さな聖魔剣を作り出して、枷を削ろうとしながら木場も話し掛けてくる。
「よく簡単に捕縛出来たね？　相当パワーアップしてるって聞いてたのに」
「おぉ、やたらと攻撃が凄かった。なんか『蛇』を飲んで力がうんたらってペラペラ喋ってきたからさ、距離詰めてからそれを吐き出すまでひたすらに腹を殴り続けた」
こう、何度も何度も。
腹を殴るジェスチャーを交えながら言うと、みんなしてお腹を押さえる。
「エグいです、先輩……」
「だって他に方法思いつかなかったし。その後は俺が掘った穴にコイツを突っ込んで、モグラさんの不思議パワーの宿った土で押し固めた」
小猫ちゃんに至っては猫耳と尻尾が垂れてしまった。
やっぱかわいいな、猫耳。
「で、結局『コレ』はどうしますの？　何かするのなら手伝いますわよ？」
「目を輝かせながら言わんで下さい朱乃さん……っと、ブーストかかったリアス先輩でもダメか」
流石に手詰まりだ。

やっぱ、このストーカーを起こして聞くしかないかな。
「朱乃さん、こいつに水ぶっかけてくれます？」
「お安い御用ですわ♪」
朱乃さんが指をチョチョイと振ると魔法陣が現れ、そこから溢れてきた水が降りかかり、ストーカーは咳き込みながら目を覚ます。
「ぐぼっ!?　ゲボッ、ゴハッ！　な、何だ一体!?」
「おぅ、起きたか。捕まってるのに寝るとは、イイトコの坊ちゃんの癖して神経図太いな」
「き、貴様が気絶させたんじゃないか！」
「ンなこたぁ忘れた。それよりもアーシアちゃんの枷、外し方教えろ」
やたらと騒いだ後、ストーカーは俺の質問を聞いてニンマリと嫌らしい笑みを浮かべる。
「ふん、誰が教えるか。そのまま悩み続けて、みんな纏めて無様に死ねばいいッ！」
「なるほど、このままだとみんなが死ぬ様な何かが起こるのか。んでもってこんだけ自信満々って事は、外す方法はこいつも知らないな。教えてくれてドーモ」
俺がそう言うと、ストーカーはまた喚き出した。
煩いのでまた黙らせようかと思っていると、イッセーが真剣な眼をしながら声を掛け

てきた。
「なぁカズキ、ちょっとやってみたい事があるんだけど……」
「お、何かとっておきがあるのか。やるなイッセー、何でもいいからやってみてくれ」
俺の言葉にイッセーは力強く頷き、禁手化して赤い鎧に身を包むとアーシアちゃんの枷にそっと触れる。
「アーシア、先に謝っておく。ゴメンね！」
「え？」
イッセーの言葉にアーシアちゃんは首を傾げた。
何で謝って……おい、まさか。
イッセーの鎧に散りばめられた宝玉が力強く輝き、全ての力が枷に触れている手に流れ込んでいく。
その輝きはどんどんと増し、それにつれて枷にヒビが入っていく。
「高まれ、俺の煩悩ッ！　――『洋服破壊（ドレス・ブレイク）』ッ！」
イッセーが気合を入れて叫ぶと、アーシアちゃんを拘束していた枷は軽快な音と共に砕け散った。
……アーシアちゃんの身に着けている衣服と共に。
「いやっ！」

アーシアちゃんは小さな悲鳴と共にその場にしゃがみ込んでしまい、見兼ねた朱乃さんがすぐに魔力で服を着せてあげていた。
イッセーの『洋服破壊』で、アーシアちゃんに密着していた枷を含めて丸裸したって事？
……なんだこれ。
方法が酷すぎるけど、結果としてアーシアちゃんの拘束は解いた訳だし……なんか注意しずらい。
ほら、ドライグ君泣いてるじゃないか。
「ば、馬鹿な!?　あれは『赤龍帝の籠手』よりも上位の神滅具『絶霧（ディメンション・ロスト）』の所有者が作り出した固有結界だぞ!?　あんな方法で破れるはずがないッ!!」
何やらストーカーが驚いてるな。
そんなに凄いんだ、イッセーのスケベ技。
てかなんでそんな説明口調なのよ、本当に三下の役がお上手ですなぁ。
「出来たんだから仕方ないだろ。知らないのか？　バカに限界はないんだよ」
「お前さ、やっぱ俺のこと馬鹿にしてるだろ？」
「何いまさら言ってんの？」
イッセーがアーシアちゃんを抱き締めながらこちらを睨んでくるが、適当に相槌を

打っておく。
ゼノヴィアもイッセーを弾き飛ばしてから、アーシアちゃんに抱きついて喜んでいる。
ストーカーはこれ以上喋らせると煩いので、適当な布を猿轡代わりに口に巻き付けてからストーカーの前に座って顔を覗き込む。
「さて、もうお前に用は無いし……取り敢えず、これ以上悪さ出来ない様に去勢しとくか。ゼノヴィアか木場、ちょん切っちゃえ」
「嫌だ、聖剣が汚れる。首をはねるならやらせて貰うが」
「僕もそれはちょっと……一応現魔王の血筋だし、殺すと部長やサーゼクス様のご迷惑になるかもしれない。このまま引き渡すのが得策かな、気持ちは分かるけどね」
どちらにも断られてしまった。
二度とアーシアちゃんに迷惑の掛からない良い案だと思ったのに。
一先ず地面からストーカーを引きずり出し、モグラさんの不思議パワーの宿った石で後手に拘束する。
まぁ確かに二人の迷惑になるのは……いや、別にいいんじゃね？
俺ってあの兄妹にいつも迷惑掛けられてるんだから、こんくらい許されるよね。
二人はやりたくないみたいだし、俺がモグラさんのドリルで潰そう。

「よし、やるか」
「やるなっていってるでしょう！」
俺がモグラさんを装備してドリルをキュインキュイン言わせながらストーカーに近付くと、スパーンと小気味の良い音と共にリアス先輩にハリセンで頭を叩かれた。
前にアザゼルさんも叩いてたけど、どっから出したのそれ？
地味に痛い。
その光景を見てみんなが笑い、アーシアちゃんもお祈りをしてからイッセーに駆け寄る。
さて、アーシアちゃんの救出も無事に済んだしさっさと……っ!?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「アーシアちゃんッ！」
カズキくんの声と共に、強烈な光が僕たちを襲った。
目を細めながら見ると、アーシアさんが光の柱に包まれている。
その光が消え去ると――。
「……アーシア？」
イッセーくんの声が妙に響いた。
そこにいた筈のアーシアさんの姿はなく、そこに向けて伸ばしていたカズキくんの右

腕の肘から先がなくなっていた。
一体、何が起こって……？
「木場、炎の剣を出してくれ！　早くッ！」
「つでも……いや、分かった！」
カズキくんは呆けている僕に指示を飛ばす。
一瞬躊躇したが、あの出血はマズい！
僕は即座に炎の聖魔剣を作り出し、傷口に当てる。
「ぐぅっがぁぁッ！　」
肉の焼ける音と臭いが辺りに広がり、カズキくんは腕の焼ける痛みで顔を歪め、苦悶の声をあげた。
「フー、フシュー……ありがとう、助かった。けど悪い、少し休ませてくれ」
痛みに歯を食いしばり、歯の間から呼吸音が洩れる。
カズキくんはお礼を言うと、その場に倒れこんでしまった。
朱乃さんが慌てて駆け寄り魔力を送り込んでいるが、やはりアーシアさんのようにはいかない。
「ふむ、気紛れの攻撃だったが思わぬ拾い物だ。厄介と忠告されていた男の片腕を奪えるとは」

声のした方へ視線を送ると、軽鎧を身につけた男性が宙に浮いていた。
……なんだ、この妙なオーラの質は。
まさか、これが『蛇』の魔力か？
「お初にお目にかかる、私の名はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王、ベルゼブブの血を引く正統なる後継者だ」
――旧ベルゼブブか!?
アザゼル先生のおっしゃっていた今回の騒動の首謀者、わざわざここまで出張ってきたのか……。
僕たちが身構えていると、ディオドラがシャルバの元に駆け寄った。
しまった、突然の事で油断していた！
しかしシャルバはディオドラを一瞥すると、何も言わずにその手から光を放つ。
その一撃はディオドラの胸を穿ち、奴はそのまま倒れる事もなく塵になって霧散していった。
あれは……光の力？
「あれだけ手を貸し、オーフィスの『蛇』まで与えたというのに結果を残せず、厄介とはいえ人間に敗北する。所詮は紛い物の一族よ、もはや生きる価値すらない」
シャルバは吐き捨てる様にそう言って、此方に向き直る。

その時、腕に何かの機械が見えた。
あれが悪魔が光を操れるカラクリか？
「さて、サーゼクスの妹君。突然だが貴公には死んでいただく、理由は……言わなくても分かるだろう？」
「現魔王への復讐でしょう？　分かりやすくて反吐がでるわ」
シャルバの発言に、部長が眉を寄せて睨みつけながら答える。
「今回の作戦はこちらの負けだ、まさか下位の神滅具が上位のソレに打ち勝つとは想定外だった。だがいいさ、今回のテロで私さえいれば十分に事は起こせる事が分かった」
「直接現魔王と戦おうとせずに血族から殺していく……この外道ッ！　何よりもアーシアを、私の妹を殺した罪！　絶対に許さないッ！」
部長が激昂し、全身に紅いオーラを迸らせる。
それに合わせて、僕ら眷属もそれぞれの獲物を手に詰め寄る。
アーシアさんはようやく過去の全てにケリをつけた。
彼女の尊敬するカズキくんに助けられ、大好きなイッセーくんが呪縛を破壊する事で全て終わらせる事が出来たのに！
シャルバ、お前は絶対に許さない！
僕の大切な仲間を消し去った事を後悔させてやるッ！

「アーシア？　何処に行ったんだ？」

僕が斬りかかろうとしたその時、イッセーくんがふらふらと歩きながらアーシアさんを探して辺りを見渡している。

『隠れてないで出てきてくれ、帰って二人三脚の練習をしなきゃ』

そう呟きながら今にも倒れそうな足取りで歩き続ける。

その光景は余りにも痛ましく、見ていられる様なものではなかった。

小猫ちゃんとギャスパーくんは嗚咽を漏らし、朱乃さんは顔を背けて静かに涙を流す。

部長はそんなイッセーくんを優しく抱きしめている。

「……さない、許さないッ！　斬る、斬り殺してやるッ！」

ゼノヴィアは目から大粒の涙を流しながらデュランダルとアスカロンを手にシャルバへと斬り掛かるが、防御障壁に攻撃を阻まれ腹部に魔力の弾を食らって逆に吹き飛ばされた。

地面に墜落したゼノヴィアはそれでもなおシャルバに立ち向かおうと、手元から離れてしまった聖剣を求めて辺りをまさぐっている。

「惨めなものだな、下劣なる転生悪魔に汚物同然のドラゴン。あの娘は次元の彼方に消えていった、既にその身も消失しているだろう。――死んだんだよ、あの娘は」

シャルバの無慈悲なその一言に反応して、イッセーくんは奴を無表情でじっと見つめ続けた。

その姿はどこか異様で、イッセーくんは部長を振り払ってゆっくりとシャルバに向かって歩を進める。

『リアス・グレモリーとその眷属たち。死にたくなければ、今すぐここから離れろ』

これは、ドライグの声か。

僕たちにも聞こえるように発声したようだ。

しかしなぜ急にそんな事を言い出したんだ？

『あの悪魔、シャルバと言ったか？あいつは――選択を間違えた』

『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ!!!!!!!!!』

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

凄い……あれが赤龍帝の秘められた力。

全身の宝玉からドラゴンの腕や牙が生えたり、以前奪った白龍皇の力を操ったり……

ギャスパーくんの様に敵の動きを止めたりもしていました。

そんな多種多様な能力を発揮してシャルバの動きを止め、イッセーくんの鎧の胸元と

腹部の装甲が開いて何かの発射口が現れる。
それはカズキくんの『あの攻撃』とよく似ていましたが、威力は段違いのものでした。
祐斗くんが聖魔剣を幾重にも重ねたシェルターを作ってくれなければ、私達も巻き込まれていたかもしれません。
そして神殿を廃虚にした今、イッセーくんは瓦礫の上に立ち天に向かって哀しげに咆哮をあげている。
私たちはどうすれば……イッセーくんはどうしたら戻るのでしょうか……？
「――――う、いってぇ……何処だここ？」
私たちが躊躇していると、後ろから私の待ち望んでいた声が聞こえてきた。
「カズキくん！」
「カズキ！　目が覚めたのか!?」
私とゼノヴィアちゃんが側に駆け寄り、彼を支える。
彼は頭を押さえながら上体だけを起こして辺りを見回し、そしてその視線が瓦礫の上のイッセーくんに止まった。
「あの鎧……イッセー、か？」
彼はそう呟いてから、状況の説明を求めた。
私たちが大体のあらましを説明し終えると、再びイッセーくんを見つめてから口を開

く。

「大体わかった、じゃあちょっと行ってくるわ」

カズキくんはそう言ってから立ち上がろうとして、バランスを崩してこけかける。

当然だ、いきなり片腕を無くしたら体幹が崩れて上手く動ける訳がありません。

「ちょ、待ちなさい！　貴方、そんなにボロボロで何を!?」

カズキくんがヨロヨロと動き出すのを、リアスが呼び止める。

「いえ、どうもイッセーがあんなになったのって、俺のせいでもあるみたいですし。ちょっと八つ当たりされてきます」

普段は八つ当たりする側だから新鮮だね。

彼はそう言って笑みを浮かべながら、イッセーくんに向けて歩を進めていく。

しかし、その前に両手を広げたゼノヴィアちゃんが立ち塞がった。

「待てカズキ、私は行かせないぞ。アーシアがいなくなって、お前までいなくなったら……私は……」

ゼノヴィアちゃんはそう言いって身体を震わせながら俯き、涙で地面を濡らしている。

カズキくんはそれを見て、ゼノヴィアちゃんの頭に手をポンと置く。

「大丈夫だって。死にやしないし、ちゃんと戻ってくるから。……アーシアちゃん守れ

なくて、ごめんな」
彼はそう言って前に進んでいく。
そして私の前まで来ると、小さな声でボソリと呟いた。
「朱乃さん。後、お願いします」
その言葉を聞いて私はカズキくんを止めようと腕を伸ばしたけれど、彼は既にイッセーくんの所まで跳んで行ってしまった。
カズキくん、あなたは……。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「よぉ、イッセー。なんか機嫌悪そうだな」
俺が声を掛けると、イッセーは反応してこちらに振り向く。
少しは意識が残っているのか、それともただの本能か……。
「もう終わったんだ、お前もその鎧さっさと外して帰るぞ」
「ぐぎゅるがぁぁツ！」
イッセーはまるで動物が威嚇する様にこちらに牙を剥き出している。
四つん這いだし、まんまドラゴンみたいだ。
やっぱ、色々と発散させてやらなきゃダメかな。
片腕無いし血が流れすぎたからかすげーシンドイけど、お前は絶対助けてやる。

なんせ、初めてまともに出来た友達だからな。

「ホラ、来いよイッセー。八つ当たりなら俺が付き合ってやるからさ」

「ガァァァァッ!!」

３５話

力任せに突撃してくるイッセーを、残った腕と体捌きでなんとか躱し続ける。
さて、大見得切ったはいいけどどうするかね。
正直ギリギリ過ぎてやれる事があまりない。
それにさっきからモグラさんに話し掛けてるのに、返事がまったく返ってこない。
まだ片手にグローブが残ったままだし、能力は使えるみたいだから死んだりはしてないと思うんだけど……こっちも心配だ。
「ぐがぁぁぁアーシアァァァ!!」
「ここにアーシアちゃんはいない。いい加減現実見やがれ、バカイッセー」
俺の言葉に反応したのか、攻撃が更に激しさを増した。
『アーシアちゃん』みたいな特定のワードには反応する、きっとこいつの中に『イッセー』は残ってる。
なら、それを刺激し続ければ何かしら反応があるかも知れない。
……それまで俺が持てばだけど。
「ぎゆがぁぁあるぅぁぁツ!」

「何バケモノみたいな声出してんだ。お前はな、おっぱいおっぱい言ってる位がちょうどいいんだよ」

お、今度はおっぱいの言葉に反応した？

さっさと戻ってこいよ、おっぱいバカ。

俺にシリアスとかさせんな、似合わないんだから。

地面に手をつき、石柱を伸ばしたら宝玉から生えてきた腕に軽々と粉砕され。

足元に穴を作って落とそうとしたら、空を飛んで逃げられ。

口からはビームまで吐きやがった。

もうなんでもありだな、あいつ。

てかなんで宝玉から腕やら牙やら飛び出て来るんだ、意味わからん。

無くなった右腕の先端を牙で切りつけられたせいで、すげー痛い思いして焼き塞いだ傷口が開いて血が溢れ出してきたじゃんよ。

こっちは腕がないからバランス崩れて動きにくい事この上ないのに、向こうは元気に突進して噛み付こうとしてくるし……あれ、なんか段々ムカついてきたな。

それに血が流れすぎて頭がボーッと……。

取り敢えずあれだ、もう難しい事考えるのやめよう。

後でなら何されても文句言わないから、とにかく今は動けるうちにこいつを殴って正

気に戻す！
「ぐぎがぁぁぁ！」
「だ～もう、うっせぇ！　人が痛いの我慢して付き合ってやってたら調子乗りやがって！」
　バカの一つ覚えで突っ込んできたイッセーの顎を左で蹴り上げ、浮いた上体に回し蹴り気味に右脚を減り込ませて瓦礫の山まで吹っ飛ばす。
「そもそも何だ、そのニョキニョキ生えてくるキモい腕は！　こっちは一本無くなったってのに俺への当てつけか!?　そんなにあるなら……」
　瓦礫から這い出てきたイッセーに接近し、宝玉から何本も生えている腕の一つを握り締め――
「俺にも一本寄越せボケェェェッ!!」
「ギュアァァァ!?」
　足も使ってムリヤリ引っこ抜いた。
　痛みがあるのか、地面に転がりもんどりうっている。
　今のうちに落とし穴にボッシュートしてやる！
　俺が地面を殴ると地面に大きな穴が空き、そこに吸い込まれるようにイッセーは落ちていった。

ついでに近くにあった大きな瓦礫で穴を塞いでおこう。
これで少しは休めるかな。
さて、ノリで引き抜いたはいいがこの腕どうしよう。
ウロコがびっしり生えてて、まんまドラゴンって感じの腕だな。
『……ズキ、瀬尾カズキ！　聞こえるか!?　聞こえているなら、その腕を失った自分の腕に押しつけろ！』
うぉ!?
これって確かドライグの声……これを押し付けんの？
なんか変な病気になりそうだけど……しょうがない、我慢しよう。
「ふんっ!!」
その腕を、無くなった方の腕に押し付ける。
すると押し付けた先がみるみるうちに癒着していき、凄まじいスピードでくっついた。
お、すげぇちゃんと自由に動かせる！
『よし、なんとかなったようだな。ドラゴンを宿しているお前ならもしやとは思っていたが、これで会話が出来る』
ドライグの声が腕を通して直接頭に響いてくる。

なんだこれ、どういう事？

『お前が無茶をして相棒に声をかけ続けたおかげで、向こうに少し余裕が出来た。これで腕を介してお前にも協力出来る』

ドライグはいい奴だな、イッセーに酷いことばかりされてるのにこんなに頑張ってやるなんて。

でも頼ってくれるのは嬉しいが、俺ももう限界ギリギリなんだよね。

あんま期待しないで。

『フッ、【いい奴】だなんて言われたのは初めてだ。相棒もそうだが、お前も相当変わっているな』

そうかね？

自分では一般人代表だと思っているが。

『まずは状況説明だ。相棒は大切な者を失った哀しみで、中途半端に【覇龍（ジャガーノート・ドライブ）】となってしまった。このままだと命が危ない』

【覇龍】？

ニュアンス的にとっておきって奴か。

しかも命って……使いこなせてないから？

『大体そんな感じだ。だがあの中途半端な状態からなら、まだ元に戻せるかもしれない』

マジで!?
どうすりゃいいの?
『相棒の深層心理を大きく揺さぶる何かが起これば……』
イッセーを大きく揺さぶる何か……ダメだ、おっぱいしか出てこない。
いっそリアス先輩を裸にひん剥いてイッセーに投げつけてみるか?
案外それで簡単に戻りそうな気もする。
『相棒の為に考えてくれているのだろうが……お前、色々と酷いな』
お前の相棒ほどじゃない。
おっぱいドラゴンなんだし問題ないだろ?
『おぉぉぉん! あれは相棒がそうなのであって、赤龍帝であるオレは……おぉぉぉん!』
む、ドライグを泣かせてしまった。
まぁこれが終わってから慰めてやろう。
さて、早速リアス先輩の所へ……。
「グオォォォンッ!!」
うぉ!?
また口からビーム出して瓦礫ぶっ飛ばしやがった!

あぁもう、少しは休ませろよバカ野郎！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキとイッセーの戦いは今なお続いている。
私も加勢に加わりたいが、下手に大人数で向かうとシャルバに放った大質量のオーラによる攻撃を使われかねない。
私ではイッセーの攻撃を捌ききれず、木場はみんなを守る為に動けない。
傷付いた仲間に頼るしかない……自分の不甲斐なさに嫌気がする！
カズキは激しい攻防の中にあっても、ずっとイッセーに語り掛けている。
戻ってこい、お前はそんな奴じゃないだろう、と。
一発でも受ければ致命傷になる様な攻撃に晒されながら、反撃もせず、優しく諭す様に。
カズキはイッセーと戦う前に、『こうなったのは自分のせいでもある』と言っていた。
アーシアを失ったのは、自分の所為だと思っているのだろう。
あの時シャルバの攻撃に反応出来ていたのはカズキ一人だけだった。
それでもアーシアを救えず、自身も片腕を失ってしまった。
武道を心得ている者が、自分の腕を失って平気な筈がない。
にも関わらず、カズキは自分の腕など気にもしないでアーシアの死を自分の所為だと

悔やみ続けている。
あいつは自分より他者を優先する。
過去の事で自分を責めているのかと思っていたが、コカビエルを倒した今でもカズキの行動は変わらない。
いつでも仲間の為に己を削り続ける。
そんな事を続けていたら、いつかお前は磨り減って消えてしまいそうな気さえして……。

カズキ、何がお前をそこまでさせるんだ？
私たちではお前の助けになれないのか？
お願いだから、私たちに頼ってくれ……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
くっそ、そろそろ本気でヤバい……！
膝が震えてきやがったよ！
『また右から来るぞ、瀬尾カズキ！』
あいよ、生意気にさっきから怪我してる方から攻撃してきやがって！
てかカズキでいいよ。
苗字で呼ばれるの久々すぎて違和感しかない。

『それだけあいつも警戒してるのさ。ではカズキ、このままではジリ貧だ。何か奥の手とかないのか？』

半分死んでる様な奴に無茶言うな。

イッセーたちと違って、俺ってばか弱い人間様だよ？

モグラさんとも連絡取れないし、今の俺は攻撃躱すので精一杯だ！

ドライグの指示がなきゃとっくに挽肉になってるからね？

『さっきは反撃していたじゃないか。【覇龍】を蹴り飛ばせる様な奴を、人間と呼ばんだろ？』

さっきのはムカついたからアドレナリン出てたんだよ、もう無理。

つーか、勝手に人外カテゴリに入れるな。

うぉ、掠った!?

これ以上血い流させんなよ、マジで倒れるってば。

『【豊穣土竜】の能力もそろそろ限界の様だ、あいつの加護が消えたらもう勝ち目が無くなるぞ』

だから必死に取り押さえようと、さっきからおっかない接近戦してるんだろうが！

もう俺には関節決めるぐらいしか思いつかないん――

『また右から……カズキ!?』

あ、ヤバい。
膝が崩れた、これは喰らう。
イッセーの拳が俺の顔に向かって飛んでくる。
殴られたら死ぬよな、やっぱり。
イッセー気にしないといいんだけど……無理だろうな、あいつバカだけどいい奴だし。
朱乃さんとゼノヴィアにも怒られるかな、約束破ったから……怒られるのは、嫌だなぁ。

「ふんぬぅあぁぁッ!!」
なら、もうちょい頑張るしかない！
崩れた体制のまま身体ごと回転させ、顔を殴られる前に首を捻ってダメージを最小限に。
殴られた勢いも使って、地面に倒れこみながら顔面を思いっきり殴りつける！

「……やっぱダメか」
……が、イッセーは僅かによろけただけ。
足の踏ん張りも効かず、体重は乗せたが芯に響かない触れただけの様な拳打。
効くはずもない。
地面に仰向けに横たわる俺に、イッセーの拳が迫る。
ドライグが逃げる様に言ってくるけど、ちょっと動けそうにない。
「……ごめん」
約束、守れなかった。
俺は襲ってくるだろう衝撃に覚悟を決め、目を瞑った。
……おかしい、拳が何時までも落ちて来ない。
「誰に謝っているのか知らないが、どうせなら直接言うといい」
聞き慣れた声が聞こえ、ゆっくりと目を開ける。
そこにはイッセーの拳を止めている、白い鎧に包まれたよく知っている姿があった。
イケメンってのは、助けに入るタイミングまで完璧なのか。
「……ヴァーリさん」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

相変わらず、彼はとんでもない事をあっさりとやる。
最初はひたすらに攻撃を捌き続けながら説得していたのに、突然蹴りを見舞った上に宝玉から生えていた腕を引っこ抜いてしまった。
イッセーくんが痛みに悶えているうちに作り出した穴に落とし込み、その上に巨大な瓦礫を乗せて閉じ込めてしまった。
すぐに這い上がってくるだろうが、気休め程度にはなるかもしれない。
おまけに引き抜いたそれを失った自分の右腕に押し付け、ドラゴンの腕を自分の物にしてしまった!?
再生能力が飛び抜けて高いのはアザゼル先生から聞いてはいたが、それにしてもあれは異常だ！
「これはまた、とんでもない事になっているな」
カズキくんに驚愕していると突然空間に裂け目が生まれ、そこから白龍皇ヴァーリとその仲間たちが現れた。
僕らはすぐに攻撃の体制に入ったが、向こうに攻撃の意思はないようだ。
彼らはイッセーくん、赤龍帝の『覇龍』を見に来たのだという。
ヴァーリが言うにはあれは不完全な状態らしく、もしかしたら元に戻せるかもしれないらしい。

話を聞いていた僕らに中国風の鎧を着た男、恐らく孫悟空の美猴が僕の元に歩み寄ってきた。
その腕の中には、もう会えないと思っていた少女の姿があった。
「ほらよ、お前らの仲間だろ？　この嬢ちゃん」
美猴はそう言いながらその少女――アーシアさんを預けてきた。
「アーシアさん！」
「アーシア!?」
それを見て部長や朱乃さんたちもアーシアさんの元に集まる。
怪我をして座り込んでいたゼノヴィアも、慌てて駆け寄ってきた。
アーシアさんは気を失ってはいるが、しっかりと呼吸もしている。
無事だ！
「よかった、生きてる！」
僕がそう言ってアーシアさんをゼノヴィアに預けると、彼女を大事そうに抱え込み『よかった、よかった』と何度も呟きながら笑顔で涙を流し続けた。
でも、何故彼女は無事だったのだろう？
疑問に思っていると、背広の男が答えてくれた。
……腰に神々しいオーラを放つ剣を携えている、彼がイッセーくんの言っていた聖王

剣コールブランドの所持者か。
なんでも彼らがこの辺りの次元の狭間を探索していたら妙な反応を感知し、向かってみたら彼女がエネルギーの球体の中で保護されていたそうだ。
ヴァーリが見覚えがあると言うので、ここまで連れてきてくれたらしい。
しかしそのエネルギーとは一体……？
「これだ」
ヴァーリは僕に向かって何かを投げ渡してくる。
投げられたのは氷の塊で、その中に何かが入って……これは!?
「カズキの腕だ。切断された後も、神器である『神秘の豊穣土竜』の力で彼女を守り続けていたのだろう。相変わらず無茶をする」
「まぁ過保護な兄貴がすぐに冷凍保存したから、多分元通りにくっつけるんじゃねぇかぃ？」
ヴァーリは嘆息しながらそう言って腕を組み直し、美猴はそれを見てからかうように笑っている。
敵対しても、彼らはカズキくんを大切に思っているのだろうか？
しかし、腕を切り離してまでアーシアさんを守ったのか……感謝するしすごい事だと思うのだけど、やはりカズキくんは自分を大切にしてくれない。

腕は朱乃さんが異空間に収納してくれたので、後でアザゼル先生に渡しておけばどうにかなるだろう。

「む、まずいな。美猴、先に行くぞ。これ以上は厳しそうだ」

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒａｅｋｅｒ!!!!!!」

「流石に片腕であの状態の赤龍帝はキツかったかねぃ。了解だ、俺っちも!!ぐに行く」

ヴァーリはそう言うと、禁手化してカズキくんの元へ飛んで行った。

美猴も少し遅れて追いかけていく。

アーシアさんも無事だった、もう誰も欠けずにこの騒動を終わらせるんだ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ヴァーリさんがイッセーの攻撃を止めたすぐ後美猴さんもやってきて、俺をリアス先輩たちの所まで運んでくれた。

そこにいたアーシアちゃんを見て顔から出る物全部流して喜んでいると、みんなから美猴さん達が助けてくれた事を聞かされた。

何から何まで世話になりっぱなしだな。

「二人が来てくれて助かった、流石に死ぬかと思ったわ」

「まぁ片腕にしちゃ頑張った方だろ、今はなんか生えてっけど。後はヴァーリに任せとけよい」

美猴さんがカカと笑いながら言ってくる。
そういやドライグも大丈夫か？
『俺は問題ない、傷ついているのはお前だろうに』
そんな呆れるように言わないでよ、頑張ったんだから。
「今のはドライグの声？　その腕、ドライグと繋がっているの？」
「みたいですよ。そうだ、ドライグが深層心理を大きく揺さぶれば何とかなるかもって言ってるんですけど、なんかいい案あります？」
リアス先輩が尋ねてきたので、ついでにこっちもみんなに問い掛ける。
「おっぱい見せればいいんじゃね？」
「リアス先輩ひん剥いて、イッセーに与える方が早くない？」
「二人ともう少し真面目に……」
『え？　マジメだけど？』
「なお悪いわよ！」
俺と美猴さんのアイデアがリアス先輩の一言で却下された。
酷い。
『ドラゴンを鎮めるのはいつだって歌声だったが……赤龍帝や白龍皇の歌なんてものは――』

「あるわよぉぉぉ！」

俺たちが悩んでいると、上から元気そうな声を響かせながら背中に白い羽根を生やした女の子が何かを持ってやってきた。

何あれ？

へぇ、映像を映す機械……おっぱいドラゴンの歌？

36話

紫藤さんの持ってきた機械から、気の抜けるような音楽と映像が流れていく。
そこに映っていたのは、鎧姿のイッセーが冥界の子供達と一緒に歌に合わせて踊っている姿だった。
作詞：アザ☆ゼル
作曲：サーゼクス・ルシファー
ダンス振り付け：セラフォルー・レヴィアたん
『おっぱいドラゴンの歌』
なんだこれ。
なぁ、なんなんだこれ。
俺、腕取れてもマジメに頑張ってたよ？
イッセー元に戻そうとして頑張ったんだよ？
なのに――
「うぅ……おっぱい……」
「ッ!?　反応したわ！」

俺の必死な呼びかけには大して反応しなかったくせに、あの歌には頭を抱えて随分と反応していらっしゃる。
これはちょっと酷すぎるんじゃあないですかねぇ!?
俺の呼びかけよりおっぱいか!?
片腕もがれながらも、友達の為に頑張った俺の呼びかけよりもおっぱいですか!?
返せ！
俺のシリアスとか色々な物を返せこの馬鹿野郎ッ!!
てかさ、あのアホなおっさんと魔王二人は何してんの？
お前ら本当に自重しろよ、なんだその間の☆は!?
もぎ取って投げつけんぞクソが！
俺が憤慨している間も歌は流れ続け、イッセーが時折歌の歌詞を呟きながら頭を抱えて苦しみだす。
俺と入れ替わりでイッセーの相手をしてくれていたヴァーリさんは、既に此方に戻ってきた。
俺たちと一緒に、世界一残念な赤龍帝の姿を複雑な気持ちで眺めている。
俺、なんであいつの事助けようとしてたんだっけ……？
イッセーは苦しみながらも何かを求める様に指先をフラフラとさせている。

なぁ木場、あの指へし折ったらダメかな？
ダメか、残念だな。
「ふむ、今なら余裕だな。いくぞアルビオン」
『ドライグが……私の知っているドライグでは無くなっていく……』
なんかアルビオンさんがめっちゃ凹んでらっしゃる。
気持ちは分かるよ、今度愚痴ぐらいなら聞いてあげよう。
『Ｄｉｖｉｄ!!』
ヴァーリさんの鎧から音声が響き、イッセーの力を大きく削る。
既に鋭利だった指先は人間のそれに戻り、今なお何かを求めて揺れ動いている。
「今よリアス！　イッセーくんはあなたの胸を求めているわ！」
何言ってんの？
ねぇ、何言っちゃってんの朱乃さん!?
あ、朱乃さんが壊れたッ!!
「で、でも私の乳首でイッセーの『覇龍』が本当に解除出来るのかしら……？」
「イッセーくんはあなたの乳首を押して禁手に至った。なら、その逆も可能なはず。あなた達の絆を信じるのよ、リアス！」
おい、そんな方法で禁手習得したのかあのバカは。

まぁ俺もイライラが募って禁手化したけども。
いや、今はそんな事どうでもいい。
あんな乳首とか連呼する朱乃さん、見ていられない！
「ゼ、ゼノヴィアどうしよう。俺のせいか解らないけど、朱乃さんが壊れた……俺はどうすればいいんだ？」
「いや何時も通りだと思うが……そうだな、【何でも言う事を聞く】とか言えばいいんじゃないか？　……余計に壊れるかもしれないが」
最後にボソッと何か言ってた気がするけどまぁいいや。
「朱乃さん！　後で何でも言う事聞くから、ちょっと落ち着いて！」
俺の言葉に体をピクリと震わせ、ゆっくりと此方に顔を向ける。
「……な、なんでも？」
「う……まぁ、俺の出来る範囲なら」
俺の返事を聞くと何故か小猫ちゃんの元まで走っていき、嬉しそうに笑いながら抱き上げていた。
『本当だった』ってなんの話？
なんで小猫ちゃんはこっちを見ながら複雑そうな顔をしているの？
そうこうしているうちにリアス先輩の覚悟も決まったらしく、ゆっくりとイッセーの

元まで歩を進めて辿り着く。
こちらには見えないように胸元をはだけさせ、イッセーの目の前にリアス先輩の胸がさらけ出される。
ねぇ、俺もう帰っていい？
アホらしくてやってらんないんだけど。
ヴァーリさんもくだらなすぎて禁手化解いちゃったじゃん。
「お、おれの……おっぱい……」
イッセーはそう言ってリアス先輩の乳首をつつくと、鎧が解除され気を失ってリアス先輩にもたれかかる様に崩れ落ちた。
それと同時に、俺の腕にくっ付いていたドラゴンの腕もポロリと取れて消えてしまった。
やっぱ一時的なモンだったのか。
みんなは騒いでるけど、血は止まってるからまぁいいや。
帰ったら左手でご飯を食べる練習しなきゃな。
「……リアス・グレモリーの胸は兵藤一誠の制御スイッチか何かなのか？」
「あってるんじゃない？　押すと鳴るし」
「カッカッカ！　お前ら、それは酷すぎるだろ！」

俺とヴァーリさんの言い草に、美猴さんは腹を抱えて爆笑していた。
俺、今回はもっと怒っていいと思うの。
ムカつくからイッセーの顔でも蹴っ飛ばしてや……おろ？
目の前が急にグニャグニャに……
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「う～ん……あれ？　何がどうなったんだ？」
なんだ、体がすげぇ痛い……？
禁手が解かれて鎧も消えてるし、何がどうなったんだ？
そんな俺に部長が号泣しながら抱きついてくる。
何が起こってるのか分からずキョロキョロしていると、ゼノヴィアの横にアーシアがいた！
アーシア、無事だったのか!?
アーシアは真剣な表情を浮かべ、誰かの治療をしている様だった。
治療されている人物は……カズキ？
ってカズキの腕がない!?
なんだ!?　何がどうなってる!?
木場が言うには俺が暴走して、シャルバとかいう奴をぶっ飛ばしたまま元に戻らな

かったそうだ。
　そんな俺を、シャルバの攻撃で片腕を失ったカズキが必死に呼びかけ続けてくれたらしい。
　次元の狭間に飛ばされたアーシアはモグさんが結界みたいなのを張って守り、ヴァーリがここまで連れてきてくれたのか。
　後でお礼は言わなきゃな。
「アーシアちゃん、呼吸も落ち着いてきたからカズキくんはもう大丈夫ですわ。あなたも疲れているのだから少し休まなきゃ」
「でもカズキさんは私の為に腕を……少しでも恩を返さなければ」
「カズキはアーシアにそんな顔をして欲しくて助けた訳じゃないぞ？　笑っていて欲しいから頑張ったんだ。ほら、イッセーも目覚めた。行ってやるといい」
　朱乃さんとゼノヴィアに諭され、アーシアはこちらまでやって来る。
　その顔は何やら複雑そうな表情のままだ。
「アーシア、無事で本当に良かった」
「イッセーさん……私、みなさんに迷惑ばかりかけて……」
「そんな顔しないでくれ。みんなアーシアが帰ってきてくれて喜んでるんだ、笑ってくれよ。今回は俺もカズキに迷惑かけまくったみたいだしな、後で一緒にお礼を言わな

きゃな」
「イッセーさん……」
「おかえり、アーシア」
俺がそう言うと、アーシアは俺に抱きついて泣き始めてしまった。
服を握り締めながら泣き続けるアーシアを、優しく抱きしめ返す。
アーシアが帰ってきて、本当に良かった！
それにしても、カズキにはまた迷惑をかけちまったな。
なんだかあいつへの借りがドンドン溜まって、借金の様に雪だるま式で大きくなっている気がする。
カズキに借金……なんか背筋が寒くなるな。
ちゃんと返済出来るかな、俺。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
テロリストの襲撃から一夜明けた。
幸い死傷者は無く、被害は試合会場なんかの建造物だけだったようだ。
ＶＩＰの方々も無事に帰って行き、不穏分子の炙り出しにも成功。
悪魔側から見れば万々歳なんだろうな、ちょっと気に障るけど。
イッセーの『覇龍』が解けてから気絶してしまったそうで、色々と起こったそうだが

まるで覚えていない。
ダメージが素敵に限界突破した様で、只今冥界の施設で療養中です。
モグラさんもアーシアちゃんを守って頑張ったから、精密検査の為にアザゼルさんに預けちゃったし。
「あ～……暇だ」
無くなった腕はヴァーリさんが拾って朱乃さんに預けてくれたので、サハリエルさんとアルマロスさんがわざわざここまで来てくっ付けてくれた。
俺が気絶している間に手術したのでよくわからないが、あの二人に加えてアザゼルさんまで参加していた時点で何かしら弄られてるのは確実だろう。
自分で色々と試してみたが特に目立った変化はなく、それが返って不安を助長させる。
「やぁカズキくん、具合はどうかな？」
「カズキくんってば自分の腕見てどうしたの？　もしかして痛む？」
俺が自分の腕を弄り回していると、何故かサーゼクスさんとセラフォルーさんが正装でやってきた。
「いや別に痛い訳じゃ……つーかテロがあったばかりなのに、護衛も連れずに何やってんですかあんた方は」

俺が半眼でぼやくと、サーゼクスさんは苦笑しながら手に持った花をテーブルに置く。
「友人の病室を訪ねるのに、そんな無粋な真似はしないさ。護衛は外で待機してくれているよ」
「あ、これソーナちゃんからお見舞いの品！　最初は手作りのお菓子を渡そうとしてたらしいんだけど、眷属の子たちに止められたらしくてね？　ハイ、果物盛り合わせ☆」
「ドーモデス」
セラフォルーさんが美味そうな果物が入ったバスケットを手渡してくれる。
ありがとう、生徒会の皆さん！
俺の命の為に頑張ってくれたんだね、なんか嬉しくて涙出てきた！
「泣く程嬉しいなんて、ソーナちゃんたら愛されてるわね♪　ソーナちゃんに伝えてあげなきゃ！」
「ふむ、シトリー家の婿か……それなら将来は重役にも抜擢しやすいし、私としても嬉しい限りだな」
「ホントに何しに来たんだあんたら」
俺をそっちのけで何やら不穏な話を進める魔王たち。
しまいにゃ窓から蹴りだすぞ？

しかも婿ってなんだ。
会長さんの意思を無視したら、リアス先輩の時と同じ事になりますよ。
あれ？
その場合って俺がライザーの立ち位置？
匙にぶん殴られるじゃん。
そんな事を考えていると、サーゼクスさんとセラフォルーさんが並んで俺の前に立ち、深く頭を下げてきた。
「今日はね、今回の騒動のお詫びと謝罪に来たの」
「我々悪魔の事情に巻き込んで、君に重傷を負わせてしまった。本当に申し訳ない」
……いや、急にそんなマジメになられるとこっちも困るんだけど。
「あの、そんな気にしないで下さい。昔から怪我は治りやすい体質だし、腕だってほら！もうくっついて何の問題もないですから」
そう言いながら右腕をブンブンと振り回す。
「そうは言っても……そうだ、君にこれを渡しておこう。何かの役に立つかもしれない」
サーゼクスさんは指先に魔法陣を展開すると、何かの宝玉と小ぶりなアタッシュケースが現れる。
「グレモリー領に自由に転移できる宝玉だ。私かグレイフィアに繋がる通信機の役割も

ある、なにかあったらいつでも連絡して欲しい」
「こんな色々と悪用できそうな物、ヴァーリさんと繋がりのある俺に渡していいんですか？」
　俺が尋ねると、サーゼクスさんはニッコリと笑みを返してくる。
「君を信頼しているからね、そもそも悪用しようとする者はそんな事聞いてこないよ」
　そりゃごもっともで。
　俺だったらワザと聞くけども。
「それとこっちのケースには《悪魔の駒》一式が入っている。この駒を使えば君は悪魔に転生できるし、他の者を眷属にする事が出来る」
　そう言いながらケースを開き、こちらに中身を見せてくれた。
　ガラス細工のような赤い駒が１５個、綺麗に並んで詰められている。
「めっちゃ高価そうですね……なんか貰うの怖いな」
「別に使わなくてもいいし、君の好きにするといい。謝罪と友好の証だと思ってくれ」
　サーゼクスさんはそう言うと、俺の前に宝玉とケースを並べて置いた。
　まぁ無理に使う事もないし、部屋にでも飾っておこう。
「本当にごめんなさい……そうだカズキくん。なにか欲しい物とか、して欲しい事とかある？　物で釣るみたいでちょっとアレだけど、私にできる事ならなんでも叶えちゃう

わよ！」

「女性が男にそういう事を簡単に言っちゃいけませ……あ、そうだ」

胸を張りながらポンと叩いてみせるセラフォルーさん。

軽はずみな言葉をやめるように注意しようとした時、ある事を思い出す。

せっかくだ、簡単な我儘でも聞いて貰おう。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

冥界から無事帰ってきて、今日は駒王学園体育祭当日。

俺とモグラさんは戻ってきたが、イッセーはまだ目覚めていないので冥界に残ったままだ。

おかげでイッセーが出る筈だった競技に俺が駆り出されてシンドイ。

「病み上がりの人間をこき使い過ぎじゃないですかね？　泣くぞ」

「綱引きにリレー、障害物走……殆どコンプリートしてるな。なんでこんなに出場してるんだ？」

ゼノヴィアがプログラム表を見つめながら首を傾げている。

「お前やアーシアちゃんのお友達の桐生さんが、無理矢理ねじ込んだんだよ」

あいつ、俺が一年の時に力加減わからなくて運動系の部活で騒がれてたの覚えてやがった。

お陰で走る系の競技には殆ど出場する羽目になった。
おのれ桐生、お弁当の唐揚げを触った手で眼鏡のレンズをベタベタにしてやる。
「でも大活躍だったじゃないか、うちのクラスの人も騒いでたよ？」
「普段から力セーブしてる人間により絶妙な力加減を求めるなよ、すごい疲れるんだぞ？」
木場は軽く言ってくるが、手加減ってかなりしんどいのだ。
疲れるの嫌いです。
そうこうしているうちにプログラムもどんどん消化されていき、もうすぐ二人三脚が始まろうとしている。
イッセーと一緒に走るはずだったアーシアちゃんの悲しげな顔が、隣に立つ俺の胸に突き刺さってくる。
ん？　あれは……？
「アーシアちゃん、大丈夫だよ」
「……？　何がですか？」
俺は足に紐を結ぼうとしているアーシアちゃんに声をかけ、騒がしい方に指を向ける。
全く、来るのが遅い。

「イッセーは馬鹿だけど、約束は守る奴だから」
「アーシアアアアアアッ!!」
「ッ！　イッセーさん！」
イッセーが叫びながらこちらに走ってくる。
起きたばかりだろうに、あんなに動いて大丈夫か？
「遅いぞイッセー、アーシアちゃんを泣かせるな」
「カズキ……俺、お前にも謝らないと……」
「んなもんどうでもいいから行ってこい。ほら、アーシアちゃんが待ってる」
「……あぁ！　ちゃんと後でお礼するからな！」
イッセーは俺に頭を下げてからアーシアちゃんの元へ行き、足の紐を結んだいいって言ってるのに、変な所でマジメな奴だ。
すぐにイッセーたちの走る番になり、みんなの応援を受けながら二人は見事一位になった。
一緒に走れて良かったね、アーシアちゃん。
俺がみんなの元に戻ろうとすると、遠くから紫藤さんがこちらに走ってきた。
「あ、カズキくんこんな所にいた！　次の借り物レースがもう始まるわよ、急ぎましょ！」

「ちょ、わかった。行くからそんなに引っ張らないで……！」
紫藤さんは俺の腕を掴むと、グイグイ引っ張って入場門まで連行していく。
幸せそうなアーシアちゃんを見れたから、なんかもうやり切った感じがしてやる気が出ないんだけど……。

その後行われた借り物レースで、メモに『カワイイ女の子』とあったので近くにいた小猫ちゃんを抱き上げて運び一位になった。
メモの内容をみんなに見られ小猫ちゃんは恥ずかしくて真っ赤になり、朱乃さんとゼノヴィアに虐められた俺は血で真っ赤になった。
理不尽だ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「おうカズキ、邪魔するぞ」
「別に良いんだけどさ、せめて返事してから入ってきてよ」
「生意気言うな……話、聞いたか？」
「アルマロスさんから簡単にね、難しい事はよくわかんないから」

「ならもうわかってんだろ？　これ以上はお前……」
「大丈夫だよ、自分の事は自分がよく分かってるから。だからそんな顔しないでよ、アザゼルさん」

七巻　放課後のラグナロク

３７話

体育祭から数日が過ぎたある日。
イッセーに呼ばれて兵藤家の豪邸に訪れると地下へと案内され、そこの大広間でとある作品の観賞会を行う事になった。
その名も『乳龍帝おっぱいドラゴン』。
このタイトルで子供向けのヒーロー番組なのだから冥界には恐れ入る。
『ふはははは！　遂に貴様の最後だ、乳龍帝よ！』
『何を！　この乳龍帝が、貴様ら闇の軍団に負けるはずがない！　行くぞ、禁手化！』
画面の中では見るからに怪しい格好をした怪人と、イッセーそっくりの特撮ヒーローが激しい戦いを繰り広げている。
俳優にイッセーの顔をＣＧではめ込んでいるので、本当にイッセーが戦っている様に見える。
禁手の鎧も見事に再現していて、爆破なんかの演出もド派手でなかなかに見応えがある。

タイトルさえまともなら。
小猫ちゃんとギャスパーくんが楽しそうにこの番組を見ているのが、なんだか凄い悲しくなる。
『おっぱいドラゴン！　来たわよ！』
実はこの作品、リアス先輩も登場しているのだ。
その名も『スイッチ姫』。
凄いだろ？
イジメとかじゃないんだぜ？
当然俳優の顔には、ＣＧで先輩の顔が入っている。
このスイッチ姫の胸にタッチする事で、乳龍帝がパワーアップするそうだ。
酷いなんてもんじゃない。
イッセーは恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに見ていて、リアス先輩はアザゼルさんに顔を真っ赤にしながら抗議していた。
あれ、あんたの案かよ。
え、美猴さんが名付け親？
何してんだあの人は……。
まぁ怒るのが普通だよね、雑誌の特集名も

『リアス姫特集』から
『皆もスイッチ姫になろう！』
に変わったそうだ。
普通なら街中を歩けなくなる恥ずかしさだ。
『もう、何もかもどうでもいい……どうせ俺とお前は乳龍帝なんだ……』
まぁ一番ダメージ受けてるのはドライグなんだけどね。
ほら元気出せって、話なら幾らでも聞いてあげるからさ。
『カズキはいい奴だなぁ……俺はあのまま、お前の中に移っていた方が幸せだったんじゃないだろうか……』
「ちょ、ドライグさん!?」
ドライグの切なくなる声を聞き、イッセーが慌てて話しかけている。
イッセー、お前もっとドライグに優しくしろよ。
そのうちストレスで赤龍帝が倒れるぞ。
「にしてもこれが視聴率５０％越えなのか、いろんな意味で凄いな」
俺が一人で頷いていると、ソファーに座る小猫ちゃんが顔だけを後ろにいる俺に向け見上げる様に見つめてくる。
「カズキ先輩も十分凄い事してますよ？」

「あ、小猫ちゃん！　もうすぐ始まるよ？」

ギャスパーくんに言われ、小猫ちゃんは手元のリモコンでチャンネルを操作する。

『今日も始まってしまいました【シトリー家のお料理教室】の時間です。作らされるのはこの私、悪魔に拉致された可哀想な人間カズキと』

『アシスタントのソーナ・シトリーです……あ、あのカズキさん？　出来ればもう少しマジメに――』

『はい、それから助手兼マスコットのモグラさんです』

『キュイ！』

『キャァァア！　モグちゃ～んッ！』

『相変わらず大人気ですねモグラさん。もうモグラさんがいれば俺要らなくね？　帰っていい？』

『ですからもうちょっとやる気を出して下さい！　私を勝手に巻き込んでおいて、なんで貴方はそんなにやる気がないんですか!?』

『【カズキさん】と呼んでも照れなくなったのはいいんですが、本番中にそういう言葉使いしちゃいけませんよ？　小さい子もお母さんと一緒に見てるそうですから』

『なぁ!?』

そこには漫才のようなやり取りをする俺と会長さんの姿が。

自覚はあるのよ？
直す気が無いだけで。
「この料理番組、君とソーナ会長が出るようになってから視聴率がうなぎ登りだそうだよ？」
「そりゃシトリー家の次期当主が出れば人気にもなるだろうよ、にしても冥界って本当に娯楽が無いんだなと思い知ったわ」
木場がポップコーンを食べながら話しかけてくる。
会長さんが出てるにしても、なんでこれで人気が出るんだ？
俺が喋る度に笑われるし。
「ソーナ会長自身の人気も上がっているみたいです、頑張って料理する姿がいいんだとか」
「料理は普通に出来るんだよね、料理は。皮剥きの速度でモグラさんに負けるけど。お菓子は言わずもがな」
番組中に毎回モグラさんと会長さんの皮剥き勝負を行い、会長さんは毎回僅差で負け越している。
ずっと俺の手伝いをしてくれていたモグラさんは、かなりのスピードで野菜の皮を剥ける迄に上達しているのだ。

調理には自信があったからか、収録後に負けて凹んだ会長さんを慰めるのが大変なんで個人的にはあの企画無くして欲しいんだけど。

モグラさんにお願いしても手加減しないし。

しかし小猫ちゃん、さっきから冥界の番組に詳しいね？

意外とテレビ好きなのかね、前にも使い魔バトルとか見てるって言ってたし。

「そういや匙が悩んでたぞ？　週刊誌とかに【お似合いの二人】とか、【夫婦漫才】とか書かれてて、このままだと会長が盗られるとかって……」

「友達から好きな人を奪うほど俺は鬼畜じゃない。だから二人とも、その凶器を仕舞いなさい」

イッセーの余計な一言で朱乃さんに電気が走り、ゼノヴィアの手にはデュランダルが握られる。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。

「でもソーナ会長がアシスタントで入ったのは、カズキ先輩の提案だって副会長さんから聞きましたけど……違うんですか？」

「セラフォルーさんがこの間のお詫びにお願い聞いてくれるって言うから、会長さんの夢の後押しにもなるかと思って言っただけだからね？　実際学校を建てる話も結構進んでるらしいし」

ギャスパーくんやめてくれ、二人を刺激する様な事を言うんじゃない。
最近仲良くなってきたし、この間ニンニク克服の為に料理を作ってあげたじゃないか。
「貴方がお兄様に進言した事もあって順調だそうよ？　はたから見たら貴方、ソーナの気を引きたくて頑張ってる様にしか見えないわね」
「変な事言わんでください、ゼノヴィアが興奮して俺の首元に聖剣を突きつけてるじゃないですか」
リアス先輩が茶化すように言ってくる。
微笑みながら何言ってんだこの人。
やめてゼノヴィア。
聖剣でも人間は刃物に刺されたら死ぬんだよ？
小猫ちゃん、これ以上その番組見てると俺の命が危ないから別のチャンネルに変えて。
「……嫌です」
わぁい、小猫ちゃんが反抗期だ。
体育祭の借り物レースで抱き上げてから、時々小猫ちゃんが冷たくなる。
そんなに嫌がると思わなかったんだよ、ごめんなさい。

「そうだ、私カズキくんに渡す物があるのよ」
ようやく番組が終わって命の危機が去ると紫藤さん、いやイリナさんに13枚のトランプが入ったケースを渡された。
全部スペードで、そのうち一枚は表が白紙だ。
なにこれ？
「これは『御使い（ブレイブ・セイント）』を生み出す為のトランプ。ミカエル様から貴方に渡すように託されていたの」
「『御使い』……要は《悪魔の駒》の天使版って事？」
「大体そんな感じね、その白紙のカードを使う事で天使に転生できると仰っていたわ。本当は会ってすぐに渡すつもりだったけど、色々とあって渡せなかったのよね」
イリナさんが悪戯っぽく睨んでくるがスルー。
会長さんを指導している時に来たそっちが悪い。
「サーゼクスさんからも《悪魔の駒》貰ったけど、なんでみんなして俺に人間辞めさせようとするのかね？」
「貴方ね……魔王から直接駒を授かる事が、どれだけ凄い事かわかってないでしょう？」

「そのトランプだって、今は四大熾天使（セラフ）の方々しか持っておられない希少なものよ？　ちなみにスペードはミカエル様の象徴ね」
マジか、そんな貴重なモン俺に渡すなよ。
あの駒もケースに入れたまま押入れに突っ込んじゃったよ。
……言わなきゃバレないよね？

「修学旅行か……班分けとかどうしよ」
昼休み、イッセーやゼノヴィアたちと飯を食いつつふと呟く。
ボッチになったら悲しくて死ぬ。
「私たちと組めばいいじゃないか。アーシアにイリナ、桐生もいるしきっと楽しいぞ？」
「やめろ。男子に混ぜて貰えなかったから、しょうがなく女子の班に混ぜて貰いました～みたいな空気になる。俺の精神が擦り切れて暗黒面に堕ちてしまう」
ゼノヴィアが俺の作った特大の弁当を食べながら誘ってくれる。
気持ちは嬉しいが、その案は俺の精神衛生上よろしくない。
「カズキも俺たちと組もうぜ。どうせこっちは松田、元浜の嫌われ者トリオで一人余る

しな」

「おう、来い来い。独りモンは大歓迎だ」

「女性の神秘について、夜通し語り合おうではないか」

イッセーの提案に、松田と元浜も快く迎えてくれる。

いい奴らだな、言葉はアレだったけど。

「だったらこのメンバーで組みましょうか。アーシアとイリナは兵藤と、ゼノヴィアは瀬尾と一緒の方がいいんでしょ？」

桐生さんの言葉に三人とも頷いている。

「貴様、敵だったのか！」

「モテる奴は惨たらしく死ねばいい……」

見事な手の平返しだな、俺も向こう側なら全く同じ事をするけども。

その後最近更に仲良くなったイッセーとアーシアちゃんのイチャイチャを見せつけられ、松田と元浜がイッセーに呪詛を囁きつつも修学旅行はこのメンバーで行動する事が決まった。

初めての修学旅行、今から楽しみだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

放課後の部室。

みんなでお茶を飲みながら修学旅行の話をしていると、カズキが遊びにやって来た。
「あらカズキくん、いらっしゃい。ソーナとの訓練はもういいの？」
「善かれと思ってとはいえ、無理矢理テレビの仕事押し付けちゃいましたからね。生徒会の仕事もあるので今日はお休みです」
「はい、お茶ですわ」
「どうも朱乃さん。みんなえらく楽しそうでしたけど、なんの話をしてたんですか？」
カズキが貰ったお茶をすすりながら尋ねてくる。
「部長たちが修学旅行に行った時の話を聞いてたんだ。しっかりルートを決めないと、色んな所は回れないなってさ」
「ほほぅ、リアス先輩。その話詳しく」
俺が喋った途端、カズキは目つきを変えメモを持ちながら部長に詰め寄る。
そういやカズキってこういうイベント大好きだったな。
ライザーとの合宿とかでもはしゃいでたし、普段は何かと凄すぎる奴だけど、こういう所は俺たちと同じ高校生だって思える。
部長と朱乃さんもそんな姿が面白いのか、苦笑して楽しそうにカズキの質問に答えている。
「やっぱネックは移動時間か……バスやら地下鉄のダイヤを把握しないとダメだな」

「そんなに大変なら、移動は魔法陣とか使えばいいんじゃないか？」
俺がそう言うと、カズキと部長が同時に溜息を吐きながら頭を振る。
「わかってない、わかってないぞイッセー。旅行ってのは、移動も含めて旅行なんだ」
「その通りよ、ましてや行くのは京都。景色やその場の空気を感じつつ移動するのがいいんじゃない」
二人はそう言うと固く握手を交わす。
な、なんだこの二人のシンクロっぷりは!?
ちょっと妬けちゃう位に意気投合していらっしゃる!?
カズキはその後も部長と京都の名所なんかの話をしつつ、買い物があると言って一足先に帰っていった。
「カズキくんって本当に不思議だわ、普段と戦ってる時の差が激しすぎね」
「実際は優しくて面白い奴だよ、私はどちらのカズキも好きだ」
「うふふ、もちろん私もですわ。さっきみたいな所もかわいいですし♪」
イリナが頬を掻きながら呟き、ゼノヴィアと朱乃さんが惚気つつ笑いながら答える。
俺も人の事言えないかもだけど、こんな美少女二人に惚れられてるカズキが羨ましい。
カズキは二人の事どう思ってるんだろう？

普段は少しいい加減な所もあるけど、いざ戦いになったらとんでもなく強い。
木場や匙と同じく、俺の越えたい壁の一つだ。
……ちょっぴり高すぎるけどな。
その後も学園祭でやる出し物の話をしていると、突然みんなの携帯が鳴り出した。
「――行きましょう」
部長が真剣な声音で言う。
『禍の団』の、襲撃だ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「そんでその……『英雄派』？　ってのと戦ったのか。みんな怪我とかなかった？」
夕飯を食べ終わり、お茶を飲みながら俺が帰った後に起きた出来事を聞く。
最近テロリストの襲撃が頻繁に起きているらしく、その度にリアス先輩たちが対処しているそうだ。
「あぁ、影使いが少々やっかいだったがそれだけだな」
「いくら敵が神器を持っていても、赤龍帝や聖魔剣使いにそうそう勝てる者もおりませんもの」
二人ともお茶を啜りながらのほほんと答える。
まぁこの人らに勝てるようなのが、そうポンポン襲ってきたら怖すぎるわな。

「たまには俺も手伝おうか？」
　毎回は御免被るが、暇な時くらいなら手伝ってもいいのに全くお声が掛からない。
「私たちで十分対応できているのもあるが、イッセーがお前に負担を掛けるのを嫌がってな」
「前回の事、気にしてるみたいですわ」
「あ～……やっぱりか」
　なんか最近やけに親切だとは思った。
　自分から俺のジュース買いにパシったりしてたし。
　反省してるならそれでいいんだから、そんなに気にしなくても……。
　まぁ今度直接言っておこう。
「前回といえばカズキくん。約束、覚えているかしら？」
「約束？　……あぁ、何でも言う事聞くってやつですか？」
　危ない、思いっきり忘れてた。
「今、間がありましたわね……まぁいいです。カズキくんたちもうすぐ修学旅行でしょう？　その買い物に二人で行きませんか？」
　バレテーラ。
　しかしそんなんでいいのかね？

まぁ本人が言ってるんだからいいのか。
「それじゃあ今度の休みにでも行きましょうか」
「うふふ、楽しみにしてますわ♪」
いつもの三割マシでニコニコしている朱乃さんに、指切りまでさせられた。
あれま、本当に嬉しそうだ。
こんなに喜んでもらえると、こちらとしても気持ちがいい。
どうせだから昼飯も外で食べるか。
「つー訳でゼノヴィア。今度の休みの昼飯は適当に済ませるか、イッセーの所でご馳走になってこい」
「む、ズルいぞ！　私もカズキと買い物に行きたい！」
そこで今まで此方を睨むだけだったゼノヴィアが文句を言いだした。
というかなんだ、その子供みたいな怒り方は。
しかし俺にはゼノヴィアを黙らせる魔法の言葉がある。
「お前こないだ駅前のバイキング行きたがってただろ？　今度そこ連れてってやるから今回は我慢しろ」
「車には気を付けろよ？」
チョロい。

38話

今日は休日。
朱乃さんが現地集合がいいと言いだし、女の人を待たせる訳にもいかないので一足先に駅前までやって来た。
モグラさんは事前にアーシアちゃんと小猫ちゃんに預けてきた。
その二人にそうしろと言われたから従ったが、なんでだろう？
しかし休日だけあって、周りはカップルでいっぱいだ。
ここで一人立ってるのは中々に苦痛だな、これ実は朱乃さんのSプレイだったりしないよね？
「お待たせカズキくん、行きましょうか？」
「はい？」
声を掛けられ振り向くと、そこには可愛らしいワンピースを着込んでほんのりと御化粧した朱乃さんの姿が。
普段着は家で見慣れているが、なんだか今日は印象が変わって見えるな。
「カズキくん？　私、何処か変かしら？」

「あぁ、朱乃さんか！　なんか普段と印象違って一瞬わからなかった。いや似合ってますよ、元が綺麗だし」
「うふふ、ありがとう♪」
朱乃さんが笑顔で応えてくれてから、二人でデパートに向けて歩き始める。
いやぁ女の子って怖いわ、本当に化粧や服装だけで印象がガラリと変わる。
いつもは綺麗だけど、今日はなんか可愛い感じだな。
「どうしました？　そんなに見つめられたら照れちゃいますわ」
む、いかん。
マナー違反って奴か。
女の子と二人で買い物なんて初めてだから勝手がわからん。
あっても食材の買い出しくらいだし。
「いや、随分と楽しそうだなって……」
「それはそうですわ、二人きりでお出掛けなんて初めてですもの。デートみたいで嬉しいですわ」
朱乃さんはそう言いながらこちらに優しく微笑んでくる。
なんだこれ、ドッキリ？
カメラどこよ？

朱乃さんが優しすぎる。
いや普段から優しくはあるんだけど、またちょっと違うというか……よくわかんないな。
「俺なんかとデートして楽しいですかね？　それじゃあ買い物は手早く済ませて、適当にそこら辺で遊びましょうか」
「ええ、ちゃんとエスコートして下さいね？」
「自信ないけど了解です」
朱乃さんはそう言うと俺の腕にくっついて来た。
やーらかい物が当たって気持ちいい。
なるほどこれがデートか、素晴らしい！
役得すぎる、もうドッキリでもなんでもいいや。

修学旅行に必要な物はパパッと購入し、荷物をコインロッカーに預ける。
その後は朱乃さんが俺の服を選んでくれたり、逆に俺が朱乃さんの服を選んだり。
まぁ朱乃さんに『どっちがいい？』って聞かれて選んだだけだけど。
デパートの近くで熱帯魚や深海魚みたいな、小さい魚のみの水族館が期間限定で開か

れていたのでそこにも行ってみた。
朱乃さんが深海魚を見て『のんびりしてるところが貴方に似てる』とか言われた。
何それ、悲しめばいいの？
ゲームセンターの前を歩いていると、朱乃さんがＵＦＯキャッチャーのぬいぐるみを見つめていたので二千円掛けて無事ＧＥＴ。
やった事ないから下手なんだよ、ほっとけ。
一緒に落ちてきた変な顔した小さな虎のぬいぐるみは、ゼノヴィアのお土産って事にしておこう。
そんなこんなで存分に楽しみつつ、昼食を取ってからまたあても無くブラブラと歩き続ける。
朱乃さんも終始笑顔で満足そうだ。
「久しいの、カズキ坊ではないか。昼間から女連れで楽しそうじゃのぅ」
急に話掛けられ声のした方に二人で振り向くと、そこにはラフな格好をして帽子を被ったお爺さん、オーディンさんがいた。
いつもの美人さんも一緒で、今日はパンツスーツ姿だ。
「お久しぶりです、オーディンさん」
「ところでお主、何故その娘を庇うように立っているんじゃ？」

「あんたが朱乃さんにセクハラかましたら、俺が痛い目に合うからだよ」
俺は朱乃さんの一歩前に出て、オーディンさんと朱乃さんの間に立っている。
とばっちりは御免なんだ。
「ほぅ？　そう言われると是が非でもやりたくなるのぅ」
ん？
何だろう、オーディンさんの気配がブレた？
そのまま朱乃さんの後ろに……っておい。
「言った側からセクハラしようとすんな」
「え!?」
俺は朱乃さんの後ろ、というかお尻の辺りに手を伸ばし、そこにあるであろうオーディンさんの腕を握り込む。
お、めっけた。
「うぉ!?　お、お主、人間の癖によく儂の動きが追えるのぉ……」
「知らん、何となくです」
最近気配とかに敏感になって来てるんだよね、理由は知らんけど。
朱乃さんは突然の出来事に驚いた様に振り向き、オーディンさんもこちらをビックリした顔で見つめている。

「すごい……じゃなくてオーディンさま！　神さまがセクハラなんてしたらいけないと、何度も言っているではないですか！」
「そう騒ぐでない。お主は本当に堅いのぅ、ロスヴァイセ」
美人さんがオーディンさんを叱っているが、当人は全く悪びれる気配もなく髭を弄っている。
その美人さん、ロスヴァイセって言うのか。
何回も会ってるのに、今日ようやく名前がわかった。
「てか、なんでこんな街中で主神さまがブラブラしてるんですか。護衛の人が迷惑でしょうに」
俺の言葉に美人さんがうんうんと頷いている。
「お前さんまで固い事を言うでないわ。赤龍帝の小僧の家でアザゼル坊と待ち合わせしとるんじゃが、ちょっとした寄り道じゃよ」
イッセーの家で？
またなんか厄介ごとか？
「そう言うお主こそ、昼間からこんな通りを歩いてるではないか」
オーディンさんが辺りを見渡しながら言ってくる。

まぁ確かにこの辺りはそういう通りだから、その手のお店や休憩ホテルが乱立している。
「勘違いせんで下さい。俺らは昼飯食った帰りに、大通りまでの近道で通っただけだっての。ねぇ、朱乃さん？」
「え、えぇそうね……？」
……朱乃さん？
なんで目を見て話してくれないの？
なんでそんなに汗かいてるの？　ねぇなんで？
俺が朱乃さんを問い詰めていると、路地から体格のいい髭をたくわえた男性が現れた。
「オーディン殿、こちらにいらしたのですか。あまり勝手に動かれては……朱乃？」
「あ、あなたは……！」
朱乃さんが驚きながらその人物、バラキエルさんを睨みつける。
バラキエルさん、なんでここに……うぉ!?
「カ、カズキくん！　これはどういう事だ!?　なんで君と朱乃がこんないかがわしい場所で一緒にいる！」
「ちょ、バラキエルさん落ち着いて!?」

バラキエルさんが俺の肩を掴みながら物凄い勢いで前後に揺さぶってくる。
うぷ、飯食ったばっかでこれはキツい!?
「朱乃、お前もお前だ。なぜこんな所に……お前にはまだ早い」
「あなたには関係ないでしょう！　カズキくんを離して！」
俺が吐き気と戦っていると、朱乃さんが俺を庇ってバラキエルさんの手を払いのける。
バラキエルさんも語気が荒くなってきている。
あの、お互いもう少し穏便に……。
「カズキくん！　確かに君には朱乃の事をお願いしたが、このような事を許した覚えは――」
「……お願い？　一体、なんの話ですか？」
バラキエルさんの言葉を途中で遮り、朱乃さんが俺とバラキエルさん、二人を見つめながら尋ねてくる。
これは……なんかマズい？
「……カズキくんがこの地に来る際、私が彼に頼んだのだ。『朱乃の事を護ってやってくれ』、と」
バラキエルさんの言葉を聞いた朱乃さんはその場でたじろぎ、手を口元に当てて目を

潤ませる。

「じゃあカズキくんが今まで私と一緒にいてくれたのは、身体を張って助けてくれていたのは……その約束の為？　本当は私の事なんて、どうでも……」

「え!?　いやそんな事な……！」

「……ごめんなさいカズキくん。私、先に帰ります」

朱乃さんは俯きながらそう言うと、魔法陣を展開して消えてしまった。

ちょ、これどうすんのよ!?

朱乃さん泣いてたじゃん！

と、とにかく謝らないと!?

「落ち着かんか小僧。詳しい事情はわからんが、あの娘は今すぐ消えてしまう訳ではなかろう？　痴情の縺れと言う奴は、少しばかり間を空けぬと纏まらぬ物よ。今はそっとしておいてやる事じゃ」

俺が一人でアワアワしていると、オーディンさんが諭すように話し掛けてくれる。

な、なんだこの説得力は……これが神の御言葉って奴なのか……！

今ほどこの人が神様なんだと実感した事はないッ！

「……わかりました。オーディンさんはイッセー、赤龍帝の家に行くんですよね？　良かったら案内しますよ」

「うむ、ではそろそろ向かおうかの。よろしく頼む」
　オーディンさんは俺の言葉にゆっくりと頷く。
　俺はその言葉を聞いた後に、朱乃さんが消えた場所を見つめるバラキエルさんの元に向かう。
「バラキエルさん。後で朱乃さんの誤解を解くの、協力してくださいね？」
「あぁ……その、すまなかった。急な事だったので気が動転してしまって……君を認めない訳じゃないんだ。ただそう言う事はもう少し大人になってから――」
「大丈夫です、バラキエルさんがいい人なのはわかってますから。そもそも誤解ですからね？」
「……すまん」
　バラキエルさんは頭を下げてから謝ってくれ、オーディンさんの元に戻っていった。
　俺もオーディンさんを先導しながら、イッセーの家へと向かって歩いていく。
　その道中で、ロスヴァイセさんが俺の隣に来て心配そうに話し掛けてくる。
「その、大丈夫ですか？　ごめんなさい、折角楽しんでいたのに私たちが声を掛けた所為で……」
「いえ、悪いのは隠し事をしていたこっちですし……まぁ説得できる様に頑張ります。大切な先輩で、一緒に住んでる家族ですから」

さてどうやって話そうか……はぁ、どうしてこうなった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

オーディン様が人間界の日本に、神々との会談の為赴く事になった。

私、ロスヴァイセも御付きの戦乙女（ヴァルキリー）としてそれに同行する事になっている。

オーディン様には、職場の隅で埋もれていた私を拾い上げて貰った恩義がある。

全力で警護させて頂く。

そう意気込んでいたけれど、オーディン様は寄り道が大好きなので彼方此方いろんな場所へと行ってしまう。

その度に、私や今回堕天使側から送られてきた警備の者を撒こうとするからタチが悪い。

今回見つけた時には、何やらいかがわしい看板が乱立した路地にいましたし。

「オーディン様、勝手にいなくならないで下さいとあれ程言ったのに！　今はテロリストの行動が活発になっていて、とても危険なんですよ！」

「あ～わかったわかった、そう大声で叫ぶ者ではないわ。本当に堅物じゃのぅお主は、そんなだから勇者の一人も導けんのじゃ」

「い、今は関係ないでしょう!?」

私だって好きで独り身な訳じゃないです！
好きで彼氏いない歴＝年齢な訳じゃないんですぅ！
「そんなに怒らんでも……そうじゃ、今度『瀬尾　カズキ』という小僧でも見てみるといい」
「瀬尾……あぁ、以前冥界でお会いした。彼は英雄や勇者足り得る存在なのですか？」
「どうじゃろうな。勇気ある者という感じではなかったが、なかなかどうして。最近の人間にしては、それなりに見所はあると思うがの？」
オーディン様がこんなに人を褒めるのは、私が仕えてから初めてだ。
そういえば以前のテロでは、オーディン様と共に戦ったと聞いた。
通路ですれ違い、軽く挨拶した程度にしか彼の事は知らない。
その時は礼儀正しい普通の男の子にしか見えなかったが……オーディン様が気に入る程の人間、きっと只者ではないのだろう。
「まぁどうするかは自分で決め……おぉなんじゃ、丁度そこにおるではないか」
オーディン様はそう言うと、また一人で歩いて行ってしまった。
私も後に続くと、そこには例のカズキくんと可愛らしい女の子の姿が。
も、もしかしてデート中なのでは……？
オーディン様が声を掛けるとこちらに振り向き、なんでもない様に会話をし出した。

しかもオーディン様をさん付けな上、所々タメ口である。
色々と凄い少年だ。
オーディン様はそれを特に気にする事もなく、笑いながら会話を続けている。
というかオーディン様、貴方以前この女の子にセクハラしたんですか。
全く、主神としての立場という物を少しは自覚して頂かないと……!?
私がそんな事を考えていると、目の前で驚く事が起きる。
今まで彼らの前にいたオーディン様が一瞬で二人の背後に回っている。
これも確かに凄い事だが、彼の方は仮にも北欧の神々の主神なのだから不思議な事ではない。
魔術か何かで、知らぬ間に背後に回ったのだろう。
驚いたのはその魔術に惑わされず、女の子のお尻を触ろうとしたオーディン様の手を掴んでいた事だ。
人間の身でありながら、神の動きについてくるとは何とも凄い少年だ。
これにはオーディン様も驚いたようで、何で解ったのか尋ねていた。
本人の答えは『何となく』という、少々アレな答えだったが。
成る程、これは確かに英雄の素質があるかもしれない。
用事が片付いたら誘ってみようかな?

そう思っていたが、何やらゴタゴタしてきた所為で暫くは無理そうだ。
折角の英雄候補なのに……グスン。

39話

オーディンさんを無事に兵藤家まで送り届けて帰ろうとすると、リアス先輩に声を掛けられた。

どうやらあの後、朱乃さんはリアス先輩の所に行っていた様だ。

朱乃さんのいる部屋まで行って声を掛けてみたが、顔を出すどころか返事すらして貰えなかった。

「すみませんリアス先輩……朱乃さんの事、よろしくお願いします」

「貴方には何度も助けられたもの、出来る事はなんでも協力するわ。朱乃も少し落ち着けば、ちゃんと話を聞いてくれるわよ」

俺が玄関で頭を下げると、リアス先輩は苦笑しながら励ましてくれる。

「小猫ちゃんも、モグラさん預かってくれてありがとうね」

「カズキ先輩。私、何も出来ないけど……あまり落ち込まないで下さい」

小猫ちゃんが悲しそうな顔で言ってくるので、何も言わずに頭を撫でておく。

気を使わせちゃってごめんね。

自宅に帰って、朱乃さんとゼノヴィアの帰りを待つ。

モグラさんも空気を読んでくれているのか、俺の中に引っ込んでくれている。
一人リビングで何もせずに待っていると、玄関からガチャリという音が聞こえてきた。
そのまま廊下を歩き、このリビングへと入ってきた……が。
「あれ……朱乃さんは？」
「その……暫くは、イッセーの家で世話になるそうだ」
朱乃さんが出て行ってしまった。
正確に言えば、イッセーの家の以前住んでいた部屋に暫く泊まるそうだ。
「あのな、カズキ。朱乃さんもお前に会うのが嫌な訳じゃないんだ、ただ気持ちの整理をだな……」
ゼノヴィアが物凄く頭を使いながら、言葉を選んで俺を励まそうとしてくれる。
そこまで俺は凹んで見えるのか。
「わかってる、お前にも気い使わせて悪い。もう少しだけ我慢してくれ」
「いや、私が言いたいのは――」
「飯は食べてきたんだろう？　ゴメン、今日はもう休む。おやすみ、ゼノヴィア」
「……あぁ、おやすみ。今日はゆっくり休むといい」
ゼノヴィアの優しい言葉を背中で受けながら、俺は自分の部屋へと戻った。

何やってんだろ俺。
折角ゼノヴィアが気遣ってくれてるのに、最低だ。
明日、ちゃんと謝らないと……
その日の夜。
一人いないだけなのに、家の中がやけに静かだった。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
最近カズキと朱乃さんの雰囲気が気まずい。
どうにもこの間の休日に二人で出掛けた時、なにかあった様だ。
朱乃さんはなにも言わないし、カズキも自分が悪いからとしか話してくれない。
ゼノヴィアは二人を仲直りさせようと、アーシアと小猫ちゃんにも協力して貰って色々と頑張っている様だ。
俺もそれに協力する為に、気晴らしになるかと思ってカズキを冥界のグレモリー領地下に作られた訓練場に連れてきた。
アザゼル先生とサーゼクスさまが用意してくれた、俺たち専用の頑丈な訓練場だ。
今日はグレモリー眷属の男たちだけでここに来ている。
女性陣はゼノヴィアの呼びかけで朱乃さんの方に行っている様だ。
ここでなら多少暴れても問題ないからな、身体を思いっきり動かせば少しはスッキリ

するんじゃないか？
そう思ったんだけど……
「うごご……」
「カ、カズキくん!?」
ダメだった。
何時もなら全て受け流してカウンターすら決めているカズキが、木場のフェイントに簡単に引っかかる。
反撃しようとカズキが攻撃しても、逆に木場がカウンターを決めてしまう。
頭に直撃を喰らい、カズキの上半身がギャグ漫画の様に地面に埋まっている。
重症だな、こりゃ。

「悪いなみんな、最近はオーディンさんの護衛で忙しいのに俺に時間使わせちゃって……本当はもっと特訓したいだろうに」
少し休憩する事にしてみんなで地べたに座っていると、カズキが急に謝り出した。
「何言ってんだよ、仲間が悩んでるなら力になる。それがグレモリー眷属だ！」
「僕たちは君に何度も救われている、今度は僕らが君を助ける番さ。個人的にもいつか

恩返しがしたいと思っていたしね？」
「カズキ先輩はリアス部長の眷属じゃないですけど、僕たちの仲間だもん。それに、小猫ちゃんにも頼まれてますから！」
俺、木場、ギャスパーが口々にカズキに話しかける。
カズキは困った様に笑い、ギャスパーの頭をグリグリと撫でている。
「おーおー、青春してるねぇ」
俺たちが悩んでいると、アザゼル先生が差し入れを持ってやって来た。
先生はカズキの前に胡座をかいて座ると、深く頭を下げた。
「すまなかった、俺たちのせいでお前に迷惑かけてる。あのバカ、自分で秘密にしてた事をあっさりばらしやがって……バラキエルも反省してたし、許してやってくれ」
「いや、それはもういいんだけどね。バラキエルさんが全部悪い訳でもないんだし……」
「それでも秘密にさせてたのは俺とバラキエルで、それで朱乃と揉めてんのも俺らのせいだ。せっかく上手くいきかけてたんだがな……」
アザゼル先生が嘆息しながら呟く。
うう、内容がわからないから話についていけない……。
「なぁカズキ、そろそろ話してくれないか？　どうしてこうなったのか」
俺がそう聞くと、カズキはみんなに事の顛末を話してくれた。

どうもバラキエルさんが興奮しすぎたのが原因、って事なのか？
でも、娘である朱乃さんが心配なのもわかるしな……
そうだ、過去にハーレムを何個も作ったという先生なら、何かいいアドバイスをくれるかもしれない！
「お前は難しく考えすぎなんだよ、もっと単純に考えろ。好きだと言ってキスの一つでもしてやれば、それで万事解決ってもんだ！」
アザゼル先生は堂々とそんな事を言う。
あれ、あんまり参考にならなそう？
「何でいきなりそんな話になる、つーか仮に告白したとしてだ。それで、何か変わるか？今だって同じ家で寝起きしてるんだ、それってもう恋人以上じゃない？」
「変わるぞ！　堂々とエロい事が出来る！」
「お前恋人でもないのにリアス先輩にいつもしてるし、して貰ってるじゃないか」
ぐはっ！　俺の理論が速攻で論破された！
「ぶっちゃけるとな……この歳になるまで異性の友達なんていなかったから、どうすればいいのか分からないんだよ。もうホント助けて、モテモテのみなさん」
メッチャ綺麗に土下座してる!?
カズキ……お前今、本気で追い詰められてるんだな……。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

オーディンさんに頼まれて、イッセーたちと護衛の任務に就く事になった。

朱乃さんと話す機会があるかと思って了承したのだが、なんか避けられちゃって無理っぽい。

ホントにもう、どうすればいいんだろう。

今は『スレイプニル』というオーディンさんの軍馬が引いている馬車で、夜空を移動中だ。

みんなは馬車に乗り、俺はスレイプニルくんに頼んでその背中に乗せて貰っている。

動物はいい、実に癒される。

いつもなら嫉妬するモグラさんも、高い所が苦手なのか俺の中に引っ込んだままだ。

スレイプニルくんが大きいのもあって馬車も巨大な造りになっており、外には木場、ゼノヴィア、イリナさん、そしてこちらを申し訳なさそうに見つめているバラキエルさんが護衛として、空を飛びながら警護している。

かなり高い所を飛んでいる事もあり、涼しくて夜風が気持ちいい。

「このまま風と一緒に……消えてなくなりたいなぁ……」

「カ、カズキくん、そんな事言わないで……」

俺の声を聞き取った木場が、こちらに近づいてくる。

いいんだ木場、ほっといてくれ……。
「カズキくん、本当に大ダメージ受けてるわねぇ……」
「色々と難しく考えすぎてるんだよ、暫くは放って置くしかない」
イリナとゼノヴィアが何か言ってるけど、ここからじゃよく聞こえない。
悪口かな、悪口だろうな。
「すまない……本当に……」
貴方はもう謝らなくていいから、朱乃さんと早く仲直りしてください。
いや、俺の言えた事じゃないな。
未だにちゃんと仲直り出来てないし。
あ、また凹んできた……
「はぁ……どうしようかなぁ……」
「ふむ、取り敢えず死んでみてはいかがかな？」
ほぇ？　おたく誰よ？
ってうぉ!?
ちょ、スレイプニルくん!?
急に止まったら危ないって……あ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

突然馬車が停まり、その衝撃が俺たちを襲ってきた！
何があったのかと窓を開けてみると、見知った顔が目の前あった。
え、なんでカズキがこんな近くに？
「……ぁぁぁあああぁぁぁぁ……！」
いや違う、落ちてる！　落ちてるよあいつ!?
「ちょ、カズキが落ちた!?」
あいつ俺と一緒で飛べないのに！
た、助けないと！
「あいつにはモグがついてる、こん位じゃあ死にやしねぇよ。それよりも……ちっ、面倒な奴が来やがった」
アザゼル先生が上を見ながら毒づいている。
俺も一緒に見てみると、黒いローブを着込んだ、悪っぽいイケメンが佇んでいた。
その男をバラキエルさん達が取り囲んでいる。
「何やら勝手に一人消えてくれたな。まぁいい、初めまして諸君！　私は北欧の悪神、ロキだ！」
ロキと名乗ったその男は、アザゼル先生やオーディンの爺さんと何やら言い合っている。

どうにもこの男は、爺さんがこちらの陣営と仲良くやるのが気に食わないらしい。
そのため、今度行われる日本の神々との会談を破綻させる為にやってきたそうだ。
なんて迷惑な！
「……なるほど、貴方の考えはよく分かった、我らが主神よ。――もはや話し合いなど不要、ここで黄昏を行おうではないか」
マジかよ……今度の相手は北欧の神様か!?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいッ！
この速度で落ちたら幾ら何でもシャレにならん!?
「モグラさん、禁手化ッ！」
『キュイ！』
モグラさんに頼んで即禁手化し、背中のブースターを全力で吹かして落ちる勢いを少しでも殺す。
地面が迫ってきている、このまま着陸は無理か。
最後は受け身をとりダメージを他所に流したが、地面に小さなクレーターが出来てしまった。
「あ～、死ぬかと思った」

下が河川敷でよかった、民家とかだと大変な事になってたよ。
さて、なんか襲撃っぽいから急いで戻らないといけないんだけど……どうしよ？
俺、空なんて飛べないんだけど。
いつもみたいに土の柱を伸ばしてもいいけど、川とかの近くでやると後が大変なんだよな。
決壊して川の水が溢れでもしたら大変だし。
「上でお前のお仲間が頑張ってるってのに、お前さんはこんな所で何やってんだい？」
俺がどうしようかと悩んでいると、金色の雲に乗った美猴さんがこちらを呆れた目で見ながら現れた。
「お、美猴さんいい所に。ちょっと上まで乗っけてって！」
「おま、『觔斗雲（きんとうん）』をタクシー代わりにすんな！　てか、なんで俺っちの出した觔斗雲をカズキが動かせんだよ!?」
知らんよそんなん。
とにかく急いで、ハリーハリー！
結局美猴さんが觔斗雲を操りみんなの元に駆け付けると、バカでかい犬がリアス先輩に襲いかかっていた。
それを小猫ちゃんとゼノヴィア、そして朱乃さんが身体を張って庇おうとしている。

「ありゃあ『神喰狼（フェンリル）』か？　また厄介なのが暴れてやがんな」
美猴さんが觔斗雲を停止させ、目元を僅かにヒクつかせてから呟く。
よくわからないが、美猴さんの反応と名前を聞いただけでヤバさが伝わってくる。
あそこまで如意棒を伸ばして貰って……いや、それじゃ間に合わない。
「美猴さん、よろしくッ！」
俺がそう言ってからその場で軽く跳ねた。
それだけで察してくれた美猴さんは、俺の足裏目掛けて如意棒を横薙ぎに振り抜く。
「人使いが荒いねい、まぁ気張ってこいよ……ハイイイ、ヤァ!!」
美猴さんの掛け声と共に如意棒に押し出された俺は、フェンリル目掛けて猛スピードで突っ込んでいく。
その間にもフェンリルがみんなに襲いかかろうとしているが……これなら間に合う！
「だっしゃらぁぁぁツ！」
体勢を変えて足を前に突き出し、勢いに任せて突撃してフェンリルの身体を吹っ飛ばす。
効いていないかもしれないが、これで距離は取れたのでイッセーなり木場なりがみんなを護ってくれる筈だ。

取り敢えずこれで少しは……あ。
「蹴った後のこと考えてなかったぁぁぁ!?」
「ちょ、カズキくん!?」
また落ちると思い身構えたが、身体が引っ張られて落下が止まる。
というか、誰かに抱えられてる？
「飛べないくせに、何をやっているんだお前は」
「あ、ヴァーリさん」
鎧を着込んだヴァーリさんが、落下する前に腰のベルトを掴んでくれていた。
そのままオーディンさんがいる馬車まで放り投げてくれ、その屋根に着地する。
マジ助かった、でもなんでヴァーリさんや美猴さんがここにいるんだ？
「初めまして、悪の神ロキ殿。俺は白龍皇ヴァーリ、貴殿を屠りに来た」
ヴァーリさんは、ロキという男に堂々と宣戦布告する。
あのロキって人、悪の神様なのか。
確かに性格悪そうな顔をしてらっしゃる。
「勝手に自滅した奴が戻ってきたかと思ったら、一緒に白龍皇まで現れたか。二天龍を見られた、今回はそれで満足だ。一旦退かせて頂こう」
ロキは楽しそうに笑いながら羽織っていたマントを翻し、空間を歪めて撤退を始め

た。

「だがこの国の神々との会談の日、またお邪魔させて貰う！　オーディン、次こそは我と我が子フェンリルが主神の喉笛を噛み切るだろう！　あの赤龍帝のようにな！」

ロキは最後にそう言うと、完全にその場から消えてしまった。

は？　あいつ今なんて……？

その時、俺が座っている馬車の中から慌しい声が聞こえてくる。

「イッセー！」

「イッセーさん！　？　しっかりしてください、イッセーさん!!」

「血が流れすぎてる、早く治療を！　小猫も仙術でイッセーの治癒力を高めろ！」

「はい！」

禁手化を解除した俺が馬車の中に移動すると、懸命に治療を行うアーシアちゃんと、アザゼルさんの指示を受け額に汗を浮かばせながらその補助をしている小猫ちゃん。

それを心配そうに見つめるリアス先輩と、そんなリアス先輩を抱きとめている朱乃さんの姿があった。

そして、腹に大きな穴を開け血だらけになっているイッセーが仰向けに寝かされている。

これ、ロキって奴にやられたのか？

それともあのフェンリルに……なんでイッセーがこんな事に――

「お前の所為だな、カズキ」

肩が、ビクンと跳ね上がった。

「お前はロキが襲撃してきた時、何をしていた？」

振り返ると、禁手化を解いたヴァーリさんが壁にもたれながらこちらを見つめていた。

「その……オーディンさんの馬に乗ってて、突然現れたロキに驚いて急に停まって……」

「それで落下した、か？　普段のお前ならその程度でバランスを崩したり、ましてや落ちるなどありえない筈だぞ」
「それは……」
それは……何でだろう。
突然の事だったから？
油断してたから？
考え事をしていたから？
「まぁ理由はこの際どうでもいい。本来なら倒れずに済んだかもしれない仲間が、お前の過失で死にかけている。それが今の現状だ」
「おい！　イッセーの事は、何もカズキのせいではないだろう！」
「確かに彼は強いけれど、今回は空の上での戦闘だ。飛べない彼がいただけで、そこまで戦況が大きく変わったとは思えない」
ヴァーリさんの言葉に、ゼノヴィアと木場が反論する。
「カズキは空を飛べないが、禁手化すれば縦の移動は難しくても、短時間ならブースターで横の移動は出来たはずだ。スレイプニルを使ってもいいし、お前たちの仲間のいずれかが協力していれば上手く立ち回れたろう」
ヴァーリさんはそう言いながら、ゆっくりと俺に近づいてきた。

「確かにお前だけの責任ではない、兵藤一誠もアーシア・アルジェントの力で完治するだろう。だがな、余計な事を考えて肝心な時に力を発揮出来ない奴は、仲間を殺す事になる」

額と額が触れるような、そんな至近距離で言い放たれる言葉。

ヴァーリさんが掌をこちらに向けると俺の意識は段々と意識が薄れていったが、最後の一言だけがやけに頭に響いた……

「無駄に命を散らす前に、戦場から去れ」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「イッセーさん！　良かった！」

う……俺、また気を失ってたのか。

俺が起き上がると、アーシアが涙ぐみながら抱きついてくる。

腹に空いた穴も痛みごと消えている。

そうか、またアーシアが治療してくれたのか。

小猫ちゃんも猫耳が出ているという事は、一緒に仙術で助けてくれていたようだ。

「アーシア、小猫ちゃん、二人ともありがとう。お陰で助かったよ」

お礼を言うと、二人とも笑顔で答えてくれる。

心配かけて申し訳ない。

「ところで他のみんなは？　ロキはどうなったんだ？」
「皆さんは外でお話しています」
外って事は、もう地上に降りてるのか。
どの位気を失ってたんだ？
「ロキはカズキ先輩とヴァーリが現れたら撤退しました」
ヴァーリ!?　あいつが来てるのか、一体何しに来たんだ？
取り敢えずみんなと合流しよう。
外に出てみるとそこは駒王学園の近くにある公園で、ここから少し離れた所にみんながいた。
俺がそこに向かうと、ヴァーリとアザゼル先生が何かを話し合っていた。
ん？
ベンチに横になってるのは……カズキか？
動く気配がない、気を失ってるのか？
「アザゼル、後は頼んだ」
「お前な……態々嫌われる様な真似する必要あったか？」
「その方がカズキも踏ん切りがつきやすいだろう」
「……不器用な奴だね、お前も」

アザゼル先生はヴァーリと会話した後に頭を掻きながら、溜息を吐く。
状況がまるで分からないぞ。
「イッセー！　怪我はもういいの？」
「はい、二人のお陰でもう大丈夫です。ところでこの状況は……？」
俺が部長に返事をしながらヴァーリを見ると、あいつが何かを喋るより早くゼノヴィアが口を開いた。
「さぁアザゼル先生、イッセーも目覚めたのだから説明してくれるか。何故カズキがこんな目に遭わなければならない」
ゼノヴィアはアザゼル先生を睨み付けながら尋ねる。
どうしたんだゼノヴィア。
ヴァーリだけじゃなく、先生に対しても殺気みたいな物が滲み出てるぞ……！
「あの……アザゼル先生、どういう事ですか？」
俺が尋ねると、先生は背中越しにヴァーリを親指で指しながら答えてくれた。
「実はさっき、ロキとの戦闘に対してヴァーリから共闘の提案を受けてな」
共闘!?
ロキと戦うのに、あいつが手を貸してくれるってのか!?
みんなも驚愕としている。

「正直俺たちだけで悪神と戦うのは厳しいからな。で、その条件が『カズキをこれ以上戦わせない事』だったんだよ。カズキはこいつが適当に理由こじつけて魔術で眠らせた」

話がムリヤリ過ぎたけどな。

アザゼル先生がそう言うと、ゼノヴィアは再び食って掛かった。

「何故そんな必要がある。カズキを戦わせない事に、なんの意味があるんだ」

そうだ、なんでカズキが戦っちゃいけないんだ？

ロキなんてとんでもない奴と戦うなら、強い奴は一人でも多い方がいいはずなのに。

「……アザゼル、こいつらにカズキの事を伝えていないのか？」

「本人の意思で伝えないでくれって言われてたんだよ。だがもう限界だ、これ以上は隠し通せねぇ」

「何を言ってるんだ？　私たちにもわかる様に説明してくれ」

ゼノヴィアがキレ気味に尋ねると、アザゼル先生は真剣な顔でゼノヴィアに、いや俺たち全員にある事実を告げた。

「カズキは、もうすぐ死ぬ」

４０話

気がつくと殺風景な部屋にいた。
窓はなく、あるのはドアノブのない扉だけ。
うぅ、頭がクラクラする。
えっと、そうだヴァーリさんに何かされて……てかここどこだよ。
「にしてもなんかスゲェ腹減ってんな……」
「それはそうだろう、二日も何も食わなければ腹も減る。ほら、ゆっくり飲め」
空気の抜けるような音と共にドアが開くと、よく知っている声が聞こえてきた。
駒王学園の制服に身を包んだゼノヴィアが、ゼリー飲料の入ったパックを投げ渡して来る。
「所でここ、どこ？」
「グリゴリの研究施設だ」
貰ったゼリーを啜りながら俺が質問すると、ゼノヴィアは淡々と答える。
あれ、なんか様子がおかしい？
「ってか二日？　ヤバいな、急いで帰らないとロキとか言うのが――」

「お前はここから出れないぞ。というか、出さん」
俺が立ち上がろうとすると、ゼノヴィアが急にそんな事を言い出した。
ゼノヴィアの奴、やけに真剣な顔してるけど俺またなんかやらかしたか？
「えっと……ゼノヴィア、出れないだの出さないだのってどういう意味？」
「そのままの意味だ、お前は治療が完全に終わるまでここにいろ。ロキは私たちと白龍皇の仲間たちで対処する」
ゼノヴィアはこちらに背を向け、そのまま出て行こうとする。
いや、何とんでもない事言ってから出て行こうとしてんだ!?
「待て待て待て！　何、ヴァーリさん達が協力すんの？　だったら尚の事……」
「必要ないと言っているんだ。お前はもう、戦わなくていい」
ゼノヴィアは俺の言葉を切り捨て、断言してくる。
……何もそんな言い方しなくてもいいだろう。
「何言ってんだ、戦力なんて多い方がいいに決まってんだろ。あのヴァーリさんがこっちと一緒に戦おうとする相手だぞ？　あの時みたいなヘマはもうしないからさ、俺も一緒に――」
「身体、思うように動かないんだろう？」
一瞬、言葉に詰まってしまった。

「……何の事？」
「もう隠すな、アザゼル先生から聞いた。お前の命の事も……」
「……堕天使ってのは、秘密を喋っちゃう習性でもあるのかね。困ったもんだ」
俺が肩を竦めると、今まで背を向けていたゼノヴィアがこちらに向き直る。
その眼には、哀しみと若干の怒りが混ざっているように見えた。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「カズキが死……いや、何を言って……」
アザゼル先生が何を言っているのかわからず、私はその場でたじろいでしまった。
「事実だ。このまま無理を続ければ、あいつは成人になる事なく確実に死を迎える事になる」
「それは、彼の身体が弄られている事が原因なの？」
リアス部長の質問にアザゼル先生は頷き、カズキの身体について語り始めた。
怪我が再生される度に無理矢理繰り返される、細胞の過剰分裂とその老化。
カズキが保護された時からこの症状が見られたが、その時はまだ軽度の症状だった。
しかし、コカビエルとの戦いで使った生命エネルギーの過剰使用。
これが致命的だったそうで、そこから加速度的に細胞が死んでいっているらしい。
混乱していたし、内容が難しくて全て把握は出来なかったが、何となくは理解出来た。

「俺がカズキと戦った時には、特に異常は感じられなかった。……いや、言い訳だな。あいつの寿命を削った事には変わりない」

「俺っちだってそうさ、今はこれ以上あいつを戦わせる訳にゃあいかん」

ヴァーリと美猴は苦々しい顔をしながら呟く。

彼らも自分の行動がカズキの寿命を削っていたと知って、深く後悔しているようだった。

「そ、それは私の神器で治せないのでしょうか!?」

「無理だ、あいつの症状は病気みたいなもんだからな。『聖母の微笑』で怪我は治せても、病気は治せない」

アーシアの必死の言葉もアザゼル先生は頭を横に振って否定し、木場へと向き直る。

「木場、お前この間カズキと組み手しただろう。どう感じた?」

「……何時もの彼とは悪い意味で別人でした。でもそれは、彼が悩んでいたからでは?」

「それもあるだろうが、動体視力や反射神経が著しく衰えてきてる。後は体力の低下だな、覇龍状態のイッセー相手にした時なんか殆ど勘で動いてやがったそうだ」

アザゼル先生はそう言ってから、私達に問いかけてくる。

「お前らは感じた事はなかったか? あいつが自分を蔑ろにしすぎる、他者を優先しすぎると。俺がこれ以上戦うのを辞めるように言っても、あのバカ人の話を聞きやし

ねぇ」

感じた事は……ある。

あいつはいつも、自分よりも他の者を優先して助けようとする。

それは性格から来ているのかと思っていたが……。

自分が死ぬのがわかっていたから？

だから他者を助けようとしてるのか？

自分がいくら傷付こうがいずれ死ぬから、死んでも構わないから無茶も平気でするとか？

「ツバカにしてるのか、あいつは!?」

私はこみあげてきた怒りに任せ、地面を思い切り殴りつけてしまった。

拳から血が滲み出て、アーシアが治療しようと駆け寄ってきてくれる。

「そ、そうだ！　悪魔になれば寿命とか伸びるんだし何とかなるんじゃ!?　俺だって死にかけてたけど、それで生き返ったんだし！」

「そんなもん初めに考えた、だが無駄だった。駒の材料になる鉱石で試したが、あいつの身体が拒絶する様に弾かれるのさ。理由はわからんがな」

イッセーの案も、アザゼル先生はあっさりと否定する。

きっと私たちが思いつく様な方法は全て試したのだろう、カズキを救う為に必死に考

えて。

「そんな状態なのに、彼は私の事を気に掛けて……？」

「分かってやってくれ、朱乃。あいつは決して、俺たちの指示にただ従ってた訳じゃないんだよ。これ以上は、戦いが終わったらあいつからお前が直接聞け」

朱乃さんはその話を聞き、その場に座り込んで口から声が漏れない様に手で覆いながら涙を零す。

それでもみんなの耳には、何度も繰り返される『ごめんなさい』という悲痛な言葉が届いていた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「何で私達に何も伝えず黙っていた」

ゼノヴィアがそう言いながら、こちらを睨みつけてくる。

俺は何も答えずに黙ったまま、ゼノヴィアの顔を見つめ続けた。

「お前はそうすれば楽かもしれんがな!?　お前が突然死んだ方が、私たちは悲しいんだ！　この位いつもお前がバカにしている私にだってわかるぞ、お前は私以上のバカだ！」

「別にいいじゃねぇかバカでも。俺は騒がしくて楽しいお前らと一緒にいられれば、それでよかったんだよ」

「なんだその自分勝手な理由は!?　私達の事も少しは考えろ！」
「自分勝手で悪いかッ!?　もし俺が本当の事言ってたらいつも通りに過ごせたか!?　いつも通りに接してくれたか!?　俺がいるだけで暗くなる様なお前ら、見たくなかったんだよッ！」
　怒鳴ってしまった。
　叫んでしまった。
　こうなったらもう自分でも止められない。
「親に捨てられて、施設に預けられてもそこに居場所なんてなくて、訳わかんねぇ奴に殺されかける俺のクソみたいな人生！」
「お前らはそんな俺がようやく手に入れた、初めての友達なんだよ！　大切な居場所なんだよ！　それを、俺の所為で壊したくなんかなかったんだよッ！」
「笑いながら声を掛けてくれて、バカやって、それでみんなに怒られて。そんな毎日が大切なんだ、大好きなんだ！　俺が、俺さえ我慢してればみんなそのままなんだ、だったらそれで――――」
「そうじゃないだろう!!」
　俺の自分勝手な言葉を黙って聞いていたゼノヴィアが、俺の言葉を遮り襟首を掴んで怒鳴りつけてきた。

「え……？」

「確かに私達には何も出来ないかもしれないが……なんでお前は、そうやって辛い事を何でも一人で抱え込もうとするんだ!?　目の前に私だっているだろう！」

ゼノヴィアは自分の胸に手を当てながら、唾を吐きかける様な至近距離で捲くし立ててくる。

「私はそんなに頼りないか？　そこまで私は役立たずか!?　私は……お前を救う事は出来なくても、手助け位なら出来るつもりだぞ!?」

「私が頼りないならそれでもいい。お願いだから、誰かに頼る事を覚えてくれ……！」

ゼノヴィアは大粒の涙を零し、俺の胸元に頭を押し付けてから空いている手を握りしめ、肩に一発トンと軽く打ちつけた。

そんな軽い一発が、何故かとても痛かった。

「……そろそろ時間だ、私はもう行く。また来るから、それまで大人しくしていてくれ」

ゼノヴィアは涙を拭いながらドアに向き直り、そのまま部屋から出て行ってしまった。

自分以外誰も居なくなった部屋で、俺はその場に座り込み自身の横にある壁を力任せに殴りつける。

「俺に、どうしろってんだよッ……！」

「カズキ、お前そんな所に座り込んで何してんだ?」
　声に反応して振り向くと、ドアの前にジャージ姿の匙が何かを抱えて立っていた。
「なんで匙がここに……?」
「アザゼル先生に拉致されてな、ここで絶賛特訓中だ。てか俺の事はどうでもいいんだよ、お前こそこんな所で何してんだ?」
　匙が不思議そうにこちらに質問してくる。
　こいつ、俺の話聞かされてないのか?
「俺は、何してんだろ。よくわかんなくなってきた……そうだ、イッセーがどうなったかわかるか?」
　アーシアちゃんがいたから死にはしてないだろうけど、やっぱり心配な物は心配だ。
「兵藤ならこれから行われる会談の会場で、ロキを待ち伏せしてる筈だ。現れたら会長達が、兵藤達ごと大暴れしても平気な採石場跡地に転送する事になってる」

「は!?　会談って今日なのか!?」
　じゃあロキもすぐに来るって事で……
「早くみんなの所に――――」
「行ってどうするんだ？　そんな身体で、モグさんもいないのに」
　ドアに向かおうとした俺は、匙の言葉で足が止まる。
　モグラさんが……いない、今まで気づかなかった。
　それに匙、やっぱ身体の事知ってたのか。
「モグさんがいない事にも気付けない様になってるお前が行っても、周りに迷惑掛けるだけじゃないのか？　それでも行きたいのか？」
「……」
　俺の身体はボロボロだ。
　筋力はまだ誤魔化せるが、視力も落ちてるし身体の反応が遅すぎる。
　下手すりゃ戦場に着いた途端、ロキに殺されるかもしれない。
　匙の言う通り、ここで待ってるのが正しい。
　みんなにも迷惑をかける事はなくなるんだろう。

けどそんなもん、もう知ったことか。
「お前らみんなしてゴチャゴチャうるせぇんだよ！　もう知るか、俺は俺のやりたい様にやる！」
俺の癖に色々考えすぎてた。
俺にシリアスなんて似合わない、好き勝手に暴れてやる！
それであいつらに嫌われたら……すげぇ凹むけど、俺の知らない所で死なれるより、守って嫌われる方がよっぽどマシだ！
……ゼノヴィアも、他のみんなも同じ事考えてたんだろうけどな。
「周りのみんなに迷惑かけてもか？」
「だから知らん、もう決めた！　そもそもな、周りに迷惑掛けるのなんておれにとっちゃ今更なんだよ！　許容して下さいお願いします！」

「ひでぇ事堂々と言いやがるな、お前は」
「そんな訳で匙、お前は人質だ。俺を無事に現場まで送り届けろ。弱ってもお前をどうこうするくらいなら……」
「よし、じゃあまずはこれ。ここから拝借してきた転移装置だ、お前の自宅と戦場になる採石場跡地を俺が登録しといた。簡易式って書いてあったし壊れ易いから注意しろ、あとこっちはモグさんな」
俺が匙ににじり寄ると、あいつは抱えていた包みを俺に手渡してきた。
その包みには丸い宝玉が着いた機械と、器用に鼻ちょうちんを作って寝ているモグラさんが入っている。
あ、あれ？
なんでこんな準備よく……あるぇ？
「そろそろ会談が始まる頃だ、俺も最終調整があるってシェムハザ副総督に言われてるからもう行く。気をつけて行けよ」
匙はそう言うと、ドアから出て行こうとする。
「ちょ、待てよ匙！　お前、俺を止める為に来たんじゃないのか？」
「俺はそんな事一言も言ってないぞ、まぁ会長にはそう頼まれてたけど。お前が行くって決めたなら、俺は手伝ってやるよ」

　匙は笑いながらそう言ってくれるが、絶対後で会長さんにお仕置きされるよな。
　下手すりゃリアス先輩達からも。
「もちろん俺もお前には生きてて欲しいさ、大事なダチだからな。でも、お前がお前らしくなくなっていく所も見たくないんだよ。たとえ姫島先輩やゼノヴィアさんに恨まれたとしてもな」
「いや、お前……それでいいのか？」
「お前は俺の頼みを聞いて強くしてくれた、なら今度は俺がお前の頼みを聞く番だ。師匠には恩返ししないと、だろ？」
　匙はそう言うと、手を頭の高さくらいまで挙げる。
「行ってこい、カズキ。お前らしくな」
「……ありがとう、行ってくる！」
　俺は匙の掌に自分の掌を振り抜いて打ち鳴らしてから、転移装置を起動した。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「さて、お話は終わりましたか？」
「うげ、副総督。見てたんですか？」
「さぁ、貴方も最終調整が残っている。手早く済ませてしまいましょう」
「あれ、怒らないんですか？　アザゼル先生の指示で軟禁する筈だったんじゃ……」

「ええ、ですが備品である転移装置が『たまたま』ここに置いてあり、それが誤作動して『偶然』迷い込んだモグラさんと一緒に転移してしまったのなら、それは事故ですから」
「……ありがとうございます」
「時間がありません。貴方の中に埋め込んだヴリトラ系の神器、これらの覚醒を促します。辛いかもしれませんが、大丈夫ですか？」
「友達がみんな死ぬ気で頑張ってるんです。俺もそんくらいしなきゃ、顔合わせらんないですよ」
「そうですか……じゃあ死んだ方がマシかもしれない位痛いですけど、大丈夫ですね」
「え……？」

41話

ロキとの戦いに俺たちグレモリー眷属とヴァーリチーム、オーディンの爺さんの御付きの戦女神であるロスヴァイセさん、タンニーンのおっさん、そしてバラキエルさんで迎撃に出た。

一度はグレイプニルで捕縛したフェンリルだったが、それよりも小柄な奴がもう二体現れる。

フェンリルに子供がいたなんて聞いてないぞ!?

オマケに龍王の一角、『終末の大龍（スリーピング・ドラゴン）』ミドガルズオルムの模造品まで大量に出て来やがった！

みんな連携して戦っているが、一撃でも受けたら致命傷のフェンリルと模造品とはいえ龍王の一角が相手ではかなり厳しい。

せっかく爺さんが貸してくれた頼みの綱の『ミョルニル』のレプリカも、俺がエロエロで邪な心の持ち主だから雷が出てこないらしいし……くそ、攻め手が足りねぇ！

「仲間の心配かね？　余裕じゃないか、赤龍帝」

「ぐ!?」

俺が考え事をしていると、ロキから魔術の光が放出されこちらに襲い掛かってくる。
それをなんとか躱して反撃でドラゴンショットを打ち込むも、防御術式で後方に逸らされてしまった。
俺とヴァーリが相手をしている悪神ロキも伊達に神様やってない。
あのとんでもなく強いヴァーリ相手に、軽口を叩く余裕までありやがる。
「ふむ、高速で動き回る白龍皇よりも赤龍帝の方が捉えやすいか。力を譲渡されても面倒だ、まずは赤い方から殺すとしよう！」
ロキの手がこちらに向けられる。
捉えにくいヴァーリよりも、俺を先に取りに来たか!?
「無視は酷いんじゃないか？」
ロキの意識が俺に向いた瞬間、ヴァーリが奴の背後に回った。
既にヴァーリの手にはデカい魔力が込められている、あの至近距離なら流石のロキでも――
「安心してくれ、無視なんてしないさ」
「ぐはっ！」
ヴァーリの攻撃が放たれる瞬間、横からフェンリルに噛み付かれた！
あのサイズは子供じゃなくて親の方か!?

よく見ると、親フェンリルの近くに鎖を加えた子フェンリルの姿が！
いつの間にか解放してたのか!?
「ふはははは！　まずは白龍皇を噛み砕いたぞ！」
「くそ、ヴァーリ！」
俺はヴァーリを助ける為に親フェンリルに突撃していく。
ここでお前に倒れられたら、ただでさえ薄い勝ち目が更に薄くなっちまう！
親フェンリルはヴァーリを咥えたまま、動かずにこちらを迎撃しようとしている。
俺くらい余裕って事か!?
「馬鹿にしやがって！」
「犬コロ相手にそんな事言ってるから馬鹿にされんじゃね？」
その時、突然声が聞こえてきた。
ここに居るはずのない、居てはいけない男の声が。
魔法陣が親フェンリルの前に展開され、そこから俺の友達が現れる。
「カズキ、何故ここに来た……！」
「あんたこそ下半身から犬生やした上に身体中に穴空けて何やってんですか、イメチェン？」
ヴァーリが睨みつけながら発する言葉に、至極ぞんざいに返すカズキ。

親フェンリルは咥えていたヴァーリを投げ捨て、突然現れたカズキを噛み砕こうと口を大きく開いて襲い掛かった。

「臭い口開いてんじゃねぇよ……おすわりいいいッ!!」

カズキは親フェンリルの牙を上に跳んで軽々躱し、頭部を思いっきり殴り付けた。

殴られた親フェンリルは頭を地面に減り込ませ、それを引き抜こうともがいている。

なんで引き抜けないんだろ……あ、モグさんの力で周りの土を固めてるのか！

「それじゃあ伏せだろ、躾がなってない犬だな」

カズキはそう言いながらこちらに向かって歩いてくる。

カズキの奴、あれで本当に弱ってんのか!?

「ってそうじゃない！　カズキ、お前なんでこんな所に来てんだッ！　来んなって言っただろうが！」

「あん？　なんで俺がお前らの言う事聞かなきゃならん。あ、ヴァーリさんこれ前くれたからお返しね」

カズキはそう言うと、ヴァーリに何かを投げ渡した。

あれは……小瓶？

あ、『フェニックスの涙』か！

いやそれよりも、なんだその言い草は！

「俺らの思いやりを何だと思ってんだ！」
「お前らの気遣いは嬉しいけどな、俺は俺のやりたい様に……ッ！」
カズキは言葉の途中で、何かに気付いたようにブースターを吹かせて飛び出した。
急にどうしたん……朱乃さん!?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
私はこんな所で死ねない。
ここで勝利し、生き延びてカズキくんに謝るまでは。
私の身勝手な行動で彼を苦しめてしまった。
傷付けてしまった。
許してもらえないかもしれない。
いや、彼はきっと笑いながら許すのだろう。
自分がどれ程傷付いても、周りが傷付く事を嫌がる人だから。
それでも私は、彼に謝罪する為に勝ち抜いてみせる。
そして、彼がもう戦う必要がないくらい強くなってみせる！
それが、私が彼に出来る数少ない事の一つだから!!
「はぁぁぁぁッ!!」
みんなの攻撃で弱っている所に私の雷光を浴びせ、ようやく量産型の龍王を一体沈め

た。

次は――――

「朱乃！」

っ敵を倒して油断した！

フェンリルが既に目前まで迫って……躱せない!?

その時、私に何かが覆い被さった。

それを何処か懐かしく感じながら見上げると、そこにあったのは私が避け続けていた自分の父の顔。

腹部には牙が刺さり、血が滲み出ている。

どうみても致命傷だ。

「ど、どうして……」

我ながら酷い問い掛けだとは思ったが、父はそんな私に口の端から血を漏らしながら笑みを浮かべて答えた。

「カズキくんじゃなくて、すまないな……お前まで、失くす訳にはいかないんだ」

そう言うと、父は口から血の塊を吐き出した。

大きさから見て子供の方のフェンリルは一度父を口から離して距離を取り、今度こそ父にとどめを刺そうと再び襲ってきた。

「っ！　やらせない!!」

私は咄嗟に父を振り払い、父とフェンリルとの間に身体を捻じ込んだ。

何故私は父を庇ったのか……多分、既に私は父の事を言葉にするほど憎んではいなかったのだろう。

だとしたら、本当に私の我儘に彼を付き合わせてしまったものだ。

フェンリルの牙が迫ってきたが、防ぐ手段がない。

これでは、カズキくんに謝る事が出来なくなってしまう。

自己満足ですが、一応口に出すだけ出しておこうかな……。

「ごめんね、カズキくん……」

「へ？　ごめんって何が？」

目を閉じて呟いた瞬間、突然自分の前から声が聞こえてきた。

大好きな、彼の声が。

驚いて目を開くと、そこには銀色の鎧に身を包んだカズキくんと、遠くの岩山に頭から突っ込んでいるフェンリルの姿があった。

「謝るのは俺の方なんですけど、っとその前にハイこれ」

カズキくんは懐から小瓶を取り出し、私に手渡してきた。

「これは……『フェニックスの涙』？」

「それを薄めた非合法の品です、今それしかなくて。こないだ冥界に行った時、本物含めて幾つか買っといたんです。かなりの散財だったけど、役に立って良かった。これは本物より性能がかなり落ちるそうだけど、バラキエルさんに使ってあげて」

散財って……幾つ買ったのか知らないけれど、『涙』一つでもかなり高額の筈なのに。

でも今は助かった。

私は瓶の蓋を開け、中身を倒れている父に振りかける。

怪我がある程度消え、父はゆっくりと上体を起こした。

「大丈夫ですかバラキエルさん、動けます？」

「ぐ……カズキくん、か？　大分マシになった、ありがとう。だが駄目だ、君は戦っては……！」

「大丈夫です、何とかなります。いえ、させますから」

彼はそう言うと、私たちの前に立つ。

身体はこの戦場で一番ボロボロの筈なのに。

頼ってはいけないとわかっているのに。

その背中は、とても逞しく感じられた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

『フェニックスの涙』によって回復したヴァーリにロキを任せ、俺はカズキの元に駆けつ

けた。
　カズキに埋められた頭を地面から引きずり出した親フェンリルも、木場と小猫ちゃん、そしてロスヴァイセさんが足止めしてくれている。
「朱乃さん、カズキも無事か!?」
「イッセーの癖に俺の事心配してんな。ヨユーだヨユー」
　死に掛けている癖に、朱乃さんとバラキエルさんの隣でいつも通り適当な態度で接してくるカズキ。
　お前、本当に大人しくしてろよ!?
「貴方ね、自分の身体の事知っているんでしょう？　無茶はしないで、ここは私たちに任せて頂戴。私はこんな所で友人を失いたくないわ」
　いつの間にか部長も近くにやって来ていて、カズキを気遣い止めようとしている。
　だがカズキはそんな言葉も聞かず、首を横に振る。
「悪いですけど、何言われても止まる気はないです。それに、何も考えてない訳じゃない」
　カズキはそう言うと、俺の方に顔を向ける。
……え？　俺？

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

俺は匙から受け取った転移装置を使って自宅に転移する為に、よくわからないグネグネした空間を通り抜けていた。
すぐにでも合流したいが、家とオカ研部室に取りに行く物がある。
盗りに、かもしれないが。
しかし全然着く気配がないんだけど。
何これ、簡易式とか壊れやすいとか言ってたけど、一発でぶっ壊れやがったの？
匙の奴あんなかっこつけて人の事送り出しといて、何不良品つかませてんだコラァ！
『……こえますか、聞こえますか？』
……え、なにこの声。
周りに誰もいないんだけど。
こういう所にも幽霊とかオバケって出るの？
半分死んでるようなモンだから、仲間だと思って寄ってきたの!?
『落ち着いて、私は幽霊でもオバケでもありません』
嘘つけ！
幽霊やオバケはみんなそう言うんだ、俺は騙されない！
『私は貴方の神器に宿る意志、正確にはそのドラゴンの額にある宝石に宿っていると言った方が正しいのですが』

は？
石の意志ってか？
つまんねーダジャレはいいんだよ！
今どき、そこら辺のオヤジでももう少し面白い事言えるぞ！
『貴方の尽きかけている生命、私なら救う事が出来ます』
……どういう意味だ？
『やっと話を聞いてくれましたね。そのままの意味です、私には貴方を救うすべがある』
どうしてそんな事すんの？
俺が死ぬと、あんたにも都合が悪いのか？
『貴方は私の宿主にいつも良くしてくれる。その恩返しとでも思って下さい』
宿主ってモグラさんの事？
そもそもあんたは何なんだ？
『時間がありません、貴方は人間を辞めるのです。今までは……が、貴……為なら私た……も受け……す……』
徐々に声が遠くなっていき、最後には雑音混じりでよく聞こえなかった。
言いたい事だけ言ってこっちの質問に答えないとか、ゲームの村人かあいつは。
偉そうだったから村長かな？

人間やめるって何？
石○面なんて持ってないんだけど？
あ、もしかしてモグラさんのおデコの石ってエ○ジャの赤石だったの？
オレンジ色だけど。
石○面に赤石嵌め込んで、俺ってば究極生物になるのか。
胸が熱くなるな。
みんなに合流するまでに、波○の呼吸を習得しなければ。
そんな事を考えていると、目の前が光りだし自宅のリビングに出る事が出来た。
まぁあいつの話はどうでもいい。
匙と話してから、俺はそうすると既に決めていたんだから。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
とまぁこんな事があったんです。
まぁ時間がないから簡単にしか説明しないけどね。
理解できずに混乱しているみんなをよそに、俺は朱乃さんの前に移動して頭を下げた。
「朱乃さん。バラキエルさんとの約束とか、俺の身体の事とか……今まで色々と黙ってすみませんでした」

「いえ、それはもう……私が悪かったんです。もっと早く私が自分と向き合っていれば、そして貴方の言葉を素直に受け入れていれば、父も貴方もこんな目には合わなかったのに……」

俺の謝罪に朱乃さんは目を伏せながら答え、朱乃さんもこちらに謝罪してくる。

朱乃さんは別に悪くないと思うんだけど、時間がないから今はいいや。

「バラキエルさんとの事は、詳しく知らない俺が口を出していい話じゃないですから何も言いません。二人で話し合ってくれると嬉しいですけどね」

「カズキくん……」

「正直、いつ死んでもいいかなって思ってました。でも、やっぱりみんなともっと一緒にいたいです。全然遊び足りないんです。だからどんな事しても、俺は生き延びてやるって決めました。だから、こいつを使う」

俺はそう言って、懐から一枚の無地のカードを取り出した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

カズキくんはポケットから見覚えのある一枚のカードを取り出した。

イリナさんが渡していた、天使へと転生する『御使い』のカードだ。

もしかして、転生するつもりでしょうか？

けれど、彼は転生出来ないとアザゼルが言っていた筈だ。

「使い方知らないけど、まぁ何とかなるよね」
彼はそう言うと、その白紙のカードを胸に押し当てる。
カードが輝くと身体の中に消えていき、その背中には純白の美しい翼が辺りに羽根を撒き散らしながら現れた。
「なぜ転生が……？　転生は出来ないと、アザゼルが言っていた筈なのに……」
「へ？　そうなの？　ん～、まぁ出来たんだからどうでもいいよね！」
リアスの言葉を軽く流して、カズキくんは自分の翼を不器用に動かしている。
こんな時だが、その様子はすこし可愛かった。
しかしその翼に、すぐさま変化が起きた。
「あ……！」
「翼が、黒く……」
私とリアスから声が漏れた。
その真っ白な翼は見る見るうちに暗く染まっていき、深い闇色へと変化してしまったのだ。
そう、堕天したのだ。
私や父と同じ、黒い翼を持つ堕天使に。
「予想してたけど我ながらあっという間に堕天したなぁ、どんだけ欲まみれなんだよ俺。

ま、それでいいんだけど……で、どうです朱乃さん？」
　カズキくんは自分の背に生えた翼を私に見せながら尋ねてきた。
　どうって、一体何が――――
「ほら、前に朱乃さん自分だけ堕天使なの気にしてたでしょ？　似た様なのが近くにいれば、少しは気にならなくなるかなって」
　彼はそう言ってまた、翼をパタパタと羽ばたかせる。
　イタズラが成功した子どもの様な、そんな笑みを浮かべながら。
「まぁこの歳で堕天使とか厨二感満載でアレだけど、アザゼルさんやバラキエルさんなんて更にドンだし……ちょ、朱乃さんなんで泣いてんの!?」
「え？――――あ……」
　気付くと涙が頬を伝っていた。
　自分の命を削りながら、弱っていく自分を自覚しながら私を、私たちを助けてくれるカズキくん。
　私は、尋ねずにはいられなかった。
「何で……何で私なんかの為に、そんなにしてくれるの……？」
　貴方を拒絶してしまった。
　貴方を信じられなかった。

そんな私に、こんな事をして貰う資格はないのに。
私の問いかけに、カズキくんは即答した。
「そんなの決まってるじゃないですか、俺がそうしたいからです」
なんでもない様に。
それが当然だとでも言う様に。
余りにも自然に言うので呆気に取られている私を余所に、照れているのか彼は口早に喋り続ける。
「そもそも俺は、基本やりたい事しかやらなんですよ」
「いくらバラキエルさんの頼みだからって、『この俺が』やりたくもない事やると思います?」
「それに前に約束したじゃないですか、『朱乃さんは俺が守りますよ』って」
心からそう思っているのが、伝わってくる。
答えてくれる。
応えてくれる。
言葉が心に沁みて、カズキくんが私の中に広がっていく。
「っと、そろそろ行ってきます。もう一人、言い訳しないといけないのがいるんで」
カズキくんはそう言うと、手に入れたばかりの翼を羽ばたかせフラつきながら飛んで

行ってしまった。
おそらくゼノヴィアちゃんの所へ行ったのでしょう。
彼には私以外にも、守りたくて護りたい人たちがたくさんいるのだから。
――私も、休んでいられない。
まだ敵は残っている。
私もリアスの《女王》として、そして彼の力になる為にも最後まで戦わなくては！
「ま、待って下さい朱乃さん！」
カズキくんの後を追おうと羽を広げると、後ろからイッセーくんが話しかけてきた。
何やら困惑しているようで、とても慌てている様に見える。
「どうしたの、イッセー？」
リアスが不思議そうに問いただすと、イッセーくんは大きな声で私たちに尋ねてきた。
「あの、皆さん。【乳神さま】ってどこの神話体系の神さまですか!?」
『……は？』

42話

「ハァァァッ!!」
魔方陣を大量に展開して、龍王の模造品へと攻撃を繰り返す。
効果はある様で、長くて巨大なその身体をくねらせながら地に倒れていく。
大量にいたドラゴンも、今は数を減らして残りは10体いるかいないかだ。
タンニーン殿やゼノヴィアさんが一緒にいる事もあり、この調子ならなんとかなりそうだ。
「ッゼノヴィアさん！」
私が振り向くと、ゼノヴィアさんの背後に迫る龍の姿が！
粉塵に紛れて近づいていたの!?
ダメ、此処からじゃ間に合わない！
そう思った時、激しい音を響かせながら此処にいないはずの男の子が現れた。
「オラァッ！」
その男の子、カズキくんは銀色の装甲に身を包み、加速をつけたまま量産型龍王の頭部を殴りつける。

身体の内側に響く様な鈍い打撃音の後、龍王はよろめきながら地面に倒れていく。
助けられたゼノヴィアさんは、カズキくんに気付くと一直線に彼の元へ向かっていった。
カズキくんもそれを向かえる様に手を振って応えると、ゼノヴィアさんはそのままの勢いでカズキくんの胸に飛び込む――
「お～ゼノヴィぶほぉぁ!?」
事はなく、加速をつけたまま彼の頬目掛けて全力で拳を振り抜きました。
ゼノヴィアさんの拳は彼の頬に突き刺さり、錐揉み回転しながら大量の岩が積まれている場所に落ちていってしまいました。
あれ、なんか想像してたのと違う!?
助けられた感動で、思わず抱き着くとかじゃないんですか!?
というか彼、凄い勢いで落ちましたけど生きてるんでしょうか？
弱ってるって聞いてたんですが、まさかあれがトドメになったり……？
「――ぶはぁッ！　ペッペッ、口に砂利が……おいてめぇゼノヴィア！　人がせっかく助けてやったのに、なにすんだゴラァ！」
あ、よかった生きてた。
カズキくんは瓦礫から這い出て文句を言っている。

人間として生きてて良いのかわかりませんが。

「助けてくれたのには感謝する、ありがとう。だがソレとコレとは話が別だ、私が待っていろと言ったのにこんな所までしゃしゃり出てきた罰は甘んじて受けろ。まだ文句を言うのなら、次はデュランダルで張り倒すぞ」

ゼノヴィアさんは殴った方の手をプラプラと振りながらお礼を言い、彼を睨み付ける。

何やら妙な迫力があり、カズキくんも少したじろいでいる様に見える。

「というかカズキ、此処にきたという事は何かしら策があるんだろうな？　もし考えなしで来たと言うのなら、あの蛇より先にお前から斬るぞ」

「あの、俺の為に泣いてくれた人とは思えない発言なんですけど……」

「知らん。というかカズキ、何時の間に転生したんだ？　お前は転生出来ないとアザゼル先生から聞いていたんだが……」

カズキくんは背中から黒く艶やかに光る漆黒の翼を羽ばたかせながら私達の元に戻ってくる。

何時の間に転生を……ゼノヴィアさんも驚いた様で、目を大きくしていた。

「ついさっき堕天使になってみた。なんで転生できたかは俺も分からんよ、さっきまで転生出来ないってのも知らなかったし」

「……無理はするなよ、勝手に死んだら許さんからな」
「おう、取り敢えずはお前からの攻撃に一番気をつけるわ……っと結構強めに殴ったのにまだ動けるのか、タフだねぇ」
二人がそんなやりとりをしていると、先程彼が殴り飛ばした模造品が身体を起こして此方を威嚇してきている。
やはり打撃だけでこのドラゴンを倒すのは難しい様です。
他のドラゴンも集まり、此方を睨みつけている。
「五大龍王の一角である『終末の大龍』の模造品だからな、なかなかしぶとい」
「あ、タンニーンさん。お久しぶりです」
タンニーン殿が力強く羽ばたきながら近くまでやってきた。
どうやら以前会った事がある様で、カズキくんは頭を下げて挨拶している。
「久しぶりだな小僧。本調子ではないと聞いたが、大丈夫なのか？」
「まぁ本調子ではないですけど、ゼノヴィアがいますから。なんとかなりますよ」
「私？」
ゼノヴィアさんは首を傾げながら尋ねる。
「なんだよもう忘れたのか？　グリゴリの施設でお前が言ってくれたんじゃないか。『私がいる』、『頼れ』って」

カズキくんはそう言うと、龍王の模造品に向き直った。
カズキくんの言葉を聞いたゼノヴィアさんは、目を潤ませながら黙ってカズキくんの背中を見つめている。
「手助け、してくれるんだろ？　背中頼むぞ、ゼノヴィア」
「……あぁ、あぁ！　任せてくれ!!」
ゼノヴィアさんは大きく頷き、二人一緒に龍王の群れに飛び込んでいく。
確かにカズキくんは強いのだろうが、あの数の敵にたった二人で飛び込むなんて！
「タンニーン殿、私達も加勢に！」
「……いや待て、その必要は無さそうだ。二人を見てみるといい」
私が二人に続こうとタンニーン殿に声を掛けたが、静止されてしまった。
何を悠長なと思いつつも二人を見てみると、たった二人で立ち回っている。
いや、むしろ圧倒している。
片方の死角をもう片方がカバーし、足りない所をフォローし合う。
それぞれが背中に翼を広げ、剣と拳で演武でもしている様に舞いながら戦い続ける。
ゼノヴィアさんの動きが、私たちと戦っていた時に比べて明らかに良くなっている。
しかもあの二人、あれだけの敵と相対しているというのに……
「笑ってる……？」

「心底楽しそうにな、しかもなかなかの連携だ。強固な信頼関係があるからこその芸当だろう、ここは二人に任せて我らは他の相手をするとしようか」
タンニーン殿はそう言うと、他の皆さんが戦っている方へと飛んでいかれました。
私もその後へと続き、ふと二人の方を見返す。
背中を預け合いながら戦う二人の男女。
その光景が凄く絵になっていて、私には眩しく見える。
私もああやって助け合える男性、欲しいなぁ。
……言ってて悲しくなりました、ぐすん。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ゼノヴィアと一緒に大量のドラゴンを相手取って大立ち回りをした後、ロキの元へと向かった。
あのドラゴンを倒しても、その度に新しいのが出てきてる様なので大元を叩き潰す事にしたのだ。
「カズキ、白龍皇は一人でロキの相手をしているのだろう？　大丈夫なのか？」
「ロキがどんだけ凄くても、ヴァーリさんは死にやしないよ」
フェンリルに喰われかけてた？
いや、あれはイメチェンだから。

あの人が負けるとか断じてないから、絶対。
むしろ相手させられる奴を心配してやった方がいい。
そんな事を話していると、目の前で派手な魔法を打ち合う二人の姿が見える。
ヴァーリさんとロキだ。
「おや、お前は何時ぞやのビックリ人間……いや、もう人間ではないようだな。ちょうど良かった、白龍皇の相手も飽きてきた所だ」
めっちゃピンピンしてるわ、流石に神様か。
ヴァーリさん相手に余裕でよそ見してやがる。
「カズキか、模造品とはいえ『終末の大龍』を倒せる程度には回復した様だな」
ヴァーリさんがこちらの横まで来てから尋ねてくる。
この人はさっき『フェニックスの涙』を使ったから、まだまだ余裕がありそうだ。
「まぁ一応、死体からゾンビ位には回復しました」
「ふむ、それは回復してるのかね？」
俺が言葉に、ロキが横から口を挟んできた。
「動けるだけマシだろ？」
「ハッハッハ、なるほど確かに！　なかなかに愉快だな、元人間」
実際そんなもんだ。

転生したお陰か、ある程度目もついてきてるし身体も動く。
でもやっぱり反応は若干鈍いし、思うようには動けない。
やっぱ石の人の言う通り、『アレ』をしないとダメっぽい。
「うるせぇ、性格悪そうな笑い方しやがって。お前あれだ、人の事罠に嵌めて楽しむ様な奴だろ？　最低だな」
ぞんざいに答えると、ロキは愉快そうに笑いだした。
ゼノヴィアからの『お前が言うな』と言いたげな視線は無視する。
てかあくまで俺らの名前を言わないな、ヴァーリさんも白龍皇って呼んでるし。
名前を呼ぶ価値もないってか？
「まぁ北欧神話では『トリックスター』なんて言われているのでな、そう言われても仕方ないか。貴様の実力は知っている、余計な事をされる前に仕留めさせて貰おう。スコル、ハティ！」
『ウォフッ！』
ロキの掛け声に応え、奴の後方より二体のフェンリルが現れる。
さっき殴りつけた奴より小柄だ、あれの子供かね？
二匹は素早い動きで距離を詰め、俺たちに襲い掛かってきた。
「子供と言えどその牙は健在だ、一噛みであの世へ旅立てるぞ！　さぁ行けお前たち、正

面から噛み千切れ！」
「なら噛まれなきゃいいんだろ？」
正面から来るとかすげぇ有難い。
両手で二匹纏めて地面に叩きつけ、動きを封じる。
次の瞬間俺の胸部装甲が開くと、そこにあるオレンジ色の宝玉から『ある物』がジャラジャラと音を立てながら飛び出てきた。
それを倒れてる二匹に巻きつけて、手足をモグラさんの土で固定すれば終了だ。
「フェンリル二体、捕縛完了だ。てか、襲う方向言うとか馬鹿なのか？」
ブラフかと思ったら本当に正面から来るし。
こいつ実は駆け引き下手なんじゃ……いや、こっちを舐め腐ってるからだな。
有難い事だ。
「……なぜ貴様がそれを、『グレイプニル』を持っている？」
「そこで落ちてるの拾ってきた。ゼノヴィア、この子達預かっててくれる？」
「あぁ、了解だ」
俺は手にしていた鎖をゼノヴィアに預け、ロキに向かって一歩前に出る。
「なんかやたらと派手な鎖だったからな、ゼノヴィアに聞いたらフェンリル専用のリードって言うじゃないか。役に立って良かったわ」

「……ふん、こんな小僧に捕縛される程無能とはな。所詮は急拵えの欠陥品か」
「おいおいどうした『トリックスター』？　台詞が三下臭いぞ、調子が悪いか？」
ロキが不快そうな表情でこちらを睨み付けてくるので、バカにする様に嘲笑してやった。
俺が言葉を並べる度に、ロキの額に青筋が浮かんでいくのが分かる。
「そんな失敗作を捉えたぐらいで調子に乗るなよ、元人間。本物のフェンリルの恐ろしさ、とくと味わうといい」
「悪いが、それをさせる訳にはいかないな」
声に反応して振り向くと、ヴァーリさんがいつの間にかあんなに遠くに。
側には親フェンリルがおり、美猴さんと剣を持ったイケメンがフルボッコにしている。
うわ、滅多斬りだよエグいなぁ。
「このフェンリルは俺たちが責任を持って処理する、後はお前たちに任せるぞカズキ。黒歌！」
「了解にゃ～ん♪」
あ、小猫ちゃんのお姉さん。
相変わらずのエロい格好のまま指を振ると、ヴァーリさんの仲間たちはフェンリルご

とまとめて転移していってしまった。
……おい、残り俺らに丸投げかよ。
「白龍皇め、初めからフェンリルが目的だったのか？　……まぁいい、私の目的はあくまでオーディンの排除。それさえ出来れば何の問題もない」
「言い訳とか見苦しいぞ、悪神さん」
「ふん、好きなだけ喚くといい。フェンリルが使えないのなら仕方ない、質より量で攻めるとしよう」
ロキの足下にある影が広がり、そこから先程倒した体の長いドラゴンが大量に湧いてくる。
うげ、ウジャウジャ出てきて気持ち悪い。
「ミドガルズオルムのコピー体、この数を相手にどう戦う？」
うわぁ、ドヤ顔うぜぇ。
けどまぁ問題ない、厄介なフェンリルはもういないんだ。
「決まってるだろ？　目には目を、数には数をだ」
だから、そろそろ来るだろ？
『雷光よ！』
凛とした女性の声と、野太い男性の声が重なって辺りに響く。

それと同時にドラゴンたちに向かって雷が放たれ、煙を上げながら大きな音を立てて崩れ落ちる。
暫くすると背中に黒い翼を持つ二人、朱乃さんとバラキエルさんが目の前に降り立った。
「すまない、手間取ってしまった」
「お待たせしてごめんなさいね、カズキくん」
「いえいえ、タイミング計ってたんじゃないかって位にドンピシャですよ」
しかし二人とも凄いな、同時に放った雷光でドラゴンが丸焼きになってる
あんなの俺が喰らったら一発で伸されそうだ。
そんな事を考えていると、他のみんなも周りの龍を伸しながら続々とやって来る。
本当にタイミング計ってた訳じゃないよね？
「周りの敵は掃討してきたわ、残りはここにいる奴らだけよ！」
「カズキだけを戦わせたりしない、俺たちが相手だ！」
リアス先輩やイッセーが啖呵を切ってロキを牽制する。
「どーだロキ、肉た……もとい愉快な仲間たちが助けに来てくれたぞ。これが『友情パワー』って奴だ、ボッチのお前にはわかるまい？」
「おいカズキ、お前今俺らの事『肉盾』って言いかけなかったか？」

「違う、肉盾はお前だけだ」
「ひでぇ!?」
イッセーが何やら不満げだが、気にする必要はない。
「リアス先輩、みんなと周りのドラゴンを頼みます。ロキだけなら俺がシバきますから」
「待てカズキ、お前に渡すものがあるんだ！」
俺がブースターを吹かそうとすると、イッセーが止めに入る。
「あん？　渡すって何を？」
俺が尋ねると、イッセーは掌サイズのオモチャを見せてきた。
「コレだ、乳の精霊がお前に渡せって言ってたんだ」
「……ちょっと待ってろイッセー、いま最後の『フェニックスの涙』使ってやるからな。まだなんとかなる筈だ」
「別に頭にダメージとか受けてないからな!?」
どうしよう、イッセーのダメージが深刻だ。
頭の。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
他のみんなが量産型龍王の相手をしている間、俺の頭に貴重な『フェニックスの涙』を振りかけていたカズキ。

部長や朱乃さん、スレイプニルを預かっているアーシアの説得で何とか納得してくれた。

自分でも阿呆らしいとは思うけど、実際起こった事なんだから仕方ないじゃないか。

乳の精霊が起こした奇跡により、すれ違い続けた朱乃さんとバラキエルさんの仲は改善された。

その後、乳の精霊は消える前に

『ミョルニルを人間の少年に託しなさい、それで彼を救う事が出来る』

と助言していったのだ。

転生した事によってカズキの症状は改善されたと思っていたが、完治はしていないのかもしれない。

何より朱乃さんを救ってくれた乳の精霊の言葉だ、信じてみる価値はあると思う。

「友との別れは済んだのか、元人間。今生の別れなのだ、もう少し待ってやってもいいぞ？」

ロキが嘲笑を浮かべながら話し掛けてきた。

ムカつく顔をしてるな、完全にこっちを見下している表情だ。

「お気遣いドーモ、でも気にしなくていいぞ？　お前を潰した後でいくらでも話せるからな」

カズキも負けずにいつもの調子で小馬鹿にしながら言い返す。
うわ、ロキの額に青筋浮かんでる。
「口の減らんガキめ……貴様如きが私に勝てるとでも思っているのか？」
「思ってるよ？　お前なんぞチョチョイのチョイだ」
「ほざいたな、ならばこれを防げるか！」
ロキはそう言うと魔方陣を三重に展開し、そこから強烈な魔法を放ってきた。
かなりの力を感じる。
まともに受けたら大ダメージ必至だが、カズキは避ける素振りも見せずに右手を腰だめに構えた。
まさかあれを防ぐ気なのか!?
「フンッー！」
「な、拳一つでだと!?」
カズキが気合と共に拳を振り抜くと、ロキの放った魔法はあっけなく弾け飛んだ
……ってお い！
あの攻撃がただの拳打で消し飛んだぞ!?
ロキもあんな風に防がれると思っていなかった様で、驚愕して動けないでいる。
「堕天使の幹部も【大抵の魔法は強力な力で殴れば潰せる】って言ってたからな。それに

転生してから、あんだけシンドかった身体が大分良くなった」
いやいや問題だらけだから！
どんな筋肉理論だよ!?
カズキは魔法を砕いた方の腕をぐるぐると肩ごと回し、ゆっくりとロキに向かって歩きながら話し出す。
「実は前からイッセーの神器が羨ましかったんだよね、『神滅具』って言うんだろ？」
「……それがどうした？」
「俺とモグラさんも。今日ここで神を、お前を倒して名乗らせて貰うわ」
カズキがそう言った瞬間、一気にロキとの距離を詰める。
ロキも反応しきれずに回避が遅れる。
「障壁が!?　グァッ！」
ロキが常時張っている障壁を物ともせず、ガラスが割れる様な音と共に瓦礫の山へと吹き飛ばした。
「文字通りの『神滅具』って奴」

43話

あ～手が痛い、幾ら底上げされても腕力だけだと障壁は流石に硬いな。
まだ痺れてるよ。
「くっ……調子に乗るなよ小僧！　転生したての元人間にやられる程、私は落ちぶれてはいないぞ！」
ロキは埋もれていた瓦礫を吹き飛ばし、片手で空に上がってから自分の周りに魔方陣を幾重にも展開していく。
いい感じに頭に血が上ってるな。
「吠えてないでかかって来いよ。一騎打ちだ、俺はお前が泣くか気絶するまで殴るの辞める気無いからな」
「ほざけ！　我が魔術の波動、その身に受けるがいい！」
ロキが手をかざすと、周りの魔方陣から様々な色の光弾が雨霰と俺目掛けて降り注いでくる。
辺り一面に撃ち込んでくる攻撃を直撃する物だけ拳で弾いていったが、攻撃の手数は段々と増していき次第に捌くのが難しくなってきた。

しかし外れたり弾いたりした奴の魔術が地面に衝突して粉塵が舞い上がり、次第に俺の姿を隠していく。
自分で視界を塞ぐとかバカすぎる、煙が晴れない内に移動しよう。
「フハハ！　これだけ撃ち込めば跡形もなく――」
「マヌケめ、グミ撃ちは負けフラグなんだよ」
「な!?　グボォッ!!」
俺はその攻撃を地中に潜って躱し、地面を掘り進んでロキの背後に回り強襲。
不意を突かれたロキは顔面を強打され、再び地面を抉りながら吹き飛ばされるも今度はすぐに体制を立て直した。
「どうした悪神、こんな手に引っかかるなんて『トリックスター』の名が泣くぞ?」
先程と同じ様に俺の挑発に乗ってくるかと思ったが、ロキは口を拭いながら不敵な笑みを浮かべた。
「ぐ……ク、クハハ！　調子に乗っていられるのも今の内だぞ、元人間。貴様を殺す準備は既に完了した……！」
「お、奇遇だな。実は俺も今さっき仕込みが終わったんだよ、次でお前さんは終わりだ」
ロキが何を考えてるのか知らないが、こっちの仕込みも完了した。
思えばこいつが絡んできてから面倒な事ばっかり起きた。

朱乃さんと気まずくなったり、ゼノヴィアに叱られたり……うん、全部こいつのせいだ！

さぁ、最っ高の八つ当たりを見せてやろう！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

カズキがロキと戦闘を始めた。

俺の役割はアーシアのカバーをしつつ周辺の敵の掃討。

カズキはまだ病み上がりだし、ピンチの時はフォロー出来る様に位置取りに注意しなくちゃな。

アーシアは回復の要で俺の大切な家族で、カズキも今までたくさん助けてくれた大切な仲間だ。

絶対に死守してみせる！

ロキの放つ魔術を殴り飛ばしながら戦闘を有利に進めていくカズキ。

しかしロキもやられながら何やら策を弄したらしく、不敵な笑みを浮かべている。

それに対してカズキも何かを仕掛けてるらしいし……腹黒同士、何をするのかわからなくてすげぇ怖いな。

一体これから何が起こるんだ？

両者とも警戒しているのか、睨み合ったまま動かない。
周りではみんながミドガルズオルムの量産型と激しく戦闘を行っているのに、あの空間だけ削り取られた様に静かに感じた。
このまま膠着状態が続くかと思ったその時、カズキから動いた！
「先手必勝ッ！　先に動いた方が負ける、なんてのは漫画とかの中だけなんだよね！」
カズキはそう言いながら距離を詰めてロキに殴り掛かる！
が、それを見たロキは口の端を吊り上げた。
「バカめ！　貴様には近距離攻撃しかない事など読めている！」
ロキは指をクンッと天に向けて振る。
すると地面から大量の光球が現れ、カズキ目掛けて襲い掛かった！
「な!?　何処からこんな物が!?」
「先程の攻撃が躱される事など承知の上だ！　全てはこの為の布石ッ！　喰らうがいいッ！」
「くそッやられる……!?」
カズキが驚愕の表情を浮かべると、ロキは馬鹿にする様に笑いながら攻撃を仕掛ける。

カズキは顔の前で腕を交差させて防御の構えを取る。
ヤバい、カズキが！

「と、言うと思ったか？」
「なんだと!?」
ロキの放った光球がカズキに迫ると、輝くモグさんの群れが地中から現れた！
カズキを庇って光球にぶつかっていき、爆発して相殺していく。
あれは以前カズキがヴァーリに使って見せた、『モグさん大行進』（命名：カズキ）か!?
「自分の意思で動くエネルギー体だ。地中に潜った時、そこら中に仕込んでおいた。当然、お前のいる真下にもな！」
ロキの足元の土が盛りあがり、そこから輝くモグさんが数匹飛び出てきた！
完全に不意を突いた、これなら！

「バカな……！」

「と、言うと思ったかね？」

「うぉ!?　」

今度はロキの足元から量産型龍王が現れた!?

みんなが戦っているものよりは小型だが、それでもモグさんよりは余裕でデカイ。

そいつはロキに迫るモグさん達を全て丸呑みにしてしまい、爆発して木っ端微塵になった。

オマケにカズキの足下からもう一体現れて、身体に巻き付いて胴体を締め付けだした！

「地面に仕掛けをしていたのは貴様だけではない！　小型のミドガルズオルムだ、まぁ小型と言っても充分な大きさだがな。そのまま全身の骨を砕かれるか、それとも丸呑みにされるか、好きな方を選ぶがいいッ！」

ロキが喋っている間にも小型のミドガルズオルムはカズキの身体を締め上げ、鈍い音を立てながら口を大きく開いた。

くそ、アーシアのガードで手一杯で助けに行けない！

ロキの奴、俺が助けに入れない様にこっちの戦況も観察しながら戦ってるのか!?

「グ……キツ……まっだまだぁ！　ゼノヴィア！朱乃さん！」

『ハァァッ！』

カズキの掛け声に応え、空からゼノヴィアが剣閃を光らせながら飛び込んでくる。

ゼノヴィアの一撃で巻き付いていた胴体は両断され、残った頭部も朱乃さんが雷光で焼ききって消滅させた。

そのまま二人はカズキの隣に移動する。

「お待たせしました、加勢しますわ！」

「邪魔はしたくなかったが、そうも言っていられないのでね！」

「ぐっ……貴様、一騎打ちではなかったのか!?」

「先に蛇使ったお前に言われたくねぇ。そもそもな、敵の言葉を簡単に信じるお前が馬鹿なんだよ」

うわぁ、カズキが凄い悪い顔してるぞ！

悪人ヅラを浮かべながら、美人を両脇に侍らせるカズキ。

俺の友達が悪役過ぎる!?
「それが正義の口にする言葉か!?」
「正義なんて頭悪そうなもんになった覚えはねぇ。俺はやりたい事をやってるだけだ」
おい、ホントにおい。
これじゃあどっちが悪役かわからねぇ!?
「私を倒して『神滅具』を名乗るのではなかったのか!?」
「あん？　そんな面倒臭そうな称号いらんよ、厄介ごと押し付けられそうだし」
「はぁ!?」
「お前が油断してくれたら儲けモンだと思って適当に言っただけ。引っかかってくれてありがとう、嬉しすぎて腹痛いわぁ！」
なんかもう、言動が酷すぎるなあいつ。
「とにかくだ、このまま三人でボコボコにさせて貰おうか」
カズキ達はそう言うとロキににじり寄り、その三人を見てロキはジリジリと後退していく。
うん、どう見てもカズキが悪役だな！
「く、来るな！　それ以上こちらに来るんじゃない！」
「フハハハハ！　これで終わりだクソッタレェ！」

ロキの反応が楽しいのか、高笑いまでしてし出したカズキ。
トドメを刺そうと一歩踏み込んだ瞬間、カズキ達の足下に大きな魔方陣が展開した。
「へ？」
カズキが間の抜ける様な声をあげると同時に、その魔方陣から金属音を響かせながら鎖が現れ身体に巻き付いていく。
「ちょ、なにこの鎖!?　力入れても全然ビクともしないんですけど！」
カズキが鎖を千切ろうともがいているが、破壊出来る気配がない。
何か特別な呪法でも組み込まれているのか？
「だから言っただろう？『こっちに来るな』と。忠告には耳を傾けるものだ、特に神の忠告はな？」
くそ、ロキのドヤ顔がスゲェ腹立つ！
こっちも量産型龍王の相手で手一杯だし……そうだ、あの二人は!?
特に朱乃さんなら魔法とかに詳しそうだし何とか……ぶふぉ!?
「……おい。俺は簀巻きみたいに雁字搦めなのに、なんであの二人はあんな卑猥な縛られ方してるんだ？」
カズキが半眼になりながらロキに尋ねる。
何と言うかこう、胸とかお尻が強調される縛り方というか……いや、実に眼福ですな

！

二人とも縛られて呼吸をするのが苦しいのか、吐息が漏れてなんかこう……とにかくエロエロだ!!

「はて、この様な術では無いはずだが……まぁいい。手駒も全て屠られてしまっては今すぐオーディンを害するのは難しいか、今回は生意気な貴様を殺して満足するとしよう」

ロキはそう言いながらカズキに手をかざす。

その手からは強い力を感じ、徐々に光を増していく。

うぉぉ、興奮してる場合じゃなかった！

カズキがピンチだ！

「お、おいおいそんな不用意に攻撃していいのか？　まだ隠し球があるかもしれないぞ？　今素直に帰ったら、特別に許してあげても良いんだよ？」

カズキは縛られた足を器用に動かしながら少しずつ後退するが、ロキはそれを許さず鎖を操作して転ばせる。

「命乞いか、情けない男だ。散り際くらい潔くするのだな」

「潔さなんぞ糞食らえだ、世の中生き残った奴が一番強いんだよ！」

「ならばここで死ぬ貴様は弱者だな、つまらない最後の言葉だったよ。さらばだ元人間」

「あ、ちょっと待っ……!」

ロキはカズキの言葉を最後まで聞かず、その腕から強力な魔術を放った！

くそ、今からじゃ間に合わない!!

「カ、カズキィィィィッ!!」

俺の叫び声と共に、辺りに響く爆発音。

宙には粉塵が舞い、カズキ達の姿が見えない。

まさか、カズキがやられたのか……？

そんな考えが頭をよぎるが、煙が晴れた先には予想外の光景が広がっていた。

「あ～、死ぬかと思った……もうちょいで本当に当たるところだったよ」

カズキは鎖で縛られたまま、地面に横たわっている。

朱乃さんとゼノヴィアも同様だ。

しかし攻撃を放った筈のロキは吐血しながら膝をつき、脇腹を手で押さえている。

そこからは血が滴っており、何かに噛み千切られた様な傷跡が残っている。

そしてカズキの元へと二つの影が近づいていき、カズキを拘束している鎖を噛み砕いた……あれは!?

「ゴフゥ……な、何故だ……何故お前達が私を……!!」

「間に合ってくれて助かったよ、ありがとう【スコル】、【ハティ】」

そう、俺たちが苦戦してカズキが捕らえた筈の二匹の子フェンリル。
『スコル』と『ハティ』だ！
その二匹は尻尾を振りながらカズキに甘える様に体を擦り付け、カズキも頭や顎を撫でてやっている。
一体全体、どういう事だ？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「さて、あそこで縛られてる二人の鎖も壊してきてくれる？」
俺のお願いを聞き、二匹の子フェンリルはそれぞれ朱乃さんとゼノヴィアの元へと歩いていく。
すぐに二人を鎖から解放してくれるだろう。
「ぐ……スコル、ハティ！　何故私を裏切ってそんな男に従うのだッ！」
ロキがハティに噛み千切られた脇を押さえながら激昂する。
随分と勝手な言い分だな。
「お前が先にこの二匹を裏切ったんだろうが。『無能』、『欠陥品』、『失敗作』って貶してな」
「それがどうした！　私はあの二匹の主人だ、どう扱おうが私の勝手だろう！」
おぉ、素晴らしく三下臭のするお言葉だ。

どんな奴でも追い詰められると素が出るって言うからなぁ、少し笑えてくる。
「そんな事を言ってるからお前は見捨てられるんだよ。あの子達の意思を無視して、酷い言葉を浴びせかけて……だから二匹は俺の言葉に応えてくれたんだ」
「言葉……説得したというのか？　そんな事をする時間など……」
「さっき出した『光るモグラさん』、あれは俺の神器を通して声を届ける事も出来る。その一体を捕縛したままの二匹の所に送って、それを通して説得した」
ちなみに説得材料は美味しいご飯と毎日のお散歩だ、それでＯＫした時は涙が出そうになったけど。
モグラさんが二匹に対していかにご飯が美味しいかを力説していたお陰で、戦闘時にモグラさんの力を借りれなくて苦労した。
「此処までの流れを全て計算していたというのか……？　元人間の分際で、私の上をいく策略を巡らせていたというのかッ……！」
「バカが、人間より悪知恵の働く存在がいるわけないだろう？」
まぁ俺はもう人間じゃないけどね？
辺りを見渡すと、もう殆どドラゴンの姿がない。
そろそろ終わりにしよう。
「さて、周りの敵も殆ど倒してくれたみたいだな。大人しく捕まるか、それともボコボコ

にされてから捕まるか。好きな方を選べ、嫌いな方で応えてやるぞ」
「ぐ……まだだ！　貴様たちにどんな攻撃をされようと、私はこの場から撤退させて貰う！　例え腕をもがれようが、術式は止めんぞ！」
ロキはそう言い放つと、自身の足下に魔方陣を描き始める。
やだなぁ、逃す訳ないじゃん。
「じゃあ仕方ない、転移する前に一撃で仕留めよう」
俺はそう言ってから、先程イッセーから渡されたある物を取り出した。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
めちゃくちゃ苦戦したあのフェンリルが、凄い大人しくなってる。
ロキとの読み合いにも勝っちゃうし、それもこれもカズキの作戦通りって事なのか……あいつの頭の中はどうなってるんだ？
その当人であるカズキは今まさにロキを追い詰めており、俺が渡した『ある物』を取り出していた。
「それは……『ミョルニル』のレプリカか？　成る程、邪な心を持つ赤龍帝では扱えないので、お前に託されたか」
ロキが余計な事を言ったせいで、カズキがなんとも言えない視線を俺に向けて来る。
やめて、そんな目で俺を見ないで！

スケベで本当にゴメンなさい！

「渡されたのはいいんだけどね。ほら、俺ってば平和主義者だから。武器なんて危ない物持った事ないし、使ったとしても多分お前に当たんない」

カズキは首をすくめながら話を続ける。

突っ込まない、俺は絶対に突っ込まないぞ。

「だからさ、コレはこうする事にした。モグラさん、【食べちゃえ】」

次の瞬間カズキの胸部装甲が開き、中にある結晶体の前に小型化した『ミョルニル』のレプリカをかざす。

すると『ミョルニル』は光に包まれて結晶体の中へと消えてしまった。

……え？

ちょ、あれ借り物なのに!?

暫くするとカズキの身体が光り出して、全身がパチパチと帯電している。

あれってもしかして……

「ミョルニルを……これは、神の雷を身に纏っている？　貴様、神の力を己に取り込む気か!?」

やっぱりこれがミョルニルから出るっていう雷か！

カズキから感じる力も格段に跳ね上がっている！

俺やヴァーリなんて比べ物にならないぞ!?

「おぉ、モグラさんがいけそうって言ってたけどマジだった。なんか身体が異常に軽いし、これならお前を殴り飛ばせる！」

カズキは身体の感触を確かめる様にその場で数回跳ねた後、ロキ目掛けて駆け出す。

しかし、カズキが辿り着くよりも早く魔方陣が輝き出した。

マズイ、逃げられる!?

「流石にその攻撃は受ける訳にはいかないのでね、早々に逃げさせていただく。今度は確実に貴様らを、いや貴様を消してや――――」

『ようやく着いたんだ、逃がしてたまるかよ』

「な、魔方陣が!?　それにこの纏わりついてくる黒炎は……！」

ロキがそう言い残して転移しようとした瞬間、誰かの声が響くと奴の周りが黒い炎に包まれて魔方陣が破壊された！

声の主を探して辺りを見渡すと上空に巨大な魔方陣が現れ、そこから黒い炎の塊が這い出てくる。

それが段々と伸びていって……あれは、黒い炎のドラゴン?

それにこの聞き覚えのある声はもしかして……

「この声、もしかして匙か?　お前、グリゴリでマジモンの改造手術されたのか。不憫

な」

『うるせぇ、今あんま余裕ないから突っ込まないぞ』

やっぱ匙なのか!?

にしてもあの姿は一体どうしたんだ?

【兵藤一誠くん、聞こえますか? グリゴリ副総督のシェムハザです】

耳につけていたイヤホンマイクから声が流れてくる。

シェムハザさん、確か前にカズキがお世話になったとか言ってたな。

【時間がないので手短に。匙くんに複数あるヴリトラ系の神器を全て埋め込んだ結果、あの姿に変化しました。今は精神力で自我がある様ですが、それも長くは持たないでしょう】

そ、それって大丈夫なんですか?

元の姿に戻れなくなったりとか……あいつも無茶をするなぁ。

【カズキくんの助けになりたくて頑張りましたからね、彼は。今自我を保っているのも、かなり凄い事なんですよ? 】

カズキの助けに、か。

匙の奴、カズキに鍛えてもらった事にすげぇ感謝してたもんな。

恩を返す為に、あいつも気合入れて頑張ってるんだ。

【もしもの時は力尽くでも彼を止めて下さい。赤龍帝の貴方ならそれが出来るはずだ、お願いします】

任せて下さい！

あいつは俺にとってもダチで、ライバルだ。

どんな事をしてでも止めてみせますよ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

匙が『怪人丸焦げドラゴン』になってしまった。

これ、アルマロスさん辺りの仕業かな？

せめて人型にしておいてあげて欲しかった。

これじゃ会長さんにアプローチも出来ないじゃないか。

『なんかアホな事考えてそうだけど、目の前の敵に集中しろ。俺がヴリトラの炎であいつの行動を阻害してる間にさっさと仕留めろ、腐っても神様だし長くは拘束出来ない』

なんでバレたし。

まぁいいや、せっかく作ってくれたチャンスだ、最大限に活用させて貰おう！

「く、なんだこの炎は!?　払っても消しても次から次へと纏わりついて……力が抜けて動けない!?　これがヴリトラの呪いだとでも言うのか！」

『何をしようが逃がさねぇ。俺の気合と根性、舐めんじゃねぇぞ！』

お～カッコイイね、匙。

なら俺もそれに応えて、とびっきりの一撃を喰らわせようか！

「突然戦場に現れたかと思えばフェンリルを殴り飛ばし、その息子たちを自陣に引き込み、私に戦術で読み勝つ!?　あまつさえ神の雷を身に宿すなど……バカげている！　なんだ、なんなんだ貴様は!?」

ロキが狼狽えながら、いや怯えながら声をあげる。

そこには最初に感じた余裕のある態度は存在せず、絶対的優位な立場から引き摺り降ろされた恐怖しかない。

なんだと言われてもなぁ？

「ただの人間だ、頭に元が付くけどな」

ロキの目前まで距離を詰め、雷を纏った拳を振り抜いた。

その一撃はロキの腹部に深く突き刺さり、宿った雷はその身を激しい放電音と共に焼き尽くしていく。

「許さん、絶対に許さんぞ！　瀬尾カズキィィィィッ!!」

ロキは叫び声をあげながら身を焦がし、放電が終わると力なく地面に倒れ伏した。

最後にようやく『元人間』じゃなくて俺の名前言いやがったよ、恨み節だけどね。

周りのドラゴンも片付いたみたいで、みんなもこっちに向かってきている様だ。

ようやく終わりか、流石に疲れた。
オーディンさんから何か報酬貰わないと割に合わな……おろ？
頭がクラクラして目の前がボヤけて……あ、ダメだこれ。
俺ってば戦闘終わると気絶オチばっかだなぁ。

44話

気が付いたら、前に来たグネグネした空間にいた。
なんで俺ってばこんな所にいるの？
『気がつきましたか？』
お、この声は石の中の人。
説明プリーズ。
『天使になると思ったら、まさか乳神の使いの啓示を受けて神の力まで取り込もうとするとは予想外でした。このままでは、貴方は生物の枠から外れてしまう』
え～と、つまり俺が究極生命体になったって事？
石○面持ってないし、紫外線も照射されてないんだけど。
てか乳神の使いの啓示って何？
俺そんな卑猥そうな神様の使い知らないよ？
『でも安心して下さい、貴方の事は私が何とかしましょう。貴方が倒れると、悲しむ人が沢山いるでしょう？』
いやその前に俺の話聞いてよ。

誰よりも先に俺が泣くぞ。
『さぁ、後は私に任せて下さい。貴方は貴方の居るべき場所に帰りなさい……』
だから説明しろよ、せめて会話をしてくれよ！
うぉ、なんか意識が遠くなってきた……！
くそ、覚えとけよ幽霊モドキ！
次ここに来るまでに波○習得して、お前にオーバードライブしてやるからな！
絶対に泣かしてやるからな！

「で、また知らない部屋か。いい加減気を失うのに慣れてきた自分がいる」
なんだろう、えらく疲れた。
変な夢を見た気がするんだけど、イマイチ思い出せない。
でもすごい理不尽な目にあった気がして、ムカつくのは何故だろう？
部屋を見渡すと、テーブルの上に置いてあるカゴの中で寝ているモグラさん。
俺が気絶して目を覚ますと、君も毎回寝てるよね？
いや、負担かけてるから仕方ないんだけど。
そして部屋の隅でくっ付いて寝ている、二匹のわんちゃん。

スコルとハティだ。
ここ病院みたいなのに、動物が中にいていいのかね？
とにかく説明が欲しかったので、枕元に置いてあったナースコールっぽい物を押す。
すぐに美人のナースさんがやってきて何処かに連絡して暫くすると、サーゼクスさん、ミカエルさんにオーディンさんとお偉方がぞろぞろとやって来た。
ありゃ、このメンツでなんでアザゼルさんがいないんだ？
「目覚めてくれて本当によかった、友を失うのは悲しいからね。リアス達も心配していたよ」
「貴方の仲間達にも、じき連絡が行くはずです。顔を見せて安心させてあげると良いでしょう」
サーゼクスさんとミカエルさんは微笑みながらそう言うと、事件の概要を説明してくれた。
あいつの出したミドガルズオルムとか言うドラゴンの模造品は全部討伐され、ロキ本人はロスヴァイセさんに何重にも術封じを掛けられて何処かに幽閉されるそうだ。
まぁそこら辺はオーディンさんが何とかするんだろうし、どうでもいいや。
ヴァーリさん達は結局あの場に戻って来ず、親フェンリルごと何処かに行方を眩ませたそうだ。

俺らにロキの事押し付けやがって……今度会ったら文句言ってやる。
「さてカズ坊。今回は身内がえらく面倒をかけてしまい、本当にすまなかった。何か詫びをと思うんじゃが、望む物はあるかの？」
オーディンさんは一歩前に出ると、頭を下げて謝罪してきた。
まぁ思いっきり身内のゴタゴタに巻き込んだ感じだからな、責任を感じてるのかもしれない。
実際は護衛を厳重にしなかった、こちら側の落ち度な気がしないでもないけど。
でも、望みねぇ？
「う～ん……保留で。困った事があったら頼らせて貰います」
こういう事を言われて、パッと思いつく物がない時はこれがいいってベネムネさんが言ってたし。
俺がそう言った途端、オーディンさんの口の端が吊り上がる。
「そうかそうか、では次の話じゃ。お主が喰らった『ミョルニル』のレプリカ、あれの賠償についてなんじゃがのぅ？」
……ん？
「レプリカとはいえ、古より伝わる神々の武具じゃ。貸していたそれを紛失されたとなると、流石にタダという訳にはいかんじゃろう？」

あ、これはマズイ気配。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「久しぶりの『覇龍』は流石に堪えたな、身体が思うように動かない。まぁ今の俺には相応しい罰だがな、むしろ足らないくらいだ」

「そう卑下すんなよヴァーリ、俺っちに言われても複雑だろうがな。それにカズキの症状が改善したって総督から連絡来たんだろ？」

「それでも俺たちが重症のあいつを置いて行った事には違いない。今度詫びをしに行かないとな」

「ヴァーリ、フェンリルは支配を司るエクスカリバーで制御出来そうです、力はかなり落ちる事になりますが」

「それと曹操から『こちらは独自に動く、邪魔だけはするな』って連絡が入ってるわよん？」

「そうか……苦労を掛けたなアーサー、黒歌。曹操についても放っておけばいい、掛かってきたら遠慮なくやらせて貰うだけだ」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

取り敢えず、賠償の方も保留になった。

その件も合わせて貸し借りなしにしようと提案したのに、あの人『それとはまた別問

題』といって聞きやしない。
実は『ミョルニル』とかどうでもよくて、俺に面倒を押し付けるのが目的なんじゃなかろうか。
そのうちトイレでひねり出したりしないかな？
ちなみにスコルとハティは俺の家で預かる事になった。
今は魔法の力でサイズが小さくなって、大型犬より少し大きいくらいのサイズになってる。
というか連れて行こうとすると牙を剥き出しにして威嚇するから、危険で手出し出来ないそうです。
だから病室なのにここにいたのね。
その後もなんとか面倒事を回避しようと交渉してたら、知らせを聞いたイッセー達が病室に飛び込んできて話は終了。
朱乃さんとゼノヴィアなんて、入ってくるなり泣きながら抱きついてくるし。
あのジジィ、これを計算に入れて後から話を切り出しやがったな。
にやけヅラが非常に腹立たしい。
ちなみに匙は無理がたたって寝込んでいるそうだ、身体が動かないらしい。
ここにいるそうなので、後でお礼を言いに行かなきゃ。

心配してくれる皆に揉みくちゃにされていると、バインダーを手にしたアザゼルさんがやってきた。
「おぉ、みんな集まってんな。ちょうどいい、カズキの体調について話がある」
あぁ、だからさっきお偉方が来た時にいなかったのか。
「その前に労いの言葉とかないのかおっさん」
「お前こそ今までお前の身体の検査してやってた俺を労え」
「よきにはからえ」
「トドメ刺すぞクソガキ」
そんないつも通りのやりとりをした後、アザゼルさんはカルテみたいのを見ながら説明してくれた。
「結論から言うと、カズキに見られた症状はほぼ改善されてると言っていい。過剰な細胞分裂は以前に比べれば落ち着いてるし、老化した細胞もマルッと入れ替わってやがる。落ちてた動体視力は後で検査しないとわからんがな」
マジでか、そういや身体の調子が良い気がする。
アザゼルさんの話を聞いたみんなも、ホッとしたように息を吐く。
心配かけてゴメンなさい。
「転生した結果なのか、それともミョルニルを取り込んだからなのか……ホントに驚か

せてくれる奴だよお前は」
アザゼルさんはそう言いながら俺の頭をガシガシと手荒く撫でてきた。
ええぃ、痛いから止めい！
ちょっと朱乃さん、別に恥ずかしいとかじゃないから微笑ましい視線をこっちに向けないで。
ゼノヴィアも分かったようにうんうん頷いてんじゃねぇ！
みんなも笑うなっ！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「なかなか際どかったが……今回もなんとかなったな、サーゼクス」
「若い者達の活躍のお陰でね。アザゼル、カズキくんの容態に変化はないか？」
「今のところは問題ない、こればっかりは経過を見ないと何とも言えんな。本当に面倒掛けてくれるぜ」
「言葉の割には嬉しそうに見えるな、君も素直じゃない。素直にカズキくんの堕天使入りを喜んだらどうだい？」
「うっせぇ、カズキが悪魔にならなかったからって俺に当たるな。そういやあいつらにあの話はしないのか？　イッセー、木場、朱乃の三人に昇格の話が来てるって聞いたぜ？」

「イッセーくん達に昇格して貰いたい気持ちはある、特にイッセーくんは妹と家を継ぐ為にも一応の肩書きは必要になるしね。だが彼らはまだ若い、もう暫くは力をつける事に専念させたいのもまた事実だ」

「色々と複雑で魔王様は大変だねぇ、まぁもう少し様子見が必要ってのは俺も賛成だ。それから英雄派についてなんだが――」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

みんなが病院に来てから数日後、精密検査も終えて無事に退院できた。

病院まで迎えに来てくれた朱乃さんとイッセー、ついでに一緒に退院した匙も連れて自宅に帰った。

もちろんモグラさんとスコル、ハティも一緒だ。

そこには飾り付けられたリビングと豪華な料理、そしてみんなの姿が。

退院祝いで集まってくれたそうで、その光景を見て正直嬉しくてちょっと泣きそうになった。

そして会長さんがお菓子を持ってきてくれたのを見て、本気で泣きそうになった。

命の危機的な意味で。

まぁそのお菓子は会長さんお手製の物ではなかったので、結局は特に問題はなかったのだが。

匙も頑張った事を会長さんに褒められて嬉しげだ。
みんなで談笑していると、イッセーが思い出した様に質問してきた。
「あ、そうだカズキ。聞きたかったんだけど、なんで悪魔じゃなくて堕天使を選んだんだ？　やっぱアザゼル先生と同じ組織が良かったとか？」
「気持ち悪い事言うな」
「ぐあぁ！　目が、クッキーの粉が目にいいぃ!?」
イッセーをお仕置した後、みんなも気になっていたらしく矢継ぎ早に質問された。
まぁ深い理由なんてないんだけど。
「実は押し入……ゲフンゲフン、保管してあった場所になくてな？　探してる時間もなかったからテーブルに置いてたカードだけ持ってオカ研部室に行ったんだよ」
危ねぇ、押し入れって言いかけた。
無くしただけでも問題なのに、押し入れに押し込んだまま放置してたのがバレたらサーゼクスさんにピチュンされる。
いや、その前にリアス先輩に消されるな。
だいたいテーブルに置いてあったトランプも、トランプタワー作って遊んだまま放置してたからだし。
「そういう訳で朱乃さんとゼノヴィア、何処にあるか知らない？　そんなに大きくない

アタッシュケースなんだけど」
「私は覚えてないですわね、ゼノヴィアちゃんは？」
「私も心当たりが……いや待て、アタッシュケースだと？」
朱乃さんは知らないらしいが、どうやらゼノヴィアには思い当たる節がある様だ。
「カズキがこの間漬物を漬ける時に重石がなくて、仕方ないから適当に重そうな物を乗せてなかったか？　確かその時にそんな物を見た様な……」
あぁ、そういえば重石の代わりに適当に乗せたんだけどバランスが悪くて、アタッシュケースを土台にしてからその上に重い物乗せてったんだっけ。
……うん、誤魔化そう。
「戸棚にありました」
朱乃さんに場所を聞いたのか、台所からアタッシュケースを持ってやって来る小猫ちゃん。
早い、早いよ小猫ちゃん！
せめて言い訳する時間くらい下さい。
この後、当然リアス先輩と会長さんに叱られました。

「よし行くぞスコル、ハティ……お手！」
『ウォフ』
「おかわり！」
『ウォフ』
「ふせ！」
『ウォフ』
「わたあめ！」
『ク～ン……？』
お手、おかわり、ふせと言う連続技にはついてこれたが、伝説の犬の神業は流石に無理か。
どうすればいいのかわからず、二匹が混乱している。
ゴメンね無理言って。
パーティーを楽しみつつ新しく家族になったスコルとハティを躾けながら遊ぶ。
あんまり二匹を構い過ぎると、モグラさんと何故か小猫ちゃんまで不貞腐れ始めるので気をつけなければ。
さっき小猫ちゃんに『猫の方が好きって言った癖に……』とジト目で言われて拗ねら

れて、何かが心に刺さり何とも言えなくなった。
「いいなぁ、みんな楽しそうで……それに比べて私は……うぅ……」
みんながパーティーを楽しむ中、スーツ姿の美人がソファーに座りながらやさぐれている。
両手でコップを掴み、中身のジュースをちびちびと飲んでいる銀髪お姉さんのロスヴァイセさんである。
何でもこのパーティーの準備をオーディンさんに命令され、指示通りに準備を終えたら既にオーディンさんは帰国済み。
早い話が置いてけぼりにされたのである。
幾ら何でも酷過ぎるでしょう、オーディンさん。
どうせアザゼルさんに大人の遊び場に連れてかれて、ハシャギ過ぎてロスヴァイセさんの事忘れたんだろうな。
「え～と……ロスヴァイセさん？」
「ねぇこれってリストラ!?　私ってばクビ!?　配属された部署の隅にいた私を拾ってくれたオーディン様に恩を返す為に、今まで必死に頑張って来たのに……こんな仕打ちってないじゃない！」
取り敢えず話だけでも聞いてあげようと隣に座ると、持っていたコップをテーブルに

叩きつけてから俺の肩を掴んで前後にガクガクと揺さぶりだした。
「どうせ私は仕事がデキない女よ！　小娘よ！　彼氏いない歴＝年齢の冴えない女よぉぉぉぉッ!!」
うおぉ！
食ったもんがシェイクされて大変な事に!?
ロスヴァイセさんが飲んでたの酒じゃないよね!?
「お、落ち着いて！　ロスヴァイセさん綺麗なんだから、彼氏なんてすぐに出来るってば！」
「適当な事言わないでぇぇぇ！　どうせ私なんか、私なんかぁ…うわぁぁぁん！」
掴んでいた肩は放してくれたが、今度はテーブルに突っ伏して泣き始めてしまった。
どうしようかと悩んでいると、ふと小猫ちゃんが先ほど持ってきた《悪魔の駒》が目に入る。
ふむ、折角だから聞くだけ聞いてみようか。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
うわぁ、ロスヴァイセさん荒れてるなぁ。
今は解放されたけど、カズキが絡まれて大変な事になってたし。
まぁ頑張って護衛してたのに、その護衛対象が自分を置いて勝手に帰ったらああもな

るか。

お、解放されたカズキがまた近づいていったぞ、どうする気だ？

「ロスヴァイセさん、オーディンさんの所に戻りたいですか？」

「うぅ……いまさら戻っても、処罰された上に左遷させられそうだし……」

カズキの問い掛けに、ロスヴァイセさんはテーブルに突っ伏したままくぐもった声で答える。

重症だな、こりゃ。

「行く所がないなら俺の眷属になりません？　サーゼクスさんが『【御使い】のカードは使ったのに、私の渡した駒は使ってくれないのかい……？』って呪詛を吐いてきて困ってたんです」

「え……？」

「まぁ俺は悪魔じゃないから、駒で転生して貰って形だけの眷属ですけど」

カズキはそんなロスヴァイセさんの肩に手を置いて諭す様に話しかけると、彼女は伏せていた顔をあげてこちらを見つめる。

あ、その光景を見た朱乃さんとゼノヴィアの表情が引きつってる。

「それにあんなセクハラ爺さんに仕えてたって、どうせ溜まるのは小銭とストレスだけですよ？　ロスヴァイセさんはまだ若くて優秀なんですから、幾らでもやり直せます」

仮にも北欧の主神に対してなんて事を言うんだこいつは。
まぁ、俺も爺さんって呼んでるし大差ないか。
「ですが異国の地に私一人、これからどうすればいいのか……」
「仕事が欲しいなら駒王学園で教師として働けるようにリアス先輩と会長さんにお願いしますし、住居もロスヴァイセさんさえ良かったら此処に住めばいい。将来をどうするかは、ここでゆっくり考えればいいんじゃないですか？」
「その、お誘いは有難いのですが実家に仕送りもしないといけなくて……」
考えが揺らいでいる様で、困惑しているロスヴァイセさんにカズキはさらに言葉を重ねていく。
「だったら尚の事うちに住めばいい。家賃なんていらないし、仕事を手伝ってくれれば別途で給金も出しますよ？」
「仕事って……貴方はまだ学生でしょう？」
「俺ってば冥界のテレビに時々出てるんですけど、アザゼルさんとセラフォルーさんがマネージャーつけろって煩くて。もしやってくれるならこの位は……」
カズキは近くに置いてあった紙に数字を書き込んで見せると、ロスヴァイセさんは驚愕した様子でその紙を掴み記入された数字を睨みつける。
「え、こんなに!?　ヴァルキリーのお給料より断然いい！」

「もちろん、教職の妨げにならない程度の仕事量にします」
「これだけあれば仕送りもだいぶ楽に……こ、こんな好条件、本当に私でいいんですか!?」
「このパーティーの準備の所為でこんな状況になったんです、責任は取らないと。そして何よりの特典は、今度オーディンさんに会ったら一発殴れる様に協力します」
「なります！私、カズキくんの眷属悪魔になりますッ！」
最後の一言を聞いた瞬間、即決するロスヴァイセさん。
そんなにオーディンの爺さんの事恨んでたの!?
こうしてカズキによる悪魔の誘惑により、ロスヴァイセさんはヴァルキリーから転生悪魔になった。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
勧誘に成功して、ロスヴァイセさんが眷属になってくれた。
魔法が得意だと聞いたので、《僧侶》の駒を渡す。
俺の時と同様紅い光が辺りを照らし、駒が消えてロスヴァイセさんの背中に悪魔の羽が現れる。
「と言う訳でみなさん、この度カズキくんにスカウトされてヴァルキリーから悪魔に転生したロスヴァイセです。これからよろしくお願いします！　カズキくん、オーディン

様の件、忘れないでくださいね!?」
「アッハイ」
どうやらオーディンさんに相当御冠の様だ、目に何か恐ろしいものが宿っている様に見える。
みんなも若干引き気味に笑っているが、朱乃さんとゼノヴィアには頬を引っ張られた。
ひたひれふ（痛いです）。
そんな事をしているとスコルがアタッシュケースを俺の所に持ってきて、ハティが蓋を器用に開けてから一吠え。
「もしかして、お前たちも眷属になりたいの？」
『ウォフ!!』
尻尾をブンブンと振りながら、その通りと言った感じに吠える二匹。
そうかそうか、可愛い奴らめ。
前まで完全な猫派だったけど、こいつらが可愛くてどっちも好きになってしまった。
また小猫ちゃんに拗ねられてしまう。
「よしスコル、ハティ。右と左、どっちがいい？」
俺はアタッシュケースを開いてそこに並んでいる《騎士》と《戦車》の駒を一つずつ

取り出し、左右の手でそれを握り込んでから二匹の前に差し出す。
スコルは右を、ハティは左を選ぶ。
右手には《戦車》、左手には《騎士》の駒が握られている。
「じゃあスコルは《戦車》で、ハティには《騎士》の駒をやるからな」
俺は二匹にそれぞれの駒を差し出すと、またまた駒が輝き出した。
《騎士》の駒は先程と同じ反応を示すが、《戦車》の方が反応しない。
何故？
「《悪魔の駒》は、対象によってその消費するこまの数が変わってくるの。きっと《戦車》一個じゃ足りないのよ、もう一個の《戦車》も使ってみて？」
俺が困惑していると、リアス先輩が説明しながら《戦車》の駒を手渡してくれる。
すると今度は《戦車》の駒も同じ様に輝き出し、それぞれスコルとハティの身体に消えていく。
なるほど、こういう仕組みだったのか。
「ん？　じゃあスコルはハティより強いって事なのか？」
「おそらく《騎士》の駒は【変異の駒（ミューテーション・ピース】だったのでしょう」
なにそのやたら長い横文字。
朱乃さんが言うには、本来複数駒が必要な者でも一つで済ませられる特別な駒の事だ

そうです。
　つまり当たりくじか、オマケでもう一本的な。
　そんな話をしていると二匹を包んでいた光が収まり、姿が見えてきたのだが……なんだかおかしい。
　ただでさえ元のサイズよりも小さくなっていた二匹は更に縮み、今は柴犬くらいの中型犬サイズになってしまった。
「《悪魔の駒》ってアポト○シンだったのか、今度この子たちに眼鏡と蝶ネクタイを買ってあげないと」
「先輩、名探偵じゃありません」
　知っているのか、小猫ちゃん。
　まぁそんなこんなで一日で眷属が三人出来ました、ゲットだぜ！
　△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「これがロキを倒したメンバーだよ」
「赤龍帝と白龍皇、ヴリトラに聖魔剣、オマケに古き神の武具を取り込んだ正体不明のイレギュラーか。とんでもない組み合わせだ」
「特にミョルニルを取り込んだ少年、彼は厄介だわ。単純な力なら曹操がいれば問題ないけど、あの子は何をしてくるのか分からない」

「そうだな、ああいうのを敵に回すのが一番怖い。曹操、どうする？」
「そうだな……敵にするのが怖いなら、いっそ味方にしてしまえばいい。それが無理でも手はあるさ、それこそいくらでもな」

間話5

「あ〜……やる気出ねぇ……」

「見事なまでにやる気を無くしてるわね、とてもロキを倒した人物とは思えないわよ？」

退院から数日経った、とある放課後。

堕天使へと転生したのを機に正式にオカルト研究部へ入部する事になった。

堂々と部室でくつろげるのはいいのだが、別に入部前からここでダベってたから特に変化はない。

むしろ雑務を押し付けられる様になった分、マイナスとすら言える。

今もリアス先輩とのゲームに負けて、学校に提出する部活の活動報告書を手伝わされている。

この人、トランプでもオセロでもとにかく強いのだ。

チェスや将棋になったら目も当てられない。

会長さんはこの人より更に強いと言うのだから、もはや怪物の域だな。

ちなみに他のみんな出払っているので、今部室にいるのは俺とリアス先輩のみ。

みんな悪魔の癖に勤勉過ぎる、もっと悪魔らしく自堕落にいこうよ。

それにイッセーが俺とリアス先輩が二人きりになる事を涙を流しながら羨ましがっていたが、俺に怒るのは筋違いだろうに。

『リアス先輩に興味ない』と弁解したら、今度はリアス先輩に仕事の量を倍増された。

テラ理不尽。

「貴方ならその気になれば何でも出来るでしょうに、何故そう不真面目なのかしら。もう少しやる気を出して色々してみたら？」

「俺が真面目にとか、そんなの軽いホラーじゃないですか。イッセーが急にスケベじゃなくなる位ありえ――」

俺とリアス先輩がそんな会話をしていると、部室のドアが大きな音と共に開け放たれた。

「リ、リ、リアスお姉さま！　大変です、大変なんですぅぅぅ！」

音に驚いてそちらを向くと、アーシアちゃんが涙目になりながら部室に駆け込んできてリアス先輩に泣きついた。

その後ろから、ゼノヴィアとイリナさんも複雑そうな表情でやって来る。

ありゃ、今日はこのメンツとイッセーで仕事に行ったんじゃなかったっけ？

あ、イリナさんは見学でね。

「落ち着いてアーシア、一体どうしたの？　イッセーは一緒じゃないの？」

リアス先輩はアーシアちゃんを宥めようと、優しく抱きとめながら話を促す。
しかしアーシアちゃんが答える前に、イッセーが遅れて部屋に入ってきた。
なんだ、やっぱりイッセーも一緒だったのか。
「随分と遅かったなイッセー、またおっぱいの観察でもしてアーシアちゃんを怒らせたのか？」
俺が笑いながらそう言うと、イッセーは目を大きく見開きながらハッキリと言い放った。
「カズキくん！　おっぱいだなんて、そんな下品な言葉を口にしないでくれ！」
……ん？
今、イッセーが何かすごい事を言わなかったか？
俺があまりの衝撃で混乱し動けずにいると、リアス先輩に泣きついていたアーシアちゃんが涙まじりに叫び声をあげた。
「イッセーさんが、スケベじゃなくなっちゃいましたぁぁッ!!」
「……カズキくん、イッセーがスケベじゃなくなるなんて……何だったかしら？」
……よし、『フェニックスの涙』取ってこなきゃ。

「カズキくん、なんで僕を椅子に縛るんだい？　僕、何か君を怒らせるような事しちゃったかな？」

ロキとの戦いでも頭の障害には『フェニックスの涙』が効かなかった事を思い出し、取り敢えず拘束する事にした。

「怒らせる事はしてないけど、泣かせるような事はしてるな」

ホラー的な意味で。

スケベじゃないイッセーとか、話してるだけで気持ち悪くて泣きそうになる。

「そうか……僕を縛る事で君が泣かなくて済むのなら、幾らでも僕を縛るといい！　それで世界から悲しみが一つ消えるのなら本望さ！」

「もうホント、お願いだから黙って下さい」

イッセーのあんまりな言葉を聞き、思わず怯えて綺麗な土下座をしてしまった。

それを見た朱乃さんが、微笑みながら俺の頭を優しく撫でて慰めてくれる。

優しくしてくれるのは嬉しいが、目の光が怪しい気がするのは何でだろう？

ねぇ、なんでそんなに息が荒いの？

「それにしても、ＵＦＯが襲ってきたって……そんなの眉唾モンの存在、本当にいるのか？」

「あの、カズキくん。ここは『オカルト研究部』な上に、僕ら自体が悪魔っていう超常的な存在なんだけど……」

俺の質問に、木場が苦笑しながら答える。

そう言えばそうだった、お前ら悪魔らしくないからつい忘れるんだよね。

まぁ俺も堕天使とかいう厨二チックな存在になったけど。

「カズキ、先輩は、うっかりさん、です、ね」

「うん、小猫ちゃん。可愛いセリフを言いながらイッセーを殴るの止めてあげて、そろそろ死んじゃうから」

椅子に縛られたまま、マウントポジションを取られながら殴られるイッセー。

流石に見てて気の毒なってきたのでやんわりと止める。

「叩けば直ると思ったんですが……」

床を掃除するのも大変だから、殴りすぎはよくないよ？

その後もアーシアちゃんがきわどい格好をしながらイッセーを元気付けたり、小猫ちゃんの仙術による治療も試したが効果はなかった。

どうしようかと途方にくれていると、部室の扉からスーツ姿の新任教師、ロスヴァイセさんがやって来た。

「ごめんなさい、カズキくんの仕事の件で話し込んでしまって遅れました……って、みな

さんどうしたんですか？」

リアス先輩が事情を説明すると『スケベじゃなくなるならいい事じゃないか』と言いながらも、イッセーの身体を北欧の魔術で調べてくれた。

「う～ん、なにやら頭に対して複雑な術が重ねがけされてる様ですね？　悪魔の術式に似ていて、北欧の魔術も混ざっていますね……堕天使の術式に通じてもいる様で――」

「ＯＫロスヴァイセさん、もういいです。謎は全て解けた……スコォォル！　ハティィィッ!!」

俺が指を鳴らしながら叫ぶと二つの魔方陣が現れ、そこから二匹の狼が出てきて尻尾を振りながら俺に飛びかかってくる。

あ、ちなみにこの子たちをここに呼び出してくれたのは朱乃さんです。

や、だって俺魔力とかほとんど無いから転移の魔法なんて使えないし。

じゃあやるなって？

いいじゃん、やってみたかったんだから。

「いいかふたりとも、今回の元凶はアザゼルさんだ。あの人の臭いを辿って、ここまで生かしたまま引き摺ってきてくれ……出来るか？」

『ウォン！』

「よし、行け！」

俺の指示を聞くと、スコルとハティは部室から駆け出していった。

既に下校時間は過ぎているから他の生徒に見られる事はほとんど無いし、すぐにここに連れてくるだろう。

「フェンリルをこんな事に使っていいんでしょうか？　というか、アザゼル先生死なないですよね……？」

ギャスパーくんが笑顔を引きつらせながら尋ねてくる。

大丈夫、腐ってもあの人は堕天使の親玉だ。

スコルとハティには生かして連れてきてって言っといたし、反省させる意味も込めて少しくらい手荒くてもいいと思うの。

「カズキくんは決めつけちゃってますけど、本当にアザゼル先生がやったんでしょうか？　堕天使総督な上に、仮にも教師ですよ？」

「あの先生は以前、イッセーのドッペルゲンガーを大量発生させた前科があるからな」

「何よりこの手の事でカズキくんが言い切るのなら、間違いなく犯人はアザゼル先生ですわ」

俺の行動にロスヴァイセさんが首を傾げていると、ゼノヴィアと朱乃さんが力強く断言する。

アザゼルさんの信用の無さっぷりがヤバい。

『ぎゃあぁぁあ～ッ!!』

遠くから響いてきた中年男性の叫び声。

暫くすると、それなりに大きな円盤型の何かを咥えた二匹が部室に飛び込んでくる。

モノはデカいが、なんだがフリスビーを取ってきた犬みたいに見えるな。

この子たちは犬っていうと拗ねるから言わないけど。

「お前、フェンリル使って追い立てるとかやめろよ！　本気で死ぬかと思ったじゃねぇか!!」

いい年したおっさんが涙交じりに訴えてくる。

おっさんの泣き顔なんざ誰得だよ。

「うっさいわ、懲りずにまたアホな事しでかしやがって。スコルたちのオヤツにされたくなかったら、さっさとイッセーを元に戻せ」

気持ち悪くてしょうがないんだよ、このイッセー。

スケベ過ぎて叱ったりもしてたが、こんな風になるなら元に戻ってくれた方がはるかにマシだ。

「そもそもなんでこんなマネしたんだ?」
「いや、こないだお前ン家で飯食った時ＵＦＯの特番やってただろ?　それを見てからなんとなくＵＦＯを作りたくなってな、自作してみたら思いの外上手くできたんだよ。で、試乗してたらたまたまイッセーが通りがかったもんだから思わず武装のビームを――」
「ハティ、左腕は機械だから右腕を狙え」
「わかった、イッセーはすぐに戻す。だからやめろ、マジでシャレにならん!」
ハティが唸りだすよりも早く、アザゼルさんは綺麗な土下座をみせる。
流石は俺と一緒に土下座を極めた男、なかなかの土下座だ。
まぁアザゼルさんは土下座のし過ぎで、既に価値などないが。
その後アザゼルさんはリアス先輩にハリセンで叩かれながらも何かの機械を用意して、その中にイッセーを押し詰めた。
「で、これをどうするんですか?」
アーシアちゃんが不安そうに機械を、というかカプセルの中から出ようともがいているイッセーを見つめる。
「以前イッセーのドッペルゲンガーが暴れる事件があっただろう?　その時のスケベなデータが偶然残っててな、こいつをイッセーに投射する」

「そのデータを使ってイッセーを戻す、か？　人間の頭がそんな簡単に治るもんかね？」
アザゼルさんは自信ありげに解説しているが、何やら怪しい気がしてならない。
それでも作業を続けていると、イッセーが入っているカプセルが光を放ち始めて爆発。
それぞれ物陰に隠れてやり過ごした後に爆心地に視線をやると、イッセーは無事の様で何も言わずに立ち尽くしている。
それを確認すると、リアス先輩はイッセーの元に駆け寄った。
「イッセー、無事だったのね!?」
「オパパ……」
「……イッセー？」
「オパパパ、オッパイィィィィンッ!!」
あ、駄目だこれ。
リアス先輩とアーシアちゃんは泣きだし、他の面子は頭を抱えた。
役立たずの中年には後でしっかりお灸を据えておいた、シェムハザさんが金銭的な面で。
その後、イッセーが元に戻ったのは次の日になってからだった。
リアス先輩とアーシアちゃんに抱きしめられながら一晩寝たら治ったらしい。

結局俺ら必要ないじゃん、今度からあいつに何かあったらリアス先輩ひん剥いて与えとけばどうとでもなるんじゃね？

「あんた他に怪しい機械作ってないだろうな？　俺もシェムハザさんに怒られるんだから、面倒起こすなよ」

イッセーが元通りになってから数日後、部室で駄弁っているアザゼルさんを問い詰める。

シェムハザさんからこの人を監視する様に頼まれてしまったので、面倒ではあるが現状は確認しなければ。

「最近は作ってねぇよ、前に作った『性転換ビーム銃』ならここにあるが」

アザゼルさんはそう言うと、懐からオモチャみたいな銃を取り出し机に置く。

なんともわかりやすいネーミングだな。

アザゼルさんの発明に興味があるのか、部室にいるみんなも近くに寄ってくる。

ん？

なんでギャスパーくんはこれを見て顔が引きつってるんだ？

「文字通り、撃った相手の性別を変換する銃だ。使ってみるか？」

「いらん。ていうか、これ使って悪さしてないよね？」

「……『悪さ』はしてないな、うん」

おい、あんた一体何をした？

視線を逸らすな、目を見て話せ。

「よーす……ってカズキにアザゼル先生、二人して何やってんの？　お、この銃……」

俺とアザゼルさんが小競り合いをしていると、イッセーが遅れてやってきて机に置かれた銃を手に取る。

「懐かしいな、ガキの頃こんなオモチャの銃持ってイリナと遊んだっけ」

イッセーはそう言うと、銃口を俺に向ける。

おい、まさか……。

「ホラ、この引き金引くと音が出たりライトが点滅したりしてさ……」

「ちょ、待てイッセー……！」

「へ？」

俺の制止も虚しくイッセーは俺目掛けて引き金を引いてしまい、銃口からビームが放たれる。

咄嗟の事で躱せずに当たってしまい、身体が光に包まれ思わず腕で顔を覆った。
「カズキ、大じょ……!?」
光が収まると、身体の節々に違和感を感じる。
「あらあら、これは凄いですわね……」
身体が上手く支えられない……特に、胸の辺りがやたらと重い。
「お、お前……カズキ、なのか？」
「イッセー、何を言って……ん？　なんかやたらと声がたか……いぃ!?」
なんか胸部に見慣れない二つの山が!?
てかなんで服まで男子の制服から女子のに変わってんだよ!?
「うわぁ～、カズキ先輩凄い美人さんですぅ……」
「これは、驚きだね……」
「胸もおっきい……むむむ……」
ギャスパーくんと木場が驚いた様に呟き、小猫ちゃんが一点を睨みつけながら唸る。
やめて小猫ちゃん、全く嬉しくないから！
「ブハハハッ！　可愛くなって良かったじゃねぇか!!」
「黙れおっさん！　早く元に戻しやがれッ！」
「おっと！」

いつもの様に殴り掛かるが俺の拳はアザゼルさんにあっさりと躱され、バランスを崩してそのまま地面に転がってしまった。

腕に身体が振り回されてる!?

「うぐ!?　な、なんでこんなに動きにくいんだぁぁ……」

「何時もと筋力も身体のサイズも違うんだから当然だろう？　まぁ一時間もしないうちに元に戻るから大人しくしてろ、俺は今のうちにトンズラするがな！」

「待てやコラおっさぁぁんッ!!」

俺の声など御構い無しにアザゼルさんは窓から飛び降りて逃走し、行方を眩ませた。

こちらにスコルとハティがいる事は把握しているので、おそらく冥界か何処かに逃げたと思う。

「くそ、あのおっさん今度会ったらタダじゃ……うひゃ!?」

アザゼルさんの出て行った窓を睨み付けていると、突然リアス先輩に頬を突かれて変な声が出た。

「お肌が凄い綺麗、プルプルしてるわ。アーシアも触ってみなさい」

「うわぁ凄いモチ肌、羨ましいですぅ」

リアス先輩に誘われて、アーシアちゃんまで俺の頬を突いてくる。

やめて、俺男なんだからモチ肌とか言われても嬉しくないよ!?

「ちょ、やめて下さい！　急に何を……ってなんで他のみんなもこっちににじり寄って来るんですか!?」
「あらあら、部長とアーシアちゃんだけズルいですわ」
「そうだ、私もカズキのタマゴ肌を堪能したいぞ」
「楽しそうだし私も混ざっちゃお♪」
朱乃さん、ゼノヴィア、イリナさんまでやって来て俺の顔や二の腕を触り始める。
抵抗しようにも、筋力が下がってるので振り払う事も出来ない。
誰か助け……そ、そうだ！
ロスヴァイセさんならきっと!!
「わ、私より瑞々しいお肌……うぅ、悔しくなんかないですからね！」
駄目だ、腕を取ってやたらと肌を睨みつけているこの人は役に立たない！
「あんたもか!?　眷属なら護ってくれよ……うひい!?　誰だ胸触った奴ぁ!!」
みくちゃにされる中、誰かがいきなり胸を揉んできた。
怒鳴りながら手の先を睨みつけると、無表情で胸を揉み続ける小猫ちゃんが!?
「いっぱい揉めば、私にも少しは……」
ボソリと呟いたその言葉を聞き、涙が出そうになった。
というか小猫ちゃん、若干怖いからやめて!?

「な、なんて凄い光景なんだ……まさに酒池肉林!!」
「俺を見ながら鼻血出してんじゃねぇぞイッセェェェェェッッ!!」
その後も俺が元に戻るまで弄られ続け、涙目になった俺が全力で懇願した事によりようやく解放された。
俺の姿が元に戻ったのは、それからすぐの事だった。

うぅ、もうお婿に行けない……

間話6

「カズキ、デートに行こう！」

夕飯をみんなで食べていると、ゼノヴィアが突然そんな事を言い出した。

ちなみに本日の夕飯は、ロスヴァイセさんお手製の北欧の郷土料理。

ニシンの酢漬け、日本でいう南蛮漬けみたいなのがめちゃくちゃ美味い。

アザゼルさん曰く、スコルとハティは何でも食べていいそうなので俺たちと同じメニューです。

「急に何言いだしてんの？　というか食事中に立つんじゃありません」

「む、すまん。なぁ朱乃さんとだってこの間デートしてたじゃないか、いいだろう？」

俺に注意されると、素直に椅子に座りなおすゼノヴィア。

しかしなんだって急にそんな事を。

「あぁ、そういえばその時は私たちが邪魔してしまったんでしたね。今更ですがあれは悪い事をしました、すみません」

「いいえ、もう気にしないで下さい。ちゃんと埋め合わせはして貰えましたから」

ロスヴァイセさんが頭を下げると、朱乃さんは何時もの笑顔で答える。

埋め合わせって、一緒に作った肉じゃがをバラキエルさんに渡した事か？
バラキエルさんってば朱乃さんから渡された肉じゃが、『朱璃の味だ……』って呟いて泣きながらかっこんでたな。
姫島朱璃、亡くなった朱乃さんのお母さんか……ちょっともらい泣きしそうになった。
「でもなぁ、俺ってばこないだお前らに虐められて傷心中なんだよなぁ」
「女になった時の事か？　別に女同士だったんだからいいじゃないか、減るもんじゃない。それにちゃんと謝っただろう？　なんなら今から私のも触るか？」
「ごっそり減ったわ、俺の中の大切な何が。というか女の子が軽々しくそんな事言うんじゃない」
「でも本当に可愛かったですよ？」
「うふふ、お肌はスベスベで髪は腰まで伸びて……とっても綺麗でしたわ♪」
ゼノヴィアだけじゃなく、朱乃さんにロスヴァイセさんまでそんな事を言い出す。
みんなして俺の身体弄り回しやがって……。
特に朱乃さんはどこからともなく縄を出してきて、俺の事縛ろうとして来たからな。
そっちのケがあるのかと、しばらく近づけなくなった位だ。
「うぐぐ……えぇいこの話は終わりだ！」

「自分から振ってきた癖に……まぁいい、それよりもいいだろ？　私とデートしよう！」
俺がムリヤリ話を断ち切ると、ゼノヴィアが背中から抱きつきながら話掛けてくる。
怒られないように、食事は終わらせ食器も片付け済みだ。
「こら、いくら家の中でも男女がむやみにくっつくんじゃありません！」
まぁロスヴァイセさんには当然怒られるけどな。
うちの『僧侶』は男女間の風紀に厳しいのだ。
「まぁ出掛けるのはいいけど、お前とは散歩でここら辺は大体行ったからなぁ。どこか行きたい場所あるのか？」
「実は今日の昼にアーシアやイリナと話をしてな。アーシアがイッセーに渡すプレゼントを買う為に今度三人で東京まで出掛けるんだが少々不安でね、下見ついでにカズキとデートしたいんだ」
なるほど、ここからだと電車を乗り継ぐから初めてだとわかり難いかも知れない。
最近は遠出もしてなかったし、修学旅行の買い物もついでに済ませるか。
「じゃあ今度の休みにでも行くか、それでいい？」
「うん！　楽しみだ!!」
……ちくしょう、ゼノヴィアの『うん！』に動揺してしまった。
いい笑顔で言いやがって、ちょっとときめいちゃったろうが。

そして次の休日。
一時間ほど電車に揺られ、俺とゼノヴィアは東京の『秋葉原』までやって来た。
なんでも、イッセーの欲しいものはここにしか売ってないんだそうだ。
なんて言うか、既に嫌な予感しかしない。
「さぁカズキ、まずはどこから行こうか」
「お前は何時でも元気だなぁ」
「当然だ、今日はカズキを独り占め出来るからな！」
「……さいで」
ゼノヴィアに手を引かれながら、そこら辺を適当に散策する。
大手チェーンの家電量販店や、漫画だけじゃなくＣＤやアニメのＤＶＤまで置いてある大きな本屋など。
特に電化製品に興味津々な様で、ホームベーカリーを見て目を輝かせていた。
ゼノヴィアはシスターとして質素な生活を心掛けていた事もあり、色々と面食らっている様ではあったが実に楽しそうだ。
俺も話には聞いていたが来るのは初めてだったので、その賑やかさに少し驚いたし人

混みに疲れてしまった。
　修学旅行で必要な物を買おうかと思ったが、疲れたしまた今度でいいや。
「う～んこの街は凄いな、活気に溢れている。それにまさか日本の戦士に会えるとは思わなかった」
「いや、あれはコスプレって言ってな？」
　街の一角で行われていたコスプレの撮影会で見た『ビキニアーマー』に興味津々なゼノヴィアを引っ張り、近くの公園で休憩中。
　お願いだから、あんなの着て出歩こうとしないでね？
　身内から逮捕者が出たら泣くに泣けない。
「さて、それじゃあそろそろイッセーのプレゼントが売ってる場所に行ってみるか。何処に売ってるんだ？」
「えっとな、桐生から貰ったメモによると……」
　ゼノヴィアがメモを見つめているのを脇から覗くと、何とも怪しげな字面が並んでいた。
「なぁゼノヴィア、アーシアちゃんはイッセーに何を渡す気なの？」
「確か、『えろげ』という映像作品だとか言っていた気がする」
　今日帰ったらすぐにイッセーの家に行って、アーシアちゃんを説得せねば。

多分桐生辺りの入れ知恵何だろうが、取り敢えずイッセーをしばく。
ゼノヴィアに今日は帰ろうといったら渋ったので、先程欲しがっていたホームベーカリーを買う事を提案。
喜び抱き着いて来て、そのまま家電量販店に戻りそれを購入。
今は電車で座席に座りながら、ニコニコ顔でホームベーカリーを抱き締めている。
「そんなに欲しかったのか、それ？」
「普通の料理はまだ朱乃さんに手伝って貰わないと出来ないからな。これなら私も、カズキに手料理をご馳走出来る！」
……こいつは時々可愛い事を言うから困る。
ゼノヴィアはホームベーカリーを頭上に掲げながら喋り続ける。
「最後に行きたい場所があったが、それはまたの機会にしよう」
「なんだ、まだ行きたい場所があったの？」
「あぁ。若者はデートの最後に『らぶほ』と言う所で仲を深めあうと桐生から聞い、あぅ!?」
ゼノヴィアの言葉を頭をはたきて事で中断させる。
公共の場で何を言い出すんだこいつは。
ていうか桐生、やっぱあいつも締める。

「ゴホッ、ゴホッ！　あ〜づらい……」

どうもみなさん、カズキです。

この度、ものすごい久しぶりに風邪をひいてしまいました。

ゼノヴィアと出掛けた後にイッセーの家に突撃すると、イッセーが風邪を拗らせていた。

その風邪が、あいつの家に行った俺にうつったらしい。

何でもドラゴンがひく風邪だそうで、リアス先輩の紹介で冥界の医者に診てもらった。

バカでかい注射を持ち出して来たので、点滴にしてもらう様に頼んだらあっさり変えてくれた。

『君はつまらない』と医者に文句を言われたが、調子の悪い人間にそんな物を求めないで欲しい。

とにかくそこで薬も貰い、今は自宅で大人しく寝ていると言う訳だ。

最後に風邪ひいたのいつだったっけ……グリゴリのみんなが心配してくれて、やたらと慌ててたのが面白かったのは憶えてる。

ヴァーリさんが微妙に焦ったり、美猴さんが笑いながらおかゆを作ってくれたり。

これがいい思い出ってヤツなんだろうなぁ。

「ゼノヴィアちゃん、カズキくんの看病は私に任せてくれていいのよ？」

「何を言うんだ朱乃さん。カズキのピンチを救うのは、あいつに背中を任されたこの私だ」

「どちらでもいいですから、早く看病させて下さい。カズキくんが寝込んでいるのに、二人して何をやっているんですか」

朱乃さん、ゼノヴィア、ロスヴァイセさんの三人は、部屋の外から聞こえるほど大きな声で互いを牽制しあっている。

なんで飲み物頼んだだけでこんな事になるのか。

「あらあらロスヴァイセさん、そうやってカズキくんのポイントを稼ぐ気なんですね？」

「な!?　べ、別に私はカズキくんの事をどうこう思っている訳では……！」

「そうなのか？　てっきり私はロスヴァイセさんもカズキの事もがもが……」

「そんなんじゃないです！　確かに優しいし頼れるけど、そんな……うぅ、違います。本当に違うんですぅぅッ!!」

頭がクラクラするから全部は聞き取れないが、要所要所は聞こえてくる。
こんだけ全力で否定されると、心に響くものがあるな。
水分が欲しいのに、逆に目から垂れ流されていく。
「お～い、誰でもいいから早く水くれ～」
「はい、どうぞ。こういう時はスポーツ飲料の方が良いですよ、塩分も取れますから」
「あ、ありがとう会長さ……ん？」
手渡された飲み物を飲もうと身体を起こしたが、すぐに違和感に気付く。
「……何で会長さんがここに？」
「お見舞いで来たんですが、何やら部屋の前が混み合っていたので転移して。ほら、気にせず横になって下さい。あ、フルーツ食べますか？」
会長さんはそう言いながら、持ってきてくれたであろう袋を持ち上げる。
何やら色々と入っている様だ。
「じゃあ、お願いします」
「ふふ、お願いされました♪」
俺がそう言うと、会長さんは微笑みながら了承してくれた。
何だろう、凄い癒されるんだけど。
「サジも来たがっていたのですがドラゴンがかかる風邪と聞いたし、他の眷属の子達が

やけに止めるので念のためあの子は置いてきました」
何でしょうね？
会長さんはそう言いながら、フルーツと一緒に持参した果物ナイフで器用に皮を剥いていく。
包丁さばきは凄いんだよな、料理も出来るし。
それでなぜお菓子だけがダメなんだろう？
「はい、出来ました。リアスからグレモリー領の果物を喜んで食べていたと聞いたので、お姉さまに頼んでシトリー領で採れた旬の物を送って貰ったんですが……」
会長さんはそう言いながら、皿に盛られたフルーツを差し出してくれた。
桃に似ているそれは、瑞々しくて実に美味そうだ。
「美味しそうですね、いただきます」
「寝たままで良いですよ？　はい、どうぞ」
会長さんは身体を起こそうとする俺を制止すると、口元まで果物を運んでくれる。
あ～んって言わないんだなとか思った俺はこのまま死ねばいいと思う。
されるがままに剥かれたフルーツを口にする。
噛む度に果汁が口の中に広がり、優しい甘みが身体に染み渡る。
「美味しいですね、これ」

「口に合って良かったです、もう一つどうですか？」
「あ、いただきます」
「じゃあどうぞ」
そしてまた口元に運ばれてくる果物。
もう役得として、素直に食べさせて貰おう。
綺麗な笑みを浮かべながら、果物を食べさせてくれる会長。
あれ？
この人実は天使じゃね？
むしろ女神様じゃね？
こんな優しい人が、悪魔は訳がない。
「何て言うかあれです、結婚して下さい」
「私にチェスの１０本勝負で勝ち越せたら良いですよ？」
「マジですか、風邪が治ったらチェスの勉強しなきゃ」
「ふふ、頑張って下さいね」
だから、こんな事を口走っても仕方がないと思う。
会長さんもあっさり流してくれたし、問題ないよね？
そんな軽口を言い合っていると、大きな音を立てながらドアから見知った三人が雪崩

れ込んできた。
「……何やってんの、三人揃って」
「い、いえ、それぞれ分担して世話をしようと決めて部屋に入ろうとしたら……」
「何時の間にか会長がいたので、入るのを躊躇ってしまって……」
「何だか入りにくい雰囲気を醸し出されていたのでつい聞き耳を……」
俺が尋ねると、三人はしどろもどろに言い訳を始める。
「ふぅ……カズキくん、貴方は早く身体を休めて下さい。私はこの三人と、少しお話しする事があるので」
「了解です。お見舞いありがとうございました、お見送りできなくてすみません」
「気にしないで下さい。ではまた」
会長さんはそう言うと、三人を引き連れて部屋から出て行った。
俺がそれを見送ってから目を瞑り、三人の言い訳する声とそれを論破する会長さんの声を聞きながら眠りについた。
次の日には体調は回復した。
会長さんに怒られたからか、シュンとしている三人はちょっと可愛かった。

間話7

部長のお義姉さん、グレイフィアさんが休日を利用して我が家にやって来た。
オフの時のグレイフィアさんは部長の義姉として接する事になるので大変厳しいらしい。
部長はすっかり怯えており、フォローして貰う為にカズキの家にいる朱乃さんを呼び出すほどだ。
それだけだったらよかったのだが、その後に怒涛の展開が待っていた。
魔王サーゼクスさま襲来、残りの四大魔王さまとの謁見、そして何故か魔王さま方と一緒にいるカズキ。
なんでもカズキはサーゼクスさまに会議の方へ呼ばれていたらしい、朱乃さんがサーゼクスさまを見た時に一際驚いていたのはこれが原因か。
何も言わずに立っているカズキが少し怖い。
それから数日後、何故か俺と部長はグレモリー家に伝わるという儀式を行う事になりグレモリー領のとある山岳地域にある遺跡へとやってきた。
そこで待っていたのは、日曜日の朝からやっている様な赤、青、黄色、緑、ピンクの

戦隊モノの衣装に身を包んだ五人の集団だった。
ていうか、四大魔王＋グレイフィアさんだった。
何してるんですかあなた方は!?
「ふはははは！　我らは魔王戦隊サタンレンジャー！　この遺跡で君たちに試練を与える為にやってきた！」
そう言いながら、いちいちポージングする赤い人。
部長は気づいてくれないけど、あなたどう見てもサーゼクスさまですよね？
声とかそのままだし。
「　試練までの道のりは、我らの仲間である『グランモール』が導いてくれる。さぁ、二人の絆で見事試練を突破してみせろ！」
そう言うと五人の姿は消え、地面からモグラの着ぐるみが現れた。
あのメンツに加えてモグラ……もしかしてカズキ、か？
「どうぞ、着いてきて下さいモグ～……」
地面から出てきたのに身体に汚れ一つ付けていないそいつは、のそのそと俺たちの前を歩いていく。
なんかさっきの連中と比べてテンション低いな……ますますカズキっぽい。
まぁ部長は乗り気だから仕方ない、さっさと試練とやらを突破してみせるぜ！

試練は三つあり、それぞれ『ダンス』、『テーブルマナー』、そして『ペーパーテスト』だった。

ダンスやテーブルマナーは部長の実家でみっちり特訓したし、冥界の一般知識なんかも木場たちに教えて貰って勉強してる。

完璧ではなかったけどなんとか全ての試練を突破する事ができ、部長はご褒美に沢山ほっぺにキスしてくれた。

これだけで頑張った甲斐があったってもんだ！

最後の試練を担当していたブルーに促され、レッドことサーゼクスさまが待っているという最後の部屋へとやってきた俺と部長。

そこはまるでコロシアムの様になっており、中央ではレッドとイエロー、つまりサーゼクスさまとグレイフィアさんが佇んでいる。

「二人とも、よくぞ試練を突破した！　しかーし、これで終わるほどグレモリー家の儀式は甘くない！　最終試練としてこのサタンレッドと戦ってもらおう、見事私を倒して見せろッ！」

「……無理だけはしないで下さいね？」

レッドはポージングを取りながらそう宣言し、イエローは申し訳なさそうにこちらに頭を下げてくる。

……いやいやいや、相手は魔王さまだよ!?

勝てる訳ないじゃん!?

動揺している俺に、レッドは容赦なく襲い掛かってくる。

く、くそ!

とにかく禁手にならなきゃ、ドライグ!!

『応ッ!!』

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!!!!』

「ふふふ、ようやく本気になったか！　ゆくぞ赤龍帝、いやおっぱいドラゴン！　冥界の真のヒーローはどちらか、雌雄を決しようではないかッ！」

「くそ、サタンレッド！　こうなったら、容赦しませんよ！」

こうして、俺は魔王サーゼクス・ルシファーさまと戦う事になった。

「どうしたおっぱいドラゴン！　こんなものか!?　リアスへの想いはこの程度なのか!?」

――が、まるで歯が立たない。

俺は息も絶えだえなのに、サタンレッドは啖呵を切りながら余裕でポージングを繰り

返している。
クソ、格上なんてわかっちゃいたが……強過ぎる！
ドラゴンショットを撃っても滅びの魔力に消滅させられ、打撃合戦をしようと突っ込んでも簡単に受け流される。
これじゃあ勝負にもなりゃしない。
こうなりゃ奥の手だ、タンニーンのおっさんとの修行で身に付けたこいつを喰らえ！
息を目一杯吸い込み、腹の中に魔力で火種を作る。
それにドライグの力を譲渡して、マスクの口部分を開いてから一気に吐き出す！
俺の口から放たれた大火力の炎の息！
おっさんほどじゃないが、これだけ広範囲なら簡単には簡単には消滅出来ないはず!!
「見事なドラゴンの息だ。だが、まだまだ甘いぞ！」
サタンレッドは俺の攻撃を見てうんうんと頷いた後、なんとそのまま炎の中に突っ込んで来た！
範囲を広げすぎて、炎の密度が薄くなってたのか!?
サタンレッドは炎を突き破りながら拳を振り上げ、俺は咄嗟に腕を交差させて防御の態勢をとる。
が、来るはずの衝撃が何時までも来ない……？

「何ィッ!?」
「……」
そう、俺に降りかかるはずだった拳を止めてくれた存在がいた。
ここまで俺たちを案内してくれたモグラの着ぐるみ、『グランモール』だ!
サタンレッド、いやサーゼクスさんの攻撃を受け止めるなんて……やっぱりこいつは!
「待っていたよ、この時を……あんたを、殴り飛ばせる瞬間を!」
次の瞬間着ぐるみが内側から弾け飛ぶ。
機械の駆動音を辺りに響かせ、銀色の装甲を身に纏った戦士が現れる。
というか、禁手化したカズキだった!
やっぱあれの中身はお前だったのか!?
「これ以上あんたの好きにはさせない! 赤龍帝、いやおっぱいドラゴン! 俺も一緒に戦う、協力してサタンレッドを倒すんだ!」
……ええ~?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「はい? 冥界に来てくれ?」
とある休みの前日の夜。

ようやく調子が戻ったモグラさんと遊んでいると、サーゼクスさんから連絡が来た。
というか以前渡された宝玉が輝き、そこからサーゼクスさんの姿がいきなり浮かび上がったのだ。
立体映像ってやつかね？
しかし朱乃さんの言う通り、貰った物を押入れからリビングに移動させといてよかった。
前の《悪魔の駒》みたいに、必要な時に何処にあるのかわかりませんじゃ大変だしね。
『あぁ、少々マズイ事になってね。是非君の力を借りたいんだ』
サーゼクスさんが真剣な顔で言い放つ。
……なんか胡散臭い。
この人の持ってくる話の時点で、怪しさがそれはもうハンパじゃないが。
「でも俺、明日はちょっと予定が……」
『そう言わずに頼むよ、来てくれたならそれ相応の礼はする。どうしても君でなければダメなんだ』
俺が渋っても、サーゼクスさんは諦めずに食い下がってくる。
何時もなら割と簡単に引き下がるのに、これだけしつこいのも珍しい。
もしかして相当な重要案件なのか？

この人も魔王って言う重役なんだ、何でもないのに呼び出したりなんてしないか。
「わかりました、行きますよ。それで、俺はどうすればいいんですか？」
『おぉ来てくれるか、ありがとう！　では明日の朝に迎えを寄越すから、その者について行ってくれ』
「了解です、じゃあまた明日という事で」
『面倒を掛けてすまないが、よろしく頼むよ』
サーゼクスさんの言葉を最後に、映像と共に宝玉から光が消えた。
魔王業が大変なんだろうが、せわしないなぁ。
「あの、カズキくんってどういう立ち位置なんですか？　魔王さまから直々に勅命を受けるって、相当凄い事ですよね……？」
「カズキくんは魔王サーゼクスさまのご友人ですから。時々頼み事をされてるようですわ」
「カズキも文句を言いながら、なんだかんだで頼みを聞いてるしな。仲がいいのは良い事だ」
そこ、好き勝手言ってんな。
にしても明日か、一体何をやらされるんだか……。

次の日の朝。
支度を整えてリビングで待っていると、インターホンが鳴る。
どうやら迎えとやらが来たらしい。
ロスヴァイセさんが出迎えに行ってくれた。
「んじゃ行ってくる。夕飯も適当に済ませるから、みんなで食べちゃって」
「私も今日はリアスの所に行ってきますわ。何やら向こうも大変だそうで……」
俺が立ち上がると、朱乃さんも魔法陣を展開してイッセーの家に転移していった。
ありゃ、リアス先輩も何かあるのか？
……これ、やっぱりしょうもない展開なんではなかろうか。
「やっぱり迎えの人に言って断ろうかな……」
「それをされると俺がみんなから虐められるんで、勘弁して下さい」
俺の呟きに返事が返ってきて驚き振り向くと、何やら黒いスーツを着た体格の良い茶髪の男性が立っていた。
髪の色以外はいかにも『ＳＰ』って感じの人だな、悪魔の社会でも要人警護の人ってこんな感じなのか。

「という訳ですみません、悪いですけど問答無用で連れてかせて貰いますね」
「へ？」
ＳＰ風の男性が頭を下げると同時に床が光り、俺が間の抜けた声をあげると自宅から一瞬で見知らぬ場所に飛ばされた。
外を覗くと空が一面紫色、って事はここはもう冥界なのか？
「いやぁ、申し訳ない。サーゼクスさまの命令で、逃がす訳に行かなかったもんで。あ、俺はサーゼクスさまの《兵士》やってるベオウルフってもんです」
「はぁ、どうも。瀬尾一輝です」
先ほどと変わらず俺の前に立っていた男性、ベオウルフさんが自己紹介しつつニコニコと手を差し出してきたので、反射的に此方も手を出して握手する。
すると少し驚いた様な顔をした後に、先ほどとは違うニンマリと獰猛な笑みを浮かべる。
「へぇ、最近まで人間だったって聞いてたけどその割にはなかなか……流石にサーゼクスさまが気に入ってるだけあるね？」
ちょ、この人もバトルジャンキーかよ！
なんでこの手の人たちって握手で実力わかるの!?
ジャンキーになるとそういう変態的な能力が身につくもんなんですか!?

まさか、この人とやり合えってのが依頼とか言うんじゃないだろうな？
この人明らかに俺より何段も格上じゃんか！
逃げ……って手が振りほどけねぇ!?
「か、勘弁して下さいよ……俺みたいな弱っちい奴を虐めたって楽しくないですよ？」
「自分の事を弱いって言う奴は、大抵厄介なもんなんだよねぇ。まぁそんなに怯えないで、手荒な真似はしないから」
ベオウルフさんは笑いながら握っていた手を離してくれた。
何をやっても解けないのに手は痛くないってなんだよ、どんな技術なの？
「本当ですか？　信じますよ？　嘘ついたらグレイフィアさんにあることないこと言いふらしますからね？」
「そっちの方こそ勘弁して。とにかく、着いてきて貰っていいかな？」
離してもらった手を摩りながら言うと、ベオウルフさんは苦笑いを浮かべてから前を歩き始めた。
あ、なんか今ので眷属内のヒエラルキーがわかった気がする。
多分サーゼクスさんよりグレイフィアさんの方が上なんだろうな。
そんでこのベオウルフって人は眷属の中でも相当下の方だな。
駒的にも、性格的にも。

そう考えるとこの人も苦労してるんだろうな、サーゼクスさんのパシリとか想像しただけで嫌気がさす。

そんな事を考えながら歩いていると、何やら大きな扉の前までやって来た。

「んじゃ、この中に入って貰っていいかい？　俺に任された仕事は、君をここまで連れてくる事だから」

「そうですか、ここまでありがとうございました。サーゼクスさんのパシリとか大変でしょうが、めげずに頑張って下さいね？」

「なんか少し話しただけで俺の立ち位置バレちゃってる!?　やめて、優しくされると泣きたくなるから！」

ベオウルフさんは扉を開くと、俺に中へ入る様に促す。

もうここまで来たら抵抗するのも無駄なんだ、素直に従って早く帰ろう。

お礼を言いながら部屋に入ったら何やらベオウルフさんが後ろで騒いでいたが、まぁ気にしなくてもいいだろう。

なんかあの人弄られ体質っぽいし。

中に入ると通路の先にまた扉があり、そこが部屋になっている様だ。

なんで扉を開けた先がまた扉なんだよ、なんだこのゲームみたいな無駄な空間。

いや、魔王が所有してる建物なんだからこれが正しいのか？

あぁもういいや、とにかく用事を済ませてさっさと帰ろう。
溜め息と共に力を込めて扉を開くと、そこには見覚えのある三人の人物が丸いテーブルを囲む様に座っている。
こういうテーブルを円卓って言うんだっけ？
その三人は部屋に入ってきた俺に視線を送り、その中の一人が手を振りながら話しかけて来た。
「あれ？　カズキくんじゃない、久しぶり～☆　なんでここにいるの？」
そう、会長さんのお姉さんであるセラフォルーさんその人である。
今日は何時もの魔王少女の格好ではなく、落ち着いた色の大人っぽい服を着ている。
何時もこうして真面目にしてれば、会長さんからあんなに怒られないだろうに。
「どうもセラフォルーさん。サーゼクスさんに呼ばれたんですけど……居ないみたいですね？」
「あら、サーゼクスちゃんたらカズキくんに何の用かしら？　でもじきに会議だから、直ぐにくると思うわよ？」
セラフォルーさんは人差し指を頬に当てながら首を傾げる。
普通ならあざとすぎるのに、この人がやると似合いすぎててそういう感情が湧いてこない。

「以前一度だけ会った事があったかな？　サーゼクスからよく話は聞いている、ロキをほぼ単独で倒した有望株だそうじゃないか。私はアジュカ・ベルゼブブ、魔王なんてものをやっている」

「……あ～そう言えば会った事あるような、ないような。僕はファルビウム、魔王だよ～……」

俺がセラフォルーさんと話していると、緑の髪をオールバック気味にセットしているアジュカさんと、なんとも気怠げな雰囲気を醸し出しているファルビウムさんも挨拶してくれた。

なんかどの魔王も独特だな、アジュカさんはマトモっぽく見えるけど。

「どうも、瀬尾一輝です。初めてマトモそうな魔王に会えて嬉しいです」

「……いやぁ～、照れるよ～……」

違うファルビウムさん、あんたじゃない。

「ねぇねぇ私は？　私はマトモじゃないの？」

自分を指差しながら、黒い笑みを浮かべるセラフォルーさん。

あかん、誤魔化そう。

「あ、フルーツ美味しかったです。セラフォルーさんが会長さんに送ってくれたそうで、ありがとうございました」

「あら、ソーナちゃんたら私からって言っちゃったの？　そんな事言ったらポイント稼ぎにならないのに……」

やはりこの人には会長さんの話を振るのが一番だな、簡単に思考が飛んでいく。

しかしポイントってなんの話よ？

「はは、サーゼクスはマトモじゃなかったか？」

「悪い人じゃないですけど、あんな妹狂いがマトモとかありえません」

「ククッ、確かにそうだな」

アジュカさんはえらく楽しそうに笑う。

見た目クールっぽいのに、意外と取っ付き易いのかも？

「妹で思い出したが君には謝っておかないといけない。愚弟が迷惑を掛けた」

「愚弟？」

「カズキくん、アジュカちゃんはアスタロト家の出身なの。だから……」

ベルゼブブなんて人、他にいたっけ？

俺が悩んでいると、セラフォルーさんが隣で耳打ちしてくれた。

なるほど、この人アーシアちゃんにちょっかい出したストーカー野郎のお兄さんなのか。

「言っときますけど、謝罪なんてしませんよ？」

「当然だ、あいつは道を踏み外した上に君の仲間に手を出した。どのような結末だろうと、それがあいつに相応しい最後だ」

ふむ、かなりドライなお言葉だ。

公私を分けて考えられる人なのか、それとも単純に兄弟仲がよくなかったのか……なんとなくだけど前者かな？

「そうだ、君の中にある《御使い》のカードを見せてくれないか？　《悪魔の駒》と似たシステムなら、私にも調整が出来る筈だ」

なんかよくわからないが、悪い事はされないだろうし了承する。

それを確認してからアジュカさんが俺の胸に人差し指を突きつけると、魔方陣が幾重にも展開され見た事のない文字やら数字やらがすごい勢いで飛び回っていく。

うおぉ、これは見てるだけで眼が痛くなる！

アジュカさんは飛び交う文字群を捉えながら、一人で納得する様に頷いている。

あのスピードで動きまくる文字や数字を、全部正確に把握してるのか。

やっぱ魔王って凄いんだなぁ。

「ミョルニルのオーラが《御使い》のカードと併せて細胞単位で作用して、肉体に働きかけている様だが……詳しくはわからないな。しかしこのままでは君の負担が大き過ぎる、出力の微調整だけはしておくよ」

何を言ってるのかさっぱりわからないが、馬鹿なのがバレない様に取り敢えず頷いておいた。

アジュカさんも調整とやらが終わった様で、いくつもあった魔方陣が次々に消えていく。

「君の神器はかなり特殊な進化を続けている様だ。しかし急激な変化は何処かしらで綻びが生まれる、気をつけるといい」

「……頭に入れときます」

アジュカさんの言葉に、真面目に答える。

俺だけならまだしもモグラさんにも関係してくる事だ、きちんとしよう。

「にしてもサーゼクスちゃんたら遅すぎよね？　いつも時間には厳格なのに、何かあったのかしら？」

セラフォルーさんが時計を見つつ呟く。

そういやサーゼクスさんに会いに来てたの忘れてたわ。

「……え～、面倒ごとはごめんだなぁ……」

「サーゼクスの事だ、またなにかやらかすつもりなんだろう？　俺は『ゲーム』の運営で忙しいから、早く戻りたいんだがな」

ファルビムさんとアジュカさんも愚痴り始める。

人を呼び出しといて本人はいないし、会議はすっぽかして遅刻するし……やっぱあの人ロクでもないな。

その少し後にこの部屋に小さな魔方陣が現れ、そこからサーゼクスさんの姿が映し出された。

なんでもイッセーの家に行っていて、そこから会議に出席するつもりだったそうだ。

「ねぇ、だったらなんで俺をここに呼んだの？」

そこで待ってりゃ会えたじゃん。

「カズキくんをビックリさせようと思ってね。どうだい、残りの四大魔王と謁見した感想は？」

「……カンドーデコトバガデテコナイヨー」

「そうかそうか、そんなに喜んでもらえると嬉しい限りだ。特にアジュカとは気が合うと思ってたんだよ」

この天然魔王、嫌味が通じねぇ。

見ろ、横でアジュカさんが笑いを堪えてプルプルしてるだろうが。

サーゼクスさんがイッセーの家を離れた後、俺を呼び出した理由を再度尋ねた。

なんでも、リアス先輩とイッセーの仲を認めさせる儀式の手伝いをして欲しいという

事だった。
なに？　そんな事で俺ここまで呼び出されたの？
いや、めでたい事なんだろうけどさ。
俺、今日ここに来る必要なかったよね？
どうしよう、『サーゼクスさん〆る』って感情しか湧いてこない。
でも相手は腐りきっていても魔王、俺単体だと殴る事さえ出来ない気がする。
ならどうするか、答えは決まってる。
【一人でダメなら複数で】、だ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
状況について行けず混乱している俺を置いてけぼりにし、話はどんどん進んでいく。
「何故だ、何故君が邪魔をする！」
「アンタが何をやろうが勝手だがな、俺を面倒ごとに巻き込むんじゃねぇ！　そこんとこ解らせる為にも、今日アンタをブン殴る！」
「……いいだろう、君とも一度戦ってみたかったんだ。さぁ未来ある勇敢な若き悪魔と、神を打倒せしめた人の子よ！　二人で力を合わせ、私を越えて見せるがいい！」
サタンレッドが再びポージングをすると、背後が爆発してカラフルなスモークが焚かれる。

無駄に凝ってるなぁ……これ、他の魔王さまたちがやってるのかな？
だが、カズキが助けに来てくれたのはありがたい！
一人じゃ手詰まりだったが、カズキと一緒なら！
「カズキ、作戦を――――」
「……ふたりぃ？」
作戦を練ろうとカズキに近づくと、なんかすごい悪い顔をしていた。
うん、もう経験でわかる。
こいつもう既になんか仕込んでる。
でも、生半可な罠でこの人をどうにか出来るなんて思えないんだが……？
「おいおい、何を勘違いしてるんだ？　誰が【俺たち二人で】なんて言った？」
「……？　何を言って――――」
「こっちは二人じゃない、【三人】だ！」
サタンレッドが不審がっていると、背後に何者かが降り立った。
レッドが振り向くよりも先に、その身体を幾つもの魔力の鎖が縛り上げる。
そこにいたのはレッドと同じ格好をした戦士、サタンブルーことベルゼブブさまだった！
「な、何をするんだブルー!?」

「悪いなレッド、そこの少年に話を持ちかけられてね。面白そうだったから、私は向こうに付く事にしたよ」

レッドの訴えに、ブルーは実に楽しそうな声音で答える。

せ、戦隊モノの仲間が裏切った!?

いいのかこれ!?

俺が驚愕しているとカズキは俺の肩に手を置き、もう片方の手の親指でサタンレッドを指差す。

「さぁ今の内だ赤龍帝！　限界まで力を上げて、最大威力の攻撃をあいつにブチかますぞ！」

最低だ！

こいつ、本当に最低だ！

「ちょ、あの人一応魔王さまだぞ！　そんなとんでもない事していいのかよ!?」

「構わん、俺が許す。そもそもあの人は『サタンレッド』であって、俺たちが知ってる魔王さまなんかじゃないんだよ？　なんの問題もないだろう」

いや、構えよ！

お前だって中身が誰だか知ってる癖に！

「それにドライグ、いいのか？　あの人はお前が『おっぱいドラゴン』と広く呼ばれる事

になった元凶の一人だ、今なら無抵抗のそいつを思いっきり攻撃出来るんだぞ？」
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ

「嫌です」
「イエロー!?」
「お二人の攻撃で、少しは反省するのが宜しいかと」
レッドの必死の訴えを、イエローは冷たく突き放す。
なんかもう、向こうのチームワークがボロボロだ。
グリーンのアスモデウスさまなんか、既にスーツを脱いでくつろいでるし。
「クッ、だが簡単にはやられん！　友と義弟の攻撃、見事受け切ってみせよう！」
レッドはブルーに拘束されつつも、消滅の魔力を球状にして展開する。
なら、あれよりもデカい奴を喰らわせてやるだけだ！
『うおぉぉあぁぁッ!!』
俺のドラゴンショットとカズキのビームは一直線にレッドに向かっていき、着弾と同時に大爆発！
コロシアムが轟音を立てながら崩壊していき、俺も衝撃でぶっ飛ばされてしまった。
地面に伏す俺を部長は駆け寄って身体を支えてくれ、土煙が晴れるとそこにいたのは禁手が解けて仰向けに倒れてモグさんに顔をペチペチ叩かれているカズキだけ。
レッドの姿どころか、他の魔王さま方の姿も消えていた。
「ぶ、部長。あいつらは？」

「消えたわ。貴方とカズキくんの攻撃を受けて無傷とは思えないけど……」
『相棒、あの男今のを全て掻き消したぞ。強いのはわかっていたが、あれは規格外にも程がある』
マジでか。
勝てるなんて思っちゃいなかったが、ダメージすら通らなかったのはちょっとショックだ。
やっぱサーゼクスさまってすごいんだなぁ。
「やぁ二人とも、よくやったね」
「お兄さま！　いまここへ？」
「あぁ、そろそろ試練が終わった頃かと思ってね」
部長、まだレッドの中身に気付いてないんですね……サーゼクスさまもネタばらしを……ん？
サーゼクスさま、脚が……？
『あの撃ち合いの時、カズキが奴のスネに石柱をぶつけているのが見えた。流石に身動きが取れない中でのあれは、躱すことが出来なかったらしい』
あぁ、ライザーと戦った時にやったって言う嫌がらせ……よくあんな状態でそんな事出来るなこいつ。

というかサーゼクスさま、カズキに何をしてここまで怒らせたんだ？

あの後サーゼクスさまがベルゼブブさまにどうしてあんな事をと問い詰めたり、そんなサーゼクスさまを無視してベルゼブブさまが俺の中の悪魔の駒を調整してくれたり等色々とあったが、今は屋敷で試練突破のパーティーを楽しんでいる。

カズキも目を覚まして参加しており、会場の端にいたのでなんであんな事をしたのか聞いてみた。

「……休みの日に、家のみんなで出掛けるつもりだったんだよ。それ邪魔されたもんだから……つい」

一発入れられたし、謝ってくれたからもういいんだけどさ？

カズキはそう言いながら、グラスの中身を一気に喉へと流し込んだ。

少し顔が赤い気がする。

……カズキ、初めて会った時と少し変わったかな。

なんていうか、表情がわかりやすくなった。

いい変化って奴だと思う。

「カズキ、そんなところにいないでこっちにこい！」

「うふふ、カズキくんも一緒に食べましょう？」
「ハイ、カズキくんの食べる物も取ってきましたよ～」
カズキはゼノヴィア、朱乃さん、ロスヴァイセさんの三人に呼ばれてそそくさと俺から離れていった。
あんな話をして、照れ臭かったのかも知れない。
俺もいつかもっともっと強くなって、部長の事『リアス』って呼んでみたいなぁ……

九巻　修学旅行はパンデモニウム
４５話

「もうすぐカズキくんは私を置いて京都へ行ってしまうのね……」
「修学旅行ですからね、仕方ないです。で、何故朱乃さんが俺のベッドに潜り込んでるんですかね？」
寝起きを襲撃されても怒りません。
大切な仲間ですから。
「三泊四日、ほぼ三日貴方と会えないなんて……寂しくて死んでしまうかもしれません」
「そうですか。じゃあスコルとハティと一緒に寝てあげて下さい、きっと喜びますよ。で、なんでそんな肌蹴た格好してるんですかね？」
バレバレの嘘泣きをされても怒りません。
素敵な先輩ですから。
「だからお願い、今のうちにカズキくんを感じておきたいの……いいでしょう？」
「わかりました。修学旅行中はイッセーの家で過ごして貰う予定でしたけど、この部屋で寝て下さい。不快にならないように、今からシーツやら何やら全部洗濯しますね」

でも余りしつこいと怒ります。
身近な家族ですから。
「よいしょ……ていっ！」
俺はベッドから起き上がり、朱乃さんが乗っているベッドのシーツを掴むと勢いよく引っ張って朱乃さんごと引きずり落とす。
落ちる場所にはちゃんと掛け布団が置いてあるので、怪我の心配はない。
「きゃ!?　ふ、布団ごと落とさなくても……最近、私の扱い酷いんじゃないかしら？」
朱乃さんはお尻を摩りながら口を尖らせ文句を言ってくる。
あ、モグラさんも寝てたの忘れてた。
朱乃さんの胸に埋もれてもがいている。
「それだけ身近な存在になったんですよ。それに顔から落とさないだけ優しいと思って下さい」
「それは……喜んでいいのかしら？」
「知らんがな」
最近こうやって朱乃さんが襲撃してくる事が増えた。
前まではゼノヴィアを牽制してくれていたのに、今では二人で組んで襲って来たりするのだ。

毎度撃退しているせいで、近頃では朱乃さんの扱いが少々手荒くなってきている。
先日この事を朱乃さんの父親であるバラキエルさんに相談したところ、
『朱乃も君も私は信頼している。この事について、私は何も言わないよ』
というお言葉を頂いた。
血の涙を流し、蓄えられた立派な顎髭を真っ赤にしていて迫力がハンパじゃなかった。
「む、やはり抜け駆けしていたな朱乃さん！」
「ふ、二人とも！　まだ高校生なんですから、そういった事は早過ぎます！」
「あらあらうふふ♪　残念、今日はここまでかしら？」
それなりに騒いだからか、廊下からドタドタと音を立てながらゼノヴィアとロスヴァイセさんがやって来た。
二人は朱乃さんだけではなく俺にまでお説教をし、朱乃さんは反省する様子も見せずに笑いかけてくる。
俺、今日は悪くないと思うんどけどなぁ。
あたた、モグラさん痛いから頭叩かないで。
吹き飛ばしたのは悪かったけど、朱乃さんの胸に落ちたならむしろラッキーじゃない？

え、苦しかっただけ？　なんて贅沢な。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

修学旅行当日。

俺たちオカルト研究部二年生組の面々は、東京駅の新幹線ホームの片隅に集まっていた。

部長がわざわざここまで見送りに来てくれたのだ。

他のみんなも来たがっていたが、授業もあるので代表して部長だけだ。

学園祭の準備も俺たちが抜けた分を補わないといけないしね。

まぁそっちはカズキがやる気を出して物凄い勢いで作ってくれてるから余裕そうだが。

生徒会の手伝いもしてるってのに、どんだけイベント事大好きなんだよ。

「はい、これ人数分の認証よ。悪魔が京都旅行を楽しむ時に必要な『フリーパス券』みたいな物ね。ロスヴァイセには既に渡してあるから安心してね？　カズキくんのは堕天使用のをアザゼルが用意してくれたわ」

部長は俺たちにカードみたいな物を配っていく。

何でもこのフリーパス券、京都の裏事情を牛耳る陰陽師やら妖怪やらが俺たち悪魔に発行してくれる正規の……ん？

なんかカズキが手元を光らせながら、今貰ったカードに何かをしている。
「カズキ、何やってんだ?」
「あぁ、これを失くしたら困るからな。今日の為に朱乃さんとロスヴァイセさんに習った、紛失しても指定した所有者の所に戻る魔術を掛けてる。これで安心だ」
え、カズキ魔力が俺より少ないのにそんな事出来……おい、なんか顔色が悪くなってないか?
自分の魔力を捻り出した上に、足らない魔力はモグラさんのを分けて貰って……ってそこまでしてんの!?
「カズキくん、何もそこまでしなくても……」
「そうそう、制服の裏ポケットにでも入れとけば問題無いだろ?」
俺と木場が嗜めると、カズキは鼻で笑いながら制服の上を脱ぎ始める。
「馬鹿め、これを失くしたら金閣寺に銀閣寺、清水寺にも行けなくなるんだぞ? ここから更に、制服の裏ポケットにグリゴリ特製の頑丈な繊維で縫い付ける」
カズキは何処からか裁縫セットを取り出し、真剣な面持ちでカードを制服に縫い付けていく。
ヤバい、俺の友達が修学旅行に本気すぎて少し怖いです。
「ゼノヴィアさん、カズキさんは一体どうしたんでしょうか?」

「カズキの奴、旅行が楽しみで殆ど寝てないからな。テンションが少し可笑しいんだ」
「あら、彼ってばそんな可愛い所あったのね？」
そんなカズキを見ながら、シスタートリオが仲良くお喋りする。
少し……かなぁ？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
初めて乗る新幹線。
イッセーが窓際の席を譲ってくれたので、モグラさんと一緒に外の景色を全力で楽しませて貰おう。
後でイッセーに何か奢ってあげよう。
ちなみに桐生や松田、元浜はモグラさんの事を知っていて、教師陣には黙っていてくれている。
教室でも普通にアーシアちゃんがモグラさんと遊んでるからね。
モグラさんも芸とか出来るからか、みんな好意的に受け入れてくれている。
「すごいなカズキ、景色が流れていくようだ！」
「全くだ、文明の利器ってスゲー！」
普段自分たちも猛スピードで動いたりしているが、これはまた違った凄さを感じる。
純粋に楽しんでいるせいで、いつの間にかゼノヴィアが膝に座ってても全く気になら

ない。
「ねぇ兵藤、瀬尾ってこんなキャラだっけ?」
「いや、カズキってあんまり遠出したことないんだよ。修学旅行も初めてだからテンションが……」
「あぁ、そういえば施設で育ったとか……なら仕方ないかな」
「でもあんなに目を輝かせて楽しんでる姿は微笑ましいです。ねぇイリナさん?」
「そうね、子供みたいで可愛らしく見えるかも」
「今なら何をしても怒られそうにない。私もカズキもどちらも楽しめる、素晴らしい状況だな!」
　こんな事言われても今の俺は全く構わない。
　外の景色を見るのに忙しいからな。
　田んぼが延々と続いてるだけなのに、見るのが飽きないのは何でだろう?
「ぐぬぬ……これが『ギャップ萌え』というものか!　奴は狙っているのか!?」
「演技であろうがなかろうが、奴が今美味しい目を見ているのは事実。これは粛清対象だ、イッセー共々始末せねば……」
「おい、ドサクサで俺まで巻き込むな!」
「何を言う、お前は最優先殲滅対象だ。なぁ松田よ?」

「あぁ全くもって当然だな元浜よ。イッセー、貴様はクラスではアーシアちゃんとイチャコラして部活ではリアス先輩といかがわしい事を……死ね、いや殺させろ！」
「お前らそれでも友達か!?」
『違う、敵だッ!!』
「言い切った!?」
このバカ三人のやりとりも、今なら微笑ましく見てられる。
今の俺の心は、菩薩よりも広いんじゃなかろうか。
「やぁ、早速楽しんでるみたいだね？」
「特にカズキは堪能しまくりだ、京都に着く前に倒れるんじゃないかと不安になってきた。それでどうしたんだ木場、お前が来ると一部女子に酷い言葉を浴びせられるんだが」
前の車両からやって来た木場に、イッセーが不満そうな声で尋ねる。
どうやら着いてからの行動が聞きたいらしい。
「それならホレ、こいつをやろう」
俺は景色を見るのを中断し、鞄の中から冊子を取り出し木場に放り投げる。
「これは……しおり？　でも配られた物とは少し違う様な……」
「自作だ、桐生と一緒に班員分作った。それは俺のだけど、全部頭に入ってるからやる」

「へぇ……うわ、向こうの電車のダイヤルまで載ってる。にしても凄い細かいスケジュールだね、これちゃんと周れるの？」
「問題無い、駅構内を乗り換えの為に走る必要すらない程完璧なスケジュールを組んである」
　俺はそれだけ言うと、再びゼノヴィアたちと談笑しながら窓からの景色を楽しむ。
「……カズキくん、レーティングゲームの時より本気じゃないかな？」
「まぁ、本気だな。この過密スケジュールを先生に問い詰められた時なんて、素晴らしい言いくるめを披露して桐生が感心したほどだ」
「ま、まぁ楽しんでるならいいのかな？」
　その後も木場はイッセーと何やら話し合い、暫くすると自分の車両に戻っていった。
　その後は松田が元浜の乳を揉んでふざけたりしていたが、まぁ概ね何もなく無事京都駅まで辿り着いた。
　△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「京都だぞゼノヴィア！」
「あぁ、京都だなカズキ！　みろアーシア、伊○丹だ！」
「は、はいゼノヴィアさん！　伊○丹です！」
「天界にもこんな素敵な駅が欲しいわね！」

やたらハイテンションなカズキ、それに続いてゼノヴィア、アーシア、イリナも興奮気味に色んな物に反応して指差している。

四人とも全力で楽しんでるなぁ。

でもゼノヴィアとアーシアよ、伊〇丹は何処でも一緒だと思うぞ?

「ほらほらそこの四人組、はしゃいでないで集合なさい。集合場所はホテル一階ホールだからさっさと行くわよ、午後の自由時間が減っちゃうと色々回れなくなるわ。え~とホテルは……」

「こっちだ桐生、移動は手早く済ませよう」

先ほどゼノヴィアたちと一緒にはしゃいでいた筈のカズキが、いつの間にか駅の改札近くまで移動していた。

「は、早いなカズキ。もうわかったのか?」

「当然だ、状況把握は素早く行わないと命に関わるぞ」

「俺たちはいつの間に戦場に迷い込んだんだろうか……」

松田の質問にカズキが答え、元浜はズレた眼鏡を人差し指で押し上げつつ呟いた。

とにかくカズキと桐生を先頭に歩き出す俺たち。

なんていうか、カズキが本気すぎてちょっと引く。

いや、楽しんでるならそれでいいんだけどね?

「見てみろイッセー！　ロー○ンの看板が黒字に真っ白だ！」
「マジだスゲェ！　おぉ、ファ○マまで白い!!」
あ、俺もあんまり変わんないかもしれない。

ホテルは京都駅のすぐ近くにあり、数分で到着した。
その高級ホテルの名は『京都サーゼクスホテル』。
近くには『京都セラフォルーホテル』もある。
魔王様方も京都が好きなんだろうか？
そんな疑問を抱きつつホテルのロビーに移動し、他のクラスの連中もゾロゾロとやって来る。
すぐに点呼も始まり、先生たちからの注意事項の説明が始まる……って説明するのロスヴァイセさんなのか。
でもロスヴァイセさん、それじゃあ注意事項じゃなくて百円均一の紹介です。
カズキから聞いてたけど、ロスヴァイセさんって本当に百均が好きなんだな。
隣でアザゼル先生が額に手をやってしまっているじゃないか。
他の先生からの注意も終わり、各自割り振られた部屋に荷物を置いてから五時半までは自由行動だ。

部屋は二人一部屋なので、俺はカズキと同室になっている。
部屋のキーを受け取りに行くと、アザゼル先生がニヤニヤしながら俺たちにキーを渡してきた。
不思議に思いながらも、男子はみんなで部屋まで移動した。
先に松田と元浜の部屋に着き、一緒に中を覗く。
そこは広い洋室の二人部屋で、大きなベッドが二つと京都駅周辺を一望できる窓からの風景が素晴らしい。
松田と元浜も大層喜んでいる。
この分なら俺たちの部屋も……そう思っていた。
案内され、着いて行ったのはこの部屋より二つ上の隅の部屋。
そこだけ何故かドアではなく引き戸。
嫌な予感がしつつも部屋に入ると、そこは八畳一間の和室。
古ぼけたテレビと丸テーブルが置かれたそこは、先ほどの部屋とは比べ物にならない設備っぷりだ。
それを見て爆笑する松田と元浜。
ちくしょう！
さっきアザゼル先生がニヤついてたのはこれか!?

こうなりゃカズキと一緒に抗議して――
「京都で和室、俺はもう何も言うことはない……」
「眼が輝いてらっしゃる!?」
駄目だ、この男は修学旅行中は役に立たないッ！
どうしたんだよカズキ、お前はあのロキすら罠に嵌めた男だろう!?
なんでそんなアンポンタンになってるの!?
「カズキくんとイッセーくんはいますか?」
俺が絶望に打ち拉がれていると、既にジャージに着替えているロスヴァイセさんがやって来た。
彼女が言うには、この部屋は京都で何かあった時に悪魔組が集まれる様に部長が用意した部屋らしい。
ぐうぅ、理由もわかるし部長の気遣いには答えねば……仕方ない、我慢しよう。
「では私は教師の会合があるので失礼します、京都の方達に迷惑を掛けてはいけませんよ?」
『はーい』
「さて、まずはアザゼル教諭を捜す所から始めないと……」
ありゃ、アザゼル先生いなくなったのか。

まぁ旅行に行く前から舞妓だの京料理だの騒いでたからな。
隠れたあの人を見つけるのは至難の技だ。
「あ、ロスヴァイセさん。多分アザゼルさんはここにいると思うよ？」
ロスヴァイセさんが部屋から出て行こうとすると、カズキが周辺の地図を広げながら呼び止める。
「へ？　でもここはあの人が行きそうな場所では……」
「だからこそ先ずは見つかる前に腹拵えしてるんですよ。あの人は『最悪見つかってもいい』と思って妥協案を考えながら移動します、だから今からここら辺で網を張ってればすぐに捕まりますよ」
「な、なるほど。カズキくんが言うなら信じてみます！　では失礼しますね！」
ロスヴァイセさんは頭を下げた後、足早に部屋から出て行った。
アザゼル先生の行動を読むならカズキの右に出る奴はいない、アザゼル先生もこの旅行中は自由に抜け出せないんじゃないか？
「さて、少し手間取ったけどさっさと出発しよう。時間は待ってくれないからな」
『おー!!』
そうだった、女性陣を待たせても悪いし急がなきゃ！
俺たちはそれぞれの部屋に荷物を置いて、階段を駆け下りた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

京都駅から一駅隣の『稲荷駅』。

そこから下車すると、『伏見稲荷』への参道へと向かう事が出来る。

鳥居を抜けると大きな門に出て、その両脇には狛犬の様な狐の像が立っている。

うん、なんか京都って感じがする。

なんとなくだけど。

教会の美少女トリオはお土産屋が気になるようで、先ほどからあれがかわいいこれがかわいいと楽しげに会話している。

その脇では桐生が鳥居を見ているが、ゼノヴィアたちと一緒に土産とか見ないのかな？

「桐生は何か見なくていいのか？」

「ここで何か買うつもりも無いからね。アンタこそいいの？　あんなにハシャいでたから、てっきり色々買い込むのかと思ったわ」

『お土産は最終日に郵送で』が基本だと聞いた。俺もいいや、食いモンやお菓子は買うかもしれないけど」

「そう、賢明ね。いつものアンタと違い過ぎてたから心配したけど、その調子なら大丈夫か」

桐生に心配かけてたのか、これは悪い事をした。
むぅ、そんなに何時もと違ったか？
「少し自重しようかね？」
「別にいいんじゃない？　誰に迷惑かけてる訳でもないし」
「いやお前に迷惑掛けてるしなぁ……」
「お～いカズキ～、桐生～！」
俺が渋っていると、遠くでイッセーたちに声を掛けられた。
「この先で『千本鳥居』を見ながら山登り出来るらしいから早く行こうぜ～！」
「マジでか、今行く！」
「ちょ、急に手を引っ張んないで!?　アンタ今さっき自重するって言ったんじゃなかったの!?　」
うはははは！
そんなモンもう忘れたわ！
そのまま桐生がこけない程度のスピードでイッセー達の元へ走っていったら、それを見たゼノヴィアに拗ねられた。
手を握ってたのがよろしくなかったらしい。
解せぬ。

登り始めて数十分後。
体力が余りない元浜が疲れ始めたのでペースを落とし、休憩所のお店を見ながら進んでいく。
松田がアーシアちゃんより体力がない元浜に嘆息するが、彼女は悪魔なので余り責めないであげて欲しい。
松田は運動神経がいいから分かるが桐生が余裕なのには少し驚いた、意外と体力あるんだなあいつ。
休憩所から見える風景を見て感動し、写真に収めていく。
これだけでもやたらと楽しいが、やっぱり頂上から見てみたい。
「あの～勝手で悪いんだけど、一足先に頂上に行ってきてもいいでしょうか？」
「なんで敬語なのよ。別にいいわよ、行ってきても」
桐生が噴き出して笑いながら許可をくれる。
「じゃあ俺も一緒に行こうかな？」
「私も一緒に行くぞ！」
「あ～はいはい、仲良くいってらっしゃいな。時間はまだまだ余裕あるし、私たちはゆっくり追いかけてくからさ」

続けてイッセーとゼノヴィアも名乗り出て、一足先に三人で頂上を目指す事にした。
それにしても桐生がいいヤツ過ぎて辛い。
イッセーだけじゃなく、こいつにも何かお返しをしなくちゃ。

お～着いた着いた。
ここが山のてっぺんか、お社以外は何もないんだな。
ゼノヴィアが途中で競争しようなんて言うから、つい本気を出してあいつらを置いてけぼりにしてしまった。
まぁほっとけばそのうち来るだろ、先にお参りしちゃおうかな。
「……京の者ではないな？」
そう思い手を合わせようとすると、背後から声を掛けられる。
振り返るとそこには巫女装束を着た小さなケモミミ少女が眉間に皺を寄せ、複数ある尻尾を奮い立たせて精一杯の威嚇をしていた。

４６話

何この『萌え』を具現化させた様な子は。
ここの祀ってる神様は『萌え』の神様だったのか。
まぁ冗談はともかく、周りには結構な数の伏兵の気配。
この子からは何やら面倒な香りがプンプンする。
ならば返答は一つ。
「いえ、京都出身の者ですけど？」
息をする様に嘘をつく。
「ふぇ？　そ、そうなのか？」
「えぇ、産まれも育ちも京都です」
「で、でもそなたの様な者を私は見た事がないぞ！」
「こちら側になったのが最近な者で、まだご挨拶も出来ていない状況なんですよ。連絡が行き届かず申し訳ないです」
そう言ってこちらが頭を下げると、少女は何やらアワアワとし始める。
「そ、それは悪い事をしてしまったのじゃ……ごめんなさい」

ケモミミ少女はぺこりと頭を下げる。
チョロすぎて将来が心配になるな。
まぁとにかく、ここはこのまま一気に消えさせて貰おう。
「ははは、気にしないで下さい。誰にだって間違いはありますよ。ではこれで失礼しま――」
「おいカズキ！　幾ら旅行でハシャいでるからって速すぎ……ってなんだこの状況!?」
「これは……京都の妖怪か？　囲まれている様だが」
おう、面倒なタイミングで出てくるなや二人とも。
「……旅行じゃと？　という事はお主、今の話は嘘か！」
うん、思いっきしバレたな。
この怒れる少女をなんとか宥めなければ。
「大人は汚いんだ。世の中の真理を一つ学べて良かったな、ケモミミ少女よ」
「ケモ……？　よ、よく解らぬがこの嘘つきめッ！　やはり貴様らが母上を……許さぬぞ、不浄なる存在どもめ！　ものども、かかれッ！」
説得失敗。
前にも失敗したし、どうにも俺には説得の才能がない様だ。
というか母上って何さ。

ナンパなんてしてないし……あぁ、これが噂に聞く美人局って奴かね？
少女の号令に合わせて、木の上や茂みに隠れていた者たちが続々と襲い掛かってくる。
カラスっぽいのや狐っぽいの、天狗っぽいのまでいて実に多種多様だ。
「カズキ、ゼノヴィア！　何が何だかわからないけど、こっちからは出来るだけ手を出すなよ！」
「え～……ちゃっちゃと潰して、早く京都見学に戻りたいんだけど～……」
「了解だイッセー！　ほら、カズキもいいから言う事を聞け！」
俺がイッセーの提案に文句を言ったらゼノヴィアに叱られた。
まぁ揉め事起こして、修学旅行中止とかになっても嫌だしな……仕方ないか。
攻撃せずに適当に避けとけばそのうち疲れて撤退してくれるだろ？
あそれ、ヒョイヒョイっと。
「うぅぅ……あの嘘つき男め、ヒラヒラと避けるのばかり達者な奴！　皆の者、あの戯け者に集中攻撃じゃ！」
うぉ、調子乗ってたらイッセーとゼノヴィアの所に行ってた分までこっちに来た!?
さ、流石にこの数に包囲されての波状攻撃はキツイぞ!!
「ちょ!?　待て待て待て、いきなりはズルイって！　話し合お……あっ!!」

周りを囲んでいたカラス顔の一体が振るった錫杖が羽織っていた制服の胸辺りを掠め、そこからパキリと小気味良い、最悪の音が聞こえた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

くそ、なんでいきなり襲われるんだ!?

見た感じ、こいつら京都の妖怪って奴だよな？

何とか穏便に済まさないと、部長にも迷惑がかかるかもしれない！

「くそ、カズキ大丈夫か!?　おら、離れろお前らぁ！」

「どうしたカズキ、攻撃は当たってないだろ……カズキ？」

いきなり囲まれたカズキの元へゼノヴィアと一緒に割って入り、拳を振り回して辺りの敵を遠ざける。

「アッハッハ！　なんじゃ、痛すぎて声もあげられ……ん？　あやつ、一体何をしとるんじゃ？」

カズキは駆け寄ったゼノヴィアに反応を示さず、何故か急に制服の上着を脱ぎだした。

その余りの挙動に、相手の連中も動きも止まっている。

カズキはその場で膝をつき、上着を裏返してから裏ポケットの辺りを確かめる様に弄りだした。

暫くするとカズキの肩がびくりと跳ね、次の瞬間には両手足を地面に着いて崩れ落ちてしまった！

なんだ、一体何が起きたんだ!?

相手の特殊な攻撃か、それとも妖怪だから呪いとか!?

「カズキ!?　ゼノヴィア、カズキはどうしたんだ！　無事なのか!?」

「……さ……い……」

「少し静かにしてくれ、カズキが何か言っている！　どうしたカズキ、何処か痛むの……か……？」

ゼノヴィアが背中を揺すると、カズキはゆっくりと立ち上がった。

よかった、動けるのか……ん？

カズキは動いたかと思うとその場に立ち尽くし、俯きながら何かをボソボソと呟いている。

何を言ってる……？

「……さん、……るさん、許さぁぁぁんッ！　禁手、化ウゥゥッ!!」

「ちょ、カズキ!?」

カズキは突然空に向かって咆哮を上げたかと思うと、凄まじい闘気を辺りに撒き散らしながら禁手化した。

なんかメチャクチャ怒ってらっしゃる！

「な、なんじゃ急に!?攻撃されたのがそんなに気に食わんかったのか!?」

「攻撃されるのは構わない、痛いのも我慢しよう、最悪手足の二～三本折られたって耐えられた……だがな！　貴様らはやってはならない事をした！　こいつを見ろッ！」

カズキはそう言うと、自分の制服に縫い付けていた『ある物』を強引に引き千切って連中に見せつけた。

それは旅行前に部長から渡された『フリーパス』。

俺たちが京都を歩き回る為に必要なそれは敵の攻撃が掠めた時に割れたのか、修復が難しいのが分かるほどに砕けていた。

「これがないと俺は、俺はぁ……！　京都を自由に回れないんだぞぉぉぉぉ!!」

カズキはフリーパスの残骸を握り締めながら吠えた。

メットで表情はわからないが、あれは確実に泣いていると思う。

ゼノヴィアもどうすればいいのかわからず、カズキに手を伸ばしたまま混乱している。

「……あぁそっか、そもそも自由に回れないのもこいつらがいるからじゃん。こいつら纏めてぶっ飛ばしてこの土地を占領すれば、こんなフリーパスなんてなくても問題ないよね？」

バイザーが怪しい光を灯し、身体のいたる所からドリルを突出させてギュインギュインと危険な音を響かせる。
腕のタービンも激しく回転し、放電現象まで起こしている。
これは……!
「よし、チャチャッと埋めようか……」
「カズキくぅぅん!?」
完全にキレて暴走してらっしゃる!?
「イッセー、そいつらを早く避難させろッ！　カズキは本気だ!!」
ゼノヴィアがドリルの出ていないカズキの腰に背後から抱き着いて動きを阻害するが、カズキは止まらない。
カズキはゼノヴィアを引きずりながら、連中に向かって一歩一歩前進していく。
そ、そうだ、ボケっとしてる場合じゃない!
「あんた達急いでここから離れろ!　こいつは俺たちが抑えてるから、出来るだけ遠くへ!」
「お、お主達の指示なぞ!」
「いいから早く行け!　俺たちはそっちと争う気はないんだ、これ以上揉める種を生みたくない!」

「姫様、あの者から感じる力は我等を遥かに凌駕しております！　ここは一先ず撤退を、貴女様まで失う訳にはいきませぬ！」

「……仕方ない、の。皆の者、撤退じゃ！」

奴らを率いている少女が反抗してきたが、すぐに側近らしき狐面の女性にたしなめられて考えを改めてくれた様だ。

少女の指示に従い、連中は巻き上がる風と共に撤退していった。

「クソがぁ！　勝手に逃げてんじゃねぇぞゴラァァァ!!」

「落ち着けカズキ！　あいつらをどうこうしてもしょうがないだろう!?」

カズキは撤退する連中に怒号を喰らせ、ゼノヴィアは腰に縋り付く。

俺、あそこに突っ込まなきゃいけないのか。

あ～……今のあいつを止められる自信、ないなぁ……。

結局異変を感じて飛んで来たアザゼル先生がボロボロになりながらも何とかシバいて落ち着かせ、凹み過ぎて動けないカズキを先生と一緒に来たロスヴァイセさんがホテルまで運んでいった。

その後俺とゼノヴィアはみんなと合流して、アーシアとイリナに事情を説明。

松田たちには『カズキは調子を崩して先にホテルに戻った』と伝えると、みんなも心配してくれて稲荷神社での観光を終えると今日はホテルに戻る事になった。

ホテルに戻ってすぐ桐生たちと別れ、俺たちはカズキがいるであろう自分の部屋に駆け込んだ。

するとそこには――

「うぅ……グスッ……」

「ちょ、待って！　これは違うんです、まずは私の話を聞いて!?　カ、カズキくんもホラ、早く放して下さい……！」

上半身裸でロスヴァイセさんに抱きついているカズキと、顔を真っ赤にしながらアワアワしているロスヴァイセさんの姿が。

誰だってこの光景を見れば、ゼノヴィアと一緒にカズキを蹴り飛ばした事を責める奴はいないと思うんだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「あなたはいつも私と朱乃さんに注意しておきながら、自分は何をやっているんだ!?　ズルいぞ、羨ましいぞ!!」

「い、いえですから私は汚れている服を上着だけでも着替えさせようとしただけで何も……わ、私だって急に抱き着かれて驚いたんですよ!?　怒られるのは理不尽ですぅ!!」

「お前もだカズキ！　欲求不満なら私に言えッ！」

「いや、別にそんなつもりじゃなかったんだけど……てか最近変な言葉ばかり覚えてく

るな、何処から仕入れてるの？　どうせ桐生だろうけど」

ホテルでの夕飯を済ませた後も、ゼノヴィアは俺とロスヴァイセさんに説教？　を繰り返す。

ロスヴァイセさんは顔を真っ赤にしながら反論しているが、ぶっちゃけ全部俺の所為なので申し訳なくなってくる。

最初は凹み過ぎて部屋に引きこもっていたが、アーシアちゃんが『私のフリーパスを使って下さい』と言い出したので無理矢理元気に振舞っている。

アーシアちゃんにあんな顔で言われたら、子供みたいに拗ねてはいられないでしょう？

「お～、お前ら揃ってるか？」

「祐斗さんがいらっしゃらないですけど……ご一緒ではないんですか？」

みんなと一緒に部屋でくつろいでいるとアザゼルさんがやって来て、アーシアちゃんが首を傾げつつ答える。

そういや木場は、アザゼルさんのところに昼間の連中の相談に行ったとかって言ってたな。

「あぁ、木場はいいんだ。あいつには万が一に備えて、シトリー眷属と一緒にここで待機してもらうからな」

「待機……やはり昼間に襲って来た連中と関係が？」
「あぁ、先方と話がついてな。イッセーが連中を庇ったおかげですぐに誤解が解けたぜ。向こうの姫さんが直接詫びを入れたいそうなんで、今から向かう着いてこい」
ゼノヴィアの質問にアザゼルさんが親指を後方に差す。
ほう……？
向こうから呼び出すとは、なかなか話が早いじゃないか。
連中の本拠地に殴り込みをかけて、纏めて血祭りに上げてやろうって事だね？
「それなら向こうを待たせちゃ悪いね、急いで出発しよう」
「おいカズキ、お前なにか良からぬ事を企んでないか？」
「やだなゼノヴィア、俺は京都との関係改善の為に少しでも早く行動しようとしているだけだよ？」
決して連中を風通しの良い身体にしてやろうとか考えてない。
精々泣いても殴るのを止めない程度だ。
それも駄目なら言葉でイビリ倒してやる。
「まぁ確かに待たせるのもマズイからな、急ぐぞ。お前らの修学旅行を台無しにするのも気がひけるから、問題は早めに片付けたほうが良い」

こうして俺たちはアザゼルさんに導かれ、妖怪の巣窟までやって来た。
そこで待っていた案内役の狐面をつけた女の人曰く、なんでもここはレーティングゲームを行う異空間と同じ様な場所だそうで、『裏街』とか『裏京都』とか呼ばれているらしい。
時代劇に出てくるような古い家屋が建ち並び、そこら中を狸やら河童やらの妖怪が歩いていてなかなか賑やかだな。
案内役の人に着いて暫く歩くと、巨大な鳥居とその奥にあるこれまたデカい屋敷が建っていた。
それを見てちょっと心が震えたのは秘密だ。
案内されるまま奥まで進み大広間に入ると、そこには豪華な着物を着こなした昼間のケモミミ少女と、何故かセラフォルーさんがいた。
「やっほー皆☆　カズキくんもお久♪」
着物姿に合わせてか、いつものツインテールではなく髪を結いて纏めている。
黒髪が和服と合ってよく似合っている。
黙ってればだけど。
「……なんでセラフォルーさんがここにいるの？」

「京都の妖怪と協力態勢を得る為に来たんだとよ、お陰で話を通すのがスムーズだったぜ」

成る程、そういやセラフォルーさんって外交担当とか言ってたもんな。

その後ケモミミ少女――九重（くのう）は自己紹介の後に深く頭を下げて謝罪した。

「昼間はお主達の話を聞こうともせずに襲ってしまい、大変申し訳なかった。どうか、許して欲しい」

くそぅ、ネチネチ言ってやろうと思ってたのにちゃんと反省してるから言えん。

みんなも九重の態度を見て許してるし……イッセーなんかナデポを発動して幼女を口説いてる。

みんなに茶化されて否定してるけど、九重が顔を真っ赤に染めてるのが見えんのかね？

聞けばあちらの大将である『八坂姫』、つまり九重の母親が何者かに誘拐されたらしい。

写真を見せて貰ったけどえらく綺麗な人だな、イッセーが鼻の下を伸ばしてアーシアちゃんに抓られる位には美人だ。

そんな状況で、あからさまに怪しい俺たちを疑うなってのが無理な話か。

はぁ……もっと観光したかったなぁ……

「その、特にカズキ……と言ったか？　お主には暴言も吐いたし、何やら大切な物を壊してしまったようじゃ。本当に申し訳ない……」

「ん……まぁやっちゃったもんは仕方ないし、その状況じゃ仕方ない。あんま気にしないでいいよ」

ホラ、九重もこんなに謝ってくれてるじゃないか。

殆ど話を聞いてなかったが、母親を攫われた可哀想な少女に追い打ちかけるほど俺も腐ってないですよ？

俺が諦めると、側に控えていたカラス頭が九重に何かを耳打ちする。

「何、壊されたのは認証？　なんじゃ、それならば私がお主たちに京の都を案内しよう！　そうすれば認証なぞ必要無くな――――」

「犬とお呼び下さい、姫」

ヒャッハー！！　通行手形ゲットだぜーッ!!

護衛と称してこの子を連れ回せば幾らでも観光し放題じゃねぇか!?

神様はまだ俺を見放してはいなかった!!

「ではカズキ殿、貴方も八坂姫捜索に全面的に協力して下さいますな？」

「話は殆ど聞いてなかったけど任せて下さい！　要はこのツルペタ姫を護りつつ、拉致されたムチムチ姫を取り戻せば良いんでしょう!?　バッチコイですよ！」

「ツルペッ!?」
　カラス頭に尋ねられ、その場で勢い良く立ち上がりながら即答する。
　九重の視線が若干険しくなったが、まぁいいだろう。
　とにかくテンション上がってキターッ!!
「おいカズキ、言っとくがあんま派手に動くなよ?」
「何言ってんのさアザゼルさん、何のためにアンタっていう責任者がいると思ってるんだ?」
「少なくともお前の尻拭いをする為にいるんじゃねぇぞ」
　責任者ってのは、責任を取るのが仕事なんだよ?
　全部あんたの所為にするに決まってるだろう。
「と、とにかくお主も……カズキも母上を助ける為に力を貸してくれるのか?」
「おぅ任せとけ。たとえイッセーが犠牲になろうともお前の母ちゃんは助けてやるからな!」
「俺を犠牲にする前提なのかよ!?」
「……何だか果てしなく不安なのじゃ」

47話

「行くわよ、野郎ども！」
『おおーっ!!』
桐生の号令に合わせて、班員一同手を掲げて応える。
修学旅行二日目、昨日は色々とゴタゴタがあったがまだまだ元気だぜ！
「カズキ、調子はもう大丈夫なのか？」
「昨日みたいにハシャギ過ぎて倒れるのは勘弁よ？」
「おぅ、迷惑掛けた分はきっちり返済させて貰うぞ」
元浜と桐生がカズキの事を気に掛けているが、本当に体調が悪かった訳じゃないから本人も元気に返事をする。
今日はバスで清水寺や銀閣寺、金閣寺といった有名どころを攻める予定で、カズキだけでなくアーシアやゼノヴィアもテンションが高い様だ。
九重の母親である八坂さんの事も気になるが、そっちはアザゼル先生の部下やレヴィアタンさまが捜索してくれている。
情報が入り次第連絡をくれるそうなので、今は素直に修学旅行を楽しませて貰おう。

俺たちは京都駅でバスの一日乗車券を購入し、清水寺へ向けて出発した。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
バスに乗車しつつ外の風景を堪能した後、目的地に到着。
少し先に見える坂を登れば、そこが清水寺だ。
いざ登ろうとすると、坂の手前に巫女装束に身を包んだ金髪ロリっ子の姿が。
「おぉ来たな、待っておったぞ！」
「九重か、本当に案内に来てくれたんだな」
「うむ、約束通りキッチリと案内をしてみせるぞ！」
「やーん可愛い！　金髪幼女とか貴重すぎだわ！」
九重が無い胸を張りながら堂々と宣言し、イッセーはその頭を撫でてやる。
九重は気持ち良さそうに目を細めていたが、興奮した桐生が九重を抱き上げて頬擦りしたりクルクル回ったりし始める。
「それでイッセー、その可愛らしい女の子は何処で誘拐して来たんだ？」
「失敬なハゲだな!?」
「リアス先輩絡みの知り合いだよ、昨日偶然会ったら案内役をかって出てくれてさ。今日と明日、京都の案内をしてくれる事になったんだ」
「この辺りには詳しいのじゃ、任せて貰おう！　というかくっつき過ぎじゃ、離れろ小

娘ぇ！」

「あ～なるほど、先輩絡みなら納得だわ。にしてもお姫様口調とかキャラも完璧ね、最高だわ！」

元々が子ども好きなのか、やたらと九重を構う桐生。

そろそろ可哀想なので、九重を肩車して桐生から引き離す。

俺のフリーパスの機嫌を損ねて帰られたら問題だ。

「……ちっこくてかわいいなぁ……ハァハァ……」

「みんな仲良くしてあげて、あと元浜は近付いたら殺す」

「殺っ!?」

そう言えばイッセーが、元浜はロリコンだと言っていた。

なにかある前に殺っておこうかと思ったが、時間もないしこのまま九重を確保して進むことにする。

九重は俺の頭の上にいたモグラさんをいたく気に入り、しきりに話しかけていた。

「モグちゃん、私とお友達になってくれるか？」

「キュイ！」

「うはぁ～！　可愛いのじゃ～！」

九重は感動の声を上げながらモグラさんを抱き締め頬擦りする。

ふ、どうやらウチのモグラさんの魅力に骨抜きにされた様だ。
「美少女と小動物のツーショット……やるわね、瀬尾」
「別に狙ったわけじゃないが、素直に褒められてやろう。ほら九重、解説解説」
「おお、そうじゃった！　モグちゃんの可愛さについ……」
桐生からのサムズアップを受けつつ、九重に呼び掛ける。
モグラさんは可愛いからな、それは仕方ない。
「この坂を登ると清水寺なのは知っておろう？　ちなみにこの坂は『三年坂』と呼ばれとってな、ここで転ぶと三年以内に死ぬという言い伝えがある」
ちなみに本来の呼び方は『産寧坂』と言うそうだ。
流石現地人、小さいのによく知っている。
アーシアちゃんは九重の話に怯えてイッセーの腕にしがみついている。
何とも微笑ましいが、イッセー爆発しろ。
「で、何でお前まで腕に抱き着いてんの？」
「カ、カズキが倒れたら大変だから支えてやろうと思ってな……日本は恐ろしい術式を坂に仕込むのだな」
後半小声で言ったんだろうが聞こえてるぞ、小刻みに震えてるし。
やっぱゼノヴィアはアホの子だ。

「肩に九重ちゃん、腕にはゼノヴィアっち……瀬尾、側から見るとあんたら親子みたいね？」

「そ、そうか!?」

「娘の髪色が違いすぎるだろ、俺はこんな歳の娘の髪を染めさせたりしないぞ」

俺は黒髪、ゼノヴィアは青み掛かった頭髪だ。

どうやっても金髪の娘はうまれないだろ？

まぁ、先祖返りとかで稀にあるそうだけど。

あとゼノヴィア、肩に九重がいるんだから脛を蹴るな。

ホントにコケるだろうが。

「おいカズキ、今すぐ九重ちゃんを肩から降ろせ」

「お前をここで転ばせて、地獄に送ってやろう」

松田と元浜が脚で素振りをしながら物騒な事を言い出すが、当然無視して先に進んでいく。

坂を登りきると、大きな門がそびえ立つ。

「この門は仁王門じゃ。一度焼失したが、建て直されて最近解体修理されたの。ここの狛犬が少々変わっておって、本来は口の開いた阿形（あぎょう）と口の閉じた吽形（うんぎょう）の一対なんじゃが……」

「あ、どっちも口が開いてる」
「そう、どちらも阿形になっておる。お釈迦さまの教えを大声で知らしめているからとか、色んな説があるそうじゃ」
『へぇ～……』
九重の本格的な解説に、一同感心してしまう。
本当に詳しいなこのチビっ子、ガイドに連れてきて良かった。
……母親探し、真面目にやってやらないとな。
その後清水寺に無事到着し、賽銭箱に小銭を入れて参拝した。
桐生の勧めでイッセーとアーシアちゃんが恋愛くじを引き、俺もゼノヴィアにせがまれて一緒に引かされた。
アーシアちゃんたちは『大吉』を引き当てて喜び、俺たちは『凶』を引き当ててゼノヴィアがその場に崩れ落ちた。
俺と桐生の
『凶は大吉よりも珍しいから、逆にラッキーだと考えよう』
と言うアドバイスや、九重の
『凶のおみくじを利き腕と反対の腕でみくじ掛に巻き付けると、困難な行いを達成した事になり凶が吉に転じる』

と言う助言を受け、ゼノヴィアは半泣きになりながらも頑張ってみくじ掛に片手で結びつけていた。
その光景を見た松田と元浜に殴り掛かられたが、おみくじの結果は俺のせいじゃないでしょうよ。

バスを乗り継ぎ、今度は銀閣寺へとやって来た。
モグラさんとも大分仲良くなり、今は九重の頭に乗せてイッセーと一緒に歩いている。
ちなみに九重の分のバス代は俺が出して、九重本人に使わせた。
何時もは自分で支払いなんてしないそうで、九重は少し楽しそうにバスの支払い箱にお金を入れていた。
そして銀閣寺に着いてからゼノヴィアが一言。
「銀じゃない!?」
どうもゼノヴィアは金閣寺は金色で、銀閣寺は銀色なんだと思い込んでいたそうだ。
ショックを受けるゼノヴィアを、アーシアちゃんとイリナさんが優しく慰めている。
桐生や九重曰く、足利義尚が死んだから銀箔を貼るのを止めたとか、単純に財政難

だったからと言われてるらしい。
世知辛いな、銀閣寺。
紅葉を楽しみつつ一通り見て回り、軽く昼食をとってから次の目的地である金閣寺へと向かった。

「金だっ！　今度こそ金だぞカズキ！」
「いや～凄いな、本当に金ピカだ！」
金閣寺に着いた俺とゼノヴィアはメチャクチャはしゃいだ。
自覚できるくらいにテンションが上がってしまったのだ、仕方ない。
金閣寺自体も凄いが、池に映る姿もまた素晴らしかった。
思わず松田と一緒に、何枚も写真を撮ってしまった。
ゼノヴィアも金閣寺には満足したようで、目を輝かせながら九重に質問責めしていた。
金閣寺も見て回った後に、お土産を購入して今は茶屋で一休み。
この茶屋は九重の知り合いのお店だそうで、店員さんは人間に化けた妖怪さんらしい。

まぁそんな事お茶が美味けりゃどうでも良い。
抹茶は以前朱乃さんに点てて貰った事があるが、こちらも美味い。
一緒に出される和菓子が甘いので、多少苦くても全く気になる事がない。
これが調和って奴なのか、素晴らしい限りだ。
抹茶の虜になっていたのでこの時は気づかなかったが、近くで痴漢騒ぎがあったらしい。
こんな所で無粋な真似を働く奴がいるものだ、そいつ実はテロリストなんじゃないかな？
そんなこんなで二日目の見学が終わり、九重とも現地で別れて俺たちはホテルへと戻っていった。
実に楽しい時間だった、後で撮った写真を朱乃さんと小猫ちゃんにも送ってあげよう。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
二日目の夜。
豪華な夕食を終えて、今は自室で『作戦前』の待機中だ。
同室のカズキは二度目の風呂へと出掛けてここにはいない。
……頃合いだ、松田と元浜とは話が付いて現地で落ち合う手筈になっている。

何としても……！

「女子風呂を覗くのだ……！」

この時間帯、女子は大浴場でお風呂タイムだ。

昨日はゴタゴタのせいでタイミングを逃したが、覗きポイントは既に把握済み！

チャンスはカズキのいない今しかない！

何時もバカにしているクラスの女子ども、この俺が全裸を舐めるように見てしんぜよう！

期待と欲望に胸を膨らませながら覗きポイントへと歩を進めていく。

この非常階段を降りればすぐそこに……!?

「やはり来ましたね、あなたが女子風呂近くに来る事はわかりきっている事です」

非常階段の踊り場に、ジャージ姿で凄むロスヴァイセさんが待ち構えていた。

しかしホントにジャージが似合うな、残念な意味で。

まぁバレてるのなんて元から想定済みだ、ここは無理にでも押し通る！

「俺は女子風呂を覗く……覗かなくちゃいけないんだ！」

「教師として、女生徒の裸は死守します！」

こうして火蓋を切った乳龍帝ｖｓ百均ヴァルキリーの戦いは、なかなか白熱した物となった。

どちらも派手な技は使えないので俺は小さなドラゴンショットを複数放ち、ロスヴァイセさんは氷の魔術で迎撃してくる。

「少しは見逃して下さい！　そのぐらい寛容でないと、彼氏なんて出来ませんよ！」

「そんな彼氏、こちらから願い下げです！」

む、彼氏の事を言えば動揺するかと思ったが効果が薄い。

「くっ、何時もより攻撃が鋭いですね！　何と言うスケベ根性！　そもそも、あなたはリアスさんやアーシアさんの裸体を何時も拝んでるそうじゃないですか！　まだ足りないと言うんですか!?」

「それはそれ、これはこれなんですよ！」

「この女ったらしドラゴンは！　少しキツいお仕置きが必要な様ですね！」

うぐぐ、攻め手が厳しくなってきた！

雷まで使い始めて……ロスヴァイセさんってどれだけの魔術が使えるんだよ!?

だが懐に飛び込めれば、俺には一発逆転の奥の手が……！

「そこまでだ、アホイッセー」

「んがっ!?」

ダメージ覚悟で飛び込もうとした瞬間、聞き慣れた声と共に何かが落ちて来て俺を地面に押し倒す。

それと同時に倒れ込んだ俺の手足と首を、踊り場の石が伸びてきてロックする。
あの声とこの攻撃は……！
「カズキくん!?」
ロスヴァイセさんが驚きの声をあげる。
やっぱりカズキか！
「お前いま『洋服破壊』使おうとしただろ？　あれをやろうとすると、お前の鼻の下が伸びるから丸分かりなんだよ」
え、俺ってばあの技使う時そんな顔してるの？
まさか『洋服破壊』にそんな弱点があるとは……！
「カズキ、お前は風呂に行ったはずじゃなかったのか!?」
「お前が大人しくしてるのが怪しかったからな、俺が消えれば動き出すと思ってたよ」
あぁ、モロバレだった!?
まんまと騙されてしまったよ！
「この俺が、覗きなんていう下手すれば修学旅行が取りやめになる様な不祥事を見逃すとでも？　目的地に向かっている松田と元浜の所にも既に生徒会メンバーを向かわせてある、早々に諦めろ」
二手に別れる事までお見通しかよ！

　というかお前が生徒会を指揮していいの!?
「にしても、覗きポイントまでバレてたのか……」
「そりゃあ俺があらかじめホテルの人、というかサーゼクスさんに許可を得てから作った場所だからな」
「……え?」
「始めからそういった場所を作っておけば、獲物はそこに吸い寄せられるんだよ。罠とも知らずにな?」
　マヌケな顔をしている俺に向けて、カズキご嫌らしくニヤリと笑う。
　……は、嵌められたぁぁ!?
　最初っから全部カズキの掌の上で転がされてるじゃねぇか!?
『洋服破壊』って確か女性の服を脱がせるハレンチ技……な、なんて事しようとするんですか！　このジャージは特売の時に手に入れた上に、カズキくんが買ってくれた大切な物なんですよ!?　資源を大切にしない悪いドラゴンにはお仕置きです！」
　ロスヴァイセさんは顔を真っ赤にしながら手を頭上に掲げ、俺の体よりも巨大な氷を作り出した！
　ちょ、そのサイズの氷塊は流石に!?
「くっ!?　惚気られた上にやられるとは……無念だ！」

「の、の……惚気てなんかいませ～んッ!!」

くそ!

俺はこんな事で覗きを諦めたりしないぞ!?

いつか必ず女湯を……ギャアアアアアッ!!

「……え?　もしかして、この血やら氷やらでメチャクチャになった踊り場直すの俺なの?」

48話

「あ～……眠い」

ホテルを出発して京都駅へと向かう途中、大きな欠伸と共に伸びをする。

流石に二日間碌に寝てないと、若干眠気が出てくる。

まぁ興奮して寝れない俺が悪いんだけど。

「俺が言うのも何だけど……その、大丈夫か？」

「ホントにな。言っとくけど、また覗きを実行したら次は本気でシバくからな？」

「う、うす……」

結局あの後アザゼルさんと一緒に踊り場をなんとか修復し、腹が減ったのでこっそりホテルを抜け出し外でラーメンを食べてきた。

やっぱ豪華な食事より、俺はこういうのが好きだな。

ラーメン屋だったからヴァーリさんに遭遇するかと思ったけど、変なにいちゃんがいただけで流石に会わなかったわ。

腹を満たして部屋に戻ると、イッセーがアーシアちゃんとイリナさんに性的な意味で襲われていた。

そういう事は他所でやれとイッセーを窓から外に放り出し、アーシアちゃんたちに説教。

その最中にゼノヴィアも襲撃してきたので、布団で丸めてから紐で縛りイリナさんに手渡して部屋に帰って貰った。

しかも二人をイッセーにけしかけたのはゼノヴィアだそうで、家に帰ってからお仕置きする事を心に決めた。

子どもを作るだの何だのと……いくら修学旅行で気分が盛り上がっても、そういうのは俺のいない所でやってくれ。

「にしてもいきなり窓から外に捨てるなよ。怪我はしなくても、誰かに見られたらどうするんだ」

「俺は困らないから問題ない。何とかして誤魔化せ」

「やだもうこの友達、暴君すぎる……」

イッセーが肩を大きく落とす。

ざまぁ。

「イッセー、どうやらその様子だとそっちも失敗したようだな」

「まあな……って、お前と元浜もすげぇ顔になってんぞ」

「なに、名誉の負傷だ」

そんなイッセーに声を掛けてくる松田と元浜。
二人もシトリー眷属にやられたようで、顔の至る所に絆創膏が貼られている。
どうやらあちらも首尾よく迎撃出来たようだ。
まぁ表情を見る限り反省はしてないようで、イッセーから話を聞いた二人が俺に襲いかかってきたのは言うまでもない。
「ホラあんた達、ふざけてないで早く行くわよ！　今日も九重ちゃんが待ってくれてるんでしょ？」
おぉ、そうだった。
今日は嵐山方面を観光する事になっている、早く電車に乗って九重と合流しなければ！

電車を降り、暫く歩くと最初の目的地である天龍寺に到着。
そこの大きな門の前に、昨日と同じ巫女服少女が待ち構えていた。
今日も元気にふんぞり返り、腰に手を当てない胸を精一杯張っている。
「うむ、みんな来たようじゃな！　今日もバッチリ案内してやろう！」
「きゃ～！　九重ちゃ～ん！」

「うひぃ、昨日の眼鏡娘!?　た、助けろ赤龍帝!」
　しかしそんな態度は続かず、桐生に抱き着かれるのを恐れた九重はイッセーの元に駆け寄りズボンにしがみ付いた。
　昨日で大分イッセーに懐いたようだ。
「しかしまぁ、偉そうなガキンチョだ」
「なんじゃとこの犬!」
「誰が犬だチミっ子」
「お主がそう呼べと言ったのではないか!」
「そうだっけ?　忘れた」
「理不尽じゃ!?」
　俺の言葉を受けた九重は、驚愕の表情を浮かべたまま頭を抱える。
　有能なガイドに拗ねられても困るので、今日も肩車して逃げられないように確保する。
　ついでに俺の頭の上にいるモグラさんと遊ばせてやろう。
「まぁ許せ。ほら、モグラさんを抱かせてやろう」
「キュイ!」
「ふぉぉぉッ!　モグちゃんは今日も可愛いのじゃ～♪」

チョロい。
だがあまりふざけて時間を消費するのも勿体無いので、そろそろ寺の中に入る事にした。
俺、九重、モグラさんのトーテムポール状態のまま歩を進め、九重はみんなに『大方丈裏の庭園』の説明をしてくれる。
「ここの景色は絶景じゃ。何せ世界遺産じゃからな」
なるほど、確かにこの風景は素晴らしい。
難しい事はわからないが、凄い京都っぽさを感じる。
……なんか頭悪い説明しか出来ないな。
みんながその景色を写真に納めた後、今度は堂内へと進んでいく。
その天井には、身体の長いドラゴンが描かれた大迫力の絵が描かれている。
何というか、東洋の龍って感じの絵だな。
「これは龍雲図。どこから見ても睨んでいるように見える『八方睨み』じゃな」
イッセーがドライグから聞いた話では、龍王の『玉龍（ウーロン）』という奴がこの姿にそっくりなのだとか。
こんなおっかない眼をしたドラゴンとは会いたくないなぁ。
ここは撮影禁止だそうで、満足するまで見てから天龍寺を後にした。

「さて、次は何処に向かう？　二尊院、竹林の道、常寂光寺！　何処でも案内するぞ！」
俺の肩から降り、イッセーと手を繋いだ九重は元気一杯に宣言する。
そんな九重を見たみんなも、笑いながら次の目的地へと歩き始めた。
さぁ、今日も京都を堪能させて貰おうか！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
俺たちは九重の案内の元、嵐山の様々な場所へと赴き存分に観光を堪能させて貰ったわ、
流石にみんな疲れてきたので、今は九重のお薦めである湯豆腐屋で昼食をとる事になった。
いつも食べている豆腐とは風味が違う気がする、これが京都の豆腐って奴なのかな？
教会トリオやカズキ達も美味しそうに食べている。
そんな俺たちに、九重は笑顔を浮かべながら俺たちに湯豆腐を掬って配ってくれる。
ふと頭に、悲痛な顔で母親を助けて欲しいと頼んできた時の九重の顔が浮かぶ。
早く八坂姫さんが見つかるといいんだけどな……。
「あ、イッセーくん」
突然隣から声を掛けられ振り向くと、そこには木場の姿が。
違うクラスなので別行動中の木場も、この店に昼食を食べに訪れたそうだ。

なんか会えたのがえらく久し振りな気がするのは、俺の気のせいだろうか？
「そういえばお前も今日は嵐山を回るって言ってたな。俺たちは天龍寺に行ってきたぞ」
「天龍寺なら僕たちもここで昼食を食べて、渡月橋を見学してから向かう予定だよ」
「渡月橋か、俺たちもここを出たら行くぜ」
そんな事を話していると、少し離れた席に見覚えのある人たちが眼に入った。
風流だと言いながら酒を飲んでいるアザゼル先生と、それを窘めているロスヴァイセさんだ。
「よぉ、お前ら。嵐山を楽しんでるか？」
「先生も来てたんですか？　って、それお酒じゃ……昼酒は不味くないですか？」
「もっと言ってやってください。この人、私が何度言ってもお酒を止めないんですよ」
俺の疑問にロスヴァイセさんが嘆息混じりに促してもなんのその、我らが堕天使総督さまは全く気にせず笑っている。
どうしたものかと思っていると、対アザゼル先生最終兵器がやってくる。
「おいおっさん、仮にも教師が昼間っから酒飲むとか何考えてんの？　あんたの所為で修学旅行がオジャンになったら埋めるぞコラ」
「そんな怒んなよ、ちゃんとバレないようにやるから。今だって嵐山方面を調査した後

のちょっとした休憩なんだぜ？」
「……そか、悪い。でも酒は必要ないだろ？　あんまロスヴァイセさんに迷惑かけんなよ」
そうか、先生たちは『禍の団』の調査をしてくれてたのか。
カズキも納得したようで、素直に謝罪する。
飲酒については認めてないようだけどな。
「ホントにもう！　この人といいオーディンさまといい、なんで私はこういう不真面目な人たちとばかり仕事をしなければいけないんでしょうか……」
ロスヴァイセさんはブツブツと呟き、手元のコップの中身を喉を鳴らしながら飲み干していく。
せっかくオーディンの爺さんの所を辞めたのに、この人は別口でもストレス溜めてるみたいだなぁ。
その時、何かに気付いたアザゼル先生が口を開いた。
「……ん？　ロスヴァイセ、それ俺の酒――」
「プハーッ！　このおみずおいひいれすね～♪　てんいんは～ん、おかわひ～！」
既に呂律が回っていない。
え、もしかして一杯で酔っ払ったのか!?

アザゼル先生が驚いている隙に、二杯めの酒を勢い良くあおっていく。
顔も赤くなって、目も座っている。
「おやおやぁ～？　そこにいるのはカジュキくんじゃないれすか～♪　いっしょにのみまひょ～！」
ロスヴァイセさんはそう言うと、近くに立っていたカズキを素早く確保して隣に座らせた。
は、速い!?
カズキがなんの抵抗も出来ずに捕まってしまった！
ロスヴァイセさんはニコニコ顔でカズキの前に空のコップを突き出す。
注げって事かな？
「ん」
「あの……ロスヴァイセさん？　お酒慣れてないみたいだし、その位にした方が……」
「ん！」
「いや、ん！　じゃなくてですね？」
「ん～ッ!!」
「……はい」
折れた!?　カズキが折れてしまった！

諦めた顔をした後中身の残っている酒瓶を掴み、ロスヴァイセさんの持っているコップにゆっくりと注いでいく。
ロスヴァイセさんは満足げにその光景を眺め、いっぱいになったコップの中身を再び胃に流し込む。
「んふ～♪　カジュキくんにちゅいでもあったおみずおいひ～♪」
飲み干して空になったコップをテーブルに置き、楽しそうにケラケラと笑っている。
ロ、ロスヴァイセさんってこんなに酒癖悪かったのか……。
「……イッセー、ゼノヴィア。これ以上この人が醜態さらす前に、みんなを連れて行ってくれ」
「え？　でもお前は……」
「大丈夫、寝かしつけたらアザゼルさんに押し付けてすぐに追いつくから。というか、ロスヴァイセさんを見るみんなの視線に俺が耐えられない」
「了解だ、すぐに追いついてくるんだぞ」
カズキの儚げな顔を見たら、首を縦に降る以外の選択肢はなかった。
俺とゼノヴィアはみんなを店の外に連れ出し、カズキを置いて渡月橋へと向かった。
あいつも楽しみにしてたろうに……まぁすぐに追いつくって言ってたし、大丈夫かな。

「ロスヴァイセちゃん、酒癖悪かったんだな」
「きっとロスヴァイセちゃんも若いながらに苦労してんのよ。いろいろ溜まってたもんがお酒で一気に出ちゃったんじゃない？」
松田と桐生が苦笑いしながらさっきの惨状について話し合っている。
まぁオーディンの爺さんに続いてアザゼル先生の相手までしてたら、そりゃストレスも溜まるよな。
主であるカズキもかなり無茶苦茶するし、気苦労が絶えないんだろうなぁ。
「俺としては、なぜカズキがロスヴァイセちゃんとあんなに親しげだったかの方が重要だと思うんだが……」
「あぁ、それは私た――」
元浜が眼鏡を押し上げながら面倒な事を言い出す。
ちょ、ゼノヴィアさん!?
お前そんな事言うとまたカズキに怒られ……！
「ゼ、ゼノヴィアさ～ん？　少しお話が～！」
「そ、そうそう、ちょっとこっちに来てちょうだい！」
「モゴモガ？」
ゼノヴィアがまた余計な事を言い掛けたので、慌てて止めに入ろうとしたらそれより

も早くアーシアとイリナがゼノヴィアの口を塞いでくれた。
どうやらカズキが先に手を打っていたようだ。
相変わらず抜け目がない、というかゼノヴィアは少し考えてから発言しようね？
その後は何事もなく、無事に渡月橋へ到着。
歴史を感じさせる木造の橋で、辺りの景色と相まって素晴らしいの一言に尽きる。
橋を渡っている途中、九重と桐生が橋にまつわる話を聞かせてくれた。
「この橋を渡っている途中に振り返ると、授かった知恵がすべて返ってしまうという言い伝えがあるのじゃ」
「振り返った男女は別れるってのもあるわね。まぁこっちはジンクスみたいなものだけどね？」
この話を聞いたアーシアが怯えてしまい、俺の腕にしがみついてきた。
大丈夫だと言ってもアーシアは首をブンブンと横に振り、より力を込めて抱きついてくる。
かわいいなぁ、もう！
流石アーシアちゃん、俺ってば幸せ者だな！
松田と元浜の怨念めいた視線を背後に感じながらも、橋を渡りきる。
アーシアは大きく息を吐き、それを見た九重はそこまで噂話を気にするアーシアを不

思議そうに見つめていた。
ここでカズキを待つか、それとも先に辺りを見て回るか。
みんなに聞いてみようとした時、突然ぬるりと生暖かい感触が全身を包み込んでいった。
今のは何だろうと辺りを見渡すと、松田たちの姿がない。
というか俺、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、九重、そして少し離れた場所にいた木場しか周りに人がいない。
松田たちや周りにいた観光客がマルッといなくなってしまったぞ!?
この異常事態に、九重を護るように囲んで身構える。
周囲に怪しい人影はなく、少しすると足下に霧の様な物が立ちこめてきた。
――この霧、もしかして。
「絶霧（ディメンション・ロスト）、神滅具の一つだった筈だよ」
木場が此方に歩み寄りながらそう言い、足下の霧に触れようとしていた。
確か先生やディオドラが言っていた、俺やヴァーリのより上位の神滅具だっけ。
それがここで発生してるのか？
「お前ら無事か？」
空から声が降ってきて、見上げるとそこには黒い翼を羽ばたかせたアザゼル先生がい

た。
「俺たち以外の存在はこの周辺からキレイさっぱり消えちまってる。どうにも渡月橋周辺を模した別空間に、強制転移されて閉じ込められたっぽいな」
先生は翼をしまいながら頭を掻きつつぼやく。
マジかよ、転移させられたなんて全く分からなかったぞ？
「別空間っていうのは、レーティングゲームの時の空間と似た様な物なんですか？」
「恐らくな、三大勢力の技術はあちらさんにも流れてるだろう。それの応用で作ったフィールドに、『絶霧』の能力で転移させられた。ほぼアクションなしで俺らを纏めて転移とか、これだから神滅具はおっかな……ん？」
先生は溜め息を吐いた後、何かに気付いて辺りを見渡す。
「お前ら、カズキは何処行った？」
「え、先生たちと一緒だったんじゃないんですか？」
「いや、あいつは先にお前らの所に向かった筈だぞ。それから少ししてここに飛ばされて、俺は酔い潰れたロスヴァイセに結界張ってから来たんだ」
どういう事だ？
先生が嘘を付いてるようにも見えないし、つく必要もない。
てっきりアザゼル先生の指示で別行動なのかと思ってたけど……カズキは何処に

行ったんだ？

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「ぐっ!?　こいつ……！」

「暴れんなよデカブツ、静かにしてないとその無駄に太い腕へし折るかんな？」

おかしい。

俺は京都で修学旅行を楽しんでいる筈だったのに、なんでこんな筋肉ダルマを拘束せねばならんのか。

「え～と……それで何だっけ？」

「勧誘に来た、と言ったのだが……取り敢えずそいつを放してやってくれないかな？」

俺の前に立つローブを羽織ったメガネ男と、顔は綺麗だけど性格の悪そうな金髪女。

三人とも同じ制服着てるし、多分仲間だよね？

……何でこうなった？

４９話

イッセー達が店を出てから暫くするとロスヴァイセさんは酔いが回って眠ってしまい、しょうがないのでアザゼルさんに後を任せて俺はイッセー達を追った。
ロスヴァイセさんをアザゼルさんに任せて平気なのかって？
色々とだらしないけど、そこまで下衆じゃないよ？
イッセー達を探して走っていたら急に霧が出てきて、気付いたら周囲が京都の街並みから霧が立ち込めるだけの殺風景な場所へと変貌していた。
何が起きたのか分からず辺りを見回していたら、急にこの筋肉達磨が襲い掛かって来たので拘束して今に至ります。
「挨拶が遅れた。俺はゲオルグ、隣の女性はジャンヌ、そして君の下にいるのがヘラクレスだ」
ゲオルグはわからないが、他の二人は物語で聞いた事がある名前だ。
厨二病なのかな？
にしても名前負けし過ぎじゃないかね？
「オラー！　解ったんなら早く離しイダダダッ!?」

「突然襲い掛かって来といて、随分と態度がデカイな？　態度と一緒に、その図体も折り畳んでコンパクトにしてやろうか？」

極めていた関節を更にキツくすると、ヘラクレスが騒ぎだす。

いくら筋肉が凄かろうが、一度関節を極めてしまえば簡単には解けない……筈。

「あ～……すまない、彼に代わって私から謝罪させて貰う。こちらに戦う意思は無いし、話を聞いて貰えれば返事がどうでも元の場所に帰す。だから彼を離して、話を進めさせてくれないか？」

ゲオルグが軽く頭を下げてくる。

こいつは話が出来そうだけど、頭良さそうだし相手するのが面倒っぽい。

「ゴメンなさいね？　こいつってば脳みそまで筋肉だから、かなりおバカなのよ」

で、最後の一人がこの金髪ねぇちゃん、ジャンヌか。

この人はあれだな、自分が可愛いのを理解して動く人だ。

ちょっとオツムが弱そうだし、正直メガネさんよりこっちの方が扱い易そうだ。

ヘラクレスは論外。

交渉相手にいきなり襲いかかるとかバカすぎる。

「まぁ話くらいは聞いてやるよ。なんだっけ、勧誘だっけか？」

このままじゃ埒があかないので、拘束していたヘラクレスから飛び退いて少しだけ距

離を取る。
　ヘラクレスはこちらを睨みつつ、仲間の元へと移動していった。
「話が早くて助かるよ。我々は人間の身で何処まで悪魔や天使、ドラゴン達とやりあえるかを追求している。こちらのリーダーが君をえらく評価していてね、良かったらこちら側に来ないか？」
「断る、一昨日来やがれ」
「てめぇっ！」
「ヘラクレス、もうお前は黙っててくれ」
　俺の返答が気に入らないヘラクレスが吠え、ゲオルグに嘆息混じりに窘められる。
　沸点低いな、やっぱ三下か。
「君の事は以前から目を付けていたんだが、接触しようとする度にヴァーリに妨害されてね。今でこそ堕天使になってしまった様だが人の身で堕天使の幹部を撃破した人材だ、是非仲間になって欲しかった」
「そう、そこだよ。集めてるの人間なんだろ？　もう堕天使になったんだから、俺なんて用無しじゃん」
「そうでもない、我々には転生悪魔を人間に戻す技術がある。元の技術が同じなのだから、転生した堕天使も同様に戻せる筈だ。もう一度人間に戻り、我等と共に人間の力を

悪魔や天使たちに示してみないか？」

ゲオルグは笑みを浮かべながら、こちらに手を差し伸べてくる。

色んな陣営の技術が集まってるのは聞いてたけど、そんな事も出来るのかこいつら。

まぁ何されようがこいつらの提案なんて乗らんけども。

「何を言おうがお断りだ、俺の修学旅行を邪魔したお前らは許さん」

「……仕方ない。勧誘は諦めて、君には暫くここにいて貰うとしよう」

ゲオルグはそう言って手元を動かすと、三人を霧が包んで姿が霞んでいく。

「……おい、無事に帰してくれるんじゃなかったの？」

「帰すさ、『京都での仕事が終わったら』ね。君の力は厄介だ、此処で大人しくしていてくれ」

「じゃ～ね～♪」

ゲオルグは眼鏡をクイっと押し上げ不敵な笑みを浮かべ、ジャンヌはイイ笑顔でこちらに手を振っている。

そんななか、消えかけた体でヘラクレスはこちらを指差した。

「てめぇは俺が殺す、覚え――」

あ、キリッとした顔で言い切る前に消えた。

アホすぎる。

あいつ、テロリストよりコメディアンの方が向いてるんじゃなかろうか。
こうして見事に置いて行かれた訳だけど、別に焦る必要はない。
こんな事もあろうかと、収納機能があるモグラさんの石に転移装置を用意して……
あ。
モグラさん、九重に預けっぱなしだった。
……あれ？
これ、もしかして詰んだ？
「……へ、へるぷみ～ッ!!」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
最強の神滅具である『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』の所有者、曹操。
禍の団の『英雄派』という今まで戦っていた旧魔王派やヴァーリ達とはまた違う派閥のトップで、九重の母親を攫った犯人。
アザゼル先生相手に互角に渡り合える、そんな奴が仲間と一緒に俺たちを襲ってきた。
複数の魔剣と神器を持ち、木場とゼノヴィアを同時に相手にして互角以上にやり合える剣士ジークフリート。
自身の想像した怪物を幾らでも生み出せる上位神滅具『魔獣想像（アナイアレイショ

ン・メーカー）』の所有者で、様々な種族の弱点を突けるアンチモンスターを生み出す事に特化した少年レオナルド。

数は其処まで多くは無いけど、一人一人の強さが厄介なほど強い！

俺たちが苦戦しつつも戦っていると、突然俺たちと英雄派の間に魔方陣が展開された。

そこからやって来たのはヴァーリチームの魔法使いである『ルフェイ・ペンドラゴン』。

彼女は何やらヴァーリの邪魔をした曹操に報復する為にやって来たそうで、古の神が量産した破壊兵器『ゴグマゴグ』を引き連れ英雄派に大打撃を与えてくれた。

オマケに酔いが覚めきっていないロスヴァイセさんまでやって来て、魔法を大量にブチ撒けて更なる損害を与えていく。

ちなみに俺、というか『おっぱいドラゴン』のファンだそうで、握手を求められて応えたら嬉しそうに喜んでくれた。

なんともマイペースな子だ。

その後ろでロスヴァイセさんは吐いてたけど。

実際凄い事をしているのに素直に凄いと思えない、流石はカズキの眷属だと何故か納得してしまった。

「曹操、貴様ら英雄派の目的はなんだ？　先祖の様に英雄にでもなるつもりか？」
　構成員の大半を撃破して落ち着いてきた戦場に、さっきまで『肩慣らし』と言いながら山や川をド派手にブッ飛ばして戦っていたアザゼル先生が曹操に問い掛ける。
「別に大層な事を考えてる訳じゃ無いさ、『人間』のままどこまでやれるのか――ちっぽけでよわっちい人間のささやかな挑戦だ」
　曹操は肩に槍の柄をトントンと当てながら、笑みを浮かべて答える。
「そう言う意味では君たちの仲間である瀬尾一輝は素晴らしかったよ、何度勧誘を試みた事か。その度にヴァーリに妨害されたし、既に堕天使に転生してしまったがね」
　確かにカズキは今でこそ堕天使だけど、まだ人間だった頃にコカビエルを倒してる。あいつが大雑把な性格だから忘れがちになるけど、よく考えたらそれってすごい事なんだよな。
　ていうかカズキの奴、勧誘なんていつの間に？
「ならなんでこのタイミングでカズキを捕らえた。堕天使になったあいつは、お前らにとっちゃ用済みだろう？」
「そうでもないさ、彼には色んな価値がある。何せ人間の身でありながら歴代最強と言われる白龍皇や孫悟空の子孫、さらには堕天使総督やその幹部たちと渡り合った逸材だ。彼の身体を探れば、彼と同じ戦力を持った戦士を量産できるかも知れない」

アザゼル先生の問い掛けに、曹操は楽しそうに笑う。
つまりこいつも、コカビエルと同じ様な事をしようとしてんのか！
というか、大量のカズキを相手にするとか悪夢以外の何者でもないぞ!?
勝てる気がまるでしねぇ!!
「させねぇ、お前は俺が潰す！」
次の瞬間、アザゼル先生から感じる力がが跳ね上がった！
表情は人工神器の一部である兜の所為で伺えないが、確実にキレている！
「これが聖書に記されし堕天使総督の力か、流石に恐ろしいな。だが、俺もまだとっておきが――――」
「曹操、退くぞ。こちらは終わった」
曹操が槍を構え直すと、その横に突然ローブを羽織った青年が現れた。
この霧、あいつが『絶霧』の所有者か！
「ゲオルグ、彼はどうなった？」
「失敗だな、素直に言う事は聞いてもらえなかったよ。取り敢えず異空間に閉じ込めたから、解析するなり洗脳するなり後でどうとでも」
「そうか、ではそろそろ撤退するとしよう」
ゲオルグと呼ばれた男は、曹操の問いに淡々と答える。

彼ってもしかしてカズキの事か!?
あいつがそんなに簡単に捕まるなんて!
「アザゼル総督!　我々は今夜この京都の二条城で、九尾の御大将を使い一つ大きな実験を行う!　制止するために、是非とも我らの祭りに参加してくれ!」
曹操が楽しそうに笑いながら宣言すると、立ち込めていた霧が一層濃くなり視界が真っ白になって辺りが何も見えなくなった。
先生から空間が戻ると声を掛けられたので、みんなそれぞれ武装を解除する。
暫くすると霧は晴れ、観光客で溢れる渡月橋周辺へと変わっていた。
松田や元浜たちの姿も見える、元の空間に戻れたみたいだ。
俺たちは桐生に『先生から呼び出されたから先に行っていてくれ』と伝えて、一旦人気の無い路地裏へと移動した。
「くそ!　カズキが攫われただと!?　朱乃さんに何て言えば……!」
「ケホッ、はぁ～吐いたら少し楽に……え?　カズキくんが、どうかしたんですか?」
この事態に憤るゼノヴィアと、何が起きたのか把握し切れず周りに説明を求めるロスヴァイセさん。
って、のんびりしてる場合じゃない!
「先生!　早くカズキを助けに行かないと!」

「場所がわからなけりゃどうしようもない。あのゲオルグとかいう『絶霧』所有者を捕まえるしか方法がねぇ……おまけに京都で実験だ？　ふざけやがって……ッ！」

先生は怒りに身を震わせ、ここまで聞こえる程強く歯を噛み締めた。

こんなに怖い先生を見たのは久しぶりかもしれない。

「母上もカズキも、何も悪い事してないのに……どうして……」

九重が涙を零しながら呟き、それを見た俺は頭を撫でてやるくらいしか出来なかった。

二条城で行われるという実験。

そこで曹操たちを捕らえて、必ずカズキと八坂さんを助け出してみせ……ん？

九重の身体、なにか光って……ッ転移されようとしてるのか!?

「九重ッ!!」

「な、なんじゃこれは!?　一体どうい――――」

九重に伸ばした俺の手は、気付くのが遅れた所為で何も掴めずに空を切る。

マズい、九重まで敵に攫われちまった……！

「……いや、あの魔方陣からドラゴンの魔力を感じた。もしかしたらカズキが何か細工してたのか？」

「そう言えばあの魔方陣、カズキが家で練習していたものに似ていた気がするぞ。ホラ、

修学旅行前にフリーパスにかけてた奴だ」

アザゼル先生が顎に手を当てながら呟き、ゼノヴィアもそれに追従する。

そう言えば顔を青くさせながらかけてたな……つまりその魔法を九重にも掛けてたのか？

本気で九重の事をフリーパス扱いしてるな、あいつ。

「じゃあカズキくんは、状況を打開する為に九重さんの力を借りたくて召喚したんですね!?」

酔いが少し醒めて思考が働く様になったロスヴァイセさんが、希望を見つけた様に顔を明るくさせる。

「正直九重の力を借りるだけで上位神滅具である『絶霧』をどうにか出来ると思えないが、あいつが捕まってて大人しくしてるとも思えん」

「カズキなら自力でどうにかして、すぐに私たちの所に帰ってくるさ」

２人の言葉を聞き、他のみんなも表情を変える。

そうだ、悩んでたって仕方ない。

カズキも状況を打破しようと動いているなら、俺たちも目の前の障害を打ち破っていくだけだ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「……で、なんで私はこんな所におるのじゃ？」
「テンパってたのが落ち着いたらなんか急に寂しくなって、お前を呼べるの思い出してつい呼んじゃった。……ゴメンね？」
「カズキのアホーッ！」
思いつきで人質増やしちゃったぜ、テヘペロンチョ★

５０話

いやぁ、モグラさんがいない事に気付いたら気が動転してしまった。
暫くして落ち着いたけど何もなくて暇だし寂しくなってきた時に、九重に転移の魔法を掛けてたのを思い出して衝動的に起動。
京都の姫さまを思いっきり巻き込んじゃったぜ！
その姫さまである九重は、地べたに座り込んでいる俺の頭をプンスカ怒りながらはたいている。
「このおバカッ、アホッ、ポンポコピーッ！」
「落ち着けケモミミ姫。今光るモグラさんに出口探して貰ってるから、すぐに出られるって」
「なんじゃケモミミ姫って、そんなん知らんぞ！　私の名前は九重じゃッ！」
「自分の長所を『そんなん』呼ばわりは良くない」
手違いとはいえ合流出来たので、モグラさんに預けていた転移装置を使ってみたが何故か起動しない。
この空間が特別なのか、普通の方法じゃ脱出出来ない様だ。

嫌らしい事をしてくれるな、流石はメガネキャラ（偏見）。

ヴァーリさんと美猴さんに躾けられたせいで、訓練を続ける身体にされているお陰で習得した禁手の部分展開。

以前は腕や脚だけしか出来なかったそれが発展していき、今では胸部装甲だけを出現させて光るモグラさんを大量に生み出す事に成功した。

一匹の大きさを出来るだけ小さくして数を増やし、全方位に展開して出口がないか探って貰っているのだ。

「うぅ……早く母上を助けなければいけないのに、何故こんなおマヌケな状況に……」

「嘆くな九重。どんな失敗をしても、次に活かせばいいんだよ」

「なんで私をここに連れてきた元凶に励まされなきゃならないんじゃぁ……」

はたき疲れたのか、九重は力なくその場にへたり込む。

その後連絡が来るまで暇だからと地面にマスを描いてから能力で白と黒の石を作り、陣取りやらオセロやら将棋やらをしながら暇潰しをしたがそれも飽きてきた。

う～ん、気を紛らわせるのもそろそろ限界っぽいしモグラさん達からも連絡が来ない。

これはちゃんとした出口はないパターンかな？

「仕方ないな、このままここにいると連中が帰ってくるかもしれない。これ以上九重を

危ない目に合わせられないし、強引に行ってみよう」
「……その心は？」
九重は座り込んだまま、此方に疑いの眼差しを向けてくる。
段々俺の事を把握してきた様で、まるで信用がない。
「ガイドは手元にいるし、ここに飽きたから多少危険でも早く戻って観光の続きがしたい」
「フンガーッ！」
胸を張って答えたらむき出しの腕を噛まれた。
手加減はしてくれてる様だが、地味に痛い。
九重『で』遊ぶのは結構楽しいが、ここには九重の母親の手掛かりもないみたいだし早くみんなのところに戻ろう。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
曹操が待つ二条城に向かった俺たちグレモリー眷属　＋　匙とイリナとロスヴァイセさん一行は、再び強制転移させられた空間で禁手に至った刺客を送り込まれるもそれを撃破。
そのまま本丸である二条城の敷地内へと歩を進め、曹操たち『英雄派』の幹部たちと操られているのか意識がない八坂さんと対面した。

曹操の合図と同時に八坂さんは巨大な金色の狐――九尾の狐へと変貌し、夜空に向かって咆哮をあげる。

曹操たちの目的は、京都という特殊な都市の力と伝説の妖怪である九尾の狐の力を使ってグレートレッドを呼び寄せる事だった。

俺たちはその目的を阻止して八坂さんを救う為、英雄派の幹部たちと戦いを始める。

木場とゼノヴィアは同じ剣士であるジークフリートと。

イリナはジャンヌと呼ばれた金髪のお姉さんと。

ロスヴァイセさんは、ヘラクレスと呼ばれた巨漢にカズキの眷属だと知られた途端に絡まれていた。

あいつ、捕まってる間に何かしたのかな？

そして匙はロキ戦で体得した技、『龍王変化（ヴリトラ・プロモーション）』により龍王ヴリトラへと変身して巨大化した八坂さんの相手を。

そして俺は曹操とやり合う事になった。

ゼノヴィアの強化されたデュランダルによる先制攻撃が引き金となり、それぞれの戦闘が始まった。

しかし始まってみればみな一様に苦戦し、俺も曹操にやられ放題で大きなダメージを受けてしまった。

こいつら全員強い上にどいつもこいつも禁手だらけ、禁手ってのは珍しい現象じゃなかったのかよ！

おまけに貴重品であるフェニックスの涙まで持ってやがるし……手強いにも程がある。

これからどうしてやろうかと苦慮している時だった。

英雄派の幹部たちがそれぞれ戦っていた木場やゼノヴィア、イリナにロスヴァイセさんを抱えてやってきて、こちらに向かって乱雑に放り投げてきやがった。

みな一様にボロボロにされていて、遠くからはヴリトラの苦しそうな咆哮も聞こえてくる。

嘘だろ……みんなやられちまったのか……？

「悪いな赤龍帝、これで詰みだ。キミたちは充分強かったけど、英雄の力を持つ俺たちには勝てない。――ゲオルグ、魔方陣はどうだ？」

「もう少しだな、グレートレッドがくるかはわからないが」

……くそ、こいつら俺たちの事を無視して実験に意識を集中させてやがるな。

アーシアはみんなの所に駆け寄り、涙を流しながら回復させようと頑張ってくれている。

それでもダメージが大きいようで、みんな目を覚ます気配はない。

ちくしょう……俺、赤龍帝なんだろう？
天龍を宿した悪魔なんだろう？
なのに、仲間一人守れない……なんでこんなに俺は弱いんだッ……！
「――む？　空間に歪みが……？」
「始まったか？」
……なんだ？　あいつらがざわついている。
何が起こるのかと思っていると、空間に裂け目の様な物が生まれつつあった！
あれは、以前グレートレッドが現れた時と同じ現象か!?
「いや、まだ時間が掛かる筈だ。これは……？」
『兵藤、どうやらあいつが来たみたいだぜ？』
神器を通して、九尾の御大将と激闘を繰り広げている匙から声が掛けられた。
そう、あの亀裂からは俺たちのよく知る力を感じる。
亀裂から感じるその力が次第に大きくなっていき、それにつれて空間の亀裂も大きくなっていく。
「これはグレートレッドではない。まさか彼が？」
「それこそまさかだ、『絶霧』で隔離した結界内に幽閉しているんだぞ？　神滅具でもないただの神器にそんな真似が――」

曹操と霧使いが何やら話し合っていたその時、裂け目が一段と大きくなった。
全く……毎度毎度、登場するタイミングが出来過ぎてるぜ！
「やったったぞ、オラァァァッ!!」
亀裂を破壊しながらビームが飛び出てきて、そこから曹操たちに捕まっていた筈の仲間、カズキが変な掛け声と共に肩に九重を乗せてこの場に現れた！
あのビーム、コカビエルやサーゼクスさまにぶっ放してた奴か!?
空間を突き破ったビームはそのまま一直線に飛んでいき――
『カズ……ギィヤァァァッ!?』
九尾の御大将に拘束されているヴリトラ化した匙に直撃した。
……さ、匙ィィィィッ！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「九重、危ないから少しだけ離れててくれ」
「んあ？　わかったのじゃ」
俺の言葉を聞くと、噛み付いていた口を素直に放してからトテトテと歩いて距離を取る九重。
離れたのを確認してから、俺は全身から蒸気を噴き出しながら通常の禁手化の鎧を身に纏った。

どうも俺の禁手はロボっぽいからか、装着時に周りにいると衝撃の余波やら排熱する時の蒸気やらが襲ってくるらしい。

アザゼルさんで実験したから間違いない、その後殴り合いに発展したけど。

「おぉ～……赤龍帝の鎧は赤く美しかったが、お主の銀色の鎧は無骨だが力強さを感じる。あれとはまた違った魅力があってカッコイイのぅ」

装着が終わったのを確認した九重が近くに寄ってきて、ペチペチと鎧を触っている。

そんなん言われたの初めてだな。

おっと、始める前に九重をモグラさんの力で保護しなくては。

モグラさんにお願いすると、九重の身体を薄い膜のような物が包み込む。

「な、なんじゃこれは！」

「モグラさんが作ってくれた防護膜、その中にいれば大抵の事からは護ってくれるってさ」

「ふぇ～、モグちゃんって凄かったんじゃのぅ……おぉ、伸びる伸びる」

自分の周りに出来た不思議な物質に興味津々なのか、九重は手で摘んで引っ張って遊んでいる。

さて、これで準備完了だ。

「よし九重、今から少し無茶するからしっかり掴まってろよ。俺から離れたら丸焦げに

なるかも知れん」
「な、何をする気なんじゃ?」
俺の肩に乗せると九重は頭にしがみつき、少し怯えた様に此方を見つめてくる。
なに、ちょっと暴れるだけだから。
「取り敢えず、辺り一面吹き飛ばす」
「……へ?」
九重の声を掻き消すように、遠くで大きな爆発音が辺り一帯に鳴り響く。
俺の指示を受けた光るモグラさん達が、一斉に爆発したのだ。
しかし地面が揺れるだけで、周りに変化は起こらない。
これじゃあ足りないか、なら次だ。
手脚と背中のタービンを起動、段々と回転数を上げていく。
次第に音が大きくなって振動も激しさを増し、火花と放電で辺りが煌き出す。
バイザー越しでも結構眩しいな、これ。
「な、なんか光っとる！　なんかバチバチしとるぞぉ～!?」
「あんまそこで暴れると、落っこちて丸焦げになっちゃうぞ?」
「うひぃ!?　おっかない、カズキはおっかないのじゃあぁぁぁッ!!」
九重の悲鳴をＢＧＭにタービン音を一段と激しく響かせると手脚から雷撃が迸り、そ

の場で大きく跳び上がる。
リアス先輩から任された仕事をすっぽかした罰として、イッセー、木場、ゼノヴィアの三人と同時に組手（リンチ）をさせられた時に編み出した無差別攻撃！
喰らうがいい、アザゼルさんの厨二センス光るネーミング技！
「閃光！　雷、刃、撃ィィィィッ!!」
咆哮と共に両手脚から放たれた雷撃が、辺りの空間を手当たり次第に焼き尽くし崩壊させていく。
今回はミョルニルの力も借りているので、イッセーたちに放った物より凶悪になってるな、予想よりも凄すぎて自分がビビった。
ってうぉ、なんか辺りがグネグネし始めた！
「こ、今度はなんじゃ!?」
「あ～……やり過ぎて空間が歪んだのかも?」
「お主やっぱり阿呆じゃろう!?」
やっぱ神様の武器って凄いね、おっかないからこの技はあまり使わないようにしよう。
にしてもこの惨状、一体どうしようか。
このままだと俺たちも危険な気がしてきた。

ん？　目の前がヒビ割れ何かが見えて……なんかやたらと大きな金色の狐？　が見える。

尻尾が九本もある、九尾の狐って奴か。

一人納得していると、肩に乗っている九重が身を乗り出して騒ぎ始める。

「母上!?　何故母上があの様な場所に！」

はい？　あれお前の母ちゃんなの？

俺が教えられたのはボンキュッボンなパツキンのチャンネーで、あんなおっそろしい顔した狐じゃないんだけど。

「カズキ、早くあそこに！　母上の元に！」

「いや待て、あれ本当にお前の母ちゃん？　写真写りがいいにも程があるだろ、別人じゃねぇか」

写真と全然違うじゃん、見せられた写真どんだけ補正されてたんだよ。

美人の救出とバカでかい妖怪の捕獲じゃ、大分テンションに違いが出るんだけど。

「何でもいいから早く！　お願いじゃ！」

「わかった、わかったからそんな眼で見ないで。なんか自分が物凄く汚いものな気がしてくるから」

涙で眼を潤ませながら懇願する九重を見ては、流石に言う事を聞かざるを得ない。

手脚から放っていた放電を停止し、各所の排熱装置が空気の抜ける音を立てながら蒸気を勢い良く吐き出す。

さて、あそこを通るにはもう少し穴を大きくしないと無理だな。

「大技連発だけど、いける?」

『キュイ!』

「おし、じゃあやってみよう。九重、手脚に力入れて踏ん張れよ?」

「母上に会う為じゃ、どんな事でも耐えて見せる!」

モグラさんからのGOサインを頂き、九重も俺の首をへし折る気かと言うくらい力を込めてしがみ付いてくる。

必死なのはわかるけど、もう少し手加減して下さい。

少し息苦しくなりながらも、タービンを再び始動させエネルギーっぽい何かを溜めていき胸部装甲を展開する。

さて、死なない程度にぶっ放してみようか!

「いくぞ必殺!『胸からドーン』!」

「え、それ技名なのか?」

九重の呟きを聞かなかった事にして、空間の亀裂に向けて構わずビームを撃ち込んだ。

コカビエルの時は生命エネルギーとかいう不可思議パワーを使って威力を底上げしていたが、今はミョルニルからエネルギーを借りてるから倒れたりしない……筈！
てか、ビームは直撃してるのに少ししかヒビが入らないんだけど!?
「ングガァァ……！　くそが、何で壊せないぃぃぃ!?」
「頑張れカズキ！　ホレ、気合いじゃ気合い！」
九重がしがみ付きながら応援してくれるが、俺はロリコンじゃないからそこまで元気になれないです。
あ、ヤバい。
なんか段々力が抜けてくる感覚が……
「九重、ごめん。ちょっと無理っぽい……」
「お願いじゃ、もう少しだけ頑張ってくれ！　無事に騒動が済んだら、え～と……き、京の者しか知らないマル秘スポットや、美味しいお店に連れて行くのじゃ！」
「任せろ九重！　お前の母ちゃんと京都はこの俺がマルッと救ってみせるから！」
「……自分で言っておいてなんじゃが、最低じゃのお主」
うおぉぉ、やる気がみなぎってきた！
行くぞモグラさん！
俺たちの素晴らしい京都見学の為に！

気合いと共に、身体中から力を捻り出す！
するとビームの勢いが増し、コカビエルに放った時以上に大きく膨れ上がった！
その直後、空間の亀裂が大きく広がっていきピキピキという音が辺りに響き始める。
「おぉ、いけそうじゃ！　それゆけカズキ！」
「ふんぬぅあぁぁツ！　ブ・チ・抜・けエエエエッ!!」
次の瞬間ガラスが割れる様な音が鳴り響き、霧が立ち込めるだけの空間が弾けた！
「やったったぞ、オラァアッ!!」
よし、脱出成功！
辺りを見渡すと京都の夜景と大きな城が見える、あれは二条城かな？
その城をバックに金色の大きな狐がこちらを睨みつけていて、足元には大きな黒い蛇が伸びて……あれ、あの黒いのって匙だよね？
なんで伸びてんのあいつ？

５１話

「えっと、あんまし状況がわかってないんで説明してくれる？」
　匙がカズキの放ったであろうビームの被害を受けて地面に倒れこんで少しすると、肩に九重を乗せたカズキが堕天使の翼を羽ばたかせながらこちらに近づいてきた。
　俺は曹操たちを警戒しながらこれまでの事を簡単に説明すると、カズキは何度か頷き肩に乗っていた九重を降ろして曹操たちを指差す。
「なるほど。つまりみんながボロボロなのも、九重の母ちゃんが美人から怪物にクラスチェンジしたのも、匙が倒れてるのも全部あいつらが悪いんだな？」
「いや、匙をやったのはお前――」
「許さないぞお前たち！　俺の親友（笑）である匙にあんな酷い真似しやがって！」
「この男はどこまで行ってもブレぬな……」
　俺の言葉を遮り、拳を握り締めながら連中に向かって啖呵をきるカズキ。
　色々と酷いのはお前だ。
　九重もカズキをジト目でみつめている。
　でもカズキが来たなら勝ち目は……あるのか？

確かにカズキなら連中ともやりあえるだろうが、相手は五人だ。
俺が加勢したとしても五対二、しかも俺は今しがた曹操に手も足も出ずにやられた。
みんなは俺を凄いと言ってくれるが、いつも肝心な所で俺は役に立てない。
レーティングゲームではその後にドライグの力を借りて勝ったとはいえ、ライザーに負け匙には惜敗。
禍の団との戦いでも、ヴァーリには敵わずディオドラにアーシアを攫われ、シャルバにはアーシアを殺されかけた。
なんで俺はこんなに弱いんだ……。
強くなりたい……あいつらに届かないこの手を、この拳を届かせたい……！
《なら、届かせてみせなさい。あなたの中には、その為の力が眠っているわ》
突然、俺の中から声が直接響いてくる。
この声は……知っている。
俺が『赤龍帝の籠手』の中に意識を潜らせている時に出会った、元赤龍帝である女性の中で歴代最強だったあの人――
「……エルシャさん？」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
よくわからない空間から脱出したら、余計によくわからない空間に出てきてしまっ

た。
なんでみんなしてボロボロなんだよ。
まぁそこでたむろしてる奴らがやってくれたんだろうから、今からキッチリお礼はするけど。
ていうか、もう夜じゃん！
俺の修学旅行三日目、こいつらのお陰で半分潰れたぞ糞がッ！
自由に動き回れるのは、最終日のほんの少しの時間しかないじゃないか！
なんもかんも全部、こいつらの所為だ！
「簡単に終われると思うなよ!?　じわじわとなぶり殺しにしてくれる!!」
「お前は何処の宇宙の帝王だ」
『それよりもカズキ、話がある』
怒りで震えていると、イッセーとドライグが話かけてきた。
なんでも、神器に宿る歴代赤龍帝の中で女性最強の人が力を解放する手助けをしてくれるらしい。
その為の時間が少しかかるそうだ。
「よーするに、時間を稼げばいいんだな？　九重、お前はイッセーの側で待っててくれ」
「う、うむ。気をつけるんじゃぞ？」

九重が心配そうな顔をしながら、イッセーの元へと歩いていく。
任せろ、無駄に時間を浪費するのは得意分野だ。
「悪いカズキ、いつもお前に頼ってばかりで……」
「なに似合わない事言ってんの？　そんな事考えるより、お前はおっぱいおっぱい言ってる方が似合ってんよ」
イッセーがらしくもなく暗い顔をしているので、適当な言葉を掛けてから奴らに向き直る。
さて、先ずは九重の母ちゃんをどうにかしないと……お、倒れてた匙がようやく起き上がった。
戦闘中にサボるとかトンデモない奴だな。
『カ、カズキめ……なんて事しやがるんだ、あの野郎……』
『奴は我が黒き炎で焼き尽くす、絶対だ』
なんかヴリトラさんキレてらっしゃるね、こっちまで声が聞こえてくる。
でもその怒りは九重の母ちゃんにぶつけてね、俺は逃げるから。
取り敢えずこれで向こうは匙に任せておける、俺はこの連中の相手をしよう。
「まさか、あそこから力技で強引に脱出して来るとは思わなかったよ。待っていれば解放すると言ったのに」

「性格悪そうなメガネの言葉は信じない事にしてるんだ」
ゲオルグは肩を竦めながら呟き、俺の言葉を聞いた剣士風の男とジャンヌは口を押さえて笑いだす。
――ん？　ゲオルグの隣にいる槍を持った人、どっかで見た様な……？
「待ってたぜクソ野郎、それがテメェの禁手か？　ちょうどいい、俺が相手してやるよ！」
思い出そうと考え込んでいると、バカ……もとい、ヘラクレスが一歩前に出てくる。
「あの銀髪姉ちゃん、お前の眷属なんだってな？　歯応えなさ過ぎて物足りなかったんだ、代わりにお前が相手してくれよ」
ヘラクレスはニマニマと笑いながら、傷付き倒れているロスヴァイセさんを指差す。
なるほど、生け贄一号はお前か。
他の連中もヘラクレスを止める事はせず、こちらを観察している。
向こうから一対一形式にしてくれるとか、余程自信があるのかただのバカか……。
「あの時は捕らえるために手加減した所為でやられたが、今度は全力でやってやるぜ！」
なんで禍の団の人達って、こんなに三下臭のするセリフが大好きなんだろう？
ヘラクレスはその大きな腕を掲げ、俺目掛けて勢い良く振り下ろす。
そんな大振りな攻撃が当たる訳もなく、後ろに飛び退いて躱すと拳が地面に激突。

拳が触れた付近が、大きな音と共に爆発した。
「見たか！　攻撃と同時に相手を爆破させる俺の神器、『巨人の悪戯（バリアント・デトネイション）』！　テメェもこの地面みたいに粉々にしてやるぜ！」
「地面を砕けるのがそんなに自慢か？　そんなん誰でも出来るぞ」
俺はその場で脚を踏み抜き、地面に無数のヒビを入れた。
こんなんで自慢げになるとか子供か。
俺の態度が気に食わなかったのか、ヘラクレスはドヤ顔だった表情を再び怒りに染める。
「ぐ……こいつを見ても余裕ぶってられるか!?　禁手化ッ！『超人による悪意の波動（デトネイション・マイティ・コメット）』！」
ヘラクレスが叫ぶとその身体が輝き出して皮膚が盛り上がり、腕や足、背中などに無数の突起物が現れた。
うぇ、なんか気持ち悪い。
見た感じミサイルみたいな形状をしてるな、能力的にあれが爆発するのか？
「この爆発物の弾幕、お前に耐え切れるか！　喰ら――」
「あ、やっぱ爆発物なんだ。じゃあそのまま自爆しろ」
「なッ!?　ぐあぁぁぁッ!!」

まぁ神器の能力が爆発系なら禁手も爆発系だよね、俺は違うけど。
相手が勝手に全身危険物だらけになってくれたなら話は早い。
指先や手の甲から突起物目掛けてドリルを射出、全弾命中してヘラクレスを中心に残りの英雄派も巻き込んで大爆発を起こした。
衝撃と共に付近を吹き飛ばしたが、爆炎から残りの英雄派が飛び出しやがった。
纏めて倒れてくれれば楽だったけど、そんなに甘くないか。
爆炎が収まると、爆心地には焼け焦げたヘラクレスが地面に倒れ伏し時折痙攣を起こして動いている。
ゲオルグはそれを確認すると、ヘラクレスを霧で包んで何処かに転移させた。
多分何処かにあるであろう治療施設へと送ったんだと思う。
「チッ、あの爆発で原型留めてやがる」
自分には効きにくいのか、それともあいつがメチャクチャ頑丈なのか。
まぁ何はともあれ一匹片付けた、次はどう来るかね？
俺が身構えていると、槍を手にした男が楽しそうに笑いながら話しかけてくる。
「流石だね。ヘラクレスを難なく無力化した上に、こちらを纏めて一掃しようとするとは。やはり君は敵に回したくないな、仲間になってくれないのが残念だよ」
「なら人様の大切なモンに手ェ出ししてんじゃねぇよ。ロスヴァイセさんの分は終わっ

た、次はゼノヴィアの分だ。やったのはアンタか、そっちの金髪姉ちゃんか、それともそこのスカした態度の剣士か？　誰だろうが、楽に終われると思うなよ」

「いいね、なかなかの殺気だ。俺が相手をしたい所だが……申し訳ない。俺は今、君の仲間である赤龍帝が何をしようとしてるのかが気になって仕方ないんだ」

曹操は何とも言えない顔をしながら、俺の背後にいるだろうイッセーの方へ顎を突き出し見るように促す。

最初は罠かと警戒していたが、曹操の背後にいる英雄派の連中も信じられない物を見たかの様に眼を見開き固まっている。

あくまで曹操に意識を向けながら、そっと後方で反撃の準備をしているであろうイッセーへと視線を送る。

その視線の先には――

『おっぱい……』

『お、おっぱい』

『おっぱいーん』

『いっぱいおっぱい夢いっぱい』

『すごい、おっぱい』

数え切れないほど大量の光る人の形をしたなにかが、なんかすごい事を呟いている光

景があった。
……え～、なにこの変態見本市。
イッセーが手にしてる宝玉から出て来て円陣組んでるんだけど、どういう現象なの？
「……おっぱいゾンビか？」
曹操の呟きに納得してしまった。
そうね、確かにゾンビにしか見えないわ。
てかなんか俺が真面目に頑張ろうとすると、毎回イッセーが妨害して来る気がするんだけど気のせい？
ガンガン落ちていくテンションをなんとか維持していると、イッセーは戸惑いながらも何かを決心した様に表情を変える。
状況は分からないが、準備完了って奴か？
何をするにしても巻き込まれたらマズい、俺は大きく飛び退いて英雄派の奴らから距離を取る。
次の瞬間、イッセーは空に向かって大きく叫んだ。
「――召喚（サモン）ッ！　おっぱいいいいいッ！」
叫び声と同時に、イッセーの目の前に奇妙な形をした魔方陣が現れる。
魔方陣にどう見てもおっぱいと思わしき形が刻まれており、それが強く輝き始めた。

輝きが一層強くなって閃光を放つと、其処には下着姿のリアス先輩の姿が。
あ～……ゼノヴィア痛めつけた仕返しはキッチリさせて貰うけど……なんかもう、どうでもいいや。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
エルシャさんの助言に従い、展開された魔方陣からお着替え中の部長を呼び出し、その乳首をつつく事によって神器の中に眠っていた新しい力を手に入れる事に成功した。
新しいと言っても、ドライグ曰く神に封じられた天龍本来の力の一部らしいけど。
ちなみに部長は俺がお乳さまをつついた途端、光と共に消えていった。
どうにもこの為だけに呼び出してしまったみたいで、後で土下座して謝らなきゃならなくなった。
カズキの向けてくる無気力ながらも汚い物を見る視線も、ザクザク刺さってとても痛い。
『貴方の可能性の扉は、リアス・グレモリーのお乳によって開かれたわ。これで貴方は【覇龍】とは違う道を歩んでいける筈よ、頑張りなさい』
『……ずむずむいやーん』
エルシャさんと、男性の歴代最強赤龍帝であるベルザードさんはそんな最後の言葉を残して神器の中から消えていった。

最強の赤龍帝の、最後の言葉がアレですか……。
俺、わかったんだよ。
赤龍帝になる人って、変な人が多いんだなって。
「どうせ俺も変態だよぉぉぉおおっ！」
「何を今更分かりきった事を……」
「うっさいぞカズキ！　えぇい、もうやけくそだ！　いくぜ、ブーステッド・ギアァァァァツ！」
俺の咆哮と共に、神器から新たな力の使い方が流れ込んできた。
ベルゼブブさまが調整してくれた俺の中にある『悪魔の駒』、赤龍帝の力がその特性を取り込んで新たな可能性を示してくれる！
さぁ、ここから反撃開始だぜ！

52話

いや～、イッセーがあまりにもあんまりな事をしだしてやる気なくなってたけど、これは凄い。

イッセーの中にある『兵士』の駒の特徴である【プロモーション】を、上手いこと活用している。

『僧侶』は強化された魔力を倍加してぶっ放す二門の大砲を備え、『騎士』はそのスピードを生かす為に余分な装甲を削ぎ落とし、『戦車』は逆に装甲を厚くして防御力を上げ、肘の撃鉄で攻撃力も跳ね上がってるのか。

あの撃鉄かっこいいな、俺も欲しい。

モグラさんどうにか出来ない？

無理？　残念、ビッ○・オーごっこがしたかったのに。

ちなみに禁手化は解いた、というか大技連発でモグラさんがバテたので解けてしまった。

九重の横に来て観戦モードに入っていると、何やら匙と九尾の御大将が怪獣大決戦をやっている近くの空が歪んできた。

何だろうと思っていると、そこから緑色の細長い龍が現れた。
「あ、あれは……！」
「知っとるのか、カズキ？」
「あぁ、あいつは○龍って言ってな？　どんな願いでも一つだけ叶えてくれると言いながら、出来ない事が割とあるっていう意外と凄いドラゴンだ。願った人を大金持ちにしてくれたり、王様にしてくれたりな。あとギャルのパンティもくれたりする」
「全然凄そうに聞こえないのは気のせいかのぅ……」
どうやら俺の説明は不評の様だ。
そんな事を言っているとドラゴンから一つの人影が飛び出し、猫の様に静かに着地した。
その人物は金色に輝く体毛に、マラソンランナーがつける様なグラサンと珠のデカい数珠を装備した猿顔のおじいさんだった。
口にはキセルを咥え、肩に見覚えのある棍を携えている。
『おいジジィ！　なんか俺の事を激しく勘違いしてる奴がいるんだが!?』
「若い癖して早々に引退を決め込むから認知度が低いんじゃ、ここで気張って評価を変えろぃ」
『そういう問題か!?　オイラこの結界破るのでチョーお疲れなんだけど！』

テンション高過ぎてメンドくさいな、このドラゴン。
その人物はドラゴンと簡単な会話を交わすと、こちらに向かってゆっくりと歩を進める。
「お前さんが、美猴のアホタレが鍛えたカズキって坊やかぃ？　儂は闘戦勝仏……初代孫悟空といった方がわかるかの？　坊やの事は天帝から色々と聞いとるよ」
闘戦勝仏と名乗ったおじいさんは、優しい笑顔をこちらに向けながら頭に手を置く。
あ～何処と無く雰囲気似てるなと思ったら、美猴さんの言ってた初代さんか。
てか天帝って帝釈天さんの事だよね？
あのヤンキー神さま、なにを吹き込んだんだろうか。
「初めまして、知ってるみたいですけどカズキです。美猴さんから話は聞かされてました」
「カカツ、どうせ酷い事しか言っとらんかったじゃろ」
あいつはそういう奴じゃ、初代さんはそう言いながら大きな声で笑い、俺は乾いた笑いで答える。
普段から悪口言ってるの、モロバレですよ美猴さん。
「さてカズキよ。聖槍のクソ坊主は儂が面倒見てやるから、お前さんは玉龍（ウーロン）と一緒に九尾を頼むぞぃ。アホタレの仕込みがどんなもんか、拝見させてもらおうか

の」

「へ？　いや俺もうモグラさんが疲れきってて……のわぁぁぁ!?」

初代さんは返事も聞かずに俺の服を無造作に掴むと、空高くにいるドラゴン目掛けて放り投げやがった。

俺は綺麗な放物線を描いてドラゴン……玉龍さんの頭の近くに顔から落ちた。

鱗が擦れて痛いよ、さすが美猴さんの一族は人の話を聞かない。

「玉龍、その坊やと一緒に九尾の姫さんを頼むぜぃ」

『おいおい、こんなチンチクリンなんざ必要ねぇぜクソジジィ！　あんなんオイラ一人で……おわ、狐と戦ってんのヴリトラじゃん！　懐かしいな、どれ位ぶりだぁ？　まぁいいぜ、とっとと片付けてたらふく京料理を食らってやるぜぇ！』

玉龍さんはベラベラと喋りたてながら、長い体をくねらせて九重の母ちゃん目掛けて移動していく。

つーか、モグラさんがガス欠なのに俺にどうしろと。

モグラさんのいない俺にやれる事なんて、味方と相手をおちょくる位しかないんだけど……取り敢えず近付かないと話にならないか。

「よし、玉龍さん。俺に考えがあるんで、このまま八坂さんに突っ込んで」

『あぁん!?　なんでオイラがテメェの言う事聞かなきゃならねぇんだよ！』

「まぁまぁ、このチンケな私に龍王の力って奴を見せつけてくださいよ。あの狐なんかよりすごいんでしょ？」

『あたぼうよ！　仕方ねぇ、オイラがどんだけ凄いのか！　そのちいせぇ目ン玉ひん剥いて、よぉくみてやがれってんだ！』

玉龍さんは速度を更に上げ、勢い良く突撃していく。

チョロいな龍王。

暫くしてヴリトラさんと八坂さんが暴れている戦場に到着。

辺りの建物はヴリトラさんの黒い炎と八坂さんの吐き出した炎で焼き尽くされ、まさに怪獣大決戦の戦場だ。

八坂さんは近付いてきたこちらに気付くと、その長い尻尾でこちらを絡め取ろうと襲い掛かって来た。

『うおぉ!?　なかなかやるじゃねぇか狐の姫さん！　おいガキ、なんかやるならさっさとしやがれ！』

「え、んなもんないよ？」

『はぁ!?』

「強いて言うなら、アンタが囮になるのが作戦だ。頑張って八坂さんの攻撃の的になってくれ」

俺は手を挙げてそう言うと玉龍さんの頭から飛び降り、八坂さんの身体の上に転がり込む。

しかし身体の上に転がり込むって言葉にすると凄いな、元が美人だから物凄く卑猥に聞こえる。

俺がそんなアホな事を考えている間も玉龍さんに八坂さんの尻尾が襲い掛かり、その長い身体を締め上げていく。

『ちょ、テメエ待ちやが……ぐぉ!?　ち、力も強ぇじゃねぇかこの姫さん！　ちくしょう、あのガキ後で覚えてやがれ！』

任せろ、速攻で忘れてやる。

さてモグラさん、疲れてるとこ悪いけど八坂さんと話は出来る？

……会話にならない？　て事はやっぱ操られてるのね、先ずは八坂さんを拘束しないと。

でも、あんま派手なことして怪我させるわけにも……ってうおぉ!?

悩んでたら急に黒い炎が降ってきた！

「何すんだ匙ゴラァッ！」

『い、いや違うんだ！　ヴリトラが勝手に……！　おい、だからあいつは敵じゃないって！』

『我らにした仕打ち、よもやあのまま有耶無耶に出来るとでも思っていたのか？　九尾のついでに貴様も葬ってやろう』

俺の抗議も意に介さず、ヴリトラさんは俺ごと八坂さんに黒い炎を浴びせ続ける。

さっきの誤射が余程気に入らなかったようだ。

確かイッセーと匙が『力を奪う炎』とか言ってたっけ？

『いいぞヴリトラ、もっとやってやれ！　オイラを嵌めた天罰を喰ら、グェ!?　ガアァ、急に喉元引っ張るんじゃねぇよ！』

玉龍さんはそれを見て囃し立てるも、八坂さんの尻尾と未だに格闘中である。

自分に罰が来てりゃ世話ないな。

『おいヴリトラ！　お前いい加減に……！』

『……我が分身よ、もしや奴は【神秘なる豊穣土竜】の加護を得ているのか？』

『えっと、確かあいつの神器であるモグさんの名前がそんなんだったような……それが？』

『ふん、我が天敵を手中に収めているが故の蛮行か……！』

へ？　モグラさんってヴリトラさんの天敵なの？

……あ～、ヴリトラさんが得意な特殊攻撃を全部無効化しちゃうのか。

ヴァーリさんの半分にする能力も無効化してたもんね、やっぱモグラさんはすごい。

まぁでもそれなら安心だ。
幾ら攻撃されようがなんともな……くないね、モグラさんガス欠寸前だったわ。
……あれ？　俺ってば実はピンチじゃね？
マズい、このままだとモグラさんの不思議パワーが消えて焼き殺されてしまう。
なぜ俺の命は、いつも味方の手によって危険に晒されるんだろうか。
こうなりゃアレだ、俺も練習していたとっておきを披露するしかない！
目を瞑ってから息を細く吸い、精神を研ぎ澄ませていく。
長く長く吸い続け、限界がきた所で息を止め……一気に吐き出すと同時に、足下の八坂さん目掛けて拳を振り下ろす！
「……フッ!!」
放った拳は乾いた音を立て、八坂さんの腰辺りに命中する。
その打撃を背中を駆けながら、何発も打ち込んでいく。
腰から背中、肩、首、そして最後に身体から飛び降りながら額へ一撃。
先程まであれだけ暴れていた八坂さんだが、今は何もせず大人しくなって玉龍さんも尻尾の束縛から解放された。
今のうちにモグラさんに踏ん張って貰って八坂さんの足下に四つ落とし穴を作り、それぞれの足を落としてそのまま固定。

八坂さんは暴れる様子もなく、じっとして動く気配はない。
「……よし、捕獲完了だ」
これぞ石の人に打ち込むために鍛錬し、速攻挫折して小猫ちゃんに泣きついた事により習得した秘技！
○紋疾走・オー○ードライブ！
と、心の中で呼んでるただの仙術です。
小猫ちゃん曰く、身体の中の気の流れを正す事によりうんたらかんたら。
まぁ話が難しくて、殆ど理解出来なかった。
説明されたのを勘と気合いでやったら即出来てしまい、小猫ちゃんに拗ねられて大変だった事しか記憶がない。
なんか魔法で操られてると聞いたので、身体の中の不純物を追い出せば何とかなるんじゃないかと思い敢行。
目はまだ虚ろだし身体も元に戻ってないけど、応急処置としてはこれで良いんじゃないかな？
後は初代さんが何とかしてくれるだろ。
美猴さんの師匠みたいなもんなんだから、仙術だって凄い筈だ。

俺が一人満足気に頷いていると、先ほどまで一緒に戦っていた二匹のドラゴンがいきなり体当たりをかましてきた！

「うおぁ!?　あ、危ないだろ！　ヴリトラさんまでいきなり何すんの！」

『狐の姫さんはこれで問題ねぇ！　次はテメェだクソガキ！』

「あれは適材適所なんだから仕方ないだろ！　丈夫な身体してんだから、あんくらいで文句言うな！　」

『我が炎が効かぬなら、直接牙と爪で思い知らせるしかあるまい』

「ヴリトラさんはごめんなさい！　でも狙った訳じゃないから許して！」

当然俺の言葉は受け入れられず、二匹の龍王と追いかけっこする羽目になった。

モグラさんに助けを求めようにも、完全にダウンしてタレモグラさんになってしまっていたので不可能。

でもその姿は可愛くて、命懸けの鬼ごっこ中にもかかわらずほっこりしてしまった。

次の瞬間には玉龍さんのブレスでこんがりしてしまったが。

色々と限界になってきた頃に、初代さんが二匹を諫めてくれて助かった。

曹操たちは何時の間にかいなくなっていた。

初代さんがボコボコにして、イッセーが追撃を喰らわせてやったらしい。

ゼノヴィアの仇が取れなかったのは残念だが、まぁ良しとしよう。

俺の修学旅行を台無しにした報いだ、ざまぁ。

その後初代さんの力を借りたイッセーが『乳翻訳』とか言うハレンチ技を初めて有効活用して、八坂さんに九重の言葉を直接届ける事により元の姿に戻す事に成功。

元の美人の姿に戻った八坂さんに抱き着き涙する九重を見て、涙腺に響いたのは内緒だ。

アザゼルさん率いる事後処理チームも到着し、これで本当にひと段落といったところか。

なんでもアザゼルさんたちは、空間の外で英雄派の構成員たちと戦闘していたそうだ。

何はともあれ、これで明日の最終日にはちょっかいを出される事もないだろう。

僅かな自由時間しかないが、それでも最後まで楽しませて貰うとしよう。

あぁ……俺の修学旅行……。

５３話

曹操たちが消えてから暫くすると京都を模した擬似空間が砕けて元の世界へと戻り、気付くと宿泊しているサーゼクスホテルの屋上にいた。
他のメンツもアーシアちゃんによる必死の治療のお陰で無事の様だし、ひたすらに感謝である。
八坂さんは裏京都にあるという自分たちの施設へ運ばれていき、九重も俺たちに礼を言った後にそれについていった。
みんなが検査の為に搬送されていると、俺とイッセーの元に初代さんがやってきた。
イッセーは『覇龍』とは別の力を求め、そして手に入れた事を褒められていた。
なんでもイッセーは、夢と女で強くなるタイプだそうだ。
流石はおっぱいドラゴン、ぶっ飛んでいらっしゃる。
「カズキよ。お前さん足腰はしっかりしとるし、基礎はそれなりの様じゃが最近鍛錬をサボっとるな？」
おおぅ、俺に流れ弾が飛んできた。
確かに最近は修学旅行が楽しみ過ぎて、走り込みと筋トレくらいしかやってないで

す。
「あの仙術も殆ど我流じゃろ？　本格的に学びたくなったら堕天使の総督を通して連絡してきなさい。あのバカの分まで、キッチリ鍛えてやるからの」
「あはは……考えときます……」
絶対ゴメンだ、美猴さんからこの人の修行内容は聞いている。
あんなん美猴さんだから耐えられるんであって、俺には無理！
「お主らはまだ若い。それぞれが精進して切磋琢磨し、高みを目指すとええ。さて、天帝のおつかいが済んだら白龍皇とやんちゃしとるバカを探して、二人にキツめの仕置きをせねばのぅ」
初代さんは俺とイッセーの頭を撫でた後、肩を竦める。
ヴァーリさんと美猴さん、逃げて、超逃げて！
「――では達者での。玉龍、九尾の元に行くぞ」
『あいよ、じゃあなドライグ！　それからクソガキ、テメェはいつか泣かす！』
「だってよ、イッセー」
『テメェだ、ボケ！』
それだけ言うと、初代さんと玉龍さんは行ってしまった。
次に会う時までに、『龍殺し（ドラゴンスレイヤー）』の武器を用意しなくては。

さて、もう夜も遅い。
今日は疲れたし、明日の為にも早く寝てしまおう。

朝起きると、ロスヴァイセさんに土下座されてしまった。
自分が酒に酔っている間に誘拐され、オマケにその実行犯に敗れてしまっては眷属失格だと落ち込んでいた。
俺がヘラクレスをボコったのもイッセーから聞いていたらしく、仇を討ってくれて嬉しい反面情けなくてその倍凹んでいるとゼノヴィアが教えてくれた。
「つーかゼノヴィア、お前をボコった奴シバけなかったわ。ゴメンね？」
「あの男へのリベンジは自分で果たすよ、それこそ気にしないでくれ。まぁ、私よりも木場の方が燃えている様だがね」
俺の謝罪をゼノヴィアは笑いながら流す。
へぇ、あいつってそういうキャラだっけ？
イッセーの熱血がうつったのかね？
変態はうつらないといいな、強力すぎるから。
「ほらロスヴァイセさん、何時までもそんな事をしていたらカズキが困ってしまう。カ

ズキも『失敗しても、次に活かせばいい』といつも言っているじゃないか」
「ゼノヴィアさん……うぅ、これではどっちが年上かわかりませんね……カズキくん！
この件は、いつか挽回してみせますね！」
おぉ、ロスヴァイセが復活した。
やっぱ美人は笑顔がいいよね、リアス先輩や朱乃さんみたいな怖い笑顔じゃなければ。
さぁ、朝食を食べたら最後の自由時間だ。
時間は少ないけど、朱乃さんたちのお土産を買わな……ん？
知らない番号から着信が……誰だろ？
「合言葉を言え」
『ふぇ!?　あ、合言葉なんて知らないのじゃ！』
「そらそんなモンないからな、知ってたら怖いわ」
『フンガーッ！』
この打てば鳴る反応、どうやら九重からの様だ。
「で、どうしたの？」
『なにもなかった様に……まぁよい。実は母上が直接皆に礼を言いたいそうでな、案内ついでに出向いても良いか？』

昨日の今日でもう出歩ける様になったのか。流石は京都の御大将、回復力も凄まじい。

短い時間だけどいいかと聞くと構わないと言うので、俺たちは待ち合わせして案内して貰う事にした。

「此度はえろう世話になりましたなぁ、あんさんらにはなんとお礼を言っていいものか……」

「イッセーたちが頑張ったんであって、俺なんて敵に捕まってただけの役立たずですから気にしないで下さい。そして腕を絡めてこないで下さい」

「それでも敵の術式に蝕まれ暴れ狂ったわらわを諫めてくれたのはカズキはんやろ？あの時走った衝撃、忘れたくても忘れられんわぁ……」

「そりゃ全身殴られれば衝撃も走るでしょうよ、物理的に。だから胸を押し付けてこないで下さい」

「何か礼をと思っとったんやけど……実は九重が弟や妹を欲しがっとってなぁ？　良ければそこの建物で休憩なんて……どうかえ？」

「タダでさえ少ないお土産を買う時間が無くなっちゃ……って顔近い顔近い顔近

いいいいッ!?」
もうヤダこの人怖いよ!?
なんでこんないい匂いすんの？
なんでこんなに艶っぽいの？
普通なら嬉しいのに、時々眼が狩人のソレになってて変な汗が止まらないんだけど!?
そもそも、なんでこんなに俺の事構ってくるのさ！
一人立ち向かってきた男らしさがうんたらかんたらって言ってたけど、俺よりも前に匙が戦ってたの忘れないであげて!?
てか八坂さんは朱乃さんと真逆のドMなの？
女を殴る奴の何処が男らしいのよ、あんたのダンナはDVだったのか？
これがダメンズウォーカーって奴か……あれ、つまり俺ってダメンズ？
割と自覚あるけど、なんか凹む……ってそんな事気にしてる暇はない！
「く、九重！　頼むから助けてくれ……！」
「嫌じゃ、邪魔したら後で私が母上に叱られる」
俺が隣にいた九重に小声でSOSを発信するも、速攻ではたき落とされる。
一緒に拉致された仲なのに冷たくね？
いや、九重を巻き込んだの俺だけど。

「お前がお尻ペンペンされようが何されようが、俺は困んないからいいじゃん。ホラ、このモグラさんが食べるの飽きて余った八つ橋あげるから」
「あ、イッセー！　それよりこっちのお菓子の方がオススメじゃ！」
「見捨てないでぇぇえ!?」
赤龍帝でなくイッセーと呼ぶ事にしたようで、笑顔を浮かべながら向こうに駆け寄っていってしまった。
懐柔失敗、賄賂も試したのに何が気にくわないんだ！
九重の向かった先にいたイッセー、松田、元浜の三人が此方を見つめてくる。
ま、まさか助け舟を出してくれたり……！
（死ね）
（くたばれ）
（もげろ）
三人同時に親指を下に向けてくれやがった。
ダメだ、奴らは敵だ。
ゼノヴィアは不機嫌だし、アーシアちゃんとイリナは困った様に笑みを浮かべてゼノヴィアとお土産を見て回っている。
桐生？　奴は俺が困っているのを楽しげに見てやがるから論外だ。

「あぁん、わらわを無視せんといてぇ？　泣いてまうよぉ？」
「俺が泣きそうなんだよぉ！」

そのまま逆セクハラされつつも時間ギリギリまでお土産屋を回り、満足するまで買い物をした。
案内してくれたお店はどれも素晴らしかったので、何とも複雑な心境である。
そして、いよいよ京都を離れる時が来た。
九重と八坂さんは、駅の新幹線ホームまで見送りに来てくれた。
「……イッセー。ま、また京都に来てくれるか？」
おーおー顔真っ赤にして可愛いな、マセガキめ。
「みんなもまた来て欲しいのじゃ。あ、カズキはこんでもいいぞ、モグちゃんだけなら大歓迎じゃ♪」
泣かす。
「これこれ九重、未来の父上をそない邪険にするもんやないよ？　今度はゆっくり出来る日程で来て欲しいなぁ、その方がわらわとしても色々と都合がええし」
「俺の方が良くないんで、次来る時は日帰りにします」

「またそないな事言うて……ほんに照れ屋やねぇ♪」
　おい、誰か通訳連れてこいよ。
　会話のドッヂボールとかいう次元じゃないんだけど、この人。
「カズキはん卒業したらこっちにこぉへん？　流石にわらわがそっちについて行く訳には行かへんからなぁ」
「お断りします」
　なんかもう龍王二匹相手にするより疲れた。
　俺が溜め息を吐いていると、今まで大人しくしていたゼノヴィアが急に俺の頭を両手で抱え込んだ。
「八坂姫さま！　言っておくが、この男は私のだ！」
　いつお前のになったよ。
　疲れ切ってるので無抵抗でゼノヴィアのおっぱいに埋もれていると、八坂さんは顎に手をあて何か納得した様に一人頷く。
「ふむ、つまりわらわは現地妻ってことやね？　ほんなら、京都で大人しく待っとるよ」
「おい九重、お前の母ちゃんと会話できないんだけど」
「私は知らん」
　こんなやり取りをしていると、発車の音がホームに鳴り響く。

「ありがとう、イッセー！　みんな！　九重はいつだって待っておるぞ！　また会おう！」

九重はそう言いながら、見えなくなるまで力いっぱい手を振り続けてくれた。

九重の見送りを受けた後、電車の中でようやく一息つくとイッセーが何やら騒いでいたけど……まぁどうでもいいよね。

八坂さんにはああ言ったが、今度はもっとゆっくり京都を回りたいな。

あぁ、もっと色々と見たかったのに……ちくしょう、やはりテロリストは悪だ。

今度会ったら『ココまでやられたら死んだ方がマシじゃね？』な目に合わせてやる！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

連れ去られた母上は五体満足で救出され、京の都も無事守られた。

これもイッセーやカズキたちが力を貸してくれたおかげじゃ。

いくら感謝してもしきれない程の恩を感じている。

話も聞かずに無礼を働いた私たちを、イッセーたちは快く許してくれた。

カズキも最初は渋っていたが、それでも協力してくれた。

私もよく学び、よく鍛え、母上の様に強くなってみんなと並べる様になりたい。

その母上はどうもカズキに惚れたそうで、何やら言動がおかしくなっていた。

でもやたらと楽しそうで、その笑顔を見ていると私も笑顔になってしまう。

でもカズキを父上とは呼びたくない、彼とはあくまで友達として対等でありたいのじゃ。

どうすればいいんじゃろうか？

誰も教えてくれないので、冥界に繋がっているという機械で調べてみる事にした。

えっと、カ、ズ、キ……お？　何でかモグちゃんの絵が出てきたのじゃ。

モグちゃんぬいぐるみ……じゃと……？

他にもモグちゃんグッズがいっぱい……は、母上ーッ！

これ欲しいのじゃ～！

……はて、何か調べようとしていた様な……？

まぁ忘れるくらいじゃから大した事ないじゃろ！

それよりも今はモグちゃんぬいぐるみの確保が優先じゃ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「サーゼクス、こちらで得た英雄派のデータを送るぞ」

『あぁ、上位の神滅具を三つも保有している上に禁手のお祭り状態。アンチモンスターが厄介だな』

「しかし『英雄』ねぇ……俺たちは討伐される予定のラスボスか何かか？　――っとそ

うだ。イッセーたちは更に戦果を挙げた、これで昇格は確実か？」
『これだけやればもう十分だろう、次のゲームの結果次第で私からするよ。既にグレモリーの関係者には、リアスだけでなくイッセーくんのゲームプレイを期待している者も少なくない。義兄として鼻が高くなるね――しかし』
「あん？　どうした？」
『……アザゼル。リアスは、リアスの乳はいったい何なのだろうか？』
「……深く考えるな。リアスの乳は限界を超えて、スイッチ姫から『超（スーパー）スイッチ姫』になっただけだよ」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「京都での計画は失敗したけど、もうひとつの計画は調整がまた進んだよ。近いうちにお披露目出来そうだね、曹操」
「そうか、それは何よりだジークフリート。お前もひとつ持っていけ。俺はこの槍があればいい」
「それじゃあ貰っていくよ――で、赤龍帝にやられた眼はどうだい？　フェニックスの涙を使わなかったから、厳しいんじゃないか？」
「ダメだな、もう使い物にならない。何か代わりの眼を用意しなくちゃな」
「君も物好きだね……そうだ、曹操が手に入れてきた彼の血液の解析が済んだ様だよ。

これで【神秘の豊穣土竜】の加護を抜けるってさ。血液なんて何処で手に入れてきたのさ？」

「なに、作戦前に気まぐれで立ち寄ったラーメン屋でちょっとね。役に立つかもと回収しておいて良かったよ、これで彼に対する切り札も手に入れた。後は……」

間話8

「……あの、動きにくいんですけど」
「うふふ、カズキくんが浮気して帰ってくるのがいけないんですわ♪」
修学旅行が終わって無事帰宅し、数日経ったとある休日。
帰ってきてからと言うもの、朱乃さんがいつも以上にくっついてくる様になった。
今も食器を洗っていると肩に頭を乗せてくるし。
どうもイッセーとゼノヴィアから余計な事を聞いた様で、こちらの言い分は全てこの台詞で流される。
誰とも付き合ってない上に、一切手ぇ出してないのに浮気って何さ。
「あら、この状況でゼノヴィアさんが何も言わないのは珍しいですね？」
「私は旅行中カズキと一緒に楽しんだからね、朱乃さんが甘える位は認めないと」
ロスヴァイセさんが掃除機をかけながらゼノヴィアに尋ねると、ゼノヴィアはモグラさんと一緒に洗濯物を畳みながら笑顔で答えている。
こいつも配慮ができる様になったのか、成長したもんだ。
「……手、震えてますよ？」

「あぅ……」

そうでもなかった。

家事が一通り終わりスコルとハティに芸を仕込みながら遊んでいると、リアス先輩から呼び出しが掛かった。

俺とロスヴァイセさんはこれから会長さんとやっている冥界の番組の収録へ行かねばならないので、そちらは朱乃さんとゼノヴィアに任せる事にした。

リアス先輩からの無茶振りより、会長さんとの番組の方が安全だろう。

会長さんは先日ついにモグラさんとの皮むき勝負に勝利し、最近ご機嫌だと匙が言っていた。

勝った嬉しさのあまり俺に抱き着いてきた程だ、我に返った会長さんに魔力で吹き飛ばされたけど。

それでも未だにお菓子の方はダークマターを精製するのだから不思議すぎる。

あの人が触った製菓材料は、不可思議な物に変質でもするのだろうか？

まぁそんなこんなで番組も無事終了し、会長さんと別れて帰宅。

帰ってきたのに気付いたスコルとハティが、玄関まで出迎えに来てくれる。

二匹ともかわいいなぁ、もう。

スコル達の後ろから来てくれた朱乃さんに、今日のリアス先輩の要件は何だったのか

聞いてみた。

「以前私たちと戦った、リアスの元婚約者であるフェニックス家の嫡男ライザー。その妹であるレイヴェル・フェニックスが、彼について相談に来ましたの」

なんでもあの焼き鳥ヤンキー、イッセーにボコボコにされてからドラゴン恐怖症になってしまったそうだ。

真面目な時のイッセーは確かに迫力あるからな、あの筋力バカに殴られるのは俺も嫌だ。

「いろんな人たちに尋ねて回ったら、リアス先輩に相談するのがいいってアドバイスを貰った訳ね」

「原因が原因ですし、そのまま全員でフェニックス家へと赴き訪問してみたのだけど……かなり重症の様ですわね。イッセーくんを見た途端、プライドの高かった彼がベッドに飛び込んでましたもの」

で、イッセーがライザーに『根性』を教える為に、タンニーンさんに頼んで山籠り中だと。

あいつも大概筋肉理論だよな、取り敢えず身体を動かせば何とかなる～みたいな。

「まぁ面白そうだし、今度匙でも誘って見学に行ってみるか」

「そう言えばリアス部長がイッセーが特訓している山の近くに温泉があると言っていた

ぞ、みんなで行ってみないか?」
「温泉ですか、京都のホテルで入った露天風呂は素敵でした」
玄関からリビングに移動するとゼノヴィアが皿を並べながらそんな事を言い出し、ロスヴァイセさんが京都で気に入った露天風呂に想いを馳せていた。
「じゃあみんなで行きましょうか。カズキくんも一緒に入ります?」
「まだ死にたくないので遠慮します」
朱乃さんがいじめっ子な表情を覗かせながら聞いてくるが、そこはスルー。
温泉か……イッセー達の足掻いている姿を見るのもいいが、そっちの方が楽しめそうだ。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

ライザーに根性を身に付けさせる為に、タンニーンのおっさんの領地にあるドラゴンたちが住む山に来て今日で三日目。
俺もついでに走り込みなんかのトレーニングをやっているんだが、慣れない雪の上だとなかなかキツイ。
当然ライザーも辛い様で泣き言を漏らしまくっているが、向こうは後ろからドラゴンが追いかけてきて氷のブレスを吹き掛けてくるので死に物狂いで走り続けている。

「ほらほら、遅いですよ！」
「うわぁぁっ！　凍る、俺の炎が凍るぅぅっ!?」
「お兄さま！　これぐらいで音を上げてどうしますの！」
あんな感じでサボると、レイヴェルの乗った水色ドラゴンに喝を入れられるのだ。
フェニックスの炎が凍るとか恐ろしすぎる。
でもまぁ最初に比べれば元気かな、フェニックス家にこいつを迎えに行った時なんて俺の顔を見た途端怯えてたし。
この調子で頑張って、なんとかドラゴン恐怖症が治ればいいんだけど……。
その後も一時間ほど走り込みを続け、今は休憩時間となり水分補給。
ライザーは疲労困憊で、横で仰向けに倒れている。
「山に篭って修行なんて野蛮人のする事だ」
「受け継いだ血と才能を重んじて、貴族らしく生きるのが上級悪魔なんだ」
「こんな泥臭い真似をしないといけないなんて……！」
出てくる出てくる愚痴のオンパレード。
生粋のお坊ちゃん気質は、そう簡単には治らないようだ。
まぁ俺もおっさんと特訓を始めたばかりの時は、戸惑ったし怖かったけどさ。
休憩が終わると、ライザーは先程とは違う蒼い鱗のドラゴンに追い回され始める。

「ほらほら行くッスよ～、フェニックス家の坊ちゃん。キビキビ走らねぇと黒焦げッスよ～」

「ぐあぁぁぁっ！」

確か『蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）』とかいうドラゴンの高位種族で、アーシアが使い魔にしてるのがこの種族の幼体なんだよな。

ちなみにさっきの水色ドラゴンも『氷雪龍（ブリザード・ドラゴン）』っていうこれまた高位種族のドラゴンさんです。

流石おっさんの領地に住んでるドラゴン、強そうなのがゴロゴロいるぜ。

俺も走り出そうとすると、レイヴェルがバスケットにパンケーキを入れて持って来てくれた。

折角持ってきてくれたんだし、もう少し休憩しようかな。

持ってきてくれたパンケーキを摘みながらレイヴェルと色んな話をしていると、今日の夜に部長たちがこの近くにある温泉にやって来るらしい。

……温泉、か。

修行の終わったその夜、俺は修行中の寝床にしている洞窟の中にある寝袋から静かに

這い出る。

――温泉！　部長たちが入っている温泉！

これはもう、覗くしかないだろ!?

ここで行かないのは俺じゃない！

俺といえば覗き！

ここで覗いてこその、俺だ！

問題はライザーに気付かれない様に洞窟を抜け出す事なんだが……妙に静かだな？

何時もなら不満を垂れ流している筈なのに……まさか！

俺がライザーの寝袋を確認すると、そこにはライザーの姿は既になかった。

忘れてたぜ……あいつは、ハーレムを作ったスケベ野郎だったって事を！

こうしちゃいられない！

あいつにアーシアの、部長の至高のお乳さまを拝ませてなるものか！

「くそったれ！　お前なんかにみんなの裸を見せてたまるか！」

俺は怒りと共に禁手となり、赤龍帝の全身鎧を身に纏い洞窟から飛び出した。

暫く飛び続けると、雪が静かに舞う夜の山の先に炎の揺らめきに似た何かを捉えた。

間違いない、ライザーが炎の翼を広げて飛んでやがる！

「待ちやがれライザー！！　お前に温泉は覗かせないぞ！」

「チッ、バレたか！だが覗いて何が悪い！　温泉に入る女がいるなら、それを覗くのが男だろうが！」

ライザーは特大の炎を放ち、俺はドラゴンショットをブッ放す！

互いに攻撃が避けられ放った攻撃は近くの山へとぶつかっていき、辺りに爆音を響かせる！

「それが貴族のする事か！　バカじゃないの!?　見せてたまるか、俺の部長だ！」

「俺の立場で考えてみろ！　あのデカい乳を一度も生で見ないで諦められると思うか!?」

ぐうぅ！

た、確かに諦めきれないかもしれないが、それはそれだ！

つーか、お前調子戻ってるじゃないか！

乳見たさに復調しやがって、俺の努力を返しやがれ！

「雷の巫女の乳も見たいしな！　あれもデカいだろう！」

「朱乃さんのおっぱいだと!?　お、俺も見たい……けど！」

【なるほど、面白そうな話をしているじゃあないか】

一瞬、背筋が凍った。
それは気候のせいでは決してなく、心臓を直接握り締められた様な感覚だった。
何か異様な威圧感が、その声には含まれている。
俺は恐る恐る声のした方へ振り向くと、そこには堕天使の翼を背中に携えた友人が銀色の装甲を身に付けて、胸の前で腕を組みながら佇んでいた。
「どうした、話の続きはもういいのか？」
「いや、待てカズキ！　俺は覗きを企むこいつを止めようとだな!?」
「何を言っている、貴様も覗きに来たんだろうが！　いや待て、カズキ……？　っそうか！　あの時の人間かぁっ!!」
ば、なに攻撃してんだ!?
ライザーの放った炎がカズキへ迫っていく。
しかしカズキは避けるでもなく、腕を組んだまま立ち尽くしているのみ。
あいつ、避けない気か!?
勢いを落とす事なく炎の塊はカズキに迫っていき、カズキは頭を後ろに僅かに反らし……勢いよく叩きつけた！

「フンッ！」
ず、頭突きでぶっ飛ばしたぁ!?
炎って頭突きでかき消せるもんなの!?
ライザーもこの結果は予想していなかった様で、驚愕して動きが止まっている。
「もう終わりか、じゃあ反撃……だ！」
「ゴペッ!?」
カズキは腕組みを解くと、背中のブースターを吹かして一気に距離を詰めてライザーの頭にゲンコツを落とす。
ライザーはマヌケな声をかけあげると、そのまま地面へと落下していき見えなくなってしまった。
し、死んでないよね……？
「さて、次はお前だイッセー」
「俺も!?　いや、だから俺はあいつを止めようと！」
「ったく、二人してバカスカ撃ちやがって。気持ちよく温泉に浸かってたのに、急に魔力の塊が飛んできたから何事かと思ったじゃねぇか」
あ、さっきライザーと撃ち合ってた攻撃か。
あの流れ弾がカズキに命中してたのか……そ、それは悪い事をしてしまった。

「それにどうせお前も覗こうとしてたんだろ？　同罪だ」
その言葉を最後に、俺目掛けて降ってくるカズキの拳。
咄嗟に防ごうと頭上に腕を重ねたが、落ちてきたのは頭上ではなく顔の両端。
攻撃を喰らう直前、これは匙にやられた脳を揺らす技なんだと気付いたが、俺の意識はそこで途絶えた……。

うぅ、なんだ？
頭がガンガンする上に、やけに外が騒がしい。
というか、俺は昨日何を……？
痛みの走る頭を抱えながら洞窟から出ると、そこには普段の殺風景な景色とは別物の光景が広がっていた。
「この屑が！　チンタラ走ってるんじゃない！　ブリさんと炭酸飲料をけしかけるぞ!?」
「兄さんいい加減ちゃんと呼んでくださいよ、俺は『蒼雷龍』ッス」
「何故この俺様が、あんな奴にこの様な仕打ちをぉ……！」
「不服そうだな、何か文句でもあるのか!?　なんならもう十周、大岩抱えて走ってみるか

!?」

「ぐぅぅ！」

「だが反論出来る余裕があるとは上出来だ！　ペナルティは五周にまけといてやる！　どうだ、嬉しいだろう!?」

「くそったれめぇぇぇ！」

軍服っぽい服を着込んだカズキがライザーに檄を飛ばし、ライザーは身体の何倍も大きな岩を背負って走り回っている。

カズキの後ろには強そうなドラゴンが数匹控えていて、ライザーがサボらないように監視している。

て言うか、洞窟の前ってこんなに広い平地だったっけ？

一体何がどうしてこうなった？

「おぉ、起きたか兵藤一誠」

俺が呆然としていると、タンニーンのおっさんが空から降りてきた。

頭にはカズキの神器であるモグさんが乗っている。

仲良くなったんだね、てかこの状況はなんなの？

「昨日の夜、瀬尾一輝が気絶したお前たちを抱えてやってきてな。鍛え直すから地形を変える許可が欲しいと言って、許可したら一瞬で大地を持ち上げて平地を作り上げた」

あぁ、モグさんの力で地面を盛り上げたのか。
確かにランニングするならこの方がやりやすい。
「見事に【豊穣土竜】の力を使いこなしているのにも感心したが、ここいらの高位種族のドラゴンを一晩で手懐けたのには流石に驚いたぞ」
いやいや、こんな大量のドラゴンを一晩で手懐けるってどんな手品？
モグさんマジパネェ。
しかも高位種族って……あ、走り込みを手伝ってくれた『氷雪龍』さんと『蒼雷龍』さんもいる。
カズキは俺に気付くと、ゆっくり歩きながら近づいて来る。
「起きたかイッセー。モグラさんに大岩作って貰うから、お前もそれ担いで走れ。昨日の覗き未遂の罰だ、匙も走ってるぞ」
本当だ、岩を担いで走ってる。
実はあいつも昨日会長とシトリー眷属みんなで温泉に来ていたそうで、カズキと一緒に入浴していたが俺たちの撃った流れ弾で吹っ飛び運悪く女湯に着水。
その際に部長やソーナ会長含め、シトリー眷属の女の子たちの裸を見てしまったそうだ。
不可抗力とは言え、ソーナ会長からお仕置き代わりにここで鍛える様に言いつけられ

たらしい。
「どうもお前は甘過ぎるみたいだからな、俺が焼き鳥ヤンキーの性根を叩き直す。ついでにお前と匙も鍛えてけ」
おかしい、笑顔がものすごく胡散臭い。
あいつはなんで誰よりも悪魔的な立ち位置にいるんだろう。
部長、俺はもう貴方に会えないかも知れません。
あぁ、最後にあの素晴らしいお乳さまを拝みたかった……
「ようこそ、ここが地獄の入り口だ」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキくんがライザーを鍛え直すと言い、イッセーくんと匙くんを連れて山に行ってから三日が経ちました。
流石に心配だとリアスが言い出し、修行を行っているというタンニーン様の領土へみんなで向かい到着したのですが……。
「いいか！　今の貴様らは家畜以下だ、この世で最も劣った生き物だ！　そこから死ぬ気で這い上がって、一端の悪魔に成り上がれ！」
「またお前か焼き鳥野郎！　何回も倒れやがって、このゴミ虫が！　ドラゴンの餌にされたくなければさっさと起きてキビキビ走れ！」

「ヒィヒィ喚いてみっともないとは思わんのか！　貴様らのしみったれで貧相な根性を捻り出してみろ！」
「わざと倒れて目立ちたいか!?　辛いふりをして同情を引きたいか!?　負け犬根性の染み付いた屑どもめ！」
「何も考えず、何も感じずただ走れ！　貴様らのやるべき事はそれだけだ！」
「「ドラゴン！　ドラゴン！　ドラゴン！」」
何だかカズキくんがとても楽そ……コホン、ハッスルしながらイッセーくんたちをシゴいていました。
カズキくんに何かを言われると、三人とも虚ろな目のまま口を揃えて『ドラゴン！』と叫んでいます。
それが異様に感じられるのは、私の気のせいではないのでしょうね。
その光景を見たリアスとソーナ会長、そしてレイヴェルちゃんはそれぞれイッセーくんたちに駆け寄っていきました。
「イッセー！　大丈夫なの!?」
「ハッ！　自分は大丈夫であります！」
「わ、私の胸に触れても何の反応もないなんて!?」
イッセーくんがリアスの胸に何の反応も示さない、これは重症ですわね。

匙くんとライザーも同じ様で、それぞれが同じ様な反応しか帰ってこない様です。
カズキくんは不満そうでしたが結局訓練はこのまま中止となり、三人はアーシアちゃんの治癒の力とそれぞれの仲間や眷属の呼び掛けにより次第に調子を取り戻していきました。
ライザーのドラゴン恐怖症もその際に完治し、今では進んで自分を鍛える様にすらなったそうです。
『あの体験をすれば大概の事に恐怖など感じなくなるし、どうでもよくなる』と語っているとか。
カズキくんがどんな訓練を施したのか、三人に尋ねると揃って口を閉じるところを見ると、思い出したくもないほどキツい訓練だったのでしょう。
ちなみにカズキくんはフェニックス家からお礼を貰ってホクホク顔で帰ってきました。
自宅でモグちゃんやスコルたちと戯れるカズキくんを見ていると、そんな事をする人には見えないですわね。
しかしあの時のカズキくん、とても楽しそうでした。
カズキくんに口汚く罵倒されるのもそそりますが……あれ、次の機会があったら私もカズキくん側で参加したらダメかしら？

間話9

「はぁ、三大勢力対抗で行う運動会……それに俺も出ろと？」
「おう、もちろん俺たち堕天使側でな！」
ライザーたちを山で鍛えてから数日後。
突然家に押しかけて来たかと思うと、文字がビッシリと書かれた紙を突きつけながらそんな事をのたまうアザゼルさん。
朱乃さんたちはその様子を興味深そうに見つめている。
「なんでまたこんな時期に……それも随分と急だね？」
「まぁぶっちゃけると、運動会とは名ばかりの代理戦争だ。現状に不満のある連中に対する、ガス抜きってやつさ」
オリンピックを物騒にした感じだな。
アザゼルさんはそう言いながら笑っている。
嘘はついてないみたいだけど……胡散臭ぇ。
つうか、この人が運動会如きでここまで本気になる事自体が怪しすぎる。
おっさんの目的がイマイチわからない。

オマケに――――

「まぁまぁカズキちゃん？　怪しむのはわかるけどさ、減るもんじゃないしここは素直にサインしてちょうだいな♪」

堕天使幹部の紅一点、ベネムネさんまでわざわざ連れて来やがった。

ちなみにイッセーたちを鍛えた時のやり方を教えてくれたのもこの人だ、というか実際に体験させられた。

アザゼルさんめ、俺がベネムネさんに逆らえないのを知ってて連れて来やがったな……！

「最近私たち幹部はカズキちゃんと絡む機会もなかったしさ、いい機会だし子どもの頃みたいに私たちと遊びましょうよ～♪」

「ええい、いい年した男の頭を撫でんでください！」

「いいじゃない、私からしたらカズキちゃんはまだまだ子供よ？」

撫でられた手を払いこそしないが、気恥ずかしくて語気が少々荒くなる。

まだグリゴリに来たばかりの時、俺を一番面倒を見てくれたのがベネムネさんだ。

一人でいると話し掛けてくれたり、シェムハザさんに叱られた時に慰めてくれたり等々。

おかげで何時までも子供扱いされ続けるので、どうにも調子が狂う。

「カズキくんが子どもの頃は、よく遊んだんですか？」
「小さい頃のカズキか、私も興味があるな」
ちょ、ロスヴァイセさん!?
余計な事聞かないで！
ゼノヴィアも話に乗っかるんじゃない！
二人の反応を見たベネムネさんはイタズラを思い付いた様な表情を浮かべると、どこからか薄い機械の様なものを取り出し、っておい！
それは……！
「あら、それなら実際に見てみる？　実はここに小さい頃のカズキちゃんの映像が――」
「わかった！　運動会でも何でも出るから！　だからそれだけは勘弁してぇぇぇ!?」
「そう？　快諾してくれて私も嬉しいわ♪」
くそぅ！　これだからこの人には逆らえないんだ！
昔の俺のバカ野郎！
素直に映像なんて撮られてんじゃねぇよッ！
そして朱乃さんは、さりげなくベネムネさんの隣をキープしないで下さい！
絶対に見せないからね!?

三人からブーイングを受けつつも、アザゼルさんが持って来た書類にサインする。
うぅ、幾つになってもこの人には勝てない気がする……。
「そんなに落ち込まないでよ。そうねぇ、じゃあ真剣になれる様にご褒美をあげるわ！」
「へ？　ご褒美？」
なんだろ？
アザゼルさんだったら綺麗なお姉さんとか言い出しそうだけど、ベネムネさんからのってあんまり想像出来ない。
ベネムネさんは先ほど取り出した映像媒体をヒラヒラと振り、笑顔で話し始める。
「もし堕天使側が優勝出来たなら、この映像媒体をカズキちゃんにあげる」
「マジで!?　ベネムネさんサイコー！　愛してるッ！」
うぉぉぉ、メチャクチャやる気出てきた！
これでこの人に頭が上がらない日々から解放される！
「でももし悪魔側が優勝しちゃったら、この媒体はバラキエルの娘である朱乃ちゃんにプレゼント。鑑賞するなりコピーしてばら撒くなりお好きにどうぞ♪」
なん……だと……？
ショックのあまり固まる俺。
その周囲にいるゼノヴィアたちは、今の話を聞いた途端明らかに目の色が変わった。

「ざけんな、このぶあはぁぁぁッ!!」
「汚い言葉を使うんじゃないの。アザゼルみたいなロクデナシになるよ、若干手遅れな気もするけど」
「おい、なんで俺に流れ弾が飛んできてんだ。ついでで俺に攻撃するんじゃねぇよ」
俺が言い切るよりも早く頬に鋭い平手打ちを喰らい、部屋の端まで吹き飛ばされた。
流石堕天使の幹部、超痛い。
アザゼルさんの抗議はどうでもいいが、この流れはマズい!?
「あ、朱乃さんは堕天使側で戦うよね？　お父さんのバラキエルさんがこっち側だし、ね？」
「初めからリアスの《女王》として悪魔側で参加するつもりでしたが、負けられない理由が増えましたわ……！」
ダメだ、やる気に満ち満ちていらっしゃる！
「ぐぅぅぅ！　ゼ、ゼノヴィアは俺の困る事しないよね!?」
「勝負に全力で挑まないのは失礼というものだ、全身全霊で勝ちに行く！　映像媒体は私が頂くぞ……！」
くそぅ、この単純おバカめ！
目に炎を宿す勢いで燃えてるじゃねぇか！

「ロ、ロスヴァイセさんは俺の眷属だもんね？　当然俺の手助けを――」
「運動会という事は、人間界の物が参考にされてる可能性が高いかしら。違うパターンも考慮しつつ対策を……あ、私は転生悪魔ですから当然悪魔側ですよ？」
あかん、この人ガチだ！
ガチで勝ちを取りに行ってるよ!?
ちくしょう！
同居人に味方が一人もいねぇ！
「うふふ、面白くなってきたわねぇ♪」
その様子を見ているベネムネさんは、終始笑顔のままだ。
ちくしょう、見てろよ！
絶対に優勝して、映像は俺が死守する！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
今日は三大勢力が開催する運動会。
天使や堕天使、悪魔の人たちもたくさん来ていてかなり盛況のようだ。
会場となるこのゲームフィールドでは、盛り上げる為に空砲も上がっている。
ちなみにみんなジャージだ。
「凄い盛り上がってるね、みんなやる気みたいだ」

「ああ。それにこんなに多くの天使や堕天使の人と会うなんて初めてだから、新鮮だし少し緊張しちまうぜ」

今回は天使側として参加するイリナを探す為に隣にいる木場と話ながら進むと、俺たちを見た周りの人たちからの声がチラホラと聞こえてくる。

結構好意的な声で安心した、それ以上に木場への黄色い声が多くてムカついたけど。

イリナはすぐに見つかり、一緒にいたミカエルさんに挨拶をする。

少し会話していると、後からやってきた超絶巨乳金髪美人であるガブリエルさんまでやってきた。

さすがセラフォルーさまにライバル視され天界一の美女と言われている方、顔も身体も眼福です！

「なんか俺、ガブリエルさんを見れただけで今日は満足しちまったよ」

俺の言葉を聞いて木場は苦笑しているが、それだけの物を拝めたんだから仕方が――

―

「何を言ってるんだイッセー！　今日の勝敗は大事な物が掛かっているんだ、気合をいれろ！」

ゼノヴィアは俺の肩を掴むと、思い切り握り込む。

痛い、痛いし怖いよゼノヴィアさん……!?

「そうですわ、今日は負けるわけにはいかないんです……！」
「会場のスタッフに確認してきましたが、やはり競技は人間界の物を参考に考えられているようです。予定通りに行きましょう！」
それに負けないくらいの気炎を吐きながら力む、朱乃さんとロスヴァイセさん。
なんでもこの運動会で悪魔勢が一位になれたら、堕天使幹部であるベネムネさんからカズキの子どもの頃の映像が貰えるらしい。
俺も部長やアーシアたちに小さい時のアルバムを見られたから気恥ずかしさはわかるが、女の子ってそういう昔の写真やら映像をそんなに見たい物なのかな？
まぁカズキはそれを見られるのを嫌がって堕天使側で参加するくらいだし、弱点には違いないんだろう。
俺もカズキに無茶振りされた時の保険の為に、全力で頑張ろう！
木場にカズキの腹黒さが移ってきたとか言われたけど気にしないもんね！
「お～、お前らみんな揃ってんな！」
そんな俺たちの前に、黒いジャージを着込んだアザゼル先生たち堕天使チームがやってきた。
朱乃さんのお父さんであるバラキエルさんと、妙に気合の入っているカズキも一緒だ。

バラキエルさんが朱乃さんに話し掛けようとして、朱乃さんがわざとそっぽを向いて弄んだりと、二人の関係が改善されているようで安心した。
けど……カズキが妙だ。
何時もなら挑発の一つや二つしそうなもんなのに、先生とミカエルさんがプレッシャーを放ちながら挨拶している時にも一切喋らず黙ったままだ。
ゼノヴィアも違和感を感じたようで、警戒するようにカズキをジッと観察している。
結局アザゼルさんが去っていくまでカズキは一言も喋らなかった。
あいつ、何を企んでるんだ……？

結局疑惑が晴れる事はなかったが、選手宣誓も終了しそれぞれの勢力で円陣を組んでバイオレンスな掛け声と共に運動会は開催された。
既に何個か競技は終了しており、それぞれの陣営に点数が加算されていく。
それぞれの陣営が頑張っているが、なかでもカズキはかなり目立ってるな。
出場制限数ギリギリまで競技に参加している様で、同じ堕天使陣営の人たちに細かい指示を出している。
みなさんと顔馴染みなお陰もあってか連携も素晴らしく、一糸乱れぬ行動でどんどん

点数を稼いでいる。
ルールにギリギリ引っかからないグレーゾーンを攻めてくるのも恐ろしい。
そんなに映像媒体を渡したくないのか、あいつは。
俺も悪魔陣営に貢献する為に、今から【障害物競争】に参加する所だ。
どうも俺は一組目みたいだな。
一緒に走るのは各勢力から二名ずつの計六名で、天使の女の子に堕天使の男性に……げ、カズキまでいる。
あいつもこの競技に参加するのか、ちょっと離れてるから声を掛けられないが油断しないようにしよう！
疑問に思いつつも、俺は走りだす構えを取り……
『位置について、よーい……ドン！』
審判の掛け声と共に走り出す！
障害物は人間界の物と一緒で、平均台を渡り、ネットを潜り、それぞれ異なる球技のボールを手でついたり蹴ったりして突き進んで行った。
心配していたカズキからの妨害もなく順調に進んでいき、とうとう最後の障害物へと辿り着いた――――
「ギャオオオオンッ！」

「キュエエエエッ！」
「ゴワンゴワンッ！」
と思ったら、何故か恐ろしそうな怪物のオンパレードだった。
え、何これ？
『最後の障害物はモンスターの群れ！　危険極まるこの子たちから逃げるも良し、退けるも良し！　各自の判断で挑んで下さい！』
あまりの出来事に選手一同呆然としていると、なんとタンニーンのおっさんまで登場！
おっさんモンスター枠なのかよ!?
他の選手もモンスターに襲われて、阿鼻叫喚の地獄画図と化している！
そう言えばさっきからカズキの姿が見えな……あ！
あいつ並走してた悪魔側の選手をモンスター目掛けて投げ込んで、襲われてる隙に脇を通ってゴールしやがった！
き、汚ぇ！　つうか酷すぎる！
あいつには血も涙もないのか!?
くそ、俺も早くゴールに辿り着かないと！
でもおっさんが俺に狙いを定めてるから、上手く前に進めない！

ちょ、おっさんその威力のブレスは洒落にならな……！
ギャアアアアッ!?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
ふ、事前にモグラさんを通してモンスターくん達と話をつけておいた俺に隙はない。
全く狙われないのも怪しいから、一人生贄になって貰ったしこれで完璧だ。
その次に参加した『綱引き』でも俺の秘密のテコ入れにより堕天使陣営が勝利。
参加していた小猫ちゃんに疑わしい目を向けられたが、証拠はないので追及されても躱せるから問題ない。
この後も幾つかの競技を行い、俺たちは好成績を残していく。
他二つの陣営を離して単独トップだったのだが、『玉入れ』でバラキエルさんが暴挙に出た。
朱乃さんからの【父さま、助けて！】というラブコールにより、悪魔側に寝返ったのだ。
オマケにアザゼルさんはミカエルさんに昔の恥ずかしい厨二病を暴露されて役立たずに成り下がり、この競技では悪魔、天使両陣営に大きく差をつけられてしまった。
この玉入れは入れた個数がそのまま点数になるので、ぶっちゃけ既に崖っぷちである。

くそ、朱乃さんへの対策なんて考えてなかったっての！

後でバラキエルさんには『父親が活躍する事が、何よりも娘には誇らしい事なんだ』と洗の……ゲブンゲフン、よく言い聞かせておかないと。

とにかく、今は少しでも点を稼がねば！

堕天使陣営のみんなの頑張りにより少しづつではあるが、差は縮まっていく。

それでも玉入れの得点差は厳しく、未だ三位のままだ。

なんとか玉入れと同じく討伐数がそのままポイントになる『騎馬戦』までに、もう少し差を詰めておきたい所だ。

次は俺も出場する『借り物競争』か、この競技は学校の運動会でも出たな。

あの時はお題が【カワイイ女の子】で、小猫ちゃんを抱っこして一位だった。

まぁ今回はあんなイミフなお題はないだろ。

そして競技が始まり、俺の組が走る番になった。

同じ組に障害物競争の時と同じくイッセーがいるが、今は無視だ。

スタートの合図がなり、一斉に駆け出してお題の書かれたメモを手に取る。

そこに書かれていたのは【メガネっ娘＋ネコミミ】の文字。

これを書いた奴を思いっきり殴りたい衝動に駆られながらも、急いで探すが見つからない。

出来れば知り合いを避けたかったがそうも言っていられないので、小猫ちゃんとその近くにいた会長さんを両脇に抱えてゴールしたら何故か反則扱いにされた。
連れてくる物や人は一つじゃないといけないそうだ、ならルールに書いとけや！
審判に抗議している間に、サーゼクスさんを連れたイッセーに一位を奪われてしまったのが大変悔やまれる。
結局会長さんのメガネを小猫ちゃんに掛けることで妥協とし、なんとか二位になった。
それとゴールに連れてくる際急いだせいで変な所を触ったらしく、二人に怒られたのだが『ごめん、どこを触ったのか気付かなかったんだ！』という、今考えたらあんまりな言い訳をしてしまったせいで頬に綺麗なモミジを二つもこさえてしまった。
匙にも殴られ蹴られでボコボコにされた。
匙くんや、なんかいつもより強くなかったかね？
その後の競技でも朱乃さん、ゼノヴィア、ロスヴァイセさんが妨害工作をしまくってくれたお陰で、俺の考えたイカサマが事前に潰されるし散々だ。
俺のやり口知ってるせいで、敵に回すと面倒すぎるぞあの三人。
そしてとうとう運命の分かれ目である『騎馬戦』が始まろうとしている。
差は期待ほど縮まってはいないが、とにかくここで何とかポイントを荒稼ぎしてやる

！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

今日のカズキ先輩は何やら必死です。

何でも負けたらカズキ先輩の小さい頃の映像が流出するそうで、それを阻止する為に一生懸命みたい。

でも私とソーナ会長に失礼な事をした事は忘れません、後でまたお説教します。

モグさんも暫く私が独占します。

逆に朱乃さんやゼノヴィアさんは、その映像を見る為に頑張っています。

私も興味はあるので頑張っているけれど、何故カズキ先輩はそんなに嫌がっているのだろう？

確かに小さい頃の自分を見られるのは恥ずかしいかも知れないけど、カズキ先輩がグリゴリに来たのは十歳前後と言っていた。

その年齢ならそこまで酷い失態なんてそうそうしないだろう、しっかりしてるカズキ先輩なら尚の事だ。

もしかして何か秘密があるのかも……そんな事を考えている間に、騎馬戦が始まった。

何というか、各勢力やりたい放題でした。

みんな光やら魔力やらを手当たり次第に乱発して、まさに戦場そのもの。
そんな混戦の中でも、イッセー先輩はブレません。
敵勢力の女性騎手の身体にタッチしていき、セクハラ技『洋服破壊』で次々戦闘不能にしていきました。
私が騎馬の人にお願いして突っ込んでもらい、イッセー先輩を鉄拳制裁したのは間違っていないと思う。
そもそもあれじゃあ帽子も破いてしまうから、こちらの点数にならな――ッ！
「はい、小猫ちゃんの帽子頂き！」
イッセー先輩を仕留めて油断した瞬間、背後からカズキ先輩に帽子を奪われてしまった！
振り返ると、カズキ先輩の手には大量の帽子が確保されている。
「あの状況でよくそんなに集められましたね？」
「あの状況だからこそ、だよ。騎馬戦の必勝法なんて背後からの奇襲なんだから、やり合ってる連中を襲うのが一番だ。アザゼルさんがイッセー焚き付けてる間に、大分仕事が出来たよ」
カズキ先輩が指差す先を見ると、堕天使陣営の騎馬が大量に帽子を奪っているのに気が付いた。

何とも抜け目ない人だ。
そのまま終了の合図が入り、堕天使陣営の圧勝で騎馬戦の幕は閉じました。
「そんなに昔の映像を見られるのが嫌なんですか？」
いい機会だし、騎馬から降りて陣地に戻る時に聞いてみた。
カズキ先輩は少し動きを止めると、何とも言えない表情を見せる。
「ただの映像なら、まだ良いんだけどねぇ……」
先輩はそれだけ言うと、そそくさと去って行きました。
……どういう事だろう？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
フハハハハ！
快勝ッ！　圧勝ッ！　大爆笑ッ！
アザゼルさんが良い感じに場をかき乱してくれたおかげで、優勝にかなり近づいた！
卑怯だって？
バカめ、【卑怯汚いは弱者の戯言】という名言を知らんのか！
勝てばよかろうなのだぁッ！
これであの恥ずかしマル秘映像を処分出来る！
あそこに写っているのは十歳の俺ではなく、アザゼルさんの発明品の暴発により幼く

なった四～五歳の俺なのだ。
　しかも思いっきり甘ったれな性格になっていて、恥ずかしい事を平気で口走っている。
　あんなもんイッセーや朱乃さん達に見られたら、俺は間違いなく【恥ずか死】する。
　だがそんな心配とはこれでサヨナラだ！
　この最後のリレーで俺たち堕天使陣営が最下位にならない限り、俺たちの優勝は揺るぎはしないッ！
　これぞ完全勝利ッ！　明日からは安全な生活が俺を待ってい――――
『おーっと、ゴール前でアザゼル総督とおっぱいドラゴンが対決だーっ！　そしてその隙にガブリエルさまが横を通り抜けて今ゴール！　続いて総督の攻撃で吹っ飛ばされたおっぱいドラゴンがゴールを通った！　今回の三大勢力対抗大運動会、優勝は天使チームだーっ！』

……は？

十巻　学園祭のライオンハート

54話

本日、グレモリー眷属はサーゼクスさんの要請で冥界にて『おっぱいドラゴン』のショーに参加している。

今もステージの上では、禁手化したイッセーが敵役の着ぐるみ相手に大立ち回りの最中だ。

「行くぜ！　ドラゴンキック！」

「「「キ――――――ックッ！」」」

イッセーが掛け声と共に蹴りを放つと、会場の子供達も一緒になって叫ぶ。

小猫ちゃんや木場、そしてリアス先輩も劇中の衣装に身を包みそれぞれの役を演じている。

いいなぁ、みんな楽しそうだなぁ。

俺も向こうに行きたい、な〜ぁ!?

「修練サボって何をしとるんじゃ、お主は」

「ッ……ォオ!?　ベコンて、今頭がベコンって……！」

テレビっぽい機械に映し出されている映像を見ていると、頭部に凄まじい衝撃と痛みが走る。
頭を押さえ痛みで悶えている俺の背後には、呆れた様子のサル似の老人。
初代孫悟空さんは朱色の棍、如意棒を肩に引っ掛けながら美味そうにキセルを吹かしている。
「その程度で騒ぐでないわい、大袈裟な奴じゃのぅ」
「お願いだから手加減して!?　俺は美猴さんみたいに丈夫じゃないんだよ！」
「総督殿にきっちり鍛える様に頼まれたんじゃ、何事も半端はよくなかろ？」
俺が抗議するも、初代さんに何処吹く風と言った感じに流される。
そう、俺は今アザゼルさんに拉致されて初代さんの所でムリヤリ修行をさせられているのだ。
まぁ今はサボってイッセーたちのやってるショー観てたけど。
なんでも、リアス先輩と若手悪魔最強と謳われるサイラオーグさんとの試合が決まったそうだ。
その試合に向けて、イッセー達グレモリー眷属の皆さんは各々修行に明け暮れている。
本当なら俺は無関係だから呑気に過ごせていた筈なのに、アザゼルさんがついでだか

らと俺の事を初代さんに押し付けたせいで地獄を見る羽目に。

どうしてこうなった。

修行の間は家にも帰れないので、会長さんとやっている番組には俺の代わりにロスヴァイセさんが出演している。

ロスヴァイセさんの地元である北欧の料理はかなりの腕前だし、会長さんのフォローもあってなかなか好評だそうだ。

モグラさんは出演しないと視聴率に響くから今は別行動中で、小猫ちゃんが預かってくれている。

俺と離れているのが不満なのか、不貞腐れてて大変だと小猫ちゃんから連絡が来ている。

アザゼルさんは『いくら独立具現型の神器でも、普通はこんなに離れる事は出来ない筈なんだが……』としきりに不思議がっていた。

スコルとハティも寂しがってくれているようで、毎晩誰かしらの近くで寝ているそうだ。

「早く帰りたいなら修練をサボるでない。ホレ、座禅の続きじゃ」

初代さんに促され、大きく平らな岩の上に座らされる。

姿勢を正してから目を閉じ、意識を身体の内へ内へと集中するとヘソの辺りが熱く

なってくる。
　これが闘気って奴らしい。
　最初はこの感覚を便意かと思い、素直に尋ねたら如意棒でシバかれたのは記憶に新しい。
「お主はなんとなくで闘気を使っとるから練りが甘いんじゃ、感覚でやってる事を頭できっちり理解せぃ。それからあの『なんちゃって仙術』は論外じゃ、一から鍛え直すぞぃ」
　初代さんが横で何やら恐ろしい事を言ってくる。
　あぁ、にしても何時になったら俺はこの拷問から解放されるのか。

　修行という名の拷問を続けて数日。
　今日も今日とて初代さんにシゴかれつつ、リアス先輩とサイラオーグさんの記者会見の映像を拝見中。
　地面に打ち付けられた四本の杭に手足を乗せ、背中に特大の重石を乗せながら腕立て。

普段ならキツくて泣きたくなるのだが、これが最近では一番優しい修行だったりする。

玉龍さんとの鬼ごっこ（命懸け）や上空からの紐なしバンジー（身体は縄でぐるぐる巻き）に比べれば、こうしてリアス先輩たちの記者会見を見ながら行なえるなんて天国ってもんです。

……あれ、なんか涙が出てきた。

にしても酷い記者会見だな、なんだよ乳を吸ってパワーアップって。

サイラオーグさんは笑ってるけど、リアス先輩の顔を真っ赤にして手で覆ってるし。

朱乃さんなんか耐え切れずに噴き出してるぞ、他のみんなも呆れ顔だ。

「今代の赤龍帝は、本当に変わり種じゃのぅ」

俺の背中に乗せている岩の上で、キセルを吹かしている初代さんが楽しそうに呟く。

そりゃイッセーみたいのがたくさんいたら、世の中大変な事になるよ。

「歴代の赤龍帝は力に溺れる連中ばかりじゃったが、この坊やは自分の内と向き合い成長しとる。この手の者は伸びる、まぁそれはバアルの倅にも言えるがの」

「バアル、ってサイラオーグさんの事？　あの人が弱かったら俺なんてミジンコ以下じゃん」

そりゃこの人から見たら、どいつもこいつも弱っちく見えるんだろうけども。

「バアル家が本来宿している滅びの魔力。それをあの坊やは授からずに産まれ、今まで生きてきた。己が弱さを受け入れ、なお前を向き続けたあの坊やはこれからも強くなり続けていくだろうよぃ」

はぁ～、よく分かんないけどなんか凄いってのはわかった。

まぁ俺は強くなるよりも自堕落に過ごしてたいけどな！

あぁ、早くモグラさんやスコルたちに会いたい。

そんでもって思う存分モフモフしたい。

「だから集中せいと言っとろうが、座禅の後は儂との組手じゃ」

ひぎぃ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「……それであの方はいらっしゃらなかったのですね」

俺の説明に彼女、レイヴェル・フェニックスは納得する様に頷く。

レイヴェルがここにいるのは、人間界での生活を通して色々な事を学ぶ為。

今は俺の家に下宿していて、俺たちの通う学校に転入してきた。

ライザーの妹とは思えない勤勉振りで、小猫ちゃんとチマチマやり合いながらも学校生活において色々と頑張っているらしい。

にしても初代孫悟空の元で修行、今更ながら随分と豪勢な話だ。

カズキが帰ってきたら、また一段と強くなってるのかな？
俺も負けてられないな！
「アザゼル先生はそのうち戻ってくるって言ってたけど、カズキになにか用でもあったのか？」
「いえ、いないのでしたら構いませんわ。兄の件ではイッセーさま同様あの方にもお世話になったので、改めて御礼をと思っただけですので」
あぁ、ライザーの件か。
あいつも無事に脱引きこもりを果たして、身体を鍛えだしたりと再出発に向けて順調に歩き出しているらしい。
でもあの時の事を思い出そうとすると、何故か頭が痛くなるんだよな。
ライザーが連絡してきた時にその事を聞いても言葉を濁すし、何でだろ？
「カズキ先輩は忙しいから、焼き鳥姫の相手をする暇なんてないです」
「何ですって、この猫又娘！」
カズキから預かっているモグさんを頭に乗せながらツッコミを入れる小猫ちゃんと、気炎を吐きながら小猫ちゃんに詰め寄るレイヴェル。
最初は心配したけど、朱乃さん曰く上手くやっているから問題ないそうだ。
喧嘩してもモグさんが間に立つと、二人してデレデレになるし。

なんだかんだで転校に不慣れなレイヴェルを助けているそうだし、喧嘩するほど仲が良いって奴なのかな。

「えっと今度はテレビ局の方に電話で説明を……うぅ、カズキくんは何時になったら帰って来てくれるんでしょうか……」

「ロスヴァイセさんは大変そうだな。私も何か手伝いたいが、料理ではあまり力になれないのがもどかしい」

「私もリアスの《女王》としてやる事があるので……断っても、きっとカズキくんなら許してくれると思いますわよ？」

電話を片手に唸るロスヴァイセさんに、ゼノヴィアと朱乃さんが語りかける。

カズキがソーナ会長とやっている料理番組があるんだが、修行で来れないカズキに代わって今は眷属であるロスヴァイセさんが出演している。

まだ数回しか出演していないのにファンが付く程人気で、カズキが戻ってきても引き続き出演するかもしれないそうだ。

「いえ、まだまだやれます！　この間の様にどこに行ったかわからないという訳ではないですし、期待には応えなければ！」

ロスヴァイセさんは気遣ってくれたゼノヴィアたちに笑顔を見せながら握り拳をかざす。

実はつい最近まで、カズキは行方不明になっていた。
というか、俺たちの前から逃亡していたのだ。
先日の運動会の景品として、イリナに渡されたカズキの小さい頃の映像。
それを見たオカ研&生徒会の女性陣、主に朱乃さんとゼノヴィアがカズキをからかい、拗ねたカズキが
『モラハラに耐えられないので家出します。探さないで下さい。　ＰＳ―謝るなら今のうちだかんな！』
という書き置きを残しスコルたちを連れて家出してしまったのだ。
その際グレモリーとシトリー両眷属が総出で捜索し、グレイフィアさんからグレモリー領の田舎町で目撃情報が入ったと連絡を受けた。
その町に急行すると、カズキは町で暴れていたドラゴン（邪竜って奴らしい）や怪物を腹いせにぶちのめしていた。
そりゃもう執拗に全身くまなく滅多打ちにされており、不憫にすら思える程の惨状だ。
暴れていた連中を捕縛した後みんなでカズキに謝罪し、映像データもカズキの目の前で破棄する事で和解した。
特にロスヴァイセさんは、カズキを見つけるなり即謝罪しながら抱き着いていた。

この人は別段カズキをからかったりはしていなかったが、置いて行かれたのがかなりショックだった様だ。
オーディンの爺さんに置いて行かれたのがが、軽くトラウマになってるのかも知れない。
あまりの必死さに、謝罪されているカズキの方が慌てて土下座しだした程だ。
ソーナ会長もフォローしてくれてるみたいだし、ロスヴァイセさんも結構しっかりしてるから大丈夫だろう。
他にも色々と悩みはあるけど、今一番困っている事がある。
最近、部長の様子がおかしいのだ。
普段はいつも通りなんだけど、時折何かを思いつめている様な……何なんだろう？

55話

苦しい修行という名の虐待の日々もようやく終わり、晴れて人間界へと生還を果たした俺。

帰るのが決定した前日には、玉龍さんから『もう来んな』という暖かい言葉を受けた。

お礼として大層自慢してきた立派な髭を寝ている間に左右とも三つ編みにした後、簡単に解けないようにグリゴリ特性接着剤でガッチガチに固めてあげた。

初代さんに挨拶した後、反応を確認せずに逃げ……もとい帰ってきてしまったが、きっと喜んでくれていることだろう。

そんなこんなで無事自宅に転送されたのだが、そこにいたのはスコルとハティのみ。

あれ、他のみんなは？

俺が首を傾げていると、二匹は突然現れた俺に気付いて一声吠え、嬉しそうに尻尾をブンブンと振りながら擦り寄ってきてくれる。

うは、めちゃくちゃかわゆい。

二匹を思う存分モフモフ撫で回しながらよくよく時計を見てみると、学校が終わってから時間があまり経っていない。

この時間ならまだ部活中か、待っているのもなんだしスコルたちの散歩がてら顔を出しに行くかな。

「よしスコル、ハティ。散歩に行くぞ！」

『ウォフッ！』

俺の言葉に待ってましたと言わんばかりに二匹は駆け出し、その口にリードを咥えて持って来る。

それを受け取り首輪に取り付け、玄関に常備しているお散歩セットを手に取って家を出た。

さて、みんなは何してるのかね？

はい、修羅場ってました。

旧校舎に辿り着き部室の扉を開けようと手を伸ばした瞬間、勢いよく扉が開け放たれる。

当然そんな事を俺が察知出来るわけもなく、扉は顔面にクリーンヒット。

突然の衝撃の後痛みに悶える俺に見えたのは、一瞬こちらを申し訳なさそうに見つめた後そのまま走って行ってしまったリアス先輩と、その後を追いかけて行くアーシア

ちゃん。
そしてその後ろ姿を困惑した表情で見つめているイッセーに、突然の出来事に部室の中で固まっているオカ研メンバーたち。
痛みで麻痺した思考も働き出し、状況をなんとなく理解した。
これが噂に聞く修羅場か、と。
帰ってきたばかりの俺に、少しばかり厳しすぎやしないかね？
うつ伏せで地面に横たわりながらも顔だけ前に向けると、スコルとハティは俺を心配して顔を舐め回し、俺の存在に気付いたモグラさんも駆け寄り倒れ伏している俺の鼻目掛けて突撃してきた。
うん、心配してくれてありがとう。
でもね？
スコルたちの唾液で顔がすごい事になってるし、モグラさんは俺の鼻に突撃してトドメを刺さないで。
ただでさえ残念なお顔が、鼻が潰されて更に惨めな事になっちゃうから。
他の面々が俺の存在に気付いたのは、それから暫く経ってからの事だった。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「で、何がどうしてこうなった？」

朱乃さんに魔術で作って貰った氷嚢を鼻に当てながらカズキはソファーに座り、近くにいた木場に尋ねている。
その間、俺はずっと部長の事を考えていた。
俺がレイヴェルの母親と会話してから様子が変わって、部長の質問に答えて……そして、泣きながら走り去ってしまった。
追いかけようにも朱乃さんに『余計に傷付けるだけだ』と言われてしまい、それも出来ない。
みんなの反応からも、俺がマズイ事をしたのはわかってる。
でも、何がそんなに悪かったのかがわからないんだ。
俺がバカだから、気付かないうちに部長を傷付けていたのか？
俺が部長の心中を理解していなかったせいで、こんな事になってしまった。
俺は一体どうすれば……。
俺の考えが纏まるよりも前に、カズキへの木場の説明が終わった。
木場からいきさつを聞いた後にカズキから出た感想は、たった一言。
「え、いまさら？」
……は？
いや、いまさらってどういう――

「あんだけ露骨にアピールされてて、未だにリアス先輩とくっついてなかったの？」
「普段がっついてる癖に、その実ヘタレかお前は」
「そらいまさらそんな事言われたら、リアス先輩もキレるわ」
俺が混乱してる間にも、カズキは矢継ぎ早にどんどん言葉を発していく。
何だ、何を言ってるんだこいつは。
お前の言い分じゃまるで――
「部長は俺の事が……好き、なのか……？」
「……え、そこ？　そこからなの？」
俺の絞り出した言葉に、カズキが呆れたように呟く。
俺だって、その可能性を全く考えなかった訳じゃない。
いくら部長が眷属想いの優しい人でも、俺の扱いは木場やギャスパーとは違いすぎるとは思っていた。
でもそんなもの、俺が都合良く勘違いしてるだけだと思っていた。
でももし間違えていたら、今の心地よい関係は終わってしまう。
そもそも、部長みたいなすごい人が俺の事を好きになるなんて。
そうだ、勘違いしちゃいけない。
そこで勘違いをしたら、これ以上を望んだら全てが終わって――

「まぁ初めての彼女が『アレ』だったからな、お前が尻込みするのもわかるけど」
俺の、初めての彼女。
夕麻ちゃん、堕天使のレイナーレ。
あいつの事を思い出した瞬間、嫌な汗と共に一気に色んな場面が頭を駆け巡った。
気軽に話しかけるなと言われた。
無い頭を必死に捻って考えたデートも、とてもつまらないと言われた。
名前を、呼ぶなと言われた。
俺なんかが、美少女のみんなと話してていのか。
俺なんかと買い物をしていても、みんな本当はつまらないんじゃないか。
部長の名前を呼んだら、拒絶されるんじゃないか。
……あぁ、そうか。
俺、怖いんだ。
女の子と仲良くなる事が。
今より仲良くしようとして、拒絶されるのが。
あれだけハーレムを作ると息巻いておいて、その実女の子と仲良くなる勇気もないなんてな。
情けないと言われてもいい。

あんな想い、もう二度と味わいたくない！

だったら……！

「自分に自信がなくてもさ、お前を想ってくれてる人くらい信じてやれよ」

「……え？」

カズキの言葉に俯いていた顔を上げる。

カズキは呆れ顔のまま、扉の方を指差す。

そこには部長を追いかけていった筈のアーシアがおり、ゆっくりと俺の所に歩いてくる。

「アーシア、部長のところに行ったんじゃ……」

「朱乃さんがいらして、リアスお姉さまと一緒にいて下さってます。そしてここに来るようにと、今のイッセーさんには、私の言葉が必要だと」

いつの間に……もしかして、カズキが朱乃さんにお願いしてくれたのか。

こんな時だが、カズキのドヤ顔が神経を逆撫でる。

まぁ、今はそんな事はどうでもいい。

アーシアは目の前まで来ると俺の手を取り、両手で包みながら笑顔を向けてくれる。

「私は――イッセーさんのことが、大好きですよ」

「……え？」

「ずっと一緒にいたいです。バカになんて出来ませんし、する訳もありません。尊敬してますし、私が慕っている一番頼れる男性です」

アーシアの言葉に呆けている俺に、アーシアは抱擁しながら諭すように語り掛けてくれた。

「この先ずっと遠い未来でも、私はイッセーさんと一緒にいます。ですから自分なんかなんて寂しい事、言わないで下さい」

アーシアの言葉で、俺は気付かされた。

アーシアは俺のすぐそばで、こんなにも俺の事を見てくれていたのだと。

守っていたと思っていたアーシアに、俺は護られていたんだと。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「スゲー。俺のありがたみのない説教が、アーシアちゃんの清い精神（ココロ）で全てなかった事にされてしまった。アーシアちゃんマジ天使」

アーシアちゃんの心からの説得に、イッセーとアーシアちゃんはお互い抱き合いながら涙を流した。

その光景を見てレイヴェルちゃんはどこかホッとした様な表情を浮かべ、イリナさんもハンカチを目に当てつつ二人を丸ごと抱き締めている。

ええ話やねぇ、感動的だわ。

「で、でも！　僕は今のセンパイの言葉、シンプルだけどカッコよかったと思います！　カンドーしました！」

ギャスパーくんが両拳を顎の下あたりで握り込み、上目遣いで褒め称えてくれる。

あざといポーズを使いこなしているな、でも嬉しいから頭を撫でておこう。

あまり深く考えてなかったのは秘密だ。

「そうだね、僕もいい言葉だったと思うよ。でも今はそれより、君を待っていた人たちと話すといいんじゃないかな？」

木場はそう言いながら、ある一点を指差す。

その先にはゼノヴィアとロスヴァイセさん、そして俺にモグラさんを奪われたからか若干ご機嫌ナナメの小猫ちゃんの姿が。

「戻ってきて早々大変だったな。だがお陰で助かったよ、流石私のカズキだな！」

修学旅行の最後にも言ってたが、いつ俺がお前のになったよ。

「お帰りなさい先輩。モグさん少し寂しそうでしたけど、元気にしてました」

ありがとう小猫ちゃん、君だけがこの部活の良心だ。

でも君はイッセーの所に行かなくていいの？

「修行お疲れ様でしたカズキくん。さっそくですけど仕事の件でお話が……！」

おおう、なんかロスヴァイセさんが凄い必死だ。

やっぱ仕事押し付けてたのは悪かったよな、今度なにか埋め合わせしないと。
「まぁ、修行も無理矢理終わらせてきたんですけど……っと、見つけてくれたみたいだな」
みんなと話していると開けっ放しだった部室の扉から、スコルとハティが元気よく飛び込んで来て俺目掛けて突撃してきた。
どうやら俺のお願い通り、朱乃さんとリアス先輩を見つけてきてくれたらしい。
今はアーシアちゃんに聞ける雰囲気じゃないしね。
ちなみにモグラさんは久しぶりの俺の頭上を堪能中で、さっきから俺の頭から動こうとしない。
カワイイ奴め、俺も後で存分にモフらせて貰おう。
とにかく今はあの二人の所に行かなくちゃね。
「取り敢えず、俺は挨拶ついでに二人の所に行って来るわ」
「あぁ、部長たちにも挨拶して来るといい。朱乃さんもきっと喜ぶ」
スコルたちに促されてソファーから立ち上がると、ゼノヴィアが頷きながら俺を送り出す。
まぁそれも大切なんだけどね、俺の目的は別にある。
いや、あっただな。

流石に今の状態のリアス先輩にこんな話をしても、話し合いにならないと思うし。
「朱乃さんもだけど、本当はリアス先輩に用事があったんだよ」
「リアスさんに？　一体どんな要件なんですか？」
ロスヴァイセさんも気になった様で、不思議そうに尋ねてくる。
そんな大層な事じゃないんだけどなぁ。
「いえね、今度やるサイラオーグさんとの試合で少し提案があってさ。その相談をしようと思ってたんだよ」
「相談、ですか？」
「またカズキ先輩が悪知恵を働かせようとしてる……」
俺がそう言うとギャスパーくんは小首を傾げ、小猫ちゃんからはジト目を頂いた。
決め付けは良くないよ小猫ちゃん、こんなのいいトコ浅知恵だから。
「別に作戦って程でもないんだけどね。お互い駒は揃ってないし、まだ細かいルールもわかってない。そんな状況でも用意できる、ちょっとした『隠し玉』の提案だよ」

５６話

オカ研部室での騒動から数日経ち、今日はサイラオーグさんとのゲーム当日。
俺たちはリアス先輩たちのゲームが行われる冥界の都市、アグアレスへ訪れていた。
なんとこの都市、謎のステキ技術により空に浮かぶ島の上に造られている。
島の端から流れ落ちる数々の滝がなんとも幻想的で、今まで冥界で見た何よりもファンタジーに溢れていた。
日本のサブカルチャーに詳しい小猫ちゃんと一緒に『バ○ス』と唱えた俺を、一体誰が責められようか。
今はその都市に入る為、ゴンドラに乗って移動中だ。
今回はサーゼクスさんの許可を得て、スコルとハティも一緒にきている。
「いやぁ冥界にいい思い出ってなかったけど、これは凄い。素直に感動したわ、満足したからもう帰ってもいいくらい」
「お前は一体何しに来たんだよ……」
「え、観光じゃないの？」
「俺らの試合の応援に来たんだろうが！」

そういやそんな目的もあったね、思いっきり忘れてたわ。
イッセーが俺に吠えてくるのをスルーして子犬状態のスコルたちを抱えたまま、再びゴンドラからの景色を堪能する。
他の面々もそれぞれ楽しんでいて、イッセーとリアス先輩もそこまで気まずくはないようだ。
朱乃さんから聞いたんだが、俺がリアス先輩と話した後に女性陣が総出で慰めてあげたらしい。
そのお陰で多少ギクシャクしてこそいるが、ゲームに支障はないだろう。
話の流れで俺まで責められたのはイマイチ納得いかなかったけど。
俺がそんな事を考えながら景色を眺めている間、アザゼルさんが試合が決まるまでの経緯なんかを話していたらしいが、話が長い上に興味がないので殆ど覚えてない。
思えばこの時、ちゃんと話を聞いておけばあんな面倒には巻き込まれなかったかもしれない。

絶景が望めるゴンドラも遂に終点へと到着。

ゴンドラから降りるとそこには、応援やらマスコミやらの人たちでごった返していた。
これみんな、リアス先輩たちを見に来てんのか？
人気っぷりがヤバいな、ヘタな芸能人より凄いんでない？
魔王の妹なのに加えて、イッセーも冥界では大人気だからな。
おまけに美男美女だらけのグレモリー眷属は何かと話題になりやすいって、アザゼルさんが言ってたっけ。
まぁ今日の俺には関係ないし、用意してあるって言ってたリムジンにさっさと乗り込

「あ、モグラさんだ！　て事は、この人が『グランモール』!?」
人混みの中にいたお父さんだろう男性にに肩車された女の子が、目をキラキラさせながら大きな声と共に俺、というか頭の上にいるモグラさんを指差した。
それに反応して、人混みの何割かが俺目掛けて雪崩れ込んできた！
「本当だ！　あの、いつも番組見てます！　握手して下さい！」
「本日はリアス・グレモリー様のゲーム観戦ですか!?　ソーナ・シトリーさまは一緒にいらっしゃらないんですか!?　」
「キャー！　生モグちゃん、かわいい！　握手して～っ！」

「脇に抱えてるワンちゃんは新しいペットですか!?　番組に出演の予定は!?」
「う、うおぉぉッ!?」
なんだこの圧力!?
こ、怖い！
人の波が押し寄せてくるぅ!?
あ、俺が襲われてる間にイッセーたちがリムジンに乗り込んでる！
ちょ、あいつら俺を置いてく気か!?
がぁぁ！　いい顔して手ぇ振ってんじゃねぇよ！
アザゼルさんのドヤ顔がマジでうぜぇぇッ！
うわ、マジで行っちまいやがった!?
この騒ぎ、俺一人でどうしろと……！
「みなさん落ち着いてください！　質問にはお答えしますので、どうか一人ずつゆっくりとお願いします！」
頭にモグラさん、両手にスコルたちを抱えたまま困惑していると、後ろからロスヴァイセさんが声を張り上げてくれた。
この場に残っていたスタッフの人たちの手伝いもあり、なんとか落ち着いていく現場。

その間にもスタッフさんたちに的確に指示を飛ばしていくロスヴァイセさん、マジカッケェ。

「リアスさんたちの会場入りが遅れるわけにはいきませんから、ここは私たちが受け持ちましょう。アザゼル総督には連絡済みですから、会場に向かうのは一段落着いてからですね」

「あ、どうせならそこら辺見て回ってから行こう！　お祭り騒ぎのお陰で出店もあるし、二人で歩いて回るだけでも結構楽しそう」

状況説明してくれるロスヴァイセさんに、そんな提案をしてみる。

応援ももちろん大切なんだけど、そこら中からいい匂いを漂わせてくる出店にも興味津々なのだ。

何やら色々と出し物もあるみたいだし、滅多にない機会だからどうせなら自由に動き回りたい。

まぁロスヴァイセさんは真面目だから、この提案に乗ってくるかは正直望み薄なんだけど。

そう思い顔色を疑うと、何やら顔を赤くしていらっしゃる。

オウフ、これは怒らせてしまったか？

（二人で……これはつまり……デートの、お誘い……!?）

「……あの、ダメだったら別に――」
「いえ、ダメじゃないです！　是非デー……ゲフンゲフン、一緒に見て回りましょうそうしましょう！」
「お、おぉう……」
なんか凄い喰い気味に返事をしてきた。
なんか必死で少し怖いけど、ロスヴァイセさんもお祭り好きなのかね？
まぁ許可が下りたならそれでいい。
この場を速やかに収束させて、早々に祭りへ繰り出そうじゃないか！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
試合の行われる会場、『アグレアス・ドーム』の横にある高級ホテルに無事到着した俺たち。
試合が行われるのはナイター、つまり夜だ。
今はそれぞれの陣営に与えられた控え室で、ゲームに向けて各々が準備をしている。
到着した矢先ハデスの骸骨ジジイと出くわしたのは予想外だったが、あの場にカズキがいなくて助かったぜ。
あのバカが堕天使になってミョルニルを取り込んでからコッチ、色んな勢力からカズキについての資料を請求されてるからな。

あんな面倒な奴、会わないに越した事はねぇ。
「う～ん、本当にカズキをあそこに置いてきて大丈夫だったのかな？」
木場と一緒に身体をほぐしているイッセーが、そんな事を呟く。
他の連中も気になっていたのか、今やっていた作業を止めてしまう。
あそこは人通りの多い場所だし、ロスヴァイセも付いてる。
それに今日に限っては『アイツ』も来てるからな。
最近はそうでもないが、カズキに関しては基本過保護だしなんかありゃ助けるだろ。
「ロスヴァイセだって付いてんだ、心配ねーよ。それよか自分たちの試合の事に集中しろ、相手は若手最強と名高いあのサイラオーグ・バアルだぞ」
「……そうね。せっかくカズキくんが時間を作ってくれたのだから、私たちも万全の態勢で臨みましょう」
『はいッ！』
主であるリアスと俺の言葉を受け、改めて気合を入れ直す。
へっ、やる気満々ってツラだな。
試合じゃあ俺も解説席に座る予定なんだ、ツマンネェ試合にはしてくれるなよ？
まぁどうせイッセーがまた訳のわかんねぇ事をして、楽しませてくれるんだろうがな。

そしてイッセーの他にも、楽しみなのはもう一つ。
カズキが勿体振りやがって俺には話さなかった『隠し球』。
はてさて、一体どんな突飛な事をしてくれるのやら……。
お前の授けた策って奴がどんなもんか、拝見させて貰おうじゃねぇか。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
カズキくんは、とにかく凄い人だと思う。
今でこそ堕天使になっているが、人間なのに冥界で活躍していたり、堕天使の幹部を倒したり、魔王さまとお友達だったり。
果てには神の一柱であるロキまで打倒せしめた。
オマケに今リードを繋いで一緒に歩いているのは、神さえ殺せる牙を持つフェンリルの子供だ。
本来なら、伝説や英雄になっていてもなんら可笑しくない凄まじい活躍をしている。
そう、そんなすごい人なのに。
「ウッヒャッヒャ！　大量じゃーッ！」
今は、出店の射的で大はしゃぎしている。
『角を狙うのが基本』と言いながら、両手にコルク銃を構えて次々に景品を落としていく。

周りにはその腕前に感心した一般客たちが集まっており、ちょっとした騒ぎになっている。

折角途中までは二人で色んな出店を回れて、半分ずつ食べ物を食べたりとデートみたいだと思っていたのに……。

もう！

こんなに騒ぎを起こしたら、ゴンドラ乗り場と同じ騒ぎになっちゃうじゃないですか！

「おうにいちゃん、そろそろ勘弁してくれねぇか？　このままじゃ景品が全部なくなっちまうぜ」

とうとう店主から待ったの声が掛かる。

まぁ確かにあれだけ景品を取って行かれたら、商売上がったりでしょうね。

しかしカズキくんは笑顔を浮かべながら、撃つのを止めようとしない。

「まぁまぁおっちゃん、小さい事言うなよ。どうせ大物は取れないように細工してんだろ？」

カズキくんの言葉にその場の空気が凍る。

店主の方も、明らかに目付きと声色を変えてきた。

これは……？

「……にいちゃん、言い掛かりはよしてくんな。現にお前さんは、そんなに大量に取れてるじゃ――――」

「景品が乗ってる台、高価な物が乗ってる所だけ少し分厚くない？　台の中に磁石が入ってるとああなるらしいね。オマケにこの銃、銃身が曲がってる上に引き金のバネまでいじっちゃってまぁ、手の込んでるこって」

「う、ぐ……」

「バカめ、この程度の細工で俺を誤魔化せると思うなよ？　いつか行ってみたいと憧れ続けた夏祭り、その中でも特に心惹かれた射的に関しての不正は見逃さん！　伊達に一人寂しくイメトレなんかしてないぜ！」

うん、なんだかカッコいいのか悪いのか分からなくなるセリフです。

カズキくんは銃を肩に引っ掛けながら喋り続ける。

あそこが可笑しい、ここが怪しい。

カズキくんの言葉の無駄な説得力で次第に周りの一般客の方達も怪しみ始め、段々と店主が追い詰められていく。

最後には誰かが係員に通報したらしく、何処かへと連行されてしまった。

「ふん、折角の祭りでアホな真似しやがって。よしちびっ子ども、一列に並べ。どうせ持ち帰れないから、俺が獲ったこの店の景品を一つずつくれてやろう」

カズキくんはそう言うと、近くにいた子供達にぬいぐるみやオモチャなどの景品を配り始めた。
お礼を言った子供の頭を笑顔で撫でているのを見て、なんだか嬉しくなった。
こういう所も、彼の凄い所なんですよね。
ヴァルハラの花形、安定職であるヴァルキリー。
それも主神の護衛役という大役を担っていたが、それに未練はない。
あの時は家に帰っても誰もいなかったが、今では『おかえり』と声を掛けてくれる人たちがいる。
実家を出てから感じられなかった、暖かさを感じられる。
私はきっと今、とても幸せなんだと思う。

「あ、オーディンさんが見た事ない美人さん連れて歩いてる」
「カズキくん、今こそ約束の時です！　あの腐れジジイに天誅を下す手助けを！」

なんですその隣にいるヴァルキリーは！
私はちゃんとヴァルハラに連絡を入れたというのに、そっちは連絡一つ寄越さずソレですか!?
ここであったが百年目、簡単に許すと思わないで下さい！
私とカズキくんの連携、とくと味わうがいいです！

５７話

「いやぁ、堪能した！　お祭りって奴はサイコーだね！」
この付近をあらかた回った後、公園近くにあったベンチに座りながら一休み。
モグラさんは綿菓子の海に埋もれて夢見心地だし、スコルたちは射的の景品である骨っぽい犬のおやつに夢中だ。
しかしモグラさんよ、頭がベトベトで凄い事になるからいい加減俺の頭の上でお菓子を食わないでくれないか？
公園の水道で頭を洗った後、出店で買ったジュースを一気にあおる。
ハシャぎすぎて渇いた身体に染み込み、なんとも言えないくらい気持ちいい。
「ふふ、全力で楽しんでましたもんね。満足出来ましたか？」
そんな俺を見て、ロスヴァイセさんは微笑んでいる。
あ、マズい。
自分が楽しむばかりで、ロスヴァイセさんにあまり気を回してなかった。
「その、ごめんロスヴァイセさん。何も考えずにハシャぎすぎた、反省してます」
「いえ、私も楽しかったですよ？　胸に支えていた物もようやくスッキリしましたし」

おかしいな、ロスヴァイセさんはすごい笑顔の筈なのに。
ロスヴァイセさんから、黒い何かが滲み出てる気がする。
まぁあんだけ派手に魔法をぶっ放せば、そりゃスッキリもするよね。
偶然発見したオーディンさんはこちらに気付くと素早く踵を返し逃げ出そうとしたのだが、それよりも俺たち、というかロスヴァイセさんの行動が速かった。
取り敢えず俺は周囲に被害を出さないように、逃げるオーディンさんを力尽くで上空に投げ捨て。
そこにロスヴァイセさんが、自身が知る限りのありったけの魔法をぶち込んだ。
文字に起こせばこれだけの事なのだが、間近で見てた俺からすればその光景は恐ろしすぎた。
頭上いっぱいに広がる魔法陣と、そこから伸びていく光の帯の数々。
そして着弾と同時に鳴り響く、豪快な音と光。
周りの人たちは『派手な花火だなぁ』程度の認識だったのは、幸いだったと言っていいと思う。
……やりすぎじゃね？
というか、約束は『一発殴る』じゃなかったっけ？
スコルたちが遊んでいると勘違いして、俺が放り投げたオーディンさんを咥えて持っ

てきたのには笑ったけども。
まぁ腐っても主神だけあって大半はレジストされたが、一～二発は顔面に直撃したらしく髭を僅かに焦がしていた。
直撃してもその程度なのか、主神パネェ。
大したダメージは与えられなかった物の、ロスヴァイセさんも多少はスッキリした様でオーディンさんからの謝罪を受け入れていた。
素直に謝るなら初めから逃げずにいればいいのにとも思ったが、あの形相のロスヴァイセさんに遭遇して逃げるなという方が酷か。
ちなみにその間、護衛のヴァルキリーさんは我関せずを決め込んでいた。
このヴァルキリーさんはロスヴァイセさんの顔見知りでこそなかったが、その経緯は知っていたらしくセクハラ被害を受けていた事もあり完全にこちら側。
『オーディンさまは危害なんて加えられていないし、私は今日ロスヴァイセさんに会っていない』との事だ。
オーディンさんを縄で縛り上げて渡してあげると、その背中をグリグリ踏みつけつつお礼を言ってきた。
この人も相当ストレス溜まってるんだろうなぁ。
その行為を喜んでいるオーディンさんを見て、直ぐに脚を退けてたけども。

ホントに懲りない爺さんだ。

「日も暮れてきましたし、そろそろみなさんと合流しますか？」

「そうしよっか。遊んでて応援遅れましたなんて言ったら、朱乃さんとゼノヴィアに全身の関節を逆に曲げられちゃう」

冗談の様であまり冗談になってない事を言いながら、俺たちはベンチから立ち上がる。

今は夕方だから、ゲームが始まるまであと二～三時間ってところか。

それじゃあ激励ついでに冷やかしにでも――

「んお？　ありゃあ、カズキじゃねぇかい？」

「あらホント。それも美人さんと一緒、美猴の義弟くんもなかなかヤるニャア♪」

ゲーム会場に向かおうとしたその時、少し離れた人混みから聞き慣れた声が近付いてきた。

そちらに振り向くと、口にトウモロコシっぽい黄色い野菜を咥えつつ焼きそばを手にしている美猴さんと、りんご飴をやたらと意味深に舐めあげている小猫ちゃんのお姉さんの黒歌さん。

ロスヴァイセさんは二人に気付くと俺を庇うように前に立とうとしたが、手で制して

やんわりと止めておく。
俺らに何かやらかす気なら、声掛けずに襲撃してるだろうし大丈夫だろ。
つーかテロリストが何でこんなトコでお祭り満喫してんだよ。
いやむしろテロリストだからこそ、こういうタイミングで何かやらかすもんなのかね？
「相変わらずのエロリストですね、チョコバナナじゃないだけまだマシと考えよう」
「フフン♪　そんな事言って、ホントはお姉さんの色香にドギマギしちゃったんじゃないかニャン？　ホラホラ、私が舐めてたこのりんご飴も実は舐めたいんじゃニャい？」
「……ハッ」
「鼻で笑いやがったニャ!?」
俺に掴み掛かろうと暴れる黒歌さんを、後ろから美猴さんが羽交い締めにして止めている。
この二人も仲良いなぁ。
黒歌さんが持ってたりんご飴は一口で全部噛み砕いてやりました、ザマァ。

黒歌さんが落ち着いてから、美猴さんから簡単にここにいる経緯を教えてくれた。
なんでもサイラオーグさんとリアス先輩のゲームの観戦に集まる各界のお偉いさんを対象に、『禍の団』の連中がテロを画策しているらしい。
イッセーとサイラオーグさんが戦うのを楽しみにしてるヴァーリさんは、試合を妨害されないように美猴さんたちと一緒に襲撃してくる連中の牽制をしているそうだ。
「ヴァーリとアーサー兄妹は外、俺っちたちは中の様子を見て回ってたって訳だぜぃ」
「決して飽きてきたからサボってた訳じゃないのよん？」
語るに落ちてるじゃねぇかこの駄猫さんめ。
まぁそんな事はどうでもいい。
「なんで俺までそっちを手伝わなきゃならんのよ」
「どうせお前さん、グレモリー眷属じゃないんだから暇だろ？　だったらこっちを手伝いな」
「拒否しま、うおぁ!?」
逃げようとしたら美猴さんに問答無用で担がれた上に、黒歌さんが口になんか貼り付けてきた!?
うおぉ、喋れない上になんかの術で身体も動かん!?
「つー訳でこいつは借りてくぜぃ？　不安ならお前さんも一緒に行くかい？」

嫌だ、俺はそんな危なそうな所に行きたくない！
ロスヴァイセさん助けて!?
「行きたいのは山々ですが……私にはやらなければならない事があるので。カズキくんもそれを望んでいる筈です」
望んでないよ!?
確かにゲーム開始前に会場入りして貰わないと困るけど、俺の事も連れてって！
「事前に言伝用の手紙を渡されていますし、きっとアザゼル総督からあなた達の話を聞いた時に、カズキくんはそちらに参加するつもりだったのでしょう」
え、そんな話いつしてたの？
ていうかその手紙だってアザゼルさんをおちょくる為の……。
「そうかい、そんなら遠慮なく連れてくぜぃ。行くぜ、黒歌」
「はいは～い、それじゃあ行くわよ～ん♪」
ちょ、転移魔方陣の展開速ぇ!?
お願い待っ……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
すっかり日も暮れ辺りは暗くなっても、この会場は眩いライトと興奮した人々の熱気で盛大に湧き上がっている。

先程一人と一匹で戻ってきたロスヴァイセの話では、偶然出会った美猴と黒歌に連行されてカズキは警備の方に行ったらしい。
あっちにはヴァーリもいるし、一人で行動されるよりは幾分かマシだな。
ついに先程、リアス対サイラオーグのレーティングゲームの火蓋が切って落とされた。
プロも注目するこの一戦、会場のボルテージはかなり高まってやがる。
まさにお祭り騒ぎって奴だな。
実際この二人は今すぐプロのリーグに参加したとしても、かなりの好成績を叩き出せる実力を持っている。
オマケにイッセーは冥界じゃあ『おっぱいドラゴン』として大層な人気を博しているし、サイラオーグも若手最強と名高くまた人気も同様に高い。
オマケに解説席には堕天使総督である俺様に、レーティングゲーム王者『帝王』（エンペラー）ディハウザー・ベリアルまで来ている豪華ぶり。
こりゃ絶好のテロの標的だな。
実際ヴァーリから連絡が来て助かったぜ、こんだけデカいイベントだと警備が幾らいても足りねぇし。
あいつらなら禍の団の襲撃でも完璧に受け持ってくれるだろ。

今回のレーティングゲームのルールは『ダイス・フィギュア』。
それぞれの《王》がダイスを振り、出た目に応じてその数字に合わせた駒価値の選手で戦っていくルール。
ちなみに駒価値とはチェスにおける盤上の活躍度合いをザックリと数値化したもので、《兵士》は一、《騎士》《僧侶》は三、《戦車》は五、《女王》は九となっている。
複数の駒を所持している場合はその個数分加算されていくので、イッセーの駒価値は八となる。
《王》の評価は事前に審査委員が判定して相応しい数値を弾き出すんだが、今回のリアスの価値は八、サイラオーグは最大値である十二となっている。
まぁ妥当だな、だがリアスの価値は単純な数値に出せない所にある。
試合の結果がこの評価通りに行くとは限らねぇ。
そして何より……
「――はい。こうしてグレモリー・バアル両陣営共に並び立った訳ですが、特に目を引くのが……」
「ええ、バアル眷属にも仮面で素性を隠した選手がいるのですが……グレモリー眷属のこれは、なんとも」
リアス達の陣営にいる、全身布で覆われたあいつはなんだ!?

こんなの俺は聞いてねぇぞ!?

「アザゼル総督、あの人物は一体……？」

実況者が何とか場を持たせている間に、同じ解説席に座るディハウザーが俺に聞いてくる。

そんなモン俺だって聞きたいっての。

「いえ、実は私も知らないんですよ。リアス選手が用意した『隠し球』って奴ではないでしょうか？」

「なんと！　アドバイザーであるアザゼル総督すら把握していない『隠し球』ですか!?これは期待が高まりますね！」

俺の答えに実況者が興奮気味に返し、観客席からもどよめきが起きる。

どう考えてもアレがカズキの言ってた『隠し球』だろ？

精々やらしい小技か小狡い駆け引きを吹き込んだだけかと思ってたが、まさかメンバーの増員とは。

ゲームに参加できるって事は《悪魔の駒》を使用した正式な眷属の筈、つまり《戦車》って事だな。

一体何処のどいつを連れて来やがった？

俺の疑問が解決する前に、ゲームは始まった。
初戦の出目は三。
互いに駒価値一の《兵士》はいない為、出てくるのは必然的に《騎士》か《僧侶》が一名ずつ。
グレモリー眷属からは木場が、バアル眷属からは巨大なランスを手にした甲冑姿の男が馬に乗りながら出場した。
バアル眷属の《騎士》、フールカスとか言ったか？
気性が荒く主人さえ蹴り殺す事がある高位の魔物、『青ざめた馬（ペイル・ホース）』を乗りこなす辺りなかなかの実力者だ。
だがイッセーとの命懸けの特訓を重ねた木場には、今一歩届かなかったな。
木場が目覚めた新たな力。
木場の本来の神器『魔剣創造（ソード・バース）』の他に後付けで手に入れた力、聖剣を操る『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』の禁手。
それも本来とは異なる亜種の能力。
聖剣を携えた甲冑騎士を創り従える『聖輝の騎士団（ブレード・ナイトマス）』の亜種、龍をモチーフにした甲冑を身に纏う騎士たちが木場と同じ速度で襲い掛かる『聖覇の龍騎士団（グローリィ・ドラグ・トルーパー）』。

今はまだ速度しか反映できない様だが、訓練を積めば本体と全く同じ能力を付与する事も出来るだろう。

全くイッセーといい木場といいこいつらは本当にメチャクチャな進歩をしやがって、今後が楽しみで仕方ねぇ。

そんでもって今からやるのが二回戦。

出目は十、かなり大きめの数字だ。

この数字なら間違いなく複数名による戦闘になるな、となると……。

「おぉ～っと！　グレモリー眷属、どうやら次の試合で、あの布で覆われた選手を投入する様だぁ～ッ！」

やっぱ来たな。

一緒にいるのは小猫、てことはリミット一杯の《戦車》二人って訳か。

対するバアルは《戦車》と《騎士》が一人ずつ。

はてさて、どんな試合になるのやら……。

「俺はサイラオーグさまの《騎士》の一人、リーバン・クロセル。こっちのデカいのは《戦車》のガンドマ・バラム。貴殿らの名を聞こう」

「リアスさまの《戦車》、塔城小猫。こっちは……あ、ダメ！」

小猫が名乗りに応えていると、何故か突然布まみれの男が覆っていた布を剥ぎ取った

！

　小猫が気付いた時には既に手遅れで、身体を包み隠していた布は全て捨て去られその下の素顔が衆目の元に晒され……っておい!?

「な、なんと！　謎と布に包まれていた人物の正体、それは……最近冥界に限らず様々な勢力でなにかと話題の問題児、瀬尾一輝だ～ッ!!」

「これは驚きです。彼は堕天使になったと聞いていましたが、まさか悪魔に転生していたとは。アザゼル総督はこの事を……その様子では知らなかった様です、ね」

「会場が凄まじい歓声に包まれております！　しかしそれもそのはず！　彼は人間時代から禍の団の行うテロ活動の防止などでも活躍、冥界の番組で共演しているソーナ・シトリーさまとの関係も囁かれるなど話題に事欠かない男性！　そんなあの人が、本日グレモリー眷属としてこのゲームに堂々参戦です！」

……ハッ!?

　イカンイカン、一瞬本気で開いた口がふさがらなかった！

　なんだ、何がどうなってる!?

　なんであのバカがあんなとこにいやがんだ!?

「もう、ダメだよ？　正体はギリギリまで内緒だって先輩に言われたんでしょう？」

　……なんだ、小猫の口調がいつもと違う？

それにカズキの様子にも違和感がある。
背中の何かを、剥がそうにしている？
あの背中に貼られてるのは……術式が書き込まれた呪符、か？
つーかおい。
なんだそれ。
なんなんだその、尻についてる『毛玉』は。
……ああ、大体分かった。
成る程な、そうかそうか。
色々と納得した俺は軽く息を吹き出し、肺一杯に空気を流し込む。
限界まで溜め込んだら少しだけ息を止め、次の瞬間一気に吐き出した！
「誰でもいいから、この会場にいるロスヴァイセ呼んで来ぉい！　今すぐだぁッ!!」
この場にカズキがいない以上、お前から説明して貰うぞ！
あのバカがどういうつもりでこんな事したのかをな！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「ヘックシ！　う～、誰かに噂されてんのかな……お、この焼きそば美味い」
「ちょ、それ俺っちの!?　何勝手に食ってやがんだよ！」
「ムシャムシャしてやった、今は満足している」

「うるせぇよ！」

58話

「ほ～、じゃあ子フェンリルの片割れをグレモリーの嬢ちゃんとトレードしたってのかぃ？」
「今回限定だけどね。スコルはウチの大切な家族だし、簡単に嫁には出さん」
「へぇ、スコルってメスだったのかぃ」
「いや俺も知らんけど」
「おい」
美猴さんに担がれながら、今回仕掛けたイタズラについて説明していく。
身体は拘束されたままだが、口だけ自由に動かせる様にして貰った。
本当はさっきまで何の拘束もされてなかったんだけど、美猴さんの持ってた焼きそばを食べたらまた動けなくされてしまったのだ。
反省はしてない、美味しかったです。
モグラさんは落ちると危ないから俺の中。
ハティも俺に着いてきてくれたので、今は二人に並走して走っている。
そういや君たちって空走れたんだね、いつも普通に散歩してるからどうもこの子たち

がフェンリルだって忘れそうになるんだよね。
　本当にハイスペックでいらっしゃる。
「あら、でもおかしいわねぇ？　グレモリー眷属の《戦車》には白音がいるんだから、駒二個分のスコルちゃんとはトレード出来ないんじゃニャい？」
　黒歌さんが口元に指を当てながら小首を傾げる。
　ごもっともな御意見です。
「実はこないだ、スコルのお尻から《戦車》の駒が一個プリッと出てきてね？」
『ブフォッ!?』
　俺の発言に美猴さんと黒歌さんは揃って吹き出し、美猴さんは担いでいた俺を落としかける。
　ちょ、手ぇ離さんといて!?
　今の俺動けないんだよ!?
　このまま落とされたら地面と濃厚なキスしちゃう！
「ハァ!?　いや尻からって……ハァ!?」
「え、なに？　《悪魔の駒》ってそうやって出てくるものなの？　なんかばっちいニャア……」
　驚愕しつつも俺を抱え直した美猴さんと、まるで汚物を見るような視線を俺にくれや

がる黒歌さんをよそに、俺はザックリとした説明を続けた。
「いえね？　何時も通り散歩先でスコルが力んだら、その力作がやたらと光っててさ。片付けついでに調べてみたら、中に《悪魔の駒》があったんだよね」
「俺もよくわからないし心配だったから、《悪魔の駒》を作ったアジュカさんに聞いてみたんだよ。そしたらどうもスコルの中の駒が一つ《変異の駒》に変わったらしくて」
「アジュカさんは『恐らくキミの中のミョルニルが身体に馴染んだ事と、眷属であるフェンリルの駒が同調して変質したのだと思われる。この様な事例は聞いた事がないが、私にはそうとしか考えられない』って言ってた」
「まぁそんな訳で今のスコルは《戦車》一個分の眷属なんだよ。だからトレードの数的にも問題はない……筈」
ぶっちゃけ、かなりグレーゾーンスレスレの事をやっている。
レーティングゲームについてザッと調べた時、『ゲーム前のトレードは対戦相手の同意が必要』ってルールにあったけど、こないだサイラオーグさんが『何をしてこようと、相手の全てを受け入れる』とか言ってたし問題ないよね？
まぁあの人なら笑いながら許容してくれるだろ！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「――とまぁ事のあらましは大体こんなもんか。で、どうするよサイラオーグ？」

「どう、とは？」

堕天使総督であるアザゼル殿がカズキの眷属であるヴァルキリー、確かロスヴァイセ殿と言ったか。

そのロスヴァイセ殿から受け取った手紙をヒラヒラと揺らしながら尋ねてくる。

何とも不機嫌そうだが、それもその筈。

アザゼル殿が上手く纏めていたが、実況の者が読み上げた内容の殆どはアザゼル殿をおちょくる様な内容だった。

横で正座をしながら涙目になっているロスヴァイセ殿が、若干不憫に見える。

あの様子を見ると、手紙の内容を自分の眷属に知らせていなかったな。

全く、子どもの様なイタズラが好きな奴だ。

「この状況はちっとばかしイレギュラー過ぎる。お前さんの同意が得られなければ、取り下げてもいいと思うが？」

アザゼル殿に問い掛けられると、スタッフからマイクを手渡された。

ふむ、つまりどうなるかは俺の匙加減な訳か。

ならば俺の答えは決まっている。

「リーバン！　ガンドマ！　お前たちはどうしたい！」

俺はマイク越しに己が眷属に問い掛ける。

この戦い、決して俺だけの物ではないのだ。
あの神をも喰らう魔狼と戦うのは俺ではない、あの二人。
何よりも、あの二人の意思が尊重されなければならない。
《騎士》であるリーバンは顎に手を添えながら、わざとらしく悩む様な仕草を見せる。
「そうですな、私としてはサイラオーグさまが気に掛けるカズキ殿と戦えると思ったのでちと残念ですが……相手がかの神喰狼ならば、相手にとって不足なし！　我が剣技の冴えの程、この会場の皆さまに！　そしてなにより、我が主サイラオーグさまにとくと御覧に入れましょうッ!!」
リーバンは不敵な笑みを浮かべそう言うと、腰に備えた剣を抜き放ち天に高々と掲げた。
その光景に呼応する様に、観客たちから大きな声援があがる。
《戦車》のガンドマも同意の様で、その強靭な両腕を掲げて観客たちの熱を煽っていく。
「よく言った、頼もしき我が眷属たちよ！　ならばその力！　その勇姿ッ！　貴様らの意思を持って、眼前に示して見せよッ!!」
『応ッ!!』
俺の呼び掛けに力強く応えてくれる二人。
俺には勿体無いくらいの、本当に素晴らしい眷属たちだ。

「そう言う訳でアザゼル殿、こちらに依存はない。思う存分やり合わせて頂きましょう」
「……そーかい、お前さんがいいならこれ以上何か言うのは野暮だな」
強いて俺の言いたい事があるとすれば、一瞬で滾ってしまったこの戦闘意欲の発散が出来ない事くらいだ。
布の下からあいつの顔が現れた瞬間。
普段はやる気のないあいつとこの最高の舞台で、本気で死合えるかと期待してしまった。
その高ぶりが、俺の身体を焦がして止まない。
しかし違ったのなら仕方ない。
リアスの陣地で控えている赤龍帝、兵藤一誠もまた俺を期待で震え上がるほどの相手。
その他の眷属たちも、己の主に勝利を持たらさんと必死になる素晴らしき者たちだ。
決して侮ってはならない。
赤龍帝だろうが神喰狼だろうが、好きな奴を連れて来い。
相手が何者であろうと、俺たちのやる事は変わらない。
今日この時間、この場所で！
全身全霊をかけて、グレモリー眷属を打ち倒すッ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「お、見えてきたぜぃ？　ここが俺っちたちの持ち場だ」

ようやく目的地に着いた様で、美猴さんはスピードを緩め始めた。

完全に停止すると、黒歌さんが俺を拘束していた術を解いてくれる。

俺は背中に堕天使の翼を広げ、首や肩をグルグルと回して身体を解す。

モグラさんは勝手に俺の中から出てきて頭の上を陣取り、ハティは心配そうに近寄ってきたので思い切り撫で回す。

ハティをモフりながら辺りを見渡すと、さっきまでいた都市がかなり小さく見える。

結構遠くまで来たもんだな。

俺が翼を出した事でもわかるだろうが、ただいま上空ウン千メートル。

足下には鬱蒼と生い茂る木々が溢れているが、見上げた時の紫色の空は実に目に痛い。

「わぁ、すっごく高ぁい！　……俺帰っていい？」

「却下」

「何でだよ！　俺が地面に足着いてないとポンコツなの知ってるでしょう!?」

俺の素敵な提案を、問答無用で叩き潰す美猴さん。

俺ってば空を飛べる様になったばかりだから、空中で上手く戦えないのだ。

具体的には、素手のゼノヴィアにフルボッコにされる位。
朱乃さんやロスヴァイセさんに至っては、近付く事すらできずに燃やされたり丸コゲにされる。
攻撃を受け流そうとすると、どうしても踏ん張りが利かずに身体ごと攻撃された方に流されて吹き飛ばされる。
アザゼルさん曰く『そのうち慣れる』らしいが、それっていつよ？
ゼノヴィアにドヤ顔されるのがメチャクチャ腹立つのだ。
そして地面に倒れてる俺を、光悦とした表情で見つめてくる朱乃さんが色んな意味で実に怖い。
「ここまで極端なスタイルも珍しいわねぇ、美猴はなんかアドバイスとかニャいの？」
「んな事言われてもなぁ、俺っちは筋斗雲で足場作れるし……お得意の気合でなんとかするしかないんじゃねぇかい？」
「所詮なんちゃって孫悟空か……こんな事なら初代さんに聞けばよかった」
「おいこら、誰がなんちゃってだ」
あの人気持ち悪いくらいなんでも出来たからな。
戦闘技術はもちろん釣りに狩りに勉強、歌や彫刻なんかの芸術と料理まで。
ああいうのが『天才』って奴なのかね？

「てかお前さん爺様に会ってたのか。どうだ、俺っちの言った通りだったろう?」
「初代さんが『あのバカは見つけ次第折檻じゃ』って玉龍さん連れて仕事ついでに探してたよ。俺も美猴さんたちがいそうな所伝えといたから気を付けてね?」
「なぁ、なんか今のおかしくね? 心配すると見せかけて、俺っちの事売り飛ばしてなかったか?」
「気のせいです」
そのまま空中で取っ組み合う俺たち。
地上ですら勝てない俺が空でこの人に敵うはずもなく、美猴さんのいい様にオモチャにされる。
ちょ、孫悟空がコブラツイストとか掛けてくんなや!
つうかいい加減テロリストなんて辞めなさいよ。
大規模な破壊活動とかしてるって話は聞かないけど、世間様に顔向け出来ない事には変わりないんだから。
なんかしら目的があって動いてるのはなんとなくわかってるけどさ。
俺に内緒にしてるのが気にくわん。
「ほらほら、そこの仲良しニャお二人さん? じゃれついてるのもいいけど、な~んか面倒臭そうな団体が御出でになったわよん?」

そんな事をしているうちに、呼んでもいないお客さんが来てしまった。
見覚えのある制服みたいな服装で統一した集団、たしか英雄派だっけか？
その先頭に、これまた見覚えのある女の人が。
「貴方までこんな所にいるなんてビックリ。凄い偶然ね、ヘラクレスが知ったら大騒ぎだわ」
わざとらしく目をパチパチと瞬かせ、大きく広げた手を口に当てている女性。
そう、以前修学旅行中に襲いかかってきてくれやがった連中の一味であるジャンヌとかいう奴だ。
嬉しくない縁もあったもんだ。
「お久しぶりですねクソッタレ」
「あら、酷い挨拶ね？　私、何か嫌われる様な事しちゃったかしら？」
「俺の修学旅行を邪魔しただけでは飽き足らず、俺が祭りを堪能してる時にまで来やがって……！」
俺の怨みの籠った視線を受けても平然としてやがる。
少しは良心の呵責に苛まれたりしろよ！
……って、テロリストに言っても無駄か。
俺はモグラさんを禁手状態で素早く身に纏い、身体から蒸気を噴き出し排熱する。

「美猴さん、俺ってばなんだかやる気が湧き出てきちゃったからさ。こいつの相手は俺がやる、ハティも美猴さんたちを手伝ってあげて」
「ウォフ！」
「別に構わねぇけど……やれんのか？」
ハティは元気一杯に返事をし、美猴さんは如意棒を取り出して構えつつそんな事を聞いてくる。
既に周りは敵さんに包囲されており、正に一触即発と言った感じだ。
にしても、美猴さんもつまらない事を聞く。
「当然でしょう？　こいつがゼノヴィアを痛めつけたのは本人から聞いてるからね、簡単に終わると思わないで貰おうか」
「そうかい、そんならこれ以上言わねぇよ。周りのザコは引き受けてやっから、存分にやり合いな。行くぜぃハティ、お前の御主人に良いトコ見せてやんな！」
「ウォフッ!!」
「あれ？　なんか私ってばすごい空気じゃニャかった？」
美猴さんは如意棒を肩に引っさげ、ハティを伴い敵陣に突撃していった。
黒歌さんもそんな事を呟きつつその後を追っていく。
そしてごめんねゼノヴィア、正直今の今まで敵討ちとか忘れてた。

本人もリベンジは自分でするって言ってたし、精々俺の憂さ晴らしに付き合わせよう。

「アラ生意気ね、いいわよ？　この間は戦えなかったけど、今日はタップリと遊んであげる♪」

ジャンヌも乗り気のようで、何処からか剣を取り出す。

何も持ってなかった筈だけど……木場と似た様な神器なのかな？

まぁ何はともかく、地面に降りないと話にならない。

幸い相手にはまだバレてないんだ、上手く誘導すればどうとでもなる。

「ハッ、好きなだけ吠えるがいいさ。さぁ、下に降りて戦おうか」

「いいえ、このままで結構よ？」

ジャンヌはそう言いながら、剣を正眼に構える。

……ん？

「いやいや、見た所剣を使うんだろう？　地面の上で決着を着けようじゃないか」

「別に構わないわ。地上でも空中でも、貴方が負ける事には変わらないのだから」

俺が構うんだよバカ野郎。
「まぁそう言わずに、レディファーストって奴さ。それに俺はね、どうせなら全力の君と戦いたいんだよ」
「あら、紳士なのね？　でもお気遣いは不要よ、私は何処でも……ねぇ貴方、もしかして空での戦闘に不慣れなのかしら？」
あかん、バレた。
「そうなの……別に私は下に降りてあげても良いんだけどね？」
マジで？
「でも私、無抵抗の相手を一方的に嬲るのも大好きなのよねぇ……♪」
ふぁっきん。

ねぇ、なんでこっちを見ながら舌舐めずりしてるの？
なんでそんなに嬉しそうなの？
なんでそんなに頬を染めながら息を荒げているの？
なんで、変なスイッチ入った時の朱乃さんと同じ様な顔してるの？
……へ、へるぷみ～!?

５９話

「皆さまお待たせ致しました！　色々とごたついてしまいましたが、これよりレーティングゲーム第二回戦を再開させて頂きます！」

実況席からアナウンスが流れ、次いで観客席から大きな歓声が上がる。

俺たちグレモリー眷属は、控え室から今試合に参加している小猫ちゃんとスコルを見守る。

スコルは既に背中の呪符を自分で剥がしてしまい、本来の狼の姿に戻っている。

「にしても、やっぱり騒ぎになっちゃいましたね」

「うふふ、でもまぁこうなる事は分かっていた事ですわ」

俺が呟くと、近くにいた朱乃さんが頬に手を当て微笑みながら答えてくれた。

その隣ではゼノヴィアが腕を組みながらうんうんと一人でに頷いている。

「私だってこんな事したくなかったけど、『アレ』がカズキくんからスコルを借りる条件だったのだから仕方ないじゃない……うぅ、胃が痛くなって来ちゃった……」

「リ、リアスお姉さま、お薬貰って来ましょうか……？」

「いいのよアーシア、気にしないで……貴女はそのままでいてね？」

あぁ、部長が戦いもせずに疲弊している!?
胃の辺りを抑えながらテーブルに突っ伏しているのをアーシアが介抱しているが、あまり効果はなさそうだ。
しかしまぁこれもこのゲームに勝利する為の代償って奴なのかもしれない。
時は遡り数日前。
戦力的に心許なかった部長にカズキが持ちかけたのは、部長が持っている《戦車》の駒と、カズキの眷属であるスコルとのトレードだった。
願っても無い戦力増強。
その案に部長は飛びついたが、それを行うに当たってカズキは一つ条件を出してきた。
『スコルに呪符を使って変身させ、正体を隠す。対戦相手はもちろん、誰にも内緒で』
この条件を出された時、部長は迷ったそうだ。
フェンリルという戦力は大変魅力的だが、これが後々大きな問題に発展するのを恐れて。
しかし部長が悩んでいるとカズキは言葉巧みに様々な事を吹き込み、部長が気付いた時には契約書にサインをしてしまっていたらしい。
「カズキくんは恐ろしい悪魔だわ……アレこそまさに『悪魔の囁き』……」

「リアス部長、悪魔は僕たちの方です」
　倒れ伏しながら呟く部長に、先程一回戦を素晴らしい戦いを繰り広げた木場がツッコミをいれる。
　そんなやりとりをしている間にモニターの向こうでは、小猫ちゃんとスコルの試合が始まろうとしていた。
「いささか邪魔が入ったが、我らのやる事は変わらん。全力でお相手する」
「……此方も油断出来る相手ではないので、初っ端から全力で行きます！」
　小猫ちゃんがそう呟くと猫耳と尻尾が出現し、その尻尾が二つに分かれた。
　そして全身に闘気を纏わせてから隣にいるスコルの背中へと跨った。
　あれは小猫ちゃんがカズキと開発した『猫又モードレベル2』という形態で、身体能力が爆発的に跳ね上がる。
　そしてカズキが魔改造した事により、自分が触れている対象にも闘気を纏わせる事を可能にしたのだ。
　この状態の小猫ちゃんは、正直俺も相手にしたくない。
　スコルに闘気を纏わせる事により、パワーは勿論スピードも凄い事になるから捕まえるのすら一苦労する。
　一緒にいるのがハティだったら木場のスピードすら上回り、そうなったらもう俺には

通常手段じゃ捕まえられない。

現に今もスコルに跨った小猫ちゃんがフィールドを縦横無尽に駆け回り、身体の内側から破壊する仙術の気が篭った一撃を打ち続けた。

一発打ち込む毎に離れていく二人に、《騎士》のリーバンと《戦車》のガンドマも動きについて行けず翻弄されている！

「くっ、何という動き！　まるで捉えられん、本当にこれが《戦車》のスピードか!?」

「まだまだ……もっと、もっと速く！」

その後も終始小猫ちゃんが有利に試合を展開していたが、相手が切り札を切ってきた。

リーバンが視界に映した場所に重力を発生させる事の出来る切り札、神器『魔眼の生む枷（グラビティ・ジェイル）』を発動させ、スコルの動きを一瞬止める事に成功。

その隙にガンドマが自慢の怪力でフィールドに建てられた石柱を引き抜き二人に叩きつけるも、身体に負荷を受けたままスコルの爪と小猫ちゃんの掌打が石柱を砕いた。

そのままガンドマに重力の力も利用した重い一撃を叩き込み撃破、その後リーバンに玉砕覚悟の魔法乱射を喰らいダメージを受けつつも突破して勝利した！

「小猫ちゃん、すごい強くなってるんだな」

「初代孫悟空からカズキくんが教わった気の練り方、それを小猫ちゃんもカズキくんか

ら教わっているそうだよ。このままだと僕ら、彼女に負けちゃうかもね？」
俺の呟きに、木場が茶化しながら返してくる。
せ、先輩としての尊厳が危うい!?
うぅ、俺も負けずに努力しなくては！
そろそろ俺の出番も回ってくるかも知れない、気合いを入れ直すぞ！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
英雄派の構成員が数人、殺気を撒き散らしながら突っ込んできやがる。
それぞれの手には己の神器だろう物が握られているが、どれも見た事のある数打ちの品。
如意棒を素早く伸ばしてそのまま横薙ぎし、全員纏めてぶっ飛ばす。
黒歌も空中に幾つか魔方陣を展開して、妖術や仙術を使い敵を翻弄し圧倒している。
子フェンリル、ハティの相手をしてる連中はもっと悲惨だねぇ。
主人であるカズキに頼まれてえらく張り切ってるもんで、どんなザコにも全力全開だ。
カズキが言いつけているのか噛みつきこそしないが、物凄いスピードでの体当たりで一人また一人と気を失い地上へと墜落していく。
「しかしなんだってんだこいつら、禁手化もしてねぇザコばっかじゃねぇか。連中何考

えてやがんだ？」
「やっぱ変よねぇ……ハイ、これでこっちもお仕事完了ニャン♪」
俺っちが不満げに溜め息を吐いていると、黒歌も最後の敵を吹き飛ばす。
ブッ飛ばしたら即転移しやがるから拘束出来なかったが、結構な人数を倒した。
英雄派はそんなに人数が多い訳じゃねえから、ヴァーリの方にも向かってると考えると戦力の大半が出張ってる事になる。
……チッ、俺っちの頭じゃ相手方の狙いがわからねぇ。
幹部とやってるカズキにさっさと合流して、どうにかするしかねぇか。
「黒歌、取り敢えずカズキと合流するぜぃ。あいつの現在地はわかるか？」
「う～ん……連中が転移してきた時になんかバラ撒いたみたいで、上手く気配が感じられないのよねぇ」
「うげ、マジかよ」
まいったな、黒歌に探知出来ねぇってんなら俺っちにも無理だ。
飛んでった方向くらいなら憶えてるが、それ以上は……ん？
「クゥ～ン……ウォフ！」
服の裾を何かに引っ張られそちらを向くと、何か言いたげなハティの姿が。
ハティは俺っちが気付いたのを確認すると、カズキが飛んで行った方向に少し移動し

た後『ついてこい』とばかりに一声吠えた。
「なんだ、カズキの所まで連れてってくれんのかい？」
「本当に好かれてるわねぇあの子、大した忠犬だニャア」
なんにせよ、あいつの元まで連れてってくれるなら有難い。
俺っちたちはハティの案内の元、カズキの所へと向かった。

「あら～、随分と派手に暴れたみたいねぇ」
「どっちかってぇと派手に『逃げ回った』、だな。空の上のカズキがこんな真似出来るわけねぇし」
辺りを見渡しながらハティの後ろについて移動を続ける。
なかなか派手に戦ってたみてぇだねい、そこいらの木々が大量に切り倒されてやがる。
カズキにはこんな芸当は出来ねぇし、おそらくあの姉ちゃんの仕業だな。
暫くするとハティは地面に向かって降り始めた。
その近くには大きなクレーター、こいつはカズキかねい？
空中じゃ勝ち目が無くてムリヤリ地面に叩き落としたってとこか、相変わらず無茶を

する。

「なんていうか、どうやって移動して行ったのか丸わかりよねぇ……」

黒歌はため息を吐きつつ呆れ顔になる。

落とされても即戦い続けた様で、木々は手当たり次第に斬り倒され地面のあちこちが隆起してすごい事になってやがる。

あいつらもうちょい大人しく戦えねぇのかね、移動しづらいったらねぇ……お？

「……！」

「ようやく捕まえたぞチクショウめ、手間取らせやがって……！」

こりゃカズキの声か、どうやら向こうも戦闘が終了したみてぇだな。

ハティにも当然聞こえた様で、尻尾をブンブン振りながら声のした方へと駆け出した。

はぐれない様に俺っちたちも急いで後を追いかけると、そこには――

「ンーッ！　ンン〝ーッ!!」

「さぁ一体どうしてくれようか……ハァ……ハァ……」

顔を赤らめつつ全身を木のツタでやたらと性的に縛られ眼には涙をうっすらと浮かべた敵の女と、その女に息を荒げながらにじり寄る鎧姿の男。

何というか、物凄くいかがわしい犯罪が行われている現場だった。

ハティはそんな状況も御構い無しにカズキに擦り寄っていく。
それでようやくカズキは俺たちの存在にも気付き、ゆっくりとこちらに振り向いた。
「……言い訳を、させて下さい」
「言ってみな」
どうしようかねヴァーリ。
俺っちたちの弟が擁護出来ないほどのクズに、というか変態になっちまった。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「うひゃ!?　おほぅ！　ひょいやっさぁッ!!」
「アハハッ♪　いいわあなた、すっごくイイ！　もっとよ、もっと踊って見せなさい!!」
熱い！　冷たい！　ビリビリするぅ!?
着込んでいる鎧の表面を撫でる様に飛んで来る無数の聖剣。
それを情けない声を上げながら必死に避ける俺と、その姿を恍惚とした表情を浮かべながら嬲ってくるジャンヌ。
ヤダもうこの人めっさ怖い。
聖剣を自身の近くに幾つも出現させて一斉に射出するとか、どこのＡＵＯだと言いたい。

もしくは身体が剣で出来てる正義の味方さん。

しかしまぁ、なんだってモグラさんの鎧が簡単に破壊されるんだ？

モグラさんにお願いして硬度を上げて貰ってる腕の部分までバラバラにされた。

イッセーやヴァーリさんの鎧と違って、モグラさんの装甲はすぐに修復出来ないってのに……どんなに破壊されてもモグラさんが痛がる訳じゃないのが救いか。

「うふふ、今でも充分楽しめるけど……その鎧は邪魔ね。肌を斬り刻めないし、何より貴方の怯えた表情が見えないわ」

ジャンヌは唇を尖らせ不満そうに文句を漏らした後、複数の聖剣と一緒に何やらゴテゴテと装飾のついた剣を数本創り出した。

アレだ。

他の聖剣はなんとか弾けるのに、さっきからあの装飾された剣に装甲が破壊されてる。

俺の態度に気付いたのか、ジャンヌは装飾剣を手元で遊ばせながら愉しそうに喋り出した。

「私の神器、『聖剣創造』はあらゆる聖剣を創り出せるの。火や氷を出したり、はたまた龍殺しの属性を持ってたり。他には……『鎧破壊』の属性だったり、ね？」

……マジかよ。

ジャンヌが微笑むと同時に、物凄い勢いで剣が飛んで来た！
身体をムリヤリ捻ったお陰で直撃は避けられたが、完全には躱せず顔や腕を掠めそこを守っていた鎧を軽々と破壊された。
『鎧破壊』ってそんなんアリか……イッセーは直ぐに鎧を張り直せるからいいけど、俺とモグラさんには天敵じゃねぇか。
「邪魔な兜も壊れたし、これでようやく貴方の怯えた表情が堪能出来るわね。さぁ、もっと私を愉しませて頂戴……？」
妖艶に指を舐め上げながら、ジャンヌがにじり寄ってくる。
クソったれ！
なんで俺の周りには変な性癖の人ばっかなんだ!?
「そんなん御免被る！　あんまりやりたくなかったけど、こうなりゃ奥の手だ！」
「……何をやる気か知らないけれど、そう簡単に逃がしてあげないわよ？」
俺は砕かれなかった左腕を前に突き出すと、ジャンヌは嘲笑いつつも身構えた。
そうだ、俺が何をするのか観察しろ。
この姿勢でやれる事なんざ、そう多くはないぞ？
「おら！　喰らいやがれッ！」
俺の掛け声と共に、左腕の肘から先の外装がジャンヌ目掛けて飛んでいく！

所謂ロケットパンチ、見たまんまの仕掛けだ。
「ふん、期待させておいてその程度？　くだらない上に遅い、なんてつまらない技なの」
ジャンヌは落胆した様に溜息を吐き手元に聖剣を出現させると、向かってきた腕を撫で斬りにしようと振りかぶる。
そうだよな、あの程度のスピードなら簡単に躱せる上に叩き落とせる。
下らない技だと、『油断』してくれるよな？
「今だ、弾けろ！」
「ッ!?」
ジャンヌの振り下ろした剣が当たるよりも先に、腕部装甲が強烈な光と共に炸裂。
本当は爆風を利用し辺りに金属片をばら撒いて無差別攻撃する技だけど、今回は強烈な光を使った目眩ましだ。
「まだまだぁ！」
目を潰されて俺の姿を見失ってるうちに、後ろから抱き着いて地面に急降下する。
情けないけど、これが今の俺に出来る精一杯の空中戦だ！
セクハラとか言わないでね？
「くっ！　離しなさ……！」
「おう、了解」

ジャンヌが拘束を解こうともがき始めたので、望み通り離してあげた。
ちょっと地面に向けて勢いつけたけども。
何か言いたげな顔をしてたけど、お願いを聞いてあげたのに理不尽だよね。
地鳴りと共に、足下にそれなりのサイズのクレーターが出来た。
……やり過ぎたかな？
少し観察してたけど、何の反応もない。
結構な勢いで地面に叩きつけてやったけど、腐っても英雄らしいし簡単に死なないよね？
……でも女の子だしなぁ。
少し心配になったので、穴から引っ張り上げようかと近付いたら再び地鳴りが。
モグラさんが警告してくれたので穴から飛び退くと、そこからジャンヌが飛び出してきた。
銀色の、ドラゴンに乗って。
「ふ、ふふふ……やってくれたじゃない？　もうさっきまでみたいに優しくしてあげないわよ……？」
どこが優しかったのか小一時間尋ねたい。
服の端々がボロボロになり、綺麗にセットしていた髪もグシャグシャ。

顔も怒りに染まって大変恐ろしいね、モグラさんが俺の中でビビってらっしゃる。
ていうか、ジャンヌが乗ってるのドラゴンじゃない。
聖剣が重なり合ってドラゴンに見えてるだけか、どっちにしろおっかない事には変わりないけど。
触っただけでズタボロにされそうだ。
しかし、さっきまでと状況が違うのは俺も一緒だ。
「さっきまでと一緒だと思うなよ？　空と違ってここは俺の友達である地面の上だ、幾らでもやりようはあるんだよ！」
「そう、なら見せてみせない！　私の禁手、『断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）』に勝てるならね！」
ジャンヌは叫びながら聖剣で出来た龍と共に突撃してきた。
禁手って、それただ聖剣束ねただけじゃないの？
木場も頑張れば出来そうな気が……まぁいいや。
幸いここは樹木生い茂る森林地帯。
豊かな大地は、俺とモグラさんのホームグラウンドだ。
「幾らでも見せてやるよ、俺たちお得意の『ダーティファイト』って奴をな！」

「……で、結局モグの力を借りてチマチマ相手の体力削り倒して疲弊させて。仙術で活性化させたツタで罠張って拘束した、と」
「そうです」
「決して邪な気持ちであんな縛り方をしたのでなく、この嬢ちゃんが暴れた所為でツタがこんな風に絡まっちまった。そう言いたいんだな？」
「その通りです」
「……どうよ、黒歌？」
「有罪（ギルティ）」
「なんでだよ!?」
俺は美猴さんにシバかれ禁手化を解かされた上、問答無用で正座させられた。
いやまぁ確かに凄い絵面だったとは思うが、湿った地面の上に正座させられるのは色々と堪えるものがある。
というか、頑張った人に対する対応じゃないと思うの。
「お、俺は悪くねぇ！　悪いのは全部美猴さんなんだ！」
「説教されてる側が説教してる側を責めるたぁ良い度胸だ。黒歌に全身ガチガチにされ

た後、お前さんの大好きな地面に埋めてやろうか？」
「正直すまんかった」
謝罪は大切。
土下座って素晴らしいよね？
取り敢えず命だけは助けてもらえるもの。
「色んな事に興味ある年頃ニャンだろうけど、こういうアブノーマルなのはまだ早いんじゃニャい？……アンタ、白音に変な事してないわよね？」
ヤダ黒歌さん、目がマジだ。
そんな汚物を見る様な視線を向けないで欲しい。
それこそ変な物に目覚めてしまう。
「やりませんよ。ゼノヴィアたちならギャグで済むけど、小猫ちゃんにやったら犯罪じゃないですか」
「……それはそれで、あの子が不憫な気がしてきたわ」
呆れられた。
俺にどうして欲しいんだ、この露出狂な猫さんは。
「所でお二人さん、ふざけてる間にジャンヌがいなくなってるけどいいの？」
『は!?』

俺の言葉で弾かれた様に振り返る二人。
そこにいる筈のジャンヌの姿は既になく、『責任は取ってもらう』と女の子っぽい丸字で書かれた紙が一枚置かれていただけだった。
薄く霧が出てたし、ゲオルグって奴が助けに来たんだろうなぁ。
てか責任てなんなのさ。
指一本触れてないんだが？
むしろ傷モノ（物理）にされたの俺の方なんだけど。
その後黒歌さんの八つ当たりにより、俺は術で縛られたまま転送された。
転送先はイッセーたちのゲーム会場、で解説してたアザゼルさんの頭の上。
急に現れた俺を支えきれず、アザゼルさんは頭から机に突っ伏しその背中の上で俺が正座するというシュールな絵が出来上がった。
アザゼルさんに殴られたけど、これは俺のせいじゃないでしょう。

60話

サイラオーグさんとのレーティングゲームが終わってから数日たった。
俺は途中からしかみれなかったけど、みんな全力で頑張っていたと思う。
最後はイッセーとサイラオーグさんがタイマン勝負でケリをつけ、見事グレモリー眷属が勝利を収めた。
俺が会場に着く前に、ギャスパーくんは《僧侶》、小猫ちゃんは《戦車》に敗北してしまったらしい。
それでもそれぞれが懸命に奮戦した、素晴らしい試合内容だったとみんな褒め称えていた。
二人の試合には間に合わなかったが、朱乃さんの試合からは観戦することが出来た。
アザゼルさんにシバかれ、ロスヴァイセさんからお説教を受けながらだったけども。
朱乃さんの相手は同じ《女王》の女性。
『穴（ホール）』と呼ばれる異空間を操り、放った術やら魔法やらを丸ごと跳ね返してくるという相性最悪な相手だった。
終始苦戦するも最後は玉砕覚悟で放った広範囲の雷光が炸裂し、何とか相打ちまで

持っていった。
試合後にお見舞いに行ったら、俺の顔を見た途端泣き付いてきたのには驚いた。
よっぽど悔しかったんだろう、泣いてしまった事は秘密にしてあげようと思う。
ゼノヴィア、スコル、木場はサイラオーグさんと戦い敗北。
しかし木場が最後にサイラオーグさんの片腕を切り落とす事で、相手方の『フェニックスの涙』を消費させる事は出来た。
後続に、親友の為に貢献できた事を誇らしげに消えていったのは素直にかっこよく見えた。
にしてもサイラオーグさん、あの人強すぎるでしょう。
スコルを一撃で沈めるわ、ゼノヴィアと木場の攻撃片手で防ぐわ……あんなんどうしろっての。
まぁイッセーはそのトンデモない人に殴り勝った訳だけど。
技術もなにもない純粋な力と力、拳と拳の殴り合い。
アレは熱かった。
ガラでもなく夢中で魅入ってしまうくらいに。
イッセーの新しい力、『真紅の赫龍帝（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）』。
暴走して宿主を破滅に向かわせる赤龍帝の力を、イッセーの想いの力で導いた『覇龍』

とは別の回答の一つ。
相変わらずイッセーはやる事が主人公染みてカッコいい、普段との落差がヒドいのに目を瞑れば。
そしてあの厨二全開の呪文みたいなのがヤバいね、色んな意味で。
イッセーが改変した奴の方が大分マシになってるけど、それでも破壊力がハンパない。
オマケに試合中に行われたリアス先輩への大胆告白。
若いよなぁ、俺と同い年だけど。
まぁそんなこんなで、辛くもサイラオーグさんに勝利したグレモリー眷属の面々。
今は何してるかと言うと――

「「いらっしゃいませ、こちらのお席にどうぞ　♪　」」
「三番卓に新規で四名様！　炒飯を四つお願いしますわ！」
「カズキくん、四番卓に餃子二人前追加～！」
「レイヴェルちゃんはこのまま待ってて、すぐ出来る！　イリナは他の卓から食器下げて来て！　木場、悪いけど食材尽き掛けてるから誰かと買い出し行ってきてくれ！」
「了解！　えっと……」

「祐斗先輩、私が一緒に。イッセー先輩、ギャーくんと一緒にお皿洗い頑張って下さい」
「そ、そんな!?　幾ら洗っても次から次へとやって来て終わらないのにいいいい!?」
「イ、イッセー先輩！　洗い物のおかわりがまた……うわぁぁぁんっ!!」
「ゼノヴィア、これ二番卓……摘み食いしてんなオラァ!!」
「むぐぐ!?　の、喉に……！」
文化祭の出し物の一つとして、オカ研メンバーで中華飯店やってます。
美少女たちが接客してくれると評判を呼び、かなりの人がやって来ている。
リアス先輩とアーシアちゃんのお出迎えもなかなか様になっている。
初日には射的やお化け屋敷、昨日はリアス先輩や小猫ちゃんが占ってくれる占いの館と巫女服を着た朱乃さんが簡単なお祓いをしたり。
そして本日最終日には、リアス先輩からの要請により俺が調理を担当する中華飯店になった。
メニューは簡単な物を数品に絞って効率を上げ、別料金でウェイトレスと一緒に写真を撮れる様になっている。
自分が参加する最後の文化祭で売り上げ一位を目指す為とは言え、意外と悪どい商売をするなぁリアス先輩。
まぁモグラさんも張り切って俺の手伝いしてくれてるし、楽しんでるみたいだからい

いけど。
モグラさんは調理の手伝いで、野菜の皮剥きをしてくれている。
俺にもどうやってるのかよく分からない爪捌きで、どんどん野菜の皮を剥いていってくれる。
それでも料理担当が俺と朱乃さんだけっておかしいだろ、この人数は流石にキツイぞ。
でも女の子たちを後ろに下げすぎると客足に響くし……ロスヴァイセさんか会長さんでも拉致って来るか？
ちなみに男子はいつもの制服だが、女子は全員チャイナ服を着用。
深いスリットから覗く魅惑的なフトモモの、なんと素晴らしく神々しい事か。
モロに俺の趣味だが、同調する男子の入りも素晴らしい事になって一石二鳥だ。
これのおかげで、厳しい激務にもなんとか耐えられる。
「うふふ、ちなみにカズキくんは誰の脚がお気に入りですの？」
「ゼノヴィアの健康的なフトモモも良いし、肉感的な朱乃さんのフトモモも捨て難い。しかし小猫ちゃんのしなやかな感じもまた素晴ら……なんでもないですゴメンナサイ」
「あらあら、なんで謝るの？　なにか悪い事でもしたのかしら？」
気が付いたら横にチャイナ服の上からエプロンをした朱乃さんが、包丁を握って立っ

ていた。
いかん、朱乃さんがいるのに疲労と煩悩が混ざってなんか口走ってしまった。
というか、その包丁の持ち方は本当に危ないからまな板に置いてください。
「そんなに怖がられるとちょっと悲しいわ」
朱乃さんは口を尖らせて少し拗ねる様な仕草をした後、モグラさんが剥いてくれた野菜を手早く切り始めた。
流石朱乃さん、包丁捌きも手慣れている。
しかしなんと言うか、チャイナ服にエプロンって不思議な組み合わせなのに何故か似合ってるな。
よくわからないが、新しいエロスの波動を感じる。

空が夕焼けに染まり、文化祭も終了に近づいて来た。
朱乃さんのサポートに加え、もうすぐ文化祭がもうすぐ終わる事もあり客足も段々と少なくなってきた。
これならきっと売り上げ一位も夢じゃないだろう。
初めての文化祭だったけど、初日には色々回れたしなかなか楽しかったな。
「ねぇカズキくん？　明日なんですけど、ちょっと付き合って欲しい所があるの」

朱乃さんが調理器具を片付けながら声を掛けてきた。
何処となくモジモジしている気がする、何だろう？
「へ？　まぁ別にいいですけど、何処に行くんですか？」
「……グリゴリの施設へ。ちょっと用事があるものですから」
グリゴリの……あぁ、バラキエルさんになんか用事なのかな？
一人で行くのは気まずいって事か。
「その、出来たらでいいの。文化祭の次の日で疲れてるでしょうし……ごめんなさい、やっぱり――」
「いいですよ、そんな遠慮なんかしなくて。俺も久しぶりにみんなに会いたいし、一緒に行きましょうか？」
やっぱ、一人で会うのはまだ難しいのかもな。
完全に仲直り出来た訳でもなく、何処となくギクシャクしてるってアザゼルさんも言ってたし。
俺が一緒に行って二人の間を取り持ってあげよう。
うん、俺ってばいい奴だな！
「カズキくん……ありがとう♪」
「うわっぷ！」

朱乃さんは俺に微笑むと、自分の胸に俺を抱き込んだ。
だが俺は紳士を自称する男、こんな最高のおっぱいに誘惑されておっぱいするなんて事は決しておっぱいやらかくてきもちーなー。
「むっ!?　朱乃さんがいかがわしい事をしてカズキを誘惑している！　ズルいぞ、私も混ぜろ！」
……ハッ!?
あ、危なかった……もう少しでおっぱいに呑み込まれて帰って来られなくなる所だった。
ゼノヴィアが乱入してきてくれて助かった、他のみんなも騒ぎを聞きつけて次々やってくる。
おバカだけど役に立つよな、ありがとうゼノヴィア！
だから服を脱ごうとしながら近づいてくるんじゃねぇ！
「あらあら、うふふ♪　残念ですけど、今日はここまでみたいですわ♪」
朱乃さんは舌をペロリと出し、イタズラっぽく笑うとみんなの方に歩いていった。
……なんか最近、簡単に手玉に取られる様になった気がする。
そんな事を考えていると、小猫ちゃんが近づいて来て俺の袖を掴みながら一言。
「……さいてーです」

やめて小猫ちゃん、君の一言とジト目が一番心に刺さるの。
文化祭終了後、イッセーはリアス先輩に改めて告白し正式に付き合う事になった。
随分と遠回りだったけど、収まるところに収まったって奴かね。
アーシアちゃんも二人を祝福してたし、これでよかったんだと思う。
おめでとうイッセー、良かったね。
でも爆発しろ。

「悪いなカズキ、面倒に付き合って貰って」
「あ～いいよ別に、試合があったの知らずに応援出来なかったお詫びって事で」
数字の書かれた紙と睨めっこしつつ、電卓で小気味良い音を立てながら別の紙に記入していく。
文化祭の出し物が終わった後、俺は匙に頼まれて生徒会室で文化祭の決算を手伝っています。
実はリアス先輩たちがゲームをした日、会長さんたちもゲームがあったそうなのだ。
その詫びも込めて、忙しいであろう生徒会へ手伝いとしてやって来たのだ。
「それに今部室に行ったら、間違いなくイッセーとリアス先輩がイチャついてるだろう

からな。あの空間は俺には耐えられない」
「あら、本音はそっちですか？」
「いやいや、応援出来なかった事はホントに悪いと思ってるんですよ？」
そんな会話をしつつ、会長さんが笑いながら新しい紙の束を俺の近くに置いてくる。
まぁ確かにイッセーたちがウザいのも理由だけどね、殺意の波動に目覚めそうになる。
会長さんはそのまま他のメンバーの様子を見る為と言って、生徒会室から出て行ってしまった。
というか会長さん、ちょっと機嫌悪くなかった？
気のせいだといいんだけど……主に匙にシワ寄せがいく気がするし。
しかしまた多いな、これ本当に今日中に終わらせるの？
どんだけ生徒会に仕事放ってんだよ、ウチの学校は。
ちなみに会長さんたちが戦ったのはアガレスって女の人で、前に会ったらしいけどあんまり覚えてない。
『スクランブル・フラッグ』とかいう旗取り合戦の様なルールで戦って、なかなかの名勝負だったとか。
匙も修行の甲斐あって、龍王状態を維持して最後まで戦い抜き大活躍だったと会長さ

んたちが口々に褒めていた。
「にしてもゲームが終わってすぐに文化祭、しかも後始末までとかハード過ぎるだろ。幾ら体力ある悪魔だからって、そのうちみんな倒れるぞ」
「まぁこういう地味なのが生徒会の仕事だしな、仕方ねぇさ」
匙は力仕事を中心に作業を続け、苦笑しながら相槌を打つ。
ふむ、それなら匙にご褒美をやらねば。
俺は懐から一枚の写真を取り出し、匙に手渡す。
「よし匙、そんな頑張ってるお前に褒美をやろう。手を出せ」
「あん？　褒美って……こ、これは……!?」
俺の手渡した物を見た匙は、穴が開くんじゃないかってくらい凝視する。
そこに写っていたのは、会長さんが恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら魔法少女の格好をしている姿。
肩出しミニスカで布面積が少ない上に、魔法の杖まで装備している完璧仕様だ。
以前俺の動画を見られた腹いせに保管していた代物で、いつか匙に高値で売りつけようと思っていたけどしょうがない。
「どうだ？　セラフォルーさんの我儘で、リアス先輩と一緒にコスプレさせられた時の写真だ。俺も惜しいが、最近頑張ってるお前になら譲ってやらん事もない」

「ありがとうございますカズキ様ッ！　本当に、本当にありがとうございますううっ!!」

匙は写真を両手で持ち、床に額を擦り付けながら拝み倒してきた。

恥や外聞なんてまるで気にしない、なかなかの土下座だ。

なんかお前、最近進んでヨゴレ役やる様になったよね。

「誰の影響なんだか……困ったもんだ」

「私からしたら、貴方の方がよっぽど困ったさんですけどね？」

振り返るとそこには、眼鏡を怪しく光らせた美少女とその仲間たち。

それからの事はよく憶えていない。

何かをなくした気がするのだが、それも思い出せない。

だがその日、俺は何故だか心優しい美少女たちに物凄くスイーツを献上したい気分になった事だけは記憶している。

今日はやたらと疲れた。

フラフラと揺れる身体をなんとか気力で支えながら、ようやく自宅に辿り着いた。

明かりのついた玄関の取手に手を掛けようとすると、賑やかな声が聞こえてきた。

何だろう、玄関が騒がしい。
珍しくロスヴァイセさんまで一緒になって騒いでいるみたいだ。
俺は首を傾げながらも、ゆっくりと玄関の扉を開いた。
するとそこには――
「おぉ、おかえりカズキ！　遅かったな！」
「あらあら、随分とお疲れみたいですわね」
「あの、その……お、おかえり……なさ、い……」
チャイナ服に身を包んだゼノヴィア、朱乃さん。
そして丈の短さが気になるのか精一杯チャイナ服の裾を下に引っ張り、涙目になりながらも出迎えてくれたロスヴァイセさんがいた。
「その、カズキくんを労うならこの格好がいいとお二人がムリヤリ……あの、変ですよね？　ごめんなさい、いますぐ着替えて――」
「もう、思い残す事は何もない……」
「カ、カズキくん!?　どうしましょう、カズキくんがやたらといい笑顔のまま倒れちゃいました!?」
周りの声が遠くなっていく中、俺はハッキリと確信した。
桃源郷は、俺たちの理想郷は……ここに、確かにあったんだ……！

間話１０

「それじゃあ行きましょうか、忘れ物ないですか？」
「えぇ大丈夫、昨日のうちに用意しておきましたから」
文化祭が終わってから初めての休日、俺と朱乃さんはバラキエルさんに会う為にグリゴリの研究施設に向かう事になった。
この施設は関東の山奥に新しく作った場所だそうで、アザゼルさんが『関東圏にも研究所が欲しい』とほざいた所為で造られたらしい。
シェムハザさんから愚痴が飛んでくるのは俺なんだから、もう少し自重してくれないかなあのおっさん。
スコルとハティも来たがっていたが、今日はお留守番だ。
今日はゼノヴィアが遠くまで散歩に付き合ってくれるそうだから、それで勘弁して欲しい。
モグラさんは当然の様に頭の上に居座り、絶対着いて行くとばかりにしがみついている。
そんなに爪たてなくても置いてかないってば、血が出るからやめて下さい。

「なぁカズキ、本当に俺たちも一緒に行って良かったのか？　別に今日じゃなくてもいいんだぞ？」
「そ、そうですよぅ！　せっかく朱乃先輩とのお出かけなのに、邪魔したくないですぅ……」
俺が考え事をしていると、イッセーとギャスパーくんがそんな事を言い出した。
実はこの二人も一緒に行く事になっている。
なんでもギャスパーくんは自分の神器をより使いこなす為に、グリゴリの研究施設で能力について相談したいそうだ。
イッセーはその付き添いとして、半ベソのギャスパーくんに頼まれたらしい。
「気にしないでいいのよ、別にデートじゃないもの。それに出掛けたいのならいつでも出来ますから、ねぇカズキくん？」
「だそうだ、朱乃さんがいいってんだから気にしなくていいじゃね？」
「それならまぁ……いいのか、なぁ？」
イッセーは首を傾げていたが、ゴチャゴチャ言ってないでさっさと行くぞ。
事前に貰っていた転移装置で施設に移動すると、いかにもグリゴリのみんなが好きそうな近未来的な雰囲気を醸し出す部屋に出た。
扉は当然自動ドア。

空気の抜ける音と共に施設へ繋がる扉が開き、俺たちは先へと進んだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「おぉ、カズキくんじゃないか！　戻ってきたのかい、おかえり」

「なんだ、とうとう女の子達から追い出されたのか？　ざまぁ、ようこそ《モテない男（コチラ）の世界》へ」

「あ、聞いたよカズキくん。いくら家に綺麗な女の子が一杯いるからって、取っ替え引っ替えするなんてダメだよ？」

「あんたら揃って俺に恨みでもあるのか。てか誰だそのデマ流した奴は、大体見当つくけども」

カズキの案内に従って進んでいくと、この施設の研究員の人とすれ違う。

その度にカズキは絡まれ、頭を乱暴に撫でられたり何かと説教されたりと揉みくちゃにされている。

カズキも面倒そうな顔をしているが、なんだかんだ満更でもなさそうだ。

「カズキ先輩、なんだか嬉しそうですねぇ」

「ふふ、本当に皆さんと仲がいいのね」

ギャスパーと朱乃さんもその光景を微笑ましく見守っていて、なんだか俺まで嬉しくなってくる。

話には聞いてたけど、カズキは本当にグリゴリの人たちに大切にされてるんだな。
「あら？　カズキに朱乃じゃねぇか、イッセーとギャスパーもいんのか。なんでお前らこんなトコにいるんだ？」
さっき出会った職員さんがバラキエルさんのいるという区画を教えてくれたので、そこに向けて歩いていると書類っぽい紙の束を抱えたアザゼル先生が現れた。
そういやこの人は堕天使の総督だもんな、新しい施設が出来たら視察やら何やらの仕事でここにもいるか。
「いきなりラスボスの出現か、倒したら伝説のアイテムとか手に入るかな？」
「出会い頭になんなんだお前は……」
「そうだね、この人なんちゃって総督様だからラスボスはシェムハザさんか。裏ボスはベネムネさんだな、間違いない」
「ぶっ飛ばすぞテメェ」
突然現れたかと思ったら、カズキと取っ組み合う俺らの先生。
ていうかカズキ、お前そんな事言っていいの？
「結局お前さんらは何しに来たんだ？　この施設は出来たばっかで、カズキにも教えてなかった筈なんだが」
「朱乃さんがバラキエルさんに用事があるんだよ、シェムハザさんに聞いたらここに幹

部が集合してるって言ってたから。ギャスパーくんは神器についての相談で、イッセーはその付き添い」

　カズキが答えると先生は少し驚いた様に朱乃さんの方を見た後、ニタニタといやらしく笑い始めた。

「へ～、バラキエルにね～」

「……何か問題でもありますか？　変な目で見ないでください」

　あ、朱乃さんがぷりぷり怒り始めてしまった。

　でも本当に怒ってるわけじゃなく、照れて誤魔化してるだけだな。

　朱乃さん、カズキと一緒にいるようになってからこういう年相応の反応が増えた気がする。

　これが本当の朱乃さんって奴なのかもしれないな。

「おらおっさん、部下の娘にやらしい視線を向けてんな。シェムハザさんに言いつけんぞ」

「だからトップの俺より組織の人材を自由に使ってんじゃねぇよ、このクソガキ」

「久しぶりに帰ってきたと思ったら、廊下で二人して何をやっているのだ？」

　カズキと先生がお互いの襟を握り込みながら至近距離でガンの飛ばし合いをしていると、先生が来た方の廊下から白衣に瓶底メガネというあからさまに研究者っぽい人が

話しかけて来た。
「あ、サハリエルさん。お久しぶり」
「久しぶりなのだカズ坊、モグラさんも元気にしてたのだ？　それとアザゼル、例の資料が集まったからサインをくれなのだ」
「あ～はいはい、サンキューなサハリエル」
二人はサハリエルさんに気付くと互いに手を離し、カズキは挨拶先生は渡された紙にサインを記入していく。
「え～とカズキ、こちらはどなた……？」
「この人は幹部の一人であるサハリエルさん、月に関わる術式とか月そのものを研究してる。サハリエルさん、こいつが赤龍帝の兵藤一誠。こっちの小さいのがギャスパー・ヴラディ、吸血鬼で男の娘だ」
「赤龍帝は知っているのだ。はじめまして兵藤一誠氏、御武勇は聞いておりますのだ。それとギャスパー……くん、でいいのだ？　君にはちょっと実験に付き合って貰いたいのだ……！」
「ひ、ひいいいい！　ぼ、僕改造されちゃうんですかぁ……!?」
サハリエルさんは俺に挨拶した後ギャスパーの手を取りながら何処かへ拉致しようとしたが、前もって察知していたカズキがそれを止める。

な、なんか堕天使幹部ってこんな変わった人もいるんだなぁ。
「まだ全員の紹介終わってないんだからギャスパーくん連れてこうとしないの。そんでもって――――」
「初めまして、あのヒト……父が、お世話になっております。バラキエルの娘の姫島朱乃と申します」
「あー、バラさんの。噂では聞いてたけど、こりゃ美人さんなのだねー。そりゃ溺愛しちまうのだよ、今日はバラさんに娘さんを貰いにきたのだ？」
朱乃さんが挨拶した途端、サハリエルさんがとんでもない事を言い出した。
でもそうか、もしカズキが朱乃さんと付き合うなら、バラキエルさんに許可を貰いに行くのか。
堕天使幹部から娘さんを貰う、想像しただけで大変だな。
まぁ俺もぶちょ……リ、リアスをお嫁に貰うなら、グレモリー家に挨拶しに行かなきゃ行けないんだから同じかも。
というか、未だにカズキが誰が好きなのかわからない。
朱乃さんともいい感じだけど、ゼノヴィアやロスヴァイセさんともそんな感じだ。
それにソーナ会長とも噂があったし……あいつそういう話したがらないから、よくわかんないんだよなぁ。

「なんでそうなんのさ。朱乃さんが用事があるっていうから、一緒に来ただけ……あの、朱乃さん？　気付いてないかもしれないけど、俺の足踵で思いっきり踏んでるよ？」
「あら、ごめんなさい。気付きませんでした、大丈夫？」
「い、いえ……気にしないで下さい」
カズキは踏みつけられた足をプルプルとさせながら、朱乃さんから少しだけ距離を取った。
俺には朱乃さんがカズキの足目掛けて踵で踏みつけた様にしか見えなかったんだが……ワザとじゃないらしい。
あ、朱乃さんの愛が怖い。
「ほいよ、サインしたから後はお前の好きな様に進めていいぜ」
「しっしっし！　助かるのだ、これで色々と研究が捗るのだ。ギャスパーくんも一緒に来るのだ、カズ坊の友人ならキッチリお悩み解決してあげるのだ」
「は、はい！　カズキ先輩、朱乃さん、連れてきてくれてありがとうございました！イッセー先輩も、ここからは僕一人で頑張ります！」
「おう、気張れよギャスパー！」
ギャスパーはカズキと朱乃さんに頭を下げた後、俺に手を振りながらサハリエルさんの後ろについて行った。

あいつも強くなろうと頑張ってるんだ、俺ももっと頼れる先輩にならないと。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「暫く見ない間に、随分と立派になったんじゃないか？」

「そういう事言ってくれるの、タミエルさんとシェムハザさんだけですよ」

「それで今日は赤龍帝ちゃんと朱乃ちゃんまで連れてどうしたの？　遂にバラキエルに『お嬢さんを下さい』って言いに来たわけ？　バラキエル泣いちゃうわね！」

「やめて下さい、その質問は俺の足に効く。つうかそれならイッセー連れてくる訳ないでしょ？　あと無闇矢鱈に頭を撫でないでくださいってば！」

ギャスパーくんと別れた後、先生が幹部用の会議室に案内してくれました。

しかしそこにいたのは父ではなく、以前会った事のあるベネムネさんと綺麗なブロンドで頭部にサークレットを装着した長身の男性だった。

その方も幹部の一人で、名前はタミエルさん。

やはりカズキくんとは知り合いで、嬉しそうにカズキくんの肩をポンポンと叩きながら再会の挨拶をしている。

ベネムネさんは相変わらずカズキくんを猫可愛がりしていて、頭をしこたま撫でてはカズキくんに不満顔されている。

ここを訪ねて来てからずっと感じている事ですが、誰もが彼の事を受け入れ歓迎して

いる。

ここは、彼の帰ってこられる場所なんでしょう。

私たちの住んでいるあの家も、彼の帰る場所になれているんだろうか？

ついそんな事を考えていると、ベネムネさんが私に対して手招きをしてくる。

「朱乃ちゃん、ちょっとこっちにいらっしゃい。バラキエルについて、というかあの夫婦についてちょっとお話ししてあげるわ♪」

「夫婦について、ですか？」

なんでしょう、夫婦というのだから母さまの事も含まれているのでしょうけど……検討がつきません。

ベネムネさんの表情と性格から考えて、この方が面白い事なのでしょうが。

カズキくんとイッセーくんが離れた所で先生と話をしている間、私はベネムネさんの元でお話しをする事にしました。

……なるほど。

大変興味深い、素晴らしいお話しを聞く事が出来ました。

向こうの話も終わったらしく、父がいるというトレーニングルームに行く事に。

何故かカズキくんとイッセーくんが私の顔を見て怯えているように感じますが、きっと気のせいでしょう。

うふふ……ちょっと、父の元へ行く楽しみが増えてしまいました。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
おかしい。
こんなのは間違っている。
なんでこんな事になったんだ。
色々あってようやくバラキエルさんに会う事は出来た。
朱乃さんが持ってきたお弁当を、涙を流しながらがっつく姿に心打たれて。
この親子もようやく打ち解けてきたんだなと、安心していたのに。
それなのに……！
「うふふふふ！　まさか父さまが生前の母さまとこんな遊びをしていたなんて！　さすがは堕天使といった所かしら！　今日は私が母さまに代わって、思う存分ベシベシしてさしあげますわ！」
「ああ、朱乃！　料理だけでなく、鞭捌きまで朱璃に似てくるなんて！　私は、私はなんて幸せ者なんだ！　いい、とてもいいぞぉぉっ！」
なんで俺は恩人と同居人のＳＭプレイを見せられなきゃならんのだ！
朱乃さんがドＳなのは知ってたけど、バラキエルさんがあんなのとか信じたくねぇ！
なんの罰ゲームだドチクショウ!!

確かに昔から『バラキエルさんってすごい真面目なのに、なんで堕天したんだろうな～』って思っちゃいたよ？

何かあったのかな～って子供ながらに思ってましたよ？

でもさ、まさかドMだから堕天したなんて思う訳ないじゃん!?

一生知りたくなかったわこんな真実ッ!!

「ちょ、カズキ！　ショック受けてるのは見てりゃわかるけど、頼むから俺を助けてくれ！　このままじゃ俺、アルマロスさんに改造されちゃうよ!?」

『フフフ……とうとう俺は戦車と合体してしまうのか……おっぱいドラゴン戦車とか涙が止まらん……なぁ白いの、俺は何処に向かって行くんだろうな……？』

「なんだか僕、生まれ変わった気分です！　これからは段ボールミサイルヴァンパイアとして、日々精進していきたいと――」

なんだか周りが騒がしいけど、今の俺にはどうでもいい事だ。

友達の悲鳴や苦悩の言葉も、後輩のよく分からない宣言も聞こえない。

小さい頃からの恩人の痴態や、親しい女性の愉しむ姿なんかも当然見える訳がない。

そして何も感じたくなくなったので――そのうち俺は、考えるのをやめた。

間話１１

文化祭が終わってから数日経った、とある休日。
空は快晴、暑過ぎず寒過ぎない素晴らしい天気。
そんな出掛けるのに最適な環境で私ゼノヴィアは、一緒に生活をしている朱乃さん、ロスヴァイセさんと一緒に近くの駅へとやってきている。
休日だけあって駅前には多くの人で賑わっていて、人それぞれが思い思いの休日を楽しんでいる。
でもなぜだろう、私たちの周りだけ人が少ない。
以前アーシアやイリナと遠出した時は、軟弱な男がやたらと声を掛けてきたりと鬱陶しかったものなのだが……まぁ邪魔がないのはいい事だ。
なぜか遠巻きに見られている気もするが、きっと気のせいだろう。
「あの、ゼノヴィアさん？　この格好はかえって目立つと思うんですが……」
「何を言うんだロスヴァイセさん、この格好はリアス部長がアドバイスしてくれたものだぞ？　きっと間違いはない」
「リアスったら……いえ、あの子時々抜けてるから、これも本気なのかも」

ロスヴァイセさんと朱乃さんが何やら呟いているが、今はそんな事を気にしている時ではない。

何せ今日は、重大な任務に臨まなければならない。

任務内容はターゲットである男性の監視、及び行動目的を探る事。

この男、凄まじい手練の上に恐ろしく勘が鋭い。

わたし一人では荷が重いと判断し、朱乃さんとロスヴァイセさんに同行を求めた次第だ。

ターゲットが立ち止まってからそろそろ一時間経つ。

私の情報が間違いなければ、間も無くとある人物と接触する筈なんだが……

「あら？　カズキくん、もう着いていたんですか？」

「あぁ会長さん、こんにちは」

どうやら接触した様だ。

そう、今回のターゲットとはカズキ。

そして接触対象は駒王学園生徒会所属、ソーナ・シトリー会長だ。

あろう事かあの男、私たちという物がありながら今日はソーナ会長とデートするつもりなのだ。

先日カズキが風呂に入っている時に、カズキの携帯画面に会長の名前が出た時はどう

しようかと慌てた物だ。
　最初はメールを開いて確認しようかと思ったのだが、桐生が貸してくれた雑誌に『勝手に携帯を見るのは×!』と書いてあったのを思い出し伸ばした手を引っ込めた。
　その後すぐにこの事を朱乃さんとロスヴァイセさんに相談した結果、当日カズキが出掛けてから尾行する事になったのだ。
「早いですねカズキくん、まだ待ち合わせまで三十分はありますよ?」
「待ち合わせしてるのに女性より後に来る男はクズだと、ベネムネさんに叩き込まれたもので」
　ソーナ会長は腕時計を確認しながら尋ね、カズキはそれに肩を竦めながら答える。
　なんだろう。
　その光景が妙に様になっていて、なんだかとっても面白くない。
「それは、デートの時の話では?」
「男と女が二人で出掛けりゃ理由は何であれデートみたいなもんでしょう?　まぁ取り敢えず揃ったんですし、ちょっと早いけど移動しますか?」
「ふふ、そうですね。行きましょうか」
　カズキとソーナ会長はいくつか言葉を交わした後、二人並んで駅へと歩いて行った。
「ぐぬぬ……なんだあれは!　私と出掛ける時は、早く出たりなんてした事ないくせに

！」

「あの……いつも同じ家から出発するんですから、待ち合わせのしようがないのでは……？」

「それよりも急ぎましょう、このままでは二人を見失ってしまうわ」

む、それはいかん！

私たちは隠れていた物陰から飛び出し、駅の中へ消えた二人の後を追おうとする。

すると、私たちと同時に別の物陰から誰かが飛び出してきた。

お互いにビックリして動きを止めてしまったが、その顔に見覚えがあった。

「うぉ!?　っと、あれ？　あなた達は……！」

「お前は確か……匙元士郎？」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

やぁ、みんな！

俺の名前は匙元士郎！

駒王学園生徒会書記にして、そこの会長である上級悪魔ソーナ・シトリー様の《兵士》をやらせてもらってる高校二年の新人悪魔だ！

会長は厳しくて厳しくて時々厳しいけど、いつかこの人に頼られる男になるのが俺の夢なんだ！

「嘘つけ、お前こないだ『会長とできちゃった結婚するのが夢』って言ってたじゃねぇか」
「やめろぉ！　爽やかな感じでいこうとしてる時に、そう言う事言うのはやめろぉ！　俺にはちゃんと『教師になる』って夢もあるッ!!」
「でき婚の所を否定しないのは評価してやろう。ホレ、腕立て三百追加な」
「なんでだよ!?」
「え、なに？　冥界に行かされる前にわざわざ特訓付き合ってあげてるこの優しい俺に、なんか文句があるのかね？」
「うぐ……ない、です」
「素直でよろしい、追加は二百にまけてやろう」
「ドチクショウッ!!」
　俺は泣き言を漏らしつつ、カズキの飼ってるフェンリル二匹を背に乗せたまま腕立て伏せを続ける。
　この傍若無人で唯我独尊な男の名前は、瀬尾カズキ。
　今は堕天使になったけど、人間の頃からアホみたいに強い変態じみた奴。
　色々と世話をかけたりかけられたりしていて、最近よく一緒につるんでる友達でもあり、当面の俺の目標だ。
　カズキは本当に強い。

俺と同期の悪魔である兵藤は赤龍帝の力を使いこなしパワーや破壊力で群を抜いてるが、カズキの強さは少し違うと思う。

何と言うかこう地の力を鍛えるというか、鍛錬の賜物って感じの『練り上げられた強さ』っていうか……上手く言えないけど、なんかそんな感じだ。

もちろん兵藤が赤龍帝の力にあぐらをかいてるなんて言う気はない。

あいつの気合いと根性は素直に尊敬してるし、成長スピードや自分の夢に対する想いは凄まじい物があると思う。

以前レーティングゲームした時はギリギリ勝てた（殆ど引き分けだったけど）が、今やったら多分勝てない。

というか、ほぼ間違いなく力に押し潰されてボロ負けするだろう。

そんな兵藤すら、カズキには模擬戦でボロカスにされる。

肉弾戦ではどんなにフェイントを織り交ぜて攻撃しても、先を読みきられてカウンターで倍返しにされるからだ。

もちろん何でもアリなら勝負はわからないかも知れないが、それでも勝てる気がしないと兵藤とドライグは言っていた。

そんなカズキだが、天才かと言うとそうでもないらしい。

堕天使の総督であるアザゼル先生は、カズキの強さは『積み上げられた経験による強

さ』だと言っていた。
　カズキは十歳の頃からグリゴリの施設で育ち、そこで堕天使の幹部や白龍皇、孫悟空なんかと訓練しながら五年間生活した。
　そこで自分よりも速い相手を捉える感覚と、自分よりも力の強い相手を翻弄できる技術と駆け引きを身につけたのだと言う。
　アザゼル先生曰く、カズキは『鍛錬次第で誰もが到達出来うる極地の一つ』なんだそうだ。
　だったら、俺にだって近づく事は出来るはずだ！
　追い越せないまでも、追いつける様に頑張る事は出来るはずなんだ！
　努力して努力して努力し続けて、いつかこいつに並んで見せる!!
　そしたらいつか会長も振り向いて……！
「あぁそうだ、言ってなかったけど明日は用事あるから、お前の訓練付き合ってやれない」
　俺が必死に腕立て伏せをやっていると、カズキが突然思い出した様にそんな事を言ってくる。
　なんだろう、なんだか何時もと様子が違う気がする。
「へ？　明日って日曜だろ？　また新しい仕事でも入ったのか？」

「んぁ～……まぁ、そんなトコ」
「……？　まぁいいや、気にせず頑張ってこいよ」
違和感を覚えつつも、その時の俺は体力的にキツかった事もありその場はそれで終わった。
だがその後、俺は見てしまったんだ。
カズキに頼まれてタオルをとってやる時に、たまたま目に入ってしまった携帯の液晶。
そこに表示された名前は、『会長さん』。
それだけだったらなんの問題ない、メールのやり取りなんて今どき誰だってする。
だが次の瞬間、俺は頭を鈍器で殴られた様な衝撃を受けた。
書かれていた件名は『明日の待ち合わせについて』。
冥界の番組？
いや、明日は収録はないと会長自身がいっていた。
単に用事があった？
それならなんでカズキはさっき俺が聞いた時にはぐらかした。
……ははは。
そうか、そういう事か。

用事ってのはつまり、二人でこっそりデートって事なんだな。
わかったわかった、全て把握した。

一人で簡単に幸せに、なんて……なれると思っていないよな……？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「なるほど、それでそちらも後を追っていたのですね？」
「カズキは以前『男友達が幸せになろうとしたら全力で妨害する、そういう友情もある』って言いながら、クラスの男子のラブレター強奪に加担していた。なら当然、自分がそういう目に遭う覚悟は出来てる筈だ」
「あぁ、それなら私も見ていた。最後はカズキも『お前もモテてムカつくんじゃ！』と言われて、クラス中の男子から狙われていたな」
「学校で何をしてるんですか、カズキくんは……」
只今電車で移動中。
カズキくんたちに見つからない様に、一つ隣の車両に乗っています。
朱乃さんは目が虚ろな匙くんの話を聞いて納得した様に頷き、ゼノヴィアさんの話を聞いた私は頭が痛くなりこめかみを指で押さえながら深く溜息を吐く。

まったくもう、そんな事ばかりしているのに成績はいいからイマイチ怒りにくい。

……っと、結構揺れますね。

「ふふふ、なんですかそれ……きゃ!?」

「っと、会長さん大丈夫ですか？　この電車結構揺れますから、ちゃんと手すり握った方がいいですよ」

「ご、ごめんなさいカズキくん」

「いえいえ。女性一人くらいなら支えられますよ、鍛えてますから」

突然の揺れで態勢を崩したソーナさんを、カズキくんが抱き留め支えてあげている。

やっぱり男の子ですね、頼りになります。

でもなんでしょう、二人を見ると少しばかり胸がざわつきます。

むぅ……ちょっとソーナさんが羨ましい。

「カ、カズキの野郎！　ドサクサに紛れて会長に抱き着きやがった!?」

「あれが『セクハラ』という奴か、現行犯だなよし斬ろう」

「あらあらうふふ、カズキくんたら大胆なんだから……」

「いえあの、今のは電車の揺れで倒れかけたソーナさんを支えてあげただけですから……」

取り敢えず私が今日やらなきゃいけない事は、この三人がヒトの道を外れない様にす

る事でしょうか。
　はぁ……マネージャーって、こんな事にも気を使わなければならない物なのでしょうか？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「あら、このパスタ美味しい」
「でしょ？　クラスの奴に教えてもらってから何回か来てるんですけど、ここの凄い美味しいんですよ」
　ケッ、何がパスタだ！
　ラーメンのが美味いってんだよ、ちくしょうめ！
「うぉ、冷たッ!?」
「ふふ、お昼のお返しです。冷えてて美味しいですよ？」
「こりゃドーモ。うはぁ～、身体に染み渡るぅ～……」
　会長にジュースを奢ってもらうだと!?
　俺だって頑張りに頑張り抜いた時にしか貰えない上に、ほっぺに缶をくっつけるなんていう青春っぽいサービスまで……ちくしょうっ!!
「これなんてどうでしょう？　機能性や利便性に優れていると思うのですが……」
「ん～……使うかなぁ？　こっちなんてどうです？」

「なるほど、そういう物もあるのですね……やはりカズキくんと一緒に来て正解でした」
　商品を一つずつ手に取っては、顔を寄せ合ってあれこれ相談しあってる……いいなぁ、羨ましいなぁ……ぢぐじょう〟ッ!!
「なぁ二人とも、匙の奴が血の涙を流していて怖いんだが……」
「想いが目から溢れているのよ、そっとしておいてあげましょう?」
「匙くんのおかげで、二人が冷静になってる……よかった、でいいのでしょうか?
ひぃ、こっち見た!?」
　なんだ、なんなんだあの光景は!?
　なんで俺は想い人と友人の仲睦まじい姿を、こんなにもまじまじと見せ付けられなければいけないんだ!?
　しかもその二人の姿がやけに絵になっていて、つい自分でもお似合いだなと思っちまうのが更に悔しい!
　なんか会長もすごい楽しそうだし……何やってんだろう、俺。
　そうだ、ここは想い人の幸せを願って大人しく身を引くのが男ってもんじゃないか。
　カズキならきっと会長を幸せにしてくれる、なら俺はもう……。
「む、移動を始めたぞ。あっちの方角は……なに!?」
「そんな、あそこは……」

「ホ、ホテル街いぃぃ!?」
「追うぞオラァ!!」
なんて簡単に諦めきれるわけねぇだろうが！
何のために今まで頑張ってきたと思ってんだ!?
ふざけんな、会長の処女は俺のもんだぁ!!

「さて、四人とも。簡単に釣り上げられた気分はどうだ?」
「「「スミマセンデシタ……」」」
はい、罠でした。
俺たちがついて来ているのを初めから分かっていたカズキが、俺たちをおびき出す為の行動にみんなして喰いついてしまった。
当然カズキはホテル街なんかに行く気はなく、今いるのはその手前にあるそれなりに大きな公園。
そこで俺たち四人は纏めてとっ捕まり、ベンチに座る会長とその横に仁王立ちしているカズキの前で正座させられている。

聞けば朝からずっと気付いていたというじゃないか。
ちくしょう、思いっきりカズキの掌の上で踊らされてた……！
「全く、あんなバレバレの尾行しやがって。やるならもっと上手くやれ。俺たちが近付くたびにアタフタするのが面白くて、笑いを堪えるのが大変だったんだぞ？」
え、そこなの？
怒るポイントそこなの？
「あの、もうそのくらいで……みなさん反省してるでしょうし」
うぅ、流石は会長だ！
何時もは厳しくて厳しいけど、俺にとっては天使です！
「まぁ会長がいいならいいですけど……」
「それなら、その話はこれでおしまいです。それにせっかく匙もいますから、この場で渡しちゃいますね？」
渡すって何を……？
俺がマヌケ面を浮かべていると、会長はカズキが持っていた紙袋を受け取り俺の前に差し出してきた。
「匙、いつも生徒会や悪魔の仕事を頑張ってくれてありがとう。先日のレーティングゲームでも、貴方の存在にとても助けられました。これはその御礼です」

俺は思考が纏まらないまま、ゆっくりと手を伸ばしてその紙袋を受け取る。
それを暫く見つめた後、俺はゆっくりと口を開いた。
「御礼って……もしかして、今日はこれを買う為に？」
「ええ、そうですよ。何を送ればいいのか悩んでいたら、カズキくんが声を掛けてくれたんです。『自分も家の人たちに贈る物に悩んでるんで相談に乗ってください』って」
そうか……そうだったのか。
だから色んな店を回って二人で相談してたのか……。
「あら？　ということは……」
「私たちにも、贈り物が？」
「おう、もちろんあるぞ。俺のセンスだけだと怪しいからな、会長さんと相談しながら俺が選んだスペシャルな奴だ」
「おおぉ、カズキ！　私は信じていたぞ、お前が浮気なんてする筈ないと!!」
「嘘こけ、うっかり剣士。どうせお前が騒ぎの元凶だろ？」
「なぜわかった!?　いや、その件についてはちゃんと謝るから、早くプレゼントとやらを見せてくれ！」
「やかましい、家まで我慢しなさい」
『ブーブーッ!!』

「朱乃さんとロスヴァイセさんまでなにやってんですか……」

カズキが紙袋を見せつけるように掲げるとゼノヴィアさんが飛び掛るように抱きつき、それをカズキが頭を押さえつけながらなだめていた。

そしてプレゼントを確認しようと、三人ともカズキに群がり……って、そうだ！

「ありがとうございます、会長！　その、中身見てもいいですか!?」

「構いませんが……その、生憎と男性に贈り物なんてしたことがなかったので、気に入らなかったらごめんなさい」

「何言ってんですか！　会長から貰ったものなら、何だって大切に……うおぉ、タオルだーッ!!」

包装紙を傷付けない様に丁寧に剥がし中身を拝見すると、有名なメーカーのロゴが入ったスポーツタオルだった。

嬉しさのあまり、タオルを頭上に掲げながら広げてしまった。

「カズキくんが『コレだったら、きっと擦り切れるまで使い切りますよ』といっていたので、デザインは私が選んだのですが……どうです？」

会長は少し不安そうな顔で聞いてくるが、不満なんてある筈がない！

会長が俺の為に、俺だけの為に選んでくれたものなんだから！

「最高です！　本当にありがとうございます、一生大切にします!!」

「ふふ、匙は大袈裟ですね」
俺の返事を聞いて、会長は口元を手で隠しながら笑っていた。
あぁ、今日はなんて最高なんだ！
俺、これからも会長についていきますッ!!
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
今日はカズキくんと一緒に、遠くのデパートまで買い物に出掛けました。
ずっと尾行さられていたのは少し恥ずかしかったですが、プレゼントも無事に選べたしそれをあげた匙はすごく喜んでくれた。
今日一日、歩き回った甲斐があったというものです。
他の眷属の子たちに渡す物も用意できたし、今日は大変充実した一日でした。
自宅に着いた後椿姫から電話があったので、今日の出来事を話してみた。
すると椿姫はやたらと興奮しながら、どうだったのかと尋ねてきた。
楽しかったと答えたら、そういう事じゃないと叱られてしまった。
私にどうしろと言うのでしょうか。
カズキくんをどう思っているのか、ですか？
私の数少ない男性の友人、でしょうか？
ですが、それだとどうにも他人行儀な感じがしますね。

彼には色々と助けられてますし、もう少しこう……うぅ、上手く言葉に出来ません。

はい？　好きなんじゃないのか？

そういったものではないと思いますが……生憎と、未だに恋というものをした事のない私には難しい話です。

確かに彼と話したりするのは楽しいですが、それが恋愛感情なのかと言われると首を傾げてしまう。

今日あった事を思い浮かべろ、ですか。

今日は……そうですね、電車に乗った時に態勢を崩してしまったのですが、支えて貰いました。

抱きつく様な態勢にはなりましたが、そもそも事故ですし彼も動揺した様子はありませんでしたよ？

男性はそういう時嬉しくてもなんでもない様な顔をするもの……なるほど、勉強になります。

あとはお昼をご馳走になったり、お礼にジュースを渡したり……あぁ、最後に今日のお礼だと言われてヘアピンを貰いました。

そのくらいでしょうか……っなんですか、いきなりそんな声を出して。

それはもう完全にデート？

そう、なのでしょうか？
そういえば、カズキくんも最初にそんな事を言っていた様な……だから大きな声を出さないで。
いえ、別に告白などはしてもいないしされてもないです。
というか、何故そんな話になるんですか？
私たちはただのお友達ですよ、それじゃあ切りますね？
私は電話越しで騒ぐ椿姫の声を無視して、通話の終了ボタンを押す。
全く、そんなに興奮する様な話ではないでしょうに。
他人事なら、私も似た様な反応をするのでしょうか？
リアスは兵藤くんとの事を全て話してくるので、余り参考になりませんし。
でも、そうですね。
電車で抱きとめられた時は、照れというか恥ずかしさというか……胸の中で、よくわからない感覚が湧いてきました。
あれはなんだったのか……今考えても、よく分からないです。
今日はもうお風呂に入ったら寝てしまいましょう、なんだか無性にシャワーを浴びたくなりました。
私は鞄を机に置き、メガネとヘアピンを外す。

そしてカズキくんから貰ったヘアピンを袋から取り出して少し見つめた後、机の引き出しにしまった。

使わないのも失礼だと思いますが、これはもう少し大切に取っておくとしましょう。

私は一人そう思った後、シャワーを浴びるべく浴室へと向かった。

間話１２

「はぁ……はぁ……はぁ……！」

俺は走り続けた。

足を止めてはいけない。

少しでも緩めれば、彼女たちはすぐに追いついて来る。

油断なんて、出来るはずもない。

俺は角を曲がった瞬間、掃除用具なんかの備品が纏めて置いてある物陰に音もなく飛び込み息を殺す。

両手を口に力一杯押し付け、呼吸音すら漏らすまいと必死だ。

そんな俺の横を、一人の女性が通りがかる。

彼女こそ、俺を追い立てる追跡者の一人。

「うふふ……カズキくんたら、鬼ごっこの次はかくれんぼ？　そんな子どもらしいところも素敵ですけど……私と一緒に、もっと大人の遊びをしましょうねぇ？」

追跡者である朱乃さんはどこか狂気すら感じさせる笑みを浮かべ、長く美しい黒髪を左右に揺らしながらゆっくりと歩いてくる。

大人の遊びってなに!?
俺ってば捕まったらどうなっちゃうの!?
やばい、怖すぎて涙出てきた!?
「……ここにはいないのかしら？　カズキく～ん、どこにいるの～？　素直に出て来てくれたら、優しくしてあげますわよ～……」
一通り見渡した後、朱乃さんは再びゆっくりと廊下を歩いて行った。
足音が遠くなってゆき一切の音が消えてから小さく、しかし物凄く深い息を吐き出した。
昔からこういうスニーキングはヴァーリさんに無理矢理やらされてたけど、ここまでプレッシャーを感じるのは初仕事以来だ。
くそ、なんだって俺がこんな目に……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
今日の放課後。
俺はいつもの様にオカ研部室へと赴き、イッセーたちと無駄話をしながら駄弁っていた。
女性陣は珍しく遅れていて誰もおらず、木場とギャスパーくんは罰ゲームでジュースを買いに売店へ足を運んでいて。

生徒会の仕事がない匙が、珍しく俺たちの所に遊びに来ていた。
「なぁ、そろそろ俺にもカード配らせてくれない？」
「お前がカードを配るとありえないくらい偏るから却下だ、なんでお前だけ毎回初手からフォーカード揃ってんだよ」
「そりゃそうなる様にシャッフルしてるし」
「素直なのは良い事だと思うけど、それが原因だって気付いてくれると尚良いと思うんだ。にしてもぶちょ、じゃなくてリアス達少しおそ……ぅお!?」
木場たちを待ってる間にポーカーをやりつつ時間を潰していると、突然大きな地鳴りと共に何かが爆発する様な音が辺りに響き渡った。
暫くすると地鳴りも収まり、すぐに先ほどと同じ静寂が訪れる。
何事かと部室を出て確認してこようとしたその時、何処からともなく声が聞こえてきた。
『……よし、繋がったか！　おいカズキ、聞こえてるか!?』
「うわっ、ビックリした！」
「この声は……アザゼル先生？」
そう、今回の元凶であるアザゼルさんからの通信だった。
なんでもこの人、最近なんとなく思い付いた『感情を抑制する装置』を開発してたら

誤作動を起こして暴走させたらしい。
装置が暴走した時に作業してた異空間からこの旧校舎に転移してしまい、被害が広がらない様に人払いと結界で隔離は出来た。
しかしなんらかの作用で今度は自分が入れなくなってしまったので、中にいる俺たちにその装置を止めるか破壊して欲しいそうだ。
装置はそこそこ大きいから見れば分かる筈。
しかし旧校舎内にいる他の連中は装置の所為で何かしら影響を受けてる可能性があるから注意しろ、か。
毎度毎度よく分からないの作ってんな、この人は。
今度は何を見てそんなモン作ろうと思ったんだが……クソが、後でシバいてやる！
『にしてもカズキはモグの力で無事だと思ってたが、イッセーと匙も無事な上に一緒にいてくれて助かった。どうにもドラゴンにはこの手のものは効きにくいらしい、いいデータが取れたぜ』
「あんた全く反省してないだろ？　この件が片付いたらシェムハザさんに言って、研究費用減額して貰うからな」
『ちょ、それはひで』
そんな事を話していると、突然通信が途切れた。

それと同時に開け放たれる部室の扉。
大きな音と共に開かれた扉に視線をやると、そこにはアーシアさんとリアス先輩が扉を開けたままの姿勢で立ち尽くしていた。
「リアス、アーシア！　よかった、二人とも無事だったんだぶほぉ！」
イッセーが駆け寄ろうとするのを、襟首を引っ掴んで強引に止める。
急に引っ張ったのでイッセーが咳き込んでいるが、まぁ問題ないだろう。
その行動で匙も違和感を感じ取ったのか、二人を観察しつつ身構える。
「ぐっ、ゴホッ……カズキ、頼むからいきなり引っ張るのはやめ……ふ、二人とも？」
「フフ……どうしたの、イッセー？　私の愛しいイッセー、何故私から離れようとするの……？　私たちは恋人なのだから、一時も離れてはいけないのよ……？」
「そうですよイッセーさん。リアスお姉さまと一緒に、私の事も可愛がって下さい……私、イッセーさんになら何をされても……」
イッセーが咳き込みつつ抗議していると、二人が怪しげな笑みを浮かべながらイッセーににじり寄っていったのだ。
その雰囲気に流石に違和感を覚えたイッセーは、思わず後ろに下がる。
焦点が定まってないし動きもおかしい、明らかに異常だ。
「お、おいカズキ。二人ともなんだか様子が……」

「アザゼルさんの言ってた装置の影響って奴なんだろうが……もしかしてアレか？『感情を抑制する装置』が誤作動起こしたせいで、『感情を増幅する装置』に変わったって事か？」

「えっと、それってつまり……？」

「捕まったら大変な事になるんだろうな、色んな意味で」

匙の疑問に、俺は自身が考えた仮説で答える。

あの二人が口にしてる言葉的にも雰囲気的にも、あながち間違ってない気がする。

そして俺の言葉を聞いたイッセーから、何やら邪な波動を感じた。

こいつ、妄想で鼻の下伸ばしてやがる。

「おいイッセー。別にわざと捕まってもいいけどな、あの二人が正気に戻ったら絶対に落ち込むぞ？」

「そ、それはダメだッ！　エロい事はしたいけど、めちゃくちゃしたいけども！　悲しませるのはノーサンキュー!!」

イッセーは頭を振り頬を叩いた後、真面目な表情に切り替える。

よしよし、俺の友達はそこまでゲスではなかったようだ。

俺は正気に戻ったイッセーの腕を掴んだ後、窓を開ける。

うん、準備完了。

「つーわけでイッセー、あの二人は任せた。俺と匙は装置を探してぶっ壊してくる」
「……へ？　あの、カズキさん？　なんで窓を開けたの？　なんで腕を掴む手に、やたらと力が入ってるの!?」
　俺はイッセーの言葉を無視したまま、力の限りイッセーをグラウンド目掛けて放り投げた。
「ほうら二人とも、取ってこーいッ!!」
「カズキィィッ!!」
「待って下さい、イッセーさん！」
「逃がさないわよ、イッセー！」
　俺の目論み通り、二人はグラウンドに投げ出されたイッセーを追って廊下を走って行った。
　やっぱり俺たちは眼中にないな、やっぱり俺の仮説通り『感情を増幅する』効果に変わってるみたいだ。
「よし、イッセーの自己犠牲の精神を無駄にする訳にはいかない。今のうちに装置を探そう！」
「お前って、本当に清々しいほどゲスいよなぁ……」
　匙のぼやきをスルーしつつ俺たちも廊下を出ると、廊下の端から声が聞こえてきた。

普段から聴き慣れているが今は絶対に聞きたくない、そんな声。
「うふふ……カズキくん、やっぱりそこにいたのね？」
俺が振り向いたその先には、何時もと雰囲気が違う朱乃さんが立っていた。
前髪が垂れて目は見えないが、そんなもの見なくても異常なのが手に取るように分かる。
アレは、ヤバイ。
「よし、匙よ。ここから俺たちは運命共同体だ、共にこの困難を乗り越えようじゃないか」
「ハハ、笑わせんな。潔く囮になれ」
俺の真摯な想いの籠った言葉は、匙の無慈悲な一言とケツに打ち込まれた蹴りと共に切り捨てられた。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
――そして、現在に至る訳だ。
ちくしょう匙め、まさか本当にあのまま俺を囮にして逃げるとは、なんて薄情な奴なんだ。
モグラさんもこの雰囲気に怯えてしまい、俺の中に引きこもっちゃって力を貸してくれないし……うぅ、怖いよぅ、怖いよぅ。

朱乃さんのあの目は絶対に正気じゃなかった、捕まったら確実にマズイことになる！
とにかく物陰から出て、ひたすら見つからない様に慎重に行動を――
「みぃ～つけたぁ♪」
「ぴぎぃッ!?」
ビックリした！
ビックリした!!
ビックリしたッ!!
突然後ろから声掛けられるから変な声出たじゃねぇか！
ていうか、いきなり見付かっちゃったよ!?
オマケに急いで飛び退いたから、辺りの備品を蹴散らして大きな音を立ててしまった。
急いで移動しないと、朱乃さんが戻ってきてしまう！
驚きつつも四つん這いの姿勢で声のした方を確認すると、ロスヴァイセさんがしゃがんだ状態のまま膝に頬杖をついてこちらを笑顔で見つめていた。
その表情は実に楽しそうで、まるで子どもがオモチャを見つけた時の様だった。
「ロ、ロスヴァイセさん……？」
「何ですかカズキくん？　どうして私のことを見て、そんなに怯えた顔をするんです？」

ロスヴァイセさんは笑顔を崩さずゆっくりと立ち上がり、俺に話しかけながら徐々に距離を詰めてくる。

俺もすぐに立ち上がり、いつでも走り出せる様に足に力を貯める。

どんなに普通に見えたとしても、ここに俺たちの味方になってくれる女の人なんていないのだから。

「そうそう、さっき朱乃さんとかくれんぼしてましたよね？　実は私も参加してたんですよ、だからカズキくんを見つけた私は……あなたのこと、好きにして良いんですよね！」

「良い訳ないでしょ!?」

飛び掛かってきたロスヴァイセさんをなんとか躱し、音を立てないとか考えずに全力で走りだす。

後ろを振り返ると歩いて追い詰めてくる朱乃さんと違い、ロスヴァイセさんは走って追いかけてきた！

それにしても怖い、なんかもう目が捕食者のソレだ！

「待ってカズキくん！　大丈夫、私も少しだけですが先輩ヴァルキリーから聞き齧った知識がありますから！」

「嫌だぁぁぁ！　俺の知ってるロスヴァイセさんはそんな事言わないぃぃぃ！」

逃走しながら叫ぶというアホな真似をしつつ全力で逃走する俺だったが、隠れる場所が思いの外多い校舎のお陰でなんとか難を逃れる事が出来た。
もうヤダ、この校舎は今ヘタなお化け屋敷よりおっかない！
このままだと俺、いい歳こいてホントにちびっちゃうよ。
息を整えた後に外の様子を伺うと、グラウンドで元気に走り回る匙とイッセーの姿が見える。
イッセーは相変わらずリアス先輩とアーシアちゃんに追い回され、匙の奴は同じ生徒会メンバーである花戒さんと仁村さんに襲われていた。
「アハハ、待ってよ元ちゃん！」
「そんなに急いで何処に行くんですかぁ？　私たちと遊びましょうよぉ～」
「ひいいぃ!?　桃に留流子、頼むから正気に戻ってくれ！　死んじゃう、そんな攻撃されたら俺死んじゃうから!?　た、助けてくれ兵藤！　主に盾になるとかそういう感じで!!」
「ざけんな匙！　こっちは掠っただけで大ダメージな滅びの力が、アホみたいにバンバン飛んで来るんだぞ!?　お前こそ俺の為に犠牲になれぇ!!」
うん、実に醜い押し付け合いだ。
そのくせお互い攻撃はちゃんと避けてるし、あいつらなんだかんだで良いコンビだ

な。

しかし自分だけが大変な目に合ってる訳じゃないと知ったら、なんだか少し落ち着けた。

「うふふ……カズキくぅん、そこにいるのかしらぁ？」

俺が呑気にイッセーたちを観察していると、近くから朱乃さんの甘ったるい声が聞こえてきた。

マズい、朱乃さんが追いついてきたのか!?

取り敢えずこの部屋に逃げ込んでやり過ごすしか……！

「うぉ!?」

そう思い扉を開けた瞬間、何者かに腕を掴まれそのまま部屋に引きずり込まれてしまった！

滑るように部屋の中央に投げ込まれた俺が入ってきた扉の方を見ると、そこにはゼノヴィアと小猫ちゃんが立っていた。

嘘だろ、人の気配なんて……あぁ、小猫ちゃんの仙術で気配を散らしてたのね。

そういやこないだ教えたね、俺が使っても朱乃さんとロスヴァイセさんが何故か見つけてくるからすっかり忘れてたわ。

「カズキ、待っていたぞ。さぁこっちに来い、私はお前との子どもが欲しいんだ……」

「にゃあ……センパイ……」
二人も例に漏れず、やっぱり暴走してる。
小猫ちゃんまでこっちに来るのか……好意が僅かにでもあれば、それが増幅されて暴走するのか？
小猫ちゃんには初代さんから教わった仙術を色々教えてるから、色々と厄介だな。
それにしてもこの作戦、小猫ちゃんが考えたのか？
朱乃さんたちに追い立てさせてここまで誘導とか、随分と手の込んだ真似を……あ、ゼノヴィアは論外で。
あのアホの子に、こんな作戦考えられる訳がない。
「ふふ……ようやく会えましたね、カズキくん」
聞き覚えのある声に反応して振り向くと、そこにいたのはメガネを怪しく光らせながら教室に入ってきた会長さん。
その後ろから、朱乃さんとロスヴァイセさんも続いて入室してくる。
そうだよな、花戒さんたちがいたんだから会長さんがここにいたとしてもおかしくないか。
にしてもマズい、閉じ込められてしまった。
「なるほど、これを考えたのはアナタですか会長さん」

「私だけじゃないですよ。カズキくんを捕まえたくて、みんなで頑張ったんです。ですから……ご褒美、くれますよね？」

俺が話しかけると会長は怪しく微笑み、シャツのボタンを一つ外しながらわざとらしくカチャンと音を立てて扉の鍵を閉めた。

……おい、なんだその異様な色気は。

あなたそんなキャラじゃないでしょう。

「俺ってばこんなにモテモテだったのか、ビックリだな」

「そうですよ？　ですからみんなの気持ち、カズキくんなら応えてくれますよね？」

会話をしつつ、俺を包囲する様にみんながジリジリと詰め寄ってくる。

俺自身も軽口を叩きながら、唯一の逃げ道と思われる窓際までゆっくりと後退していく。

まだ装置が見つかってないんだ、ここで捕まる訳にはいかない。

「俺には荷が重いので、逃げさせてもらいまぶふぉ!?」

俺は窓際に到着した途端、素早く鍵を開けて窓を開け放ち脱出しようと飛び出した。

しかし次の瞬間、何もないはずのその場で壁の様な何かに阻まれ、顔面を強打してしまった。

ぐうぅ超痛い、てか何これ！

何も見えないのに感触だけあるぞ!?
「いやですね、そんな逃げやすい場所をそのまま放置なんてする訳ないじゃないですか。この教室の周りには床や天井も含めて術式の壁を張り巡らせてますから、簡単には逃げられませんよ？」
会長さんが楽しそうにクスクスと笑いながら、俺に絶望的なネタばらしをしてくれる。
わぁかわいい、でも今はめっちゃこわい。
神器使えない上に仙術は小猫ちゃんに妨害されて使えない。
今の俺に、なす術なんかありゃしない。
お願い、助けてモグラさん！
ピンチなの、俺ってば今モーレツにピンチなのぉ！
命の危機より濃厚な危険信号を感じるんだよ、怖いとか言ってないでマジで助けてくれってば!!
ちょ、みんな近付かないで！
年頃の娘さんが、おもむろに服をはだけさせるんじゃありません！
や、やめろ！
それ以上近付いたら舌を噛んで、噛んで……イ、イヤァアァアッ!!

間話13

みなさんこんにちは、塔城小猫です。
サイラオーグ・バアルとのレーティングゲームも終わり、周りも少し落ち着いてきました。
私は悪魔のお仕事がお休みになると、時々だけどカズキ先輩から仙術を教わっている。
それのお陰でバアル戦でも少しだけ役に立つ事が出来た。
最後は勝ったと思い油断したせいでやられてしまったのがとても悔しく、また教えてくれたカズキ先輩に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
カズキ先輩曰く、私は先輩よりも仙術に向いているらしい。
私の種族である猫?（ねこしょう）の特性なのだろうが、それでも先輩に羨ましがられるのは少し誇らしかった。
術を教わり一つ出来るようになる度に、先輩は頭を撫でてくれる。
その時の先輩の顔が好きで、兄に褒められる感覚というのは、こういうものなのかもしれない。

先輩が得意なのは何かを阻害したり相手を騙したりする術だそうで、先輩はそれをイタズラに使ってイッセー先輩やアザゼル先生をからかって時々遊んでいる。
ちなみに私が得意なのは身体強化や、相手の中に流れる気を乱す事。
阻害系の術は私も教わって使う事はできるが、先輩の発想には勝てそうにないです。
今日は悪魔のお仕事がお休みだけど、先輩に用事があるそうなので自主練する事にした。
今日練習するのは、先輩がスコルに使っていた変身する術。
他者に使う時は呪符がいるが、本人の場合は必要ない。
これなら一人でも安全に練習できると思う。
カズキ先輩が言うには、一番大切なのはイメージする力。
自分が変わりたいものを、強く明確にイメージする。
最初は身近な何かに化けるのがいいらしい。
取り敢えず今回は、白い猫に変身してみようと思う。
目を閉じてから頭の中で白い猫を強く強くイメージして……同時に練り上げた仙術の気を、一気に解き放つ！
軽い破裂音と共に、白い煙が私を中心に広がる。
閉じていた目をゆっくりと開くと、そこに広がっているのは普段よりも低い地面スレ

スレな視点。
　4本の足から伝わってくる土の冷たさ。
「……ニャン」
どうやら、無事成功したようだ。
四足歩行で上手く動けるか不安でしたが、骨格も変化するから違和感もない。
色々と用途がありそうな術だし、今度先輩に質問してみよう。
それじゃあそろそろ元に……あれ？
えっと、確かこう……てい！
……どうしよう、元に戻らない。
念じれば戻るって聞いてたのに、いくらやっても元に戻る気配がない。
……うぅ、迷惑は掛けたくないけどカズキ先輩に助けてもらおう。
幸い先輩の家はここから近いし、家で用事があるって言ってたからきっといる筈。
先輩に言葉が通じなくても、モグさんが通訳してくれると思うし。
車などに注意しつつテクテクと移動し、なんとか先輩の家の前までやって来た。
猫の身体だと歩幅が短いので、思ったよりも時間が掛かってしまった。
さて、どうやって中に入ろうか？
よく考えたら、こんな身体じゃ呼び鈴なんて押せない。

えっと、確か裏に回ると小さい庭があった筈……あった。
というか、ここから先輩の姿が見える！
用事は終わったのか、座椅子に腰掛けテレビを見ている。
こっちに気付いてもらうために、なるべく傷付けない様に爪で優しく網戸を引っ掻く。
その音でこちらに気付いた先輩は立ち上がってこちらに近付き、網戸を開けて私を両手で抱き上げた。
先輩、顔がちょっと近いです。
「なんだ、野良猫とかここにも来るのか。何時もスコルとハティがいるから近寄らないのに」
先輩はそんな事を言いながら私を部屋に入れ、先程まで座っていた座椅子に再び腰を下ろした。
なるほど、あの二匹はお散歩にでも行っているのだろう。
先輩の胡座の上に乗せられたまま辺りを見渡しても、近くにモグラさんの姿はない。
どうしよう、このままじゃ先輩に状況が説明出来なひゃ!?
「首輪してないけどホントに野良か？　いい毛並みしてるなぁ、触り心地最高。スコルたちもモフモフでいいけど、これもまた素晴らしい」

私がどうしようか悩んでいると、先輩は唐突に私の背中を撫で始めた。
いきなりでビックリしたけど、スコルたちで慣れているのか慣れた手つきでかなり気持ちいい。
何時もの状態なら背中をさすられてるだけの筈なのに、猫の状態だとこんなに気持ちいいものなのか。
「全く、こんなに可愛いのにひどい事をする奴がいたもんだ。ウチで飼っちゃおうかな？」
可愛いと言われてしまった。
いや、先輩は私やアーシアさんなんかにはよく可愛いと連呼しますが。
それでもやっぱり嬉しくなってしまう。
それにしても先輩。
今は確かに猫の姿だから仕方ありませんが、後輩の女の子に『飼っちゃおうかな』は色々とマズイと思います。
あぁ、それにしても気持ちいい。
こんな事をしている場合じゃないのに、思わず目を細めてしまう。
「お？　なんだ、お前さんもノリノリか？　よかろう、モグラさんたちで鍛えた俺の超絶テクニックをお見舞いしてやろうじゃないか！」

気持ちい……え？

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

今日は小猫ちゃんから仙術を教えて欲しいと言われていたのだが、グリゴリへ提出する活動報告を作成しなくてはならないので断ってしまった。

活動報告と言っても俺の場合は神器であるモグラさんの様子と、俺の中にあるミョルニルに変化がないかの確認だけだ。

それでも無駄に項目が多いので、これで結構時間が掛かる。

初めて活動報告の提出を求められた時は『モグラさん観察日記』と副題をつけたせいでエライ目にあったので、真面目に記入しなくては。

モグラさんは構ってくれない俺に愛想を尽かしてゼノヴィアと一緒にハティたちの散歩に行ってしまうし、朱乃さんとロスヴァイセさんは夕飯の買い出しに行っているので家に一人でちょっと寂しい。

そんなこんなで活動報告を完成させてグリゴリの施設へ転送した後、退屈を紛らわせる為に意味もなくテレビを垂れ流していたその時。

庭の方からカリカリ、カリカリと何かを引っ掻く様な音が聞こえてきた。

「ニャ～」

振り向くとそこにいたのは、一匹の真っ白な猫。

普段なら我が家の番犬たちに怯えて野良猫は寄り付かないと聞いていたんだが、そうでもないらしい。

恐れ知らずなのか根性があるのか、どちらにしろ退屈している俺にとっては嬉しいお客さんだ。

俺は腰掛けていた座椅子から立ち上がり、網戸の前にいた白猫を両手で抱き上げる。

「お～軽い軽い、まだ小猫なのかな？」

「フミッ」

抱き上げたまま顔を近付けたら、嫌がって前脚を顔に押し付けられた。

肉球のプニプニ感とひんやりした感じが気持ちいい、アピール上手だなこんちくしょうめ。

俺は網戸を閉めた後、白猫を抱きかかえたまま座椅子に戻る。

いきなり部屋に連れ込まれたからか、辺りを落ち着きなくキョロキョロと見渡している。

「首輪してないけどホントに野良か？　いい毛並みしてるなぁ、触り心地最高。スコルたちもモフモフでいいけど、これもまた素晴らしい」

リラックスさせる為に背中を撫でながら、猫の状態を観察する。

首輪はしてないから野良だと思うんだけど、毛並みもツヤツヤしてるし痩せこけても

いない。
やけに人懐っこいし、もしかしたら最近捨てられちゃったのか？
「全く、こんなに可愛いのにひどい事をする奴がいたもんだ。ウチで飼っちゃおうかな？」
でもウチにはモグラさんとハティ達がいるからなぁ。
俺一人で住んでる訳じゃないんだし、みんなに相談はしないとね。
そんな事を考えながら撫で続けていると、気持ちいいのか白猫の目が段々と細まってゆく。
「お？　なんだ、お前さんもノリノリか？　よかろう、モグラさんたちで鍛えた俺の超絶テクニックをお見舞いしてやろうじゃないか！」
そうかそうか、そんなに気持ちいいか。
それならもっと気持ちよくしてやろう！
それから俺は暫く時間を忘れて、ひたすらにこの白猫を撫で回した。
最初は少し驚いた様子だったが、撫で続けるもすぐに抵抗しなくなったので思う存分堪能した。
やっぱ猫はイイね！
スコル達と一緒に暮らし始めてから犬派に傾いて来てたけど、やっぱり猫も捨て難

い。

それぞれの良さがあるんだから、わざわざ派閥を作るなんてアホのする事だな。

だから堂々と宣言しよう、俺はどっちも大好きだ！

「カズキく～ん、ただいま戻りましたわよ～」

「お、朱乃さんたちが帰ってきたか」

白猫を撫でていたら結構な時間が立っていたようで、朱乃さん達が帰ってきたようだ。

スコル達の声も遠くから聞こえてくるし、一緒に帰ってきたのか。

俺は膝に乗せていた猫を座椅子に下ろし、玄関まで荷物を受け取りに行く。

先頭に立っていたゼノヴィアは頭にモグラさんを乗せており、俺が近づくとモグラさんは俺の頭に跳び移った。

「ただいまカズキ。先に肉や牛乳を冷蔵庫に入れてくるから、残りは頼んでいいか？」

「了解、ちゃんと整理して入れろよ～」

「無論だ、朱乃さんとロスヴァイセさんに鍛えられた整頓テクニックを舐めてもらっては困る」

ゼノヴィアはそう言うと、足早にキッチンに向かい歩いて行った。

二人にしごかれたおかげで、今のゼノヴィアは卵を冷凍庫に入れる事はなくなった。

次は何でもかんでも空いてる所に詰め込もうとせず、野菜室の存在を理解出来るように頑張ろうか。

「カズキくん、提出する資料は出来たんですか？」

「もう終わったよ、今は猫と遊んでたんだ」

「猫？　飼うんですの？」

「いんや、暇してたら庭に遊びに来てさ……」

荷物を受け取ってから朱乃さんたちとそんな話をしていると、先に行った筈のゼノヴィアが袋を手にしたままリビングの入り口で立ち尽くしていた。

何してんだあいつ、とうとう冷蔵庫にすら辿り着けなくなったとか言わないよな？

「どうしたゼノヴィア、中に入れないじゃないか」

「……おいカズキ、これはどういう事だ？」

ゼノヴィアは俺の方を見ず、ある一点を凝視しながら低い声を漏らす。

ゼノヴィアの視線の先には、白い小猫がいるだけのはず。

そう、そのはずだった。

「は？　どういうって……ｏｈ」

俺がゼノヴィアの視線を追ってその先を見た瞬間、変な声が漏れた。

真っ白な小猫が寝ていたはずの座椅子には、顔を真っ赤にして息を荒げている小猫

ちゃんの姿が。

あれ？　……あるぇ？

「お前……私たちがいない間、小猫に何をしていた？」

「カ、カズキくんが小さい子に手を出す変態さんに……」

「あらあらまぁまぁ、『猫と遊んでた』ってそう言う意味だったのね？」

三方向から突き刺さる様な視線を感じる。

経験則でわかる、これは何をどうしようと逃げられない。

だったら俺のやる事は一つ。

俺は手にした荷物をテーブルに置き、ゆっくりと三人の方へ振り返る。

「それでも俺は、やってない」

当然ボコボコにされた。

その音で意識を取り戻した小猫ちゃんが説明してくれたお陰で、なんとか家は無事だった。

小猫ちゃんにひたすら謝られたが、別に悪意があってやった訳じゃないんだから気にしないで欲しい。

正式名は忘れたけどあの変身する術って解除が難しいんだよね、俺も最初の時は初代さんが元に戻してくれたっけ。

それから数日後。
今度は黒猫が我が家にやってきて似た様な騒動を起こす事を、この時の俺はまだ知らない。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
うぅ、先輩やみんなに恥ずかしい所を見られてしまった。
いくら猫の姿だったとはいえ、あんなにされたらどうしようもない。
それでもまさか気絶してしまうとは……先輩は恐ろしい。
だって、その……言いたくないくらい凄かったんだから、仕方ないという事にしてもらいたい。
これからは一人で練習するのはやめよう。
近くに先輩がいないと危険だ、色々と。
少なくともあの術は暫く封印しようと思う。
撫でられるなら、この姿で褒められた時が一番だ。
それから数日後、私が居候しているイッセー先輩の家に一枚の手紙が届いた。
どうも黒歌姉さまからの様で、危険かも知れないのでイッセー先輩やリアス部長も呼んで一緒に中身を読んで貰う事にした。
しかしそこに書かれていたのは『撫で撫でには勝てなかったよ……』という謎の言葉。

リアス部長たちは首を傾げていたが、私はなんとなく悟ってしまった。
あぁ、姉さまもアレの餌食になったのかと。
……癖にならなければいいけれど。

十一巻　進級試験とウロボロス

６１話

サイラオーグさんとの試合の後、正式に付き合う事になったイッセーとリアス先輩。
昼休みにベタベタ、放課後にベタベタ、家に帰ってもベタベタ……正直ウザい。
家では好きにすればいいと思うけど、人前ではやめてくれないかね？
最初の頃はようやく付き合えたんだし仕方無いと納得していたが、しょっちゅう目の前でイチャつかれると殺意が湧いてきても仕方ないと思うんだ。
わざわざ俺たちを昼飯に誘うな、二人で隠れてイチャコラしてろ。
それを見たゼノヴィアのおバカが『私たちも付き合って見せつけてやればいい』とか言い出すし、本当に迷惑なんだが。
アーシアちゃんも対抗心を燃やしているのか、教室ではいつも以上にイッセーにくっついてるし。
松田や元浜じゃなくても恨みがつのり、体育中に男子全員がイッセー目掛けてラフプレーを乱発しても仕方ないことだ。

「はぁ？　暫くイッセーの家で過ごせ？」
「数日だけでいいんだ、頼む」
そんな騒がしい日々を過ごしていた、とある夜。
夕飯時にちょくちょくやってくるアザゼルさんがその日もやって来て、突然こんな事を言い出した。
人ん家の飯を食いながら、いきなり何言ってんだこの人。
「私は時々アーシアやイリナの部屋に泊まりに行っているし、いまさら構わないが……」
「明後日からとは、随分と急ですわね」
「大丈夫なんですか？　イッセーくんのご両親もいらっしゃるのでしょう？」
「そこら辺は考えてるし、イッセーやリアスには了承済みだ。お前らには申し訳ないんだが、協力して欲しい」
アザゼルさんは茶碗と箸を置き、テーブルに額が付くくらい深く頭を下げてきた。
あ～……こりゃなんかあるな、マジメな方で。
「理由は聞いても？」
「近いうち、イッセーの家にある奴を呼ぶ。今は誰が来るのか教えられないが、お前らはほぼ間違いなく不満を漏らすだろう。下手すりゃそのまま戦闘開始になるかもしれな

い」

なんだその聞くだけでやる気が削がれる事態は。

面倒な匂いがプンプンするぞ。

「だがな、これが上手くいけば今まで抱えてた問題が一気に解決するかもしれねぇんだ。無茶をする価値があると、俺は思ってる」

「で、防波堤代わりに俺もいろって事か。それなら当日行けばいいんじゃないの？」

「それでもいいんだが、実は朱乃に中級悪魔への昇格試験の推薦が来ててな。正式な通知は後でサーゼクスから来るだろうが、イッセーと木場にも話が来てるしどうせなら纏めて対策した方が効率的だろう？」

なるほど、効率厨のアザゼルさんらしい考え方だ。

しかし中級悪魔試験か、なんか車の免許更新みたいだな。

つくづく俺の中にある悪魔のイメージが壊れていく。

「私には昇格の話はなしか……だが、めでたい事に変わりはない。おめでとう朱乃さん、合格目指して頑張ってくれ」

「おめでとうございます。しかし中級悪魔ですか、主が悪魔でない私も昇格などするのでしょうか？」

ゼノヴィアは少し悔しそうにしつつも朱乃さんを応援して、ロスヴァイセさんもお祝

いしつつ顎に手を当て首を捻っている。
　ゴメンねロスヴァイセさん、なんかややこしい立場にして。
「よかったね朱乃さん。悪魔の試験じゃ俺は手伝えそうにないけど、全力で応援するよ」
「そう、私が中級悪魔に……ありがとうカズキくん、みんな。グレモリー眷属の《女王》として、絶対に合格してみせますわ」
　朱乃さんは俺たちの声援を受け、拳を握りながら笑顔で応えてくれた。
　しかしアザゼルさんの話している日程だと、ロスヴァイセさんは応援には来れないかな？
「ロスヴァイセさん、この日付だともう里帰りしちゃってるよね？」
「ええ、残念ながら。実家から、一度顔を見せに帰ってこいと再三言われてまして。カズキくんのマネージャーと教職も落ち着いてきましたし、一度帰らせていただこうと思っています。ですが朱乃さんにとって大切な試験なのですから、帰る日をずらしても……」
「大丈夫ですわ、ロスヴァイセさん。私の事は気にせず、故郷でお待ちになっている家族の方たちに顔を出してあげてください」
「そうだぞロスヴァイセさん、応援は私たちに任せておくといい」
「みなさん……ありがとうございます」

うんうん、いい光景だ。
やっぱ家族は大切にしないとね。
俺もロスヴァイセさんの雇用主として、一度お伺いした方が良いんだろうか？
……なんか恐ろしい目に会う未来が見えた気がするので、また今度にしよう。
「試験が大切なのはごもっともなんだが、俺の頼み事忘れちゃいないか？」
「ああごめん、朱乃さんの方が大切でつい」
「おいコラ。いや俺が大切とか言われたら、それはそれで気持ちワリィけどよ」
「まぁとにかく了解。向こうの許可が出てるなら、荷物まとめて明後日から兵藤家のお世話になるわ」
俺が了承の意を伝えるとアザゼルさんは細く長い溜息を吐き、椅子の背もたれに背を預ける。
誰が来るんだか知らないが、別に俺なんかいなくても問題ないと思うんだけどなぁ。
仮に恨みのある奴が来たとしても、イッセーたちもそこまで喧嘩っ早くないだろうし。
「すまねぇな、面倒をかける」
「お互いに迷惑かけるのなんざ今更でしょ。それより朱乃さんの昇格試験、フォロー頼むよ」

「おう。といっても、筆記も実技もほとんど問題ないと思うがな。イッセー以外は」
言わなくてもわかる、イッセーが問題なのは筆記の方だろう。
あいつも割とおバカだし。
ちなみに実技は余裕だろうから問題ないらしい、やっぱグレモリー眷属ってぶっ壊れ性能の集まりなのか。

ロスヴァイセさんはどうせ家を空けるならと予定を早め、今日の夜に北欧へ旅立つことになった。
キチンと中間テストの問題も作成して提出しており、学校側も問題なく休暇を出してくれたらしい。
普段からマジメだと、要望も通りやすくてお得だねぇ。
「なぁカズキ、ここの公式なんだけど……」
「お前数学苦手だよな、これはな――」
「すまないカズキ、それが終わったら私たちに古典を教えてくれ」
「すみません、カズキさん……」
「はいはい、気にしなくていいから教科書持ってきなさい」

「古典なら私が教えてあげるわ！」
今は昼休み。
教室で教科書を広げながら唸っているイッセーやみんなと一緒に、中間テストの勉強中だ。
特にイッセーは昇格試験の対策もあるから、今回はかなり辛そうだ。
イリナは何気に成績優秀なので今回は教える側で頑張ってくれている、アーシアちゃんも古典以外は優等生なんだけどなぁ。
「なんだなんだ、今回のテストはみんな気合い入ってんな」
「あのイッセーまで勉強してるとは、明日は槍が降るな」
頭から湯気を出しているイッセーを横目に、松田と元浜が茶々を入れてくる。
まぁイッセーは普段勉強なんかしないもんな、何を言われても仕方ない。
しまいには松田が懐からエロＤＶＤを取り出しイッセーを誘惑する始末だ、お前も簡単に誘惑に負けるなっての。
「なるほど、男とはこういうのが好みなのか。カズキの部屋にあったものとは少し違うな」
「おい待てゼノヴィア、お前いつの間に俺の部屋に入った」
聞き捨てならんよ、そのセリフ。

男のトレジャーを発掘するのは、そいつの男友達だけに許された権利だからね？

「えぇ!?　カ、カズキさんまでそんなものを!?」

「ほほぅ？　ゼノヴィアっち、そこのところ詳しく聞かせて貰おうじゃないの」

「なんてハレンチな！　で、でも私も年頃で興味もあるし……堕ちちゃう、私堕ちちゃうぅぅ!?」

ゼノヴィアのトンデモ発言に各々反応する女性陣。

しょうがないじゃない、俺だって男の子だもの。

そういうものの一つや二つ必要なんだよ。

というか桐生、いつの間に湧いて出た。

「取り敢えずゼノヴィア、それ以上いらん事喋るなら後でお仕置きな」

「なるほど、つまり瀬尾が持ってるのはＳＭ系……」

「桐生さん、ちょっと黙っててくれませんかね？」

ホントやめて。

こんな話を朱乃さんに聞かれようものなら、俺の大切なナニカが散らされてしまう。

主にムチとかローソクで。

その後も俺とイッセーの秘密が暴露されかけたりして、俺は耐え切れずイッセーと一緒に逃亡した。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「ちくしょう、みんなして俺たちの事オモチャにしやがって！」

「お前はリア先輩と付き合ってんだからいいだろ、その気になれば手ェ出せるんだから。俺なんて誰にも手を出せない上でこの仕打ちだぞ、俺が普段どれだけ気を張ってお宝を見ていると……」

俺とカズキはそれぞれ愚痴りながら、家庭科室に逃げ込んでいた。

ちょうどドライグの薬の時間になったので、何故かカズキが鍵を持っていた家庭科室に行き洗い場で籠手に薬を振りかける。

「どうだ、ドライグ？」

『……あぁ、気持ちが和らいでいくようだ』

俺が薬をかけながら尋ねると、ドライグは安らいだ様な声で答える。

この液体の薬をかけると、ドラゴンの気分を落ち着かせてくれるらしい。

ドライグは俺が乳関連でパワーアップを続けたせいで心を病み、疲弊してしまったのだ。

なのでこうして、先生が紹介してくれたカウンセラーの人から貰った薬を定期的に与えている。

「にしても伝説の二天龍が薬漬けとか、お前ドライグの事イジメすぎだろ？」

「うぐっ!?」

カズキの鋭い指摘に、思わず言葉に詰まる俺。

そうだよな、俺はドライグに物凄い迷惑を掛けてるんだよな。

本当にごめんよ、ドライグ！

俺、日に三度の薬も忘れずに守るから！

頑張ってお前を見守るから！

『ククク、ありがとう相棒。あぁ、後一万年も薬漬けの毎日か……』

ゴメンよ、ホントにゴメンよぉぉぉ!!

ドライグの言葉が胸にドスドスと音を立てて突き刺さりつつも、薬を与え終えたので家庭科室から出る。

俺たちが鍵を閉めていると、遠くから聞き慣れた声で話しかけられた。

「兵藤にカズキか、そんなトコでなにやってんだ?」

「あ、匙」

「ドライグの心からの訴えと、イッセーの懺悔を聞いてた。正直こいつからドライグを引き離してやりたくて仕方ない」

「……おまえ、そこまで天龍を泣かしてたのか?」

匙は俺たちを確認した後、カズキの言葉を聞くと途端に俺へ厳しい視線を送ってく

る。

うぅ、ごめんなさい反省します。

匙は生徒会の仕事を終えた後らしく、そのまま生徒会室に戻るというのでカズキと一緒にお邪魔する事にした。

俺とカズキは出してくれたお茶を啜りながら、匙の話を聞く。

「兵藤は中級か、おめでとう。飛び級でいきなり上級でもおかしくないと思ってたんだけどな、おまえら強さだけでいったらバケモノみたいなもんだし」

「黒焦げドラゴンになれる匙にバケモノって言われるとか、イッセーも本当に規格外だよなぁ」

「カズキはその中でも特別異常だって事、そろそろ自覚しような?」

そんなたわいのない話をしていると、カズキが思い出した様に話を切り出す。

「そういや匙、お前らシトリー眷属は最近アザゼルさんの実験に付き合ってるんだって?」

「おう、今は人工神器の実験をしてるんだ。シトリー眷属の非神器所持者に取り付けて、出力の安定なんかを調べてる。今はまだ回数制限もある未完成な技術だけど、色んな神器を見られて結構楽しいぞ?」

なんと、シトリー眷属はそんな事をして戦力増加を図っているのか!?

前に戦った時の『反転（リバース）』とかもそうだけど、シトリー眷属ってそういう新しい取り組みに積極的な気がする。

「へ～、個人的には使用回数があるってのもメリットがある気がするけどな。あらかじめ複数実体化させて装備しておけばいいし、イッセーならエネルギーを倍加させていざとなったら使い捨ての爆弾としても使えそうだし」

「お前の発想は相変わらずエグいな……それ、一回限りで次からは通じないだろ？」

「そんな事するなら、あらかじめ爆発物持ってた方が良くないか？」

俺たちがそんな話をしていると、生徒会室に他のシトリーメンバーが続々と帰ってきた。

みんな俺を見るなり口々に祝いの言葉を投げかけてくれる。

匙は《兵士》の仁村さんと《僧侶》の花戒さんに呼ばれて、生徒会の仕事を片付けに二人を引き連れて部屋を足早に出て行った。

実はこの二人、匙を巡って水面下で激闘を繰り返しているのだとか。

なんだかんだあいつもモテるんだよな、本命の会長さんとは相変わらずみたいだけど。

その後も《戦車》の由良にサインをねだられたり、副会長の真羅先輩が木場に本気だとしらされたり色々あった。

暫くするとソーナ会長がやってきて、みんなに指示を出すと即行動していき部屋には俺とカズキ、そしてソーナ会長の三人になった。
「会長さんも大変ですね、生徒会の仕事も忙しいのにアザゼルさんの実験に付き合ったり。無理なら断ってもいいんですよ？」
「いいえ、アザゼル総督の実験は私たちの力になりますから。私たちに不足しているパワーを得るためには、必要な事です」
「それならいいですけど無理はダメですよ、最近テレビでも頑張ってるじゃないですか。料理の腕も上達してますし、この調子でお菓子も上達できる様お願いします」
「だってお菓子はカズキくんが合格をくれないじゃないですか、私だって色々作りたいものもあるんですよ？」
「俺も会長さんのマトモなお菓子を早く食べたいです、いやホントに」
「マトモって、それは酷くないですか？」
……なんていうか、仲良いよなぁこの二人。
ソーナ会長がこんなに笑顔で話してるの、リアス以外だと見た事ない。
これで付き合ってないんだから、この二人の価値観はわからない。
いや、くっついたら匙が泣き崩れるだろうけど。
実際カズキはソーナ会長の事をどう思ってるんだ？

少なくとも悪くは思ってない筈なんだけど……もしかして、匙に遠慮してるのか？
だから踏み込まないで距離をとってる？
でもそれは……う～ん……
「――ッセーくん、イッセーくん？」
「は、はい!?」
うおぉ、ビックリした!?
考え込んでたせいで、ソーナ会長に話しかけられてるのに気付かなかった！
「推薦おめでとう。それから……リアスを、よろしくね？」
「え、よろしくって……リ、部長から聞いたんですか？　それともカズキ？」
「リアスから通信用の魔方陣越しに、毎日惚気話を聞かされているのよ。これでも幼い頃からの友人、親友ですから」
ソーナ会長は嬉しい様な、それでいて困った様な、そんな複雑な笑顔を浮かべている。
それはなんとも、ご迷惑？をおかけしております。
俺が引き攣った笑みを浮かべるなか、会長は俺の目を真っ直ぐ見ながら言葉を続けた。
「あなたは私が出来そうになかった事を、すべて叶えている。婚約――ライザー・フェニックスの件や木場祐斗くんの件、ギャスパーくんの件。リアスの抱えていたものを、

あなたが全部軽くしてくれた」

「私はリアスの友人なのに、既存の概念に囚われて何も出来なかった。『上級悪魔だから』、『悪魔のしきたりだから』……周囲の視線と自分の立場を鑑みて、何もしようとしなかった」

「でもあなたはそんな事を意にも介さず解決していった。私に出来ないことを難なくやってしまう貴方を妬みもしたけど、何よりもリアスを救ってくれて感謝しています。わがままで、直線的で、短気な所もあるけれど。誰よりも素敵な私の親友を、これからも護ってあげてください」

ソーナ会長は自分の抱えていた物を全て吐き出した様にスッキリとした表情をした後俺に深く頭を下げてきた。

ソーナ会長は、俺がいないずっと昔からリアスの事を見ていたんだな。

そしてリアスを取り巻く環境を、とても心配してくれていたんだ。

「いつもリ、部長の事を見ていてくれてありがとうございました。これからは、俺が部長の事を隣で支えていきます！」

当然だ！

リアスは俺の、大切なヒトなんだから！

「私の前ではリアスと呼んでいいわ、彼女の想い人なら私にとっても友人だもの。なん

なら私の事もソーナと呼んでもいいのよ?」
「そ、それは恐れ多いといいますか……!」
「……あなた、プライベートの時にリアスから話し方について不満を漏らされたこと多いでしょう?」
「何故わかるんですか!?」
会長は大きく溜息を吐きながら首を横に振る。
だ、だって匙もカズキも名前呼びしてないのに俺がする訳には……!
「公私をわけて女性に接する男性の方が、女性にとっては素敵ってことです」
「は、はぁ……そういうものですか……」
人差し指をピンと立てながら、注意する様に俺の前に突き出してくるソーナ会長。
その様が普段のクールな態度とギャップがあって、すごい魅力的にみえた。
なるほど、匙が惚れるのもわからなくはない!
「つまり俺は素敵な男性って事ですか?」
「あなたはどんな時でもマイペースを崩さないじゃないですか、その方が私も楽ですが。ハァ……私も彼氏作ろうかしら」
カズキの言葉に、ソーナ会長は笑いながら返した後、頬に手を当てながらため息まじりにそんな事を言い出すソーナ会長。

ここは匙をアピールするチャンス！
「匙とかどうなんでしょう？」
「弟、といったところかしら。それにあの子を慕う眷属の子たちがいるのだから、手なんて出せないわ」
キョトンとした顔をした後、苦笑しながら答える。
あ～、こりゃ現時点で脈ないな。
匙、もっと積極的にいかないと恋の成就は厳しいぞ！
それならもう一つ確認しておこう。
「あの、じゃあカズキは？　二人とも仲良いですよね？」
「それ、俺の前で聞くか？」
あ、確かに。
どうだろうと、本人の前じゃ言いにくいか。
「カズキくんですか？　彼とは友人ですが……そういえば、以前プロポーズされた事がありましたね？」
そう思っていると、ソーナ会長は特に悩まず普通に答えてくれた。
そうか、友人か……ん？
いま、なんかすごい事言ってなかった？

「あ～、ありましたね。チェスの十本勝負で勝ち越したらって奴。時々やって、未だに一本も取れないですけど」
「ふふ、まだまだ負けてあげられませんよ？」
「ははは、努力させていただきます」
え、なんかすごい和やかに話してるけど……え？
なんだ、俺の理解出来ない何かがおこなわれているのか？
「それではイッセーくん、昇格試験頑張ってください。中間テストもね」
「ほら行くぞイッセー、長居して仕事の邪魔しちゃいかん」
思考の働かない俺をカズキが引き摺りながら、生徒会室を後にした。
俺の意識がハッキリしたのは、家に帰ってしばらく経ってからの事だった。

「――――そう、ソーナとそんな話をしたのね。流石にカズキくんがプロポーズしてたってのは驚いたけど」
夕食の後、リビングで寛ぎながらリアスに昼間の出来事を話した。
リアスにカズキの話をした途端に通信用の魔方陣を展開して、やたらと興奮しながらソーナ会長と話し出したのには驚いたが。

やっぱり女の子は他人の恋愛話が大好物なんだなぁ。
結局カズキが熱にうなされてる時に冗談交じりに約束しただけだとわかり、すぐに落ち着いてくれたけど。
「以前はソーナにも婚約者がいたけど、カズキくんと同じ様にチェスの十本勝負を申し込んで破談にしたのよ。それの真似事なんでしょうけど……案外、ソーナもカズキくんを意識してるのかしら？」
「俺が聞いた時は友人って言ってましたけどね」
「本人の前で素直に言うわけないじゃない。これは椿姫と一緒に、ソーナを問い詰めるしかないわね……！」
あぁ、またリアスの目が爛々と輝いてらっしゃる。
ソーナ会長とカズキの迷惑にならなければいいけど……無理そうだなぁ。
「イッセーさま！　昇格試験用の教科書や参考書を出来る限り集めてきました、こちらは駒王学園の中間テスト対策の資料ですわ！」
俺が黄昏ていると、レイヴェルが大量の本を手にやって来た。
先日サーゼクスさま直々に俺のマネージャーへ任命されたレイヴェルだが、やる気満々で非常に助けられている。
そうだな、いまの俺に余計な事を考えてる余裕はない。

目指せ中級悪魔、目指せ中間テスト突破ってな！

６２話

「突然で申し訳ないですが、数日の間お世話になります。家事なんかは手伝わせていただきますので、遠慮なく言いつけて下さい」
「あらあら、瀬尾くんは本当にマジメね。でも気にしなくていいのよ、そういうのは私に任せて合宿頑張って？　でもアーシアちゃんは連れて行かないでね」
「そうだぞ？　君の事はイッセーやリアスさんから聞いてる、ここを自分の家だと思って寛いでおくれ。でもアーシアちゃんは連れて行かないでね」
学校が終わった後、荷物を纏めて兵藤家を訪問。
ご両親に挨拶したら、いきなりこれである。
イッセーの親御さん、俺がイッセーに呼ばれて家に遊びに行った時もやたらと警戒してくるんだよね。
どうも兵藤家にいた女の子が次々俺の家に越していってしまうので、自分たちが実の娘の様に可愛がっているアーシアちゃんまで連れて行ってしまうのではないかと心配らしい。
違うから、俺は御宅の息子さんと違ってハーレム作りたいとか思ってないから。

確かに我が家は御近所の奥さま方に『ハーレム御殿』と呼ばれているが、そんな大層なもんじゃないから！

だからそんなに怯えた目でこっちを見ないで下さい！

そんなこんなで荷物も運び込み、夕飯も終えて兵藤家に設けられた俺の私室で寛いでいる。

みんなは試験勉強やら昇格試験の対策やらで、リビングに教科書を広げて勉強会をしている。

俺もさっきまで参加していたが、悪魔の試験じゃ役に立てないので先に休ませてもらう事にしたのだ。

決して話に加われないから拗ねた訳ではない、決してだ。

しかし改めて見るとこの家すごいな、アホみたいに広い。

何時もは一回のリビングにしかお邪魔しないからいまいち実感がなかったが、この家一体部屋いくつあるんだよ。

合宿という形で泊まらせてもらう俺たちまで全員個室だし、どうしようか迷っていたスコルとハティまで自由にしていいという高待遇だ。

そのスコルとハティは、モグラさんと一緒に小猫ちゃんやアーシアちゃんの所で遊ん

でもらっている。
今日はアーシアちゃんとイリナの夢だった『ワンコと一緒におやすみ』を実現するべく、一緒に寝るそうだ。
モグラさんは久しぶりに小猫ちゃんと寝るらしい、おかげで俺はひとりぼっちです。
そんな事に思いを馳せていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。
誰だろ、イッセーか？
「はいはい、っと……朱乃さん？」
俺がドアを開けると、そこには飲み物を二つ乗せたトレーを手にした朱乃さんが。
既にパジャマという事は、もうお風呂に入った後か。
男湯と女湯で別れてる一軒家とか、きっとここぐらいなんだろうな。
「うふふ、お邪魔してもいいかしら？」
「夜中に美人が訪ねてきたら、誰も追い返したりしないでしょうよ」
「あらあらお上手。私ったら、ここで襲われちゃうのかしら？」
「むしろ俺が襲われない様に気をつけます」
俺は朱乃さんからトレーを受け取り、部屋に入る様に促す。
中央に置いてあるちゃぶ台に飲み物を置いて腰を下ろすと、朱乃さんはコップを握りしめながら話し出した。

「私、堕天使の力を一段階あげようと思っているの」
「堕天使の？　それはどういう……？」
「悪魔のまま堕天使の力を高める、というのかしら？　簡単に言うと今までよりも堕天使寄りに、カズキくんに近くなるといった感じですわ」
朱乃さんはそういった後、こちらに笑顔を向けてくる。
ぶっちゃけ、俺は堕天使になった実感まるでないんだけどね。
背中に翼が生える様になって、手入れメンドクセェぐらいにしか思ってない。
具体的にはお風呂の時間が倍になった。
「まぁ難しい事はわかんないけど、おめでとう？」
「……反応が薄いですわね。これでも私、それなりに緊張しつつ話したのですが」
「いや、そうは言っても俺自身堕天使の自覚ないんだから仕方ないじゃん。どうなろうが朱乃さんは朱乃さんだし、別にどっかいっちゃう訳でもないしなぁ」
強くなったの？　よかったね！
ぐらいの感想しか出てこないのよ。
ボキャブラリーが貧相で申し訳ない。
ん？　なんでそこで嬉しそうな顔してるの？
「うふふ……そうね、カズキくんはそうよね」

「あの、朱乃さん？」
俺が困惑していると、朱乃さんは俺の横に来て肩に頭を寄せながら体をもたれかけてきた。
あの、色々柔らかくていい匂いするからやめて？
なんか滾ってきちゃうから、なんか溢れてきちゃうからぁ！
「そうです、私はどこにも行きません。だから、あなたも私を置いてどこにもいかないでね？」
朱乃さんはそう言うと、俺の手を優しく握り込んでくる。
なんだこれ、なんだこれ!?
ドッキリか、最近油断してたけどついにドッキリ企画か!?
だけど手ェ柔らかくて気持ちいいな、うわぁい！
「おいカズキ、みんなでトランプでも……あ～！　また朱乃さんが抜け駆けしている！
私も混ぜうおぉぉ!?」
なんだか妙な空気になりかけたその時、トランプを手にしたゼノヴィアがノックもせずに部屋に突入してきた。
何時もだったらデコピンの一つでもお見舞いする所だが、今日は許す！
むしろ褒めてやろうと一心不乱にゼノヴィアの頭を撫で回す。

「よく来たな、でかしたゼノヴィア！　マジで偉いぞ、めいっぱい褒めてやる！」
「そ、そうか!?　なんだかよくわからないが、素直に褒められてやろう！」
「よしよし、トランプだったか？　今行こうすぐ行こうさぁ行こう！」
ゼノヴィアは急に頭を撫でられ何が何だかわからない様子だったが、取り敢えず褒められて嬉しそうに笑っている。
ゼノヴィアがアホの子で助かった、とにかくこのまま脱出だ！
俺がゼノヴィアの背を押しながら部屋を出ようとすると、朱乃さんがクスクスと笑いながら声を掛けてきた。
「うふふ、続きはまた今度ですわね。でもカズキくん？　さっきの言葉だけは、絶対に忘れないで下さいね？」
朱乃さんはそれだけ言うと、俺たちと一緒にみんながいるリビングへと歩いて行った。
なんだろう、いつもと様子が……気のせい？
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
一夜明けた休日の朝。
今日がアザゼル先生の言っていた訪問者がやってくる日だ。
唐突に鳴らされたインターホンにより、待機していた俺たちは混乱に見舞われた。

玄関を開けたその先に立っていたのは、黒いゴスロリ衣装を身に纏った細身の女の子。

「久しい、ドライグ」

そう、俺たちが敵対している『禍の団』のトップであるオーフィスその人だった。

「オ、オ、オ、オーフィスウウッ!?」

俺が叫ぶのと同時に、一緒に玄関まで来ていたリアスたちが一斉に戦闘態勢に移行する。

俺もすぐに籠手を出現させて、禁手になる為のカウントダウンを開始しようとした。

そんな俺たちを止めようと先生が間に入り込んだり、その先生をリアスが問いただしたりと騒いでる中、さりげなくカズキがオーフィスに近付いていた！

「なんだイッセー、知り合いか？」

「ちょ、そんな簡単に近づくなカズキ！　そいつは『禍の団』の親玉、オーフィスだぞ!?」

「オーフィス？　なんだかよくわかんないけど、ただのちみっ子じゃん。ホレ、飴でも喰う？」

なんで廻りがこんだけ騒いでんのに、お前は通常運転なんだよ!?

てゆーか、こないだオーフィスについて説明したろうがっ！

また聞き流してやがったな!?

「我、飴もらう」
「よしよし、いい子っぽいから二つやろう」
そんでお前ももらうのかよ!?
なんでリアスと先生が殺伐としてるのに、こいつらだけほのぼのしてんの!?
先生とリアスの話が済みオーフィスがカズキから貰った飴を握りしめた所で、玄関前に魔方陣が出現した。
そこから現れたのは京都で俺たちの援護をしてくれた魔法使いの少女ルフェイと、小猫ちゃんのお姉さんである黒い和服を着崩した黒歌。
そしてあの見覚えのある灰色の大型犬、間違いない！
サイズは大分縮んでいるが、ロキ戦の時の親フェンリルだ！
「ごきげんよう、皆さん。ルフェイ・ペンドラゴンです。京都ではお世話になりました、こちらはフェンリルちゃんで……あら？」
ルフェイが挨拶していると、家の奥からスコルとハティが飛び出してきた。
俺たちの間をすり抜けると、一目散に親フェンリルの元に駆け寄り甘える様に体をこすりつけている。
そうか、こいつらにとっては久しぶりの再会なんだよな。
「あらあら、フェンリルも満更でもなさそう？　みんなお久～、黒歌ちゃんだにゃん♪」

「黒歌、我、飴もらった」
「あら、よかったじゃない。大切に食べるのよ？」
オーフィスはカズキに貰った飴を黒歌に見せ、黒歌はそれを見て笑いながらオーフィスに話しかけている。
ヴァーリや美猴がいないところを見ると、女性陣だけで来たのか？
なんかもう、大変な未来しか見えないぜ……！

一先ず全員で来賓用のＶＩＰルームに移動して、それぞれの席に着く。
朱乃さんが淹れてくれた紅茶から湯気が立ち昇り、沈黙した空間に漂っている。
ど、どうすればいいんだ？
俺から話を切り出せばいいのかな？
「えっと、それで。俺に用ってなんでしょうか……？」
ぎこちない事を自覚しつつも、ムリヤリ笑顔を作って尋ねる。
怖がっちゃダメだ、とにかく相手の要件を聴き出さないと。
「ドライグ、天龍やめる？」
……うん？

い、いまいち要領をえないぞ？
「えっと、言ってる意味が……」
「宿主の人間、今までと違う成長してる。我、とても不思議。今までの天龍と違う。ヴァーリも同じ。我、不思議。とても不思議」
俺とヴァーリの成長？
それが不思議って……どういうことだ？
悩む俺を無視して、オーフィスは言葉を続けた。
「曹操やバアルとの戦い。ドライグ、違う進化した。鎧、紅色になった。我の知っている限り、初めての事。だから、訊きたい。ドライグ、何になる？」
オーフィスは最後に首を傾げながら訊いてきた。
随分と可愛らしい仕草をするなとつい思ってしまった。
しかしなるほど、なんて答えたらいいのかまるでわからないな！
俺がもういっそ『乳を求めてたらこんな風になってました』と答えようかと思っていると、籠手が急に現れて俺の代わりにドライグが話し出してくれた。
二人がなにやら小難しい話を続け、ドライグがオーフィスに『乳龍帝になる？　乳を司るドラゴンになる？』と言われて体調を崩すまでそれは続いた。
慌てて宝玉に薬を掛けると途端に落ち着いていくドライグを見て、胸を締め付けられ

る様な感覚に襲われる。
　無理させてゴメンね、ドライグ！
「我、もう一つ訊きたい。そこで戯れてる、飴の男」
「んあ？　俺？」
　オーフィスに話しかけられ、首だけこちらに向けるカズキ。
　大人しいと思ったらこいつ、部屋の隅でルフェイや親フェンリルと一緒に遊んでやがった。
　スコルやハティも親フェンリルから離れようとせず、モグさんは相変わらずカズキの頭から離れようとしていない。
　なんで俺が緊張しながらオーフィスの相手してるのに、こいつはほんわかしてんだよ。
「なんだちみっ子、俺に聞きたいことでもあるのか？　俺は今、スコルたちの親に近況報告してて忙しんだが」
　だからなんでそんな態度なの!?
　だんだんムカついてきたんだけど!?
　ああくそ、マジメに考えてるのがアホくさくなってきた！
「飴の男、体に何か、宿してる？」

「宿す……モグラさんの事？　それともビリビリハンマーの事言ってんの？　あと俺のことはカズキでいいよ、飴の男はなんかヤダ」

おい、ミョルニルの事ビリビリハンマーって言うな。

途端におもちゃみたいに思えてくるだろうが。

「違う。飴の……カズキの中、何かいる。我、それ知らない。カズキ、何者？」

「え、やめてよ怖いから。憑かれてるの？　俺ってば何かに憑かれてるの？」

「憑かれる、違うと思う。我、よくわからない。不思議。ドライグと同じくらい、とても不思議」

「おいちょっと、マジでやめようよそういうの。今夜から一人でトイレ行けなくなるじゃん、イッセー叩き起こさなきゃいけなくなるじゃん！」

オーフィスはそう言いながら、カズキの胸の辺りをペタペタと触る。

あれで何かわかるんだろうか？

それからカズキ、さりげなく俺を巻き込むな。

「カズキ、自分でもわからない？」

「そんなん俺ごときにわかる訳ないだろ、グリゴリの定期検診でもなんも言われてないし。ねぇ、アザゼルさん」

「そうだな、特にこれといって報告は上がってきてねぇ。だがオーフィスのいう事だ、観

測できないレベルの何かがあるのかもな」
　話を振られた先生は、手元の紙にメモを取りながらカズキに答える。
　カズキの中のなにか、か。
　ぶっちゃけこいつの中は今でさえ神器、『御使い』のカード、ミョルニルと凄まじいごちゃ混ぜ具合だしな。
　今更何かが増えても不思議じゃない気もする。
「ん～……でもまぁ特に悪影響もないんだし、あんま気にしない方向で」
「お前、自分の事なのに軽すぎないか？」
「ンな事言っても分からないんだから仕方ないじゃん、まぁなんとかなるって。どうなろうとモグラさんが護ってくれるし、ね？」
「キュイ!!」
　俺が呆れながら尋ねるとカズキは呑気にそんな事を言い、モグさんもカズキの頭の上で得意げに胸を張る。
　確かにモグさんなら大抵の事からは護れるよな、ヴリトラの呪いも無効化にするくらいだし。
「我、見ていたい。カズキ、ドライグ、その所有者。我、もっと見たい」
　ドライグとカズキだけじゃなく、俺もか？

オーフィスの眼が興味津々に見つめてくる、どうしたらいいんだ？

俺が困惑していると、先生がオーフィスたちを数日この家に置いてくれないかと頼んできた。

話し合いでテロリスト組織が止められるなら俺は構わないと思うし、リアスや他のみんなも賛同してくれた。

「いいんじゃね？　スコルたちも久しぶりに親と会えて嬉しそうだし、俺はもう少し一緒にいさせてやりたい」

最後にカズキが親フェンリルを撫で回しながら賛同した。

お前本当に動物好きだな、親フェンリルも気持ちよさそうに目を細めてるし。

そんな光景を見ていると、先生は申し訳なさそうに俺の頭に手を置いた。

「悪いなイッセー、大切な試験前に面倒かける。それからお前ら、俺が言えた義理じゃないがこいつらは大事な試験前なんだ。邪魔だけはしないでやってくれ」

「わかった」

「適当にくつろぐだけにゃん♪」

「あ、あの！　サインをお願いするのは邪魔になってしまうんでしょうか!?」

オーフィスと黒歌は即答し、ルフェイは色紙を握り締めながら困った様な顔をしてそんな事を言い出した。

そういやこの子、俺のファンだったね。
そんなに時間のかかる事ではないので、渡された色紙に最近書くのも慣れてきたおっぱいドラゴンのサインを記入して手渡してあげた。
ルフェイはサインを頭上に掲げながら小躍りし、フェンリルはスコルとハティにじゃれつかれてその相手をして。
黒歌はカズキにちょっかいを出そうとして、小猫ちゃんに叱られていた。
ヴァーリのチーム、自由すぎやしないかね？
こうして俺たちは、とんでもない来客を迎えつつ試験日まで共に過ごす事になったのだ。

63話

「え～と、元七十二柱の御家の名前はバッチリ暗記した。人間界に住む時のルールも覚えたし、後は使い魔が魔物の場合と妖怪の場合での扱いの違いに……」

オーフィス＋ヴァーリチームが家にやって来て数日後。

休日も変わらず昇格試験に向けて勉強する俺、木場、朱乃さん。

どうなることかと思っていたが、特に問題もなく日々を過ごせている。

過ごせているんだが……

「スコル、ハティ、そしてフェンリルさん。今こそ俺の教えた禁じられし絶技で、オーフィスを包み込むのだ！」

「「ウォフッ!!」」

「す、すごいです！　三匹が一斉にオーフィスさんに群がりみるみるうちに球体に……！」

「フハハハハ！　一匹では出来ずとも、三匹集まればそれも可能となる。これぞ伝説の技、『わたあめ』だ！」

「我、動けない。モフモフ、素晴らしい。我、心地よい」

「ニャーハッハッハ！　オーフィスが、あのオーフィスが！　お、お腹イタイ……！」
「ちょっと大人しくしてくれませんかねぇ!?」
なんでこいつらすっかり意気投合してんの!?
馴染みすぎだろ、いくらなんでも！
なんで敵の親玉と、そんな速攻でフレンドリーになってんだよ!?
「む、すまんイッセーはしゃぎ過ぎた。よし、邪魔にならない様に地下にあるっていうプールにでも行くか」
「はーい」
「「ウォフ！」」
「水着はないけど、最悪全裸かトランクスで泳げばいいよね？」
「大丈夫よん、わたしの妖術で水着くらいチョチョイのチョイだから♪」
「ヤダよ、どうせ変なタイミングで術が切れて俺がひどい目に遭うんだろ？」
「水着なら俺の貸してやるから！　お願いだから大人しくしてて!?」
カズキは俺が投げつけた水着を受け取り、みんなを引き連れて屋内プールに向かっていった。
なんで敵よりも味方の行動に神経すり減らさなきゃならないんだよ！
ってあら、オーフィスだけついて行かずにここにいる？

「どうしたんだオーフィス、ついて行かないのか？」
「いい。カズキ、よく観察した。我、次はドライグ、観察する」
「さ、さいですか……」
オーフィスは俺たちから少し離れた所に座り、先ほどカズキから貰ったクッキーをポリポリと食べながらじっと俺の事を見つめてくる。
う、う～ん……やりづらい！
それでもレイヴェルのわかりやすい説明を受けつつ勉強を続け、ガリガリとノートに書き込んでいく。
しかし中級悪魔の試験がこれだと、上級になるには一体どんな事をやらされるんだろうか？
その後はアーシアがオーフィスに紅茶をあげたり、イリナが昨晩オーフィスとトランプをしていた事が判明したりと色々あったが概ね平和に過ごせた。
カズキだけでなくアーシアとイリナも打ち解け始めるとは、ウチの女性陣は適応力高いな。
カズキはなんかもう論外だ、あいつはマイペース過ぎる。
「伝承に聞くウロボロスとは、随分印象が違うね」
「混沌、無限、虚無を冠するドラゴンとは程遠く感じますわね。カズキくんにも懐いてる

様に見えますし」
「『龍神』なんて称されてる様には見えないな、あれならグレートレッドの方が神様っぽい気がする」
俺たちがこんな話をしていても、オーフィスはアーシアから貰った紅茶を啜りながら俺を見つめ続けるだけで何もして来ようとはしない。
一体こいつは、俺から何を得ようとしてるんだ？
カズキにも興味深々みたいだったし……考えてもわからないか。
俺の疑問は解決しないまま時間は過ぎていき、とうとう試験の日がやってきた！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「はい、という訳で試験終了おめでとー」
「……なぁ、なんだか俺たちの活躍がスッゲェ省略された気がするんだけど気のせい？」
「気にするな、ハゲるぞ」
冥界、グラシャラボラス領にあるホテル。
昇格試験を受けない面々は試験会場近くにあるこのホテルで待機していたが、つい先ほどイッセーたちが帰ってきた。
筆記はそれなりに手応えがあり実技では無双したらしいから、合格はほぼ間違いないとアザゼルさんが酒を呷りながら言っていたし問題ないだろう。

今はアザゼルさんが予約してくれたレストランで、豪華な食事に舌鼓を打っている最中だ。

「あら、このお魚美味しい！　白音も食べてみニャさい、ほらあ～ん♪」

「姉さま、恥ずかしいからやめて下さい！」

「うふふ、小猫さんも楽しそうですわね」

「……焼き鳥姫のくせに」

「なんですって、この猫又娘！」

「二人とも仲いいニャ～」

「よくない!!」

なんか向こうのテーブル楽しそうだな、賑やかでいい事だ。

「先生にも言ったけど驚いたよ、俺たちって普通の悪魔に比べてあんなに強くなってたんだな」

「そりゃそうだろ、赤龍帝のくせに何言ってんだ。天龍だぞ天龍、お前ドライグのことちゃんと評価してやれよ」

同じテーブルに座ったイッセーがそんな事を呟く。

どうもイッセーは力加減がわからず対戦相手を殺しかけた事を気にしている様で、握った拳をじっと見つめていた。

正直そんなん気にしても仕方ないだろ、次に気をつければいいんだよ次に。
今度からはこ○亀のＢＧＭを掛けれればいい、あの音楽が流れてる間は多分誰も死なないから。
「取り敢えずこれで昇格試験は終了なんだ、後は中間テストに集中出来るじゃないか」
「勉強はそうだけど、まだオーフィスの問題が……なんだってヴァーリは、俺たちの所にオーフィスを送り込んで来たんだ？」
「さてね、ヴァーリさんの考えてる事なんて俺にはわからないし。ただアザゼルさんは、何かから『隠すため』じゃないかって言ってたな」
あそこで呑んだくれてる酔っ払いの戯言を信じるのもあれだけど、多分言ってることは正しい。
でも最強無敵な龍神さまを、一体何から隠すんだ？
身を隠す前に、肌を隠した方がいいと思うんだけど。
あの人頭いいくせに時々突飛な事するから、いまいち思考が読めないんだよね。
俺が悩んでる間、イッセーとアーシアちゃんがアザゼルさんに神器について質問していた。
『覇龍』って二天龍だけの必殺技じゃなかったらしく、サイラオーグさんの眷属である金ピカライオンやなんとモグラさんまで使えるそうだ。

サイラオーグさんの場合は『覇獣（ブレイクダウン・ザ・ビースト）』とかいう別物らしいが、どちらにしろ使ったら死ぬらしいので俺には縁のない代物だ。

アーシアちゃんは自分の強化案を模索している様で、アザゼルさんに強力な使い魔との契約を勧められていた。

防御は使い魔に任せてアーシアちゃん自身は回復に専念するのか、やる事がハッキリしてると迷わない分効果的かもしれない。

既にアーシアちゃんは『蒼雷龍』と契約しているので、アザゼルさんはそういった上位の魔物に片っ端から声を掛けてみようかとアーシアちゃんの魔改造を目論んでいるようだ。

けどアーシアちゃん、モグラさんとは契約出来ないからね？

最近俺から離れて行動しまくってるから忘れてるかもしれないけど、俺の頭の上で野菜食い散らかしてるこの子は一応神器だから。

スコルとハティ？

この子たちは俺の眷属扱いだけど、契約とか出来んのかね？

ルフェイちゃんたちの所にいるスコルたちを呼んで聞いてみようとしたその時、何かの違和感を感じた。

なんだこれ、どっかに飛ばされた？

みんなも何かを感じ取ったらしく、キョロキョロと辺りを伺っている。
そんな中、別のテーブルにいた黒歌さんが猫耳をピクピクと動かしながら近づいてきた。
「ありゃりゃ、ヴァーリはまかれたみたいだニャ。――本命がこっちに来ちゃうだなんてね」
「本命？　あんたらまたなんか企んで……っと、そういう事ね」
俺が問い詰めようとしたその時、見覚えのある霧が周囲に立ち込めてきた。
なるほど、またあの連中か……！
毎度毎度同じ手ェ使いやがって、この霧を出す反則くさい神器も飽きたっての！
「お前ら、このレストランから出るぞ！　連中のお出ましだ！」
アザゼルさんの先導に従い、一斉に動き出す俺たち。
木場やゼノヴィアはそれぞれの得物を取り出し、イッセーも籠手を出現させて臨戦態勢だ。
走り続けてレストランのある通路を抜けロビーに出るが、客もスタッフも見当たらない。
辺りを見渡していたその時、何処からか大きな炎の球が撃ち込まれてきた！
「ツアーシア！　イリナ！」

狙いはあの二人か、ここからじゃ遠すぎる！
遅れて気付いたイッセーも叫んだが炎の球は二人に当たる事はなく、オーフィスが炎を難なく打ち消してくれた。
「あ、ありがとうございます」
「……」
アーシアちゃんがお礼を言うも、オーフィスは無反応。
なんだ、ツンデレか？
あなたの為にやったんじゃないんだからねってか、オーフィスにはあんま似合わんね。
「やぁ、久しいな赤龍帝とその仲間たち。京都以来だ、その時のお礼に今回はこちらが先に挨拶をさせて貰ったよ」
俺がアホな事を考えていると先ほどの攻撃を仕掛けてきた連中の片割れ、曹操が槍を肩にトントンと当てながら挨拶してきた。
隣には霧を使うメガネ、ゲオルクもいる。
さっきの炎はこいつか。
しかも曹操の奴、イッセーにやられた目の傷が消えてやがる。
つうかお礼って何やったんだ？

……あぁ、ゼノヴィアが開幕デュランダルぶちかましたのか。
やるじゃないかゼノヴィア、今のお前には最高のデュランダルの使い方だと思うぞ。
でも次からは確実に仕留めような？
……っと、アホな事を話してる間に今回の襲撃の原因が語られていた。
どうにもこの曹操、同じ『禍の団』にも関わらずオーフィスの事を付け狙っていたらしい。
それを知ったヴァーリさんが確証を得る為に美猴さんをオーフィスに変化させて囮となり、派手に動いて炙り出そうと企んだそうだ。
結果こうして曹操が釣れた訳だが、あの人また俺たちをいい様に使いやがったな。
ロキとやりあった時も目的のフェンリルさんを確保したら即退却してくれやがったし、今度会ったら文句言ってやる！
「しかしなるほど、ヴァーリたちの中に君の姿があったのも陽動だったのか。ヘラクレスとジャンヌはヴァーリと一緒にいたキミの姿を見て、見事に釣られて行ったよ。君にはしてやられてばかりだな」
「俺なんもしてないんですが。勝手に評価を上げないで頂きたい」
「謙虚だね、本当にやりにくい」
ゲオルクが笑みを浮かべながら話しかけてくるが、俺が何した訳でもないのに勝手に

評価しないで欲しい。
謙虚とかじゃないから。
ウチの義兄二人が勝手にやっただけで、俺は本当に何もしてないんだよ。
つうかあの二人はどんだけ俺の事嫌いなんだよ、俺がいただけで簡単に食い付くか？
こっちは仕返しも済んだし、もうあの二人と会いたくねぇ。
「曹操、我、狙う？」
俺がゲオルクに話しかけられた後、オーフィスは首を傾げながら曹操に尋ねる。
「あぁ、オーフィス。俺たちにオーフィスは必要だが、今のあなたは必要ではないと判断した」
「わからない。けど、我、曹操に負けない」
「そうだろうな、あなたはあまりに強すぎる。正直、正面からやったらどうなるか――――よし、ちょっとやってみようか」
曹操はそう言いながら肩に引っ掛けていた聖槍を器用に回し始めた後、槍の切っ先をオーフィスに向ける。
すると槍の先端が開き、眩いばかりの光の刃が現れる。
あぁ、あれは……ヤバいな。
俺も勿論だが、イッセーたち悪魔がアレを喰らうのだけは絶対にマズい気がする。

俺がイッセーたちに声を掛けようとした瞬間、曹操は即座にオーフィスに接近しその腹部に輝く槍を深々と突き刺した。
「輝け！神を滅ぼす槍よッ！」
曹操が気合をいれた途端輝きが一層増し、槍から膨大な閃光が溢れ出してくる。
「ちょ、アレはいくら何でもマズいだろ!?」
「オーフィスなら大丈夫よ、いいからアンタはこっち」
俺がオーフィスの所に駆け出そうとすると、黒歌さんが俺の襟を引っ張り引き止める。
それと同時に俺たちの周りを黒い霧が包み込む。
黒歌さんとルフェイが二重で展開してくれたこの霧は光を軽減してくれる代物らしく、おかげで俺たちは怪我一つなく無事だった。
やがて光が収まると黒い霧も霧散し状況を確認すると、そこには槍を突き刺したままの曹操と無表情のまま自分を刺した相手を見つめるオーフィスがいた。
曹操はそれが当然とばかりに槍を引き抜くと、オーフィスの腹部にポッカリと空いた穴がみるみるうちに塞がっていく。
マジでか、血の一滴すら流れてないしアレでも効いてないの？
流石ラスボス、耐久値もハンパないな。

「わかるか赤龍帝？　悪魔なら瞬殺、それ以外の相手でも余裕で消し飛ぶほどの力を込めてもこの通り。これがオーフィス、グレートレッドを除いた全勢力の中で一番の力を持つ者だ」

曹操は溜息を吐きながらそう呟くが、それならこいつの目的ってなんだ？

手を出さなきゃ一応は味方のままなんだから、敵対するだけ損だよね？

それともこの反則キャラをどうにか出来る裏技でもあるのか？

「あちらさんが遊んでくれてる間に、準備完了ニャン。いくよルフェイ、そろそろあいつを呼んでやるわよん！」

「はい！」

曹操たちを観察しつつ思考を走らせていると、黒歌とルフェイが足下に魔方陣を出現させた。

その魔方陣は光を放ちつつフェンリルさんの元まで移動すると、更に一層強く輝き光を弾けさせて一瞬視界を白く塗りつぶす。

光が収まった時そこにいたのはフェンリルさんではなく、昔から見慣れた銀髪碧眼のイケメン――ヴァーリさんだった。

「ご苦労だったな黒歌、ルフェイ。それから……面と向かって会うのは久しいな、曹操」

「久しいな、じゃないよ。人に面倒押し付けたと思ったら、何でフェンリルさんと入れ替

わってんの？　俺のモフモフ成分を返せ」
「あの、フェンリルちゃんは私の使い魔なんですけど……」
ヴァーリさんは俺の言葉もルフェイも言葉も等しく無視して、曹操と会話を続けている。
無視すんなオルァ！
「しかしお前とゲオルクだけか、随分と豪胆な英雄だな。例の『龍喰者（ドラゴン・イーター）』とやらを有しているからか？　おおかた英雄派が作り上げた龍殺しに特化した神器保有者か、新たな神滅具と言った所かな？」
ヴァーリさんの問い掛けに、曹操は楽しそうに首を横に振った。
いかにもなんか企んでますって態度だな。
「違う、違うんだよヴァーリ。『龍喰者』とは俺たちが作った訳でなく、現存する存在につけたコードネームみたいなものさ」
「曹操、いいのか？」
「あぁ、頃合いだゲオルク。オーフィス、白龍皇、赤龍帝、オマケにお前たちがご執心のイレギュラーであるカズキまでいる。――呼ぼう、今こそ無限を食う時だ」
曹操の言葉を受けゲオルクは口の端を吊り上げながら、ロビー全体に広がるような巨大な魔方陣を展開した！

それと同時に起こる激しい振動、そして魔方陣から溢れてくる禍々しいオーラ……なんだこれ、モグラさんがメチャクチャ怯えてる!?

どうやらドライグも同様の様で、イッセーが何やら話しかけている。

モグラさんみたいな子どもならまだしも、二天龍を怯えさせる何かって一体なんだよ!?

その間にも禍々しいオーラはどんどんと漏れ出ていき、その魔方陣から徐々に何かが姿を現していく。

巨大な十字架に磔にされた……なんだあれ?

上半身が人っぽい形をしているが、全身拘束具に覆われているので顔も見えない。

下半身は蛇、いやドラゴンか?

そして全身の至る所に打ち込まれている、見るだけで痛々しい無数の杭。

なんだ、この見ただけでヤバいと確信させられる奴は……!

「曰く『神の毒』、『神の悪意』。蛇とドラゴンを嫌った神の呪いを一身に受けた天使であり、ドラゴン……名はサマエル。彼の持つ呪いはドラゴンを確実に喰い殺す、龍殺しの聖剣なんて比ではない」

このドラゴン、サマエルから感じるオーラに萎縮している俺たちを嘲笑う様に言い放つ曹操。

くそ、優位を確信してる顔してやがるな。
「なんだってこいつが出てくる！　本来ならコキュートスの深奥に封じられているはずだぞ!?　冥府の神、ハーデスは何を考えて……おい、まさか――」
「そのまさかさ。ハーデス殿と交渉してね、何重もの制限を設けた上で彼の召喚を許可してもらったのさ」
「あの野郎！　ゼウスが協力態勢に入ったのがそんなに気にくわねぇってのか!!」
アザゼルさんは顔を怒りで染めながら、憎々しげに吐き捨て曹操を睨みつける。
ハーデスってのがどんな奴かは知らないが、テロリストに協力する辺りロクな奴じゃないんだろうな。
「さぁサマエル、君の力を見せてくれ……『喰らえ』」
曹操の言葉が聞こえたと同時に、俺の横を黒い何かが通り過ぎた。
すぐさま振り返ると、オーフィスがいた筈の場所に黒い塊が鎮座している。
その黒い塊には触手の様なものが伸びていて、その先にはサマエルの姿がある。
これは……サマエルが、オーフィスを取り込んだのか？
イッセーが呼び掛けてもオーフィスの返事はなく、木場の聖魔剣で斬り付けても触れた部分が消滅し、ヴァーリさんの半減の力もリアス先輩の消滅の魔力も効果を示さない。

黒い塊に繋がっている触手は何かを吸い取る様に脈動し、ゴクンゴクンと気色の悪い音を辺りに響かせ続ける。

こうなりゃ触手だけでも引き剥がそうと、怖がるモグラさんを説得して鎧を纏う。

イッセーも同じ事を考えたのか何時もの赤い鎧を発現させて触手に殴りかかろうとしたが、二人してアザゼルさんに止められてしまう。

「さて、流石にこのメンツだと俺も力を出さないと危ないな。ハーデスには一度しかサマエルの使用許可を貰えていないからね、ここで決めないと俺たちの計画は頓挫する」

俺たちの抵抗を黙って見ていた曹操は、笑みを浮かべながら喋りだした。

それに呼応する様に、みんなも戦闘態勢に移行していく。

ああくそ、マジであんなのと戦うのかよ……！

６４話

「一人でこの人数、捌ききれるのか？」
「やってみせるさ。これぐらい出来なければ、この槍を持つ資格なんてないにも等しい」
ゲオルクの問い掛けに曹操はそう言い放つと、槍を構え直す。
それに呼応する様に、曹操の槍が一際眩い閃光を放ち始めた。
「――禁手化」
曹操の発した言葉が耳に届いた数瞬後。
曹操の背後に仏像なんかで見る輪っか状の光と、幾つかの球体が突如現れ曹操の周りを漂い始めた。
一、二……全部で七つか、でも槍の形は変わってないな。
にしてもえらく静かに禁手化したな、カズキみたいに蒸気を噴き出すのとは大違いだ。
「これが俺の神器『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）の禁手、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍（ポーラーナイト・ロンギヌス・チャクラヴァルテイン）だ……まだ未完成だけどね」

曹操が自慢げに語り、先生が驚愕して叫んでいる。
こいつも亜種の禁手かよ、英雄派はそんなのばっかりだな！
ヴァーリが言うには曹操の周りに浮いてるあの球、一つ一つに能力が有ってこいつも全ては知らないらしい。
とことん反則だな、気が滅入ってくるぜ！
「その能力のどれもが凶悪だ、だからこそ最強の神滅具だと称される。紛れもなく、奴は純粋な人間の中で一番強い……いま現在では、な」
ヴァーリは曹操を睨みつけながらそう呟いた。
一番か、とんでもないよなやっぱり。
「さて、小手調べだ。七宝（しっぽう）が一つ……輪宝（チャッカラタナ）」
曹操が槍を持たない手を前に突き出すと、球体の一つがその前へ移動する。
そして名を呼ばれた事に反応してか、突然その姿を消した！
いや、物凄いスピードで動いてるのか!?
そして何かが俺の横を通り抜けたかと思うと、カズキが声をあげる。
「ゼノヴィア！」
「ぐっ、エクス・デュランダルが……ッ！」
俺が振り向くと、ゼノヴィアのデュランダルに被せていたエクスカリバー製の鞘が弾

け飛んでいた！

　球体のスピードに反応しきれなかったゼノヴィアは、なんの抵抗も出来ずに手にしていた獲物を破壊されてしまった様だ。

　いくらスピードに乗ってるからって、ゼノヴィアの聖剣を問答無用でぶっ壊すのかよ!?

「輪宝の能力は武器破壊、これに逆らえるのは相当の手練れのみだ。ついでに腹を貫こうかと思ったんだが、攻撃をいなすのが上手いな。だが今のが見えないならキミでは俺に勝てないよ、デュランダル使い」

「くそっ、掠っただけでもこれか……！」

　曹操の言葉の後、その場で膝を着くゼノヴィア。

　鞘が破壊されたデュランダルを支えにしているが、血の滲んだ脇腹を抑えて今にも倒れそうじゃねぇか！

　心配したのか、カズキが素早くゼノヴィアに駆け寄る。

「大丈夫かゼノヴィア！」

「少し脇を削られただけだ、問題な……うお!?」

「アーシアちゃん！　ゼノヴィアの回復頼む！」

　カズキはゼノヴィアに駆け寄った後腕を掴んで何をするのかと思ったら、アーシアの

近くにゼノヴィアを放り投げた！

その近くにいた小猫ちゃんが見事にキャッチしてくれて、アーシアが即座に回復を始めている。

確かにゼノヴィアを回復させるにはアレが一番速いんだろうが、相変わらずぶっ飛んだ事をするよな！

ゼノヴィアが何か言いたげな顔をしてたぞ。

そしてカズキはすぐさま曹操へと飛び掛かり、俺と木場もその後に続いて襲い掛かった。

三人が入れ替わる様に連続で攻撃を繰り出すが、曹操はそれらを器用に躱したり槍で弾いたりしてなかなか当たらない！

「三人がかりか、なかなかのコンビネーションだ。しかしこの槍の前では少々力不足かな!?」

そして槍の一振りで、纏めて後方に押し返されてしまった。

それと同時に球体の一つがリアスと朱乃さんの元に飛んでいった。

二人は武器を持っていないしさっきのとは別の球だと思うけど、似てるから判別するのも難しいぞ！

その球は二人の近くまで到達すると発光し、その輝きで二人を包み込んだ。

迎撃しようと二人が手をかざすが、そこからはなんの反応も起こらない。
これは……？
「女宝（イッテイラタナ）。異能を持つ女性の力を、一定時間完全に封じる。これも相当な手練れでないと無効化出来ないんだが……君たちでは無理のようだね」
くそ、なんでもアリだなあいつの神器！
リアスたちで無理なら、おそらくうちの女性陣には全員有効だと考えていいはずだ。
アーシアが封じられたらアウトだ、回復役がいなくなったら最悪誰か死んじまう！
「ふふふ、この限られた空間で、サマエルとゲオルクを死守しながらキミたち全員を倒す……オマケに派手な攻撃は禁止ときたか、何とも高難度のミッションだ！」
「派手な攻撃が厳禁？　ならこっちからやってやるよ！」
楽しそうに笑いやがって曹操の奴！
完全に戦いを楽しんでやがる！
俺がいきり立っていると、カズキが地面を殴り石柱を何本も隆起させて一斉に曹操へと襲わせた！
カズキお得意の攻撃だ！
「君が乱戦に持ち込みたい時によくやる手だね。大した手数だが、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』の前では意味をなさない！」

「ハッ、たかが槍に大層な名前付けやがって！　名前が長過ぎて覚えらんねぇんだよ！」
「この槍を見てそんな言葉を吐けるとは大した男だ！」
何時ものように挑発しながら攻撃を続けるカズキと、それすらも楽しそうに返事をする曹操。
モグさんの力が込められててそう簡単に砕けないはずなのに、豆腐みたいにスパスパと!!
「言ってろ！　だいたい神様を殺した槍とかってやたらと持ち上げられてるけどな、実際はお肉に火は通ったかな？　ってノリで確認のために刺した、要は爪楊枝みたいなもんだろが！」
「ハハハ、爪楊枝か！　そんな事を言われたのは初めてだっ！　面白いなキミは、仲間が興味を示すのもわかる気がするよ！」
「そりゃどー、もッ！」
カズキが何やら色んな所に喧嘩を売るような発言をした後、一本だけ大きく別の所へ向けて石柱を伸ばした。
その行き先は……サマエルを操るのに集中している、ゲオルクだ！
「ッ！　させんよ！」
しかしそれすらも曹操の操る球体に阻まれてしまった！

ゼノヴィアを攻撃したのと同じ奴か!?
くそ、いいタイミングの奇襲だと思ったのに!
「危ない危ない、そう簡単に邪魔させる訳にはいかないさ」
「それでいいんだよ!」
カズキが叫ぶと、後方で魔力を溜めていた黒歌とルフェイが同時にサマエルへと攻撃を放つ。
そして時間差でカズキも大きなドリルをゲオルクにぶっ放した!
しかし再び球体が動き出し、今度は黒歌たちの所へ飛んで行く。
「馬宝（アッサラタナ）。任意の相手を転移させる」
「うぉ!?　面倒クセェ能力だな、くそったれ!」
曹操の言葉と同時に黒歌とルフェイ、そしてカズキの姿が消え去り、またすぐに別の場所へ現れた。
カズキは自分の放った攻撃の前に放り出されるも、何とか砕いて相殺させていた。
これが転移させる力か、って黒歌たちの手の向いてる先にいるのはアーシアじゃねぇか!
マズイ、回復に専念してる上に突然の事で反応出来てない!
「ふざけるなよォォッ!　『龍星の騎士（ウェルシュ・ソニックブースト・ナイト）ッ

！」

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ!!!!』

俺の中にある駒を瞬時に切り替えるトリアイナ、その中でも装甲をパージする最速の形態になりアーシアの元に飛び出す！

この形態じゃ間に合っても黒歌とルフェイの魔法に耐え切れないだろうが、そんな事関係ない！

アーシアを二度と失いたくない、絶対に俺が守ると決めたんだ！

覚悟を決めて身構える俺の前に、突如として土の壁がせり上がってきた！

カズキのフォローだろう、完璧には防げないだろうが今はありがたい！

何とか耐え切ってみせるさ！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

くそ、やっぱ急拵えの壁じゃ役にたたねぇか！

予想通り黒歌さんたちの魔法は土の壁を貫通してイッセーに襲い掛かり、身体のいたる所から血を噴き出し膝をついちまった。

「イッセー、生きてるか！」

「何とか、な。カズキが勢いを殺してくれたお陰で助かった……」

俺の問い掛けに、イッセーは息も絶え絶えといった感じで答える。

鎧は砕け血は漏れ出て肉も削がれたが、ギリギリ致命傷ではない様だ。
アーシアの治療を受ければ、まだ動く事は出来そうだ。
くそ、こんな事なら『フェニックスの涙』持って来ときゃよかった！
スコルとハティもお留守番頼んで来ちゃったし、今から朱乃さんに召喚して貰うか？
でもあいつに対抗できるかわからないし、そもそもあいつの霧の中で召喚自体が出来るかどうか……。
俺が考えあぐねていると、膝をつくイッセーを見つめながら曹操が嘲笑する様に語りかけてきた。
「赤龍帝の弱点は駒を切り替える時に発生するタイムラグだ、攻略法さえ確立すれば君なら数手で封殺出来る」
くそ、ドヤ顔が腹立つな！
能力七つ持ちとか反則染みた事してるくせに！
せめて能力がわかればいいんだけど、ヴァーリさんに聞く暇もない。
めんどくさいな、もういっそ辺りの建物纏めてぶち壊してやろうか？
ゲオルクの集中乱せばあの怪物の制御出来ずに引っ込まないかな？
「しかしこれで赤龍帝を仕留めるつもりだったんだがね、思ったようにいかないものだ。やはりキーマンはカズキだな、まずは彼から仕留めに行こうか！」

うげ、ちょっかい掛けまくってたら狙われた!?
ちょ、タンマタンマ!
せめて能力がもう少し解るまで待って!
「させるかよ! ヴァーリ、俺に合わせろ!」
「まったく、俺は単独でやりたい所なんだがな……ッ!」
しかし曹操が俺の元に来る事はなく、金色の鎧を纏ったアザゼルさんとヴァーリさんが飛び出し曹操へ肉薄した。
金と銀の光が交錯し、曹操へと次々に攻撃が繰り出されていく。
それでも曹操に攻撃は当たらず、すんでの所で避けられてしまう。
「堕天使の総督と白龍皇の挟撃、かなりの苛烈さだ! しかし俺は更にその上をいく!
鎧装着型の禁手の弱点、それは溢れ出る強大なオーラの流れで攻撃を予知しやすい事だ!」
いつも俺がやってる動きを、更に高度にしたもんか!?
次の瞬間、二人の攻撃を後ろに大きく退いた曹操の眼が金色の輝きを放つ。
それと同時に、アザゼルさんの足下が石化し始めた!
ッヤバいな、観察とか言ってる場合じゃない!
「邪眼(イーヴィル・アイ)というものをご存知かな? 先日赤龍帝にやられた眼を補っ

た、俺の新たな眼さ。片眼だし効き目は鈍いが、僅かにでも動きが鈍れば――」

「グハッ!!」

駆け出した俺の顔に、何かが降りかかった。

指先で拭ったそれは、赤いなにか。

もう一度上を見上げると、アザゼルさんの腹部に何かが生えていた。

「この通りだ。あなたとは一度戦い観察させて頂いた、人工神器の弱点はファーブニルの力をあなたに反映しきれていない点だ」

「……くそが。なんなんだ、こいつのバカげた強さは……ッ！」

違う、生えてるんじゃない。

突き刺さっているのだ。

曹操の槍が、アザゼルさんの腹部に、深々と。

アザゼルさんは槍が引き抜かれると、腹部を抑えながら地面に堕ちていった。

……は？

おいおい、なんで落ちてってんの？

堕天使の総督の癖して飛ぶの苦手なのか？

なぁ、なんでそんな苦しそうな顔してんだよ？

なんで腹から血ィ流してんだよ？

そんでもって、なんでお前は笑ってやがる。
その槍についてる血はなんだ。
……お前か？
お前がアザゼルさんをやったのか？

「人の親父になに晒してやがんだ！　このクソ野郎がぁぁぁぁぁッ!!」
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「避けてんじゃねぇぞオラァッ!!」
いけない、アザゼル先生がやられた事でカズキくんが暴走し始めた！
周りの被害は二の次で、曹操に向けて手当たり次第に攻撃を仕掛けている！
このままでは僕たちまでやられてしまう！
「アザゼル総督をやられて激怒したか!?　ヴァーリ同様キミもアザゼル総督に拾われたそうだね、父代わりの男をやられたのがそんなに気に障ったかな!?」
「クソッタレがぁぁ！」
「そら、感情を乱しすぎるから隙が出来た！」

それでも曹操には届かず、挑発を受けて余計に大雑把な攻撃になっている。
そこを突かれて球体の攻撃を受け、胸の装甲をバラバラにされながら地面に叩きつけられた！
まるでいつもと真逆の現象だ、カズキくんがこうもペースを乱されるなんて!?
「ぐっ……ちく、しょオ……ッ！」
「大した攻撃だったが、いささか精度に欠けるね。何時ものキミの方が、俺にとっては余程怖い敵だったよ」
「くっ、アザゼルに続きカズキまで！　許さんぞ、曹操ォッ！」
続いてヴァーリも突撃しその手から極大の魔力を打ち出すも、新たな七宝『珠宝（マニラタナ）』の能力で受け流されその攻撃は小猫ちゃんに差し向けられた。
その攻撃は黒歌が身体を張って庇ったお陰で小猫ちゃんは助かったが、黒歌は致命傷を受けてしまった。
「ヴァーリ、キミは仲間想いが過ぎる。まるでそこで伏している赤龍帝のようだ、二天龍はいつからそんなにヤワになった?」
「ではこちらも見せようかッ！　我、目覚めるは、覇の理に全てを奪われし――」
「それはさせられないな！　サマエルよ！」
ヴァーリが『覇龍』の呪文を唱え始めたその時、曹操がサマエルに指示を飛ばした。

するとサマエルの口から、カズキくん目掛けて黒い何かが飛び出した！
オーフィスですら抵抗できないサマエルの攻撃、鎧の砕けたカズキくんが受ければひとたまりもない！
「クッ！　カズキィィッ!!」
それを見たヴァーリは『覇龍』の呪文を切り上げ、カズキくんを庇うように身体を間に滑り込ませた！
黒い何かはヴァーリの身体を包み込み、暫くすると四散していく。
しかしその後、ヴァーリは口から大量の血を吐き出して倒れてしまった！
「ヴァ、ヴァーリ、さん……!?　俺のせいで……ッ！」
「ゴフッ！　気に、するな……お前の、せいじゃない……」
カズキくんの言葉に、苦しげに答えるヴァーリ。
カズキくんはそんな彼を見て、痛みとは別の要因で動けないようだった。
イッセーくんのライバルであるヴァーリが瞬殺される程の毒なのか、あのサマエルというものは！
「いい剣だ、木場祐斗。俺との相性で一番無難に戦えるのは、瀬尾カズキを除けばキミだ。しかし、成長途中のキミなら難なく倒せるさ」
数度剣を交えただけで、曹操にこう断じられてしまった。

悔しいが、奴の言う通り今の僕では彼の体に剣を届ける事は難しい様だ。
アーシアさんが先程から治療に奔走してくれているが、とてもじゃないが間に合わない。
僕も新たな禁手を発動させてみんなを護ろうとしたが、曹操に戦う価値もないと捨て置かれてしまった。
僕の積み上げて来た物が崩れる様に感じたが、僕がここでヤケを起こしたらそれこそ総崩れになってしまう。
激しい屈辱を感じながらも、剣を構える事だけは決してやめはしない。
今みんなを護れるのは、僕しかいないのだから。
「どれだけ取れた？」
「四分の三強といったところか、大半と言えるだろう。これ以上はサマエルを現世に繋ぎ止めておけない、潮時だな」
「上出来だ、十分だよ」
曹操とゲオルクが何やら話し合うとオーフィスを包んでいた黒い塊が四散し、同時にサマエルも苦悶に満ちた声をあげながら魔方陣の中に消えていき魔方陣もまた消滅した。
塊から解放されたオーフィスは以前と変わりない姿に見えるが、あれは一体何だった

んだ？

疑問に思っていると、オーフィスは曹操に視線を向けて尋ねた。

「我の力、奪われた。これが曹操の目的？」

そう、奴らの目的はそこにあったのだ。

奴らはオーフィスを支配下に置きその力を利用したかったが、それが困難だと悟るとオーフィスから力を抜き出し新たな『ウロボロス』を生み出す事を考えた。

それを新たな象徴に据えて自分たちの都合のいい傀儡を、というのが計画の全容か。

曹操はネタバラシをした後、僕らにトドメを刺す事はせず立ち去ろうとした。

どうやら向こうも何かが起きたらしいが、詳しくはわからない。

そして曹操は立ち去る前に、ある事を告げてきた。

「一つゲームをしよう。もう直ぐここに英雄派に協力した神、ハーデスの命令でオーフィスを回収しようと死神（グリム・リッパー）の集団がやってくる。そこに俺と入れ替わりでやってくるジークフリートとゲオルクにも参加して貰う。オーフィスを死守しながらここから脱出できればキミたちの勝ち、奪われれば負けだ」

曹操はそれだけ言うと、僕たちの元から去っていった。

ゲームか……完全にこちらを舐めきっている……ッ！

だがここで倒れたままでは、直ぐさま襲撃を受けてしまう。

悔しさは、いつか自分の剣に乗せて返してみせる。
今は無事な者たちで、負傷者を安全な場所へ移動させるのが先決だ。
僕たちは、こんなところで終わるわけにはいかないんだ……！

65話

「……やっぱ相当な数揃えてるな。あれ、全部死神って奴なのか？」
「あの趣味の悪い鎌を見る限りそうだろうね。一旦みんなの所に戻ろう、奇襲とか言ってる場合じゃなさそうだ」
僕と比較的軽傷で済んだカズキくんは、偵察として駐車場に来ている。
見つからない様に盗み見ると、ローブを着込んだ怪しげな連中が妙な機械の周辺をフラフラと漂っていた。
「木場は一旦戻ってて、俺は他の場所をもう少し……」
「カズキくん、気持ちはわかるけど駄目だ。体質でケガが治りやすいのは知ってるけど、以前程じゃないし体力が戻るわけでもない。無理をしてキミを失う事になったら、僕たちが全滅する可能性だってあるんだ」
「……わかった、ごめん」
一人で行動しようとするカズキくんを嗜め、二人でみんなが待つ階層へと移動を始める。
どうも自分を庇って負傷した先生とヴァーリに思う所がある様で、気持ちがはやりす

ぎている気がする。
　これから更に敵の数は増す筈だ、貴重な戦力であるカズキくんを失うわけにはいかない。
　はやく本来の彼を取り戻してくれるといいのだけれど……不甲斐ない自分が、本当に情けない。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
　盛大にやらかした。
　ついカッとなって暴れ回った上に、俺を庇ったヴァーリさんは身体を毒に侵されてしまった。
　イッセー、ゼノヴィア、アザゼルさんはアーシアちゃんのお陰で完治したが、重症の黒歌さんと神の毒とやらに苛まれているヴァーリさんは別室で安静にしてもらっている。
　重症の二人は、間違いなく俺のせいで被害を受けた。
　俺は治癒の速い体のお陰で動き回れる位には回復したため木場と一緒に偵察してたんだが、そこでも木場に窘められてしまった。
　情けないなぁ、俺。
　……一旦思考を切り替えよう、落ち込むのは後でも出来る。

とにかく今は落ち着いて、状況を整理しよう。
偵察している間に色々と話が進んだ様で、どうやらヴァーリさんたちは『禍の団』から裏切り者判定を受け組織からも追われる立場になったらしい。
英雄派の尻拭いをさせられたのか、なんとも不憫な。
まぁ普段から命令無視しまくって世界中を冒険してたみたいだし、目障りだからついでに潰すくらいのノリなのだろうとルフェイが言っていた。
オーフィスの現在の力だが、本人曰く『全盛期の二天龍より二回り強い』らしい。
アザゼルさんによるととんでもない弱体化っぷりだそうだが、そんなこと言ったらドライグとアルビオンが泣くんじゃなかろうか。
本当ならもっと弱くなる筈だったけど、別空間に力を逃してたとかでついさっきそれを回収したからこそ、その強さに落ち着いたそうだ。
そして今は、ルフェイが行える転移に同行させる人員を決めている最中だった。
「まずはイリナだな、サーゼクスと天界に現状とハーデスのクーデターを伝えてもらう。待ち伏せがいるかもしれんし、護衛としてゼノヴィアに同行して貰いたい」
「本心を言えば、残ってみんなと共に戦いたい。しかしデュランダルがこの有様では、最後まで戦い抜けるかもわからないんだ。大人しく指示に従うよ」
みんなで話し合い、イリナとゼノヴィアが脱出する事に決まった。

正直レイヴェルちゃんを連れていってあげたかったが、定員が二名ではそれも難しい。

レイヴェルちゃんもそれを理解して自らここに残ると言ってくれた、賢くて優しい子だ。

ゼノヴィアはアザゼルさんの要請に了承した後、こちらに歩み寄ってきて俺の胸へ拳を押し付けてきた。

「カズキ、今度は負けるな。お前がいつものお前で居続ければ、絶対に誰にも負けはしない。……死ぬなよ？」

「……おう、任せろ。お前も何が待ち伏せてるかわかんないからな、気をつけていけよ」

「ああ！」

ゼノヴィアからのエールを受け、頭を撫でてやるといい笑顔で返事を返してくれた。

ホントかっこいい奴だよ、お前は。

朱乃さんやアザゼルさんと話した後、俺は黒歌さんとヴァーリさんの様子を見るために別室へと移動した。

先に黒歌のいる部屋に向かうと、小猫ちゃんとレイヴェルちゃんが先にやって来ていた。

何故自分を庇ったのかと尋ねる小猫ちゃんと、笑いながら誤魔化す黒歌さん。

そしてその様子を冷静に見つめるレイヴェルちゃん、正直めっちゃ入りにくい。
「部屋の前で立聞きしてるマセガキちゃん、そんニャ所にいないで入ってくれば？」
バレテーラ。
観念して素直に半開きになっている扉を潜ると、小猫ちゃんが驚いた様にこちらを見てくる。
レイヴェルちゃんも少し驚いた様だが、俺が近づくと脇に逸れてスペースを空けてくれる。
「失礼します、体調どうですか？　すみません、俺がみんなのペース乱したせいで……」
「終わった事はもういいのよん、それにグレモリー眷属の《僧侶》ちゃんに治療してもらったからバッチリにゃん♪　それよりお見舞いの品は？」
「俺自身で。ご自由にご利用ください」
「あらステキ、爪研ぎに良さそうニャン♪」
「調子に乗ってすんませんでした」
着いて早々に行われる軽口の応酬に、小猫ちゃんとレイヴェルちゃんは目を大きく見開いて驚いている様だ。
しかし小猫ちゃんは視線を鋭くして、それを俺に向けてきた。
「先輩、わたしは今姉さまと真剣な話を……！」

「知ってるよ、小猫ちゃんが黒歌さんに聞きたい事も大体わかってる。でもね、この人ツンデレだから本当の気持ちなんて話してくれないって」
「ちょっと、勝手にツンデレ認定しないでくれニャい？」
　黒歌さんの言葉を無視して、小猫ちゃんと会話を続けていく。
「私は！　私は、姉さまのせいで辛い目に遭いました……姉さまに置いていかれて、そのせいで周りのヒトからどれだけ酷い事を言われたか……！」
「前に話してくれたからね、ちゃんと覚えてるよ。確かに黒歌さんは性格とか性根とか頭とか色々悪い人だけど」
「ぶっ飛ばすわよ、がきんちょ」
「小猫ちゃんの事だけは大切に思ってるんじゃない？　サーゼクスさんに頼んで軽く調べたら、黒歌さんの元主人て腐れ外道だったんだよ。眷属の身内にまで無茶させてたみたいし、そういう事情も知ってあげて」
「……姉さま？」
「……力を使うのは元々大好きよ？　ただあの元バカマスターが猫？の、私たちの力に興味を持ちすぎたから目障りになっただけ。白音は正直だから、頼まれたら仙術を使って暴走しちゃっただろうし」
「おお、ついにデレた！　知ってるか小猫ちゃん、この人実は小猫ちゃんの事大好きなん

だぞ？　口ではあんな事言ってても、本心では心配しまくり――」

俺の言葉を遮る様に、魔力的な何かが頬を掠めて飛んで行った。

掠めた頬からプスプスという音と共に、微かな熱を感じ取る。

「随分と元気じゃない？　余計な事ばかり喋っちゃう悪い子には、オシオキが必要かニャ～……？」

「俺ヴァーリさんの所も寄って来るから！　小猫ちゃんたち後よろしく！」

俺が踵を返して部屋を退出すると、部屋の中から小猫ちゃんとレイヴェルちゃんの笑い声と黒歌の気まずそうな言い訳が聞こえてくる。

それをなんとなく嬉しく感じながら、ヴァーリさんの部屋へと向かう事にした。

ヴァーリさんの部屋は、黒歌さんの所から近いのですぐに着いた。

ノックをしてから入ると、ここにも先客としてイッセーが椅子に座っていた。

ヴァーリさんは俺の顔を見ると、なんでもない様に声をかけてくる。

「カズキ、お前は無事の様だな」

「俺の事より自分の事を心配してよ、原因の俺が言う様な事じゃないんだろうけどさ。ごめん、思いっきり足を引っ張った」

「気にするな、下手をすれば即死だってあり得た。魔力でムリヤリ抑え込める俺と違って、お前があの毒を喰らえば致命傷だろう。それに俺もアザゼルとお前をやられて冷静

さを欠いた、お互い様という奴だ」

俺が頭を下げても、ヴァーリさんはそう言って俺の頭に手を置いた。

ヴァーリさんに頭撫でられるの、いつぶりだっけか？

「そういえばカズキ先生がやられた時スゲェ怒ってたよな、『俺の親父になにすんだ～！』って。やっぱカズキは先生の事、家族だと思ってたんだな！」

「思い出させるな！　アザゼルさんもヴァーリさんも、黒歌さんだって気を使って触れないでいてくれたのに！　お前もさっさと忘れろ、さもなきゃコロス……！」

「お、おう……そんなに恥ずかしかったのか……」

イッセーはもう少し気遣いを覚えた方がいい、俺の中ではアレはなかった事にされてるんだよ！

ヴァーリさんもそんな顔色悪い癖に笑ってんな、アンタも似た様な事したじゃないか！

どうせ脱出作戦でも大人しくしてる気ないんだから、少しでも回復に専念してよ！

どうせ後で朱乃さんとゼノヴィア、そしてその二人からロスヴァイセさんに伝わり、三人にからかわれるのはわかってんだ！

今くらいは忘れさせてくれ……！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「イッセー先輩はそこで、カズキ先輩はこっちです」
「了解」
カズキと一緒にヴァーリの所から戻った後、アザゼル先生とリアスが考えた作戦を伝えられた。
この結界を維持している結界装置が複数あるので、それを破壊して一気に突破するというかなり強引な作戦だ。
そこから更にカズキが手を加えて、ついに脱出作戦が始めようとしている。
下準備として俺とカズキは小猫ちゃんの指示に従い、指定された位置にそれぞれ立つ。
「……先輩」
「んあ？　どったの小猫ちゃん、もしかして位置ズレてる？」
カズキの隣に立つ小猫ちゃんが、ポツリと言葉を漏らした。
カズキがそれに反応して尋ねるが、小猫ちゃんはゆっくりと首を横に振る。
「いえ、姉さまの事です。先輩が出て行った後、少しだけ姉さまとお話し出来ました。昔みたいに、普通の……姉妹みたいに」
「……そっか、そりゃ良かったじゃない」
「私はまだ姉さまを恨んでいると思うし……正直、嫌いです」

小猫ちゃんの言葉を聞き、カズキは何を答えるでもなくただ静かに話を聞き続ける。
「でも、助けてくれました。身体を張って、昔みたいに助けてくれたんです。その姿を、私は信じます。少なくとも、ここを出るまでは」
「……別に無理しなくていいんじゃない？　嫌いなもんは嫌いでいいんだよ、いきなり昔の事を全部なかった事になんて出来るわけないんだし」
カズキの言葉を聞いた小猫ちゃんは、驚いた様にカズキの方を見つめた。
おい、口開いたと思ったらそれか!?
小猫ちゃんが悩み抜いて考えた答えなのに、そんな言い方……！
「でも……」
「ムリヤリ自分を納得させる必要ないって。どんな理由があっても、小猫ちゃんに碌な説明もせずに勝手した黒歌さんが悪いんだ。それにね、弟や妹ってのは兄貴や姉貴には好きな様に文句言って困らせてやればいいんだよ」
俺がいつもそうしてるだろ？
カズキはそう言うと目線を小猫ちゃんに合わせる様に屈み、肩に手を置いて諭す様に言葉を続けた。
どっちかというと、カズキは迷惑掛けられてる方な気もするけど……いや、どっちもどっちか？

「そもそも話なんてここを出てから幾らでも出来るんだ、焦って今すぐ答えを出す必要なんてないんだよ。あぁ黒歌さんに何かされたら俺に言ってね、仕返しのイタズラくらいなら一緒にしてあげるから」

「……ふふ、そうですね。その時は、是非お願いします」

カズキはそう言うと肩に置いていた手を頭まで持っていき、小猫ちゃんの頭をポンポンと軽く叩いた後姿勢を戻し笑いかけた。

小猫ちゃんはしばし呆然としていたが、カズキの顔をジッと見つめてからクスクスと嬉しそうに笑い笑顔を向ける。

その姿がまるで兄弟のようでもあり、友人のようでもあり、何か他の関係にも見えて。

なぜだか、見ていてこちらも笑顔になってしまう。

最初は何を言うんだと思ったが、成る程そういう考え方もあるのか。

カズキは時々本当に同い年なのか怪しくなる、というかえらく大人びて見える時があるのだ。

俺もいつか、ああいう台詞が自然と言える様になるんだろうか？

「……先輩。ここを出たら、私も先輩たちと一緒に暮らしてもいいですか？」

「え、別にいいけど……何故いまそんな死亡フラグを立てる様な事を……」

小猫ちゃんの質問に、カズキは困惑しつつ返事をする。

おい、小猫ちゃんが真面目なトーンで喋ってんだから茶々を入れるな。
しかし小猫ちゃんはそんなカズキの目を真っ直ぐ見つめながら、真剣な面持ちでこう告げた。
「私、やっぱり先輩のことが好きです。いつも優しくて、楽しくて、ちょっぴりいじわるだけど頼もしい。そして私の事を正面から見てくれてる、そんな先輩が大好きです」
「……へ？」
……こ、告白だ！　マジ告白だっ！
薄々そうなんじゃと思ってはいたけど、まさかこのタイミングで告白するとは!?
そうだ、朱乃さんとゼノヴィアの反応は……笑っている!?
余裕の笑み、とは違うな。
素直に歓迎してる、微笑ましいって感じの笑顔だ。
多分この中で一番余裕がないのはカズキ本人だな、他のみんなはわかっていたって反応をしている。
「小猫ちゃんが？　俺の事を？　モグラさんじゃなく？」
「……？　何故そこでモグさんが出てくるんでしょうか？」
カズキが予想外の事態に狼狽えている、というかテンパってらっしゃる。
なんか珍しい光景だな、ちょっと笑える。

「ああいや、うん。素直に嬉しいんだけど……」
「別に今すぐ彼女にして下さい、なんて言いません。私も朱乃さんやゼノヴィアさん、ロスヴァイセさんと同じ場所に立ちたいんです」
「えっと、うん。そうかそうか……取り敢えず、これからよろしく？　でいいのかな？」
「はい、よろしくです♪」
カズキは未だに思考が纏まっていない様だが、小猫ちゃんに手を差し出し小猫ちゃんもそれに応えてとっておきの笑顔でその手を強く握り返した。
しかしまぁグレモリー眷属の大半がカズキに惚れてるな、本人に自覚がないけどこのまま俺よりも先にハーレム作るんじゃないだろうか？
カズキの家、ご近所から『ハーレム御殿』って言われてるらしいし。
……お、俺にはリアスとアーシアがいるし！
羨ましいとか思ってないからな！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「さて、そろそろいいかしら？　ルフェイの術式も組み終わったそうだし、始めるわよ！」
リアス先輩の掛け声により、ついに脱出作戦が始動した。
小猫ちゃんから衝撃の告白を受けた直後だが、切り替えて今はこっちに集中しよう。

イッセーは自身の駒を《僧侶》に切り替え、いつもの禁手より若干ゴツくなり背中に大きなバックパックと砲身を背負った。
俺はいつもの様に銀色の装甲を纏い、両腕と背中のタービンを回転させながら胸部装甲の奥にあるオレンジの結晶体を露出させる。
イッセーは屋上と外の駐車場、俺は直線上にあるホールへとそれぞれ狙いをつけた。
イッセーは砲門が二つあるので、上下に分けて担当してもらう。
正確な位置は小猫ちゃんが仙術で死神の気配を感じ取って教えてくれる、俺だとそこまで正確に捉えられないからすごく助かる！
「いいかイッセー、同時に行くぞ！」
「応ッ！　派手にいこうぜ!!」
二人で声を掛け合い、タイミングを調節する。
結界装置の強度を上げられたとしても、三つ同時に攻撃すれば何処かは耐え切れずに破壊できる筈だ！
「「いっけぇぇぇぇぇっ!!」」
気合いと共に、それぞれ標的に向けてビームをぶっ放す！
イッセーの赤いオーラと、俺の放ったビームがホテルの内装を轟音と共に砕いていく。

その砲撃は建物全体を大きく揺らし、打ち終わると共にゆっくりと振動も治まっていく。

最悪建物が丸ごと壊れてもいいと思ったんだけど、ゲオルクが強度調整でもしてたのかね？

「結界が揺らいだ！　結界装置が無事破壊されたようです！　転移、いきます！」

「みんな、必ず天界と魔王さまに伝えてくるから！」

「カズキ！　約束は必ず守れよ!!」

イリナとゼノヴィアはそう言うと、ルフェイと共に魔方陣の放つ光と共に転移していった。

結界が完全に解除されないって事は、一個または二個に集中して防御したってことか？

もしくは四つ目の装置があったか？

「小猫ちゃん、死神の気配は？」

「屋上とホールの気配が消えました！　おそらくそこは装置の破壊も成功したんだと思います！」

「なら後は駐車場の一つだけか。他に怪しい動きも見られない、それさえ破壊すりゃこっちの勝ちだな！」

アザゼルさんは手元に光の槍を出現させ、近くの壁を叩き壊して通路を作る。
そして先ほどまで周囲で様子を伺っていた死神たちが、一斉に動き出した！
さて、こっからが大変だ！
「よし！　俺、イッセー、リアスは空の雑魚を蹴散らすぞ！　ヴァーリチームと小猫、レイヴェルはその援護！　駐車場の装置はカズキ、朱乃、木場で破壊しろ！」
アザゼルさんは槍を死神たちの群れに投擲した後、翼を広げて空を駆けていった。
その後をイッセーとリアス先輩も追い掛け、群がってくる死神たちを次々に蹴散らしていく。
黒歌さんは巨大な防御壁を張って後衛のメンバーを護り、小猫ちゃんとレイヴェルちゃんは未だ全快ではない黒歌さんの身体を支えていた。
「あら白音、助けてくれるの？」
「……私も助けてもらいましたから。さっきも、昔も」
「……そ、じゃあお言葉に甘えちゃう。白音のお友達もありがとニャン」
「あなたの為ではありません！　私はイッセーさまから小猫さんのフォローを頼まれたのですから、小猫さんが決めた事を全力でお手伝いするだけです！」
黒歌さんは小猫ちゃんの仙術によるフォローと、倒れそうな身体をレイヴェルちゃんに支えられて踏ん張っている。

その後ろからアーシアちゃんは回復の力を矢の形にして前衛の手助けをし、ヴァーリさんは魔力の塊で死神たちを次々に撃ち落としていく。

身体中が毒に蝕まれているのにこの性能、やっぱこの人はとんでもない！

「カズキくん、僕らも行こう！」

「みんなが敵を引き付けている間に、結界装置を！」

「……悪い、先に行ってて！　すぐに追い付く！」

「カズキくん!?」

木場と朱乃さんに呼びかけられたが、その前に行かなければならない所がある。

俺は二人に先に行く様伝えると、木場の呼び掛けを受けつつ走り出す。

そしてすぐに目的の人物を発見し、大きな声で呼び掛けた。

「お、いたいた。オーフィス！」

「我、呼んだ？」

「ああ、お前の力を貸して欲しいんだ」

「カズキ、我の蛇、必要？　でもあれ、今は作れない」

「蛇？　ああ、アーシアちゃんのストーカーが持ってた奴か。あんなんいらんよ、オーフィス自身が助けてくれると嬉しい」

「……わかった、我、カズキのこと助ける」

俺がお願いするとオーフィスはこくりと首を縦に振り、背中へよじ登ってきた。
そのまま背中を登りきり、肩車の体勢になると動かなくなる。
……ああ、イッセーの家で遊んでた時に『移動するときはここに来い』って言ったからか。
突然登ってくるからびっくりした。
何はともあれ……最強戦力、ゲットだぜ！
好き放題やってくれた曹操はもういないんだろうが、まぁいい。
まだ英雄派、少なくともあのメガネは残っている筈だ。
覚悟しろよ、英雄派。
俺の八つ当たりは、めちゃくちゃタチが悪いぞ！

66話

俺の名前はゲオルク、偉大なる英雄を祖先に持つ魔法使いだ。
今はテロリスト組織『禍の団』の派閥の一つ、英雄派に所属し日々研鑽を続けている。
ここには様々な偉業を成し遂げた英雄の子孫たちが多数在籍しており、『人間のまま、どこまで高みに昇り詰める事が出来るか』という理念の元に集っている。
今回は我らの派閥の長、曹操が以前から語っていた『無限の存在は倒し得るのか?』という疑問に答えを出すべく無限の龍神に挑む事になった。
人間の身であの様なバケモノに挑むなど自殺行為にも程があるが、それを成してこそ偉大な祖先に僅かでも近付けるというものだ。
準備にかなりの時間と労力を費やしてきたこの計画だが、白龍皇であるヴァーリや赤龍帝の仲間たちに妨害されつつもなんとかオーフィスの無力化に成功した。
あれだけの面々を相手にこれといった傷も受けずに目標を達成する辺り、彼も大概常軌を逸した存在だと思う。
今回の計画でサマエルを貸し出し助力してくれた冥府の神ハーデスの要望により、力を絞り切ったオーフィスを死神たちに引き渡す手筈となっている。

あの骸骨神が絞りカスのオーフィスを使って何を考えているか知った事ではないが、碌なことでないのは確かだ。

何はともあれすぐに片付く楽な取引だった筈なんだが、ここで曹操の悪癖である『遊び癖』が出てしまい少々面倒な事になった。

撃破した赤龍帝たちに敢えてトドメを刺さず、『死神が蠢くこのフィールドからオーフィスを庇いつつ、見事逃げきって見せろ』と言い出したのだ。

オマケに自分と入れ替わりでジークフリートをここに呼び、俺と共に死神たちに協力しろとまで言ってくる始末。

不合理にも程があるが上司の指示では仕方ない、それに気になる者も残っている。

元は人間の身でありながら数多の強敵を屠り、死の際すら神の雷を取り込む事で乗り越え堕天使へ転生した男。

曹操とは違う意味での規格外、瀬尾一輝。

先程の曹操との戦闘ではつまらない敗れ方を晒したが、激情に流され力任せに暴れたあれは彼の本来の戦い方ではない。

彼はもっと狡猾に罠を張り、相手を術中に陥れる等の搦め手を好む人間だ。

一度仕切り直した事によりどんな策を弄してくるのかと、懸念と期待が入り混じった様な複雑な感情を自分の中に感じていた。

一体どんな事をしてくるのか、どの様な策でこの圧倒的に不利な状況に挑むのかと。

しかしその実態は、私の予想など実に容易く飛び越えていた……！

「そらオーフィス、次はあそこら辺だ。イッセーたちに当てない様にぶっ放せ」

「了解。我、死神に、ぶっ放す」

彼が死神たちの固まってる辺りを指差すと、肩に跨っているオーフィスが掌からとんでもない波動を放っていく。

オーフィスの手元が輝く度に死神が纏めて消し飛び、そこに赤龍帝が放つ攻撃も合わさり俺の張ったフィールドを形成する結界が悲鳴をあげている。

相変わらず赤龍帝の攻撃力は馬鹿げているが、何故力を搾り取られたオーフィスまであの様な力が残っているんだ！

確かにオーフィスの力の大半を抜き出した筈なのに……またあの男に、何かしてやられたのか!?

「いやぁこれ楽しいし楽でいいわ、正にサテ○イトキャ○ン。オーフィス、次はあっちの集団だ。イッセーが近くにいるから気を付けてね、最悪死なないけど」

「ちょっと待って!?　龍神さまの攻撃なんて受けたら、いくらこの鎧着てても蒸発しちゃうから！」

「わざわざ近付いて肩を揺さぶるな、オーフィスが落ちる。大丈夫やれるって、その訳分

かんない乳パワーでなんとかしろよ……ってほら、遊んでるから敵さんが近寄って――」

「我、死神に、ぶっ放す」

「ちょっ、オーフィスさん!?」

何やら揉めているかと思ったら、彼らを中心に物凄い爆発が起きた。

辺りに響き渡る轟音がようやく静まり、周囲に舞い上がった土埃も晴れてくる。

視界が開けて目に入ってきたのは一面荒地に成り果てたフィールドと、ほぼ無傷の赤龍帝の仲間たち。

そして身体から煙を立ち昇らせつつ地面に伏している赤龍帝と瀬尾一輝に、そんな黒焦げの二人の背中に座っているオーフィス。

……なるほど。

仲間と己を囮にして敵を引きつけ、釣れたと同時に自分たちごと爆破したのか。

全くとんでもない策略だ、とても真似出来ないな。

やはり彼を――

「……なぁゲオルク。前から思ってたんだが、君は少し瀬尾一輝に対しての評価がおかしくないかな？」

俺が感心していると、避難していたジークフリートが何やら気まずそうに話しかけて

きた。
「おかしい？　どのように？」
「何というかこう、良い方に捉えすぎてないかな？　今のなんてどう見ても内輪揉めした挙句、勝手に自滅しただけにしか見えないんだが……」
「それは彼がそう見えるように仕向けているのさ、そこが彼の恐ろしい所だ」
「いや、それは……うん、それならそういう事にしておこうか」
ジークフリートはまだ何か言いたげだったが、それっきり黙ってしまった。
私は一度彼を軽く見て状況をひっくり返されたのだ、二度と同じ過ちを犯すつもりはない。
しかし賞賛ばかりもしていられないのも確かだ。
赤龍帝とリアス・グレモリーの新たな力とオーフィスにより、死神の大半が敗れ去ってしまった。
さて、これからどうしたものか……ん？
なんだ、結界に異常が……これは!?
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
うう、酷い目にあった。
イッセーのせいで俺までオーフィスの爆撃喰らったじゃないか、後でシメる。

だいたいさ、なんなんだよ乳（ニュー）パワーって。
アザゼルさんが提唱してるとかどうでもいいわ、そんないかがわしい力なんてポイしちゃいなさい。
しかもそれでキッチリ強くなるからタチが悪い。
なんでリアス先輩の乳からビーム出てんの？
なんでそのビームを受けたお前は強くなってんの？
正確にはビームを浴びると、消費したオーラが回復して砲撃打ち放題になるって事なんだけど。
ただしその力を使う時、リアス先輩にはある代償が伴われる。
ビームを出した分だけ、胸が縮むのだ。
うん、何を言ってるのか自分でもわからないけども。
とにかく出した分だけ縮むんですよ、だからなんだって話ですが。
まぁそんなイッセーの活躍もあり、辺りにあった建物やら舗装された道は全て破壊され辺り一帯荒地でございます。
周りの空間もミシミシ音立ててるし、ドライグはリアス先輩のおっぱいビームの影響か『おっぱい、たのちーなぁ』とか言い出すしでまさに地獄絵図って奴だ。
イッセーはいっぺんドライグにぶん殴られればいいと思う、無理なら俺が代わりに

殴ってあげるから。

しかし英雄派の二人、陰険メガネことゲオルクとジークフリートはなんやかんやで追い詰めた。

いつの間にか現れてた最上級死神とかいうのもアザゼルさんが相手してくれてるし、これで詰みだな。

「グレモリー眷属……いや、赤龍帝とリアス・グレモリーはなんて恐ろしいんだ。召喚に応じるばかりか、赤龍帝のオーラを回復させる胸とは」

「全くだね。このまま放置していたら、いったいどんな機能があの胸に搭載されるか分かったものじゃない」

敵さんからも酷い言われようだ、まぁ味方のアザゼルさんからも『おっぱいバッテリー』とか言われてたしね。

ビームの出し過ぎでぺったんこになった胸を見てイッセーは号泣し、リアス先輩は敵からのあんまりな言葉を受けて赤くなった顔を両手で覆っている。

アザゼルさんが投降を促そうとしたその時、バチバチという放電音の様なものが辺りに響き渡った。

音のする方を見上げると、空間にポッカリと穴が……俺が京都でやったのと同じ現象かな？

つまり敵さんのおかわり？
でもゲオルクたちも驚いた様子で出現した穴を見つめてるし、向こうにとっても予想外の事態って事か。
暫くすると穴の中から軽鎧にマントを羽織った男が現れ、イッセーたちにどよめきが起こる。
「久しいな、赤龍帝。そしてヴァーリよ」
その男はイッセーを睨みつけた後、後方で黒歌さんたちと待機しているヴァーリさんに対しても同様の視線を送る。
「アザゼルさん、あの人どなた？」
「シャルバ・ベルゼブブ……旧魔王派のトップだ」
えっと……ああ、イッセーが『覇龍』でフルボッコにした人か。
つまりあの時アーシアちゃんを殺そうとして、オマケに俺の腕をぶった切ったのがこいつか。
オーケーわかった、ヌッコロス。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「行くぞオーフィス、標的はあの厨二感漂うオサレマントだ。遠慮なんてしなくていい、消し炭にしておあげなさい」

「だ～待て待て！　まだ向こうの狙いがわかってねぇんだ、もう少し様子を見ろ！」
カズキが憤りながらオーフィスをシャルバへけしかけようとするのを、先生が羽交い締めにして止めている。
そういやカズキはあいつが現れる前に気絶しちゃったから、顔をちゃんと見てなかったっけ。
こっちが少しばかり揉めている間に、あちらでも何やら揉めているようだ。
いつの間にかシャルバの隣に小さな男の子が現れて、それを見たゲオルクとジークフリートが激昂している様だ。
あの少年は見覚えがある、京都の時に影からモンスターを生み出していた子だ。
どうやら別働隊として動いていた彼を、シャルバが同行していた構成員を皆殺しにして誘拐してきたらしい。
シャルバが男の子、確かレオナルドとか言ったっけ？
そのレオナルドに手元で発生させた魔方陣を近付けると、レオナルドが苦悶の表情と共に絶叫した！
それと同時に彼の影が蠢きながら広がっていき、そこから何かが這い出てきた！
「ふはははははッ！　『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』、とても素晴らしく理想的な能力ではないか！　しかも彼はアンチモンスターを作る事に特化した存在、必

ず現悪魔どもを滅せる怪物を生み出せる！」
　蠢いていた影が一際大きく波打つと、段々とその姿を現していく！
　規格外の頭部、デカすぎる胴体、太すぎる腕、そしてそれら全てを支える圧倒的な脚！
　俺たちの眼前に、以前見たグレートレッドすら超えるとんでもない巨体のバケモノが出現した！
『ゴガァァァァァァアッ！』
　そのバケモノは鼓膜が張り裂けそうな程の声量で咆哮をあげ、それに呼応する様に一回り小さいモンスターが複数出現し始めた。
　最後のモンスターが出現し終わると、突然奴らの足下に魔方陣が出現する。
　あれは何回も見ている、転移の魔方陣だ！
「今からこの魔獣たちを冥界に転移させて、存分に暴れてもらう！　これだけの規模のアンチモンスターだ、さぞかし冥界の悪魔どもを蹂躙してくれることだろう！」
　シャルバが興奮しながら叫び、モンスターたちは段々と転移の光に包まれていった！
　このままじゃマズい、なんとか食い止めないと！
　そう思い攻撃を仕掛けようとしたその時、一際大きな爆撃が一番大きなモンスター目掛けて放たれた！

「くそ、俺のだけならまだしもオーフィスのまで効き目薄いってどういう事だ？　やっぱ出力安定してないとキツイか」

鎧の胸部装甲を解放したカズキが舌打ちまじりに毒突き、続けて石柱をモンスターたちに手当たり次第ぶつけていく！

ゼノヴィアといいこいつといい、不意打ち先制大好きだね！

俺たちも後に続いて攻撃を繰り出すが、アンチモンスターを名乗るだけあってビクともしない！

諦めずに攻撃を続ける俺たちをよそに、別方向から爆音が鳴り響く。

今度はシャルバが後衛が控えている場所に向けて、魔力を放ち続けている！

ヴァーリは自分が狙われていると知ると、後衛のみんなから離れて一人防御の魔方陣を展開させて防戦一方だ！

「どうしたんだヴァーリィィイイッ!?　ご自慢の魔力と、白龍皇の力で反撃しないのかね!?　フハハハハ、所詮人と混じった雑種が真の魔王に勝てる道理がないのだよッ！」

「ぐ……他者の力を借りて魔王を語るお前に、言われたくはないな……！」

「それがどうした!?　最後に勝てればそれでいいのだ――むっ！」

魔力弾を撃ち続けるシャルバに、カズキが突然殴りかかった。

しかし何故かシャルバに察知されてしまい、すんでの所で躱されてしまう。
シャルバは攻撃してきたのがカズキだとわかると、憎々しげにその顔と肩にいるオーフィスを睨みつける。
「また貴様か瀬尾一輝、オーフィスを懐柔するとは目障りな男だ！　二天龍と共に、貴様も葬ってやろう！」
「俺みたいな小物相手に吠えてんなよ、没落したなんちゃって魔王が！　そんなに魔王やりたきゃ、城に篭って勇者が来るのを一人寂しく待ってろ！」
カズキは煽りつつ指先からドリルを飛ばし、シャルバの背後からも石柱を伸ばして強襲する。
しかしその攻撃もドリルは弾かれ、背後から迫る石柱も全て躱されてしまった。
なんだ、なんでカズキの攻撃があんなに簡単に……今のなんて、間違いなく死角からの攻撃だったぞ？
カズキも訝しんでか、一旦攻撃を止めた。
それと同時にモンスターたちは転移の光に包まれ、俺たちの攻撃も虚しく転移してしまった。
くそ、早くこいつをなんとかしてあのモンスターたちを食い止めないと……！
そんな俺たちの焦りをよそに、シャルバとカズキは会話を続ける。

「ふん、なかなかやるではないか。曹操たちが警戒するだけはある。だが、お前は私には勝てないよ」
「そういうお前は大した事ないな。魔王を名乗るなら俺みたいなザコ、一瞬で殺せなくてどうするよ？」
「口の減らないガキだ、しかしそれもここまでだ。貴様は私に指一本触れる事なく、地面に這い蹲る事になる」
「何を言って――ッ!!」
カズキが何時もの様に相手を罵っている途中で、言葉が止まった。
突然表情を曇らせたかと思うと、その場で膝をついて座り込んでしまう。
そして先程までは何もなかった筈のその背中には、見覚えのない無骨なナイフが鎧の隙間に深々と突き刺さっていた。

６７話

なんだ、俺は何をやられた!?
突然背中に激痛が走ったかと思ったら、いきなり鎧が解除された上に立つ事すらままならねぇ！
遂に膝に来て四つん這いの姿勢で倒れこんでしまい、肩に乗っていたオーフィスを落としてしまった。
無事に着地してくれたみたいだが、生憎と顔をみる余裕もない。
シャルバは動いていなかったし、一体何がどうなってる!?
イッセーたちが駆け寄ってきてるのが目の端に映るが、とにかく今は『見えない何か』をどうにかしないと！
「ぐッ！　ぞ、ったれぇ！」
背中のナイフに手を伸ばして引き抜き、叩き折ってから倒れた姿勢のまま後ろへ勢いよく蹴りを放つ。
普通なら空を切るだけの筈のそれは、鈍い音と薄い肉の感触を感じさせて何かに当たった！

足に感じた何かを不安定な体勢のまま力の限り蹴り飛ばし、近くの瓦礫へ叩きつける。

それは瓦礫に叩きつけられ、小さなクレーターを作ると突然その姿を現した。

老人だ。

ボロボロの服を纏った、肌の枯れ果てた老人。

しかしその顔をよく見ると、何処か見覚えがある。

「フヒャヒャ……！　やった……やってやったぞ……！　これで貴様もおしまいじゃあ……ッ！」

「テメェ……あの時の、老害か……!?」

このカンに触る声……そうだ、新人悪魔の顔合わせで会長さんに絡んできたあの老害だ。

身につけるものも貧相だし、やつれて顔つきも変わっているのでわかりにくいが間違いない。

こいつは『禍の団』に情報を流してたのが露呈して、サーゼクスさんの命でコキュートスに幽閉されてたんじゃなかったっけ?

「ここへ来る前とある用事でコキュートスに行った時、貴様へ怨嗟の声を上げ続けるこの男を見つけてな。貴様へ復讐できるならなんでもすると言うので連れ出してきたの

だ、死にかけの老いぼれにしてはいい仕事をしただろう？」
「小僧、貴様の……貴様のせいで儂は地位も、名誉も、財産も、何もかも全てを失ったのだ……！　許さぬ、決して許さぬぞ……ッ！　死ね！　死ね！　死ねぇい！　今度は儂が！　貴様から全てを奪い去ってくれるわ！　フヒ、フヒヒ、フヒャヒャヒャヒャッ！」
シャルバが語った後、老害はうな垂れたまま怨みのこもった声を絞り出す。
そして突然空を見上げたかと思うと、ひたすら狂った様に笑い出した。
心底楽しそうに、嬉しそうに、焦がれるように。
その様子は酷く歪んでいて、薄ら寒さすら感じさせるものだった。
「……は、自分のハリボテ全部ひっぺがされてそのザマかよ。お似合いだ……うぐぅッ！」
「カズキさん、動かないでください！　今治療します！」
俺が吐き棄てると、アーシアちゃんが滑り込む様に駆け寄ってくれた。
その手に緑色の光を灯しながら、俺の身体に触れて治療を始める。
他のみんなも俺を庇う様に陣取り、シャルバと対峙した。
結局俺がお荷物になってるじゃねぇか、ちくしょうめ！
「黙れ、貴様の役目は既に終わった。屑は屑らしく、疾く去るがいい」
シャルバは瓦礫にもたれ掛かりながら尚も笑い続ける老害に対して、手から無造作に

魔力を放ち消滅させた。
断末魔もなく消える寸前まで狂ったように笑っていた老害は容易く消え去り、その側には帽子の様な物だけが残った。
そうだ、老害が姿を現した時一緒にあの帽子が地面に落ちたのを見た。
あれが姿を消した手品のタネか？
「クハハ、それにしてもよく居場所がわかったではないか。その『ハデスの隠れ兜』を身に付けた者を見つけるのは、本来なら至難の業なのだがね」
「『ハデスの隠れ兜』だと!?　あの骸骨ジジイ、俺たちへの嫌がらせの為だけにそんなモンまで持ち出しやがったのか！」
シャルバが嘲笑しながら自慢げに語り出し、それを聞いたアザゼルさんがシャルバをきつく睨みつけた。
つうか居場所なんてわかってねぇよ、適当に蹴ったらたまたま一発で当たっただけだ。
刺してから移動しなかった老害がアホすぎただけだっての。
「先生、『ハデスの隠れ兜』って……？」
「一度被れば姿が全く見えなくなって気配すら完璧に消え失せる、神話の時代の秘宝だ。あの骸骨ジジイが、嬉々として貸し出したんだろうよ……！」

イッセーの質問に、アザゼルさんが簡潔に答える。
なるほど、それで姿はおろか気配すらしなかったのね。
……ヤバい、痛みがどんどん酷くなってきた。
ちょっとこれはシャレになんねぇ……！
「イッセーさん！　カズキさんの、カズキさんの傷が塞がらないんです！　こんなに力を送っているのに、治る気配すら……！　傷口周辺の肌もどんどん黒く変色していって……どうしたら!?」
「ぐうぅあ、があぁッ!?」
「カズキくん!?　お願いアーシアちゃん、私の魔力も使ってちょうだい！」
「仙術の気も何かに阻害されて行き渡らない！　このままじゃ……先輩ッ！」
「白音ッ！　この子を殺したくないなら集中なさい！」
痛みを我慢出来ずつい声を出してしまうと、アーシアちゃんが悲痛な声を上げた。
小猫ちゃんや黒歌さんが仙術を試したり、朱乃さんもアーシアちゃんを通して魔力を送っているがまるで効果が表れないようだ。
確かに傷口も痛むんだが、それよりも段々と胸の辺りが痛くなってきた。
モグラさんは大丈……あれ、モグラさん？
おかしい、モグラさんと会話が出来ない！

会話が出来ないくらい弱ってるのか!?

というか、何故かモグラさんを遠くに感じるこの感覚はなんだ!?

「英雄派は貴様のことを大層危険視していたようでな、サマエルの毒を貴様専用に調合していたようだ。あのナイフには奴らの施設から拝借してきたその薬品が、たっぷりと塗られてあったのさ」

シャルバが何か言っているが、痛みや焦りでまるで耳に入ってこない！

モグラさん、モグラさん！

くそ、訳がわからない!!

痛みがキツくて意識が飛びそうだし、胸の辺りが熱くて仕方ない。

これは、結構……ホンキでヤバい……!?

「ぐ、うぅッ！　なんだ、なんでこんなに熱く……！　マズい、なんかよくわかんないけどとにかくマズい！　みんな俺から離れ――」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

カズキが喋り切る前にこいつを中心に物凄い爆風が巻き起こり、その場にいた全員が吹き飛ばされた！

俺も飛ばされつつなんとか体制を立て直し、すぐにカズキに視線を向ける。

そこにはうつ伏せのまま動かないカズキとモグさんが倒れており、側には見覚えのあ

る無地のカードが宙に浮いていた。
あれは……カズキが転生する時に使った『御使い』のカードか!?
「おいカズキ！　無事か!?」
「……」
アザゼル先生がすぐさま問い掛けるが、カズキは倒れ伏したまま反応せず俯き倒れている。
モグさんに向かって伸ばされていたカズキの腕に、空から降りてきたシャルバが着地と同時に踏みつけゴキリと嫌な音が響く。
あいつ、カズキの腕を踏み砕きやがった！
「テメェ……！」
「おっと、それ以上近づかないで貰おうか？　足下に伏しているこのゴミの命がいらないのなら話は別だがね」
俺たちが飛びかかろうとすると、シャルバはカズキの頭に足を乗せてからそう警告してきた。
今度は人質か、とことん腐ってやがる！
カズキは腕を折られたのに悲鳴も挙げず、頭を踏みつけられてもまるで動く気配を見せない。

一瞬最悪の結果が頭をよぎったが、頭を振って嫌な考えを振り切る。
カズキに限って、そんな事あるはずがない！
「ふむ、どうやらあの薬品は対象から外的要因を切り離す作用があった様だな。だからこそ神器である薄汚い獣や、このカードが弾き出されたのだろうよ」
シャルバは鼻で笑い近くに倒れているモグさんとカードを拾い上げ、カードの方を魔力で燃やしやがった！
パラパラと灰が舞い散り、カードは跡形もなく消滅してしまう。
下手に手を出したらモグさんもああなるって警告のつもりか!?
カズキの命は、『御使い』のカードとミョルニルによって支えられている。
周辺にはミョルニルが落ちていないようだし、想定を超えた強大なものには薬が作用しなかったのかもしれない。
たとえカードが消滅しても、まだミョルニルが残っている限り命は保たれているはずだ。
だがこれ以上カズキに何かされたらマズい、モグさんも捕まってるし慎重に行動しないと……！
「本来なら貴様ら全員私の手で血祭りにあげたい所だが、今はそれよりも……オーフィス！　大人しくこちらに来て貰おうか！」

シャルバは手元に魔方陣を展開させながら、オーフィスを恫喝する。
オーフィスはカズキを一瞥した後、抵抗する事なく黙って従いシャルバの元へ向かう。
シャルバが手をかざすと、魔方陣から飛び出た文字列が鎖の様にオーフィスの身体へ巻き付いていく。
「力の不安定な今のオーフィスなら私にでも捉える事が出来る、あの者の情報通りだ！　このオーフィスは、私たち真なる魔王の協力者への手土産にさせて貰おう！」
シャルバは自由を封じられたオーフィスを脇に抱えると、カズキから僅かに離れて後退していく。
そして勝利を確信したように、口元を吊り上げ語り出した。
「これは呪いなのだ！　私を拒絶した悪魔など、冥界などもはや必要ない！　私自身が毒となって冥界を包み込み、全てを破壊し尽くす！」
「赤龍帝、貴様の大切にしている冥界の子どもたちも皆殺しだ！　上級だろうと下級だろうと、全てに等しく訪れる滅び！　これこそ貴様らのいう『平等』で、『差別のない冥界』というものなのだろう!?」
「このシャルバ・ベルゼブブが！　我が呪いの結晶たる魔獣たちと共に！　冥界を滅ぼしてくれるわぁッ！」

シャルバはそれだけ言うと、盛大に高笑いを始めた。
こいつ、カズキを刺した爺さんの比じゃないくらいイカれてやがる！
何の罪もない子どもたちに手なんて出させるもんかよ、絶対に食い止めてやる！
もう少しだ。
もう少し離れたら、カズキの身柄を確保してすぐにぶっ飛ばしてやる……ッ！
「先ずは手始めに、この小汚いドラゴンからだ。醜く憎たらしいドラゴンよ、真の魔王たるこの私の手で滅ぼしてくれる……！」
「ッさせるかよ！」
シャルバはモグさんを掴んでいる腕を頭上に掲げ、その掌に魔力を集めだした！
それを見てすぐさま駆け出したが、魔力の収束が速い！
ダメだ、この距離じゃ間に合わないッ!!
「我が呪いを浴びて苦しめ！　もがけ！　どいつもこいつも、のたうちまわって絶息しろッ！　フハ、フハハ！　フハハハハ――――」
シャルバが嘲ると同時にモグさんを握り締めようとしたその時、何者かがシャルバの腕を掴んだ。
シャルバは邪魔された腕の持ち主、カズキを眼光鋭く睨みつける。
あいつ、あんな身体でまた無茶を！

「貴様、そんな身体でまだ抵抗を……！」
「……せよ」
「なん――――ッ!?」
モグさんを握りしめていたシャルバの腕を、カズキが一息にへし折った！
その衝撃でモグさんはシャルバの腕から零れ落ちたが、地面に落ちるよりも先に脇に抱えられたオーフィスが頭の上で受け止める。
シャルバは突然襲ってきた激痛に戸惑いつつもかずきの腕を振り払い、大きく飛び退いた。
「ぐうぅ！　わ、私の腕が……！」
「返せよ……そいつら、俺の友達なんだよ……」
カズキは今にも倒れそうなほどボロボロで、立っているのが不思議なほど脚も震えている。
それでもおぼつかない足取りで、一歩一歩シャルバへ歩を進めていく。
その眼に強い光を宿し、傷だらけの腕を真っ直ぐ伸ばしながら。
その異常な光景にシャルバを含め、俺たちもその場を動くことが出来なかった。
「なんだ、なんなのだ貴様は!?　何故そんな身体で立ち上がってくる！　歯向かってくる!?　今の貴様は堕天使でもなければ神器すら宿していない、ただの人間ではないか

!?」

「返せ……返せよ……ッ！」

「クソ！　クソ！　クソがぁ!!　それ以上私に近寄る――――」

シャルバは怯えた様に喚き散らしながら、折れた方の腕に魔力を込めて振り回そうとしたその時。

ジークフリートが両者の間に割って入り、カズキの腹部に一撃を見舞った！

その一撃を受け崩れ落ちたカズキをジークフリートが肩に抱え、同じ様にレオナルドを抱きかかえたゲオルクも現れて即座に連中を霧が包んでいく！

あいつらカズキを攫って逃げる気か!?

「そこまでにしてもらおうか、シャルバ。そのオーフィスはくれてやる、だが代わりにこの男は貰っていくぞ。お前が壊したレオナルドの代わりにな」

「させるかよ！」

「行かせない！　彼を返してッ!!」

「くそ、逃がしてたまるかよ！」

先生と朱乃さんが槍と雷光でほぼ同時に攻撃を仕掛け、俺も少し遅れてドラゴンショットをぶちかます！

しかしいずれの攻撃も、ゲオルクの創り出す霧に阻まれて効果を示さない。

霧が晴れると、カズキもろとも奴らの姿は消えていた……。
「そんな……」
「先輩……いやぁ……！」
「落ち込んでる暇なんてないわよ！　あの男がいなくなった所為で、フィールドがもう限界ニャン！　今なら転移出来るはずだから全員こっちに集まって！」
朱乃さんと小猫ちゃんの悲痛な声があがるが、それを掻き消すように黒歌が魔方陣を展開しながら声を張り上げた。
「姉さま……」
「白音、泣き言は後にしなさい。少なくともあの時点で坊やは生きてたわ、それを戦力として連れてったって事はきっと命を取る事はないはずニャン」
黒歌は涙を流す小猫ちゃんにそれだけ言うと、魔方陣の操作に集中していく。
魔方陣の元に集まる俺たちをよそに、遠方にいるシャルバはオーフィスを脇に抱え佇んでいた。
カズキが消えた辺りをジッと見つめ、苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべている。
あいつの、あいつの所為でカズキは……！
「イッセー！　もう転移するわ、早くこっちにいらっしゃい！」
リアスが俺に呼び掛けてくる。

――が、俺はそれに応えなかった。
「俺、オーフィスとモグさんを助けてきます。そのついでに、シャルバをぶちのめします」
俺の発した言葉に、全員が驚いた様な表情を向けてきた。
「それなら私も！」
「僕だって戦うよ！」
小猫ちゃんと木場がそう言ってくれるが、それはダメだ。
「みんなはあの魔獣の脅威を冥界に伝えてくれ。この鎧を着込んでる俺だけなら、このフィールドが崩壊して次元の狭間に放り出されても少しの間なら活動出来る筈だ」
「チッ……イッセー！　後で『龍門（ドラゴン・ゲート）』を開いてお前たちを召喚する！　それでいいんだな!?」
ここでシャルバを逃すつもりは毛頭ないし、モグさんとオーフィスをみすみす連中に渡す訳にもいかない。
先生が仕方なく出した代案に、俺はゆっくりと頷いた。
本当ならヴァーリや先生は自分が行きたいのを、俺に任せてくれるんだ。
絶対にオーフィスとモグさんを取り戻してみせる！
「ダメよイッセーくん！　あなたまでいなくなったら、リアスは……！」

朱乃さんの言葉を聞き、リアスに視線を向ける。
「リアス。俺、必ず戻るから！」
「イッセー……必ず私の所に戻ってきなさい、必ずよ！」
「はい！　行ってきますッ!!」
俺はそれだけ言うとドラゴンの翼を広げてシャルバの元へ突っ込み、同時に転移の光がみんなを包み込んで弾ける。
どうやら転移は無事成功した様だ。
後はシャルバをぶっ飛ばして、オーフィスとモグさんを取り返して、そんでもってリアスの元に帰るだけだ！
俺がシャルバの眼の前まで到達すると、不愉快そうな表情でこちらを迎えてきた。
「今度は貴様か赤龍帝！　ヴァーリといいあのガキといい、ドラゴンに関する者は悉く私をバカにしてくれる……ッ！」
シャルバはそう吐き捨てた後、長々と問い掛けてきた。
何が目的だ、力を求めるのか、覇権を狙うのか。
そんな事、俺にとってはどうでもいい。
「……もういい、口を開くな。いくら聞いてもお前の考えはわからねぇし、興味もない」
「なんだと、貴様ァ！」

「とにかく、俺が言いたい事は三つだ。冥界の子供たちは殺させない、オーフィスとモグさんを返してもらう、そして……お前を、思いっきりぶん殴るッ!!」

生憎とこっちは予定が立て込んでるんだ！

お前をぶっ飛ばしたら、攫われたダチを取り戻さなきゃならないもんでな！

お前みたいな志も覚悟も半端な奴相手に、無駄な時間なんざ使ってらんねぇんだよッ!!

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

アザゼル先生と元龍王であるタンニーンさま協力の元、龍門の準備が完了した。

魔方陣の作成には小猫ちゃんのお姉さんである黒歌も協力してくれ、ヴァーリも呪いによるダメージに耐えながら魔方陣の隅に加わってくれている。

僕たちはその様子を心配しつつ、ただただ見守っていた。

僕たちより先に転移していった『魔獣創造』によって生み出された魔獣たちは、すでに冥界の各都市部に向けて進撃を開始している。

悪魔と堕天使による迎撃部隊が派遣されたが、規格外の大きさと堅牢さに手を焼いているそうだ。

それに加えてその魔獣たちから更に無数のアンチモンスターが生み出されているらしく、そこに旧魔王派の残党まで合流して進行方向にある村や町を襲撃し始めたという

情報まで入ってきた。
各勢力から戦力も派遣されてきているが、やはり決定打には遠いようだ。
……早く戻ってきてくれ、イッセーくん。
今こそ冥界の為に赤龍帝の力を振るう時だ、首都の子どもたちもキミの登場を心待ちにしている！
英雄派に連れ去られたカズキくんも、必ず連れ戻さなければならない！
だから、帰ってきてくれ！
「――――よし、繋がった！」
先生から待ちわびていた言葉があがり、巨大な魔方陣も強く光り輝く。
強烈な閃光が収まり、魔方陣の中央を見つめる。
そこにあったのは僕の親友の姿ではなく、傷付きフロアに横たわるモグラさんと、彼を護る様に囲っている紅い八つの《兵士》の駒だった。
初めは意味がわからなかった。
何故彼ではなく、駒だけなのかと。
しかし力なく膝を着き、フロアの床を殴りつける先生を見て理解した。
理解、してしまった。
部長は呆然としたままその場に立ち尽くし、アーシアさんは理解したくないのか辺り

をキョロキョロと見渡している。

レイヴェルさんは小猫ちゃんに抱き着き、嗚咽を漏らし始める。

こうして僕たちは、大切な友人を一度に二人も失ってしまった――

十二巻　補習授業のヒーローズ
６８話

中級悪魔の昇格試験から二日後。
僕たちグレモリー眷属は現在、冥界に居を構えるグレモリー城のフロアの一角にいた。
場内は慌ただしいもので、使用人の方々やグレモリーの私兵などが激しく行き来している。
ヴァーリチームは既にここにはいない。
美猴から連絡を受けた初代孫悟空がヴァーリの侵されたサマエルの呪いを解呪すると、ヴァーリチームの面々はカズキくんとイッセーくんの行方を捜索するためすぐさま行動を開始した。
未だに連絡がないところを見ると、捜索は難航しているのだろう。
その際、初代さまに『サマエルの呪いに触れたドラゴンが、どの様な状況なら生き残れるか』を尋ねた。
質問の答えは『肉体は間違いなく助からない。だが悪魔の駒が呪いに侵されていない

のなら、魂は無事で未だに次元の狭間に漂っているかもしれない』というものだった。
僅かとはいえイッセーくんが生きている希望を手にした気分だったが、今はまだぬか喜びする訳にはいかない。
朱乃さんにその事を伝えた後、僕は邪魔にならない様に割り当てられた部屋でテレビのニュースを食い入るように見つめていた。
シャルバの外法によって『魔獣創造』から生み出された魔獣たちが、冥界の拠点及び都市部への進撃を現在も繰り広げている。
魔獣は一体一体姿形が異なり、全部で十三体。
一際大きな魔獣が一体と、それより一回り小ぶりな魔獣が十二体確認されている。
一際大きなものを『超獣鬼（ジャバウォック）』、一回り小さいものを『豪獣鬼（バンダースナッチ）』と呼称する事になった。
更にこの魔獣たちが厄介なのは、その身体から無数のモンスターを生み出し続ける事。
それらが近隣の町村を襲い、建物や自然を蹂躙していく。
避難を優先して行ったおかげで市民の被害は最小限で済んでいるらしいが、それもいつまで無事でいられるかわからない。
こちらも最上級悪魔のチームが討伐に向かうなど対策をとったが、堅牢な身体を持つ

魔獣相手では効果はなく。
　レーティングゲーム王者であるディハウザー・ベリアル率いるチームが『超獣鬼』に攻撃を仕掛けるも、与えたダメージをすぐさま治癒されてしまい歩みを一時しか止める事しか出来なかった。
　王者ですら討伐出来なかったという情報はすぐさま冥界中を駆け巡り、民衆を更なる恐怖と不安に陥れる結果となる。
　それに誘発されるように冥界の各地で、上級悪魔の眷属たちが主に反旗を翻す事件が続出した。
　ムリヤリ悪魔に転生させられた神器所有者が、これを機に今までの怨恨をぶつけているのだろう。
　しかもかなりの数の禁手が現れており、おそらく英雄派が技術を流布していると思われる。
　この様な最悪の事態ではあるが、魔王さまや神仏の方々は前線に出るわけにはいかない。
『禍の団』には魔王や神仏を容易に滅せる聖槍の使い手にして、カズキくんを攫っていった英雄派のトップである曹操がいる。
　この騒動は旧魔王派と冥府の神ハーデスによって引き起こされたものだが、この状況

に乗じて彼らが何をしでかしてくるかわかったものではないのだ。
この一件で神仏や魔王が一名でも滅せられたら、今後の各勢力情勢にどの様な影響を及ぼすか……考えただけで滅入ってしまう。
悪魔がこれ以上の打撃を受ければ、種の存続が本格的に危ぶまれる。
このままでは冥界は――
「『超獣鬼』と『豪獣鬼』の迎撃に、魔王さま方の眷属が出撃されるそうだ」
テレビを見つつ考え事をしていた僕に、突然掛けられた声。
驚きつつ振り返ると、そこにはライザー・フェニックスの姿が。
なぜ彼がグレモリー城に……？
「一応ノックはしたんだがな、返事がないし男の部屋だから勝手に入らせてもらった。兄貴の付き添いついでに、リアスとレイヴェルの顔を見に来たんだが……お前もしんどそうだな。察するぜ、木場祐斗」
思考を巡らせる事に集中しすぎて、接近された事どころかノックにすらまるで気付けなかった。
やはり僕も相当参っているのかもしれない、それでも僕まで折れる訳にはいかないが。
そんな僕を深刻な表情で見つめ、辛そうに眉をひそめるライザー・フェニックス。

この様子から察するに、彼はイッセーくんの死を既に把握しているようだ。
赤龍帝、兵藤一誠の死。
この件は報道されておらず、一部の者にしか伝えられていない。
シャルバ・ベルゼブブに囚われたオーフィスとモグラさんを奪還する為に単身飛び込んでいったイッセーくんだが、帰ってきたのは傷だらけのモグラさんと彼の悪魔の駒である《兵士》の駒が八つのみ。
彼を召喚する為に開いた龍門からサマエルのオーラが少量感知された事により、イッセーくんはシャルバとの戦闘中にサマエルの呪いを受けたせいで帰還できなかったのだろうと先生が言っていた。
死に瀕した眷属が駒だけでも主の元に帰すという強い意志に反応して、駒だけが召喚に応じる現象は過去にも例があったらしい。
しかしその場合は確実に本人は生きてはおらず、駒もその機能を停止して二度と使用できなくなる。
イッセーくんの駒を調べると、例に漏れずその機能が停止していた。
僅かな希望を胸に生きている確証を得ようと調べる度に、次々と望んでいない証拠ばかりが揃ってしまう。
モグラさんは帰ってきたが、イッセーくんに同行していたオーフィスも行方が分から

なくなっている。
サマエルの呪いで滅ぼされたのか、それとも次元の狭間に留まっているのか。
少なくともシャルバの手によってハーデスの元に行った可能性は低いと見ている、あのイッセーくんがシャルバを仕損じるはずがないのだから。
彼ならどんな状況になろうと確実にシャルバを仕留めている、それだけは誰もが確信していた。
――っと、いけない。
また考えすぎてしまった。
とにかくここで喋るのも何なので、フロアのロビーまで簡単に会話を続けながら向かう事にした。
「部長に会う事は出来ましたか？」
「いや、ドアすら開けてもらえなかった。呼びかけたが反応もなかったしな……まぁ愛した男があぁなってしまってはしかない、か」
僕の問いかけに、ライザー・フェニックスは首を横に振った。
部長はイッセーくんの駒が召喚されてから塞ぎ込んでしまい、何もせず部屋に閉じこもっているのだ。
僕も何度か訪ねてみたが、やはり返事はなかった。

今は朱乃さんが付き添ってくれているので食事等は心配ないが、朱乃さん自身もカズキくんの行方が分からず不安な筈だ。

彼女も最初は泣き崩れたが、暫くするとテキパキと仕事をし始めた。

僕が手伝うと申し出て少し休む様に進言したのだが、朱乃さんは『まだ彼が死んだと決まった訳ではないし、いつまでも泣いてばかりはいられない。彼に呆れられてしまうから』と気丈に笑って見せた。

強い人だと、そして凄い人だと改めて思い知らされた気分だった。

「そうですか……朱乃さんが様子を見てくれているので、倒れたりする心配はないんですが……」

「リアスの《女王》はいい眷属、そしていい女だな。自分も想い人の安否がわからないと言うのに、主人を優先している。あいつに惚れさせておくのが勿体無いくらいだ」

ライザー・フェニックスは肩を竦めながら溜め息混じりに呟き、僕も思わず苦笑してしまう。

朱乃さんの想い人、瀬尾カズキくん。

彼もまたシャルバの奸計により重傷を負い、気絶したまま英雄派に拉致されてしまった。

シャルバは英雄派がカズキくん対策に調整していたというサマエルの毒を使い、カズ

キくんが宿している神器であるモグラさんと『御使い』のカードを抜き出されて人間に戻されてしまった。

彼の身体を支えているミョルニルのレプリカは抜き取られなかったが、連れ去られる際に瀕死の重傷を負っていたカズキくんがどうなったのかわからない。

ゲオルクは戦力として連れて行くと言っていたが、それが何を意味するかはわからないと先生は言っていた。

特殊な体質を持つ彼の身体は、いくらでも利用価値があるのだと。

それこそ実験材料にされていてもおかしくないと、僕にだけこっそりと教えてくれた。

彼を想っている女性陣には、決して知らせるわけにはいかないから。

傷だらけで保護されたモグラさんもすぐさまアーシアさんが神器で治療してくれたが、傷が癒えたにも関わらず未だに眠り続けていて今は朱乃さんに頼まれた小猫ちゃんが預かっている。

宿主であるカズキくんから切り離されてかなり弱っているが、消滅の危機などはないそうだ。

「どちらもそう簡単に死ぬような奴らじゃない、どんなに僅かだろうと希望は捨てるなよ?」

「……はい」

「俺たちフェニックスより、あいつらの方が殺しても死にそうにないしな……っと、兄貴とレイヴェルもここにいたのか」

フロアに到着するとレイヴェルさんと貴族風の服装をした男性が同じテーブルについていたおり、そこから少し離れた所に小猫ちゃんが中でモグラさんの寝ているバスケットを膝に乗せて一人座っている。

レイヴェルさんと一緒にいたのはフェニックス家の長兄にして次期当主、ルヴァル・フェニックス氏。

どこか不良然とした弟のライザー・フェニックスとは違い、物腰も柔らかくそこにいるだけで華を感じさせた。

ルヴァル氏はこちらに気付くと僕に『フェニックスの涙』を数個手渡し、ライザー・フェニックスと共に前線に出る事を教えてくれた。

僕たちも前線に行くと信じてくれているからこそ、これを託してくれたのだろう。

ルヴァル氏はレイヴェルさんをしばらくここに置いてくれないかと尋ねられ、僕が了承すると笑みを浮かべた。

「ありがとう、こんな時だからこそせっかく出来た友人と共に居させてやりたくてね。では、行くぞライザー。お前も成り上りとバカにされたくなければ、冥界中に業火の翼

を見せつけろ」

「そのつもりですよ兄上。俺にも負けたくない相手ってのがいるんでね、行方不明のあいつらにも聞こえる程度には暴れてやるさ。じゃあな木場祐斗、リアスたちを頼むぜ？」

二人はそれだけ言い残すと、この場を去り戦場へと赴いていった。

ライザー・フェニックスの言っている相手は、きっとイッセーくんとカズキくんの事だろう。

彼は彼で、二人の事を友の様に思っていたのかもしれない。

二人が去り残されたレイヴェルさんは小猫ちゃんの座っていた長椅子の横に腰を落とした。

そしてしばらく黙って俯いた後、両手で顔を覆って嗚咽を漏らし始めた。

小猫ちゃんはレイヴェルさんの独白を黙って聞き続け、最後には優しく抱きしめてあげている。

「こんなのってないですわ……！　ようやく、ようやく心から敬愛できる殿方に近付けたと思いましたのに……！」

「そうだよね、好きな人がいなくなるのって辛いよね……今はいっぱい泣こう？　そのあとで、一緒に頑張ろう？　私も、目一杯頑張るから」

「小猫さん……小猫さん……ッー」

……この二人の姿は、僕が見ていていいものじゃないな。

そう思い部屋に戻ろうと移動すると、廊下で朱乃さんの父であるバラキエルさんと遭遇した。

イッセーくんとカズキくんの事を聞き、朱乃さんの様子を見にやって来たそうだ。

「もう朱乃さんとはお会いになりましたか？」

「ああ、今は忙しいと追い返されてしまったがね。内心は辛いだろうが、そう振る舞える程度には元気そうで少し安心したよ。娘は力だけでなく心も強くなっていたのだな、カズキくんには親娘そろって世話になりっぱなしだ」

朱乃さんは今、アーシアさんの様子を確認していると聞いている。

そのせいで追い返されたのだろうか？

語っているバラキエルさんは困った様な、それでいて少し嬉しそうな笑みを浮かべていた。

娘の成長が嬉しい反面、その要因に自分が関われていない事が少々複雑なのかもしれない。

バラキエルさんは頬をポリポリと掻いた後、表情を真剣なものに変える。

「娘の想い人であり、私にとっても息子の様な存在だった彼にした仕打ち。英雄派の連

中には、必ず責を取らせるつもりだ」

バラキエルさんは身体から僅かに怒気を漏らしつつ、力強く言い放つ。

バラキエルさんもまた、アザゼル先生と同じくカズキくんと幼少の頃からの付き合いだ。

カズキくんからも、バラキエルさんには色々とお世話になったと聞いたことがある。

きっとグリゴリの幹部の方たちは、みな同じ気持ちなのだろう。

「まぁ、私の出番はないかもしれないがね」

「……？　それは一体、どうして？」

「アザゼルの奴、随分と久しぶりに本気になっている。ああなったあいつは、とんでもなく恐ろしいぞ」

口の端を吊り上げながら、バラキエルさんは言う。

堕天使の総督であるアザゼル先生の本気か、想像しただけで凄まじさが伝わってくる。

ましてや今回の敵は先生の身内というべき者に手を出したのだ、その苛烈さは計り知れない。

バラキエルさんはまだやる事があるそうで、足早に帰っていった。

娘の様子を見るために、無理をしてここに寄ったらしい。

こんな時だが二人の親子関係が改善されている様で少し嬉しかった、きっとカズキくんもこの事を知ったら喜ぶと思う。

「お、木場じゃないか」

僕がバラキエルさんの見送りを済ませると、廊下で見知った人物から声を掛けられた。

シトリー眷属の《兵士》である匙くんだ、隣にはソーナ会長の姿も見える。

「お二人とも、どうしてここに？」

「イッセーくんの話を耳にしたもので……リアスの様子を見に、立ち寄らせて頂いたんです。私たちは魔王領にある首都リリスの防衛、及び都民の避難を誘導する様セラフォルー・レヴィアタンさまから仰せつかっているので、あまり長居は出来ませんが」

ソーナ会長は表情を険しくして、そう告げてくる。

最上級悪魔クラスの強者は巨大魔獣の迎撃に回っているため、有望な若手は防衛と民衆の避難を誘導するよう指示されている。

本来なら僕たちグレモリー眷属もそこに行かねばならないのだが、チームがこの状態ではそれも難しい。

「そんでもって、俺はその付き添いだ。俺もお前らに聞きたい事があったから、無理言って連れて来てもらった」

「聞きたいこと？」

僕が尋ねるとそれまで笑顔だった匙くんは途端に目つきを鋭くし、表情をガラリと変える。

「兵藤を殺した奴、わかるか？」

迫力を感じさせる、力強い目をしていた。

彼も仲の良かったイッセーくんの事を聞き、敵討ちを望んでいるのだろう。

「わかるけど、もう死んでるはずだよ。イッセーくんが倒しただろうからね」

「……そうか、あいつならきっと勝ったんだろうな。なんたってあいつは俺の目標の一つで、ライバルで、ダチなんだから」

僕が答えると匙くんは空を仰ぎ見る様に顔をあげた後、目元を手で拭った。

イッセーくんとほぼ同時期に悪魔になった彼にとって、身近な目標であり競うべき友の喪失は堪えるものがあるのだろう。

「なら後はカズキを取り返すだけだ。あいつの事だから、俺たちが見つけるよりも早く、ひょこっと帰ってきそうだけどな。『誰も助けに来てくれないとか、お前ら俺の事嫌いなの？』とか言いながらさ？」

「ふふ、そうですね。彼なら本当に一人で、それも組織を壊滅させて帰ってくるような気がします」

ソーナ会長と匙くんは、そう言って笑う。
その光景が頭に浮かんできて、本当にやりそうだと僕も笑った。
久しぶりに、無理なく笑えた気がした。
「俺たちはこれから、都市部の一般人を守る為に行ってくる。ついでに『禍の団』の連中を、ヴリトラの炎で燃やし尽くしてやるさ。あんな連中を燃やすのなんざ、ついでで充分だって思い知らせてやる！」
「その意気ですよ、サジ。ヴリトラの力を宿す貴方なら、多くの民衆を守れます。その力、思う存分振るいなさい」
「……はい、会長！」
ソーナ会長からの激励を受け、目に決意の色を濃くする匙くん。
そのまま僕たちは部長のいる部屋に向かい、目的の部屋の扉の前に辿り着いた。
「リアス、私です。ソーナ・シトリーです、事情は把握しています。顔を見せて欲しいの、せめて声だけでも聞かせてちょうだい？」
「――――ソーナ……？」
ソーナ会長が優しく呼びかけると、部屋の中からか細い声で返事が返ってきた。
どうやら部長も親友のソーナ会長には反応を示してくれたようだ、これで少しでも部長に活力が戻ってくれれば……！

「ごめんなさい、ソーナ……今は誰とも会いたくないの……」
「そんな事を言わないで、リアス。木場くんから初代孫悟空さまの話を伺いました、まだイッセーくんには生きている可能性が……」
「お願い……私の事は放っておいて……」
「そんな事出来ないわ、貴女は私の大切な親友なのだから。お願い、立ち上がって。冥界の危機なのよ、私たち若手の悪魔にもやるべきことが――」
「もういいのよ！　彼のいない世界なんて、イッセーのいない世界なんてどうでもいいのッ！」
「リアス……」
「……ごめんなさい、怒鳴ってしまって。でも、あのヒト無しで生きるなんて私には……」
ソーナ会長は諭すように声を掛け続けたが、それすらも部長に拒絶されてしまう。
そして部長のすすり泣く声が、部屋から漏れ聞こえてくる。
イッセーくんを失った悲しみから立ち直らせる事は、もう出来ないのだろうか……。
「あら祐斗くん、それにソーナ会長と匙くんまで」
僕たちが打ちひしがれている所に、シーツを持った朱乃さんがやって来た。
「朱乃さん、アーシアさんの所に行っていたんじゃ？」

「あれからずっと泣き続けていたので、魔術でムリヤリ眠らせてきましたわ。少しは休まないと、あの子の体調まで崩してしまいますから……」

僕が尋ねると、朱乃さんは苦笑しつつ肩を竦めた。

やはりアーシアさんもそういう状況なのか、無理もない事だが。

「ソーナ会長と匙くんもごめんなさいね、折角来て下さったのに。ちょっと失礼しますわ」

「ちょ、朱乃!?」

朱乃さんはそう言うと、部長のいる部屋の扉を開け放ちなんでもないように入っていった。

突然の行動でソーナ会長が驚いているのもよそに、朱乃さんはベットの上でシーツを被り体育座りをしている部長の目の前に立つ。

「朱乃……？」

「失礼するわよ、リアス」

突然の朱乃さんの行動に首を傾げる部長と、そんな部長にニッコリと微笑む朱乃さん。

朱乃さんは部長の座っているベットのシーツを両手で掴み、思いっきり引っ張った！

「え……わきゃ!?」

当然その上にいた部長は派手にすっ飛び、悲鳴をあげながらベットから転がり落ちた。

今お尻を打ち付けた上に顔もぶつけていたな、あれは痛い。

「い、いきなり何をするの朱乃!?」

「あら、いけなかった？　シーツを交換したいのに、貴女が何時までもベットから動かないのが悪いのよ？」

がなる部長を朱乃さんはホホホと口元に手を当てて笑った後、持っていたシーツでベットメイクを始めてしまう。

その光景が、何処か見知った友人の姿と重なって見える。

それに対して、部長は尚も食い下がった。

「それならそうと、先に一言言えばいいじゃない！」

「だって貴女、そこを動きたくないのでしょう？　親友のソーナ会長が忙しい中無理をして来てくださったのに、顔も見せないなんて……失礼にも程がありますわ」

「それは……そうだけど……」

「それに私は部屋に閉じ籠ってる貴女と違って、やる事が沢山あるの。ここの掃除も早く終わらせないといけないのよ」

朱乃さんが頬に手を当てながらため息混じりに呟いたこの一言に、萎みかけていた部

長の怒りが再燃した。
「そんな言い方……ッ！　貴女にはわからないのよ！　イッセーを失った私の気持ちが!!　カズキくんはいいわ、誘拐されても生きてるのだから！　でもイッセーは……イッセーは、もう……！」
「リアス……カズキくんが生きている絶対の保証なんてあるの？」
部長の言葉に、目を真っ直ぐ見つめながら冷静に返す朱乃さん。
その真剣な眼差しに、部長は僅かに怯みを見せる。
「それは……でも、アザゼルが戦力として連れて行ったのだから殺されはしないと――」
「そんなもの、あくまで予想に過ぎないのよ？　もしかしたらあのまま死んでしまったかもしれないし、瀕死のまま拷問を受け続けているかもしれない。それとも身体の秘密を知る為にバラバラに解剖されているかもしれない。イッセーくんが生きている可能性に比べれば僅かに望みはあるかもしれないけれど、安全に生かされている可能性なんてそう高くないと私は思ってる」
「……」
朱乃さんの言葉を受けて、部長は黙り込んでしまった。
朱乃さんは、そこまで考えていたのか。

最悪の事態を想定した上で心を強く持とうとしているのかと、改めてこの人の凄さを感じた。

「それでも私はカズキくんが生きてると信じているわ、あの人がそう簡単に死んでしまうはずがないもの。それはイッセーくんだって同じよ？　彼があなたを残していなくなる筈ないじゃない」

朱乃さんはそう言いながら、部長を抱きしめた。

彼は生きている、朱乃さんはまるで自分にも言い聞かせる様に諭す。

部長は朱乃さんに抱き着いたまま顔を押し付けて、少しの間固まって動かなかった。

もしかしたら、声を出さずに泣いていたのかもしれない。

暫くしてから部長は朱乃さんから離れて、深く頭を下げた。

「……ごめんなさい。貴女も辛くて当然なのに、八つ当たりになっちゃった」

「いいのよ、私も最初から喧嘩腰で話しかけたのだから。それはそうとリアス、話は変わるけどあなたイッセーくんとはもうシたの？」

思わず僕と匙くんが噴き出す。

このタイミングで聞くことですか!?

「……抱いてすら貰えなかったわ」

「そう、ならやっぱりイッセーくんは生きてるわ」

「え……？」

「だってあれだけエッチなイッセーくんが、貴女を抱かずに死ぬ筈ないもの。きっと今頃、貴女の胸が恋しくて泣いてるわ」

「ふふ……そうね、そうかもしれないわ」

朱乃さんの言葉を聞いて、部長は浮かんできた涙を拭いながら笑う。

久しぶりに聞いた部長の笑い声は、何故かこちらまで嬉しくさせてくれるものに感じた。

「なんか姫島先輩、カズキみたいだな……」

匙くんの呟きに、思わず納得してしまった。

先ほどのシーツを引き抜いた時といい、今の唐突な発言といい。

励まし方、というかやり口がカズキくんそっくりだった。

この場にいなくても存在感を発揮するとは、やはり彼は末恐ろしい。

「なにやら賑やかだと思ったらリアスの奴、すっかり立ち直っているではないか。どうやら一足遅かった様だな」

廊下から声をかけられ振り向くと、先日レーティングゲームで対戦したサイラオーグ・バアルがこちらに向かってきていた。

話を聞くと、自分だけでは駄目かもしれないと思ったソーナ会長が事前に声を掛けて

いたのだとか。

どちらにしろ、無駄足を踏ませる形になってしまった訳か。

「ごめんなさいサイラオーグ、私の余計な気遣いで無駄足を踏ませてしまったわ」

「なに、兵藤一誠の女が笑顔を取り戻す所を見れたのなら無駄でもないさ」

ソーナ会長の謝罪に、笑いながら答えるサイラオーグ・バアル。

なんとも豪快な彼だが、やはり親戚である部長の事は気にかけてくれていた様だ。

「久しいな、木場祐斗。俺はこれから前線へと赴く、先に戦場で待っているぞ。それとこれは、グレイフィア様からの預かり物だ」

彼は僕の方に振り向くと、一枚の紙を差し出してきた。

その紙には悪魔文字で『アジュカ・ベルゼブブ』、『拠点』などと走り書きされているのが見える。

「これは？」

「アジュカ・ベルゼブブさまがいらっしゃる現在地だそうだ。兵藤一誠の駒を持ってここを訪ねるようにと、アザゼル提督からの言伝も預かっている」

アジュカ・ベルゼブブさまは悪魔の駒を製作した張本人だ、あの方ならイッセーくんの駒から何かの可能性を示唆してくれるはず！

僕も連絡を取りたかったが方法がないので諦めていたが、これでイッセーくんについ

て何かわかるかも知れない！
「リアスたちを連れて記された場所に赴き、アジュカ・ベルゼブブさまに会うといい。それまで前線は、この俺とその眷属たちに任せて貰おう！」
「私たちもそろそろ行きましょう、椿姫たちをあまり待たせてもいられません」
「はい、会長！　じゃあな木場、先に行って待ってるぜ！」
サイラオーグ・バアルとソーナ会長、そして匙くんはそれぞれ言い残した後、魔方陣の光に包まれて転移していった。
僕たちもすぐに行動しなければ。
初代さまからの言葉もある、アジュカ・ベルゼブブさまという希望もある！
まだまだ諦めるのは早いんだ、どこまでだって足掻いてやるさ！

69話

サイラオーグ・バアルから手紙を受け取った僕たちは、すぐさまそこに記された拠点へ移動を開始した。

アジュカ・ベルゼブブさまが拠点としている場所は、僕たちが人間界で暮らしている最寄りの駅から八駅ほど離れた場所にある廃ビルらしい。

こんな近くに魔王さまがいらした事に驚きを覚えつつ、僕たちはそこを目指して歩を進めていく。

部長も多少は気を持ち直したとはいえ決して本調子ではなく、アーシアさんとレイヴェルさんに朱乃さんと小猫ちゃんが説得してなんとか連れ出すことが出来た。

みんな藁にもすがる思いでここまでやって来たのだ、なんとか有益な情報を得たい。

そうして辿り着いた廃ビルに入っていき、そこで待っていたスーツ姿の女性悪魔に案内された屋上庭園にあの方はいらっしゃった。

「グレモリー眷属か、随分と大人数でやって来たんだね」

庭園の中央に置かれたテーブルと椅子、その椅子に腰掛けティーカップを傾けている男性。

妖麗な雰囲気と美しさを持つ四大魔王の一角、アジュカ・ベルゼブブさまだ。
「話は聞いている、大変なものに巻き込まれたようだね。まぁ毎度その手の襲撃を受けている君たちには、今更な事か」
「お忙しいところ失礼します、実はアジュカ様に見て頂きたいものがあるのです」
手にしていたティーカップを置き、そんな事を呟く。
部長はアジュカ・ベルゼブブさまの元まで歩み寄り、懐からイッセーくんの駒を取り出した。
「ほう、見て欲しいもの。――しかし、それはもう少し後になりそうだ。待ってもいない客が来訪したらしい」
アジュカ・ベルゼブブさまは部長を手で制し、庭園の奥へ視線を送る。
魔王さまが喋られてすぐ、僕も複数の気配を感じた。
庭園の奥から現れたのは、強大なオーラを漂わせる数人の男性悪魔たち。
感じる力からしてその誰もが上級悪魔かそれ以上、相当な手練れだとわかる。
「人間界のこのような所にいたとはな、偽りの魔王アジュカよ」
「口調だけで把握できてしまうのは、旧魔王派の魅力だと俺は思うよ？」
男たちの呼び掛けに、アジュカ・ベルゼブブさまは苦笑しながら応えられた。
アジュカ・ベルゼブブさまを『偽りの魔王』と呼ぶのは、旧魔王派の連中しかいない

から当然の反応と言える。
アジュカ・ベルゼブブさまの態度に怒気をさらけ出し始めた男たちの後ろからもう一人、見覚えのある白髪の青年が姿を現した。
「初めまして、アジュカ・ベルゼブブ。英雄派のジークフリートです」
そう、腰に剣を幾つも備えたその男の名はジークフリート。
イッセーくんを殺した者たちの仲間で、カズキくんを攫っていった張本人だ。
奴の登場に女性陣が殺気立ち、アーシアさんは悔しそうに涙を浮かべている。
特に朱乃さんと小猫ちゃんから感じるそれは、一際強く感じられた。
「ジークフリート……カズキくんは、無事なのかしら？」
「グレモリー眷属の《女王》か、さぁどうだろうね？　ゲオルクが何やら弄り回していたけど、ヘラクレスは彼を殺したがっていたしジャンヌも彼を欲しがっていた。もしかしたら今頃肉塊になっているのかも……っと！」
朱乃さんが激情を抑えつつカズキくんの安否を尋ねたが、返ってきたのは不安と怒りを煽るだけの挑発のみ。
思わず放った朱乃さんの雷光を、ジークフリートは既のところで躱した。
「彼に何かあってみなさい……絶対にあなた達を殺してみせるわ！　例え命を落とすとしても……ッ！」

「凄い殺気だ、それだけで殺されてしまいそうだよ。たが今は、アジュカ・ベルゼブブとの会談が優先なんだ」

ジークフリートは朱乃さんの啖呵に怯みもせずそう言うと、再びアジュカ・ベルゼブブさまに向き直った。

僕らなんて脅威じゃないとでも言いたげで、なんともカンに触る。

どうやらジークフリートと一緒にいるあの男性たちは英雄派に協力している旧魔王派の者たちらしく、アジュカ・ベルゼブブさまと同盟を結びに来たと言い出した。

確かにサーゼクスさまとアジュカさまの派閥は政治面で対立しているし、仲違いの噂などもよく耳にする。

さらに『禍の団』は見返りとして、今までの研究資料を提供するという。

常に新しい物作りを思慮し続けているアジュカ・ベルゼブブさまにとって、それはとても魅力的に見えた事だろう。

しかしこの方はそれを魅力的だと認めながらも、ハッキリと断じて一蹴した。

「確かに俺にとって君たちとの同盟は魅力的だ。研究資料にも興味はあるし、俺がテロリストになってサーゼクスの驚く顔を見てみたくもある。だがね、俺はそれを否定しなければならないんだよ」

「ふむ……理由を教えて貰えるだろうか？」

旧魔王派の悪魔たちが殺意を高める中、ジークフリートは顔色も変えずに尋ねた。
それに対してアジュカ・ベルゼブブさまもまた、笑みを崩さずに返答する。
「なに、簡単な事だよ。サーゼクス……あいつとは長い付き合いでね、俺が唯一友と呼べる存在なのさ。まぁ最近は面白そうな奴が一人増えたんだが、今は関係ないな。そもそも俺が魔王なんてやってるのも、あいつが魔王になったからに過ぎない。俺とサーゼクス・ルシファーの関係というのは、つまりそういう事だ」
アジュカ・ベルゼブブさまの言葉を聞き、ジークフリートは事前に予想していたかのように黙って頷いていた。
実は以前、僕はカズキくんからお二人が昔からのライバル関係だと聞いた事がある。
カズキくんがムリヤリ頼まれたサーゼクスさまの依頼で、アジュカ・ベルゼブブさまの所を訪ねた際に少しだけ昔話を聞かせて貰ったらしい。
カズキくん本人はサーゼクスさまの弱みを握りたいだけのつもりで聞いたのに、予想以上にノリノリで語られて迷惑だったとボヤいていたが。
その後の展開は早かった。
アジュカ・ベルゼブブさまの答えに怒りを露わにし、怨恨に塗れた言葉をぶつける旧魔王派の悪魔たち。
それを聞いたアジュカ・ベルゼブブさまは連中を『つまらない』と断じると、すぐさ

ま戦闘が始まった。
いや、正確には戦闘にすらなっていなかった。
旧魔王派の放った攻撃に晒されてもその場から動かないどころか、椅子から立ち上がりすらせず。
手元に小型の魔方陣を展開してそれを高速で操作する事で、全ての事象を支配する。
敵の攻撃をいなし、封殺し、倍返しにして瞬殺した。
これがアジュカ・ベルゼブブさまの能力、この世で起こるあらゆる現象や異能を数式に落とし込んで操る『覇軍の方程式（カンカラー・フォーミュラ）』の力。
あれは戦闘ではなく、一方的な蹂躙だ。
「軽く動かしてこれとは……貴様とサーゼクスは一体どれだけの力を……」
旧魔王派の悪魔たちはそれだけ言い残し、無念を抱いた表情でその場に事切れた。
決して弱い敵ではなかった、少なくとも僕らが戦えば苦戦は必至だった筈だ。
それでもこの方には遠く及ばず、その場から一歩も動かす事すら出来ない。
これが四大魔王の一角アジュカ・ベルゼブブさまの実力の一端、サーゼクスさまと共に規格外と称されるのも素直に頷けてしまう。
「さて、残るは英雄派のジークフリートくんか。どうするかな？　逃げるなら追わないよ、彼らと話があるしね」

「いえ、まだ切り札は残っているので。撤退はそれから考えさせて貰おうかな？」
「ほう切り札か、それは興味深い。だが……そちらのグレモリー眷属の《騎士》くん、さっきから彼にいい殺気を送っていたね。どうかな、彼はキミが相手をしてみるかい？」
アジュカ・ベルゼブブさまはジークフリートを指差しながら僕に尋ねられる。
……願っても無い話だ。
この身体を駆け巡る感情をあいつにぶつけたいと、ずっと思っていたのだから。
いつもの様にイッセーくんとトレーニングしていた時、僕は彼と『ある約束』をした。
もしどちらかが死んでしまったら、その分だけ皆の為に戦うと。
イッセーくんは死んでいないと信じているが、それでも今ここにいないのは事実。
果たす時が来て欲しくない約束だったが、その時が来てしまったのなら仕方ない。
僕は親友との約束を、全力で遂行するだけだ。
「ジークフリート、悪いがこの抑えられない激情をぶつけさせてもらう。僕の親友が帰って来られなかった、あなたが死ぬのには十分な理由だ」
「言いたい事はわかるけど、彼を殺したのはシャルバであって僕たち英雄派は関係ないよ？　あそこでシャルバが乱入してきたのは、あくまでイレギュラーだった」
「それこそ関係ないさ。そう、あなた方に囚われている友人の言葉を借りるなら……『八つ当たり』って奴かな？」

「なるほど、反論の余地もない。キミから感じる重圧が、かつてないほど高まっているね……面白い。さぁ決着をつけようか、赤龍帝の親友である《騎士》くん」

その言葉を皮切りに、僕とジークフリートの剣戟は開始した。

僕は龍殺しの力を持った聖魔剣を創り出し、ジークフリートは背中から龍の腕を四本出現させそれぞれに帯剣していた魔剣を握らせる。

ジークフリートの持つ神器の名は『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』。

一定時間所有者の力を二倍にするという能力で、イッセーくんが所持している十秒毎に力を倍加していく『赤龍帝の籠手』の下位に位置する神器だ。

本来なら割とありふれている神器なのだが、ジークフリートのそれは亜種としての能力を発現している。

背中に龍の腕を生やしてその本数分パワーを倍増するのだが、彼はその生やした腕に魔剣を携え最大で六刀流という曲芸染みた真似を高次元の強さでもってこなす。

それがこの男の禁手、『阿修羅と魔龍の宴（カオスエッジ・アスラ・レヴィッジ）』の能力だ。

「やはりキミは強いな、木場祐斗。このままでは仮にこちらが勝っても深手を負う事に……おっと！」

暫く互いに斬り結びながら隙を窺っていると、

小猫ちゃんがジークフリートの背後から奇襲を仕掛けた！
仙術の気を纏った拳を振り抜くもジークフリートに紙一重で躱されてしまうが、小猫ちゃんは地面を削りながら滑る様に僕の横に移動してきた。
「ごめんなさい祐斗先輩、気を練り上げるのに時間が掛かりました。ここからは私も一緒に戦います！」
「……一騎打ちに拘ってる場合じゃない、か。そうだね、連携してジークフリートを仕留めよう！」
小猫ちゃんの言葉を受け、同時に仕掛けようと剣を構え直す。
小猫ちゃんは既に耳と二又の尻尾が飛び出ており、全身からは高密度の気を放出しているのがわかる。
これだけの気、一体いつから練っていたのだろうか。
ジークフリートもその気を感じて若干驚いている様に見える。
「不意打ちや加勢が卑怯、なんて言いませんよね？」
「言える立場でもないしね、しかし驚いた。かなり濃密に練られた気だ、先日会った時とは大違いじゃないか」
「……私は未熟です。気を練るのに時間はかかるし、その質も姉さまの様に高くない。でも時間をかけて、丁寧に練り上げれば話は違います。私にだってこれ位の気は練れる

！　仙術はカズキ先輩が褒めてくれた、私の自慢の武器なんだ！」

小猫ちゃんはジークフリート目掛けて駆け出し、鳩尾目掛けて拳を振り抜く！

気で強化された脚力と腕力で繰り出されたその一撃は、辺りに凄まじい轟音を響かせる！

剣の腹で防がれてしまったが、ジークフリートを後方に大きく後退させた。

クリーンヒットこそしていないが、この威力の攻撃をまともに喰らえばジークフリートも堪らないはずだ！

「なるほど、僕たちがここに現れてからずっと気を練り上げていたんだね。僕が現れた時に君から感じた殺気がすぐに消えた理由はこれか、君は最初から僕と戦う事を想定していた訳だ。それにしても流石に《戦車》の攻撃は堪える、やはりグレモリー眷属を侮ると手痛い目に合う様だ」

手が痺れたのかプルプルと手首を振りつつ、こちらに向かってゆっくりと歩いてくるジークフリート。

やはり大したダメージは見られない、か。

「バアル戦の映像は僕も拝見させてもらったけど、君はフェンリルと組んで戦う事で真価を発揮していたじゃないか。この場にいない様だが、召喚しなくていいのかな？　そこで僕にいい殺気を振りまいてくれてる《女王》なら、すぐに呼べるんだろう？」

ジークフリートの言葉に小猫ちゃんは顔をしかめた後、首を横に振る。
「呼びません……いえ、呼べません。私や朱乃さんの言葉を聞いて理性こそ保っていますが、今のあの子達は私たちにとっても危険です。カズキ先輩を失って怒り狂っているあの子達が貴方を認識したら、貴方は間違いなく瞬時に嚙み殺してしまうから」
下手をすれば、私たちごと。
小猫ちゃんはそう言いながら、カズキくんと同じ構えを取る。
スコルたちの話は朱乃さんからも聞いていたが、やはり相当危険な状態の様だ。
ジークフリートは何かに納得した様に頷くと、足を止めて懐に手を潜り込ませた。
何か仕掛けるつもりなのかと身構えつつ、何時でも動ける様に脚に力を溜める。
「二対一では分が悪い上に、いつ残りのメンバーに襲われるかわかったものじゃない。やはりここは、切り札を切らせてもらおうか！」
ジークフリートは懐から注射器の様な物を取り出し、首に押し付けた。
見た所何かの薬品の様に見えるが、ドーピング剤の様なものだろうか？
ジークフリートが薬品を注入し空の注射器を投げ捨てた次の瞬間、彼の身体が大きくビクンと跳ね上がり段々と姿が変貌していく！
彼の背中から生えるドラゴンの腕が、ミチミチと肉が引き千切れる様な鈍い音を立てつつ肥大化していく。

手にしていた剣は腕と同化していき、もはや指などは形をなしていない。
身に付けていた衣服は弾け飛び、顔中に血管が痙攣を起こし脈動しながら浮かび上がる。
最後には地に手が届くほど太く長く巨大化した四本の腕を背に生やす、まるで蜘蛛のバケモノの様な異形へと変貌した！
『シャルバから提供された真の魔王の血を加工して創り上げた、神器を強化するドーピング剤を投与したこの姿。僕たちはこれを【業魔人（カオス・ドライブ）】と呼称している』
先程までとは明らかに違う、低く重い声質で言葉を紡ぐジークフリート。
当然変わったのはそれだけでなく、今まで感じていたプレッシャーは跳ね上がり迸る不気味なオーラも尋常ではなくなっている！
「実に素晴らしい、やはり人間とは可能性の塊だね。己が欲望を進化させ続け、時に天使や悪魔すら凌駕するものをこうして作り出してしまうのだから」
離れた所でこちらを見学しているアジュカ・ベルゼブブさまは、楽しそうに笑いながらそう仰る。
あの姿が欲望を形にしたものだというのなら、人間に異能を隠匿する理由は正にこれなのだと理解した。

そして【業魔人】は姿形だけでなく、強さもバケモノ染みていた。
各魔剣の威力は底上げされ、それでいてあの巨体でありながら俊敏性は些かの衰えも見られない。
幾つも有る腕を絡ませる事もなく自在に操り、僕らを攻め立ててくる！
僕らは脚を止めずに動き回りながらその攻撃を掻い潜り、攻撃のチャンスをうかがう。
そんな状況に焦れたのかジークフリートは自前の腕で攻撃を繰り出しつつ、背中から生える極太の腕を頭上高くに掲げる。
そしてその振り上げた腕を一つに束ね、フロアの床目掛けて一気に振り下ろした！
アジュカ・ベルゼブブさまがこのビル、というかこのフロアは特別頑丈に作られていると仰っていたが、その一撃はこの場を大きく揺るがし一瞬身体が宙に浮くほどの衝撃を与えた！
『さぁ、まずは一人めだよ！』
ッしまった！
僕は僅かに浮く程度だったが、体重の軽い小猫ちゃんはその衝撃と風圧で身体を宙に浮かされている！
小猫ちゃんも悪魔の羽を広げて回避しようとしているが、それよりもジークフリート

の一撃の方が速い！
ジークフリートは極太の腕を再び振り上げ、小猫ちゃん目掛けて勢いよく叩きつけた！
「……ぁッ!?」
「小猫ちゃんッ！」
クレーターが出来るほど強烈に叩きつけられた小猫ちゃんの口から、肺に残った空気と鮮血が吐き出される！
僕は小猫ちゃんを助けようと思わず駆け出したが、それこそがジークフリートの思惑だった。
『やっぱりそうだ、一人潰せば寄ってくる。仲間想いが過ぎる、それが情愛の深い君たちグレモリー眷属の弱点だよ』
「しま……ッ!?」
狙い澄ました一撃、回避は間に合わない。
ならばと苦し紛れに脇腹目掛けて聖魔剣を蹴り込んでみたが、ジークフリートの強化された肉体に刃が通らず。
聖魔剣は儚い金属音を奏で、無残に砕け散ってしまった。
そして僕を襲ってくる、剛力に任せたとてつもなく重い一撃。

防御の薄い僕にとって、その一撃は致命的だった。
動きが鈍った所に両脚を氷で貫かれ、片腕は防御ごと切り落とされる。
僕たちを救おうと部長と朱乃さんは攻撃を繰り出す。
しかし朱乃さんはみんなを守りつつなので全力が出せず、部長もいつもの威力が出せていない。
そんな状態では【業魔人】となったジークフリートにはまるで通用せず、簡単に薙ぎ払われてしまった。
アーシアさんも僕に回復の光を飛ばしてくれているが、精神的に不安定なせいか普段の様な劇的な効果は見られない。
部長と朱乃さんが注意を引いてくれているうちに、ルヴァル・フェニックス氏から頂いていた『フェニックスの涙』を斬り落とされた肩口に振り掛ける。
なんとか傷口を塞がったが切られた腕が生えてくる事はない、やはりあそこに転がっている腕を回収しないとダメみたいだ。
『フェニックスの涙』は貴重なので、脚に空けられた穴は氷の聖魔剣で止血する。
気休めだが、何もしないよりはマシだろう。
小猫ちゃんにも『フェニックスの涙』を渡そうと辺りを見渡すと、小猫ちゃんは脚を震わせながらもなんとか立ち上がっていた。

それに気付いたジークフリートは、嘲笑の笑みを浮かべる。
『まだ動けるのか、健気だね。そんなにあの男を取り戻したいのかな？』
「あきらめ、ない……！　先輩は私が苦しい時に話しかけてくれた、気に掛けてくれた、助けてくれた。だから今度は、私が助ける番なんだ……ッ！」
小猫ちゃんは震える自分の脚に拳を叩きつけ、ムリヤリ震えを止めさせる。
全身は傷だらけで今にも倒れそうなのに決して諦めず、ジークフリートへにじり寄っていく。
……後輩があんなに頑張っているんだ、僕がこんな所で膝を着いていてどうするッ!?
聖魔剣を杖代わりに立ち上がり、新たに創り出した聖魔剣を口に咥えて加勢しようとしたその時。
「な、何ですの!?」
朱乃さんたちと共にいるレイヴェルさんから、驚きの声が上がった。
そちらに視線をやると、レイヴェルさんの持つバスケットから眩い光が溢れている！
あれは小猫ちゃんが持っていたバスケット、レイヴェルさんに預けていたのか！
バスケットの中にいるのは、傷が癒えた後も眠り続ける僕らの小さな仲間。
おそらく彼を中心に起こっているだろうその光は、段々と輝きを増していく。
そして変化は、小猫ちゃんの方にも起こり始めた。

「この光は……？」

『彼女まで突然輝きだして……なんだ、何が起きている!?』

バスケットの光と呼応する様に、小猫ちゃんの身体も光が包み込んでいる。

ジークフリートはその現象が理解できず、声を荒げた。

小猫ちゃんは輝く自分の掌をじっと見つめた後、何かを得心する様にギュッと拳を握り締める。

「……そっか、手伝ってくれるんだね？　あなたも、自分の力で先輩を取り戻したいんだよね？」

『クッ！　グレモリー眷属が原因の不思議な現象は、マズい事の起きる前兆だ！　絶対に阻止しなければ……！』

「……来て！　一緒に戦おう！」

小猫ちゃんの掛け声と共に、二つの光は一層その輝きを強めた！

危険を感じたジークフリートが妨害しようとするが、そんな事はさせる訳にはいかない！

「『魔剣……創造』ッ!!」

『この、邪魔をするなぁ!!』

僕は残りの力を絞り出し、小猫ちゃんに襲い掛かるジークフリートの行く手を阻む様

に大量の魔剣を創り出す。
　聖魔剣ですらないただの魔剣では当然ダメージなど与えられず、ひしめき合い壁の様に迫る魔剣たちはたった一薙ぎで粉々に粉砕される。
　ダメージなど与えるつもりもない、目眩しにさえなればいいんだ。
　力を使い切った僕は惨めに地面へ伏したが、それでいい。
　ジークフリートの目の前には、小猫ちゃんが立っている。
　彼女の想い人と同じ白銀の鎧を身に纏い、機械の駆動音と排熱の際に出る白い蒸気を辺りに撒き散らしながら……彼女は再び、仇敵の前に立ち塞がる！
　カズキくんはゴツゴツとした武骨な形態だったけど、小猫ちゃんが纏っているのは全体的に丸みを帯びたフォルムになっている。
　装甲は薄く、細くしなやかな印象を受けた。
　これが小猫ちゃんの、いや二人の新しい力か！
『それは彼の神器なのか!?　馬鹿な、ありえない！　あの毒は本人以外のものは悉く消滅するはずだ！　それが未だに現存していた上に、別の者が纏うなど……！』
「頭の中に、モグさんの事が流れ込んでくる……カズキ先輩の神器『土竜の鉤爪（グラン・クロウ）』の禁手、『豊穣土竜の機巧鎧（フェティリティ・グラン・ギアメイル）』。それが神器としての本当の名前なんだね……」

狼狽するジークフリートを無視して、小猫ちゃんは目を閉じて胸に手を当てる。

「……そっか、カズキ先輩の付けてくれた名前の方がいいんだね。ありがとうモグさん、力を貸してくれて……一緒に頑張って、先輩を取り戻そう！」

そして段々と手足のタービンが回転数を上げていき、戦闘準備は完了したと言わんばかりに再び全身から蒸気を噴き出した！

７０話

「祐斗、大丈夫!?」

力を使い過ぎて倒れた僕の元に、部長たちが駆け寄ってくる。

部長は僕の身体を抱き起こし、朱乃さんは切り落とされた腕を持って来てくれた。

そしてレイヴェルさんがその腕をあてがい、アーシアさんは涙で目を濡らしながら治療をしてくれる。

「ごめんなさい木場さん……私がしっかりしてないから、もう少しで木場さんまで……！」

「……大丈夫だよ。いつも助かってるし、今だってだいぶ楽になってきたよ」

とは言っても、やはりアーシアさんの治癒の力は安定していない。

何時もならすぐに塞がる傷もなかなか完治しない様だが、今はとにかく腕を治すのが先決か。

後輩が懸命に戦っているのに、戦いに加わる事すら出来ないなんて……。

こうしている間にも、モグラさんを装着した小猫ちゃんは【業魔人】と化したジークフリートと相対しているのに……！

「小猫さん、凄いですわ……」

小猫ちゃんの戦いぶりを見て、レイヴェルさんがぼそりと呟く。

僕も視線をそちらに向け、小猫ちゃんの戦いを見つめる。

そこには、素早い動きでジークフリートを翻弄している小猫ちゃんの姿があった。

『くそ！　いきなり手にした力を、何故手足の如くこうも自在に使いこなせる!?』

「モグさんが色々助けてくれますから。そしてなにより、あの人の動きなら私の目に完璧に焼き付いてます！」

ジークフリートは小猫ちゃん目掛けて駆け出し、六つの腕を力任せに振り回す。

しかし小猫ちゃんは脚のタービンをタイヤの様に使い、滑る様に移動し全て躱していく。

そして隙を見つけては仙術の気が籠められた掌打を鈍い音と共に打ち込み、石柱を自在に操り至る所から追撃を行う。

敵の攻撃をいなし戦うその姿は、まさにカズキくんを彷彿とさせた。

だが、一人ではいつか限界がくる。

連中は独自のルートで『フェニックスの涙』を調達できると聞いたし、どんなにダメージを与えてもそれを使われたら無駄になる。

畳み掛けるなら今なんだ。

突然の出来事に動揺し、小猫ちゃんの攻撃に反応しきれていない今しかない。
「……アーシアさん、腕より先に脚を動かせる様にしてくれるかい？」
「そんな……ダメです！　こんな身体で戦ったりしたら、今度こそ木場さんが死んでしまいます！」
「心配ないよ……これくらいで寝ていたら、イッセーくんに合わせる顔がない……！」
アーシアさんは大粒の涙を零しながら止めてくれるが、そうも言っていられない。
僕はイッセーくんと約束したんだ、みんなを守る為に全力で戦うと！
誰が相手だろうと、彼の様に臆せず立ち向かうとッ！
「後輩に戦わせて自分が休んでるなんて、グレモリー眷属男子のする事じゃない……ここで立ち上がらなければ、赤龍帝の友だと名乗る事すら出来はしない！」
彼を裏切りたくない、情けない所を見せたくない！
動け、僕の身体！
まだ休んでいい時じゃない！
「片腕がなんだ!?　脚に穴が空いているのがなんだ!?　僕は、彼の帰ってくるこの場所を！　守らなくちゃいけないんだッ!!」
自分でも驚く程の声を張り上げ、僕はムリヤリその場で立ち上がる。
いま満足に動かせるのは口だけなんだ、全力で吠えてやる！

剣が握れないなら脚で掴め、口に咥えろ！
惨めでもいい、みっともなくてもいい。
兵藤一誠を突き動かしていた意地と気合いよ！
瀬尾一輝の強さを支えた知恵と気迫よ！
少しでいい、僕に力を貸してくれ！
剣も握らず飛び出そうとしたその時、部長の手にしていた《兵士》の駒が突然宙に浮かんだ。
そしてその駒は強く、とても強く輝き出す。
僕の主人と親友を象徴する様な、紅く赤い光を帯びながら……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
『残っている特記戦力は木場祐斗だけではなかったのか!?　これ以上訳のわからない事が起きる前に、速く仕留めなければ！』
腕を振り回しながら吠えるジークフリート。
全身に痛みは走っているけど、動きを止める訳にはいかない。
私はそんな相手を無視して、今度は防御の薄そうな顔目掛けて指先からドリルを飛ばす。
しかし単調なその攻撃は簡単に薙ぎ払われ、反撃しようとジークフリートが大きく一

歩を踏み込んできた。
『こんな攻撃が……ぐわっ!?』
でも、それは私が張った罠。
踏み込もうとした瞬間、モグさんが地面を窪ませる。
そこを踏み抜いたジークフリートは、勢いよく前のめりに体制を崩した。
さすがモグさん、いい仕事っぷりです！
「確かにあなたは硬い、でもカズキ先輩が言ってました。自分の力が足りないのなら……他から力を持って来ればいいって！」
私は一気に加速し、ジークフリートの懐に飛び込む！
前のめりに倒れこむ勢いと加速の力も加えて、掌に出したドリルと一緒に掌打を腹部へ捩じ込んだ！
その一撃はジークフリートの身体をくの字に曲げ、硬質化した外皮を抉り深々とドリルが突き刺さる！
『ガフッ！　せ、聖魔剣すら拒んだこの身体を穿つとは……だが、捕らえたぞ！』
口から血を吐き出したジークフリートだが、腹部に打ち込まれた私の腕を自前の腕でしっかりと捕らえていた！
マズい、調子が良すぎて油断してしまった！

カズキ先輩にも、打ち込んだらすぐに離れろと言われていたのに……！

私の腕が万力の様な力で締め上げられ、腕部装甲がミシミシと悲鳴を上げる！

「うぐ……ッ！」

『もう逃がしはしない！　このまま腕をへし折ったら、次は首を――――』

ジークフリートが力を加えようとしたその時、一筋の銀閃が走る。

そして数瞬後にら鮮血が飛び散り、私を掴むジークフリートの腕が宙に舞っていた。

それと同時に腹部を穿ったドリルを引き抜き、私も大きく飛び退く。

『ぐあぁぁぁッ!?』

「僕の後輩に汚い手で触れるな、僕が後でカズキくんに怒られてしまうじゃないか」

ジークフリートの腕を斬り飛ばしたのは、やっぱり祐斗先輩だった。

肩から斬られた腕も繋がっていて、いつもの様な俊敏さで私をジークフリートから引き離す。

そしてその手には、ここにはないはずの物が握られていた。

「祐斗先輩、その剣……イッセー先輩の？」

「そう、『アスカロン』……イッセーくんの駒が輝いたと思ったら、突然アスカロンに変化した。きっと情けない僕へ喝を入れる為に、イッセーくんが貸してくれたんだ」

そう言ってはにかむ祐斗先輩。

アスカロンはイッセー先輩が持っていた聖剣だ、『龍殺し』の特性があると聞いている。

でもきっとそれだけが理由じゃない、それなら祐斗先輩の龍殺しを付与した聖魔剣でも対抗出来たはずだ。

きっとイッセー先輩が、あの剣を通して祐斗先輩に力を貸してくれてるんだと思う。

「そしてこの剣を通して、イッセーくんの声が聞こえてきた。『負けるな、一緒に行こうぜ』って……そんな事を言われたら、やるしかないじゃないかッ！」

『ぐ、僕の腕を……！　だが一人増えたところで――』

「あら、誰が一人だなんて言いました？」

ジークフリートの言葉を遮り、稲光と雷鳴を轟かせながら極大の雷が襲い掛かった！

夜空にそびえ立つ光の柱は、ジークフリートを中心に轟音を撒き散らして奴の身体を焦がしていく！

そして空には雷撃を操っている朱乃さんが佇んでいて、その背中には闇に溶ける様な六枚の黒い翼が広がっていた！

『～～ッ!?』

「『堕天使化』、私の奥の手ですわ。守りに気を使わなくて良くなった今なら、思う存分力が振るえます！」

朱乃さんがつけているブレスレットが輝いている、どうやらあれが朱乃さんの堕天使の力を跳ね上げているみたいだ。

朱乃さんを見上げていると私の身体が暖かい光に包まれ、先程まで感じていた身体の痛みが引いていく。

横に視線をやるとアーシアさんが私に寄り添い治療をしてくれていて、レイヴェルも側に立って私たちを庇うように炎の翼を広げている。

二人の手には、イッセー先輩の悪魔の駒が握られていた。

「……イッセーさんの声が聞こえてきたんです。『みんなを助けてやってくれ』って……『何時までも、泣いてるだけじゃいけない』って！」

「眷属ですらない、私にまで聞こえてきましたもの……『皆を支えてやってくれ』と……本当に、優しすぎますわよ……っ！」

二人は目に涙を蓄えながら、しかし力強い眼差しでそう言い放つ。

イッセー先輩の言葉が、駒を通して皆に伝わり鼓舞していく。

そんな私たちの横を、部長がゆっくりとした足取りで通り過ぎていった。

その手には当然、イッセー先輩の駒が握られている。

『ま、まだだ！　それでも僕は、英雄の子孫として……！』

全身を黒焦げにし至る所から煙をあげているジークフリートだが、未だ倒れることな

く今度は近づいてくる部長目掛けて背中の腕を振り下ろす。
しかし部長はその攻撃を避けようとせず、迫り来る腕へ魔力を込めた手を払う様に一薙ぎする。
するとジークフリートの腕は部長の触れた部分が消滅し、振り回された腕は千切れ回転しながら宙に舞った。
ジークフリートから切り離されたことにより、肉に覆われていた魔剣が姿を現し地面に突き刺さる。
思わず引き下がるジークフリートを他所に部長は駒を両手で強く握り締めた後、敵を睨み付けた。
涙に濡れながらも、その瞳には今までなかった火が灯っている！
『立ち上がって。皆と共に戦って下さい』、か。そうよね、イッセーならそう言うに決まってる……待たせてごめんなさい、私のかわいい下僕悪魔たち！　グレモリー眷属として、目の前の敵を消し飛ばしてやりましょうッ！」
部長は目元を拭った後、高らかに宣言する。
……戻った！
私の知っている、いつもの皆の姿に！
これで戦える、どんな相手だろうと……絶対に勝てる！

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

立ち直った部長の指揮の元、攻撃を繰り返す僕たちグレモリー眷属。

それほど時間を掛ける事もなく、ジークフリートの背中に生えた腕を全て刈り取ることに成功した。

自前の左腕も肘から先を失い、満身創痍となり肩で息をするジークフリート。

こちらの勝利が揺らぐ事はもうないだろう。

『なんなんだ、グレモリー眷属とは!?　赤龍帝は死してなお戦い続け、その仲間はいくら傷つこうとも立ち上がる！　一体なん……ッグラム!?　』

ジークフリートが咆哮をあげたその時、彼の手にする魔剣が突然輝きだした。

何か仕掛けてくるのかと身構えたが、その現象はジークフリートにとっても予想外のものらしく焦り仰天している。

この光……僕を呼んでいる？

『魔帝剣が、木場祐斗に呼応しているだと!?　馬鹿な、ありえない！　まさかこれが【業魔人】の弊害なのか!?』

輝きは一層激しくなり、持ち主であるジークフリートを拒絶するかの様に手を焦がす。

しかし、ジークフリートは決してその剣を放そうとはしなかった。

どんなに手を焼かれようとも、逃しはしないとばかりに残った右手で強く握りしめる。

『認めない……！　僕は英雄の子孫なんだ、こんな所で死ぬ様な人間じゃない！』

「……今のキミに、英雄がどうのと語られたくはない。『人間のまま高みを目指す』という己の信念を捨てた時点で、キミは詰んでいたんだ」

必死の形相で騒ぐジークフリートに対して、僕はアスカロンの切っ先を突き付ける。

その異形の姿を見て、一体誰が人間を連想すると言うのか。

ジークフリートにトドメを刺そうとアスカロンを振り上げたその時、小猫ちゃんが割り込む様にゆっくりと前に出た。

既に鎧は解除され、疲れたのかグッタリしているモグラさんを掌に乗せている。

「……貴方は、『英雄』になりたかったんですか？」

小猫ちゃんの呟いた言葉に、ピクリと肩を揺らして反応するジークフリート。

そしてゆっくりと自分の身体を見渡し始めると、彼は嗄れた声で嘲笑する様に呟いた。

『――そうだ。僕は憧れたんだ、偉大な祖先に。その背に追いつくと、追い越してみせると意気込んで……それが最後はこのザマか、我ながら情けない』

彼は依然として自らの手を焼き続けるグラムをしばし見つめると、その切っ先を自ら

の下腹部に突き付け一息に貫いた！

ただでさえ限界だった肉体にグラムの龍殺しの波動を受け、身体中に裂傷が走り節々が粒子となり崩れ去っていく！

「何を……!?」

『ガフッ……僕は、君たちに敗れたんじゃない。自分の手で消えるのさ……グラムも自分の意思で手放す、決して僕が見限られた訳じゃない……！』

薄い笑みを浮かべ、顔にも裂傷が走っていく。

くそ、まだ色々と情報を聞き出せていないのに！

アーシアさんの力も効果が薄く、貴重な『フェニックスの涙』まで使ったがまるで変化がない。

もしかして、この状態になると回復を受け付けなくなるのか？

全身がバラバラになりとうとう仰向けに倒れたジークフリートは、小猫ちゃんを見つめながら口を開いた。

『君の、君たちの探している彼なら、きっと近いうちに会えるよ』

「ッどういう意味ですか!?」

ジークフリートの言葉を聞き、彼の側に駆け寄る小猫ちゃん。

カズキくんの事を言っているのか？

だが既に目の焦点は合っておらず、命の灯火も消えかけている。
『僕がここに向かう時には、既に最終調整の段階だった……絶望に苛まれるだろうが、せいぜい足掻くといい……』
「待って、まだ聞きたい事が……ッ！」
朱乃さんの呼びかけに応える前にジークフリートは完全に崩壊し、その粒子は風に乗って消えてしまった。
その場に残ったのは、地面に突き刺さり鳴動を続けるグラムのみだった。

グラムの新たな所持者となった僕だが、無駄に大きいこの剣は持ち歩くのは不便なので格納空間に保管することにした。
しかしジークフリートが言っていた最終調整とは一体……だが、あの口ぶりだときっと生きてはいるのだろう。
それがわかった途端『彼ならきっと大丈夫だ』と僅かに安心できてしまうのは、人徳と言って良いのだろうか？
カズキくんの希望は繋がった、次はイッセーくんの番だ。
アスカロンはジークフリートが消えたと同時に駒の状態に戻り、みんなの持っていた駒も全てアジュカ・ベルゼブブさまに診てもらった。

結論から言って、彼は生きていた。
駒に記録されている最後の情報は『死』ではなく、駒も機能を完全には失っていないのだとか。
肉体は滅びているだろうが、魂は次元の狭間に漂っている可能性が高いそうだ。
魂さえこちらに呼び出されば身体はイッセーくんのご両親か、彼の部屋に落ちている体毛からＤＮＡを抽出してクローンを作成出来るらしい。
拒絶反応や神器が上手く馴染むのか等色々と問題はあるそうだが、彼が生きているという事が何よりも嬉しい情報だ！
この話を聞いてレイヴェルさんは小猫ちゃんに抱きつき、アーシアさんは大声で泣いて部長は笑顔のまま涙を流してそれを拭っていた。
やっぱり彼は死んでなどいなかった！
イッセーくんは生きていて、カズキくんの情報も得た。
後はこちらが動くだけ、僕たちの反撃はここからだ！
気持ち新たに意気込んでいたその時、僕らをここに案内してくれた女性悪魔の方がこのフロアに駆け込んできた。
「アジュカさま、お耳に入れたい事が……」
「構わないよ、彼らにも聞かせてやってくれ」

アジュカ・ベルゼブブさまが話を促すと、女性悪魔は頷き手元の資料に目を落としながら喋り出した。
「はい。冥界某所にてテロリストの殲滅に当たっていたバアル家次期当主、サイラオーグ・バアルが黒色の鎧を身に纏った戦士に襲われ意識不明の重体との報せが入りました」
あのサイラオーグ・バアルが敗れた!?
彼の並外れた強さをレーティングゲームで体感している僕たちには、到底信じられない情報だ!
一体誰が……その疑問は、最悪の結果と共に解消することになった。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
「なかなか粘ったね、サイラオーグ・バアル。だがその様子だともう限界のようだ、我々は引き上げさせて貰おう」
「ぐぅ……！　この男、敵に回すとここまで厄介だとは……」
「神滅具を纏ったバアル家次期当主を単騎で撃破、想像以上のスペックだ。レオナルドの事は残念だったが、有用な戦力が手に入った事を素直に喜ぶとしよう」
「待て……お前達を逃す訳には……ッ！」
「テストは終わった、もうキミに用はないよ。バアル眷属の《女王》も彼を連れ帰るとい

い、主の死を望みはしないだろう?」

「くそ、意識が……なんと情けない……！　クイーシャ、何としてもこの事をサーゼクスさまとリアスたちに伝えろ……！　『瀬尾一輝が、敵の手に堕ちた』と……！」

７１話

ここは冥界に用意した英雄派の施設の一つ。
そこで俺たち英雄派の幹部は、冥界で起こっている魔獣騒動の一部始終を鑑賞していた。
冥界を蹂躙している魔獣たちはレオナルドが指揮していないせいか、幾分か進行が遅い。
そのせいで奴らの通った都市や町村には、更に深刻な壊滅をもたらしているのは皮肉な話だ。
本来はシャルバ・ベルゼブブの元へ出向いたジークフリートを待っていたのだが、未だに戻ってこない所を見ると捕らえられたか消されたのだろう。
戦力が減ったのは辛いが、一人有望な人材を手に入れた事でイーブンだと考えておこう。
まぁじっくりと育てる予定だったレオナルドの事を入れたら、見事なまでに赤字なのだが。
そして現在その有望な人材、瀬尾一輝は施設のフロアでヘラクレスの手によりリンチ

にあっていた。
　ヘラクレスの拳打が顔や腹部に鈍い音と共に打ち込まれるが、体重差で吹き飛ぶことはあっても表情が変わることはない。
　もちろん気による防御などしていないから、身体中が青アザだらけになっている。
「――ケッ、こんだけ殴っても顔色一つ変えやしねぇ。つまんねぇサンドバッグだ、なッ！」
　ヘラクレスは力任せに彼の顔を殴りつけ、そのまま壁に叩きつける。
　壁からずり落ちて地面に倒れ込む瀬尾一輝だったが、暫くすると再び立ち上がって呆然と立ち尽くす。
　その態度がまたヘラクレスの神経を逆なでするのだろうな、しかしそろそろ止めさせて貰おう。
「いい加減にしろヘラクレス、もう憂さ晴らしは済んだろう？」
「あぁッ!?　何言ってやがる曹操、まだまだこんなもんじゃ――」
「『止めろ』、と言わなければわからないか？」
「……チッ、わぁったよ」
　俺の制止を受け、不満げに舌打ちをするヘラクレス。
　無駄に大きく足音を響かせ、近くのソファーに深く腰を下ろした。

ガス抜きも必要と思い少しだけ好きにさせたが、なんとも短絡的な仕返しだな。
「曹操、今戻った……ヘラクレス、お前はまた彼にこんな……曹操も見ていたなら止めてくれ、彼は貴重なサンプルなんだ」
「これでも一応止めたんだがね」
その後すぐにやって来たゲオルクにより治療が行われたが、その時には既に傷の大半は治っていた。
ゲオルクが彼を弄った際に元々高かった治癒能力を、更に引き上げた成果だろう。
寿命のリスクは限りなく抑えてはいるそうだが、はたしてそれも何処まで効果があるのやら。
「たっだいま～、ってカズキちゃん服とかボロボロじゃない！　ちょっとヘラクレス、またあんたがやったんでしょう!?」
「だったらどうした？　どうせすぐに治るんだからいいだろうが、喧しい」
「いい訳ないでしょ、陰険筋肉ダルマ！　毎度毎度やる事がちっちゃいのよ、この脳筋！」
「ンだとこのブスッ!?」
ジャンヌとヘラクレスの口喧嘩も今に始まった事ではないが、瀬尾一輝が来てからは特に言い争うようになった。

もしや操られているのは偽装で、内部から崩壊を狙っているとかじゃないよな？
あり得ないはずの事をもしやと思わされてしまうのは、俺も毒されてきている証拠なのだろうか？
しばし言い合った後、ジャンヌは飽きたのかゲオルクの元へ行き瀬尾一輝の腕を自分の腕と絡ませる。
「ゲオルク、もう治療は済んだんでしょ？　カズキちゃん借りてくわよ」
「調整も終わったし別に構わないが、どうするんだ？」
「やだも～☆　乙女の口から言わせる気？」
「……程々にな」
「はいは～い♪　さ、行きましょカズキちゃん♪」
肩を竦めるゲオルクにジャンヌは上機嫌に返事をすると、そのまま瀬尾一輝を連れて自室の方へ向かって行った。
何をしているのかは知らないが……まぁロクな事ではないのだろう。
それで彼女の気が晴れるなら、好きにするといい。
「さて、ジャンヌが戻ってきたら首都にでも行ってみようか。ヘラクレス、お前も好きに暴れるといい」
「お、ようやく攻め込むのか!?　へへっ、腕が鳴るぜぇ……！」

そろそろ冥界側も魔獣への対抗策を編み出すだろう、それができる人材が向こうには揃っている。
ならば我々が取るべき行動は傍観、または奇襲のみ。
オーフィスの力を手に入れた以上、今回は無理に何かをする必要もないからな。
せいぜい愉しませてもらおうか。
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
冥界の下層に位置し死者の魂が選別される場所、冥府。
そこに俺、アザゼルは赴いている。
冥府は俺たちに喧嘩を売ってくれやがったハーデスが統治する世界で、その深奥には死神どもの住処でありハーデスの根城でもある『ハーデス神殿』がそびえ立っていた。
わざわざこんな生物の存在できない死の世界にやって来たのは、ここに来るためだ。
一緒にやって来た数人のメンバーと共に神殿へ踏み込むと、すぐに死神どもが群がってきてこちらに殺意の眼差しを向けてくる。
事前連絡なんざしてないからな、連中にとっちゃ俺らがカチコミに来たようにしか見えないんだろうぜ。
悪魔と堕天使への嫌がらせに執念を燃やす骸骨ジジイの事だ、ほっといたら冥界で起きてる魔獣騒動に横槍を入れて来る。

だからこそ牽制の意味も込めて電撃訪問してやる事にしたんだ、あのクソ野郎に言いたい事もあったしな。

周りの死神どもを無視してどんどん奥に進んでいくと、祭儀場らしきひらけた場所に出る。

黄金が豪勢に使われた装飾が散りばめられ、煌びやかで豪華な作りは陰気な冥府には不似合いな程だ。

そしてその奥から司祭の祭服を纏った骸骨さま、ハーデスの野郎が死神を引き連れて現れた。

《貴殿らが直接ここに来るとは……ファファファ、これはいささか虚を突かれた》

眼球のない眼孔の奥を不気味に輝かせ、余裕ありげに笑いを漏らすハーデス。

この場で俺たちとやり合っても勝てると思ってやがるな、腹の立つ笑い声だ。

――連れてる死神の中に、こないだやりあった最上級死神のプルートがいない。

何か企んでやがるのか……警戒はするが今は置いておこう、せっかく親玉が目の前に出てきてくれたんだからな。

「お久しぶりです、冥府の神ハーデスさま。冥界の魔王ルシファー……サーゼクスでございます。急な訪問、申し訳ございません」

俺の隣にいた男、サーゼクスは一歩前に出て軽く頭を下げる。

さすが魔王さま、腹芸はお手の物って感じだな。
こいつも腸煮え繰り返るほどハーデスを敵視してるはずなのに、そんな感情を微塵も感じさせない笑顔を浮かべてやがる。
身内でまとまってる俺には出来ない芸当だな、そういうのはシェムハザの領分だ。
冥府に赴く際、俺はサーゼクスにオーフィスの事も含めて全てを話した。
事が済んだら殺されてもいい覚悟で話したんだが、サーゼクスはただ黙って話を聞いてくれた。
そして俺がこれから冥府に行く事を話すと魔獣の対応や民衆の保護を最優先にするよう指示を出し、自分も同行すると言ってここまで着いてきたのだ。
そしてこの場にはもう一人、ミカエルの代理人がやって来ている。
《そちらの天使もどきは？　尋常ならざる波動を感じてならぬが》
「これはどうも、『御使い』のジョーカーやってるデュリオ・ジェズアルドです。今日はルシファーさまとアザゼルさんの護衛でして、まぁここで襲われるなんてあり得ないでしょうけど。ねぇ？」
鋭い眼光を放つハーデスに対して、手をヒラヒラと振りながら逆に牽制するデュリオ。
噂通りの変わりモンか、だが態度は軽くても実力は本物だ。

上位神滅具の一つ『煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）』を所有し、天候を操る天界の切り札。

更に表には神滅具『黒神の狗神（ケイネス・リュカオン）』を宿し、グリゴリに属している刃狗（スラッシュ・ドッグ）も連れてきている。

これだけやっても勝てるかわからないバケモノだがな、このジジイは。

《コウモリとカラスの首領、更に神滅具所有者が二人。ファファファ、この老人を相手にするにはいささかイジメが過ぎるのではないか？》

ケッ、口ではそんなこと言っても余裕な態度は変わらねぇじゃねぇか。

そもそもコウモリはテメェだろうが、あっちこっちに戦力貸し出しやがって。

外にいる刃狗も捕捉されてる様だが、それも予測済みだ。

サーゼクスは表情も変えずに、ハーデスへ話を切り出す。

「先日冥界グラシャラボラス領の中級悪魔試験会場付近にある某ホテルにて、我が妹とその眷属及びこちらのアザゼル殿が『禍の団』に襲撃されました。その際死神からも襲撃を受けたと報告を受けています、なにかご存知か？」

《その件なら報告を受けている。貴殿の妹君とアザゼル総督が結託し、ウロボロス――オーフィスと密談を行っているという噂を耳にしてな。調査を依頼したのだよ、もしそれが事実だったなら最低限の警告をする様にとも命じたがね。だが早とちりだった

様だ、もし被害を被ったのなら非礼を詫びよう》

……ハッ、プルートが冗談交じりにほざいてた事をそのまま口にしやがったぜ。

大量の死神にプルートまでけしかけといて最低限の警告か、なかなかの挑発だ。

おまけに早とちりときたか、全く……今すぐブチ殺したくて仕方ねぇ……ッ！

だが今は我慢だ、まだ俺の出張る時じゃない。

「なるほど、早とちり……噂と言えば、我々も貴殿が『禍の団』と裏で繋がっているという噂を耳に致しました」

表情にこそ出さないが、内側の魔力を荒々しく乱したながらサーゼクスが話し始める。

今思い出した様な台詞だが、これこそ俺たちがここに来た理由の一つだ。

「なんでも奴らはサマエルを使役したとか……あれを表に出さない事は、各勢力での合意だったはず。私としてもあなたを疑いたくはないが、身の潔白を証明する為にもサマエルの封印状態を確認させて頂けないでしょうか？」

《――――くだらんな、私は忙しいのだ。その様な疑惑を問われている暇などない》

サーゼクスの問い掛けに、見るからに表情を険しくしたハーデスはそう吐き捨ててこの場を去ろうとする。

まぁそうなるよな、封印状態なんざ確認されたら封印術式の新旧具合で一発でバレ

る。

そうなりゃ糾弾されるに決まってんだから、逃げの一手になるしかない。

だがさせねぇよ、その為に俺はここに来たんだ。

「あ～、わかったわかった。そんなに都合が悪いならその話は止めてやる、そこで代案だ。アンタには魔獣騒動が収まるまで、俺たちと一緒にここにいて貰うぜ？」

《ふん、監視のつもりか？　だが私が付き合ってやる道理など――――》

「アンタがそんなにケツまくって逃げたいならそれでも構わないが、このまま俺たちを放置するなら冥府の死神たちが全滅するぞ」

《なに……？》

訝しげな視線を向けてくるハーデスを余所に俺は手元に魔方陣を展開すると、それを素早く操作してある生物をこの場に呼び寄せた。

慕っていた主人を失い怒りに悶え、その身を縛る鎖を引きちぎらんともがく猛獣。

その血統と神をも殺せる牙を受け継ぐ、次代の魔狼。

オーディンの爺さんに頭を下げて用意して貰ったグレイプニルに繋がれる二匹の神喰狼、スコルとハティだ。

《フェンリル……それも二匹か。カラスの首領、貴様は我らとの戦争が望みか？》

「ハナからそのつもりなら、さっさとこいつら解き放って誰かさんの喉笛を掻き切って

るさ。俺はこいつらに頼まれたから、ここまで連れてきただけだ」
　殺意に塗れた視線を送る二匹を見つめた後、嫌悪の感情を隠しもせずにぶつけてくるハーデス。
　スコルたちの様子を見にカズキの家を訪ねた時、こいつらは俺にまとわりついて離れなかった。
　普段はそんなに擦り寄ってこないのに、『自分たちも連れて行け』と言わんばかりに俺の裾を引っ張って来やがった。
　だったら、連れて行かなきゃ可哀想だろう？
　△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
　アザゼルたちと冥府を訪れ、ハーデスと面会してからどれ位経っただろうか。
　覚悟はしていたが、ものの数分でここまで拗れるとは。
　ミカエル殿の代理人であるジュリオくんは傍観を決め込んでおり、動く気配がない。
　アザゼルがフェンリルたちを連れてくるとは予想外だったが、いくらハーデスでも神殺しの牙は無視出来ないはずだ。
　これで少しは会話が出来れば良いのだが……。
「まぁアンタが余計な事さえしなけりゃ何もさせねぇよ、当然俺も何もしねぇ」
《フン……確かにその獣を放てば冥府に相当の被害が出るだろう。だが貴様程度が私を

どうこう出来ると思っているのなら、少々驕りが過ぎるのではないか？》

アザゼルの言葉に対して、彼を嘲るように返すハーデス。

単なるハッタリ、と簡単に断じる事は出来ない。

この神の実力は本物であり、裏で『禍の団』と繋がっていた。

どんな搦め手を使ってくるのか、わかったものではない。

そんなハーデスに、アザゼルは肩を竦めながら小さく笑った。

「確かにテメェからすりゃ、俺なんか雑魚も良いトコだろうよ……だがな、力の差なんざ気合いと工夫でどうとでもなるもんだぜ？」

手元に光の槍を出現させ、力を込め始めるアザゼル。

なんのつもりなのかとハーデスと同様に訝しんだが、異変はすぐに感じ取れた。

槍に込められていく力が、尋常ではない！

槍自体の大きさは変わらないが、その力の密度が恐ろしい程高まっていく！

そのエネルギーは次第に周囲に影響を及ぼし始め、神殿全体が鳴動しアザゼルを中心に亀裂が走る。

だがおかしい、これは異常だ。

確かに彼は相当の実力者だが、ここまでの力はなかった筈だ。

実力を隠しておく理由もないし、一体彼は何をしたのだろうか……？

《ファファファ……これは驚いた。前魔王すら凌駕するこの力、とてもカラスの首領とは思えぬな……何をした?》

「別に大した事はしてねぇよ、前にウチんとこの馬鹿がやってたのを真似しただけさ」

ハーデスに凄まれているにも関わらず、アザゼルは飄々とした態度を崩そうとしない。

ウチの馬鹿とは、おそらくカズキくんの事を言っているのだろう。

カズキくんが以前おこなった事……色々やり過ぎていて、ポンと浮かんでこない。

《――ふむ、貴様の胸と腕から奇妙な波動を感じる。手品のタネはそれか?》

「流石に目ざといな、ご名答だ」

ハーデスの指摘を受けたアザゼルは襟元を開き、胸の辺りを露出した。

そこには奇妙な機械が取り付けられており、ハーデスの言う通りおかしなオーラの流れを感じる。

胸から義手である腕の方に掛けて、膨大なエネルギーが脈動する様に流れて……まさかカズキくんがした事とは!?

「この為に作った特製の人工神器さ、こいつで生命エネルギーを垂れ流しその全てを義手に集約する。いくらアンタが強かろうが、俺の命を丸ごと使えば相打ち位には持ち込んでみせるぜ?」

やはりそうか、なんて無茶を!?

コカビエルとの戦闘でカズキくんが敢行し、己の命を代償に一時的に戦力を跳ね上げたあの戦法。

アザゼルは人工神器を使ってそれを真似ているのだろうが、そんな事をすればいくら最上位の堕天使といえ無事で済む訳がない！

そんなアザゼルが槍を肩に預けると同時に、ハーデスの背後に一名の死神が現れ何かを耳打ちした。

話を聞き終えたハーデスが祭壇に設置されている載火台に手を伸ばすと、炎が揺らぐと同時に外の映像が映し出される。

『オラオラオラ！　人の弟分に随分とふざけた事してくれたじゃねぇか！　楽にくたばれると思うなよ!?』

『あの坊やは白音だけじゃなく、私も気に入ってるのよねん……覚悟してもらうニャン♪』

そこに映っていたのは、大量の死神たちを相手に大暴れしているヴァーリチームの姿だった。

美猴は如意棒を振り回し、黒歌は魔法と妖術で敵を纏めて燃やし尽くしている。

他にも報告にあったメンバーである古の戦闘機兵ゴグマゴク、聖王剣の所有者アー

サー、その妹であるルフェイ、そして彼女の使い魔となったフェンリルがそれぞれが死神を屠っていく。

リーダーであるヴァーリの姿は見えないが……彼は別行動なのだろうか？

《……貴様の仕業か、カラスの首領よ》

「さあ、知らね。大事な弟を虐められた事にキレた過保護な兄ちゃんが、力尽くで仕返しにきたんじゃねぇか？」

ハーデスが不機嫌な声音で尋ねるが、アザゼルはぞんざいに返し相手の神経を逆撫でする。

ハーデスから感じるオーラの質が明らかに変わる、どうやら相当ご立腹の様だ。

しかしそのオーラはすぐに引っ込んでいき、暫く炎の中の映像を見つめた後ハーデスは呟く様に尋ねてきた。

《……何故貴様らはそうまでして、あの者達に肩入れする。己の命を捨ててまで庇う、その価値があの者達にあるというのか？》

その質問には軽蔑や嘲りなどの感情はなく、純粋な疑問として尋ねているように感じた。

アザゼルはその問いにまっすぐ返答する。

「あるさ、あいつらは全員俺の大切な教え子だ。それに……親父って、呼ばれちまったか

らな」

《なに……？》

「手前のガキにちょっかい出されて黙ってるなんざ、そんなもん親失格だろうがッ！　あいつの、あいつらの為なら……俺の命だろうがなんだろうが！　幾らでもくれてやらぁッ!!」

アザゼルの咆哮に応える様に、彼の槍が一層輝き鳴動する。

槍の形状に押しとどめておくのも限界なのか、槍全体が揺らぎその余波で身近な床などを粉砕していた。

……私も、出し惜しみしている場合ではないな。

アザゼルはこれからの世界に必要な人材だ、この場で命を落とさせる訳にはいかない。

この場は私の全力を持って対応に当たるとしよう。

冥界の未来を考えて踏み止まっていたが、それももうお終いにしよう。

私とて大事な妹と未来の義弟、そして得難い友人を傷付けられて内心穏やかではないのだ。

冥府の神ハーデスよ、この場で立ち会う状況となった時は覚悟して頂こう。

私は一切の手加減も躊躇も捨て、貴殿をこの世から跡形もなく滅ぼし尽くす！

７２話

ジークフリートを打ち破った僕たちグレモリー眷属は、現在別行動をしているゼノヴィアたちと合流する為に再びグレモリー城へ帰還した。

本当ならすぐにでも首都へ向かい、現地で集合したい所だがそうもいかない。

サイラオーグ・バアルの敗北と共に伝えられたのは、その下手人が英雄派に連れ去られたカズキくんだという信じたくない現実だった。

黒い鎧に身を包んでいて顔は確認出来なかったそうだが、直に戦ったサイラオーグ・バアルの確信と随伴していた曹操もそれを肯定したらしい。

覚悟はしていたが、彼と敵対しなければならないとは……この報告を聞いたときには、朱乃さんと小猫ちゃんも流石に表情を曇らせてしまった。

しかし今は気を持ち直し、無事合流出来たゼノヴィアとイリナさんに現状を説明している。

やはり二人とも心が強い、これもカズキくんの影響なのかもしれないな。

「……なるほど、イッセーの方は何とかなりそうか。あいつなら生きてさえいれば、部長の乳恋しさに自分で帰って来れるさ。問題はやはりカズキだな、面倒ばかり掛けてくれ

る」

「ゼノヴィアったら無理しちゃって。天界でカズキくんの話を聞いた時は、涙と鼻水で顔中汚しながら私に抱きついて来た癖に」

「す、すぐに立ち直ったんだからいいじゃないか！」

やはりゼノヴィアも心配だった様で、イリナさんに醜態をバラされて膨れっ面をする。

その背には布に包まれた獲物を携えており、イリナさんも腰に新しい剣を携行していた。

ゼノヴィアの方は修復したエクス・デュランダルだろうが、イリナさんが持っている剣はなんだろう？

力強いオーラを感じるが、これがアザゼル先生が仰っていた天界で行われていたという実験の成果なのかも知れない。

『ご覧ください！　魔王アジュカ・ベルゼブブさま率いるベルゼブブ眷属が構築した対抗術式により、【豪獣鬼】にダメージを与える事に成功しております！』

僕らが準備を進めていると、テレビから興奮気味のレポーターの声が聞こえてくる。

アジュカ・ベルゼブブさまは僕らと別れた後に組み立て途中だったアンチモンスターたちに対抗する術式を一気に組み上げ、それを前線で戦う悪魔や堕天使、『御使い』など

の連合軍へ伝えたそうだ。
　押され続けていた連合軍も、この術式により各所で押し返し始めている。
『ソーナちゃんのお友達に酷い事して、あなた達許さないんだから！　大怪獣ｖｓレヴィアたんなのよ～！』
『母上、がんばってくだされー！　イッセーやカズキのアホもきっと見ていますぞ！』
『ふふ、せやね。わらわもこの連中にはちいとばかり頭に来とるんよ……思いっきりいくでぇッ！』
【豪獣鬼】を広大な荒地ごと氷漬けにするセラフォルー・レヴィアタンさまや、妖怪の大軍団を引き連れ援軍にやって来てくれた京都の八坂さんとその娘である九重ちゃんの姿が映っている。
　九重ちゃんの様子を見るに、どうもイッセーくんたちの現状を八坂さんから聞いていないのだろう。
　代わりに八坂さんは九尾の大狐の姿をとり、口から吐き出す炎で辺りの敵を燃やし尽くしている。
　その様はまさに大妖怪そのものと言った風貌だ。
「どうやら【豪獣鬼】の一体を討伐したそうです、この分なら半日と経たずに駆除出来るでしょう。問題は【超獣鬼】でしょうね」

聞き覚えのある声に反応し振り向くと、そこには戦乙女の鎧を纏ったロスヴァイセさんがいた！

北欧から遠路はるばる、ここまで駆けつけてくれたのだ！

「イッセーくんとカズキくんの事は聞きました。イッセーくんの事ですから、リアスさんの胸を求めてそろそろ帰ってくるでしょう」

……ゼノヴィアと同じ事を言われてるよイッセーくん、正直僕も同意見だけど。

ロスヴァイセさんはうんうんと頷き少し部長と会話をした後、朱乃さんたちの元へ歩を進めていった。

「そしてカズキくんは必ず取り戻します……たとえ命を落としたとしても」

「それでは意味がありませんわ。みんなで無事に、あの家に帰るんです」

「朱乃さん……そうですね、その通りです」

深刻な表情で呟いたロスヴァイセさんに、朱乃さんが頭を軽く叩いて優しく諭す。

ロスヴァイセさんは同意してくれていたが、どうか無茶な真似だけはしないで欲しい。

あと離れているのはグリゴリで特訓中のギャスパーくんだけだが、彼もすぐに合流してくれるはずだ！

次第に集まっていく仲間を見つめ一人気合を入れ直していると、先ほどお茶を淹れに

行ってくれたレイヴェルさんが慌てた様子で部屋に飛び込んできた。
「み、皆さま大変ですわ！　首都で活動中のシトリー眷属の皆さんが、都民の避難を護衛中に『禍の団』の構成員と戦闘に入ったそうです！　そしてその中に、カズキさんらしき人がいるとの報告が……！」
レイヴェルさんの言葉を聞き、この場の全員に緊張が走った。
来た、来てしまった。
覚悟はしていても、あって欲しくはなかったその時が。
僕らはこれから、とてつもない強者と戦わなければならない……！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
高層ビルが立ち並ぶ区域で、俺たちシトリー眷属は避難バスの先導を行っていた。
大半の避難は完了しており、今先導しているバスに乗っているのが最後のバスだ。
このバスに乗っているのは、本来なら最優先で避難させなければならない子供たち。
出発してすぐに機械トラブルが起こってしまい、結局避難するのが最後になってしまったのだ。
「前方に異常なし、と。これなら無事に避難出来そうだな」
「匙、油断してはいけませんよ。この子たちを守れるのは、私たちしかいないのですから」

「はい、会長！」

会長の言葉に、力強く返事をする。

『禍の団』の連中は大体追い払ったが、それでも安全とは限らない。

この子どもたちも、俺たちの建設する学校に通うかもしれないんだ。

教師になった時の予行演習だと思って、きっちり護り切って見せるぜ！

「ふふ、元ちゃん張り切ってますね……ッ会長、上空に魔力反応！」

「こちらも魔方陣を視認、何者かが転移して来ます！」

「了解よ桃、椿姫！　留流子は軍に救援要請！　バスを停車させたら、他のみんなは囲うように陣形を取って！」

『はい！』

周囲を警戒していた桃の報告と、椿姫副会長の声が響き渡る。

そしてすぐさま飛んでくる会長の指示に従い、俺たちは行動を開始した。

ついに来やがったな、クソッタレなテロリストどもめ！

この子ども達には指一本触れさせねぇぞ！

俺たちがバスを囲うように陣取った直後に、輝く魔方陣から一つの人影が降りてきた。

着地と同時に舗装された道路を砕き、その下の大地から土埃が盛大に舞い上がる。

風により土埃が晴れその姿を視認すると、そこにいたのは意外な人物。
攻撃に備え身構えていた巴柄と翼紗からも、間の抜けた声が上がった。
「あ、あれ？　あの人って……」
「カズキ……くん？」
そう、そこに立っていたのは英雄派に連れ去られた俺の師匠で親友！
あいつ、マジで一人で帰って来やがった！
まったく、心配しがいの無い野郎だぜ！
「カズキ！　お前やっぱり無事だったん――」
「待ちなさい、匙！　どうも様子が変です！」
俺がカズキに駆け寄ろうとしたその時、会長からの待ったの声が飛んできた。
変って何が……いや、確かに変だ。
あいつにしちゃ、どうにもおとなしすぎる！
「いつものカズキなら、助けに来なかった俺たちをボロクソに言った後に俺をどつき回す筈！　それが暴言の一つも吐かないとか、お前さては偽物だな！」
「あの、匙……そういう事ではなく……」
俺が指を突きつけながらそう言い放つが、何故か会長に呆れられてしまった。
あれ、なんか間違えたか？

「ククク……どんな反応をするのか観察したかっただけなんだが、これはいささか予想外過ぎる」

何処からか笑いを噛み殺した様な声が聞こえたかと思うと、空に残っていた魔方陣が再び輝きそこから更に何人か現れる。

筋肉質な大男と華奢な少女、そして先ほどの声の主であるローブを羽織り眼鏡を掛けた男。

報告書で見た特徴と一致する、こいつらが英雄派の主要メンバーか！

「ゴホン、いや失礼。余りにもあんまりな評価に、つい笑いが抑えられなかった」

眼鏡の男、確かゲオルクとか言ったかな？

そいつが口元を拳で隠しながら、そんな事を言ってくる。

何がおかしいのかわからないが、なんとなく腹が立つ。

「わざわざカズキの偽物を用意するとか、胸糞悪い真似しやがって！　テメェら、本物のカズキは無事なんだろうな？」

「何を言っているんだ、ちゃんと目の前にいるだろう？」

「だからこいつじゃなくて本物の……！」

「彼が偽物だなんて、我々が一言でも言ったかい？」

俺の言葉を遮り、ゲオルクは尋ねてきた。

何を言ってるんだこいつは。
こいつが本物のカズキなら、こんな無反応な訳が無い。
これじゃあまるで……。
「お前らの知ってるこいつじゃ無い、か？　そりゃそうさ！　なんせこいつは、身体も人格も散々弄くり回されてんだからなぁ！」
俺が呆然としていると、大男が小馬鹿にする様に語り出した。
「死に掛けのこいつをゲオルクが回収して来て、身体の秘密や頭の中身を調べ尽くしたんだよ！　まぁ大した事は分からなかったそうだがな！」
「俺はぶっ殺してやりたかったんだが、他の奴らが戦力として使おうって言い出してよ？　洗脳して俺らの兵隊に仕立て上げてやったのさ！」
「こいつはいいぜ？　いくら殴っても死にやしねぇ、目減りのしないサンドバッグだ！　まぁ最近は殴り過ぎて、ちっとばかし飽きて来たけどなぁ!?」
心底楽しそうに語ってくる大男、ヘラクレスは横にいるカズキを目の前で殴って見せた。
反動で地面に倒れこんだカズキだが、表情一つ変えずにゆっくりと立ち上がる。
顔に出来た痛々しい痣も、目に見えるスピードですぐに消えてしまった。
あいつら、ようやく症状の収まった命を削るあの体質まで……なるほど、取り敢えず

こいつはブチ殺す！

「ッ待ちなさい、匙！」

会長の制止も聞かずに飛び出し、神器も出さずにヘラクレスに殴り掛かる！

しかし俺の拳はあいつに届く事はなく、逆に殴り飛ばされ元の位置まで押し戻されてしまった。

ヘラクレスにやられたのでなく、間に割り込んだカズキによって……！

「ケッ、余計なことしやがって。あんな奴に俺がやられる訳ねぇだろうが！」

「この、カズキちゃん殴ってんじゃないわよ！　そもそもアンタ、カズキちゃんに守られといてその態度は何!?　いい加減にしないと、私がアンタを切り刻んで殺すわよ!?」

「やってみやがれ、このクソアマが！」

守られた筈のヘラクレスは気に食わないのかカズキの頭を殴りつけ、それを一緒にいる少女に咎められている。

どうも向こうは一枚岩と言った感じではなさそう、つうかカズキ『ちゃん』ってなんだ。

カズキ、マジでこんな奴らに洗脳されてんのかよ……！

「シトリー眷属の男……テメェ確か龍王の一角を宿してる奴だよな？　ちょうどいい、この場で俺たちと戦え。勝てればこいつを解放してやるぜ？」

「なんだと……？」
「別に断ってくれてもいいぜ？　その場合は――」
そう言いながらヘラクレスはバスに向けて手をかざす。
そして身体が光ったかと思うと、掌の一部が盛り上がりそこからミサイルの様な物が打ち出された！
桃が防ごうと魔力で障壁を張ったが難なく貫通してしまい、バスの近くに着弾してタイヤ周りが破壊されてしまった！
バスだけでも逃がしたかったが、それすら出来なくなってしまった！
「後ろにいるバスを攻撃させて貰う。　あぁそうだな、それをこいつにやらせるのも面白いかもしれねぇなぁ？」
「この……ッ！」
ヘラクレスはニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ、カズキの肩を叩きつつそんな事を言い出した。
二重の人質って事か、とことん屑だなこの野郎……！
「ヘラクレスってばマジで屑ね、最悪だわ」
「全く、彼には品性が足りないな……まぁヴリトラと戦うのが目的で、我々も立ち塞がっているのだが」

他の二人もやんわりとしか止めないところを見ると、どうにも本気っぽい。
けど、カズキにそんな真似させらんねぇ。
俺は素早く神器を発現させ、前に出ようと飛び起きる。
だが、そんな俺よりも早く前に出る人がいた。
「そんな事、やらせはしません」
力強く踏み込み、奴らを睨みつける会長。
周囲には大量の水が溢れ出し、それがうねりつつ様々な姿を形成していく。
「カズキくんは私たちの大切な友人です。彼に対する卑劣な行いの数々……決して許せるものではないと知りなさい！」
会長の怒号と共に、一斉に襲い掛かる水で象られた偶像たち。
その攻撃は全員にあっさりと躱されてしまったが、一人ずつ分散させる事は成功した。
なるほど、各個撃破するって事ですね会長！
「行きますよ匙、椿姫！　私たちで敵を殲滅します！　他のメンバーは結界を張り、バスの警護を！」
『はいッ！』
会長はゲオルク、副会長はジャンヌに飛びかかっていく。

となれば俺の相手はヘラクレスと、未だ動きを見せないカズキ。
モグさんは小猫ちゃんが預かってるらしいし、何とかしてみせる！
「お前の相手は俺がやってやるよ、筋肉ダルマ」
「口だけは達者じゃねぇか、精々楽しませろよ。おい、テメェは手ェ出すんじゃねぇぞ」
「……」
ヘラクレスに言い付けられたカズキは、返事もせずに後方に退がった。
どうやら二対一で戦う気はないようで、こちらとしては助かる限りだ。
俺は先ほどからずっと続けている作業を行いつつ、会話を続ける。
「いいのか？　二人で来なくて」
「お前なんざ俺一人で十分だからな」
「そうかよ、そいつは助かる。お前だけなら俺でも何とかなりそうだ」
「あ？　調子乗ってんなよ……未成熟な龍王モドキの分際で、俺に勝つつもりかよ？」
「当然だ。カズキに比べりゃお前みたいな脳筋野郎、余裕過ぎて笑えてくるぜ」
「チッ、どいつもこいつもあいつを持ち上げやがって……！　気にくわねぇ――」
『我が分身よ、そろそろだ』
ヘラクレスを引きつけていると、俺の中にいるヴリトラから知らせが来た。
それと同時に、俺の身体の至る所から黒い炎が漏れ出してくる！

よっしゃ、待ってたぜッ！

「行くぞ！　『龍王変化（ヴリトラ・プロモーション）』ッ!!」

俺の掛け声に呼応し、漏れ出た黒炎が一気に噴き出し俺の身体を包み込んでいく。

そして次第に変化が生じていき、俺の身体は呪いの炎を撒き散らす黒き龍王と化した！

「匙、いつでも構いません！　思う存分おやりなさい！」

それを確認した会長達は事前に打ち合わせた通り、敵を一箇所に押し込むと一斉に飛び退きバスの結界内に避難する。

未だにこの姿を長時間保つ事は出来ないんだ、一気に方を付ける！

『一人ずつなんてまだるっこしい事はしない！　カズキには悪いが、全員纏めて呪いの炎で燃え尽きろ！』

全てを出し切る勢いでヘラクレスたち目掛けて呪いの黒炎を撒き散らし、眼前を文字通り火の海にする。

崩壊しかけていた建造物も、火の勢いによりガラガラと音を立てて崩れていく。

カズキの回復力なら耐えられるだろうが、これならあいつらも多少は……いや、どうにもおかしい。

炎が一箇所に集約されている、あれは……ゲオルクか!?

「未成熟とはいえ流石に龍王か、凄まじい濃度の呪いだ。直撃していれば厳しかったが、事前に相手の特性を知っていればどうとでもしてみせるさ」

ゲオルクは俺の吐き出した黒炎を一纏めにすると、手元の魔方陣と共に掻き消されてしまった。

くそっ、今の俺の全力だったのに……ヴリトラの呪いをああもあっさり消されるなんて！

ゲオルクは細く息を吐き出した後、自身の腕を見つめる。

僅かにだが、その腕には黒い炎が揺らめいて見えた。

「しかし予想以上に強力な呪いだ、あの術式でも完璧な解呪が出来ないとは……ヘラクレス、ジャンヌ。すまないが残りは頼むよ、俺は異空間でこの呪いをどうにかする」

ゲオルクはそう言い残すと、霧と共に何処かへ行ってしまった。

それとほぼ同時に、俺はドラゴンの姿から元に戻ってしまう。

くそ、ペース配分を間違えた！

そんな俺を尻目に、ヘラクレスとジャンヌはそれぞれの獲物である剣と拳を構える。

「そういう訳で、また私たちが遊んであげるわ。今度は何人がかりでもいいのよ？」

「ではお言葉に甘えて……椿姫、翼紗、巴柄！　一気に行きますよ！」

会長の呼び掛けに応え、三人はジャンヌに肉薄し会長も魔力で次々に攻撃していく！

結界を維持する数を減らしても、人数で押し潰す作戦か！
「なら俺はドラゴンを貰うぜ？　力を出し切った絞りカスでも、そこの女どもよりはマシだろうしな！」
ちくしょう、わかってたけどこっちの限界までバレバレかよ！
それでもここで退くって選択肢はない。
俺たちの後ろには、たくさんの子ども達がいるんだ。
今ここでこの子達を守らなきゃ、胸張って教師になんてなれないもんな！
「腐っても龍王みたいだからな、俺も禁手化してやるよ！」
ヘラクレスが叫ぶと身体が発光し、身体の至る所に無数の突起物が出現する！
あれは確か最初にバスを攻撃した、突起物を飛ばして爆発させる技。
でもスピードはそれほどでもなかったし、躱してから接近してラインを張り付けてやる！
「そら、喰らいやがれ！」
ヘラクレスが腕をかざし、ミサイルを飛ばしてくる。
やっぱりそこまで速くない、これなら――
「いいのか？　『その位置』で躱しても……」
何を言って……ッそう言うことかよ!?

駄目だ、今からじゃ間にあわねぇ！

「「キャアアアッ!?」」

俺の躱した攻撃は、俺の後方……桃たちが守ってくれているバスに命中した！

バスは結界のお陰で無傷だが、肝心の結界の強度がかなり不安定になっている。

そんな攻撃を、もし連続で撃たれたら……！

「ハッハッハ！　どうだ、かなりキクだろ俺の神器は!?」

「テメェ……俺じゃなくて、バスを狙いやがったな……！」

「変な言いがかりは止めてくれねぇか？　俺は禁手の力を使っただけだ。だがお前がもし避けようとしたら、また『不幸な事故』が起こるかもしれねぇなぁ!?」

ヘラクレスは嘲笑いながら、再びミサイルを発射してくる。

今度は明らかに俺ではなく、俺の後方にいるバスを標的にして！

そうかよ……そっちがそう言うつもりなら、こっちも腹括ってやるさ！

俺はミサイルの前に飛び出し、腕を交差させ防御の姿勢を取った！

ミサイルは当然直撃し、凄まじい爆風と爆炎に襲われ身を焼かれる！

「ぐうぅぁあああッ!?」

「元ちゃんッ!?」

「先輩っ!?　いやぁぁぁ！」

あまりの衝撃に思わず絶叫してしまい、結界を張っている桃と留流子から悲鳴が上がる。

情けない声だしてたし、心配かけちまったかな。

勢いが収まった頃には身体中に激痛が走り、腕に取り付けられていた神器『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』は粉々に砕けていた。

うわぁ、これちゃんと直るよな……ああくそ、なんだか思考が纏まらない……。

「よく凌いだじゃねぇか！　全身がバラバラになりそうな衝撃はどうだ!?」

「……ハッ、大した事ないな。これで禁手とか、信じらんねぇ貧弱さだ……」

「……吹くじゃねぇか、強がりでも大したもんだ。だがその口、何時まで持つか見ものだなぁ!?」

怒りに顔を歪めたヘラクレスから、今度は複数のミサイルが同時に放たれる。

あ～……絶対痛いよな、あれ。

でも、避けらんねぇんだよなぁ……。

あぁもうわかった、わかったよチクショウめ！

こんなしみったれた攻撃、幾らでも耐え切ってやろうじゃねぇかッ！

限界だろうがなんだろうが知ったことか！

こいつらは倒す、子どもは守りきる！

そんでもって俺がこんなにシンドイのに、無表情で突っ立ってる俺の親友も取り戻す！

やってやるぞ、クソッタレッ！

73話

レイヴェルさんから報告を受けた僕たちは、すぐに転移魔方陣で首都まで移動した。
今回レイヴェルさんは危険なので城に残って貰っている。
前回は突発的な戦闘だった為巻き込んでしまったが、本来は客分である彼女を戦闘地帯へ連れ歩く訳にもいかない。
彼女も戦闘では役に立てない事を理解していて、心底悔やみつつも素直に了承してくれた。
魔方陣でジャンプした先は高層ビルの屋上、そこには既にギャスパーくんが待機していた。
グリゴリの人達にここで待っていれば僕らが来ると言われたらしく、僕らを見つけると涙目になりながら駆け寄って来た。
後はイッセーくんが合流してくれれば、グレモリー眷属は勢揃いだ！
そして今から向かう先には、おそらくカズキくんがいる筈。
彼も取り戻す事が出来たら、仲間が全員集結する。
そうなれば、どんな敵が来ようと怖いものなんていやしない！

「――あれ？　イッセー先輩は？」
「イッセーくんは……」
ギャスパーくんはイッセーくんの状況をまだ知らされていないらしく、キョロキョロと辺りを見渡している。
僕が詳細を説明しようとした、その時。
「モグさん？　突然暴れてどうし――」
「皆さん、あれは!?」
小猫ちゃんが突然もがき出したモグラさんを抱きしめていると、ロスヴァイセさんがとある方向を指差す。
その先にいたのは黒く巨大なドラゴンで、かなり遠いが黒炎を撒き散らして暴れている様が確認できる。
間違いない、あれは龍王化した匙くんだ！
全員がそれを視認すると、一斉に翼を広げ空へ飛び出した！
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
飛んでくる何かを、身体を張って受け止める。
当たった途端に爆発するからメチャクチャ痛い筈なんだが、痛すぎてもう感覚がなくなってきちまった。

血を流しすぎたのか、ヤケに目の前がボヤけるし……俺、なんでこんな事してんだっけ？

「ハッハッハ！　粘るじゃねぇか、その身体でよくやるぜ！」

なんだあいつ、バカみたいに笑いやがって。

こっちは頭痛くて辛いんだ、無駄にデカイ声出すなっての。

あ、また飛んで来た。

ちょっとズレてるが、これなら飛び込めばなんとか……よし、なんとか届いた。

あぁもう、手だけで止めたから炭みたいに真っ黒になっちまった。

これじゃロクに動かせねぇよ、すぐに立ち上がらないといけないってのに。

えっと、何考えてたんだっけ……あぁそうだ、なんで俺がこんな事してるのかだ。

もう動くのもシンドイし、今だってこのまま倒れてる方が楽な筈なのに……なんでだろ？

「元ちゃん、もういいよ！　私が、私が代わるから！」

「お願いします先輩！　もう、立たないでぇ……！」

俺の後ろから、辛そうなみんなの声が聞こえてくる。

会長たちも誰かと戦ってる最中なのに、こっちに向かって何か叫んでる。

なんとか視線を向けると、そこには悲痛な声を張り上げている仲間と大きな一台のバ

スがあった。
あぁ、そうだ。
あそこには小さな子ども達がいるんだよ……俺が護ってやらなきゃいけないんだった。
子どもたちを泣かせる悪いモノが大量に眼前まで迫ってきているが、ここを通すわけにはいかない。
ここでみんなを護り切って、そんでもってカズキをぶん殴ってでも元に戻して。
それから――
△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△
匙くんの姿が見えた場所に近づくにつれ、聞こえてくる爆発音が大きくなっていく。
辺りに人の気配を感じない所をみると避難は完了している様だが、この何時までも続く爆発音は一体……？
辺りを見渡していると、爆発音と共に黒煙が上がるのが見えた！
急ぎそちらに向かうと、聞き覚えのある声が語りかけて来た。
「グレモリー眷属！」
声に反応してそちらへ振り向くと、一台のバスを囲う様に立つシトリー眷属の女性陣の姿が。

側には傷付き倒れている者もおり、バスの中にはたくさんの子どもたちがいる。
部長の指示でアーシアさんがすぐさま駆け寄り、彼女たちを神器で癒し始める。
一体ここで何が起きたんだ？
「この状況……一体何があったの？」
「このバスの先導をしている途中に襲撃を受けて……タイヤを破壊され、バスが動けず仕方なく応戦を……」
部長が状況を尋ねると、《兵士》の仁村さんが涙を零しながら語ってくれた。
そしてある一点を、指を震わせながら指し示す。
そこにあったのは倒れ伏した黒いナニカ。
いや、あれは……人、なのか……!?
「でもあいつ、子どもたちの乗ったバスを狙って……私たちの結界じゃ防ぎきれなくて、先輩が身体で受け止めて……！　お願いします、先輩を助けて下さい……ッ！」
あれはアーシアさんでも間に合わない！
残り二つしかないが、『フェニックスの涙』を使うしか……！
僕が懐から『フェニックスの涙』を取り出したその時。
崩れたビルの残骸から、見覚えのある男が現れた。
「ったく、ジャンヌの奴どこまで行きやが……お？　なんだ、グレモリー眷属も来やがっ

たのか。まぁ大体片付いた後だし、ちょうどいいかもなぁ？」
　筋肉で太く肥大化した腕を揺らしながら現れたのは、英雄派の幹部ヘラクレス。
　確か対象を爆発させる神器を所有していた……なるほど、匙くんをやったのはこいつか。
「それにしてもつまんねぇ奴だったぜ、俺に一発も入れることなく倒れやがった。情けないったらありゃしねぇ」
「ふざけないで！　アンタがバスを狙った所為で、元ちゃんは仕方なく防ぐしかなかったんじゃないッ！」
「ああそうだ、お前らが弱過ぎて役に立たなかったからな！」
「……ッ！」
　ヘラクレスの言葉に噛み付く《僧侶》の花戒さんだが、自分たちが弱い所為だと言い放たれ表情が絶望に染まる。
　何も言い返せない自分が悔しいのだろう、血が出るほど奥歯を噛み締め身体を震わせるとそのまま俯いてしまった。
「そう思うとこいつも可哀想な奴だ。周りの連中がもうちょいマトモだったら、こんな目に遭わずに済んだろうに……なぁッ！」
　そしてヘラクレスは倒れ伏す匙くんを一瞥すると、あろう事か近くのビルに向けて蹴

り飛ばした！

僕はすぐさま飛び出して彼がビルにぶつかる直前になんとか受け止め、治療の為に急いでアーシアさんの元まで移動する。

涙を振り掛けたので外見はある程度元に戻ったが、それでも全快には程遠い。

「アーシアさん、匙くんを頼むよ。この傷の深さだと『涙』だけじゃ回復しきれない」

「これは、なんて酷い……全力で頑張ります……ッ！」

アーシアさんは横たわる匙くんに駆け寄り、先程から回復を行っている二人と平行して処置を開始する。

ざっと確認しただけだが、あれは……惨状という言葉しか浮かんでこない。

息はなんとかあるが、今にも途切れそうな程弱々しく。

全身が酷い火傷に見舞われており、腕の一部などは焼け焦げ炭化していた。

ここはアーシアさんの頑張りに頼るしかない、彼女ならきっと匙くんを助けてくれる筈だ。

匙くんを託した僕はヘラクレスと対峙しようと前に歩み出ると、少し離れた所から瓦礫を吹き飛ばしながらソーナ会長と真羅副会長、そして英雄派の幹部であるジャンヌが飛び出してきた！

そして勢いそのままにジャンヌの追撃を受けた二人は衝撃でこちら側に弾き飛ばさ

れ、近くのビルに叩きつけられたがゼノヴィアとイリナが駆け付けなんとか救助する。
　ジャンヌは服についた埃をはたき平然としているが、二人は口や額から血を流し既にボロボロの状態だった。
「あらヘラクレス、新しいお客さんが来たのね……って、そいつらグレモリー眷属じゃない」
「こっちのオモチャは壊れちまったからな、今から遊んでやろうと思ってた所だ。そういやあいつはどこ行きやがった？」
「ゲオルクが連れてっちゃったのよ、解呪を手伝ってもらうとか――」
　敵の前だというのに余裕たっぷりな会話を続ける二人、此方に負けるなど毛程も思っていないのだろう。
　そして子どもたちを護る為にその身を犠牲にした男をオモチャと吐き捨てるこの男に対して、僕は少なくない殺意を覚えた。
「――匙!?　そんな……！」
　ゼノヴィアたちに救助された会長が、肩を借りながらこちらに歩いてくる。
　治療中の匙くんを見た会長から悲鳴にも似た声が上がり、肩を借りていたゼノヴィアから離れ危なげな足取りで匙くんの元に駆け寄った。
　会長は自分の負傷など気にも止めずに匙くんの横に座り込み、未だ僅かに炭化したま

まの手を取り優しく握り込む。
「ソーナ……椿姫、後は私たちに任せて。貴方たちはアーシアの治療を受けたら、ここで子どもたちを護って頂戴」
部長は会長を見つめた後、イリナさんに支えられた副会長に真剣な眼差しで告げる。
最初は戸惑う素振りを見せたが、僕も続けて頼み込むとどうにか頷いてくれた。
それを確認したアーシアさんは治癒の範囲を広げ、会長と副会長も含めてみんなの治療をしてくれる。
「リアス……気を付けて、敵はあいつらだけじゃない。ここには『彼』もいるの」
「『彼』……そう、やっぱりここに――」
「待たせたなヘラクレス、ジャンヌ。呪いの濃度が想像以上でいささか手間取ってしまった、『彼』が手伝ってくれて助かったよ」
ソーナ会長の言葉を聞いた部長が言い切るよりも前に、ヘラクレスたちのいる辺りに霧が立ち込み始めそこから霧使いのゲオルクが現れた。
ゲオルクは僕らを確認すると、僅かに驚いた後口の端を吊り上げる。
「グレモリー眷属、君たちもここに来たのか。しかも《騎士》の彼が腰にしている剣は魔帝剣グラム、つまりジークフリートを破った訳か」
「あらホント、ジークフリートったら負けちゃったのね」

「ハッ！　こんな連中に負けるなんざ、あいつもその程度だったって事か」
ゲオルクにつられて、ジャンヌとヘラクレスもそれぞれ言葉を漏らす。
その言葉からは少しの驚きと敗者への嘲りしか感じない。
仲間意識はそれ程強い訳ではないらしい。
「あぁ、あの男は僕らが倒した。グラムを初めとした他の魔剣たちも、僕を新しい主として認めてくれたよ」
「全く……君たちに出会ってからというもの、英雄派の幹部が次々と行動不能にされて敵わない」
僕の言葉を受けたゲオルクは、わざとらしい程に肩を落とし落胆する。
僕らが倒した英雄派の幹部はジークフリートのみ。
それでも次々という事は、前回シャルバに利用されたレオナルドという少年もリタイアしたという事か。
ならばこれ以上『超獣鬼』や『豪獣鬼』を作られる事はないと考えていいだろう。
「君たちと関わると碌な事がないので個人的には遠慮したいが、出会ってしまったのなら『彼』の紹介をしない訳にはいかないな」
『彼』。
その言葉が誰を指し示すのか、僕たちはもう理解している。

覚悟している。
その人物と、戦う事になると。
ゲオルクの言葉の後に霧の中からもう一人、男性が現れた。
「必要ないだろうが、それでもあえて紹介しよう。英雄派の新たな同士、瀬尾一輝だ」
「……」
「カズキ、くん……」
「キュイーッ！」
「ダメ、モグさん！　今の先輩は……！」
ゲオルクに返答する事なく、隣に立つ。
その姿を見た朱乃さんは思わずその場で手を僅かに伸ばし、小猫ちゃんはカズキくんに反応して暴れるモグラさんを必死に抱き止めた。
やはり洗脳されているのか、そんな状況でも感情の込もらない虚ろな瞳でぼんやりと何処かを見つめている。
「ああ、言っておくが呼び掛けても無駄だよ。彼には君達の言葉は届かない、そういう風に『調整』したからね」
「そうそう、もうカズキちゃんは私たちの仲間なんだから。ね～、カズキちゃん？」
ゲオルクの挑発に、その場の全員が殺気立つ。

そしてジャンヌが動こうとしないカズキくんの腕に絡みつきしなだれ掛かった次の瞬間、僕の横を破壊のオーラが駆け抜けた！

不意打ち気味に放たれたそれは一直線にゲオルクへと向かっていき、轟音と共に土煙を空高く舞い上げる。

思わずその攻撃の発生源に目をやると、布に巻かれ封じられていた筈の大剣を解き放ち、大地に無数の亀裂を生じさせているゼノヴィアがいた。

「む、いかん。イラッときてつい手が滑ってしまった、みんな怪我はないか？」

彼女は手をプルプルと軽く振り、近くの仲間たちを見渡す。

手が滑ったって……いや、深く考えるのはよそう。

今のゼノヴィアに下手な事を言えば、今度は僕に目掛けてさっきの攻撃が飛んで来そうだ。

「相変わらず不意打ちが好きだな、デュランダル使い」

土煙の中からゲオルクの不敵な声が響く。

暫くすると煙が晴れ、当然の様に全員が無傷で姿を現す。

霧と魔方陣で逸らされたか、やはり簡単には倒れてくれないらしい。

「なぁに、もしかして嫉妬？　見苦しくてみっともないわね、そもそもあんなショボい攻撃が通るとでも思ったの？」

こちらを馬鹿にする様な態度をとるジャンヌに対して、ゼノヴィアは興味なさげに答える。

「思ってないさ、言ったろう？『手が滑った』と。あんなもの、鍛え直したデュランダルから漏れ出るオーラの余波に過ぎない」

ゼノヴィアの不敵な態度に、ジャンヌの表情が僅かに変わった。

なんと、先ほどの攻撃はまるで本気ではなかったらしい。

七本のエクスカリバー全ての力を宿した新たなデュランダル、このハイブリッドな聖剣は一体どれ程のスペックを宿しているというのか。

「……それは恐ろしい。だが――」

「いい、もう喋るな」

ゼノヴィアはゲオルクの言葉を制して突き刺さったままのデュランダルを引き抜き、その切っ先を英雄派の連中に向け構え直す。

それと同時に刀身が静かに鳴動を始め、どんどんその力と輝きを増していく。

「私はお前らの話などになんの興味もない」

デュランダルに備わっているエクスカリバーの七つの能力。

ゼノヴィアがそれらを十全に扱える様になるには、おそらくまだ鍛錬と時間が足りないだろう。

「私の言いたい事は一つだけだ」
だが、慣れ親しんだ特性なら上乗せする事は出来るかもしれない。
もしデュランダルの圧倒的なパワーに、かつて彼女の所有していた『破壊』のエクスカリバーの攻撃力を足すことが出来るのだとしたら――
「カズキを返せ」
それはきっと、トンデモない破壊力を生むことになる……ッ！
「そいつは……私の男だぁぁぁああッ!!」
気合一閃。
ゼノヴィアの咆哮と共に放たれた一撃は、ゲオルクたちだけでなく目の前の建造物をも巻き込んで辺り一帯を閃光と轟音が支配し包み込んでいく！
その一撃を皮切りに、僕らと英雄派の戦闘の火蓋が切って落とされた！